真剣で私たちに恋しなさい！

黒亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真剣で私たちに恋しなさい！

【Ｎコード】
Ｎ１３７４Ｗ

【作者名】
黒亜

【あらすじ】
ある少年“流川海斗（るかわかいと）”がまじこいの世界で自由奔放の生活をおくる
目立たなかった少年の未来には何が待つのか
今、武士娘との波乱の日常が始まる！
※ご都合主義、駄文注意、ダラダラ小説
楽しめる方だけ読んでいってください
更新はできるだけ毎日を目指しております

プロローグ「退屈」（前書き）

主人公があまりにも贔屓される（ご都合主義ともいう）が嫌な方はご遠慮ください
出来る限り、キャラは崩さないように善処しますが、キャラ崩壊が嫌な方はご遠慮ください
先と似たようなことですが、世界観を崩されるのが嫌な方もご遠慮ください
あくまでまじこいの設定を使わせて頂いているという認識でご覧になってくださると幸いです
最後に自己満足の低レベル小説ですが、これでも楽しめるという方はお読みになってください
読んでくださるというので大変嬉しいのですが、感想などくれたら泣いて喜びます

プロローグ「退屈」

『退屈』…

それはこの世で一番恐ろしいものだ
ある奴はお化けが怖いのだという、またある奴は不良が怖いという
だが、退屈にはその怖いという変化すら訪れない、まるでリピート再生の
ように、ケツまで行ったら頭に戻される、そんな日常のループ

俺はそれを何よりも嫌った
中には代わり映えしない毎日に嫌気がさして、停止ボタンを押す奴もいる
だが、そんな奴等の仲間入りなんて、さらさらする気はない
人間は欠陥品だ、止めれば最期、二度と再生ボタンは押せない
なら、俺は何をすればいいのか
明確な答えなんてあるはずもなく、投げかけた問いは宙に浮いたまま

だから俺は赴く
―変化をもとめて

プロローグ「退屈」（後書き）

プロローグ短いんで前書きをガッツリ書いてしまいました、初投稿
感想欲しいです、でもメンタル弱いんで厳しい批判は…まあもらえ
てから言いましょう
大変綺麗な文章を書く方が沢山いらっしゃいますが、自分は素人の
毛が抜けた程度の才能しかないので
寛大な心で、ハードルを下げてご覧ください

1話　「俺の日常」（前書き）

若干、今回は長いです
主人公はオリキャラですが、モデルがいます
まあ、気づいた人はもう分かってしまったかもしれません

1話　「俺の日常」

「うぃーす、おはよう」
「おはよ、遅かったね」
「寝坊でもしたのか？」
「いや、それがよ…」

「ねぇ、昨日のドラマ見た？」
「見たわ、あのチョーどろどろのヤツっしょ」
「いや～、やっぱイケメンはいいわぁ」

今日も今日とて騒がしい教室だ、そういつもと何も変わらない
言うまでもなく、退屈だ
まあ、だからといって俺がその会話に参加することはない
俺が欲しいのは別に人間ではない、刺激だ
会話が嫌いというわけではないが、自分から話しに行くほどではない
まあ独りでも何も困らないが…
こんなことを言う奴を“ボッチ”と呼ぶとこの前読んだ本に書いてあった
だから、間違っても口には出さない……口に出す相手もいないが
あれ、俺ってすごい悲しい奴じゃね？

なーんて、全部俺自身が仕向けたことなんだよなー

「みなさーん、先生が来ますよー」
「おい、机の上のＤＶＤしまえ」

「起きろ、先生来るぞ」

クラスに委員長の声が響き渡り、その後数秒クラスは静寂につつまれる

ホント変わらないな、この流れは…もはや、テンプレだ
案外、俺は本当にゲームの中の登場人物とかなんじゃないだろうか
何を話しかけても二回目からは同じ言葉で返されるＲＰＧのような。
だとしたら、さっさとラダトームから出してくれ
もう、うんざりなんだよ、宝物庫のおあずけとか、王様とは思えない量の
軍資金とか、国を救わせるのにケチってんじゃねえよ
こちとら竜王と戦って、さっさとエンディング見たいんだよ
あっちは世界の半分、提示してくんだぞ
そらもう、王様は完敗だよ、主に器の大きさで

そんなしょうもないことを脳内で繰り広げていたら、教壇に女教師が佇んでいた、素人目に見ても隙はないだろう

「起立！」
「礼！」
「着席！」

「うむ、では出席をとる」

淡々と教師が名前を呼んでいく、小声だといちゃもんつけられるのは皆、嫌と言うほど身に染みているらしく、はきはきと返事をしていく

そして、最後の一人である

「流川海斗」
「おう」
「……」

教師が顔をしかめる。とはいっても怒るというよりは困った様子だ
最初の方こそ、クラスもざわついていたものの、この数秒の沈黙も
慣れたものだ、今じゃわざわざ俺の方を見る奴もいなくなった

「流川、再三言うが、その言葉遣いはなんとかならんのか」
「ああ」

最低限のやり取りを交わす
こんな形だけの叱責ももうすっかり日常の一部だ
教師は深い溜息をついて諦めたように次の話に入っていった
今でこそ、この対応だが最初の頃はひどいものだった

～1学期開始当初

「では、新たなクラスとなったところで出席をとることにする、呼ばれた
者はしっかりと返事をするように」

……

「最後に流川海斗」
「おう」
「…流川海斗」
「おう」
「貴様、教師に向かってその態度は何だ！」

素早い鞭が飛んでくる
側面から3発の打撃が入る
俺はその攻撃に対して何をするでもなく、沈黙していた

「お、おい、黙ってないでなんとか言わんか」

教師はびっくりしたような顔で俺に発言を促す
クラスメイトはざわざわとざわめいている
大方、俺が痛いと声を上げたり、顔を歪ませたりしないことを不審がっているのだろう

目立つのは御免被るのだが、これだけは性分だ、どうしようもない
それにこの対応ならば、クラスメイトが教師の去ったあとで「お前すごいな」と机のまわりに面白半分で集まってくることもないだろう
こんな鞭で叩かれて黙っているような奴は気持ち悪いだけだ
思えば、このときから俺の心象は、無口で、無表情で、根暗の気味悪い奴

という風になってしまったのだろう。いや、そうなるように仕向けたが正
解か

ともかく、こんな対応を来る日も来る日も続けていると、しだいに教師は
あきれたように形式上の注意をするのみとなった
クラスメイトも俺の人物像をしっかりと確定してしまったようだ
結構なことだ

～

ということで今に至るのだが、目立たないことが退屈につながるとは完全
に思慮の外であった

目立たないというのは意外に難しい

それこそヒーローみたいな良い奴でもいけないし、逆にヤンキーみたいな
悪い奴でも駄目だ、話しやすくても勿論目立つし、気持ち悪すぎてもイジ
メやネタの格好の的だ
目立つことを避ける一番の方法は他者との関わりを絶つこと
スポットを避けるのではなく、電源を落としてしまうという方法だ
それがまさかステージ全体の明るさを奪うことになるとは全くの想定外だ
ったわけなのだが…

まあ、つまりは他者に関わりたくないと思わせればいい
性格の良し悪しに関わらず、人間が最も嫌うタイプは無反応の奴だと思う
楽しく話しかけても笑わない、いじめても嫌がらない
それでもいいなら、それこそ、そいつは石ころでも相手にしていればいい
だからこそ、そういう奴は総じて相手にされない

見た目も視力が悪いわけでもないのに黒ブチの伊達眼鏡をかけているといっても、所謂おしゃれ眼鏡というのではなく、ダサ眼鏡だなんか、昔のアニメの受験生とかがつけてそうな、頭に日の丸のハチマキ
を巻いて、頬にそばかすがあるような…
また髪を前髪のほうに持ってきてぼさぼさと目に影がおちるようにしてい
て、陰気な雰囲気を演出している
要約すると、わざと少しダサく見えるようにしている
別にナルシストなわけではないが、人の好みなんて分からない
事実、この学校に来る前は街で誘われたことも数回ある
当然、告白されたとなれば、どんな奴でもその日の話題は独占だろうまた、告白した子からすれば、答えに関わらず、存在をすぐに意識しなく
なるというのは、どちらにしても無理な話だろう
実際、その二つだけで印象はだいぶ変化した
やり始めた当初は鏡を見る度、霊感に目覚めたのかと疑ったというわけで、見た目的にも注目されることはなく、正真正銘の気持ち悪
い奴と位置づけられているわけだ……言ってて悲しくなってきた
そんなどうでもいい自虐を延々続けていると名前を呼ばれた気がした

1話　「俺の日常」（後書き）

初めて長い文章を書いて、改行と話の切れ目が難しいということを知りました。話によって、おそらく長さがばらばらになってしまいそうです
主人公は元はイケメンです、ただ学校ではかけらも見せないといった感じです、いきなり主人公贔屓が炸裂していますね

2話　「兆し」（前書き）

前回は文章が長かったですが、前回が特殊です
大体これからは今回くらいの長さだと思います
そしてやっと、原作キャラの名前がちらちら出てきます
前回まで一言も名前は出してなかったんですね

2話　「兆し」

「流川海斗」

気のせいでもなんでもなく、呼ばれたようだ
どうやら色々考えている間にテストを返していたらしい
この問題の難易度的に７０くらいが平均だろうと思ったので、６２点くら
いにしておいたはずだ

「６２点なので、平均７２点にあと一歩だな、次はもっと頑張るように」

うむ、大方予想通りだ、勿論不正解の箇所は空欄だ
珍回答でわざわざユーモアを発揮することもない
平均より少し下くらいが一番目立たない
教師に褒められることもなく、叱られることもない、決まって出る言葉は
“次は頑張れ”だ
最高点数１００点と黒板に書いてある、すごい奴もいたもんだ
なんか毎回高得点取ってる奴がいるらしいが、生憎と名前は覚えてない
てか、会話もしないから、覚えられないし、その必要もない

「そして、今日はこの前のＳ組との件の処置について話がある」

S組とは隣のエリートクラスのことで些細なことでこのF組といさかいを
起こしている、ついこないだも何やら一悶着あったらしい、詳しくは知ら
んが、この俺の耳に入るほど、まさに犬猿の仲なのだ

ウウンと教師が咳払いをする

「学園長にも相談したところ、パフォーマンスも兼ねてタッグマッチ大会
を開催することとなった」
「たっぐまっち？」
「ああ、男女の二人一組でS・F混合のトーナメント戦を行う」
「男女か…」
「はいそこ、変な妄想に浸らない」
「まあ、その男子数名は置いておくとして、競技はなんですか」
「サドンデスの格闘技のようなものだ。フィールドの中で闘い、細かいル
ールなどは一切なく、ギブアップ、フィールドアウト、判定負けが起きる
まで、二対二での戦闘だ、勿論武器の使用も許可する」
「よくわからないけど、決闘みたいなものね。まぐまぐ」
「梅先生、そのペアはどうやって決めるんですか」
「基本、なりたいもの同士がなるのでいい。決まらない場合は、くじでも
なんでも、とにかくお前らに任せる」

教師の言葉でクラスがざわつく
大体は女子連中のかっこいい男子と組みたいという願望の声、またはその
逆の男子連中の欲望の声であったが、その中には案の定…

「流川君とは組みたくないよね」
「何考えてるか分かんないし」
「てか、運動神経もそこそこだし、守ってくれないでしょ」
「やっぱり強くてかっこいい、風間君とかでしょ」

本人達は小声で聞こえないと思っているのだろうが、自分の悪口というの
は何故かクリアに聞こえてしまう
そして、自分に都合のいい事は聞こえないと。
人間って、不便にできてますねー、ホント
…ん？なんか気まずそうな視線が突き刺さる
あぁ、どうやら他のクラスメイトにも普通に聞こえていたらしい
クラス中にクリアに響き渡っていたようだ
ただ、こういう二人組のイベントとかで嫌われるか
自分で仕向けたとはいえ、あまりいい気持ちはしないな
後悔すらもしていないが…

んー、誰か「その大会って参加しないことは出来ないんですか」という質
問をしてくれ、こんなことに口数を使いたくねえ、無口の印象が崩れる
多くの女子からは嫌悪の目、比較的良識を持った人も不審の目をし

ている
その他も関心のないものもあるが、同情などは一切なかった
うむ、予想はしていたが、このクラスに味方は一人もいないらしい
くそ、こんな予想もしない形で目立つとは…
誰だ、ダブルマッチとか面倒くさいことを考えたのは
もうオチが見えてる、最後まで余ってくじで一緒になった女子に疎ましが
られて、後日そいつの友達とかに愚痴られるんだろう、はい正解

「ちょっと待って」

2話　「兆し」（後書き）

今更ですが、ここって小説を読んでくださった方が見ているんですよね
ならば、最初に言うことはありがとうございますでしょう
本編では主人公はホントにクラスで孤立しています
委員長などですら、警戒といった感じです
そして、ようやく物語に動きが。
次回は、やっと原作キャラがガッツリ出てくるのではないかと（予定）

3話　「救世主は犬」（前書き）

なんと評価が頂けました
こんな小説に３ｐｔもくださった方、有難うございます
もっと遅く書こうと思ってたのですが、嬉しくて投稿しちゃいました
今度は感想もほしいなーなんて…

3話　「救世主は犬」

「ちょっと待ってよ」
「どうした、ワン子」
「アタシが流川君と組むわ」
「「「「は！？」」」」

思わず、俺まで声を上げてしまった、まさかの不正解か
余るのも嫌だったが、これは目立つんじゃないか

「アタシと組んでくれる？」

近づいてきてクリッとした大きな瞳で見上げられる
この赤髪ポニーテール少女の名前は”川神一子”
…俺が唯一このクラスで名前を知っている少女である

この打ち解けやすく、明るい少女は全く物怖じすることなく、俺に話しかけてきた、その姿は自然体であり、作った様子は一切なかった
邪気のない笑みを浮かべていて、俺を他の奴と区別していない

コミュ能力のない俺に意味不明な日直日誌というものが回ってきたときも
助けてくれたのはこいつだ

～

「ここはね、こうやって書くのよ」
「ふむ」
「で、ここは教科内容を書くの」
「な…」

聞かなくてもいいと思いつつも、「なんで、俺に関わるんだ?」という言
葉が口をついて出そうになった
うーん、こんな無垢な少女には少し気が緩む、下心が見えないからな…

「な…名前は?」

そう誤魔化すのが適当だと考えた
実際に知らないわけだし、二人のときに聞いたところで目立つということ
にはつながらない、何より俺にとって想定外の存在だった
だから、名前くらいは聞いておいても損はないと考えた

「川神一子よ」
「そうか」

ここで何の疑問もなく、答えてくれるところも性格が表れている
その後、俺が話すことはなく、ただひたすらに日直日誌の書き方を教わっ
ていた

～

「アタシと組んでくれる？」
「ああ、構わな……い！？」

了承の返事を返そうとしたら、突如、背後から鋭い殺気を感じた
嫌悪や軽蔑のような視線は浴びせられ慣れてるが、これは違う
気になって、そちらに視線だけを放ると、柄の悪い男が睨みをきかせてい
た。面識は当然ないので、恨みを買う覚えはない…
かといって、顔は強面だが無闇に殺気を飛ばすような奴ではなさそうだ
てことは、この女関係か？
まあ、すぐに手を出してくる様子もないし、俺はそこで思考を止めた

「どうしたの？」
「あぁ、別に」
「そう？じゃあ、これからアタシたちペアね」
「おい待て、ワン子。ほんとにそんな奴とペアを組むのか」

筋肉男が待ったをかける
それを皮切りに、川神一子のお仲間が口々に文句を言い出す

「そうだよ、ワン子、そんなの危ないしさ」
「知らない奴には付いてくなと教えたはずだが」
「知らない人じゃないわ、クラスメイトよ」
「そりゃそうだが、そいつは何考えてるのか分かんないだろ」
「そんなの話したことがないからよ、これから知っていけばいいわ」

少なくとも俺に声をかけたのは同情などの軽い気持ちではないようだ
仲間の忠告は素直に聞き入れるタイプだと思ったのだが、俺とタッグを組
むのに狙いがあるのか、とてもそうは思えない
純粋に優しいというか、そういった親切心からの行動で間違いないだろう
だがまあ、周りとしてはどうにかして、俺と組ませたくないんだろうな
その気持ちはよく分かるぞ、そういう印象を与えてきたんだからな

「ワン子、トーナメント優勝したいよな？」
「モチロンよ」
「だが、そいつは俺よりも弱いくらいだぞ、勿論ガクトなんかとは比べ物
にならない、それじゃ戦力にならないだろう」

お、考えたな、あいつは頭脳担当か？

確かにコイツは優勝を何がなんでも狙うタイプだろう
たとえ勝ち目が無い相手でも、「やってみなきゃ結果は分かんないわ」と
か言いそうだ
そんな負けん気の強い少女には最も有効な説得だろう

「そんなの私の力でカバーするわ」
「……」

おお、自信満々なこって
ほんとに俺とペアを組む気らしいな

「はあ、分かったよ」
「おい、いいのかよ、あいつにワン子を近づけて」
「今のワン子に何を言っても無駄だ、但し困ったことがあったらすぐ俺に
相談しろ、いいな？」
「うん、分かったわ」

どうやら決まったらしい
俺を訝しげに見つめる視線は変わらないが、一応認められたってとこか
こりゃ結構な番狂わせだ

「じゃあ、よろしくね、流川君」

3話　「救世主は犬」（後書き）

ありがとうございました
波線は一応、時間のずれを表してます、分かりにくくてすみません
分かった人もいるとは思いますが、殺気はゲンさんです、はい
あと、読みにくいとかあったら、どんどん言って下さい
改善するように努めますので（感想がほしいだけ）
ちなみに変なところで改行するのは、メモ帳で書いてるからです

4話　「ワン子の努力」（前書き）

初感想頂けました、感謝感激です
返信もさせて頂きましたので、くださった方はご覧ください
なんか、回を重ねるごとに矛盾が怖いです
あまり、固まってないのに衝動で書くからこうなるんでしょうね

4話　「ワン子の努力」

ペアが決まったとはいえ、その後の俺の扱いや生活に変化があるわけでも
なく、ほとんど誰とも話さず、学校にいる間は本を読んで、ごくたまに川
神一子が話しかけてくるという、なんら前と変わりない日々を過ごしてい
た

そして、あっという間にタッグマッチ前日となった

「では、残りの時間はペアで過ごすように」

話の流れからすると、午後の授業を明日のタッグマッチに向けてペア同士
の練習や打ち合わせにあてるようだ
当然、しらばっくれて帰るわけにもいかないだろう
さて、どうするか

肝心の川神一子は遠くで何か言われている

「気をつけろよ」
「何かあったら、すぐに連絡しろ」

うむ、警戒心はあいかわらずＭＡＸのようだ
そして、仲間にうなずき返した少女がこちらにやって来た

「じゃ、流川君、ヨロシク」
「ああ」
「明日はアタシが敵を倒すから、流川君は身を守るだけでダイジョブよ」
「おう」
「出来る限り、守りながら戦うわ、任せて」

胸をはって、自信満々に話す目の前の少女
やはり、この状況でも負ける予定はないらしい
勝ち上がることしか見据えていない、尊敬に値するほどの自信だ
まあ、当然か

この少女を初めて見たのは同じクラスになる前だった
やっと日が出てきた頃の早朝、川辺にタイヤをひきずって走る姿があった
ものすごく時代錯誤の光景に最初はなんかの撮影かと思っていたが、次の
日もその次の日も同じ姿がそこにはあった
その少女は休憩も少々に、登校時間ギリギリまで走り続けていた
その毎日の積み重ねが彼女の自信、支えになっているのだろう
自分で築いた土台だからこそ、安心して堂々と立っていられる
見ていて気持ちのいい生き方だった

目の前の少女は笑顔だ
あれだけの鍛錬をしていても、苦に感じていないのだろう

努力が好きなのだ

「…っと、聞いてる？流川君」
「あ？」
「だから、これから何しよっか？」

知らないうちに話が進んでいた
といっても、俺は話しすぎると目立ってしまうし、練習や特訓なんてする
のは論外だ
だが、仮にも授業の代わりの時間だ、帰るなんてことは出来ない
さて、どうしたものか

「じゃあ、しりとりでもしましょ」
「は？」

思わず素っ頓狂な声をあげてしまった
おそらく練習とかは俺がしたくないというのを察して、避けてくれたのだ
ろうが、まさか選択肢にしりとりがあるとは思わなんだ

「じゃ、アタシからいくわね、”りんご”」

なんか勝手に始まった

別に二人だけだし、目立つこともないか
だからといって、あまり危ない橋は渡りたくない、ここは…

「“ごはん”」
「・・・」
「・・・」
「勝ったわ、初めてしりとりで勝てた」

ものすごく笑顔だ、てか初めてなのか
相当、強い奴とやっていたのだろう

その後、何度か勝負をして2ターン目で必ず俺が敗北していた
そして、6度目くらいの勝利にさしかかろうというその時、

「アタシ、もしかして遊ばれてる?」

あ、ばれた
流石に気づかれたか

「ひどいわ、ひどいわ、そうやってアタシで遊んでいたのね~」

なんというか本気で悔しがっている
若干、涙目でこちらに訴えかけてくる
演技でもなんでもないその姿が妙に可笑しかった

「あ！」
「ん？」
「今、笑ったわよね」
「な…！」

なんだと、まずい、不覚だ
今まで根暗のキャラで通してきて、笑みなんて微塵も見せてこなかったの
に、まさかこんなとこでミスるとは…、油断しすぎたな
というか、この場をどうするか、否定するのもおかしいし…

そんなことを考えていると絶好のタイミングで終了のチャイムが鳴った

「それじゃ」
「あ、待って…」

僥倖と思い、静止を振り切り、すぐに教室から飛び出した
その後は目立たぬよう普通に歩いた
いよいよ明日がタッグマッチだ

4話　「ワン子の努力」（後書き）

ありがとうございました
感想でもあったのですが、今回ので少し分かるように
主人公は根暗とかではないです、あくまでキャラです
ただ、こうするのにも色々事情が…
会話も好きでしょうね、地の文の多さからして（苦笑
あと、主人公の設定おしえてという要望があったので
1つあげておくと、動物好きですかね（基本、何でも）
そんなんで次回いよいよタッグマッチです（早っ

４．５話　「大和のしりとり勝負」（前書き）

祝・評価５０ｐｔ記念　番外編
知らないうちにいっていました、大変感謝です
今回の話は本編とは関係ないので、読まなくても問題ありません
時間があるから、読んでやるよという方だけご覧ください
ですが、後書きは読んでくださると助かります

4．5話　「大和のしりとり勝負」

～一子の場合～

「おい、ワン子」

「んー、なに？大和」

「しりとりするぞ」

「えー、嫌よ、大和いじめるじゃない」

「勝てたら、このビーフジャーキーをやるぞ」

「やるわ！」

「じゃあ、“り”からだ。ワン子いいぞ」

「“りんじしゅうにゅう”」

「漢字で書けるか？臨時収入」

「んーん」

「だろうな、じゃ“薄絹”」

「出たわ、大和のぬ攻め、“ぬか床”」

「“狛犬”」

「うわーん、やっぱりいじめるわー」

～岳人の場合～

「岳人、しりとりでもするか」

「おう、いいぜ」

「じゃあ、“り”からだ」

「“りんご”」

「“五臓六腑”」

「“プロテイン”！！」

「・・・・・・」

～卓也の場合～

「モロ、暇だししりとりやろう」

「いいよ」

「しりとりの“り”からだな」

「リトルバ〇ターズ」

「……ああ、“ず”な、“ズワイガニ”」

「ニトロプ〇ス」

「…もういいか」

～岳人の場合　二回戦～

「よし、こい」

「俺様からいくぜ、“リング”」

「“グループ”」

「“プロテイン”！！」

「岳人にはしりとりで食券でも賭けようか…」

今日も風間ファミリーは平和です

4．5話　「大和のしりとり勝負」（後書き）

はい、もう意味わからん、読んでくださった方はありがとうございます
たぶんこの面子だと、こんな感じかなーと妄想しました
で、記念のこともあるのですが、この後書きでお知らせをしたいがために書いたというのもあります
今、ヒロインに関する要望を集めております
詳しくは活動報告を見ていただけると分かると思います
皆様のご協力が頂ければ、幸いです
ちなみに本編の続きは明日投稿しますので！そちらもよろしくお願いします

5話　「開戦！タッグマッチ」（前書き）

実は昨日１００ｐｔを達成しまして、今日の投稿でお礼を述べさせて頂こうと思っていたら、なんと今日１５０ｐｔ行ってました…
本当にここまで行くなんて、読んでくださっている方には感謝しきれません
余裕ができれば、この二つの記念の閑話も作らせていただきます
今回少し短いかもですが、これからもよろしくお願いします

5話　「開戦！タッグマッチ」

トーナメントというのは、面白いものだ
実力が必要なのは言うまでもないが、運も密接に関わってくる
例えば、優勝候補同士が初戦であたってしまえば、自分たちの順位が上が
ったも同然なのである
そんな運がよかったのか、大した苦労もなくこの次の試合に勝てば準決勝
進出というところまで来ていた

「では、準々決勝第一回戦を開始する、始めぇ！」

俺は初戦からそうしてきたように、開始の合図がかかっても、ポケットに
手を突っ込んだまま、フィールドの端から一歩も動かない
そして、川神一子が薙刀を振り回して、相手に向かう
もはや、観客からのブーイングも起こらない

Ｓｉｄｅ　百代

「おい弟、ワン子とペアの奴はなんだ」
「ああ、なんか得体の知れないクラスメイトでね、余りそうだったから、
ワン子が進んでペアになったんだよ」
「あいつは何をしているんだ」

「何もしていない」
「それは分かる」
「運動神経もなくて、弱いから、手は出さないんじゃない」

大和の言うように端にいて、戦いに参加するような素振りはない
身長は高いもののあまり強そうには見えない

だが、一つ不可解なことがある
どんなに弱い不良でも、文化系の部の女子でも、少なからず気というものを持っている、使えなきゃ全く意味のないものだが、とにかくどんな雑魚でも微量ながらも気を持っている、そう、そのはずだ

だが、目の前のあの男からはその微量すら感じ取れない
弱い云々という次元の話ではない、強くなる可能性すらないのだ
言うなれば、コンセントが入ってない電化製品のスイッチをいくら押したところで動かないのと同じだ
無と有…0と1には大きな隔たりがある
多くの人間の気を探ってきたが、こんな奴は初めてだ

…妹は大丈夫だろうか

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

川神一子が怒涛の攻めを繰り広げる
いくら準々決勝まで進んできたとはいえ、無名のＳ組生徒が勝負に

なるは
ずもなく、追い詰めたところで一気に勝負を決めた

「勝者、川神・流川ペア」

会場から拍手が巻き起こる
まあ、全て一子へ向けてのものだということは最早分かりきっている
今回の試合も俺は一歩も動くことなく終わった
…本でも持ってくればよかったか

「いよいよ、準決勝ね。腕が鳴るわ」

準決勝に残ったのは、川神・流川ペア、井上・榊原ペア、直江・フリード
リヒペア、九鬼・忍足ペア、俺らの相手は井上・榊原ペアだ

フィールドにあがる両ペア、ハゲと白髪女が上がってきた。濃いな～
まあ、今までの奴らに比べて強さは段違いだ
さて、努力少女は勝てるのかね

「ワン子、頑張れ～」
「負けるなー、ワン子」

「準、ユキ、頑張ってください」
「F組の猿どもに格の違いを見せ付けてやるのじゃ」

おーおー、流石に準決勝ともなると外野が騒がしい
まあ、応援されてないのが４人のうち１人だけだというのは、触れまい

「両ペア、前へ」

学園長の言葉で場が静まり返る
フィールド、会場全体に緊張が広がる
ただ準決勝だからというのではない、これからぶつかるのは強大な力同士
今までのような一方的な試合ではないのだ
だが、二対一のようなこの状況ではそうも言えないのが悲しいところ
それでも今までのとは全く違う、いわば本番だ
学園長の開始の合図を俯いて待つ
１秒、また１秒、
そして…

「マシュマロたべる～？」

意味不明な言葉が飛び出した
視線を下から前へと戻してみると、マシュマロが白髪女から差し出されて
いた……え！？なに、俺に
その娘は初対面の俺に嫌悪を示すことなく、マシュマロをくれると

いう
なんか、地味に嬉しいが、戦闘前に機嫌をとろうったって、そうはいかな
い。まったく、裏がないように見えるからって、俺は騙されんぞ
そんな些細なことで俺の評価が変わるか、白髪乙女め

…あっさりと脳内の俺は買収されたらしい
意外に俺って、寂しがりやなのか、孤独が長すぎたか

「…いらん」
「そう?ざんねーん♪」

何故、そんなに笑顔なんだ
なんか、この笑顔…
いや、気のせいか

「仕切りなおすぞい」

咳払いをする
一度去った空気が戻ってくる

「では準決勝第一回戦、始めぇ！」

5話　「開戦！タッグマッチ」（後書き）

ありがとうございました
前書きでも書かせてもらいましたが、本当に吃驚で嬉しいです
ブログとかはやってないので、ホント2，3人に気づいて見てもらえればいいなーと思っていたので、感動です
活動報告にもコメントくださってありがとうございます
ちょっと調子に乗ると、感想も一言でもいいのでもらえるとエネルギーになります、でも読んでくださるだけで十分満足ですね
次回はいよいよ戦闘です、ＶＳユキ＆ａｍｐ；準　…書けるのか

5．5話　「タッグマッチ初戦」（前書き）

１００ｐｔ記念がやっと出来たと思ったら、２００ｐｔ行ってましたもはや、信じられません、本当にありがとうございますですが、１５０ｐｔ記念もまだなのに…
嬉しい悲鳴ですね
※番外編のため、飛ばしていただいても問題ありません
　５話の続きでは決してないのであしからず
　基本、小数点のつく話はこういう形でいきたいと思います
今回は特筆することもないかなと思った
初戦の話を気まぐれで書きました、よろしかったら読んでください

5．5話　「タッグマッチ初戦」

タッグマッチが始まったわけだが、正直ほとんどの奴らは楽勝なんじゃな
いかと思う
仮にもあれだけの努力を毎日している少女
エリートで人を見下しているような、いかにも汗臭いのを嫌いそうな一般
層のS組は相手にならないだろう

だから、俺は隅っこで大人しくしてよう
目立ちたくはないので、もとよりそのつもりだったのだが。
いや色々理由つけないと、一見、最低野郎だからな
少女を戦わせて、何もしない男という現実から逃避させてくれ

勘違いするなよ
俺だってそりゃ、ゴーレム級が出てきたら、戦線にたつぜ
俺が言ってんのは、ドラキーマくらいは自分で対処してくれってことだ

はあ、言ってて虚しい
どうせ、ゴーレム出てきても動けねえよ
だって、目立つもの、そんなことしたら確実に注目の的だもの

そして、初戦が始まった

俺は目立たないようにその場を一歩も動かない
案の定、ブーイングがとんできた
うっせーよ、俺の勝手だろうが

缶やらペットボトルやら、物が沢山とんでくる
どこで用意したんだ、こんなもん
審判は何も言わねえし…

いてっ
誰だ、このコーラのペットボトル投げたやつは
中身満タンで投げたら、もはや鈍器だぞ

そんな試合とは全く関係ないものと戦っている間に勝負は決していた
ご苦労さん

その後、二回戦目からは諦められたのか、何も飛んでこなかった
助かったが、男としては複雑だ

せめて、心の中で応援でもしとくか

5．5話　「タッグマッチ初戦」（後書き）

ありがとうございました
何とも手抜き感満載ですね
一応、記念というか形に残しておきたいので書かせていただきました
あと、ヒロインアンケートも活動報告にて、まだまだ募集中なので
お願いします。コメントもお待ちしております
本編の６話は明日、投稿します

6話　「揺るぎなき瞳」（前書き）

一日見ていない間に４００ｐｔって…
これは夢なのでしょうか
読者の方にはいくら感謝してもしたりません
今回は初の戦闘？シーンなので、いつも以上に前後不覚な文章になって
いると思いますが、寛大な心でお許しください

6話　「揺るぎなき瞳」

遂に始まってしまった
相手はおそらく格上、甘く見ても互角といったところだろう
今回も俺はフィールド端で待機なので、実質二対一となれば、そんな相手
との勝負の結果は見えてるのだが…
隣の少女は全く諦めていないようだ

「せいやぁぁぁぁっ！」

薙刀で果敢に突っ込んでいく
だが、今までとは違い、初撃を難なく回避される

「おうおう、勇ましいね～」
「ほいほーいっと」

二撃、三撃と薙刀を横に振るうが、それも空を切る

やはり、分が悪いか
まあここで終われば、これ以上目立たんし一向に構わんのだが

この俺をペアに選んで、優勝を目指そうという精神がもう分からない
この試合も相手が遊びをやめて、二人がかりで川神一子を獲りに来たら、

1分もって終了というのが、甘めの推測だ
そんな至極もっともな予測を立てつつ、視線を川神一子に向ける

―真っ直ぐだった

その瞳は絶望も諦めも不安も、一切の弱さを映してはいなかった
ただ目の前の敵を見据え、その先の勝利を見つめている
自信に、あの毎日積み重ねてきた修行による自信に満ち満ちている
おそらく、学園長に敗北の判定を受けるまで、その目には火が灯っていて
自分の勝利を信じて疑わないだろう

はぁ、なんつー顔してんだか

直後、回避され続けている横薙ぎから、持ち替えて、縦の攻撃に移行する
今までの攻撃がフェイントとなり、速く鋭い攻撃だった
なるほど、どうやらハゲ1人にターゲットを絞るらしい
なかなか、考えた作戦だ

だが…

受け止められた

相手は今までの奴等ではない、その程度でダウンなら苦労しない
技のキレは良かったが、速い分パワーが追いついていないようだ
一手、足りなかったか…

「ふふ、残念。あまり女は殴りたかないが…」
「川神流　蠍撃ち！」
「ガッ！？」

…驚いた
攻撃を受け止められた直後、あろうことか川神一子は得物を手放し、素早
く打撃攻撃へシフトした
まるで受け止められるのを予想していたかのように、というか予想してい
たのだろう
その目は自信に溢れているが、相手の力量はしっかりと測っているらしい
しかも、武器を受け止め、がら空きのボディに今の内臓をえぐるような正
拳突き。

頭を使えるような奴ではないと思ったのだが…
いや、これも実践を積み重ねた努力の結果なのだろう
ともかく、ノーガードにアレはきく。もう一発打ち込めば、ダウンだろう
川神一子も承知しているとばかりに相手が落とした薙刀で追撃を放つ
だが、その体は前に進むのではなく、後ろへ吹き飛ばされた

「ほっほほーい、やらせないよ～♪」

そこには、もう1人の白髪乙女がニコニコと蹴りを放っていた

そう、これはほぼ二対一の勝負だ
どんなに考えて、奇怪な動きで翻弄したとして、圧倒的に手数が足りない
なにせ、こちらは2本、相手は4本なのだから
それに実戦経験といったって、模擬試合のようなものだろう
とすれば、基本的に一対一の形式であることは予想がつく
つまり、3本目、4本目の腕から放たれる攻撃に対処できないのだ

「おお、助かった助かった」
「しっかりしろよぉ、ハゲー」

「ったく、油断大敵だぜ、お嬢さん」
「僕らは二人でチームだよん♪」

そのうえ、ハゲまで首をコキコキと鳴らし、体勢を整えてしまった
飛ばされた少女はフィールドの端で悔しそうに睨み付けていた
これじゃあ勝ち目は薄くなってしまう

…って、なんで俺は勝ち目なんて考えてんだ
川神一子があの二人に勝てるわけがないと分かりきっているのに

はあ、あの真剣な眼差しを見過ぎたか
毒されるのも大概にしないとな
ここで勝たれたら、晴れて決勝進出だ、少なからず目立ってしまう
そうだ、これは負けて当然の試合だ

「じゃ、そろそろいくぞぉ～♪」

突如、フィールド端にいる川神一子を二人がかりで叩きにくる
あー、こりゃ終わったな
そもそもここまで持ったのが奇跡だろう
相手がその気になってしまえば、挟み撃ちでも、同時攻撃でも、幾らでも
手はあったのだ、ただ今まで相手がそれをしなかっただけのこと

「…くっ！」

少女は薙刀を構えるが、もし二人の攻撃をどちらも運良く止められたとし
ても、反動を受けて、場外に出てしまう距離だろう
そんな心配こそ滑稽だ、格上の二人の攻撃を受けきれるわけがない

八方塞、ジエンドだ
流石に努力じゃ覆せなかったか、二対一は…
俺の予想は遥かに超えていたが、ここまでか

だが、その大きく見開いた瞳には相も変わらず、自信の炎が灯っている
ざわつく会場も気にもとめず、ただ前を見ている

はぁ、なんつー顔してんだか

そして、二つの拳は薙刀にかすることなく、突き刺さった

6話　「揺るぎなき瞳」（後書き）

ありがとうございました
えー、感想の方で、1話が短いと言われてしまったのですが
毎日今の長さでも更新と、日があいても長くするのは
どちらがいいのでしょうか？
活動報告も後につくっておくので、コメントか感想で教えてください
ちなみに、自分の勝手な意見だと毎日あげたいと思っております
しかし、読者の方の要望があまりにも強ければ考えさせて頂きます
長くなってすみません
次回に続きます

7話　「守る者、守られる者」（前書き）

はい、話の長さについてですが、皆様がやりやすい方をやっていいよと
言ってくれたり、毎日見たいと言ってくださるので、今の長さでいきます
しかし、余裕があるとき、特に日曜などは2つくらい上げられるように
なるのを目指します、本当にご意見ありがとうございました
これからもよろしくお願いします

7話　「守る者、守られる者」

Ｓｉｄｅ　一子

相手は今までよりもずっと強いのが肌で感じる
大変かもしれないけど、勝つしかないわ
無理矢理ペアにした流川君を守らなきゃ！

だけど、相手はアタシの予想以上に強かった
無闇に二人相手に攻撃を振るってもするりと回避される
かといって、１人に標的を絞ったら、この通り端まで吹っ飛ばされた
相手が逆の端から走ってくる、どうやら二人同時に来るようだ
すぐに体勢を整えようとするが、思ったより蹴りが深くまで入っていた

でも、絶対に負けられない！
アタシが諦めたら、誰の支えにもなれない！

～

アタシは2年生になって、ファミリーの皆とおんなじクラスになって、と
ても嬉しかった

当然、そこには知らない人もいて、そんな中ウメ先生に出欠確認でいきな
り、鞭で叩かれた生徒がいた、「おう」なんて答えたのだ

その生徒の名前は“流川海斗”
無口で無表情、誰に対しても他人相手の京みたい、ううん、それ以上にそ
っけなく、とにかく人と話してるとこを見たことがなかった
そんな彼のことが少しだけ気になった、何故だかは分からない
たまたま起きていた授業などは彼のことを観察していた

そして、気づいた、その瞳に。
あの誰も信用しようとせず、現実に飽き飽きしている気だるい瞳
眼鏡のせいでよく見えなかったが、何度も見てようやく気づいた

その瞳はアタシにはよく見覚えがあった
孤児院にいたとき、親に捨てられたばかりの子たちが一様に持っていたそ
の瞳、人がやってくるのを拒むようなその瞳
そこでアタシは何度も何人もそれを見た、あるいはアタシもそうであった
のかもしれない

これが気になっていた理由だったのだ

アタシはタッちゃんに守られて、川神院に引き取られて、ファミリーの皆
と遊んで過ごして、色々な人達に助けられて、支えられて、楽しい毎日が
ある。今のアタシがいる
だから、今度はアタシが助けて、支えになってあげたかった

実際に話かけてみると、２文字の返答ばかりで流石の無口ぶりだったけど
無視するなんてことは一度もされなかった
絶対に悪い人じゃないと思った、本当は優しいんだと感じた

だけど、表情だけは変わらないままだった

もっと知りたかった、彼のことを
そして知って欲しかった、毎日は楽しいことを

ウメ先生からタッグマッチの話があった
ペアは自由に決めていいようだった
途端にクラスの女の子たちは“流川君とは嫌だ”と言い始めた
ヒソヒソ話のつもりだったんだろうけど、静かなクラス全体にその声は聞
こえていて、気まずい空気が流れた
だけど、流川君はそれを大して気にした様子もなく、ただ現実として、受
け入れていた
そんな横顔を見たアタシはペアに立候補した
これでもっと仲良くなれると思ったから

午後の授業がタッグマッチの準備にあてられた
流川君は大和の話だと、あまり運動が得意でなく、力も強くないという
だから、アタシが守ってあげるといった

時間が余ったから、練習も嫌だろうと思ったアタシはしりとりを提案した
相変わらず、無口だったけど、アタシは見事に遊ばれた

せっかく勝てたのに、悔しくて必死に抗議した

そんなときに流川君が初めて微笑みを浮かべた
無機質でない、今まで見たことのない柔らかい表情だった
それを指摘したら、流川君はばつが悪そうに帰って行っちゃった

嬉しくて胸があったかくなった、手をあてると少しどきどきしていた
修行で走り回ったあとのどきどきも好きだけど、それとは違って、
でも、
何だか心地よかった

〜

目の前で何が起こっているのか分からなかった
二人の拳がアタシの前に立つ流川君に突き刺さっていた
守ってたはずの人に、今アタシは守られていた

別に一瞬でアタシの前に移動したとか、そんな離れ技をしたわけじゃない
見えていた、隅にいた流川君が、相手が攻撃のモーションに入る前に、こ
ちらに向かって歩いてくるのが。
ホントにゆっくりとアタシの方へ近づいてきた

そして、アタシの驚きで大きく開いた瞳を見て、溜息を吐いたかと思うと
何が起こってるのか分からずにざわめく会場も無視して、アタシの前で停

止した
状況が飲みこめずにただ前の流川君の背中を見ることしか出来なかった

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

右のあばらと左のわき腹に二つの拳が突き刺さる
てか、この女の方がダメージでかいってどうゆうこっちゃ
だが、俺は声を上げることもなく、その場にとどまる

「あれれ～？」
「おいおい、こいつ攻撃が効いてねえのかよ」

馬鹿か、しっかり痛いっつーに
しかし、あれだ
我ながら馬鹿なことをしたもんだ
放っておけば、試合は終わって、目立つことなく終了したってのに…

本格的に自分が分からなくなってきた
偉い迷惑だよ、人の意志に干渉してくるなんてな
はあ、もうやってしまったものはしょうがない
腹くくって、これからを考えるか

守ったからにはこの勝負、勝たせてもらわねえとな

7話　「守る者、守られる者」（後書き）

ありがとうございました
なんか、前回の終わりに違和感を感じてくれた方は、全てすっきりしたの
ではないでしょうか
いよいよ、主人公の本来の性格が見え隠れし始めると思います
そして、戦いは次回も続きます…ダラダラですね

※活動報告にて、形式についての質問がございます
参考にさせて頂きたいのでご協力お願いします

8話　「力無き戦い」（前書き）

今回ついに激突です
では、散々ひっぱった海斗の戦いをご覧下さい

8話　「力無き戦い」

Ｓｉｄｅ　由紀江

おかしいです、あの方からは絶対に一般人にもあるはずの気が微塵も感じ
とれません
そういう方も私が知らないだけで存在するのかもしれません
ですが、今の問題はそこではありません

その彼は一子さんを守るために二撃を自ら受けました
いくら強い人といえど、攻撃を正面から無抵抗に受けるなんて、恐怖です
し、もちろん無事の保障なんかありません
それこそ、気が０の人が突っ込んだら、その危険はより現実的なものとな
るのは言うまでもありません

それなのに彼は何のためらいもなく、一子さんの前に歩みを進めました
それだけで、彼がとても優しく、仲間思いの人であると分かります
気がなくとも、本当の意味で強い人であると…

私も彼のようになれれば、友達ができるのでしょうか？

ですが、その彼にクラスメイトから歓声の１つも上がらないのは、一体、
何故なのでしょう？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

さて、勝ちにいくと覚悟したわけだが…
こちらから手を出すのは少々危険だ
だが、これで勝負に負けては、何のためにしゃしゃり出たってことになる
ざわつく会場は思考の邪魔なので無視する

如何にして、こいつらを倒そうか
攻撃手段はこの一子しかいないのだが、作戦に他者の力を入れてしまうと
誤算が生じやすい

うむ、あまりダメージが蓄積すると、俺もやばいなので攻撃を多く受ける前に考えてしまわないとなかといって、避けたりしたら、相手を勢いづけるだけだ
相手もいきなり本気の攻撃なんて仕掛けてこない

その油断の隙に活路を見出してやる…

「あれれー、おっかしいな～」
「もう一発くらいやがれ」

また、二発の拳が…

いや、蹴りが飛んできやがった

なに、いきなりスイッチ入れてやがんだ、こいつら
あと三回くらいは拳の流れだろうが、普通は
避けるわけにはいかないので、そのまま受け……る！？

「流川君！」

危ねぇ、

蹴りが見事にヒットした
ハゲが腰に一発と、白髪乙女が首へのハイキックを見舞ってきた

あろうことか女は俺の意識を刈り取ろうとして来やがった
しかも、首で一番筋肉がない守りの薄い部分を正確に。
要するにピンポイントで俺の急所を狙ってきたのだ、加えて結構な威力

俺は誰にも認識されない程度の小さな動きで着弾点をわずかにずらした
攻撃が当たると、激しく脳が揺さぶられたが、無事気絶ポイントは回避す
るのに成功したようだ
それにしたって、首への攻撃だ、めちゃくちゃ痛い

ていうか、攻撃が何段階か飛ばして進化しすぎだろ
階段は一歩一歩を大切に踏みしめて上ってこようよ、お嬢さん

「あれー、これも効いてないのかなー」
「こいつホントに痛覚あんのか？」

まあ、それでも俺は声を上げず、表情も崩すことはない
ていうか、痛がったら、この後ろの少女にもっと心配されそうだ
あくまで、冷静に作戦を考えよう、…白髪乙女に注意しながら

「よーし、んじゃ連撃しちゃうよ～だ♪」

な！？
俺がその声を聞き取った瞬間、拳のラッシュが襲ってきた
無抵抗の体がサンドバッグにされる

しかも、こいつら段々手加減がなくなってきてないか
くそ、少なくともアザだらけなのは確定事項らしい

「おらおら～♪」
「流川君！」

はあ、マジで体中がいてぇ
何で俺がこんなに殴られなきゃいけないんだ
負けちまえば楽になれるじゃねえか

このまま後ろに倒れれば、場外に出て、負けとなり、こんな理不尽な一方

的な暴力から解放されるんだ

そうだ、別に俺が負けたところで何かが終わるわけじゃない
なら、楽になろうじゃねえか

こんな状況、真性のMしか喜ばねえっつーの
悪いが、俺には一方的にハゲと白髪乙女に殴られる趣味はない

こんなムカつくことはもう御免だ

「これでとどめだ！」

大きく伸びるストレートが俺の胸を強打する
俺は今までのように抗いはせず、力に身を任せて後ろに仰け反っていく

まあ、我ながら善戦したと思う
やれる手は全て尽くした

あと、俺に残された出来ることは…

「な！？」
「おろ？」

…この両の手に握った手首をしっかり掴んでることくらいだよな

殴られんのはもうウンザリだってーの
さっさと負けさせてもらうわ

ったく、油断大敵だぜ、お二人さん

「試合終了！流川・川神ペアの勝利」

学園長の判定が静まり返った会場に一際大きく響き渡った

8話　「力無き戦い」（後書き）

ありがとうございました
見事、頭脳戦で海斗が勝利しました（ずるいだけか
この調子で決勝だいじょうぶでしょうか
そんなわけで次回もよろしくお願いします

9話　「近づく距離」（前書き）

皆様、ご意見ありがとうございました
基本、今までのままでいきますが、会話に行間を入れるなど、
多少の変化はあると思います
前回の最後、分かりにくかった方はすみません
では、どうぞ

9話　「近づく距離」

Ｓｉｄｅ　百代

ワン子は来る日も来る日も努力していた

だから、その強さは私も認めているが、あくまでそれは一般の武道家たち
と比べてということだ、上には上がいる

そして、今回の相手は明らかに格上の相手
事実上、二対一の試合だったし、始まる前から結果は見えていた
それでも、ワン子は諦めることなく、果敢に攻め込み、相手の１人に大き
なダメージを与えた
予想より善戦したが、やはりそれまで

すぐに残りの１人に反撃されて、フィールド端まで追い込まれた
よく１人だけで準決勝まで進んだと帰ったら褒めてやろう

そんなことを考えていたら、目の前に信じられない光景があった

あの無気力男がワン子の前に立ち、攻撃を受けた
そいつはいくら攻撃を受けても、全く痛がる様子はなく、最後までワン子
に攻撃を通すことなく、対戦相手を道連れにして、場外負けとなった

気もない人間がまさかあの二人に勝ってしまうなんてな
やり方はどうあれ、なかなか面白い奴だ、流川

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ふぃ～、なんとか勝てたわ
てか、体がまじで痛いわ、まあ骨がイってないだけいいか

「流川君、大丈夫？」

一子が今にも泣きそうな顔で迫ってきた
なんか、こうして見るとワン子と呼ばれているのも頷ける

「ああ」

「でも、流川君のおかげで勝てたわ、ありがとう」

「ん、別に」

実際、一子がフィールドに残っていたから出来た作戦だし、何よりこの試
合で勝ち残っていたのは一子ひとりだけなのだが

まあ、こんな笑顔で感謝してくれてることだし別にいいか
一子には借りもあるし、こんな嬉しそうにしてくれるなら、まあやってよ
かったってとこか

「でも、アタシが守るって言ったのに、結局守られちゃったわ」

「男が女を守るのは当然だ」

「・・・・・・」

口をあんぐりと開けて、一子が沈黙している

やばい、なんかキザなこと言って、ひかれたか

でも、これは建前とかじゃなく、本心なんだが…

え、てことは何?他ならぬ俺自身にひいてるってこと?

これは正直、さっきの試合の傷より痛い

「…した」

「ん?」

「初めて文章を話した!」

「…はい?」

「いつも2文字くらいしか喋ってくれなかったのに」

ああ、分かった

俺が普通に話したことがかなり驚きなのか

まあ、俺もこのまま誰とも話さずに学校生活が終わると思っていたがこいつと二人で話す分には目立つことにはならないだろう

なんか予定が狂わされてるな、見事に

Ｓｉｄｅ　一子

本当に驚いた、私の前に立ったときもそうだけど、あの二人を全く手を出
さずに倒してしまった、そのことがすぐには信じられなかった
でも、じいちゃんの声が響き渡って、その光景が現実であることを実感し
た、本当に勝ったのだ

流川君がアタシの前で相手から一方的にやられてるとき、胸が張り裂けそ
うだった、アタシが追い詰められたことで流川君が犠牲になっているだけど…

何故だか、その守ってくれてる大きな背中を見てると嬉しかった
流川君が攻撃されて悲しいのに、その嬉しさも収まってはくれなかった
アタシが何もできなかったのはそのせいもあるのかも

でも、アタシが守るって約束したのに、守られてしまったのはやっぱり、

悔しいし、情けないし、申し訳ない
そのことを流川君に謝ると、真剣な顔で“女は男が守る”んだって

今まで、“おう”とか、“ああ”しか、話してくれなかったのに、
やっと
会話ができて、ちょっと仲良くなれた気がした
この調子でもっと、毎日を楽しいと思えるようになってほしい

でも、アタシの方が流川君に喜ばされることが多いような…

そして、さっきは嬉しさが先行して、なんともなかったが、後で流
川君の
言葉を思い出して、どきどきしていた

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

次が決勝か、ここまで来てしまった
俺の予想では勝ちあがってくるのはＳ組だろう
ちょっと優勝は流石にまずい、目立つとか最早そういう次元じゃない
やっぱり一応、きいてみるか

「なあ」

「ん、なーに？」

「棄権しｎ…」
「決勝、がんばりましょ」

俺の提案は会議にかけられる前に否決された

まあ、今更か
棄権もそれはそれで目立つし、普通にいって負けるのが無難か
次の相手には多少、警戒も生まれちゃってるだろうし

ああいうのって、不意打ちだからな、一発限りなんだよな
それに相手は決勝に上がってくるほどの実力者
あれ？よく考えるとなんの心配もないんじゃないか

負けても総合2位なわけだし、一子も文句ないだろう

Ｓｉｄｅ　大和

正直、“流川海斗”という男が分からない
人と関係をもっていない奴は俺にしても調べようがない
ただの陰気で孤独な奴だと思っていたので、ワン子とペアにならせるのは
正直、反対だった

しかし、今はますます分からなくなっている
ピンチのワン子を助けただけでなく、試合にも勝利してしまった
しかも、全く手を出さずにだ

今の行動、一部始終を見て、クラスメイトは困惑している

委員長やキャップは警戒を解いて、良い奴かもという認識に改めていると

いう感じだ、逆にそれ以外の人間は今のところ多少印象は変わるものの
根本に
あるクラスでのアイツのイメージを払拭できていないってところか
だが、ワン子は実際に守られた身、ある程度の信頼が芽生えている
と解釈
をして、まず間違いないだろう
相手がそれを狙っているということも考えられなくはない
十分に可能性はあるし、警戒するに越したことはない

今、俺の出来ることは奴の情報をなるべく早く集めて、仲間の安全
を確保
できるようにしておくことだけか

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「では、これより最後の決勝戦を開始する」

思っていた通り、Ｓ組の九鬼・忍足ペアが勝ちあがってきた
ていうか、このメイドは少しやばい感じがする
なんつーか、試合への闘気っていうよりも、この冷たい感じは…

「始めぇ！」

最終試合が始まった

9話　「近づく距離」（後書き）

ありがとうございました
やっと、大量の地の文から解放される兆しが
見えてきたのではないでしょうか
そして、フラグは着々と準備します
ちょろいとかは言いっこなしです（笑
次がやっと決勝、のんびりですがよろしくお願いします

１０話　「破られた沈黙」（前書き）

初の１日に２話投稿
これは厳しい、慣れるまではあまり乱発できないですね
９話は新しく作ったのではなく、仮８話を編集で投稿したので
読んでない方はこれを読む前にどうぞ
読んでいる方は続きをどうぞ

１０話　「破られた沈黙」

「まさか、決勝の相手が一子殿とは」

「九鬼クン…」

「うぬぬ、S組の誇りがかかってるとはいえ、心苦しい限りである」

「英雄様、ここは私にお任せください」

「む、なんだあずみ」

「いくら試合とはいえ、英雄様が最愛の方と戦う必要はありません、この
忍足あずみが責任を持って勝利しますので、英雄様は客席でお休みになっ
ていてください」

「ふむ、あずみ、素晴らしい忠誠よ。ならば、我は信頼の元にそうさせて
もらおう、フハハハハハ」

「もったいなきお言葉です、英雄様～」

「・・・・・・」

そういって、メイドがデコバツにアイマスクを渡して、デコバツはフィー

ルドの外に出て行ってしまった

あれ、もう既に相手を1人倒しちゃった？
くそ、負けるつもりだったのに、なんでより有利な状況になってんだ！
…と思ったのも束の間

「はあ、ようやく始められるなあ」

「…！」

いきなり、口調が変わった、いや口調だけじゃない
二重人格ってわけでもなさそうだし、こっちが通常らしいなってことは、デコバツの前では猫をカブってんのか
だから、わざわざ目隠しまで渡して、睡眠を促したと…

やばいなあ、こいつから出てんの殺意じゃん

「お前、あれだけの攻撃を受けて、動けるってことは、ある程度強いって
認識していいんだな」

確実に俺に向けて、言ってるよな
無口キャラだが、強いとかいう誤解は解かないと後々めんどい

「弱者は頑丈じゃないと生きれん」

「はあ、まぁ強そうには見えないわな」

疑っては見たものの、俺の滲み出る弱さオーラの方を信じているようだ
つーか、こいつ女のくせに口わるいなー

「だからって、油断はしないぜ、あんな手に引っかかるなんつーのは御免
だからな」

そういって、小太刀を両手に構える
武器はレプリカだし、斬れることはない
だが、コイツの場合、武器より殺気の方がよっぽど鋭い

「んじゃ、戦闘開始だ」

途端、圧倒的な速さでメイドがこちらに向かってきた
なに、最初から狙いが俺かよ…！

凄まじい量の斬撃がわずか数秒の間に俺の体を襲う
痛みが先ほどの比じゃないが、ある意味これはチャンスか？
ここで倒れておけば、目立つことなく終了だろう

「せいやぁぁぁぁっ！」

そんな思考を割るように一子が薙刀を振るった
メイドはそれをかわし、懐に入って当て身を見舞う

今の動きは完全にただのメイドを凌駕していた
護衛っていうより、こいつはどちらかというと狩る側の人間だ
そんな奴の攻撃をくらった一子は薙刀でなんとか姿勢を保っている

これは圧倒的だな、悔いなく勝負が決まりそうだ

「不意打ちであたいの首がとれると思ったか、小娘」

「くっ…！」

「お前じゃ敵わねえよ、くぐり抜けた修羅場の数がちげぇ」

「それでも諦めないわ」

「はっ、努力だけで天才に勝てるなんて、いつの時代のスポ根漫画だよ。
どこまで努力したって、その人間相応の限度ってものがあんだよ、その器
が相手の大きさに足らなければ、いくら器いっぱいに水を注いだところで
量が覆ることはねえんだよ」

「…は？」

今、コイツは何を言った？
この腐れメイドは何をほざきやがった？

「おい…」

「あぁ？なんだよ、根暗ヤロー」

驚くくらい自分の声が震えていた
言葉から怒りを隠し切ることがまるで出来なかった

無口だの、根暗だの、地味だの、ひ弱だの、無感情だの、そんな設定は1
つ残らず、頭の中から追い出されていた

「お前は何、馬鹿なことを垂れてんだ？」

「え、どうしたの！？流川君」

「なんだなんだぁ、根暗が狂ったか？」

一子が練習しているのは毎朝見かけた
強くなるためにひたむきに努力し続けていた
自分の強さを誇りにしつつも、自分の未熟さも認めていて、まだま

だ強者
には届かないと知っていながら、それに絶望するのではなく、それさえも
糧にして、進み続けていた

その瞳は眩しいほどに真っ直ぐと前を見ていた
そんな鍛錬を多くこなし、自分に人一倍厳しい彼女は、いつも明るく、誰
にでも公平に接した、この俺にもだ
ペアができない嫌われた俺の前でも彼女は同じ笑顔を見せた

どんな困難な状況でも、明るく揺らがないその姿はまさに勇ましかった

「努力じゃ天才には勝てないだと…？」

「おいおい、お前まで熱血理論かます気かよ？勘弁してくれ」

この勇ましい少女は俺を狂わせた
俺と会話をしようとしたし、笑みまで引き出された

なら、徹底的に狂ってやる

「勘違いしてんじゃねえぞ」

「あぁん？」

どうせこのまま目立たないように暮らしたって、この退屈な日々が
永遠に
ループするってのは目に見えてる

どのみち、一度は絶望した人生
どうなろうが知ったことか
ならば、俺は自分の衝動に素直に従うまでだ

「努力が超えられない存在が天才なんかじゃねえ」

「流川君？」

「どんなに高い壁を目の前にしても、諦めずに努力し続けられる奴
のこと
を天才って呼ぶんだよ」

わざわざ、自発的に俺とペアになろうだなんてな
ホントに何で、わざわざ印象を変えてまで、人から避けられるよう
にした
んだか、物好きもいるもんだ

「ははっ、何いうかと思えば、ならその天才はあたいの実力とつり合
ってくれるのか……ねっ！」

俺の顔面に向けて、思い切り放たれたパンチを何もせず受ける

それが俺の覚悟だと自分に言い聞かせるように

これで変装グッズも壊れてしまったわけだ

戦闘に邪魔なウザい前髪をぐしゃぐしゃとかき上げ、地べたに転がった、

もはや本来の役割を果たさないであろう眼鏡も踏み潰す

口の中に広がる鉄の味を吐き出して、言い放つ

「だからよ、お前の相手はこの凡才の俺で十分だ」

さて、じゃあ手始めに俺の後ろでびっくりしてる物好きさんに優勝でも、

プレゼントしますかね

１０話　「破られた沈黙」（後書き）

ありがとうございました
やっと海斗のスイッチが入りましたね、熱いときには熱い
長い地の文とはお別れかな?↑たぶんそんなことないです
というか、あずみはこんなキャラじゃない。一子とのフラグのために
犠牲になっていただきました
次回どんな戦いになるのか、期待しないでお待ちください

11話　「四対二」（前書き）

皆さん、感想くださってありがとうございます
主人公を気に入ってくださった方がいらしたようで、
書き手としては嬉しいかぎりです
では、続きをどうぞ

11話　「四対二」

Ｓｉｄｅ　大和

Ｆ組の応援席は騒然となっていた

「あのイケメンだれよ」

「ていうか、流川君ってあんなに喋るんだ」

「なんか乗り移ったんじゃない？」

クラスの大半はその表情を驚きに彩られてるが、一部の単純な女子たちは
その容姿に騒ぎ立てている

本当にあいつのことが分からない
ただ…

あいつのことを見るワン子の目が若干取り返しがつかなくなっている…

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「お前の相手はこの凡才の俺で十分だ」

さて、大見得きったはいいが、どう勝とうか
目立つのは仕方ないにしても、やはり弱く見られていたほうが何かと都合
がいい、相手の油断が俺にとって最高の武器だ
出来れば、手を出さずに片付けたいのだが…
攻撃を見舞うというのは、色々と気が引ける
しかし、さっきの方法は警戒されていて使えない

「なら、せいぜい楽しませてくれよ、凡才」

先ほどより、速い攻撃が一瞬のうちに5発繰り出される
俺はそれを全てかわすことなく、体で受け止めた
ただし、さっきと違うのは微妙に体をひねり、その威力を殺しているあくまで、相手に気づかれないほど微妙にだ
相手には同じように無抵抗で攻撃を受けているようにしか見えないなにせ、殴った感覚はそのままにあるからな
戦い慣れたものほど、あまり攻撃の際に視覚を頼りにしない
己の感覚を研ぎ澄まし、視覚はどちらかというと防御に用いる

「たいそうなことを言っといて、反応もできないのかよ」

いいぞ、もっと油断しろ
やはり、場外に出すのが一番楽か
そう思い、攻撃を受けつつもフィールド端に誘い込んでいく

「おっと、そっちには行かねえぜ」

…見抜かれていたようだ
どんなに油断していても、やはり二度目は無理か

なら、どうするか
一応、準備はあるが、敵があの警戒状態では手数に欠ける

「相手はアタシもいるわ、タァァァァ！」

「くそ、めんどくせぇ」

すぐさま、メイドは振り下ろされる一撃に対応して、素早い小太刀の連撃
で一子をこちらに吹き飛ばしてくる

…ん？
手数足りるじゃねえか
自分がついさっきの試合で考えたことだ、今の手数は四対二
俺は一子の腕を掴み、自分のほうに引き寄せた

「うわ、何!?流川君」

何故、そんなに焦る…
目すら合わせてくれないし
俺からアクションを起こすってことに慣れてないのか?

「今から言うことをよく聞け」

「う、うん」

「俺が合図したら、……れ」

「え、でも…」

「いいから、俺が頑丈なのは分かっただろ?」

「分かったわ」

「おい、あたいはそんなに気が長くねえぞ」

メイドが突っ込んでくるのを、二手に分かれ回避する
一子に難しい作戦は無理だと考えたので、一つだけ単純な指示を出した
これなら、失敗なんてこともないだろう

「フ、そろそろ本気で仕留めてやるよ」

案の定、俺の方に向かってきた
サポートである守りの俺から潰すというのは定石だ
だが…

「敵に背を向けるのは関心しないぜ」

「川神流　大車輪！」

「くっ！？」

薙刀の一撃が真後ろから突如襲う
メイドは多少、不意をつかれたものの、すぐに反転して、攻撃をいなす

「そんな大振りな攻撃じゃあたらねえよ」

「くっ…！」

「はん、雑魚は吹っ飛びやがれ」

「だから、背を向けるのは関心しないって」

「な！？」

メイドは今度こそ完全に不意をつかれた
そりゃそうだ、俺から手を出すことはないと思ってんだからな
回避は不可能とみて、俺からの拳をガードしようと構えるが…

俺は手を出さないんだっつーの
守ろうと前に出された片方の手に手錠をかける

「なんだこれは、アイテムは禁止だろ」

「何言ってんだ、これは俺が正式に申請した武器だ」

学園長はうなずいている
そして、悔しそうにするメイドの前でもう片方の錠を自分の手にかける

「あ、何やってんだ、テメェ」

「これでお前は逃げられない」

「何言ってんだ、近接戦闘なら、片手でもテメェに負ける気はしねえ」

「いや、もうお前の負けは決定だ」

「いくわ！」

後ろでは一子が薙刀を回していた
どうやら、あの技回すほど威力が上がるらしい
先ほどは急だったので少ないモーションだったが、今度は違う

「ふ、さっきはかわしたが、一度見た技なら止めることも容易い」

まあ、威力が上がっているとはいえ、少なからずその可能性もあるだろう。
だけどな…

「川神流　大車輪！」

「何！？」

一子の薙刀は迷わず俺の方に伸びてきた

俺が出した指示はひとつだけ

“合図を出したら、俺を思い切り吹っ飛ばしてくれ”

これならフィールドから若干離れていても、場外に届く
つまり、相手の警戒の外でチェックメイトができる

肺の空気を根こそぎ持っていくような攻撃が俺に当たったちと、キツイが十分な威力だ
刃の峰ではなく、柄でやったのは一子の優しさだろう

頑丈だといっても、多少心配だったか、嫌な役やらせちまった

このメイドはまだまだ力を残してるって感じだったな
まあ、学校のイベントごときで本気は出さないか
それにしても、油断しすぎだってーの
つーことで今回はあの努力少女に優勝をやってくれや

学園長は俺たちが場外に弾き出されたのをしっかりと確認すると、
高らかに
宣言した

「優勝は流川・川神ペア！！」

11話　「四対二」（後書き）

ありがとうございました
勝利したとはいえ、まだまだ主人公には何かありそうです
そして、ワン子は…
次回でタッグマッチ完結？

12話　「パートナー」（前書き）

タッグマッチ編終了です
なんか終始ダラダラしていましたが、
それはこれからも変わりません（断言

それでも構わないという方はこれからもよろしくお願いします

12話　「パートナー」

Ｓｉｄｅ　由紀江

見事…
その一言に尽きます

あの…“流川”さんでしょうか
全く手を出さずにまたもや勝ってしまいました
相手の忍足さんという方も見たところ相当なやり手です
それをあんな奇策で出し抜いてしまうとは

しかも攻撃を受けていたように見えて、全ていなしていました
気こそないですが、あの方は相当に強いのではないでしょうか
それに…

“高い壁を前にしても、努力をし続けられる人が天才”

心に響く言葉です
あの方の人間性が分かる一言でした

私ももっと努力しないと…
あうう、友達１００人できるでしょうか

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「さっさと外しやがれ」

「はいはい…」

このメイド、めっちゃイライラしてやがる
そんな罠にはまったのが気にくわねえのか

「おらよ」

「はん！」

メイドは不機嫌を隠す様子もなく去っていった

「流川くーん」

「おう」

「大丈夫だった？」

「平気だ、頑丈だっつったろ」

「うん、良かったわ」

どの口が言うか
多少のことならいいが、今日は流石にダメージを受けすぎた
だが、少しでも弱みを見せると、こいつは罪悪感を感じちまうだろう

これから表彰式だが、あいにく興味はない
優勝を目の前の少女にプレゼントしたかっただけだしな

「おい、一子」

「はう、え、今なんて？」

「は？今なんても何も“おい、一子”としか言ってないが」

「か、一子…！？」

「ん？名前で呼んじゃいけなかったか」

「い、いや、そういうわけじゃないんだけど…いきなりだったから」

「今まで機会がなかっただけで、俺の中では最初から一子だったんだが」

「そ、そうなの…、別にいいんだけどね」

嘘だった
最初はフルネームだったが、おそらくコイツを守ると決めたときから、自
然と一子になっていた気がする

まあ、基本俺は誰でも名前呼びだ
今まで呼ぶ相手がいなかっただけのこと

「あ、そうじゃなくて、一子」

「はう」

「…お前は一子と呼ばれる度に、そう答えるのか」

「いや、なんか慣れてないだけで」

「まあいい、俺は表彰式出ないで帰るから」

「え!?なんで?」

「別に興味がないし、それに勝ったのは一子だからな。俺は最後の二戦以
外は手を出してないし、その二戦も負けてるしな」

そう言って、片手を上げて、颯爽とその場を立ち去った

…はずだった

なんか、思い切り、上げた手を掴まれてる

「勝てたのは、悔しいけど、ほとんど流川君のおかげだわ」

「・・・・・」

「アタシはせいぜいサポートよ、最後の二戦はレベルが違ったし、負けた
って言っても倒したのも流川君でしょ」

なんで、いつも元気なのに、こんな時だけ悲しそうな顔をするんだ
あの自信はどこへやらだな…
仕方ない

「海斗だ」

「え?」

「海斗でいいぞ、俺は名前の方が好きなんだ、最後の二戦は俺がいなくて
も、お前がいなくても勝てなかった、そうだろ?パートナー」

「あ…」

驚いたようにこちらを見つめる顔
その表情はみるみる笑顔に変わっていく

「そうね、海斗」

「ああ」

さっきの憂い顔はどこへやら、今は満面の笑みだった
尻尾でも振るような勢いだ

一子をもじって、ワン子とは言い得て妙だ
本当に周りを安らげる奴だ
マイナスイオンでも出てるのではないだろうか

こういう姿を見ていると、ペットのジロを思い出す
…いや、飼ったことないが

「よし、それじゃあな」

「ちょっと待ちなさい」

流れで帰らせてもらえなかった
ここは俺の巧みな言い訳で切り抜けてやる

「いや、一子、俺は…」

「表彰式に出るんでしょう、パートナー」

完全に墓穴を掘ったと悟った瞬間だった

Ｓｉｄｅ　百代

フフフ、面白い奴だ
やり方は弟のようにズル賢いがそれでも勝利を収めてしまった

それにメイドにやられていたときのあの体捌き
まだまだ何か隠していそうだ

本人はそれを知られたくないようだがな。
気がないことと、何か関係があるのか？

完全に未知の強さではないか

面白い、面白いぞ、“流川海斗”

一度、死合ってみたいものだ

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「では、流川・川神ペアにトロフィーの授与じゃ」

“じゅよじゃ”って、言いにくくないか

…そうでもないか

一子がガチガチになって、トロフィーを受け取る
そして、トロフィーを持って、やり場に困るようにこちらを見つめた

「ああ、やるやる」

「でも…」

「真剣でそんなの家にあっても、かさばるだけだから」

表彰式が終了する頃には日も暮れていた
絡まれる前にさっさと帰るか
そう思って、校門に向かおうとすると

「海斗ーー」

「あ？」

一子に声をかけられた
てっきり、お仲間のもとに戻っていったものだと思ったが

「あ、あのね、その～」

「？」

「け、携帯のアドレスとか、教えてくれたら嬉しいな～、なんて」

めっちゃ夕日に照らされた真っ赤な顔でそんなことを言った

そのくらい、別に構わなかったのだが…

「悪いな」

「あ、いや…」

「あいにく携帯とか持ってねえんだ」

「え！あ、そ、そうなんだ。それなら仕方ないわね、うん」

なんか、顔をうつむかせてしまった

「まあ、もし買ったら、そのときは必ず最初に教えてやる」

「あ…、うん！」

そう言うと、一子は笑った

そんなこんなで色々あったタッグマッチは幕を閉じる

やっと普通の日常が…というわけにはいかないだろう
だが、ある意味それこそ俺が望んでいたもの

“非日常”

さて、これからは少なからず注目されるようになった俺がどれくらい、手
札を隠していけるかだ

だが、今までは少しシビアすぎたか
元々、自由に生きるのが、俺の性分だしな

これから面白くなりそうだ

12話　「パートナー」（後書き）

ありがとうございました
ワン子が見事に…はい
次回からはしばらく日常ストーリーを書いてくと思います
変わらず、ダラダラです。いやむしろ、もっとダラダラかも
次のイベントは何にしましょうかね～

13話　「まゆっち推参」（前書き）

はい、今回からグダグダ日常編
いつまで続くのでしょうか
ゆるーりと進んでいきますので、ゆるーりとお読みになってください
では、どうぞ

１３話　「まゆっち推参」

「ふぁーあ」

昨日は飯食って、よく寝たら、傷が完治してしまった
我が体ながら、なんと逞しいことよ

エイリアンに改造とかされてないよな
それを俺に確かめるすべはない
結局、人間なんて自分の体でさえ、本当に自分のものか分からない
もしかしたら、これは他者の体で記憶を改ざんされているのかも
おーこわ

そんな感じで俺の頭の中には、朝からカオスが広がっていた
うーん、今日も平和です

Ｓｉｄｅ　由紀江

あわわ、どうしましょう
日直で早く来たら、前にあの流川さんがいらっしゃいます

しかも、人気者であろう流川さんが１人で登校中
これは神様が私にチャンスをくださっているのではないでしょうか

『そうだぜ～、まゆっち一発アタックしとけって』

そうですね、松風

流川さんみたいな優しい人と友達になれれば大きな一歩です
き、き、き、緊張しますが、めざせ友達１００人

「黛由紀江、参ります」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

あー、なんか昨日の熱も冷めてみると、今日学校行きたくねえな
後悔はしてないけどさ

なんで、眼鏡踏み潰したりしたかなー
結局、新しいの買ったしさー
うむ、あれだな。その場のノリって恐ろしい

ん！？後ろからの気配
俺は咄嗟に振り向き、襲ってくるであろう武器を止めようとした
だが、そこには

「あわーーーっ」

倒れこんでくる少女が。

俺は状況がよく飲み込めないまま、真剣白刃どりをしようとしていた手を
その少女の肩に添うような形に急遽変更した
そして、なるべく衝撃を与えないようにふわりと受け止める

俺は無事を確認するために腕に抱いた少女を覗き込むと、相手も状況を確
認しようとしたようで、目があった
その刹那、ボンッと音が聞こえそうなくらい顔が赤くなった

「あああ、あのですね、これはあの、こ、転んでしまって、決して悪気
とか、迷惑かけようとか思っていなくてですね、その」

な、なんだ、すごい早口でまくし立てられた

一応、昨日である程度、吹っ切れたとはいえ、初対面の人物には警戒をし
なくちゃいけないと考えていたのだが
この子から滲み出る守ってあげたいオーラはなんだ
思わずペットのジロを…
だから、飼ってないっつーに

「まあ、落ち着け」

ぽん、と軽く頭に手を置く
少女はそれによって、自分の存在する位置を再認識すると…

凄まじい速度で距離をとった
あ、めちゃくちゃ強いぞ、この子

「ど、どうしましょう、松風。いきなり先輩に無礼を」

「おー、落ち着くんだ、まゆっち。ここでチャンスを逃したら、次はいつ
来るかわからねぇ」

「そ、そうですね、ここが踏ん張り時です」

なんか馬のストラップと喋ってるぞ
お人形さん遊びみたいなもんか？

「その子なに？」

「え、はい、松風といいます」

「へえ、松風」

「おー、なんだか、オラの存在がナチュラルに認められてるぜ」

「あの、驚かないんですか？」

「君が松風って言ったら、そいつは松風なんだろ」

「おー、コイツすげぇいい奴じゃん、オラ気に入ったぜ」

「あの、ありがとうございます」

「おう？」

「つーか、まゆっち。オラの紹介より自分の紹介しなくちゃ」

「そ、そうでした、コホン」

咳払いをすると、いきなり怖い顔になった
怖いっていうよりかは、引きつったような

「私、黛由紀江と申します。友達の多い先輩に不躾なお願いかとは思いま
すが、私とお友達になってくださいませんか！」

「は？」

「うぅ、すみません、ごめんなさい、やっぱり」

「いや、そうじゃなくて！」

俺が断ると思ったのか、両目のダムが今にも決壊しそうだ
ホントに小動物みたいだな

この子を見てると、ペットの…
もうええっつーの
違う、天丼やってる場合じゃねーよ

「俺、友達なんて1人もいないけど…」

「え！てっきり、先輩は優しいから、多いものだと、すみません」

「いや、気にしてないし、全然いいんだけど」

「じゃ、じゃあ友達とかはいらないんですか」

わざわざ面識のない俺にこんなことを言い出すなんて、この子は友達があまり出来ないのだろう

容姿は悪いわけじゃないし、さっき感じた強さが原因ってとこか

そして、俺のことを優しいと勘違いする始末

先が思いやられる子だな

今もすごい不安そうな顔で俺の答えを待ってるし

本当にどうしようか

友達ってことは深入りされることも多くなる

それだけは、今でも越えちゃいけないラインだ

俺の過去を知られないためにも…

この子を傷つけたくはない

せめて、相手から引いてもらおう

「俺を優しいと思ってるみたいだけど、それは違うぜ」

「え？」

「それは君が俺の一つの側面をたまたまよく捉えているだけだ」

「・・・・・」

「俺はクラスの中で忌み嫌われているし、誰とも話さない人間だ。俺の席
は避けられて、クラスの中での位置づけは陰気で根暗、消極てｋ…」

「それでも！」

いきなり大きな声で遮られる

「それでも私が見た流川さんは優しかったです！人を思いやる“礼”の心
流川さんのそれは嘘には見えませんでした！私は私が見た流川さんを信じ
ています。流川さんの自己評価がどうであろうと、周りの人がどう思って
いようと、私は流川さんとお友達になりたいんです！！」

「は……」

「あ、ご、ごめんなさい、私つい取り乱してしまって」

真剣で驚いてしまった

話した印象からも挙動からも強く来る子ではないと思っていた
相手の言うことにも付和雷同する子だとも感じた
だから、すぐに引き下がってくれると。

でも、自己紹介のときの声量からは考えられない大声で、俺が言った全て
を否定された、自分の信念を持っていた

駄目だ、こりゃ
ますます傷つけたくないんだが
これじゃ、相手に引き下がらせるのは無理か

…仕方ない

「悪いな」

「あ…、べ、別にいいんです。最初から無茶なお願いをしているのはこち
らの方ですから、流川さんが謝ることなんて」

「そんな他人行儀な奴とは友達になれないよ、由紀江」

「え…」

だから、もう覚悟を決めた

傷つけないことは逃げることではない
ばれないように隠し通せばいいだけのこと。

そんくらいのリスク背負い込んでやらあ
多少のハンデがあったほうが面白いしな
それに…

「分かったか？由紀江」

「はい！よろしくお願いします、海斗さん」

さっきのぎこちない顔はどこへやら。
こんな笑顔を見れるなら、悪い気はしないな

13話　「まゆっち推参」（後書き）

ありがとうございました
今回何が一番難しかったって、松風です、松風
もう今のうちに言っておきますが、あれ、松風いないぞとかいうことに
なったら、それは忘れてるのではなく、書けないのです
そして、照れってどう書けばいいんでしょうね
そんな感じでまゆっちとお友達になりました

１４話　「必然の変化」（前書き）

まだまだ続くよ、日常編
ということで、あのタッグマッチから一日ですね
どうぞです

１４話　「必然の変化」

よし、状況を整理しようか
大体予想はしていたし、それなりに覚悟もしてきたけどよ…

「ねえ、流川君、眼鏡とってよー」

「おい、お前川神さんに気があるんじゃねーだろうな」

「あの手錠って、どこで買ったの？ハンズ？」

「君にはＭの素質がある我が殴られ部に来ないか」

「てか、ホントに昨日の怪我はだいじょぶなの？」

「はーい、流川の真似しまーす、“努力し続けんのが天才なんだよ”」

「コロッケ食べる？」

「お前、やっぱ見た目どおりずるいよなー、あの勝ち方はねえわ」

「なんで新しい眼鏡なんて買っちゃうのー、無い方が絶対いいって」

「流川って、日本語しゃべれたんだなー」

これは流石にねえだろうが！！

なんだ、こいつら
本当に昨日まで同じクラスに在籍していた奴らか？

だから、嫌だったんだよ、目立つのは
途端に馴れ馴れしくしやがる
今まで、厄介者として、邪険に扱ってきやがったくせに

「お前ら、うっとうしいんだよ、散りやがれ。コロッケはもらう」

サクサクのコロッケをもらって、しっしと追い払う
うむ、話せるようになったのもでかいな
口撃が出来るようになった、一応収穫か

クラスメイトは“なんだよ”だの、“やっぱ変わってねえじゃん”だの、
果ては舌打ちまでする始末だった

やはり、昨日の俺を見て、多少話しかけ易いと思ったが、根本での評価は
そう簡単には変わっていないんだな
結局、俺の立ち位置は無口な陰気ヤローから、話はするがとっつき辛い面
倒くさいヤローになっただけだ

これは助かった、俺だって誰彼構わずに仲良くするのは御免だ

しかも、こいつらは好意なんかじゃなくて、単なる好奇心で動いている

別にこいつらを最低だと責めはしない
人間誰しもこんなもんだし、ある意味人間らしい

俺にとっちゃ、一子や由紀江の方がよっぽどイレギュラーだ
あんな簡単に意志をねじ曲げられちまうんだもんな

「おはよー、海斗」

「ああ、おはよう」

噂をすれば影とは、よく言ったもので、一子が登校してきた

「あれ？眼鏡かけてる」

「ああ、昨日壊しちまったから、新しく買った」

「そうなんだ…」

「ん？どうかしたか」

「いや、ただ眼鏡かけてない方が海斗らしいなーと思って」

「・・・・・・」

なんで、こいつはホントに人の決定を曲げるのだろうか
俺は眼鏡を外して、窓の外に放り投げた
あばよ、特価１６８０円の二代目
先代の後を追ってこい

「え、いいの、高かったんじゃ…」

「いやいい、どうせ勝ち取ったものだし」

「勝ち取った？」

「気にすんな」

まさか、露天商と賭け勝負して、強奪したとは言うまい

Ｓｉｄｅ　大和

「どう思う？」

俺は岳人とモロに些かの希望をたくして、状況を問うてみる

「どう思うも何も完全にアレだろ」

「ていうか、アレなのは、大和が一番よく分かってるでしょ」

「だよなー」

最早、今となっては、他の可能性を探ることは現実逃避なのかもしれない
そう、昨日の秘密基地で恐れていたことはほぼ確定事項となった

～

「ワン子、優勝おめでとう」

「よくやったな、ワン子」

「すごかったよ、おめでとう」

基地には俺、岳人、モロが集まって、ワン子の祝勝会を開いている
色々驚くことがあったが、とりあえずはワン子を祝ってやろうということ
になった
何せ、これでワン子と流川のペアも解消なのだから

「みんな、ありがとう。でも、今日の勝利は私の手柄って言うより、海斗
の力だわ、悔しいけどね」

「ブッ」

「うわ、汚っ」

俺は飲み物こそ吐き出さなかったが、その表情は驚きを隠せていなかった
と思う
それは素直に飲み物を吐き出すという形で表した岳人も、つい反射的にツ
ッコミをしたモロにしても、同じことだろう

「ワン子、今“海斗”って、言わなかったか」

「言ったわよ、流川海斗だもん、おかしくないわよ」

「いや、そうじゃなくてだな」

「なんで名前で呼んでるのさ」

「だって、海斗がそう呼んでいいって…」

ニヘヘと表情を崩す
俺たちは顔を見合わせた

「でも、そういうのって、親密な関係の間で行われるものだろ」

「親密な関係…」

言葉は尻すぼみになっていき、へにゃりと紅潮した顔が緩む

「おい…」

「待て岳人、何も言うな」

「完全にそうだね」

……

「それでね“男が女を守るのは当然だ”って言われてね…」

この後も延々とワン子の自慢話が続いたが、ワン子があまりにも嬉しそうに
話しているので、誰も中断できないでいた
俺たちは精神的な疲労困憊の中で同じことを考えていただろう
“真剣で恋している”と

～

「はあ、どうしようもないよな」

俺に続いて、二人の口からも溜息が漏れる

あいつは真っ直ぐな奴だから
もう何を言っても無駄だろう

今だって流川と話しているだけで、花が咲いたような笑顔を浮かべていた

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「おいそろそろ、教師が来るぞ。席戻っとけ」

「分かったわ、またね」

そう言って、一子は自分の席に戻っていく

俺の日常は間違いなく変わった
それが良いことか悪いこと、どちらに転がるかは分からない
全ては自分しだいだ

これからは衝動のままに…

障害は叩き潰してやるよ

節度は守ろう、うん

１４話　「必然の変化」（後書き）

ありがとうございます
はい、もうなんか完全にワン子があれですね
それを見るファミリー男性陣…
あの立場には立ちたくないです（笑
こんな感じでまだまだダラダラいきます

１５話　「恋と食事と友達と　前編」（前書き）

今回なんと前後編に分かれてしまいました
日常編でこうなるとは…
なので、若干短いですが、どうぞ

15話　「恋と食事と友達と　前編」

朝こそ大変だったが、今は静かなもんだ
露骨に俺の机を迂回してくような奴は流石にいなくなったが、基本は昨日
までと何も変わっていない
休み時間には本を読んでいるし、わざわざ机に寄ってきて話しかけてくる
輩もいない

こんな空間もいいかもな
今までは嫌悪がこもった視線なんて、慣れていて、いちいち気にも留めて
いなかったが、ないならないで案外気持ちの良いものだ
俺って、意外に人間的なところがまだあるのかもな…

ははは、俺が人間的なんて悪い冗談だ

んー、本の進みも速い
印象アップ様々だな

おっと、集中してたら、もう昼か
そう思って、再び本の続きに目を戻すと、そこに影が落ちた

「か～いとっ」

その正体を確かめるべく、顔を上げる

いや、そう俺を呼ぶ奴なんて1人しかいないんだが

「なんだ、一子」

「一緒に学食いきましょ」

「あー、悪い、俺、金持ってないんだわ」

「え、じゃあお弁当なの？」

「いんや」

「え！？じゃあ、お昼ご飯どうするのよ」

「どうするも何も、食わないが」

「うぅぅ…」

俺がその旨を説明すると、一子は目を伏せて、うなり始めた

はあ、まったくこいつは1人で飯を食うのが、未だに寂しいとか抜かしや
がるのか？そうなのか？そのくらい独り立ちするべきだろ

「俺は食わないが、学食に着いて行ってやるくらいなら構わんぞ」

「え？」

「そこで読書しても、変わらないからな」

なのに、こんなことを言ってしまう辺り、俺も大概甘いんだろう

ホントに一喜一憂を体全体で表すから、犬みたいだ
こんな小動物系の仕草で懇願されたら、断れる奴はそういないだろう
ましてや、動物好きの奴なんかには効果覿面だな。ん?それって俺かお得なステータス持ってんなー、まったく

「ありがと、海斗」

「いいってことよ」

「じゃ、行きましょ」

一子に後ろから押されて、食堂へ向かった

Ｓｉｄｅ　大和

「大和ぉー」

「岳人、気持ちは察するが落ち着け」

そうだ、ワン子は昼飯はよく岳人と一緒にとっていた
それが、今日になった途端、これだ

それだけなら、まだよかったのかもしれない
ワン子が去り際に放った一言が岳人の心臓に深々と突き刺さったらしい

“今までありがとね、ガクト”

硬直する岳人に俺とモロは何も声をかけることが出来なかった
哀愁漂うＢＧＭが空で聞こえてきそうだ

なんか、嫁いで親元を離れていく娘ってこんな感じなのかな
見事なハートブレイクを決めていった

恋する娘は恐ろしい

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

食堂というのは初めて来たが、案外綺麗なもんだ
まあ、食事処が不衛生ってのもおかしな話か

「本当に何も食べないの？お金なら貸すわよ」

「いや、返せる保障がないからな」

「なんだったら、別にご馳走してあげるわよ」

「いや、いい。借りはできれば、作りたくない」

「借りなんて、気にしなくていいのに…」

「俺は一子とは対等でいたいんだよ」

「え…！あ、うん…」

「ん？」

「あ、アタシ、食券買ってくるわ」

そう言い残して、一子は逃げるように去っていった
どうしたっていうんだ

Ｓｉｄｅ　一子

火照る顔を抑えながら、券売機に並ぶ

さっきの海斗の言葉が頭の中で反響する
それはどんな他の音よりも心地よかったけど、同じくらいに恥ずかしさで胸
が締め付けられた

海斗と一緒にいるといつもそうだわ

今日だって、お昼に誘うだけなのにすごく勇気をふりしぼった
ガクトを誘うときは一緒に食べたいから誘う、ただそれだけだった

海斗だって、理由はかわらないはずなのに、どきどきした
苦しいんだけど、満たされた感じになる

これが何かは分からない
ううん、今までは知らなかっただけ

確証も根拠もそんなもの何もない
経験だってないから、答え合わせもできない
でも、自信をもって断言できる、今のアタシなら
この気持ちが“恋”っていうんだって

―アタシは真剣で海斗に恋をしているんだって

認めてしまうと体がすっと軽くなった気がした
さっきはコントロールできなくて、強張っていた顔も、自然と笑顔になる
顔の火照りもとれると、早く海斗のところに戻りたいと思った

これもアタシの素直な気持ち…

深く考えるとまた顔が熱くなっちゃいそうだったから、アタシは順番を待
ちながら、何を食べるかを決めとくことにした

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

一子は食券を買いに行ってしまった
仕方ない、本でも読んでるか

「あの…」

「？」

誰かに呼ばれた気がした
そう思い、正面に視線を向ける

15話　「恋と食事と友達と　前編」（後書き）

ありがとうございました
ワン子が自覚してしまいました、はい
まずは一人目ですね
今回は最後がぶつ切りとなっていますが、明日この続きから投稿するので、お願いします

１６話　「恋と食事と友達と　後編」（前書き）

前回の続きです
というか、昨日ですね
忘れてしまった方は前回の最後からどうぞ
いきなり、始まります

16話　「恋と食事と友達と　後編」

「あ、やはり海斗さんでした」

「おー、由紀江か」

「はう」

「はう、って…」

「オイオイ、察してやれよー、まゆっちは友達すらいなかったんだぜ、ましてや、名前呼ばれることなんて慣れてないっていう次元じゃねえよー」

「でもま、これから嫌でも慣れなきゃな、由紀江」

「うぅ、はい」

「由紀江もここにいるってことは、学食か」

「はい、たまには学校のご飯も食べようと思いまして。“も”ってことは
海斗さんもここでお昼ですか？」

「いーや」

「え、じゃあお弁当なんですか？」

「いや、金がなくてな、昼は抜いてる」

「そ、それは…あれ、では何故ここに？」

「あー、それはクラスメイトの付き添いだ」

「そ、そうなんですか。あの、ご一緒してもよろしいですか」

「ああ、いいぞ」

由紀江が俺の前の席に腰を下ろす
一子もこのくらいでどうこう言う奴でもないだろう

「海斗さん、実はご報告がありまして」

「お、なんだ？」

「私、クラスの子とお友達になれました」

「へぇ、やったな」

「はい、伊予ちゃんって言うんですけど、頑張って話しかけてみたら、お
友達になってもらえたんです、これも海斗さんのおかげです」

「いや、そこに俺は関係ないだろ」

「いえ、海斗さんが私とお友達になってくれたので、勇気が出せた

んです
海斗さんが優しくしてくれたから」

「由紀江がそう思ってくれるのは嬉しいけど、本当に俺なんて優しくもな
んともないぜ、数歩でも歩けば、俺より優しい人なんてすぐ見つかる」

「私の中では海斗さんが一番です」

まあ、困った
思い込みっていうのは怖い
どう間違ったら、俺を優しいなんて思うのだろうか
俺は…

「え？まゆっち？」

「あ、一子さん」

どうやら一子が戻ってきたようだ
それにしても、これは知り合いか？

「なんで、まゆっちがいるの？」

「あ、私は海斗さんに許可を頂きまして…」

「“海斗さん”！？」

「ひ！」

いきなり一子が大きな声を出した
由紀江もびっくりしちゃってるし

でも、これは知り合いってことで、間違いなさそうだな

「2人はどういう関係なんだ？」

「あ、私は一子さんたちの風間ファミリーに入れてもらって」

風間ファミリー？
え、なに、ファミリーって、マフィアかなんかか
そんな危ないとこに所属してんの？
それとも何、欽ちゃんファミリー的なとこなの
フレンドリーって解釈でオーケー？

「風間さんという方がリーダーの遊びグループのようなものです」

俺が悩みの狭間に陥っているのを、表情で読み取ってくれたのか、
由紀江
が補足説明をしてくれる

うん、ええ子や

というか、由紀江は友達いたんじゃねえか
まあ、でも仲良しグループに入っていくと、なかなか馴染めなかったり、
するからな
一編に多く友達が出来るといえば、聞こえはいいが、実際問題、1人の人
と親密になる難易度は普通より高いだろう
それにあの性格じゃただでさえ、入っていけそうにないもんな

「ま、待って、海斗。それは今どうでもいいわ」

いや、どうでもよくはないだろ

てか、今まで黙ってたと思ったら、いきなり何だ
ちょっと過呼吸じゃないか

「なんで、まゆっちは海斗さんだなんて、親しげに呼んでいるの」

「あー、それは今日の朝、由紀江が」

「“由紀江”！？」

もうええっつーねん

「か、一子さん、それはですね、海斗さんが今日の朝、お友達になってくださいまして…」

「え、友達？」

「はい、それで一緒に座るのを、お願いしたんですが、迷惑でしょうか」

「い、いや、そんなことはないわ、そう、友達ね。…ふぅ」

なんだか、よく分からないが解決したらしい

そして、俺の席の隣に座り、食事を始めた

由紀江はそば、ワン子はおそらく定食のようなものを食べていた

「海斗さんは本当に食べないんですか」

「ああ」

「でも、お腹すくんじゃない」

「夜に目一杯食ってるから大丈夫だ」

「え、もしかして海斗さんは毎日そうなんですか？」

「そうだが？」

「そ、そうなんですか……」

「それでもやっぱり、お昼は食べた方がいいわよ。ほら、アタシのおしん
こあげるわよ」

「いや、これお前、好きだから残しといたんだろ。食えって」

「ア、アタシ、実は漬物苦手なのよね」

なら、そんなに涙目になんなっつーの
好物を人にあげるなんて、よく分からんやっちゃな
まあ、断っても永遠と言ってきそうだし
ありがたくもらうか

「じゃあ、もらうわ。あー」

「え！！」

なんか顔を真っ赤にして、驚いている
一体どうしたって、言うんだ
俺の後ろに面白い奴でもいんのか
俺もかなり見たい

いい加減、口開けてんのも疲れてきたんだが

「え、海斗さん！？」

「おい、一子くれるなら、早くくれ」

「あ、わわわ、分かったわ」

しかし、一子は漬物を見たまま固まっている
ったく、くれるって言ったしな

「もう、もらうぞ」

「あ…」

一子の手から箸を頂戴して、漬物を口に放り込んだ

うん、美味い。
空腹は最高のスパイスというが、人からもらったというのも結構なスパイ
スだな、とか思ったりしてみる

「むむむ…」

何をそんなに不機嫌な顔をしている

「サンキュ、ほら箸返すわ」

「え、お箸…」

また、みるみる顔が赤くなっていく

さっきから、よく赤くなったり、戻ったり…

もう3分経ってしまったのか、そりゃ光の国に帰りたくなるわ

「かかか、間接k……」

「海斗さんはお昼は食べない……」

色々騒がしかったが、楽しい食事だった

なんか呟いてる2人に一言ことわって、俺は食堂を後にした

・・・・・・・

「おい、流川海斗だな」

…ほーんと、楽しい食事だったなあ

16話　「恋と食事と友達と　後編」（後書き）

ありがとうございました
いやー、さすがの鈍感ぶり
物もらうときに口開ける人なんているんでしょうか、いないです。
そして、何やら不穏な空気が…

17話　「人間万事塞翁が馬」（前書き）

今までのなかで、一番長くなってしまいました
いやー、きりのいいとこまで進んでいたら、大幅オーバーです
ちなみに一行全部・・・・・みたいなのは場面転換です
これからもちょいちょい使うと思いますので、よろしくお願いします

17話　「人間万事塞翁が馬」

えー、この世には“塞翁が馬”という言葉がある
馬が逃げたり、足を怪我したり、うんたらかんたらのアレだ
良いことがあったら、悪いことがあると。

でも、そんなことないと言う人が大半だろう
悪いことばっかだと。

それは悪いことばっか覚えてるからだ
良いことも人は勿論覚えているが、何故か悪いことの記憶の方が色濃いな
んてことはよくあることで、結果、そんな風に思ってしまうのだ
人間っていうのはつくづく不便にできている

いや、そんなことはどうでもいいんだ
俺はさっきまで、楽しい時間を過ごしていた
久しぶりの人との食事だった

まあ、結局俺が何を言いたいかというと…

「お前が流川海斗だな」

今、俺には不幸の順番がまわってきたらしい

・・・・・・・・・・・・・・

目の前に女が立っている
見たところ先輩だとか、それって制服かとかはどうでもいい
こいつ、かなりデカイ気を持ってやがる

「俺はあんたのこと、知らないんだが」

「ほう、先輩にその口の利きかたとは、それに私のことを知らないと」

「なんだ、自分が有名人だとでも言うつもりか」

「フフフ…」

はあ、よく分からん

何故、俺に話しかけてきたのか
何故、俺の名前を知っていたのか
何故、そこで不敵に笑うのか

分からないことだらけだが、それでも分かることもある
こいつには関わらない方が吉ってことだ

俺はそのまま横を素通りする

次の瞬間、俺は思わず、頭を左にずらす

「ほう、今のをかわすことが出来るのか」

俺の頭があった位置に拳があった
というか、とっさのことだったので、回避行動をとってしまった
失敗したな

「弱い奴は、守りと避けが出来ないと生きていけねえんだよ」

そう言い訳をしておく

「なら、あのメイドとの戦いで見せた微動の回避はどう説明する」

ばれてたか

いくら、小さい動きとはいえ、攻撃の威力を受け流す動作だ
攻撃している相手に悟られないように工夫することはできるが、流石に客
席全方向となると、つわものには見切られてしまうだろう

「なんだそれ、もしそう見えたんなら、体が勝手に相手から逃げようとし

てたんだろ、何回殴られたか分かったもんじゃないからな」

いわゆるオート回避って奴だ
本当にそんなの実装してたら、ヌルゲーだな

「お前、何故隠している」

こいつ、人の話きいてんのか…

何故かだって?そんなの決まっている
もうあんな退屈は嫌だからだ

「本当に疑り深いな、そんなに俺が強そうに見えるか?」

「いや、見えない。というか、気も感じられないしな。だからこそ、その
弱いお前が、強敵を打ち破ったからこそ興味がある」

「あんな勝負は…」

「汚いと言ってしまえばそれまでだ。だが、それでもお前は勝利した。そ
れに決勝の相手は汚い手を使ったって、勝てるかどうかの相手だった」

うむ、困った
もう目立つことに関しては、ある程度吹っ切れたとこがあったが、
戦闘が
できると思われるのはなー

「まあ、勘ぐるのはいいが、ガッカリするのが目に見えてるぜ」

なので、もうこれ以上の否定はやめておいた
適当に一言を残し、その場所から去った

今度は拳は飛んでこなかった
代わりに後ろからは薄ら寒い笑い声が聞こえていた

・・・・・・・・・

ふふふ、この世には“塞翁が馬”という言葉がある
立派な馬が来たり、戦争に行かなくて済んだり、うんたらかんたらのアレだ
悪いことがあったら、良いことがあると。

でも、そんなことないという人が大半だろう
悪いことばっかだと。

それは悪いことのダメージが大きいからだ

良いことがあっても、その後の悪いことというのは結構堪える
逆に悪いことがあったら、後に良いことがあっても、尾をひいて、
素直に
喜べないなんてのはよくあることで、結果、そんな風に感じてしまう
人間っていうのはつくづく面倒なもんだ

いや、そんなことはどうでもいいんだ
俺はさっき、変な女に捕まって、問い詰められた
正直、色々な意味で危険だった

まあ、結局俺が何を言いたいかというと…

「ありがとうございましたー、またどうぞー」

現在、俺は幸せの真っ只中らしい

「僥倖、僥倖」

見慣れない屋台があったので、ためしに寄ってみた
クレープかなんかだろうと、結論づけていたが、嬉しい誤算だった

その屋台は珍しく、動物ビスケットなるものを売っていた
なんか沢山の動物の形を模したビスケットが袋詰めになっている
思わず、2袋も買ってしまった
その片方は左ポケットに突っ込み、残りの袋のリボンを解く
そして、羊を口に放り込む

「うむ、美味い」

動物の種類ごとに1つずつ残しておこうかなどと考えつつ、歩いていると
前方にコンビニが見えてきた

ちょうどいい、今日の晩飯でも買っておくか
そう思い、歩を進めると人の集団が視界に入った

はあ、またか
場所はコンビニの入り口の真正面
集まっているのは、町の不良たち
いわゆる、たむろっているというやつだ

今日は機嫌が良いからな
いつも通り、相手をしてやろう

ていうか、そんなとこに突っ立ってられると通れねえんだよ
考えりゃ分かるだろうが
いつもは空気読んで、もうちょい隅の方に居座ってんのによ
なんで今日は入り口に向かって立ってんだよ
どうした?遅れてきた反抗期か

俺はビスケットを片手に不良の1人の肩をちょいちょいとつつく

「あ?なんだ、てめぇ」

「そこにいると、通れないんだよ。邪魔だ、どけ」

「お前、えらいデカイ態度とってんなあ」

「なんで逆に、お前らに下手にでなきゃいけないんだ」

「てめぇ、戦力差わかってんのか？」

「５対１ってとこだろ」

目に見える形ではな
そう心の中で付け足しておく

「ほう、数が数えられねぇ馬鹿かと思ったが、戦力差が分かったうえで突
っこんでくるような大馬鹿だとは思わなかっ……」

ドサッと音を立てて、不良が崩れ落ちる
首に手刀を当てただけでこれだ
人間ってのはこんなにも脆い

「野郎、てめぇ！」

今度は俺に明確な敵意をもって、４人が次々と飛び掛ってくる

それを俺は受け流し、確実に1人ずつ手刀を決めていく

そして、わずか数秒後…
周りには意識を刈り取られた不良が5人地面に倒れ伏していた

終わった終わった
いい運動になったとコンビニに足を向けようとすると、動けなくなった
いや、倒れている不良が足を掴んできたとか、そんな胸熱展開ではない

そこには少女がいた
ああ、だから、こいつらコンビニの入り口になんか向かってたわけだ
視線の先にいたのはこの少女ってことか

いや、今までも絡まれている少女や女性を助けることがなかったわけじゃ
ない
むしろ、そんなケースは多いくらいだ

今、話し合うべき論点はそこではない

問題なのは、少女が川神学園の制服を着ているということだ
見たところ、一年生だろうか

やばい、口止めしないと
そう思い、声をかけようとしたら、相手が先に口を開いた

「あ…あ…あり……」

声が震えている
それもそうだろう
こんな少女が男5人に囲まれたのだ
怖くないはずがない

そんな子に俺は口止めだなんて…
自分のことしか考えてないのか
大体、そんなもの言うなというほうが怪しいだろう
俺は口止めをやめて、左ポケットに手を突っ込んだ

「ほら、これやるから、食え」

そう言い、動物ビスケットを渡す
ちょっと相手の顔に笑みが見えた

「じゃあな」

「あ…」

そして、その場を去った
晩飯を買いそびれたが仕方ないだろう

Ｓｉｄｅ　伊予

野球雑誌を立ち読みしてたら、すっかり日が暮れちゃって、帰ろうと思っ
たら、柄の悪い人たちに囲まれた

いきなりのことで驚いて、声もあげられなかった

そんな硬直する私を助けてくれた男の人
一瞬の出来事だったけど、不良を全員倒しちゃった

…確か、名前は流川先輩
タッグマッチで優勝したちょっとした有名人
あのときは全然そんな素振りは見せなかったのに、こんなに強かったんだ

私はすぐにお礼を言おうとした
だけど、声が震えて、上手く言葉にならなかった

そんな私を見て、動物のビスケットをくれた
微笑んでそんな可愛らしいものを出す先輩がさっきの強い先輩と違いすぎ
てて、ちょっと面白かった

そしたら、くれるだけくれて、何も言わずに行っちゃった
本当に何を考えているんだろう

「優しいな…」

ビスケットを一口かじった
とてもとても甘い味がした

17話　「人間万事塞翁が馬」（後書き）

ありがとうございます
正直、絡まれている子は誰でも良かったんですがね
とりあえず、武力を持っていない伊予ちゃんで
学校以外の素の海斗はこんな感じですかね
そして、日常編はいつまで続くのか…イベントどうしよう

18話　「ヒーローの噂」（前書き）

前回はある意味、新しい一面が見えたと思いますが
今回はちょっとした変化が…

18話　「ヒーローの噂」

「ねえ、まゆっち」

「なんですか、伊予ちゃん」

「えっとさ、昨日ね…」

「え？なに、何の話してんの？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

はあ、遅刻した、完璧に

まあ、なんで平日の朝っぱらから迷子なんているかね

かといって、放っておくのは無理だった

この年で独りなのは、不安だろう

そうだ、独りはな…

そんなこんなで遅れてしまった

とはいっても、さっきのチャイムからすると、一時限目がさっき終わった

というところだろうか

そして、２－Ｆの前に行くと、何人かの生徒が入り口から中を覗き込んで
いた、見たことない顔だな
まあ、でも通り道にいるわけだし…

「ちょっと通してくれるか」

仕方がないので、そう断る
すると、その子たちはこちらを振り向き、俺の顔を見るなり、びっくりし
たような顔をして、一目散に逃げ出してしまった

「あれが、噂の流川先輩じゃない？」

「そうだよ、あのタッグマッチのときの人だもん」

「顔もかっこよくなかった？」

離れたところで何か話しているようだが、聞こえないし興味もないなんか、俺をちらちら見てくるので、気にならないと言ったら、嘘になる

「あれ、なんで一年生がこんなとこにいんだ？」

そんな声が耳に入った
なるほど、見たことないはずだ

気持ちを切り替えて、教室に入る

ん、若干クラスがざわついたのは気のせいか？
別にあれから好かれるような真似こそしていないが、特別嫌われるような
こともしていないと思ったのだが…

というか、視線を感じる
誰だと思い、そちらに目を向けると、あろうことか一子がすごい形相で俺
のことを睨んでいた
え？俺まじで何かしたか

疑問に思いつつも自分の席につく
そして、いつものように机に常備されている本でも取り出そうとしたとき
違和感を感じた
明らかに本の感触ではないソレを取り出してみた

…これは手紙？

これはあれか
都市伝説であると思っていたが、本当にあるんだな
不幸の手紙…

いや、そりゃ恨みを買う覚えは腐るほどあるが、こいつの餌食になろうと

は、思いもしなかったな
これって、やっぱりコピー機とか使ったらノーカンなんだろうか
カーボン紙とかは意外にセーフだったりすんじゃねえか

いや、待て
誰が従来のタイプだと同じだと決め付けた
もしかしたら、同じ文面ではなく、一語ずつ加えていきなさいという指令
が付加されているかもしれない
そしたら、後になるにつれて、労力は増えていくじゃねえか
やられたぜ…

うむ、随分と可愛らしい不幸の手紙だ
水色の封筒にハートのシールで止めてある
外見と中身の落差を激しくすることでダメージをより確実にしようという
魂胆か、今時のは進化しているな

封筒を開ける前に机の上に落としてみる
金属的な音はせず、パサッという軽い音だけが聞こえた
紛れもなく普通の紙だ
刃物の類は仕掛けられていないらしい

確認したところで開封し、手紙を読む

“流川先輩をタッグマッチのときに見て、とても惹かれました。
守りながら戦う姿はとても素敵でした。
また先輩がイベントに出るようなことがあれば、
絶対見に行きます。
かっこいい先輩の姿を期待しています。

また、お手紙出させてください。”

……は？

あれ、これって宛て先間違えてないか

いや、俺の名前書いてあんだけども。

これって、いわゆるファンレターっていうやつだよな

わけが分かんなくなってきた

俺なんて明らかにファンレターもらう奴じゃないだろ

しかもいきなり…

ん？もしかして、昨日のがバレたのか

いや、だが、たとえそうだとしても、俺が倒したなんてことにはならないか

大方、体を張って、守ったとか、浮かぶのはそのビジョンだろう

あの子の信用性は分からんが、その話は非現実的すぎる

深く考えるのはよそう

お！

ふと、手紙の下の方に目をやると、便箋に動物の猫がプリントされていた

こんなのがあんのか、いいな～

猫を見て、和みつつ、自然と笑顔になった

Ｓｉｄｅ　一子

今日の朝、登校すると、一年生の女の子が海斗宛に手紙を持ってきたよう

だった
なんか、気に入らないわ

海斗は結局遅刻してきて、アタシはつい睨みつけてしまった
そして、海斗が机の中の手紙を見つけて、読み始めた

今は手紙を眺めて、なんか笑っている
そんなに下級生からの手紙が嬉しいのかしら

なんか、海斗の笑顔を見てるのに、いらいらしてきた
いつもは海斗が笑顔だと嬉しいはずなのに

なんで、アタシばっかり振り回されるんだろう
よし、決めた！
今日はもう相手にしてあげないことにしよう

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　大和

「なんで、あんな奴がもてるんだ…」

ガクトの悲痛な叫びが聞こえてくる
いくら年下には興味がないガクトでも、野郎が女の子にもてているのは、

どんな状況であろうと、気に食わないようだ

そもそも、ことの始まりは今日の朝
いきなり見た目は可愛い1年生がやってきた
その手には手紙を持っており、明らかに飢えた男子たちの目は光っていた
そして、1人の男が突入していったが、返された言葉は

“すみません、流川海斗先輩の席ってどこですか?”

期待していた男子が一掃された
その1年生が頬を染めて、聞くものだから、男子たちは戦闘不能となった
まさに撃沈である

「あいつがなんで手紙なんてもらえるんだよ」

「いや、それがまゆっちに聞いた話だとな、流川は1年生の間じゃ、結構
人気があるらしいぞ」

「は!?」

まあ、言われてみればおかしくはない
容姿は普通に良いし、何よりそれまでの流川を知らない1年生にとっては
あのタッグマッチでワン子のために戦う姿こそが第一印象なのだ
条件は十分だろう

そして、今日の朝から1年生の間で急速に広まっている噂
“流川先輩が不良から1年の女子を救ったらしい”
それがきっかけとなったのだろう
タッグマッチで興味を持っていた女の子たちが、教室を見に来たり、手紙
を出したりという行動に出たわけだ
ワン子は前途多難だな…
あと、まゆっちは大丈夫なのだろうか
Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
ふぁーあ、なんか驚きもあったが、ぼーっとしてたら、昼休みだ
一子はなんか今日は終始不機嫌だ
今ももう教室にはいない
俺、ほんとに何かしたか？
そこへ教室のドアが開く音がした
「か、海斗さん」

そこに立っていたのはよく知る一年生
由紀江だった

手は前に組んで…ん？
何か包みを持っている

「わ、私、お弁当を作ってきたので一緒に食べませんか？」

「へ？」

一日はまだ長い

18話　「ヒーローの噂」（後書き）

ありがとうございました
いや～、同級生にはそんなに歓迎されてませんが、
一年生には人気と。いますよね、年下に人気の人とか
ワン子はこんな風にすねるキャラでもないかなと思ったりしたのですが
まあ、大目に見てください
そして、次回はまゆっち！（松風はおそらくお休み）

19話　「暖かなひだまり」（前書き）

今回は前回の最後からも分かると思いますが
まゆっち回です
少し、短めですが（それはいつもですね
どうぞ

１９話　「暖かなひだまり」

Ｓｉｄｅ　由紀江

昨日は海斗さんに昼を食べてないということを確認しました
これはチャンスなのではないでしょうか
海斗さんにお友達として、お弁当を作っていきましょう

海斗さん…

お友達になってくださいとお願いしたら、いきなり名前で呼ばれて、
他人
行儀になるなって、私の緊張を解いてくれました

本当に優しい…

思いやりのある人です
本当に私はお友達として、お弁当を作るのでしょうか
最近、そんな自信もなくなってきました

海斗さんと一緒にいたいという気持ちは本当です
でも、それは友達としてというよりは…

学校に行くと、伊予ちゃんが私に話があるそうです
それは海斗さんに悪い人たちから守ってもらったというものでした

海斗さんは自分が優しくないと言い張りますが、やっぱり海斗さんは誰よ
りも優しいです
偽りなんかではなく、心の奥底から滲み出る優しさ
そんな暖かいものを持っています

海斗さんは1年生の間で結構人気があります
そんな素敵な人なのですから、当然のはず…
そこに焦りを感じていた時点で私の中では答えが出ていたのかもしれません

海斗さんのために作ったお弁当を持って、教室の前に立つ
この胸の鼓動が、他の人のときのような緊張とは違うのは、自分が一番わか
っていることです
心臓が刻むリズムが心地よい

いつからなんでしょうか
もしかしたら名前を呼ばれたあの時からかもしれません

私はお友達を望んでおきながら、海斗さんに恋をしてしまいました

海斗さんはどう思うのでしょうか
海斗さんには迷惑をかけたくありません

ですが、この思いをそんなことで消すことは到底できそうにありません

まずはこのお弁当を食べてほしい
…私の初めて好きになった人に

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺と由紀江は屋上に来ていた
天気は良好で絶好の弁当日和だ

教室で食うには、周りからの視線が痛すぎた
由紀江もあわあわ言ってたしな

「しかし、どうして急に弁当なんて作ってくれたんだ？」

確かに昼は食べてないと言ったし、由紀江の優しい性格ならば、そういった
気遣いに関しては何も疑問を感じない
だが、それでも弁当を１人分多く作るなんてな…
朝の忙しい時間にはどう考えても手間だろう

「それは、海斗さんは私のお友だ……」

何かを言いかけたと思ったら、由紀江は唐突に口をつぐんでしまった

しばしの沈黙のあと、
赤い顔を左右に振るとこちらを真っ直ぐと見て、言った

「海斗さんは私の大切な人ですから」

そんな、最初に友達になったくらいで大げさな
まあ、大切に思ってくれてるならいいか

「さんきゅ」

「あうあう～」

由紀江が精一杯の勇気を振り出して、変えた表現に含まれた意味は
海斗に届
ことはなかった

・・・・・・・・・・・・

Ｓｉｄｅ　一子

はぁ、変な意地張って、教室を出てきちゃったけど、気になって戻
ってきて
しまった
でも、教室の席には海斗の姿はなかった

あれ？おかしいな
海斗は食堂とかには行かないはずだから、席で読書でもしてると思ったのに。
どこに行っちゃったんだろう

ていうか、だめ。
今日は海斗のことは相手にしないと決めたのに…
アタシばっかりが気にしてる気がする

はあ…
こんなのアタシの方が不利に決まってるじゃない

惚れたほうが負けって、こういうことね

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

・・・・・・・・・・

由紀江から渡された弁当を開ける
中には色どり豊かなおかずが入っていた
どうやら和食中心のようだ

ていうか、マジで美味そうだ
人に作ってもらった料理を食べるなんて、久しぶり…
いや、初めてか…

はあ、今はそんなのどうでもいいな

せっかく自分のために作ってくれたんだし、もらうか
そう思い、箸を持とうとしたら…

「あ、あの…！」

うん、なんか凄まじい速度で箸をとられた
ほんと、こいつ強いと思うんだよなあ

「あのですね、海斗さん、く、口を開けていただけませんか」

「ああ、別に構わないが」

そうして、俺は口を開ける

そんな俺と弁当箱の間を視線が高速で行き来する
なんだ、視線で反復横とびでもしてるのか
思わず、そんなツッコミが出てしまいそうになるほどだった

「すみません、なんでもありません…うっう」

何を泣いているんだ
よく分からないまま、弁当を自分で食べ始める

「うん、美味いな」

「あ、ありがとうございます」

「この肉じゃがなんて、味がよく染みてる」

「あ、それは一回冷まして…」

由紀江が熱心に肉じゃがの説明をしてくれる

一子といい、本当に不思議だ

なんで、俺なんかに自分から近づこうとするのだろう

自分は人とは関われないものだと思った

だから、距離をあけるのは当然で、嫌な奴と印象づければ、当然、すすんで

近づこうとする奴なんていなかった

なのに、目の前の由紀江は本当に俺のことを友達だと考えてくれている

俺を1人の人間として、見てくれている

だが、それは結局ニセモノ

俺の本当を知ったら、目の前の少女はどうするのだろう？

友達ではいられないだろうな

ばれないようにするのが最善

そんなことは関わりを断ってしまえば、全てが解決する

ただ、それだけの話。

だが、俺はそんなことを容易に出来なくなっている
このつながりを失くしたくはない
本当に変えられているな…

俺はこのひだまりの中にいつまでいることができるのだろう

目の前の少女を見ると、笑顔で弁当の解説をしてくれている
その姿を見て、しょうもない考えを頭の隅におしやった

今は由紀江の美味い弁当を食おう。
そう思ったのだった

19話　「暖かなひだまり」（後書き）

ありがとうございました
まゆっちが一子に続いて、落ちました
まゆっちのタイプは優しい人じゃないかと
勝手に思っているので、今までの総合して惚れさせちゃいました
そろそろ日常編終わるんでしょうか

20話　「ドキドキデート？」（前書き）

前回はまゆっち回でしたが
今回は…もう分かりますね
どうぞ

20話　「ドキドキデート？」

―時は放課後

俺は由紀江の昼飯を食べて、今日に満足して学校を出ようと思った

だが、目の前からすごい圧力を感じる
いや、原因は分かっている
一子が無言でこちらを向いて、立っているからだ

最初はなんか用があるのだと思って、話し出すのを待っていたのだが、これ
がいっこうに口を開かない
かといって、俺が帰ろうとすると、“むー”とか唸りだして、こちらを見な
がら、体をぷるぷると震わせる

一体、どうしたっていうんだ
今日は朝から機嫌がよろしくなかったが、本当に俺が何か悪いことしたか？

「おい、一子」

しょうがないので、こちらから声をかけてみる

すると、一子は一瞬笑顔になったかと思うと、すぐさま表情を戻して、俺を

睨みつけてきた。本当になんなんだ…

「な、なに」

「なんか怒ってんのか？」

「別に怒ってないわ、私はいつも通りよ」

いや、そんな怒った声で言われても…

はあ、まったく

「一子、一緒に来い」

「え？」

「菓子買ってやる」

原因は分からないが、このままはよくないだろうったく、一子には笑顔の方が似合ってるしな

・・・・・・・・・

「いや、本当に悪かった」

「別にいいわよ～」

前に食った動物ビスケットを買ってやろうと思ったのだが、流石は移動販売
もう他所に行ってやがった

何が“菓子買ってやる”なんだか
数秒前の調子乗ってた俺を一発なぐりたい
今この時間をゆがめて、過去に戻りたい
でも、今より過去の俺を殴るわけだから、当然今の俺にダメージを与えるわ
けで…ん?逆に考えれば、今の俺を殴っても同じってことか
いや、時間軸の前に俺の頭がゆがみそうなので、これ以上考えるのをやめて
おく

だが、何故か一子はそんな不甲斐ない俺に対して、怒っている風ではなかっ
た。
むしろ、さっきのような刺々しさはなくなっていて、機嫌は良いようだ
今は汗をかきつつ、困った顔で笑いながら、俺の非を否定してくれている
やっぱり、一子はこうでなくちゃな

目的は達成できなかったが、問題は解決したので、良しとしよう

これからどうするかと思い、一子の方を見ると、右ポケットから何かがはみ

出していた
それは俺の興味を一気に持っていった

「おい、一子、それ何だ？」

「え、これ？携帯電話よ」

一子はそれをポケットから取り出して、俺に見せてくれる
うむ、実にいい

「一子、これ買いに行くぞ」

「え！今から？」

「俺は欲しいと決めたら、すぐ行動する」

そう宣言して、ワン子の手を引き、歩いていく
さっきは格好つかなかったからな、挽回だ

ん？
一子の手が妙に汗ばんでいる
少し、強く握りすぎたか？
そう思って、握る力を弱めると、慌てたようにあちらから強く握ってきた
何事だと思い、振り返ると、一子は俯いていて、髪の間から見える耳は朱に

染まっていた
そちらを見ても、黙ったままなので、そのまま握って進むことにした
…あ

「一子。携帯って、どこに売ってんだ？」

最後まで格好はつかなかった

・・・・・・・

「それでですね、こちらは…」

「へえ」

「むぅ…」

携帯ショップの中では何故か三つ巴が繰り広げられていた

俺が店に入ると、他の客の対応をしていた女性店員がこちらにやってきた
こちらが聞く前にどんどん話してくる
まあ、初心者なのでありがたいのだが、若干近い

一子は一子で、なんかまた不機嫌になってしまった

俺にどうしろと

「お客さまはどんな携帯をお探しですか？」

「一子と同じ奴がいいな」

「え！？」

「ちょっと、こっちに持ってこい」

「う、うん」

さっきまでとは打って変わって、照れたような笑顔だ
感情の起伏が激しいな

「これと同じやつを頼む」

「はい、それでしたら、この6色の中から選べますが」

「黒でいい」

そんな色なんかはどうでもよかった
俺は店員が早く持ってくるのを待った

「こちらになります」

「ん？」

「よかったじゃない、買えたわね」

「一子のと違わないか？」

「え、そりゃ色は違うけど…」

「じゃなくて、それが付いてない」

そうして、海斗が指差したのは、一子の携帯に付いた犬のストラップだった

一子も一瞬、理解が追いつかなかった

「え、これ？」

「それ。」

「じゃあ、アタシと同じのが欲しいっていうのも…はぁ」

「それが俺の携帯にはないんだが」

「これは別売りなのよ、アタシが後から買って付けたの」

「なんだと」

じゃあ、俺は何のために、これを買うんだ

くそ、俺もその柴犬みたいな奴、ほしいんだよ

「あの、お客様、ストラップなら購入した方に差し上げていますが」

「どういうのなんだ？」

一子は“自分で買った”と言っていた
ということは、柴犬が出てくる可能性はないだろう

「人気なのは、この十字架とハートになりますが、他にも3種くらい用意し
ております」

いや、そんな十字架なんて、もらってもしょうがないんだよ
俺、別に何も信仰してないし、神なんて存在はないと思っている
占いなんて、絶対に信じないしな
勿論、運勢が良いときは別問題だ、全力で肯定してやる

もはや、何の望みも持たず、並べられたものに目を向けると、その内の1つ
が目に留まった。
というよりか、目が合った

「おい、これは？」

「あ、それはちょっと不人気でして、すみm…」
「俺はこれをもらう」

「え、海斗、それにするの？」

「ああ」

俺が選んだのはトカゲをモデルにした銀色のストラップ。
なんだよ、良いものあるじゃねえか

・・・・・・・・・

「ありがとうございました」

とても満足して、店を出る
良い買い物ができた

「海斗って、動物好きなの？」

「まあ、そうなのかな、嫌いではないことは確かだ」

「ふーん」

「さてと…」

俺は一子の目の前に携帯を突き出した

「え？」

「最初に教えてやるって約束しただろ」

「あ……うん！」

一子は約束を思い出したようで、満面の笑みで頷いてくれた
一日の締めくくりにふさわしい良い笑顔だった

・・・・・・・・・

同日、夕方
某廃ビルにて

「じゃあ、様子見っていうことでいいんだな」

時刻は一子と海斗が別れた少し後。
一つの机を9人が囲う

「では、ここに宣言する！」

「風間ファミリーに“流川海斗”を新メンバーとして迎える！！」

男の声が響いた

20話　「ドキドキデート？」（後書き）

ありがとうございます
ワン子はなんか嫉妬キャラとして、定着しつつある気がします
感情を素直に表しそうなので、やりやすいんですよね
そして、やっと日常編が終わるかも？

20．5話　「ドキドキデート？　Ｓｉｄｅ一子」（前書き）

感想で要望を頂いたので書かせて頂きました
即席なので、いつものに加えて、低クオリティーになっていることも否めませんが
よろしければ、読んでください

20．5話　「ドキドキデート？　Ｓｉｄｅ一子」

―時は放課後

昼休みは見つからなかったので、海斗を待ち伏せすることにした

なんか、このまま海斗を無視してても、アタシだけが損するような気がする

海斗なんて、気にもしてくれないかも…

そんなことを考えたら、行動に移すしかなかった

だけど、その向かい合った状態で沈黙が続く

当然、アタシからは声をかけられるわけがない

だから、海斗から話すのを待つしかないんだけど…

海斗はしばらくその状態が続くと、あろうことか、席を立って、教室の外に

向かおうとしてしまった

話すことが出来ないアタシは無言の圧力を飛ばす

そうしたら、海斗もなんとか止まってくれた

これは酷いんじゃない？

確かに今日は朝からアタシの海斗に対する態度が冷たかったけど。

けどさ、それだって全部、海斗が好きだからなのに…

「おい、一子」

大好きな人の声が自分の名前を呼ぶ
中途半端で煮え切らないアタシに海斗から声をかけてくれた

アタシはつい、笑顔で応えてしまいそうになるけど、今までのそっけない感
じを咄嗟に思い出し、表情を強張らせる
なんで素直になれないんだろう

「な、なに」

「なんか怒ってんのか？」

「別に怒ってないわ、私はいつも通りよ」

そう、海斗は何も悪くない
ただ、海斗の人の良さが人気につながっただけのこと。
そんなのは分かっている

分かっているのに、どうしても怒ったような気分になっちゃう
いらないのに、消せないもやもや。
でも、この怒りを海斗に向けるのは、おかしい
消せない怒りは素直になれない自分へ。

「一子、一緒に来い」

「え？」

「菓子買ってやる」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「いや、本当に悪かった」

「別にいいわよ〜」

海斗はなんかアタシに買ってくれる予定のものが決まっていたようだったけ
ど、あたりが外れて、それは手に入らなかったらしい
そのことをさっきから、ずっと申し訳なさそうにしてる

だけど、アタシにとってはもうそんなことはどうでもよかった
海斗がアタシを誘ってくれたこと。
面倒くさい態度をとっているのはこっちなのに、気にかけてくれたこと。
それが感じられただけで、アタシの気分が晴れるのには十分すぎた
もう、今は海斗の隣で自然に笑みがこぼれる

「おい、一子、それ何だ？」

「え、これ？携帯電話よ」

突然、海斗がアタシのポケットを指差して、言い出した

アタシはそれを取り出し、海斗に見せる

「一子、これ買いに行くぞ」

「え！今から？」

「俺は欲しいと決めたら、すぐ行動する」

急にそんなことを言い出して、びっくりした
いや、そんな驚きはすぐに忘れてしまった

次の瞬間、海斗がアタシの手を握って、歩き出した
アタシの手を…、海斗の手が包んで…
もはや、びっくりを通り越して、形容しがたい衝撃に襲われた

海斗が自分から、アタシの手を握ってくれてるんだ
そう考えただけで、体全体は熱を帯び、つい引かれている手にも汗をかいてきてしまう
好きな人と触れ合うだけでアタシの体はこんなにも素直に反応してしまう
そんな反射のような現象は止められるはずもなく。
それを自覚して、さらにアタシの体は熱くなった

突然、海斗の手が離れそうになった
アタシの頭は恥ずかしさでいっぱいだったはずなのに、その変化にはいち早
く反応して、考える間もなく、海斗の手を今度はこちらから強く握

ってしまった。
本当に欲望に忠実な自分の行動が恥ずかしい

だけど、海斗はそれについては何も言わずに、また手を握りなおしてくれた
アタシはそんな海斗の優しさに触れて、海斗が前を歩いているのをいいことに緩む頬を隠そうともしなかった

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「それでですね、こちらは…」

「へえ」

「むぅ…」

携帯ショップに入った途端、女性店員が海斗に近づいてきた
それだけなら、まだしも明らかに距離が近い

本当に海斗は無駄なくらい人気がある
確かに海斗は見た目もかっこいいかもしれないけど、アタシは海斗の内面の優しさだって、知ってるんだから

「お客さまはどんな携帯をお探しですか？」

「一子と同じ奴がいいな」

「え！？」

海斗がアタシと同じのがいいって…
それって、お揃いってことだよね
え、そういうのって、恋人同士とかでするものじゃないの？
いや、アタシは全然構わないっていうか、大歓迎なんだけど。
そんなことを海斗から望んでくれたってこと？

「ちょっと、こっちに持ってこい」

「う、うん」

「これと同じやつを頼む」

「はい、それでしたら、この６色の中から選べますが」

「黒でいい」

「こちらになります」

「ん？」

「よかったじゃない、買えたわね」

「一子のと違わないか？」

「え、そりゃ色は違うけど…」

「じゃなくて、それが付いてない」

そうして、海斗が指差したのは、アタシの携帯に付いた犬のストラップだった

一瞬、理解が遅れるが…

「え、これ？」

なんとか、そう聞き返す

「それ。」

返ってきたのは肯定。

要するに、海斗がいきなり携帯を欲しいなんて言ったのは、このストラップ

が欲しいと思ったからなんだ

結局、目当てが携帯じゃなくて、これってことは…

「じゃあ、アタシと同じのが欲しいっていうのも…はぁ」

「それが俺の携帯にはないんだが」

「これは別売りなのよ、アタシが後から買って付けたの」

「なんだと」

「あの、お客様、ストラップなら購入した方に差し上げていますが」

「どういうのなんだ？」

その後も海斗と店員が何かやり取りをしてたんだけど、正直アタシは喜びの丘から、絶望の谷に突き落とされたようで、あまり内容が頭に入らなかった

その落差はしっかりとショックに比例していた

結局、海斗は銀色のトカゲのストラップをもらうことにしたみたいで、早速それを携帯につけると、その場をあとにした

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「海斗って、動物好きなの？」

「まあ、そうなのかな、嫌いではないことは確かだ」

「ふーん」

でも、なんか海斗って、優しいイメージがあるから、動物好きそう
好きな人の好みは覚えておきたいものだし。
今日のことはしっかりと記憶しておこう

「さてと…」

「え？」

海斗がいきなりアタシに向けて、携帯を突き出してきた
最初、意味が分からなかったんだけど。
次の言葉で全てを理解する

「最初に教えてやるって約束しただろ」

「あ……うん！」

海斗は覚えてくれていた
あの日の約束を。
アタシが海斗のパートナーになれた日の約束を。

些細なことなのかもしれない
だけど、アタシはそれだけで嬉しすぎて、笑顔になってしまう
それがとても幸せ。
これからも好きな人の隣で笑っていたいな

２０．５話　「ドキドキデート？　Ｓｉｄｅ一子」（後書き）

ありがとうございます
こんな感じじゃないでしょうかね
こうして見ると、もうワン子は海斗にべた惚れですね
だが、それがいい
次は２０話の続きからです、よろしくお願いします

21話　「風の男、動く」（前書き）

投稿おくれまして、申し訳ございません
頭痛という名の自己管理不足に襲われておりました

地の文は一人称、三人称を混ぜた形がこれからの主になると思うので
読みにくいかもしれませんが、慣れていただきたいです
では、遅れましたがどうぞ

21話　「風の男、動く」

Ｓｉｄｅ　翔一

タッグマッチの決勝戦
あいつはワン子を馬鹿にした相手に対して、声を荒げた
いつも喋らないで大人しい奴だと思っていたのに、こんなに熱い男だとは、
思いもよらなかったぜ

あれ以来、ワン子とも仲がいいみたいだし、まゆっちもお友達になったと秘
密基地で嬉々として語っていた

それならば、新メンバーとしていいんじゃないだろうか
ファミリーの2人とも仲がいいわけだ
何より、ああいう真っ直ぐな奴は好きだぜ

だが、俺1人の意見では決められない
俺たちは“ファミリー”だからな

～

「今日ね、海斗と携帯電話、買いに行ったの」

「あぁ、また始まった」

「今日のお昼にですね、海斗さんとお弁当を食べたんです」

「へぇ、そうなのか…」

ファミリーが集まる秘密基地
そこでは大和と岳人が恋する乙女たちの犠牲になっていた

本人たちは仲間として、現状報告しているつもりなのだろうが、彼女のいな
い男たちにとっては、ただの惚気以外の何者でもない
そして、悪気がない分、無視もできないということだ

2人の少女はライバルが偉大な戦果を成し遂げているのも知らずに、別々の
ところで、各々自分の嬉しさを語っていた

そんなこんなで時間が過ぎていくと、基地には続々とメンバーが集まり始める
そして、最後にキャップこと風間翔一が来た

「あー、今日は皆に話がある」

「なになに、また旅行でも行くの？」

「ハハハ、それはいいなぁ」

モロと百代が反応してくるが、翔一は続ける

「実はまた新メンバーを入れたいと思う」

「え！？」

さっきまで読書をしていて、我関せずだった京が一番に反応する

「またか、まあいい。それで誰なんだ？」

「ああ、“流川海斗”だ」

ワン子とまゆっちの肩がビクリと震える

京や大和からしてみれば、なんと分かりやすいという感じでしかない

もはや、誰が見ても明らかなバレバレの状態だった

クリスなどの例外もいたが…

「流川海斗とは、あの犬と共に優勝した奴か」

「フフ、あいつか。面白いじゃないか」

「俺はあいつをファミリーに入れたい。だから、多数決をとる」

「私は反対」

京が間髪入れずに即答した

「もう新しいメンバーはいらないよ」

「今回は俺も反対だ」

大和がそう言うと、岳人とモロが続いた

「わ、私は…」

「ア、アタシは…」

ワン子とまゆっちが慌てて、自分の意見を述べようとするが、二人の答えが
火を見るより明らかなのは言うまでもない

「で、まゆっちとワン子は仲いいから、賛成でいいよな」

恋愛感情に気づけないリーダーもいるが…

「私も賛成だな、アイツは何かと面白い臭いがする」

そう言って、目を輝かせる百代
それはまるで戦いに飢えた獣を彷彿させるようだった

「俺はもちろん提案者だから賛成だ」

「てことは、今んとこきっちり４：４で分かれてるわけか」

「クリはどうなんだ」

そう、残るはクリスの意見だけだ
すなわち、この決定がファミリーの決定となる

「自分は正直、少し前までなら迷わず反対だった。
教室では無関心で、教師への態度も悪い。
だが、犬と共に戦っている奴の姿からは義を感じた。
自分はどちらが本当のあいつなのか、判断できない。
だから…」

「どちらともいえないってことだな」

「結局、決まらなかったってこと？」

「まあ、また入れてみて様子見っていうのが妥当だろうな」

反対派の皆も仕方ないと頷く

「よし、じゃあそれで決定だ！」

～

てな感じのことが昨日あって、晴れて今日からお試し期間だ
楽しくなりそうだぜ

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「嫌だ」

男の計画は破綻した

「なんでだよ！」

「いや、いきなりファミリーに入れなんて、断るに決まってんだろ」

「楽しいじゃん、即ＯＫじゃん」

なんだ、こいつは駄々っ子か
なんで、登校直後にこんなこと言われてんだ、俺は

「大体、一子と由紀江がいるからって、俺が入る理由にはなんねえよ。
あいつらとは、別にファミリーじゃなくても関われるだろ。」

「いいじゃねぇか、一緒の方が楽しいって」

こいつ、本当に人の話きいてんのか

ちょっと顔がいいからって、何でも許されると思ってるんじゃないか
そんなのが通じるのは単純な女だけだぞ
悪いが俺にはそんな趣味は皆無だ

「とにかく、その話は断る」

「どうしてもか？」

「ああ、そうだ。分かったら、席に戻れ」

「よし、分かった。なら、俺と勝負しろ」

「嫌だ」

「即答かよ！！」

いや、そんなものするわけないだろ
目立たないようにしようという考えは一子や由紀江によって、結構
変えられ

てしまったが、そんな意味のない勝負をする必要性は全くない

「勝負くらいしたっていいだろー」

「じゃあ、今日の昼飯をおごれ」

「なに、そしたら…」

「俺が嬉しい」

「勝負してくれるんじゃないのかよ！」

はあ、ほんと子どもみたいでいじりやすい
こちらのS心がくすぐられる

「んじゃ、俺の指定した時間までに菓子買ってこれたら、いいぞ」

「そんなことならお安い御用だぜ」

「じゃ、柿ピーでいいか、タイムリミットは…昨日だ」

「思いっきり、過ぎてんじゃん！！」

「キャップ、もとから入る気なんてないんだって」

あらら、遊んでたのに、もう終了か
まあ、そういうことだ

頭脳担当君の言うとおり、諦めてくれや

「だから、俺に任せてくれ」

「大和、なんか作戦があるのか」

「ああ、あいつのことはワン子からリサーチ済みだ」

ほう、随分と自信があるようで
確かに一子や由紀江とは他の奴らよりも多く接している
だが、俺が人の前で弱みを見せるなんて有り得ない
そんなへまは俺に限って…

「これを勝負に勝てば、やるっていったらどうだ？
モロにネットで買ってもらった」

そう言って、俺の机の上に置かれたのは、あの一子の携帯に付いてたものと
非常に似た柴犬のストラップだった

いや、確かに弱みではないな、これは
というか、物ごときで俺の揺るぎない心を動かせるとでも思ったか

「直接戦闘以外なら受けよう」

簡単に揺らいだ

「おお、大和でかした」

「いや、俺もまさか、これで成功するとは…」

「なんだ、これは。目のつくりが職人入ってんじゃねーか」

「完全に聞いてないし」

一子のとは、若干毛の色や耳の形などが違っていて、まあ、１つ言えること
は愛嬌が半端ないということだ

色々な角度から見ていると、取り上げられた

「これは勝者への景品だ。お前の物になるのは、キャップとの勝負に勝って
からだ。負けたら、当然ファミリー入りだな」

「分かってるっつーの、で、何の勝負をするんだ?」

「それは…川神戦役だ!!」

またもや、大変なことが始まりそうな予感である

21話　「風の男、動く」（後書き）

ありがとうございました
前回の終わりに対するコメントがまさに皆様一致していました
そうですよね、予想がつきますよね
海斗がそう簡単に受け入れるわけはないと、まさしくその通りです
そして、次回からイベント開始ですかね、
まあ日常編同様、ダラダラに変わりはないでしょう

最後に、今回自分の体調不良で迷惑をかけてしまった方がいたら、
すみませんでした

22話　「前哨戦」（前書き）

書くペースがだんだん遅くなり
書く時間も日に日に減っていく始末。
毎日更新、いつまで続けられるんでしょうか

22話　「前哨戦」

―川神戦役

それは本来、クラスでの決闘法に用いられる。
くじ箱の中から出た様々な競技で戦い、それに応じた様々な力が問われるのである。
団体戦ではないので、自分一人の幅の広さが試される。
そして、先に5本先取した方が勝ちという、シンプルかつ分かり易いルール。
要するに今で言うバラエティ番組みたいなものである！

よし、説明もバッチリ決まった

結局、勝負はその日の放課後に行われることとなった
わざわざ、引き伸ばす必要性も感じなかったし、何より早いところ、あのス
トラップをゲットしたい
トカゲの“シロガネ”に友達ができるのだ

場所はグラウンド
多くのギャラリーが集まっていた
これから、勝負が始まる

Ｓｉｄｅ　大和

まさか、ストラップで釣れるとは思いもしなかった

ワン子が昨日、話しているのを聞いていて、
“いや、そりゃ多少は好きなんじゃないの”と相槌を打っていたが…
勝負を受けるほど、好きだったとは。

これは覚えておいたほうが良さそうだな

そして、今まさに勝負が始まろうとしている

ギャラリーも多く、活躍するキャップ見たさに同級生の女子などが多く集まっている
そして、他にも大量の１年生が見に来ていた

これはあれなんだろうな
流川の人気が１年生の間で凄いというのは、どうやら本当らしい
あの噂もあったしな…
やはり、頼れる年上というのは下級生に人気があるのか
こいつの守ってもらえるイメージはもはや定着しているからな

そして…

まあ、まゆっちは１年生だしな、分かるよ
何故、君もそっち側にいるんだい？ワン子よ…

大和の口からは溜息しかもれなかった

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

はあ、よりにもよってこんなイベントみたいになってしまうとは。
おまけに…

「えー、司会は小さい娘の味方　井上準と…」

「みんなのアイドル　川神百代だ！」

なんか司会まで付いてきやがった

「えー、今回は放課後ということにより、時間もないので、３本先取で決着
をつけまーす」

「大人の事情というヤツだな」

すげぇ、大がかりになってしまった

まあ、合計で３回勝てばいいのだ
嫌な勝負はギブアップすればいいだろう
格闘なんて来たら、速攻ギブアップだ

周りを見渡してみると、こちらに向かって、大きく手を振る一子が
見えた

その隣で由紀江も控えめに手を振っていた
俺は自然に顔が緩み、そちらに手を振り返した
途端、近くにいた1年生がドッと沸いた
なんだ、どうしたってんだ
俺が手を振るのがそんなにおかしいか

「では、もうそろそろ1回戦の競技を決めてしまおう」
「じゃあ、先攻・後攻を決めてくれ」

正直、先攻・後攻なんてどうでもいいのだが、もらえるものはもらっておく
とするか
ジャンケンなんて負ける可能性がないからな

「よーし、それじゃ順番を決めようぜ」
「あ、俺はチョキを出すから」
「なに!?」

会場がざわめく
まあ、これで俺の負ける可能性は“限りなく0に近い”から0になった

Ｓｉｄｅ　大和

同じだ
これは俺がクリスと勝負したときに使った手と全く同じ
突飛な行動をとり、相手の裏をかく戦法だ

初見の相手には意表をつくし、ペースを乱す常套手段といえる
しかし、キャップはそのときの一連のやりとりを見ていたから、この手には
引っかからないだろう

だが、何故だ
本来、このような作戦は相手の思考レベルをよく知っていて、こいつはどこ
まで裏をかいてくるというのを予測できるうえで、初めて有効な手段といえ
るものだ
ましてや、あいつは俺とクリスの勝負なんて、これっぽっちも知らない

こいつはキャップとは今日話したのが初めてだし、会話の内容だって、決し
てお互いのことを知るとか、親交を深めるものではなかった
それどころか、こいつはキャップ以外にも全く興味を示してはいなかった

それなのに、この作戦を使ってくるということは相当な自信があるというこ

と。
あの短い時間でキャップのレベルを計れたのか
分からない。
この俺のような混乱が狙いだとしたら、それは意味がない
キャップはここまで深く考えるような奴ではないからだ
なら、何故だ
何故、その作戦を使う、流川
気まぐれか、確信があるのか
それは勝負の結果を見なければ、知りようがなかった
Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
「は、その手には乗らないぜ」
「ふーん」
（大和がやっていた作戦だ、これは。
こいつはチョキを出すといった。
俺にグーを出させるために、だから、相手はパーを出す。
それを読んだ俺がチョキを出すことを誘導しているのだから、
相手はグーを出す。
なら、パーを出せば、俺の勝ちだ！）
「いくぜ！」
「おう」

「「ジャンケン、ほい」」

風間翔一はパー
そして、海斗は…チョキを出した

「ま、俺の勝ちだ。運がよかった」

「くそ、なんでだ」

意外にこいつ、ひねった出し方してきやがった
単純にグーでも出してくるかと思ったが、ひっかけられたことでもあんのか

まあ、いくら考えたとこで俺には勝てない
別に俺は思考の裏をかいたわけでも何でもないからな

ジャンケンなんて、大抵の奴は出すものなんて、決めないで、その場の勢いで出すのが普通だし、所詮“運”。
そんなことで勝敗が左右されるわけじゃないし、気にすることではない
だが…

“俺は〇〇を出す”

こんなことを言ったらどうだろう

普段、考えないのに、何を出すかを思考してしまう
そして、脳内討論の結果、これを出すと決定してしまうのだ

すると、どうだろう
普段は不可思議な動きを経て、形になる手が、一つの形に向けて、
一直線の
単純な動きとなってしまう
そんな動きなら、何を出すかくらい、俺の目なら捉えることが可能だ
別に不可思議な動きでも出来ないことはないが、確実に越したこと
はない

さらに、自分が出すものを宣言しといて、勝利を収めた
これは相手に“自分の思考を読まれているのではないか”という不
安を植え
つけるという便利な付加効果つきだ

まあ、相手はお気楽で、どう考えても、そんなことを気にしそうな
奴ではな
いので、もとから後者は期待していない

だが、予想に反して、色々考えて出す手を決めてきたようなので、
腑に落ち
ないモヤモヤ感くらい感じているだろう
それだけでも、十分な収穫だ

負けたときの言い訳にでも上手く使ってくれたまえ

「まあ、先攻を奪われただけだ。勝負はこれからだぜ！」

「では、流川、くじを引いてくれ」

「ど、どうぞ、ここから引いてください」

「ああ、これでいい」

「ありがとうございます……きゃー／／／」

なんかくじ箱を持ってきたと思ったら、一目散に離れてしまった
そのスタッフみたいな一年生の娘がくじを開く
なんで、スタッフいるんだよ…

勿論、一年生の有志の集まりであることは言うまでもない
そんなことを海斗は知る由もなく、競技が伝えられる

「第一回戦は適応力対決だ」

22話　「前哨戦」（後書き）

ありがとうございました
やっと川神戦役スタートです
日常じゃないですが、変わらずダラダラなので
そこはご了承ください（笑
いきなり無駄に心理戦があったり、なかったりですね
次回より試合がスタートということで、お願いします

23話　「退路は断たれた　前編」（前書き）

すごく台詞が多いです
読みにくさはいつも以上かもしれませんが、
よろしくお願いします

23話　「退路は断たれた　前編」

うん、“適応”ね、“適応”。
知ってるよ、うん知ってる

“その状況によくかなうこと。ふさわしいこと。あてはまること。”

だよな、新村　出も言ってたぞ
それに“力”がついて、“適応力”
俺、何も間違ってないよな

その一回戦の適応力勝負が何故ゲームなんだ…

「さーて、一回戦目はこのゲームで勝負してもらうぞ」

「何故、これが適応力勝負なんでしょうか」

「ああ、これはとてもマイナーなゲームでな…、そこら辺の詳しい説明は特
別ゲストを呼んである」

「おぉ、いきなり台本にないことを…」

「モロロとそのクラスメイトだ!!」

「モモ先輩、大串スグルだってば!さっきも言ったじゃん」

「ん〜、そうだっけか」

「名前も覚えられんとは、これだから三次元は…」

「まあ、ということで2人には解説についてもらう」

「俺の出番、ただでさえ少ねえのに」

「早速、このゲームについて説明させてもらうよ」

「聞いてないしね…」

「さっき、モモ先輩が言ったとおり、これはマイナーなゲームなんだけど、
マニアの間じゃ、とっても有名なゲームなんだ。というのも、色々な要素、
つまりはシューティングや格闘、アクションといったもので全体が構成され
ていて、まさに適応力が試されるんだよ」

「ただ、このゲームの製作は素人が個人で作ったもので、そのクオリティー
こそ尊敬はできるが、その変態じみた難易度、作者の偏った趣味がゲームの
中に盛り込まれているという点から、クソゲーとも烙印を押されている、ま
さしく、やってみたくはあるが、買いたくはないゲームなのだよ」

「はあ、説明されても、さっぱりわからねえ。結局、小さい娘は出てくるの
か、どうなんだ!?」

「いや、今そんな話してなかったよね」

「まあ、聞くより見たほうが早いだろう、始めてくれ」

俺と風間翔一が電源をつける

すると、変なムービーが流れ始めた
その奇妙なセンスはピカソを彷彿とさせた
というか、見様見真似のゲルニカって、リアルにこんな感じじゃないだろうか

「なんかカオスなムービーが流れ出したぞ」

「ああ、人によってはあれでリタイアするそうだ。しかも、嫌がらせなのか
スキップは出来ない仕様だ」

「鬼か！！」

「さっき、スグルが変態じみた難易度なんて、言ってたけど、それはノーマルからの話で、イージーなら普通のゲームより少し難しいくらいなんだ」

「まあ、日が暮れても困るしな」

「キャップは大和とかと、よくゲームしてるけど、流川君はなんか、

やった
ことすら無さそうだよね」

「ああ、間違いなくアイツはギャルゲーの最初の選択肢で、上の“早く起きて学校へ行く”を選ぶタイプだ。そこは間違いなく、下の“まだ眠い、二度寝でもするか”だろうが。何故、遅刻しそうな転校生と巡り合う可能性を考えることができないのだ、素人が！！」

「俺は何も押さずに、ロリっ娘の妹が起こしにくるのを待つぜ！そして、階段を降りていくと、“お兄ちゃん、目玉焼き失敗しちゃったの。ごめんね”と言うのを優しく撫でてあげるんだ」

「おい、美少女の私がここに居ていいのか、心配になってきたぞ」

「あ、そんな変な熱弁をしている間にムービーが終わったみたい…って！」

「おーっと、なんということだ！キャップは当然のごとく、イージーを選択したが、なんと流川海斗は最高難易度ハードを選択だー！」

「えー！！ハードは本当に理不尽なほど難しいんだ」

「これは勝負する前に結果が見えたようなものだな」

いや、なんかよく分からんが、そりゃ一番難しいのを選ぶだろう
何故、俺が逃げなきゃならんのだ

そりゃあ、確かにゲームなんて、生まれてこの方やったことはない
しかし、ただボタンを然るべきタイミングで押せばいいだけのこと。
何も難しいことはない…よな

(何!?あいつ、ハードでやりやがった。大和と協力して、このゲームやっ
たことがあるが、イージーで精一杯だぞ)

「さーて、予想外の事態が起こったが、1ステージ目は…これは格闘か?」

「そう、最初は相手の体力をなくせばいい格闘ステージ」

「だが、このステージには相手キャラをイケメンにして、操作キャラを女性
にして、ボコボコにさせるという、もてない男である作者のしょうもない憎
悪が早速こもっている」

「ああ、このゲームがクソゲーなのが、何となく分かってしまった…」

「残念ながら、私もだ」

「まあ、そういうゲームだから……って!!」

司会・解説の４人、いや会場全体が目を疑った

翔一が単調な動きの相手に慣れを生かして、コンボ技を入力しているだが、その横で海斗は敵を圧倒していた

というのも、翔一のようにコンボ技を決めているわけではないそれ以前に、今日初めてやっている奴が知っているはずもないだろう

海斗は敵の攻撃に対して、ぴったりとタイミングを合わせて、ガードをする
“ジャストガード”という高等技術を連発していて、自身のキャラの体力は
微塵も減っていなかった
そして、攻撃の隙を狙い、相手のゲージを削っていく

決して派手なアクションではないが、その凄さは理不尽な攻撃を繰り出す相
手を完璧に捌いていることが物語っていた

「おい、ハードの敵は遠距離攻撃、近距離攻撃、なんでもありのチートキャ
ラなんだぞ！倒すという目標でさえ、何人ものゲーマーたちが挫折したとい
うのに、あの男は…無傷だと！？」

「なんか分からんが、凄いのは分かるぞ」

「なんだなんだ、あいつは天才ゲーマーだったってことか」

「いや、いくら上手い人でも無傷っていうのは、ありえないよ。未来が見えるとかでもないと、とても対処しきれない攻撃数だもん」

「おい、“ジャストカウンター”まで使い出したぞ…！“ジャストガード”よりもさらにタイミングがシビアになるというのに」

いや、専門用語は分からんが、要は相手の攻撃に合わせて、ボタンを押せばいいだけのこと。
これで終了だ

俺は敵キャラを撃破した
隣もちょうど敵に勝ったところだった

「体力だって、イージーとハードじゃ段違いなのに、まさか一緒に終わっちゃうなんて…」

会場は一回戦目の序盤から騒然としていた

23話　「退路は断たれた　前編」（後書き）

ありがとうございました
変なところで切れていますが、後編に続きます
というか、毎日更新が風前の灯火に…いえ、なんでもありません
次回もお願いします

２４話　「退路は断たれた　後編」（前書き）

中途半端に終わった前回の続きからです
いきなり始まります

24話　「退路は断たれた　後編」

「なんか、よく分からんが、勝負はまだ分からない！モロロ、次のステージはなんだ？」

「あ、次のステージはいわゆるシューティングだね」

「これは典型的な縦スクロールシューティングだ」

「今度は変なところないだろうな…」

「それが、敵キャラが全て作者の嫌いな食べ物というシュールな感じになってて…。しかも、特に牡蠣には相当恨みがあるらしくて、他と比べて、異常に出てくる量が多いんだ」

「画面いっぱいに牡蠣が広がってるのを想像してしまった…」

「本当にカオスだな…」

「ていうか、なんか会場が騒がしくないか？」

「僕はもう嫌な予感しかしないんだけど…」

勿論、ざわつく会場の理由など1つしかなく、モロの予想は当たっていた

海斗はその圧倒的な量の敵、というか食べ物の数々を、弾をかわしつつ、確
実に仕留めていった
この程度なら、ざわつくこともないなんて言える難しさでもないのだが、海
斗は最小限の攻撃しか撃たず、また敵を倒すことで得られるパワーアップア
イテムを何ひとつ取る事がなかった

「やっぱり…」

「おいおい、パワーアップアイテムを取らないっていうのも、確かにすごい
が、あいつ無駄撃ちを一切やらないぞ。長押ししてれば、連射する仕様にな
っているというのに」

「そもそも、初期の弾の威力なんて相当低いんだよ」

「というか、そんなわざわざ自分に不利なプレイをするってことは、相手を
挑発でもしてんのか？」

「パフォーマンスとしては、非常に面白いがな」

そんな高評価をされていたが、当の本人は…

何だ、これは
ちょっと多すぎないか
とにかく、相手から出たものに当たらなければいいんだよな
ていうか、倒しても弾が出てこないか、これ

アイテムも本気でよけていたのだった

Ｓｉｄｅ　一子

海斗がいきなり、ハードを選択をしちゃったときはどうしようかと思ったけ
ど、なんか凄い動きでどんどんクリアしてっちゃう
やっぱり、海斗はすごいんだなー

ていうか、夢中になって、海斗の応援をしてたわけだけど、よく考えてみる
と、キャップが勝たないと海斗がファミリーに入ってくれないんだよね

でも、気づいたら海斗を応援しちゃってる自分がいる
結果のことなんか忘れて、今目の前で勝負してる海斗に“頑張れ”って、言
いたくなっちゃう
そう、いつの間にか、目なんて離せなくなってる

この前、大和に“大丈夫か”とか、“重症じゃないか”とか言われて、思い

きり否定してたけど、アタシ全然だいじょぶじゃないかも

それにしても、隣のまゆっちもずっと海斗を見てる気がする
まあ、友達だって言ってたし、まゆっちも賛成だったもんね
仲良しだったら、つい応援してしまうのも分かる気がする

だから、この変な胸騒ぎは気のせいだよね、うん

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

その後も海斗はイージーとハードの差を感じさせることもなく、逆に少しリ
ードしているくらいで、次々とステージをクリアしていった

「次が最終ステージだよ」

「もう、なんかこのゲーム見てるだけで疲れるんだが…」

「で、最後のステージはなんなんだ？」

「最後はガンアクションだよ」

「また、ろくなものじゃないんだろうな…」

「ああ、この面は作者が極度の猫アレルギーだったことから、猫が敵だ。し
かも、最終面で作るのも疲れたのか、絵ではなく写真だ」

「よりによって、ガンアクションにそれを持ってくるか」

「もうツッコミも疲れたのだが、一応言っておく。何故、操作キャラが犬なんだ」

「作者が犬派らしい」

「ホント、どうでもいいな」

「まあ、すぐに決着がつくだろう」

「例によって、会場が騒がしいよ…」

「え、おい！大変なことになってるぞ！」

そこには相手の攻撃をひたすら避ける海斗のキャラの姿があった

やはり、その回避センスは見事だったのだが…

「その面は倒さないと、先に進めないよ！」

そう、このステージは避けるだけでは先に進まない

それを聞いた海斗は…

「そんなの分かってんだよ」

くそ、そうだ。そんなことは分かっている
だが、なんで、猫を撃たなきゃいけねえんだ
しかも、何ゆえ写真なんか使ってんだ
こいつらが一体何をしたっていうんだよ

「攻撃はできねぇ」

そう言い、相手の攻撃を避け続けることしか出来なかった

「もしかして、海斗、猫だから、手を出せないんじゃ…」

「え、そうなんですか!?」

そして、硬直状態が続いたまま…

「よし!クリアー!」

隣の画面に“ゲームクリアー”の文字が

「第一回戦は風間翔一の勝利!!」

同級生連中が揃って、歓声をあげた

「まさかの大逆転、というか最後はなんで、手を出さなかったんだ？」

「謎だけど、ハンデってことかな？」

「まあ、時間もないし、第二回戦にいくぞ」

今度は風間翔一がくじを引いた

「第二回戦は画力対決だ！」

「まあ、これはそのままで絵の対決だな。判定は美術の先生に任せている。
そして、モデルは2人にあまり差が出ないような人ということで、まゆまゆに決定だ！」

「わわ、私ですか！？」

「というか、この勝負、キャップの絵を見たことがある奴なら、もう勝負は
見えているようなものなんだよな～」

「というと？」

「キャップの描く絵はまるで写真のようだからな」

由紀江が出てきて、椅子に腰掛ける
すると、風間翔一はすぐに描き始めた

俺も描こうか
どうせなら、正面から描いてやりたいよな
それにちょっと緊張しすぎじゃないか

「由紀江、こっち向いてくれ」

そう笑って話しかける

「あ、はい！」

そうそう、やっぱり笑顔の方が女の子は絵になる
由紀江の無理している感じの顔もそれはそれで面白いがな

深く考えても、絵なんて習った記憶はないので、さらさらと適当に見たまま
筆を走らせていく

「よし、出来たと」

「俺も出来たぜ」

このときは、ファミリーの皆は誰もがキャップの勝利を確信していただが…

「じゃあ、一斉にオープン！」

2人の絵が観衆の前に並べられる
それらは、両者ともハイレベルな出来だった

「な!?流川も上手いじゃないか」

「本当にどっちも写真みたいですね…ははは」

本当にその通りでほとんど同レベルだった
違いといえば、風間の描いた物は少しひきつったような顔
海斗が描いた物は満面の笑みであった

「では、判定をしてもらおう」

「ふむ、どちらも非常に良く出来ていて、甲乙つけがたいが、この

娘はこん
なに笑顔ではない。よって、より忠実に再現されている風間の勝ち
とする」

おい、そんなことないだろ
由紀江は俺に向けて、こんくらいの顔してくれたぞ
よく見ろや、おい

勿論、そんな柔らかな表情は海斗の前でしか、見られなかった
自身が意識していなかろうが、その違いは顕著にあらわれていたのだ
そんな乙女の恋心が美術教師の判定に反映されるわけもなく…

「第二回戦も風間翔一の勝利!!」

またもや、同級生軍が声を上げる
一年生たちはジャッジにケチつけているようだ

おい、待て
3本先取で俺が2回負けたってことは

「早くも風間翔一、勝利にリーチだ」

やばい

出たくない競技はギブアップとか、そんな悠長なことをどの口が言っていた
まさに後に退けないじゃねえか

しょうがねぇ
くじで出た競技に全力で取り組むとするか

残された道はその進路のみ

２４話　「退路は断たれた　後編」（後書き）

ありがとうございました
いきなり後がなくなってしまいました
ここからどうなっていくのか
次回もよろしくお願いします

25話　「前進あるのみ」（前書き）

前回早速、ピンチに追い込まれました
では、三回戦目からです
どうぞ

25話　「前進あるのみ」

くそ、まさか追い込まれるとは思っていなかった
せめて、取って取られてのシーソーゲームを繰り広げたかったぜ

「くじをどうぞ…」

「ああ」

なんで、そんなに心配した顔をしている一年生スタッフ
このボロボロの状況に同情されてるのか

だとしたら、最悪だ
同情されるくらいなら、軽蔑された方が百倍ましだ

いや、言える立場じゃねえって話だよな…

「あ、じゃあこれで」

「はい……あの、頑張ってください」

“あの”の先は聞こえるか聞こえないかくらいの声だった
だが、どうやらあの子は純粋に応援していてくれたらしい
いやー、良い人もいたもんだ

「では、第三回戦目は自立力だ」

自立力？
そんなもの、俺には溢れてるぞ
なにせ、今までほとんど人と関わることなく、生きてきたんだからな
負ける気がせんわ

「ということで、料理対決だー」

は？料理
無理無理、生まれてこの方、料理なんてやったことないわ
負ける気がせんとか、言ったの誰だ。

おい、俺これで負けたら、本当にやばいんだが

「作る料理は自由だ、用意された食材から一品を作ってくれ」

「これはどちらが有利なんでしょうね」

「うーん、キャップは何でもそつなくこなすが、特別料理が得意というわけ
でもないしな。かといって、流川もどうみても料理したことないって感じだ
し、案外わからんな」

「といっても、風間はこれでリーチ！次で決まってしまうのか」

よし、包丁なんかは短刀と同じだと思えば良い
道具は初めて見るものもあったが、大体使えることが分かった

だが、問題はそこではないのだ
料理をやったことがない奴がいきなりやれと言われても、そもそも作るもの
がないのだ、そうレパートリーが。
これは出来がどうこう以前の問題だ

せめて、レシピでも読みながら、することが出来れば、それなりのものを作
ることが出来ると思うのだが…
何故、俺はそういう物を読んでこなかったのだろう
一度でも読んだことがあれば、記憶の中から引き出したのに

そう、レシピさえあれば…

「俺は本場で漁師さんに教わってきた海鮮丼を作るぜ」

…ん？
そうか！別にレシピがなくたって、作れるじゃねぇか

早速、俺は調理にとりかかる

まずは材料だ、そう材料はシンプルにだ。

にんじん、じゃがいも、玉ねぎ、肉。
こんなものでいいだろう

それらを適当な大きさにカットして、さっと軽く炒める

砂糖、醤油、みりんの量は正確に。
この量でＯＫだったはずだ

「ん、流川も何か迷いなく作っているな」

「あれは…」

そして、よく煮込む

最後に一度冷まして、また熱するのがポイントだったな
味が染み込むんだとさ

これで、完成だ
俺の人生、初めての料理
“肉じゃが”だ

「さて、両者完成！」

「審査員は料理部の生徒２０人だ」

風間翔一の料理は既に完成していたらしく、さすが本職に習っただ

けのこと
はあって、要となる盛り付けはほぼ完璧だった

「見た目的には完全にキャップの方が華があるな」

「では、いただきます」

料理部が両方の料理を食べ終える
公平な判定を行うため、私語は禁止されているらしい

「美味しかった方の札をあげてくれ」

結果は…
海斗　２０　ＶＳ　翔一　０

「おーっと、これは圧勝だ!!理由を聞かせてくれ」

「はい、こちらの方の料理は確かに盛り付けも素晴らしく、味も美味しかっ
たです。しかし、そちらの方の肉じゃがからは、何か優しい味を感じること
が出来ました。純粋に美味しいと思いました」

「すごい高評価だ、これで勝負は2対1!まだまだ終わらない」

良かった、なんとか勝てた

まあ、これは自分の力でもなんでもないな
今回勝てたのはあいつのおかげだ
だから、俺はそちらに向かって、笑って、親指を突き出した

ありがとな、由紀江

Ｓｉｄｅ　由紀江

海斗さんが作り始めたのは、肉じゃがでした
しかも、その作り方は私と全く同じでした

あのとき、屋上で恥ずかしさをごまかそうとして、何を話していいのか分か
らなくて、ずっと言っていた肉じゃがの作り方。
無駄に細かに話してしまった調味料の分量。
海斗さんは全部、聞いてくれていました

本当に長いだけの面白くもない話。
海斗さんは覚えてくれていました

そして、勝負に勝った海斗さんはこちらに向かって、笑顔でグーサインをし
てくれました

それだけで嬉しくなってしまう
海斗さんの言葉一つ、行動一つですぐに笑みがこぼれてしまいます

それは隠すことなんて、不可能で。

私は自覚してしまいます
海斗さんのことが真剣に好きなのだと…

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「よーし、では四回戦の発表だ。四回戦目は集中力！」

「えー、これは大音量の騒音の中で集中力を乱さずに、的の真ん中に矢を射
てもらうという戦いです」

「勿論、先に達成したほうが勝ちだ」

ふむ、なんか今までで一番まともじゃないか

だが、弓矢は扱ったことないな
こういうのは初見でやるのは、きついぞ
俺には後がないってのに…

「そんな状況で本当にできんのか？」

「ん？どうした、流川」

「いや、ただでさえ、中央に当てるって難しいのを、そんな状況下で本当に

できんのかと思ってさ。不可能なことを延々とやらせられたくはないんでね。
出来るっていうことの証明が欲しいんだが」

「やる前から、何を言っているんだ。はぁ、まあいい。京、頼めるか？」

「しょーもない」

司会が誰かを呼んだかと思うと、紫髪の女が出てきた

その女は大音量の中で弓を構えた
目を閉じ、的に全神経を集中しているようだ
そして、ぶれのない動きで矢を放った
その矢は一直線に的の中央に突き刺さった

「これでいいか、不可能じゃないってことが分かったろ」

「ああ、十分だ」

先に達成したほうが勝ちならば、先攻をとらない道理はないだが、どうやら、くじを選んだ相手が先攻らしい

「いくぜ！」

これで決められたら、お終いだが、そんな心配は杞憂に終わった
矢は的にすら当たらなかった
まあ、初心者ならこれが当たり前だろう

ともあれ、俺の番だ
俺は大音量が流れるその場に立つと、目を閉じて、頭をクリアにした
先ほど、見たばかりの映像を脳内で再生する

そして、同じ呼吸で動作をなぞっていく
波長を合わせて、一挙一動を流れに預ける

ヒュンという風切り音が耳に入った

目を開けると、矢はしっかりと中央をとらえていた

俺がふぅと息を吐き出すと、会場がわいた

「おぉっと、なんということだ！一発クリアーー！」

「なんなんだ、アイツ。ゴタゴタ言ってたくせに決めやがった」

客席の一年生や有志のスタッフからは黄色い声があがっていた
逆に翔一のファンは驚いて声も出ないという感じだった

「やっぱり、流川先輩ってスポーツも出来るんだね」

「でも、部活入ってないんでしょ、何でなんだろ」

「ていうか、ホント、かっこいいなぁ～」

相変わらず一年生には大人気であった

「海斗、すごい…」

「やはり、海斗さん、見事です」

この2人もファミリー入りのことなど忘れて、海斗に目が釘付けになっていた、恐るべき恋のパワー。

そして、違う意味で声を出せない少女もいた

Ｓｉｄｅ　京

今の動き、完全に私の模倣だった…

さっきの見本の一回で盗まれたってこと?

弓使いは目がいいなんて、思ってたけど、あいつは一体?

ていうか、私の動きを見るためにあんなことを言った…

つまり、私はまんまと誘導されたんだ

本当に謎ばかりで実態がつかめない

そんな男にワン子とまゆっちは恋しちゃってるんだよね…
しょーもない

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「いやー、小さい頃にやってたからかな」

まあ、嘘だけど。
流石に初心者が一発っていうのはまずいからな
切羽つまっていたとはいえ、少々やりすぎた感が否めない

だが、これで勝負は五分五分
どうあっても、次で決着だ

25話　「前進あるのみ」（後書き）

ありがとうございました
海斗のいいとこ、少しはあったんじゃないでしょうか
なんとか、最終戦までもつれこみました
次回、やっと決着です（たぶん

26話　「男の意地」（前書き）

ついに川神戦役決着です
果たして、どちらが勝つのでしょうか

26話　「男の意地」

「さて、こんな大接戦になるなんて、誰が予想したでしょう。二回戦を立て
続けにとられた流川海斗選手でしたが、その後の二回戦を圧倒的な結果で勝
利し、ついに勝敗は第五回戦にまでもつれこんだーーー！」

「ハゲの無駄に気合が入った実況も許そう。これは本当に面白くなってきた
な、フフフ」

そう、これに勝てば、最初の失敗はどうでもよくなる
俺は最後のくじをひいた

「では、発表する。最後の戦いは脚力対決だ！！」

え、なんだって
ここにきて、キックの対決とかはやめてくれよ
もうギブアップできねえんだからさ

「競技内容はこのトラックを先に5周したほうが勝ち。ただそれだけだ」

ほう、よかった
まじで蹴りあいなんて洒落にならんからな

「これは流川は相当なはずれくじをひいたな」

「ああ、なんとなく分かります」

「キャップは本当に風のような男だからな」

Ｓｉｄｅ　一子

とうとう最後の試合まできちゃった
本当に海斗は意外なところで凄いときがある
弓矢だって、長期戦になると思ってたのに、京みたいに一発で決めちゃうし。

最初はあんなに心配だったのに、もう勝っちゃうかもしれない
そう思った直後だった

第五回戦目は競走の勝負。
キャップの一番の得意分野だった
最後の最後でこれが来るなんて、本当に…
キャップは運もいいからなぁ

流石にこれでは圧倒的にキャップが有利だ
このままではキャップが勝ってしまう

それはアタシにとっては、海斗のファミリー入りを意味しているん

だから、
本来喜ぶべきだったのかもしれないけど。
それでも最後まで海斗を応援しちゃうのは、好きなんだからしょうがないと
思う

でもこの勝負ばかりは正直不安だった
キャップの速さはみんな認めている
海斗はどうするんだろう？

アタシは色々考えたけど、結局これからの試合を見届けることしか出来なか
った

“頑張って、海斗”

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺たちは既にスタートラインに着いた
あとは合図を待つだけの状況だ

しかし、さっきの司会の言うことや会場の様子から見るに、対戦相手は随分
と足には自信があるらしい
それがどの程度のものなのかまでは、流石に会場の様子などからは想像する
ことは難しいが、用心に越したことはないだろう
最初は相手と並走しながら、様子を見るというのが、最善だろう

「風間ー、頑張って」

「一周差くらい、つけちゃえー」

いや、一周差は流石につけられたくないんだが…
まあ、慣れたもんだよな、アウェーなんて

「流川先輩、頑張ってくださーい」

「応援してまーす」

え、俺を応援してくれてる子なんて、いるのか
しかも、むさい男などではなく、女の子が。

そりゃ、若干機嫌が良くなるのは、男として仕方ないだろう
いやー、単純単純。

「では、位置について」

いよいよ、来るらしい
まあ、負けない程度に頑張るか

「よーい、……スタート！！」

ヒュン

いや、洒落じゃなく、そんな音が俺のすぐ隣から聞こえた
そして、風間翔一がありえないスピードで走り出しているのを認識した

…いや、まずいだろ！
俺もすぐに後を追う

速いというのは、予想していたし、警戒していたが、ここまでとは思っていなかった
こいつ、本当に足が速いじゃねえか。
いや、皆そう言ってたっつーの。

くそ、俺としたことが…！
警戒はしていたとはいえ、これは油断としか言いようがない
相手の実力を見誤っていたんだからな
油断にはあれだけ、危機感をもっていたにも関わらず…

作戦変更だ
並走なんて悠長なことは言ってられない
俺は相手のすぐ後ろ、背中に張り付くようにして走る

「なんか、流川は変なところを走ってますね、走りにくそうですけど」

「いや、あれはたぶん…」

スリップストリーミング。
カーレースなどでは、協力して使われるような有名な作戦だ
相手の車の後ろに付くことで、自分は空気抵抗を受けずに走ることができる
それをただ単に人間同士でやっているだけだ

ていうか、本当にこいつ速いな
もう、三週もしやがった

俺は肩で息をして、加えて息を切らせて走っている
足の動かし方も不規則にする
いや、流石に疲れてないのはおかしいからね

「流川の奴は相当疲れているみたいですね。それでも、付いていってるのは
凄いですが。」

「フフ、本当に凄いよなぁ」

見るからにヘトヘトな俺は、一定の距離を保ち、追い続ける
今は片手でわき腹辺りを押さえて、限界って感じだ

「流川先輩、頑張ってください」

「諦めないでー！」

「あと少しですよ、倒れないでください」

客席の一年生も心配してくれている
どうやら、完全に俺は今にも倒れそうっていう風に映っているらしい
いい感じだ

そんな状態でとうとう最終ラップに入ったらしい
そこで少し、前方のスピードが上がる

おいおい、勘弁してくれ
俺も距離を離されないようにピタリとその後につく

耳を澄ませてみる
前からは、スタート直後に比べて、多少乱れた息遣い。
やはり、若干の疲労の色が見てとれる
流石にこの距離をそのスピードで走って、疲れないなんてのは困るしな

これなら、いけそうだな

「いけー、風間ー」

「このままゴールだ！」

もう負けられないんだって

そして、本当に最後の直線に入る
ここだな…

俺は今まで絶対に位置を守っていた背中から横に出る
そして、不安定な姿勢はそのままに、急激にスピードをあげた
そう、あたかも最後の力を無理矢理振り絞ったかのように。

実際はスリップストリーミングで温存していた体力を使っているので、別段
疲労を感じるようなことはなかった
ま、地道な節約の勝利ってとこだ
悪いな、この勝負は俺がもらった

そう思った直後、何かに抜かれた
いや、何かではない

“風間翔一”

俺の競走相手しかいない
そいつは風のような速さで走っていた
どこにそんな力を残していたんだ

最後まで楽しませてくれる奴だ
本当に面白い
こちらの予想を悉く裏切ってくれる

こんな奴が率いるファミリーか…

さぞ、はちゃめちゃで騒がしいのだろう
だが、それだけに面白そうだ
そんな中に混ざるなら、少しは楽しめるかもな

“風間ファミリー”

入ってみてもいいんじゃないだろうか

残念ながら、そんなことは思わない
俺はあくまで自己中野郎だからな
団体なんかに所属して活動したら、そこを滅ぼしかねない
一子や由紀江は別として、よく思わない奴も絶対いるだろうしな

そんなことしなくとも、俺は自分で楽しみを見つけていく
ファミリーに入らなくとも、面白い奴らとは関われるしな
それに…

さらに走るスピードをあげて、追い抜く

…応援してくれてる子たちの前で敗北は御免だな

「1着、流川海斗！よって、川神戦役、勝者は流川海斗！！」

会場から割れんばかりの歓声が上がる

決着はついた

26話　「男の意地」（後書き）

ありがとうございました
走りで勝ってしまいましたね海斗が。
ファミリー入りはしないという方向でまあ決まってましたうだうだ引っ張ってきましたがね
では、次回もお願いします

27話　「正義の使者」（前書き）

さて、戦いも終わり、
その後の話ですね
では、どうぞ

27話　「正義の使者」

会場からの歓声はまだ鳴り止まない

「さすが、流川先輩！」

「はぁ、かっこよすぎます～」

「あんなに疲れながらも勝っちゃうなんて」

「でも、最後のほう、凄く速かったよね」

うむ、なかなか手こずってしまった
スリップストリーミング作戦をとってなかったら、やばかったかもな。なー
んつって。

ていうか、不自然な動きで長距離を走ってしまったから、なんか足が重い。
自分で作った策に溺れるとは…
まだまだ、修行が足りんな
いや、ほんとにあんな格好で一番最後のスピードを出したのは、確実に失敗
だったな、うん。足が訴えてるもの。

だが、俺にはやらなければならないことがある
足が痛くとも、そんなことは気にしてられない

男には果たすべき瞬間がある。それが今だ！

・・・・・・・・・・・・・・・

「おい、ストラップよこせ」

「あ、ああ、はい」

「うむ、よろしい」

「本当にキャップに勝っちゃうなんてな、しかも走りで。俺も含めて、ファ
ミリーの皆は信じられない光景だったと思うぞ」

「いや、俺、体ボロボロだし。火事場の馬鹿力って奴よ、いや真剣で冥界見
えたね、ありゃ」

「え！？海斗、だいじょぶなの！」

「海斗さん、どこか怪我なさってるんですか！？」

おい、いつの間にやってきたんだ、君たち…
そんな大げさにとらないでくれよ、なんか嫌な予感しかしないから、本当に

怖いんだよ

「アタシが保健室まで連れてってあげるわ、ほら肩貸してあげる」

「私もお供します、海斗さん。肩をどうぞ」

「え、いや大丈夫。そこまでじゃないから。帰って寝れば、俺って大抵のこ
とは自己再生しちゃうし」

なんだ、どうした
2人とも、なんかキャラ変わってないか？
こんなにグイグイ来る感じだったっけか。

Ｓｉｄｅ　大和

今現在、目の前で2人の恋する少女による物理的な男の取り合いが絶賛開催
中である。

キャップに勝ったこの男。
やはり、キャップと同じように、何かしらの人を惹きつける力があるのかも
しれないな
しかし、キャップとは、全く違った性質の魅力なのだろうな
だが、あるのは間違いない
実際に引っかかった事例が2件も目の前に並べられてるなら、もは

や否定し
ようがないだろう

それにしても、今の2人の様子…

大方、キャップに勝った流川が一年生にもっと人気が出ると思って、危機感
でも持ち始めたってところだろうな
あの声援や歓声の量は流石に無視できない事態だもんな
“かっこいい”なんて言われてたら、そりゃ焦るだろうな、自分たちは思っ
ていても、絶対に言えないようなことだろうからな

いや、それだけじゃないか
なんか、互いに視線を数回交わしているような気がする
これはあれか
やっと、すぐ近くに恋敵がいるってのに、薄々気づいてきたか？

今更すぎるだろうが、恋は盲目って奴なのか

まあでも、そんなに危険が散らばっていたら、そりゃこんだけ、積極的にも
なるよな

というか、こんな空気の場所は非常に居心地が悪い
俺はあきれ半分に二人の健闘を祈りつつ、その場をあとにした

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「いや、だから保健室はいいって」

いまだ、少女たちとの攻防は続いていた
どうする、元気を証明するためにタップダンスでもするか
ステップを刻んでしまおうか

「止まれ、流川海斗！」

誰かの声が前から聞こえた
非常に真っ直ぐと通った声。
そして、呼んでいるのは俺の名前。

俺を呼ぶ奴なんて、限られている
だが、その筆頭であるお二方は俺の隣に陣取っている

ということは、誰だ？
そして、前にはその答えがあった

前に金髪の嬢ちゃんが立っていた
まあ、明らかにハーフだろうな、そんなオーラが出ている
そんな子がブロンドを風になびかせ、俺の眼前で仁王立ちという、
なんとも
おかしな状況に陥っている

てか、こいつクラスメイトだっけ
なんか見覚えあるんだよな…

あ！思い出した
こいつ馬に乗ってた奴だ
そうだ、そうだ。
俺って、結構人の名前とか覚えられるタイプなのかもな
こういうのって、人に好感もたれるだろ
世渡り上手ってやつか、俺そんな称号もらえちゃうか

「それで浜千鳥が何の用だ？」

「それは自分の馬の名前だ！！」

ありゃ、みすったみたい。
浜千鳥が馬の名前なら、こいつの名前はなんだよ

馬の子だろ……馬子？
え、まさかの蘇我氏だったりしちゃうわけ。
あれ、でもあいつって男じゃなかったっけ

「クリスティアーネ・フリードリヒだ！！一応、クラスメイトだろ！」

俺が思案顔で長い間沈黙していたのに、しびれを切らしたらしい
凄まじい勢いでそんなことを言われる

しかし、言われても全くピンとこないんだが…
うん、俺には永遠に社交的と呼ばれる日は来ないのかもしれない

「で、その蘇我スティアーネなんちゃらが、何の用だ」

「クリスティアーネだ！！お前は馬鹿にしているのか」

思っていることが口に出てしまった

いや、でも案外良い名前なんじゃない、蘇我スティアーネ。
ほら、なんか和洋折衷な感じが滲み出してさ。
これなら、戦争とか起こらないんじゃないかな、うん

「本当にふざけた奴だ、流川海斗」

「だから、用件を言えっての。俺も暇じゃねえんだ」

「お前、なぜ先程の試合で疲れている演技などした」

な！？
おいおい、なんでばれてんだ
自分で言うのもなんだが、完成度は高かったと思うんだが
実際、みんな心配してくれたしな

「クリ、どうしたの急に？」

「何のことだ？」

「とぼけても無駄だ。自分は父様の軍の訓練を幼い頃より、見てきた。本当
に疲れた者の動きは目に焼きついている」

おい、可憐な女の子がそんな汗臭いものを幼い頃より見てるんじゃ
ないよ
こんなことでばれるなんて、計画破綻もいいとこだ

「いや、疲れてないわけないだろ。今だって、足が悲鳴あげてんだよ」

「大方、慣れない走り方をしたから、痛めたのだろう。演技だとしか思えん
が、それでもあの走り方であのスピードを出せることは、今でも信じられな
いからな」

こいつ、エスパーか
なんで、そんなに見抜けるんだよ
これは嘘をつき続けても無駄なようだ

「ああ、確かに少しおおげさになっていたところはあるかもしれな

い。だが
疲れていたのは本当だし、何より、それでお前に文句を言われる筋合いはな
い。勝負に負けて、言い訳に使ってるわけでもないしな。」

「お前は真剣に勝負しているキャップに対して、ふざけた態度で臨み、あた
かも苦戦しているように演技した。これは相手への侮辱だ。自分はそれが気
に入らないと言っているのだ！！」

「だから、俺は…」

「本気でなど走っていない！キャップには悪いが、あれはまぐれでも何でも
ない。お前の走るスピードの方が遥かに速かった。実際には接戦なんかじゃ
なかった。ただ、お前が手を抜いていただけだ！そんな実力を持っていなが
ら、お前は…！」

なんか、怒りかたが尋常ではない
手を抜いたことがそんなに気にくわないのか

「だが、それはお前の主観的な意見でしかない。それを証明するものはない
し、もう過ぎたことだ」

「ああ、そうだな。だから…」

一呼吸をおき、言い放った

「流川海斗、お前に決闘を申し込む！」

27話　「正義の使者」（後書き）

ありがとうございました
やっと終わったと思ったらという感じですね
どうなることやら
次もよろしくお願いします

28話　「義の心」（前書き）

いやー、話数を重ねるごとに毎日更新の辛さが分かりました
いつまで続くんでしょうね
さて、海斗とクリスはどうなったのか
どうぞ

28話　「義の心」

翌日、俺はデジャヴに陥っていた

「だから、嫌だっつーの」

「駄目だ、自分と決闘しろ」

昨日も全く同じことがあったような気がする

あれ？一日経ったよな。
今日は昨日の明日で間違いないよな
意味が分からなくなってきた

そうだ、結局あの後…

～

「流川海斗、お前に決闘を申し込む」

「は！？なんで、そうなる」

「自分がお前と戦えば、実力が分かるだろう。自分との戦いで、その速さを

出せば、手を抜いていたことの証明になるし、たとえ出さなかったとしても
キャップの仇をとれる。自分は中途半端で勝てるほど、弱くはないからな」

「断る」

「なに！？」

「そんなもの俺にメリットがねぇじゃねぇか」

「だが、そうするのが最善だろう」

「だから、それはお前にとってだろうが！」

「むー、とにかく、自分と決闘をしろ！」

「絶対に嫌だっての」

埒が明かないと思った俺は、もう日が沈みかけ、すっかり暗くなりかけてきた校庭を足早に走り去った
正直、足の痛みなんて気にならなかった

〜

まあ、そんな一時的な逃避なんて、こうして翌日に登校してしまえ

ば、全く
意味をなさないわけだが…
そして、朝からこの昼休みまで、ずっとこんな感じが続いている

「自分と勝負するんだ」

「断るって、言ってんだろ」

「1回だけでいいから」

なんだそりゃ。
悪いお薬の販売でもお前はしてんのか
その1回で人生は駄目になるんだぞ。

そうかと思うと、突然なにかを閃いたように、ニヤニヤと俺に話しかけてきた。
何か、いい作戦でも浮かんだのか?

「ふ、お前は勝負から逃げるというのだな。この自分に恐れをなして、戦う
前から、敵前逃亡というわけだ。」

「別にそれで結構だが…」

「なに!?」

本当にどんな作戦かと思えば…

確かに逃げるなんて言われ方は癪だが、ここで勝負に乗ってしまったら、この目の前の知能指数が低そうな少女に、まんまと乗せられたということになってしまう。

なんか、そっちの方が不名誉じゃないか

俺の一瞬の間の脳内会議ではそういうような結論に至った

「ちょっと、クリ！なんでまた、海斗に絡んでるのよ」

そんな硬直状態にあった俺たちの間に一子が入ってきた

「なんだ、犬。自分は決闘を申し込んでるだけだ、あのふざけた試合は犬も見ただろう。何故、犬こそ、昨日からそちらの肩を持つ？」

「え！別に肩なんて持ってないわよ。た、ただ一生懸命走ったかもしれない相手に少し言いすぎじゃないかしらってだけで、別にクリと海斗が2人で話してるのを邪魔しようとか、そういうんじゃなくて…」

なんか最後の方はもごもご言っていたが、どうやら一子は俺の味方でいてくれるらしい。
俺なんかのために、あんなに顔を真っ赤にして、勢いよく怒ってくれるなんてな。
本当に良い奴だよなぁ

「自分はこの学校のルールに則って、決闘を申し込んでいるだけだ。どうあっても、受けてもらう」

「でも、海斗は迷惑してるし…」

だが、相手の意志も相当固いようだ
一子が仲介に入ってくれたまでは良かったが、またすぐに元の硬直状態に戻ってしまった
ふむ…どうしたもんか

永遠にこのときが続くのではないかと思ったそのとき、教室の前方のドアがひとりでに開いた
いや、外側から誰かが開けただけだな

「流川先輩、お弁当作ってきたので、私たちと一緒に食べてくれませんか！」

そこには緊張した面持ちの少女が三人くらい居た
どうも一年生らしいが、俺と面識はない
そう。知らない子なのだが…

「悪い、俺この子たちと昼飯食べる約束してたんだわ」

「え！？」

「じゃ、行くか。屋上でいいよな」

「あ…。は、はい！」

「え、ちょっと海斗！」

「おい待て、逃げるのか！」

使わせてもらわない手はないよな
一子には悪いと思ったが、こんな居た堪れない空気の中にいるのは、疲れる
んだ
あとで、ビーフジャーキーでもやるから、許せ

そして、海斗が居なくなった教室。
そこには取り残された2人がただ佇んでいた

いや、正確には…

「うう、海斗さんにお弁当を作ってきたのに、中の険悪な様子が変わるのを待っていたら、先を越されてしまいました〜」

「おー、大丈夫だ、まゆっち。次があるぜ〜」

廊下にももう1人いたのだった

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

今日は色々と大変だったな

結局、あの後はポテトサラダやら、アスパラのベーコン巻きやらをご馳走になって、去り際に礼を言ったら、なんか騒がれた
いや、終始なんか変なテンションではあったんだが。

一子にも、理由を話して、今度菓子でも買ってやると言ったら、安心したよ
うに“なら、しょうがないから許してあげるわ”なんてことを言われた

何はともあれ火種は解決だ

「流川海斗、自分と決闘をしろ！」

いや、しっかり燃え盛ってんじゃねえか
校門前にもう小火くらいまでいってしまったのではないかと思われる、ご存
知、元火種の蘇我ちゃんがいた

「お前も大概、しつこいな…」

「当然だ、たとえお前がつれない態度をとったところで諦めることはない。
自分の意志は曲げないからな」

「はあ、随分と殊勝な心がけだな。何がお前をそうさせる？」

「自分が信じるものは義の心だ。だから、その義は何があっても、貫き通す
と決めている。お前の曲がった行為はキャップへの侮辱であり、自分の義の
道に反する。だから、決闘をすることで道を正してやるのだ。それこそが自
分の信じる義であり、今の自分の動く理由だ」

まったく…

この学校はこんな奴等ばっかなのかよ

お節介と正義感、直情的性格にこの頑固さ、全部が欠けることなく集まって
こいつを構成しているらしい
あ、あと、少しアホなところもか。

―愚直
なんか人を小馬鹿にするときなどに使われる、融通のきかないばか正直。
だが、これはとんでもない美点じゃないだろうか
たとえ、その姿が愚かでも、真っ直ぐに。
自分が信じるもの“芯”を一本通して、ぶれることなく、前を向いて、立っ
てやがる

おまけにこの瞳だ
なんか、こんな真っ直ぐな瞳、つい最近も見た気がする
そう、タッグマッチで俺を見事に変えてくれたあの瞳。
ほんと、迷惑なもんだ

「分かった分かった」

「ふん、お前などに義の心が理解できたとは思えんがな」

「ちげぇよ」

「む？」

さながら、人の意志を変える魔眼ってとこか？
えらく危険なものだな

ていうか、こいつの意志が本物なのは、今確認した
断り続けたところで、ループするだけだろうな

ほんと、俺も変わっちまったよな

かばんを地面に放り投げる
そして、俺はクリスに向き直る

「決闘したいんだろ？やってやるよ」

じゃ、お望み通り、その意志に付き合ってやりますか

28話　「義の心」（後書き）

ありがとうございました
文中でも言ってますが、海斗結構変わりましたね
本質的なところは最初から不動なのですが、
なんというか考え方の方向といいますか、しっかり影響されてますんじゃ、次回も戦闘？ですかね

29話　「真剣勝負」（前書き）

なんだか、小説って難しいですね
おそらく、回を重ねるごとに自分のボキャ貧が露見するのでは
今回、戦闘ですね
どうぞ

29話　「真剣勝負」

―クリスティアーネ・フリードリヒ
ほんと、迷惑なほど真っ直ぐな奴だ
一子といい、由紀江といい、目の前のこいつといい、穢れのない奴が多すぎ
るな、俺の周りは。
迷惑なんだが、願わくばこいつらにはこのままの瞳でいてほしい
思っていてほしい、世界は綺麗なものなのだと…

「今すぐ始めようぜ、わざわざ観客の前でやる必要はない」

「だが、教師の立会いのもとでなければ…」

「だとよ、学園長」

「何を言っている？」

さっきから気配が感じられていた
いや、違うな。気配はなかった
そう、不自然なほどにその空間には自然の気配すらなかった

どんなに隠れるのが一流な奴でも、それは一部、つまり自分だけだ
広い視野で全体を見渡せば、違和感がどうしても露見する

「ほっほっほ、ばれておったか。やる気に満ち溢れた闘気を感じた

のでな。
気になって、見にきてしまったわい」

「確か学園長には特権があるんだよな」

「ああ、ワシがこの勝負、責任をもって見届けよう。決闘を許可する」

「だそうだ。武器のレプリカは持ってきたか？」

「相変わらず、生意気な小僧じゃ。当然、持ってきておる」

「自分は勿論レイピアを使わせてもらう」

「俺は…」

俺の本来の武器は己の拳。
だから、いつもならば、ここで何も選ぶことなく、戦闘突入なのだが…
それでは、あまりにも早く終わってしまう

こいつは正々堂々勝負することを望んでいる
眩しいくらい、自分の道を貫き通しているのだ
だから、俺はこいつに本気で応えてやると決めた
一切、手を抜かず、遊びは無しで、正面からぶつかってやる

「俺もレイピアでいく」

「なに！？」

ならば、使ったことのない得物で。
相手の得意とするフィールドで。
存分に戦って、勝利をもぎとってやろうじゃねえか
―だって、俺の本気を見たいんだもんなぁ。クリス。

「レイピアのレプリカは一本しかないんじゃが…」

「クリス、お前、実物持ってるだろ？」

「ああ、確かに所持しているが」

「お前はそれを使え、俺がレプリカを使う」

「な、お前自分が何を言っているのか分かっているのか！当たり所によっては、大怪我どころじゃないかもしれないんだぞ。最悪、死に至る可能性もある。そんなのは危険すぎるだろ！」

「馬鹿じゃねえのか、お前」

「なんだと？」

「慢心も大概にしとけよ。あとで恥をかくのはお前だぜ？」

「だから、なんだと言っている！」

「はあ、いいか？お前は俺のした勝負が侮辱だと言った。だから、俺はこの
勝負、真剣でいく。手加減なんてしてやらない」

「当然だ、それで？」

「だから、お前の攻撃なんて、一撃も当たらないから安心しろって、言って
んだよ、考えりゃ分かるだろ」

「何を言っている！慢心はどちらの方だ。それこそ、お前が自分の攻撃を全
て避けられる保証がどこにあるというのだ。そんなものを信じて、易々と引
き受けた結果、殺人者にでもなったらどうするんだ！」

「おい、学園長。そのやり方でいいな？」

「ふむ……」

「学園長？」

「俺は本気だぜ」

「…分かった、その勝負を許可しよう」

「本気ですか！？学園長」

「ほら、許可も下りたんだ。さっさと始めようぜ。それとも何か、いざ勝負
が始まるとなったら、お前が逃げ出したくなってきたか？」

「死んでも後悔するなよ。今から上がるのはリングだ。責任は取れない」

「絶対に取ることのない責任より、負けたときの格好良い言い訳でも考えて
おいたらどうだ？」

「く…、つくづく馬鹿にしている奴だ」

クリスと俺が数歩の間隔を空けて、対面する

クリスはレイピアを前に突き出すように構えていた
あれが、正しい構え方なのだろう
対して、俺は普通の長刀を扱うように体の横に構えた

レイピアは初めて扱うが、別段特殊というわけでもないだろう
結局は刺突に特化した剣だというだけだ
刀剣の類には変わりないだろう

得物の間合いは把握した
剣の長さは1メートルよりも少し長い程度
現在の立ち位置から、いきなり攻撃を仕掛けるのは少し難しい

ていうか、放課後の校門前なんて目立つところだから、若干のギャラリーが

集まるのは覚悟のうえだったんだが、人影は見当たらない
これは学園長がなんかやってくれたっぽいな
ありがたいかぎりだ

「それでは、これよりクリスティアーネ・フリードリヒ対流川海斗の決闘を
開始する。始めぇ！！」

その合図の瞬間、クリスが物凄い勢いで間合いを詰めてきた
それはスピードだけで相手が強いということが分かるほどだった

そして、俺が武器の射程に入ると、連続突きを繰り出してきた
その数もキレも、日ごろの訓練が垣間見えるような、質の高いものであった

俺はそれを、体全体を大げさに使ってかわしていく
ここでカウンターなどを狙うようなことはしない
まずは相手の力量をしっかりと見定め、その推測の強さにいくらか上乗せし
た力を持っているとして扱う
慎重に辛抱強く。
臆病者だろうが、結局これが最善の策である

「かわしているだけでは、自分には勝てないぞ」

「お前こそ喋ってる余裕があるのか？一発も当たってないぜ」

安い挑発には乗らない
そして、また避け続ける

攻撃の速さ、攻撃の間合い、次の攻撃までの間隔、攻撃の向き、相手の癖、
技の数、時折見られる例外の動き。
あらゆる事象を見極め、分析する

―準備は完了した

相手の連続突きが一旦止む
相手は次の攻撃に備えて、少し後退するが…

俺はその間を一気に詰める
カウンターの素振りも一度も見せなかった
そんな突飛な行動には対処ができないだろう

だが、クリスはそれに動じることもなく、真っ直ぐと俺にレイピアを突き出
してきていた
俺はかなりの速さでクリスに向かっている
当然、そんなカウンターに急には、人間では反応出来ない

しかし、予想していれば、無理なんてことはない

用心深いとでも言おうか
クリスは攻めの最中も、欠かさず俺の手の動きに目線をやって、気を配り、

カウンターを警戒していた
そんな防御重視のクリスならば、この攻撃に反応するのは明らか。
そのカウンターは予想済みだ

俺は今までのようなモーションの大きい回避ではなく、首を少しだけ傾け、
その突きを受け流した
首筋にレイピアのひんやりとした感触がある
レイピアの側面が斬れないからこそ、出来るギリギリ。
両刃付きのレイピアもあるっていう話だから、それは流石に試合前にしっか
りと確認済みだ

「なに!?」

いくら、クリスでもあの速さのカウンターを避けられるとは思わないだろう
驚いた声をあげている

俺は相手の懐に入ったところで、レイピアの柄でクリスの得物を掴む手の甲
を強打した
そして、握力が抜けたところで相手の武器に思い切り、横薙ぎの一閃を放つ
無論、それはクリスの手を離れ、遠くの地面に弾き飛ばされる

呆然とするクリスに俺は武器を振り上げ…

それを人の居ない方に放り投げた

「俺の勝ちだ」

完全な勝利のあとに言い捨て、去ろうとする

「待て、何故突きの一撃も放たない？それをしなければ、とどめとはならないぞ」

「別に必要があれば、何でもやるが、好き好んで、女に手をあげようとは思わねえよ」

「それは戦士としての自分への愚弄だ。本気で来ると言っただろう」

「お前は“本気でぶつかってくる奴には本気で応える”、それをしなかった俺がお前の言う義に反するといって、俺に立ち向かってきたな」

「ああ…」

「一本通った芯のようで、それが気持ちが良かったから俺は勝負を受けた。俺にしてみれば、無闇に人を傷つけないっていうのが、通したい筋なんだよ。だから、クリスが侮辱だ、愚弄だの言ったところで、俺がそれを曲

げること
は絶対にありえない。それが俺にとっての“義”だからだ」

「……お、お前は」

目をパチパチと瞬かせて、信じられないような顔をしている
疲れも出てきたのか、汗や顔の紅潮が凄い
というか、なんだか嬉しそうに見えるんだが…

「流川…海斗…」

「ま、要するに弱いものいじめはしたくないってことだ」

「な、なんだと!?」

「ん?俺に完膚なきまでにやられた分際で言い返す言葉でもあんのか?」

「む、むむむむーっ!腹立つー、海斗腹立つー!」

「は、悔しかったら精進しやがれ」

嬉しそうにしてやがると、からかいたくなる
なんかクリスはリアクションが逐一面白い
故になんかいじりたくなってしまうキャラであった

からかわれたクリスは顔を真っ赤にして、怒りを表していた

しかし、最初の刺々しさや敵対心はないようで。
言葉の端々からは幸せそうな感じが滲み出していて、ついこちらも笑顔にな
ってしまっていた

「…勝者　流川海斗」

その言葉は決闘に対してのものだったのだろうか
学園長の呟きは2人の空間を邪魔することなく、虚空に消えた

29話　「真剣勝負」（後書き）

ありがとうございました
きりのいいとこまで書いてたら、結構長くなりました
そして、クリスのフラグはどうなんでしょう
次回こそまた日常に戻れるようなそんな気がします

３０話　「人気と嫉妬は表裏一体」（前書き）

なんだかんだで３０話です。
結構書きましたね。
もうここまで積み重ねると、矛盾や重複が心配になります。
絶対ありますね、はい。
そんな感じですが、どうぞ

30話　「人気と嫉妬は表裏一体」

翔一、クリスとの連戦を終えた俺には、やっと安息が戻っていた

「海斗、今日一緒に二人でお昼食べましょ」

「ん？一子か。別にいいが、食堂か？」

「え、えっとね、今日はなんていうか、作ってきたっていうか…」

と、そこへ…

「海斗、おはよう！」

クリスがやってきた

「ああ、おはようさん」

「ちょっと、クリ！なんで、クリが海斗って呼んでるのよ」

「別に犬が呼んで良くて、自分が駄目だなんてことはないだろう。
なあ、そ
うだろう？海斗」

「俺は全然構わないが。むしろ名字より名前で呼ばれるほうが俺は好きなん
だ、前にも言っただろ」

「むー、確かにそうだけど…」

なんか、一子は何かに納得がいかないらしい
なんだっていうんだ

Ｓｉｄｅ　クリス

昨日の勝負。
海斗は宣言どおり、手を抜くようなことはせず、本来の戦い方をしてくれた
ように感じた。
自分の攻撃をかわしつつも、余裕があるように見えた

しかし、最後の最後で自分にとどめをささなかった
決闘は誇りをかけた勝負。
女、男と言う前にそれは戦士同士の戦いであり、当然自分も覚悟をしたうえ
で、戦いに臨んでいた

だが、海斗はそれは海斗自身の“義”であると。
絶対に曲げたくない自分の確固たる信念であると言っていた
まあ、その後に弱い者扱いをされたが…
完璧に負けた自分としては、言い返せる立場ではなかったのは事実だ

そして、海斗は言ってくれた
自分の生き方が気持ち良いと。
芯が通った生き方だと。

自分が信じる道だった
だから、誰になんと言われようが変えるつもりはなかったし、人の言うこと
なんて気にもとめなかった

でも、海斗はそんな自分の生き方を認めてくれた
人の評価なんてどうでもよかったはずなのに、とても嬉しかった
それは海斗が自分よりも強い者だったからなのだろうか。
それとも…

だが、まだまだ海斗は人をなめていて、自分の望む“義”には程遠い
これからも、傍で道を正してやらねばな

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　大和

「大和ーーーっ」

「分かったから、岳人何も言うな」

「ていうか、その顔を見れば、誰でも分かりそうな気もするけど」

そう、岳人はもはや涙目もいいとこだった
その原因は言わずもがな、前で笑っている金髪お嬢様なんだが…

「なんで、あいつばっかり、モテやがるんだ」

「世の中なんて不条理だらけだ」

「来世に期待しようよ」

「お前らはフォローというものを知らんのか」

まあ、岳人のダメージが大きいのも無理はない
今までは確かに、ワン子やまゆっちやその他の一年生、モテているのは男と
して、腹が立っていただろうが、岳人にしてみれば、彼女らは恋愛対象では
なかったのだ。
だから、まだ抑えられていた部分があった。

しかし、クリスは違う。
同級生で外人さんで、おまけに美人ときた。
岳人も勿論、恋愛対象というか、あわよくばなんて、狙ってもいただろう。

だが、今のクリスの目は完全に流川しか捉えていない
昨日までは敵意しか込められていなかったのに、1日で恐ろしい変

わりようだ
今の流川を見る目はまるで…

「はあ、なんていうかさ、大和」

「ああ、さらに基地に居づらくなりそうだな」

ワン子やまゆっちと同じ、恋する乙女のようだった

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

よく分からないが、前の２人は何故か火花を散らし始めた

「いいわ、なら決闘よ、クリ」

「受けて立とう、犬」

「なんでもかんでも、すぐに決闘にもってくんじゃねえ」

「で、でも…」

「ならば、また海斗が相手になるか？」

「“また”？」

「おい、クリス」

変なことを言う前にクリスを引き寄せる
そして、小声で言った

「昨日の決闘のことはあまり口にするな」

「別にいいだろう」

「わざわざお前は自分の負けを言いふらしたいのか」

「な、なんだと！」

「いいから無闇に話すな。あれは俺とお前だけの秘密だ」

学園長も見ていたとか、そんなツッコミはスルーだ

「二人だけの秘密…」

「いいな？」

「あ、ああ、承知した」

何故か顔は赤いが、なんとか了解してくれたようだ
これで無事争いはなくなったわけだ

「かーいーとー」

うん、全然なくなってないな。
一子はお怒りの様子だった

「なに、二人だけで楽しそうに話してるのかしら？」

「いや、別になんでもないよな、クリス」

「・・・・・・・・・」

おい、黙るなや。
完全になんかあったと思われるだろうが。

「おい、クリス。おーい」

「・・・・・・・・・」

返事がない、ただの屍のよ…じゃなくて。
駄目だ、なんか明後日の方向を見て、心ここにあらずのようだ。

「秘密…」

え、なに?俺の話きこえてないの。
ちょっとお嬢さん、そのスタンス貫いちゃう感じ?

「かーいとっ♪」

いや、♪とかじゃないからね。
めちゃめちゃ不機嫌オーラが出てるから、なんか黒いから。
その後、一子をなだめるのに苦労したのは言うまでもない

Ｓｉｄｅ　一子

アタシの初恋、その相手が海斗なのは分かりきったことだ。
そう、恋を知ったのはついこないだの話。

それまでは恋なんて考えたこともなかった
興味がないとか、そういうのじゃなくて、本当に考える機会がなかったって
だけで、それでアタシの生活は普通に過ぎていた

でも、海斗に会ってから、守られてから、名前で呼んでくれてから、
…アタ
シのことを“パートナー”って言ってくれてから。
アタシの世界はそれまでとはガラリと変わった
恋がなかったアタシの世界は、海斗への恋する気持ちで溢れてしまった

今じゃ、まぶたを閉じれば、海斗の顔が浮かんでくるし、目を開けても、海
斗の姿を探しちゃう
本当に今じゃアタシの一日は始まりから終わりまで、海斗で埋め尽くされて
ちゃってる
修行のときでさえ、海斗のことを考えている自分がいる
まあ、それでおろそかになるようなことはなくて、逆に海斗のことを考えて
元気をもらってるくらいなんだけど……

い、いや、そんなことはどうでもよくて！
恋をすると、今まで見えてなかったことが見えてくる
自分の行動や思考が変わるっていうのは当たり前だけど…
そう、周りの変化にも気づくようになってしまう
つまり、分かっちゃう

“クリスも海斗を好きになったんだ”って

まゆっちのときも、そうだった
最初は自分のことでいっぱいいっぱいで周りを見る余裕なんてなかったんだ
けど、今見れば、はっきりと断言できる
まゆっちも海斗を見る目が恋をしている目なんだ
たぶん、アタシもおんなじ目をしてるんだろうな

そして、海斗は一年生にも人気があって、次はクリスだ
なんで、アタシはこんな大変な人を好きになっちゃったんだろう
でも、その道からアタシは外れない、どんなに険しくても…

―心から、好きだから

海斗が一筋縄でいかないのなんて、分かりきっていたことだなんかクリスと二人で話していて、何かを隠してるみたいで、つい
つい言葉
にいらいらが表れちゃうけど。
今日のお昼で挽回してやるもんね、だから今は許してあげる。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

30話　「人気と嫉妬は表裏一体」（後書き）

ありがとうございました
クリスはまだはっきりとは自覚してはいないです
というか、恋と認めてはいない？みたいな。
自分で書いてて、わけわからんですね、どうぞスルーしてください
（笑
そして、次回はまたお弁当ネタ。
このワンパターン思考回路をどうにかしてください

31話　「愛の形」（前書き）

先に言っときますと、今回最長です
まさに衝動で書いてたら、止まりませんでした
では、どうぞ

31話　「愛の形」

数時間前の一子の決意。
“今日のお昼で挽回してやるもんね”
それは目の前のカオスな状況によって、かき消されていた。

「・・・・・・」

「海斗さん、どうぞ食べてください」

「海斗、自分のいなり寿司をやろう」

そう、約束の昼休み。
屋上には何故か当初の予定より多い、少女3人と彼女たちに囲まれる男子学
生の姿があった。
そもそも、こうなったのも…

～

チャイムが四時限目の終わりを告げる。

「じゃ、早速いきましょ、海斗」

「おう、屋上でいいな」

「うん」

そう、朝の約束通り、一子と海斗は一緒に食事をするのだ。
場所にいつもあまり混んでいない屋上を選び、いざ教室を出ようとしたとき
のことだった。

「む、どこへ行くのだ、海斗」

教室から一緒に出ようとした二人を呼び止めたのはクリスだった。

「屋上で飯食べてくる」

「なら、自分も行こう」

「な!?駄目よ、クリ。今日は海斗と……ふたりで」

「なぁ、海斗はいいだろう?」

「まあ、何人で食ったって、味は変わらんしな」

「よし、ならば決定だ。早速、行こう」

「ちょ、ちょっと!」

若干一名、納得していない者がいるのだが、海斗がそれに気づくはずもなく、
三人が教室の外へ向かおうとする。
そして、ドアを開けると…

「あ、海斗さん」

「おう、由紀江か」

「あの、海斗さん、今日もお弁当作ってきたので、一緒に…」

「え!?まゆっちまで」

「今日は一子とクリスも一緒だが、いいか?」

「あ…、はい」

「じゃあ、屋上に行くぞ」

〜

そして、現在の状況が出来上がっているわけである

「海斗、どうだ、いなり寿司は。美味いか?」

「ああ、普通に美味いが」

「それなら良かった」

「海斗さん、今日は魚の煮付けを作ってきました」

（うわ、まゆっちのお弁当レベル高い）

「うむ、由紀江は料理上手いな」

「あ、ありがとうございます」

（やっぱり、味も美味しいんだ…）

「一子は何も食べないのか？」

「え！？あ、アタシは……今日は食欲ないから…」

「ん？そうなのか。具合でも悪いのか」

「いや、朝ごはん一杯、食べちゃっただけだから。本当に心配はいらないわ」

「なら、いいけど」

（まゆっちのお弁当に勝てるわけないよ…）

一子が持ってきたお弁当は昼休みが終わるまで、出されることはなかった。
そのことは一子しか知らない。

昼休み前の決意は空しく、一子の初めての頑張りは伝わることがなかった。
そのことも一子しか知らない。

（なに、やってんだろ…アタシ）

―涙すら流せなかった。

Ｓｉｄｅ　一子

「はっ！」

目が覚める。
どうやら、四時間目の授業中に寝てしまったっぽい。
今日、いつもより早く起きたからかな？

それにしても…
本当にひどい悪夢だったわ。
なんか、妙にリアルだったし…
海斗の鈍感さから言えば、正直ありえなくないと思う。

ていうか、アタシ持って来ちゃって、誘ったけど、海斗にお弁当渡せるのかな？
そりゃ、早起きして、なんとかちゃんとした物になったはずだけど…
まぁ、そのおかげで、今寝ちゃって、あんな悪夢を見たんだけどね。

いや、でも今の夢のおかげでいい危機感を持てた。
もし、どんなことが起こっても、絶対に海斗にお弁当を食べてもらおう。

たとえ、海斗の口に合わないかもしれなくても、誰かのものに劣っているか
もしれなくても、このお弁当はアタシが海斗のことだけを考えて作ったもの。
初めての好きな人に受け取ってほしい。
詰め込んだ思い、伝えたいから。

かといって、出来れば邪魔はされたくない。
アタシだって、その……海斗を好きなわけだし。
二人っきりでご飯とか、食べれたら嬉しいなんて思うわけで。

キーンコーンカーンコーン

四時限目終了のチャイムが鳴る。
アタシは目的のために、すぐに海斗のもとへ行く。

「海斗、屋上にいきましょ」

「お、一子、早いな。んじゃ、行くか」

よし、成功！
やれば出来るじゃない、アタシ。
これも事前に知らせてくれた夢のおかげかも。

「海斗さん」
「海斗」

…全然、成功じゃないじゃない。
教室を出た途端、まゆっちとクリスに声を掛けられた。

待って、こんなにベタなことって、あるものなの？
これが大和が言ってた、“まさゆめ”とかいうやつかしら。
でも、絶対海斗にお弁当は食べてもらうんだから。
そんなとこまで、夢の通りにするわけにはいかないわ。

「お昼一緒にどうですか？」

「自分と食べに行こう」

「悪いな、今日はあんま食欲ねぇんだ」

「え！？」

驚いて、声をあげてしまったのはアタシだった。

「そうですか、分かりました…」

「なら、仕方ないな」

そう言って、クリスとまゆっちが去っていく。
これは予想外のラッキー

…じゃなくて！
え？どういうことなの？

「え、海斗、食欲ないの？大丈夫？」

「は？なに、言ってんだ。普通にあるぞ」

「だって今…」

「今日は“二人”で食いたいんじゃなかったのか？」

「あ…／／／」

こんなの反則だ、ずるいずるいずるい。
ただでさえ、嬉しい言葉なのに。
夢があんなだっただけに、不意打ちもいいとこだ。
顔だって、真っ赤だと思う。

「じゃ、今度こそ行くか」

「う、うん」

そして、アタシたちは“二人”で屋上に向かった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺たちは屋上にあがってきた。

「で、俺は何も持ってきてないんだが。」

「あ、アタシがお弁当作ってきたから。」

「お、そうか。サンキュ」

なんか、俺の周りは弁当作ってくれる子が多いな。
皆、優しいねぇ。

「う、うん。じゃあ、これ…」

そんな卒業証書じゃないんだから、両手でかしこまって渡さなくても。
俺は一子から、弁当を受け取る。

「開けていいんだよな」

「は、はい！」

何故、敬語？
おかしな一子を放っておき、弁当を開ける。

中には色とりどり沢山のおかずが入っていた。
ミートボールに動物の串が一個一個刺さっていたり、ナポリタンが小さい入
れ物に小分けにされていたり、人参がハート型に切ってあったりと。
この前の由紀江の弁当は、料理が出来る奴の弁当って感じだったが。

一子の弁当は、なんか全体的に可愛い感じで溢れている。

しかも、なかなかに美味そうだ。

俺が食べようと、ミートボールに手を伸ばすと…

その前に他の手が伸びてきた。

何かと思って、そちらを見ると、一子がこちらにミートボールを差し出してきていた。

手震えてるし、顔が明らかに真っ赤なんだが、大丈夫なのか。

「ほ、ほら、海斗！口開けて、あーん」

「あ、ああ…」

“あーん”って…

恥ずかしいんだったら、無理してやるなよ。

ったく、よく分からん奴だな。

「あー」

「は、はい」

大人しく従って、口を開けると中にミートボールが入ってきた。

「ど、どうかな？」

「うむ、美味いぞ」

「そ、そう？なら良かった」

そう言って、満面の笑みを見せる一子。
その可愛らしい笑顔を見て、一子ってもてるんだろうなー、とか思ってみたりする。
性格もよくて、誰にでも分け隔てなく接するもんな。
そんな一子に好きになられる奴は幸せだろうが、大変そうだな。
ていうか、弁当なんてもらってる俺もあぶねぇんじゃねえのか？

「海斗、もっと食べない？」

「あ、ああ。もらうぞ」

「わかった、……ふふっ♪」

まあ、何故かこんな上機嫌だから、いいんだけどな。
ただ、冷静にこの食べさせられてる状況を考えると…
なーんか調子狂うんだよなぁ
うーむ…よし

Ｓｉｄｅ　一子

なんか、アタシ、夢の反動ですごい大胆なことしちゃった。
自分から、海斗に…海斗に…、あ、“あーん”とか、しちゃったり！
もう自分がどうにかなっちゃいそう。

海斗も美味しいって言ってくれたし。
頑張って、研究したかいがあったわ。

もっと、この幸せの時間を味わっていたい。
そう思って、また海斗に食べてもらおうとすると…

「一子、お前も食え。ほれ、口開けろ」

「へ？」

目の前の状況が飲み込めない
目の前に差し出されるミートボール。
うん、これはアタシが今朝、作ったものだ。間違いない
そのミートボールに刺さったウサギの串。
うん、海斗が動物好きだってことを考えて、アタシが用意したものだ。これ
も間違いない
で、その串を持っている手が海斗ので……って！

え！？海斗がアタシにミートボールを差し出して、食べさせようとしてくれ
てるってことじゃない！

どどど…どうしよう！
いや、答えなんて出てるんだけど、頭がパンクしてて…

「ほら、一子の作った奴美味いだろ？」

「ん……」

だけど、体は正直らしくて、無意識で口を開けてたらしい
確かにとっても美味しい。
だけど、これはアタシの腕っていうよりは…ね。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

その後も、海斗と一子は時間ぎりぎりまで平和な時間を過ごしていた
もっとも、一子からすれば、平和というよりは戦いだったのだが。
無事、勝利を収め、褒美まで献上された少女は終始、笑顔だった。

だが、平和とは長く続かないものだ。
平和を乱す影は動く。

「流川海斗か…」

31話　「愛の形」（後書き）

ありがとうございました
この小説の主成分は妄想ですね
今回それが爆発してます
正直、手が止まりませんでしたから
そして、なにやら不穏な空気…

32話　「重すぎる愛」（前書き）

毎回、感想をくれる方、本当にありがとうございます。
自分が毎日更新を続けられているのは、そのおかげです。
この場を借りて、お礼を申し上げさせていただきます。
では、どうぞ。

32話　「重すぎる愛」

平和な昼休みはもう終わり、一人帰路についていた。
今日は美味い昼飯も食ったことだし、晩飯代節約しようかな
そんなことを考えながら、橋を渡っていると。

む？
前から、何か気配を感じる
少数の不良だったら、軽くひねりつぶしてやるのだが。
前から感じる気配は数も多ければ、いつもの雑魚というわけでもない。
ちょっとばかし、強い不良でもいんのか？

面倒だが、仕方ない。
今歩いてきた道を引き返そうとすると…

後ろからも同じような気配を感じる。
囲まれたか…
なんだなんだ？今までの奴らの復讐にでも来たってか。
だが、報復なんて面倒を回避するために一瞬で仕留めてきたはずなんだが。

流石に適当な相手へのかつあげには数が多すぎる。
明らかに狙っての行動だってことは分かりきっている。
まあ、ポジティブに食後の運動だとでも思うか。

そう腹をくくる。
そして、だんだんと俺を囲む輪は小さくなっていき、敵の姿が視認できるよ

うになってきた。

だが、その目に飛び込んできたのは、釘バットなんかを持ったひどいセンス
の服をまとった目つきの悪い不良などではなかった。

持っているのは、銃のようなもの。
アクセサリーなどの類はなく、その身は整った軍服？のようなものに包まれ
ており、服装の乱れなんてものは見当たらなかった。
いや、まあ目つきはそんなによろしくないが…

これはもう大変なことになってきたんじゃないか？
だってねぇ、皆さん眼光がぎらついてるもんなー。
しかも、そそがれている先はこの俺一点というね。
もう完全に俺がターゲットなのね、はいはい

そんな野郎どもの中から一人の女が出てきた。
左目には眼帯。紅い瞳に紅い髪、それは弱い者など軽がる飲み込むような印
象を与える深い紅蓮だった。
服装も他の奴らとは違い、大量にいる同じ軍服の男どもの中で一人だけ突出
しているというか、そんな印象を受けた。
まさに紅一点だな
…はいはい、面白くない面白くない

「貴様が流川海斗だな」

「悪いが、人違いだ」

「嘘をつくものではない。こちらで調べはついている」

「じゃあ、聞くなよ」

「形だけの確認だと、分かりなさい」

随分と偉そうな態度だな（↑自覚なし）
とりあえず、話も通じない奴ではないか。

「見たところ、軍人か何かか？」

「いかにも。私は軍の少尉である、マルギッテ・エーベルバッハだ。ここに
いるのは、誇り高きドイツ軍の我が部隊だ」

「その誇り高い軍人が一般人に大量の銃を向けてんのは、一体どういう了見
だっての」

「安心しなさい。それは強力な麻酔銃だ。殺傷能力はない」

「いや、安心する要素なんて無かったんだが。そうじゃなくて、俺が聞いて
んのは、何の用だってことだよ」

「貴様、お嬢様に何をした？」

「は？」

「何をとぼけている、貴様の卑劣な行為は今更、隠せるものでもないだろう」

「いや、待て。色々、なんか誤解もあるようだが、まず、まずはだ。そのお
嬢様っていうのは誰だ？」

「当然、クリスお嬢様のことに決まっている」

「あん、クリス？あいつって、軍の関係者なのか？」

「クリスお嬢様はドイツ軍中将フランク殿の娘だ」

「へぇ…で？なんで俺が軍に狙われてるんだよ」

「お嬢様に手を出しておいて、何故だと？おかしなことを言う」

「は、もしかして俺がクリスと友達だってだけで、狙われてんのか？」

どんだけ、溺愛してやがんだ、その親父は。

「友達だと？とぼけるのも大概にしろ。あのお嬢様の様子は……チッ。一体、
どんな手を使ったんだ、催眠術の類か？それとも、弱みでも握って

脅迫でも
したか？」

「言ってる意味が理解できん」

もしかして、あの決闘がばれてんのか？
そうだとしたら、娘を敗北させられて、お怒りなのか。
それでこの軍を呼んじゃうわけか。

めっちゃ甘やかされて、育ってきたんだろうな。
薄々感じていた、空気の読めなさにも合点がいった。

「お嬢様から手を引きなさい。そうすれば、酷い目にはあわせない」

「だから、あっちから話しかけてくるんだっつーの」

「どうしても拒否するということらしいな」

全然、俺の言い分、聞いてくれねぇよ。
こりゃ、言うだけ無駄か。

「ならば、体で分かってもらうしかない」

「おいおい…軍事力を何に割いてやがんだ」

「構え！」

一斉に無数の銃口が俺に向けられる。
その方向はまさに四方八方、死角なしの全面攻撃だ。
まあ、麻酔銃らしいけどな。
なんにも嬉しくないが。

「この状況でも気持ちは変わらんか」

「・・・・・・・」

「だんまりか。よろしい、ならば、その身をもって味わいなさい。
…撃て！」

俺は引き金が引かれようというその瞬間、立っていたその場から跳躍した。

連続した射撃音が耳に響く。
無事に一発も当たらなかったようだ。

全方位攻撃といっても、いや全方位攻撃だからこそ、その弾道は予想できる。
囲まれているということは流れ弾が確実に誰かに当たってしまうのだ。
すると、相手の足の方を狙うのが、ベストということになる。
跳弾しないようにする弾なんて、作ろうと思えば作れるだろう。
それに殺傷性はない麻酔銃だって言ってたしな、そもそも跳弾の心配なんて

ないか。

着地すると同時に一番近い軍人に走って向かう。
当然、相手はこちらに撃ってくるが…

今度は弾をしっかりと見ることが出来る。
弾だろうが、パンチだろうが、見えれば大差は無い。
避けるスピードを少しあげれば、いいだけのこと。

俺は最小限の上半身の動きだけで弾をかわすと、その軍人の腹部に当て身を
見舞う。
悪いな、手刀とかスマートなことをしてる余裕はねぇんだ
そいつから、銃を強奪した。

俺は手にした銃で、一発一発確実に軍人を気絶させていく。
勿論、相手の銃撃には絶対当たらない。
あくまで、避けることの方が優先だ。

てか、強力な麻酔使ってやがんな。
軍人がバタバタ倒れていきやがる。
即効性ありすぎだろ。
さぞ、充実した軍なのだろう。
指揮している奴に問題がありそうだがな。

撃っては避け、避けては撃つ。
あとはその作業の繰り返しだ。
弾数がなくなったら、また他の奴から銃を奪い、また弾数だけの相手を殲滅。
地道だが、確実に。

数分後、俺の周りには遺体のように軍人たちが転がっていた。
いや、俺は何も悪いことしてないからな。
絵面だけ見たら、そりゃ誤解されてもおかしくないけども。

そりゃ、銃を持って、倒れている大量の軍服の中に、立っているんだからな。
想像したら、かっこいいとか思うだろうが、大間違いだぞ。
完璧に大量殺人犯にしか見えないからな。
悪人でしかないわ。

まあ、無傷だし。文句はないか
後半は作業だったな、なんか前やったゲームのようだった。

「とりあえず、ステージクリアってことで」

そう呟いて、肩の力を抜く。

「……フフ」

だが、ゲームは終わらない。
海斗は第二ステージに行かなければならないのだった。

32話　「重すぎる愛」（後書き）

ありがとうございました
なんていうか、海斗が普通じゃないことは
もう明らかって感じですね。
武器ありとはいえ軍を1人でやっちまいましたからね
次回はどうなってしまうのかと。

余談ですが、暇な方は活動報告も見てくださるとありがたいです
たまになんかほざいてるので（笑

33話　「狩る者と…」（前書き）

今更すぎますが、R－15ってどこからなんですかね。
血が出たら?身体的に破壊されたら?
なんか、基準が分からないんですよね。
これからもつけなくて大丈夫かなぁ…

33話　「狩る者と…」

Ｓｉｄｅ　マルギッテ

ふっ、流川海斗、面白い
フランク中将の命令であり、クリスお嬢様を守るためと思って、あまり気が
乗らない、ひ弱な野うさぎを狩りにきたんだが…

思わぬところで獣は発見できるものだ
麻酔銃という強力な武器があるとはいえ、あの大勢の精鋭部隊に、この短時
間で勝利してしまうとは。
しかも、銃弾をかわすときのあの動き…
まるで見切っているかのような無駄のない回避だった

受ける印象は完全に弱者のそれだと思っていたのだが…
“人は見かけによらない”なんて、一度たりとも信じたことはなかったが、
こいつに関しては信じざるをえないな

こいつなら、あるいは少しは楽しめるだろうか

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「この銃って、結構軽いんだな」

流石、良い武器は違うといったところか
1つくらい持って帰っても、罰はあたらないだろうか

「じゃ、帰ろっかね」

帰るのを邪魔してた軍人さんもお休みのようだしね
そして、橋を進もうとするのだが。
目の前に立ち塞がった、あの女少尉が。

「なんだ?まだ、何か用なのか?倒したんだから、帰っていいだろ」

「まだ私が残っている」

「お前もそういうタイプなのね…。悪いけど、俺は別に自ら女の子に手を出
そうなんてことはしねぇんだよ。銃なんて向けるかっつーの」

「お、女の子!?貴様、馬鹿にするのもほどほどにしなさい。私は軍人であ
り、戦いのプロだ。言葉に気をつけなさい」

「いや、職業がどうだろうと、関係ないだろ。まあ、誇りがどうこうっての
は分からんでもないが…つってもなぁ」

「私と勝負して勝利する。それしか、貴様が家に帰れる方法はない」

「おいおい、勘弁してくれ。俺はさっきの戦いでヘトヘトなんだよ。限界な
わけ、分かる?何を勘違いしてるかは知らんが、今の俺と戦ったところで面
白くないぞ」

「ふ、何を言うかと思えば…。貴様の状態がどうであろうと、現時点での全
力をもって、戦いに臨めば、私はそれで満足だ。貴様がどれだけ疲れていよ
うが関係のないこと」

(微塵も疲れていないようだがな…)

こいつ、俺が疲れてないってこと、見抜いてやがるなだが、何を言ったところで無駄と判断し、この対応。

はあ、まったく疲れる相手だクリスといい、こいつといい、なんで軍の関係者はことごとく俺の演技を見抜いてくんだか…。やりにくいこと、この上ないな

「鬼だな。流石軍人ってとこか?強引過ぎやしないか」

「強引だろうがそんなのは私の知るところではない。私は貴様と戦うことで
戦闘欲を満たす。ただそれだけだ。貴様からはただの野うさぎとは

違うにおいがする」

（私と同じ狩る側のにおいがな）

「おいおい、軍人がバトルジャンキーなんて、色々と問題があるんじゃないのか？よくクビになってないな」

「それだけ実力を買われていると理解しなさい」

「ん～、しょうがねぇな。俺だって自分の命の方が大事だからな、相手が女の子だろうと、必要とあれば、銃を使うのもやむなしだ。どうしても、俺の邪魔をするっていうなら、ここら一帯に転がってるお前の部下同様、眠ってもらうが、どうする？」

そう言って、麻酔銃の銃口を相手に向ける勿論、引き金を引こうという気持ちなんて、これっぽっちもないがな。

ただの脅しだ

俺が素人とは言っても、さっきの戦いを目の前の女軍人は見ているそう、俺が一発も銃弾を外していないこともだ

脅しは十分な効果を持っているだろう

「もしかしなくとも、私は脅されているのか？」

「そんな滅相もない。俺は今日は体調が優れないから、帰らせてくれって、
言ってるだけだぜ」

「随分と態度のでかいお願いだな」

「ま、そういうことだ。今日のとこは大人しく…」

次の瞬間、拳がとんできた
その動きを見る限り、銃の脅しなんて全く効果がないようだった

「なっ、あぶね！」

「やはり、回避能力だけは本物のようだな」

「そりゃ、どうも。痛いのは嫌だから、こっちは必死なんだよ」

「それにしては無駄のない動きだがな」

「気のせいだっつーの、偶然だ偶然」

こいつ、本当に見透かしてきやがる
もうほとんど、何言っても無駄な気がするが、一応返しておく

「ならば、これは避けられるかな？」

そう言うと、相手はどこからかトンファーを取り出した
なるほど、それがお前の愛用の武器ってところか
警戒レベルを上げといた方がよさそうだな……って！

ヒュン

トンファーが鼻先をかすめる
こいつ、段違いにスピードが上がりやがった
武器でリーチも長くなっているのは分かるが、拳のときとここまで違うもん
なのかね。
おそらく、トンファーの扱いは幾度もの戦場での経験によって、仕上げられ
たものなんだろうな
少しも気は抜けないな

「よく今のをかわすことが出来たな」

「いや、身の危険を感じて咄嗟にね…。っていうか、お前は一般人の命を奪
うつもりなのかよ」

「この期に及んで、一般人などとはよく言う。心配せずとも、気絶くらいで
済むから、命の心配はない」

そう言って、次々と縦横無尽なトンファーの攻撃が繰り出される
縦、横、横、ななめ、横、縦、ななめ、ななめ、縦
規則性なんて、全くない連撃が襲ってくるが、焦ることはない
1つ1つをしっかりと目で捉えて、対処していく

避け続けていれば、相手も疲れてくると思ったのだが、どうやら違うらしい
時間が経つ度に、攻撃の密度や激しさは増していった
普通の奴なら、何事かと、心を乱されるだろうが…
攻撃のパターンに慣れてきた俺には今更速くなろうが、強くなろうが関係の
ないことだった

落ち着いて、相手の隙を探す
どんなに速く攻撃を行ったとしても、その攻撃間の隙というのは絶対になく
すことは出来ない
…ここだな
俺はその隙にカウンターを入れる

「なっ！？」

相手が驚いて、後退する
まあ、そうだよな、戦闘中にデコピンされれば、誰でもそうなるだろう
極めて正常な反応である

「どうやら、馬鹿にしているようだな…」

あれ?もしかして、怒りでも買っちゃったか

「ならば、こちらも本気を出そう」

そう言うと、おもむろに眼帯を外す
てっきり、戦場で目に傷でも負ったのかと思っていたが、中身は綺麗なもん
だった

「Ｈａｓｅｎ　Ｊａｇｄ！」

「な！？」

馬鹿だった。迂闊だった。油断していた。
相手はきちんと“本気を出す”と言ってくれていたのに。

次の瞬間の攻撃は、明らかにさっきのが別人と思わせるような変容ぶりであ
った。
威力もあがっていたりするのだろうが、何より迅い
しっかりと、もっと大げさに警戒していれば、反応できただろうが、そんな

いきなりの攻撃に俺は回避行動をとる暇がなかった
そして、俺は咄嗟に…

バキッ

体に凄まじい衝撃がはしる
おー、これはやばい威力だったんじゃないか。

「なん…だと…」

目の前には呆然とするマルギッテ。
その手には無残に折られたトンファーが握られていた

「危なかったぜ、銃を持ってなかったら、やばかったな」

「馬鹿な…、このトンファーはドイツの高価な木材で作られている
特別製の
ものなんだぞ」

「所詮、木は木だったってことだろ。鉄の方が硬度があったってだけだ」

「ありえない…」

いや、なんかそんなに落ち込まれると罪悪感が…。
え、もしかしておばあちゃんの形見とかじゃないよね。

やめてよ、そういう取り返しのつかないのは。

「まぁ、そのなんだ。お前みたいに強い奴が俺みたいな逃げ腰の奴を相手にしてたら、自分の品位を下げるだけだぜ」

「慰めてでもいるつもりか…」

「いや、俺が女の子を泣かしている最低野郎だと思われないための、せめてもの自己防衛だ」

「く…！また、女の子などと。それに泣いてなどいないだろ！」

「いや、言葉のあやって奴だよ」

「・・・・・・・・」

そんな目で睨まないでくれ、頼むから本当に俺が泣かせたみたいになるだろう

「まあ、怪我はないよな。トンファーは悪かったが、経費かなんかで落としてくれ」

「逃げる気か」

「お前はまだ言うか…。そんなのはまた今度な。あー、それとそのホットドッグだかなんだかに言っておけ。俺は誰に何と言われようが、クリスと友達でいることをやめるつもりはないってな。俺を縛れるなんて、思わないことだな」

「ふん……。フランク中将だ、馬鹿者…」

「じゃあな」

銃を放り投げて、俺はやっと家へと向かう
今日はなんか凄い濃い一日だった

Ｓｉｄｅ　マルギッテ

はあ、完敗だ
眼帯をとった状態で、手も足も出なかった
そして、勝負に負けた挙句、女の子扱いされて、優しくされるなど…。

トンファーも粉々に砕かれた
だが、おかしい
演習のときもあんな銃くらい軽々と壊せたはずだ

それなのに…

そこへ流川海斗の放った銃が目に入る
これに私は負けたのか…

む？
何か違和感を感じる
そう、その銃は弾が減っていること以外、新品のように綺麗だった
傷一つついていないのだ
仮にトンファーがこれに壊されたとしても、ぶつかり合って、傷一つないの
は、どう考えてもおかしい

「どういうことなんだ？」

考えても考えても、なかなか疑問は解決しなかった

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「へっくしゅん、ああー、手いてぇ」

33話　「狩る者と…」（後書き）

ありがとうございました
海斗の強さ、一瞬だけ片鱗が見えましたね
本当にあくまで一瞬ですが…
さて、これからどうなることやら

PS
活動報告にコメントくださった方はありがとうございます
キャラ紹介についてはもう少し考えます。
作るとしても、？ばっかりになりそうですが（笑

３４話　「八つ当たり」（前書き）

今回からまた日常編ですかね
ここのところ戦い続きでしたから。
ダラダラに付き合っていただけると嬉しいです

３４話　「八つ当たり」

Ｓｉｄｅ　マルギッテ

「中将殿、申し訳ありません」

「少尉、まさか君でも敵わなかったとは…。見たところ、他の堕落した日本
人と何も変わらぬ、脆弱な人種だと思っていたのだが。私もそこまで能天気
ではない。少尉の実力はこれまでの功績からも認めている。そして、どんな
に簡単な任務でも手を抜かず、必ず成功させる。ましてや、クリスの姉代わ
りでもあった君が力を出し惜しみしたとも思えない。それでも、負けたとい
うことは、本当にその流川海斗という男にはそれ相応の実力があると見てい
いのだろう」

「はい、負けた自分の意見など言い訳にしか過ぎませんが、あの流川海斗の
実力は本物です」

「少尉にそこまで言わせるとなると、こちらも胡坐をかいている場合ではな
さそうだな、もっと本腰を入れなくては」

「中将殿、もう一つご報告したいことが…」

「む、なんだね？」

「私の所持しているトンファーを破壊することは可能ですか？」

「そうだな、実力を持っている少尉には頑丈なものをと思って、あれが最適だったと考えたのだが、流石に重火器での攻撃までは耐えられんだろうな。まあ、めったには壊れないだろう。どうかしたのか」

「やはりそうですか…、実は流川海斗にそのトンファーを砕かれました」

「何！？確かに人間の手で作られた物だ。絶対に壊れないということはありえないが、あれを砕かれただと…、どうやってだ。相手は何か強力な武器を持っていたのか」

「それが、相手の所持していたのは我が軍が使っていた強力麻酔銃のみ。壊されたのも一瞬すぎて、手段は判別できなかったしだいです。本人は銃で攻撃を防いだように振舞っていましたが」

「当然、眼帯を外していたのだろう？」

「はい、その直後でした」

「ふむ…、その状態の少尉でも見抜けない速さ。しかも、あの麻酔銃は麻酔
こそ強力だが、その本体は軽量化を目指して作られ、耐久性などないはずな
のだが」

「そのことなのですが、私が確認したところ、その銃には傷一つ付いていな
かったんです。本当に傷一つ…」

「ならば、銃で防いだという線はなくなる。嘘と思った方がいいだろうな。
先程も言ったように、耐久性がないのに無傷だというのは、使っていないと
考えるのが妥当だろう。しかし、それならどうやって…？」

「中将殿、これは憶測なのですが、流川海斗はこれを素手で破壊したのでは
ないかと思われます。にわかには信じがたいですが…」

「まあ、それはそうだろう。だが、その結論に至った根拠を聞きたい」

「はい、最初に申しましたが、トンファーは砕かれていたのです。焼け跡や
薬品の痕跡は勿論、刃物類での切り口も見当たりませんでした。乱雑に不規
則に外から強い衝撃を与えられて大破した典型のようでした。武器でこんな

ことが出来るとしたなら、ハンマーといったところでしょうか。ただ、言う
までもなく、そんな武器を隠せるはずもありませんので、自ずとその手段は
拳での打撃ということに」

「ふむ、何も知らない者が聞けば、納得してしまうような理にかなった推測
だった。しかし、あの武器の強度を知っている私からすれば、やはりすぐに
は信じられない話ではあるな。しかし、その説を否定すれば、また真相は手
がかりなしの状態に逆戻りか。非常に難儀なことだ…」

「すみません、私が見極められなかったばかりに」

「いや、少尉が全力で取り組んでそれならば、少々甘く見すぎていたこちら
のミスだ。とにかく、次はもっと人員を割かなくては。全ての銃撃をかわし、
五十いる軍隊をたった一人で潰してしまうだけで只者ではないしな。なめて
かかるのはもうよそう。これも我が愛しき娘、クリスを守るためだ」

「中将殿、そのことなのですが、流川海斗はお嬢様への危害にはならないか
と…。本人もただの友達だと言っておりましたし…」

「それを信じられるというのかね」

「い、いえ、そういうわけでは…」

「少尉に限って、心配はしていないが、これは一応任務だ。あの男に情けな
どかけて、全力を出せないなんてことはないように」

「はい。出すぎた真似をしました。私が口を挟むところではありませんでし
た。申し訳ありません」

「いや、いいのだ。少尉には期待させてもらっている」

「は、光栄です」

「報告はこのくらいでいいだろう。一応、戦闘任務のあとだ。しっかりと体
を休めたまえ」

「では、失礼します」

そう言って、部屋を出る。

やはり、中将殿も驚かれていた。
それはそうだ。
無数の銃撃をかわしたときは、出来る奴だとは感じたが、まさか眼帯を外し
た状態で、一瞬で勝負をつけられるとは思っていなかった。
また、それだけの強さを持ちながら、全く他人に気取らせることがない。

あと、中将殿には言わなかったことがある。
流川海斗はまだ本気を隠しているような印象を受けた。
これは戦った感触というか、所謂第六感のようなものなので、確証も何もな
いから伝える必要はないと考えた。
まさに未知の強さ。
本当に世界は広い。

それにしても、何故自分は流川海斗を庇うような物言いをしてしまったのだ
ろう。
あいつはただの友達だと言っていたが、確かにそれを信じるに値する要素な
んて、何も持ち合わせてはいなかった。
それなのに、私は何を考えて、あんなことを言ってしまったのか。
ただでさえ、分からないことだらけだというのに、自分自身のことまで、理
解できなくなりそうだ。

まあいい。
今、そんなことを考えても、仕方がない。
もうアイツの強さは十分に身に染みた。
次のときは、最初から全力で潰してやろう。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

はぁ。
溜息をつきつつ、通学路を歩く。

昨日はみすったなー。
咄嗟にトンファーを破壊してしまうとは…
銃で壊したなんて、いつばれてもおかしくない嘘だよな。
めっさ軽かったしな、あの銃。

昼飯の分の軽い運動だったはずが、運動量オーバーもいいとこだろ。
でも、結局晩飯は食ってないし。
あぁ、でも昨日のは久しぶりに楽しか……じゃなくて、退屈しなかったな。
たまになら、ちょっとした刺激もいいのかもな。
毎日じゃねーぞ、あんなのは身がもたん。

「あー、腹減った」

「いなり寿司でも食べるか？」

いつの間にか、クリスが横に並んで歩いていた。

「じゃあ、もらうわ」

「ふふ、自分に感謝するのだな」

隣で満足そうに微笑む少女。
そういや、こいつのせいで俺は昨日大変な目にあったんだよな。
そんなに恨むほどではないが…

「なんだクリス、その食べ方は」

「ん？おかしいか？」

「おかしいも何も、食べる前に稲荷の神に感謝の礼を述べなきゃ駄目だろ」

「海斗、そんな話は聞いたことないぞ。自分を騙そうとしても無駄だ」

「何を言う。“稲荷”とは諸説あるが、その語源は“担い”から来てるとされていて、それは稲荷の神が幸福を担がせてくれることに由来しているんだぞ。だから、その幸福を逃がさないように、油揚げで全体を包んでいるという今の形状になったんだ。また、稲荷の神は豊作をもたらしてくるともされていて、“稲を荷う”というのが、そのまま名前になったという説もあるがな。日本ではこんなの常識だぞ」

まあ、こんなもの今思いついた根も葉もないでっちあげなのは、言うまでもないが…

「そ、そうだったのか。知らなかった」

純粋なクリスは見事にひっかかってくれた。
いやー、からかい甲斐があるな。

「ああ。分かったら、この方角を向いて、お礼を述べてから、食べるんだ」

「了解した。えー、美味しいいなり寿司を食べさせて頂いて、本当に感謝しております。今までは知識がなかったため、お礼を言えなかったことをお許しください」

俺が指した何もない方向に向かって、なんか喋り出した。
これ、知らない人が見たら、完全に変な人だろ。

「クリス」

「なんだ、海斗。海斗も一緒にやるか？」

「ちなみに言っとくと、さっきのは嘘だ」

「・・・・・・・・」

おーおー、顔が真っ赤になっていく。
自分がどれだけ恥ずかしいことをしていたか自覚したらしい。

「かーいーとー！！」

そのあと、怒ったクリスをなだめるのは大変だったが、昨日の八つ当たりは
無事に完了した。
ご馳走様。

３４話　「八つ当たり」（後書き）

ありがとうございました
会話が異常に多い回でしたね
たまにはこんなのも新鮮かも？
次回からもこんな感じで緩くいくんで、よろしくお願いします

35話　「水上体育祭」（前書き）

活動報告にも書いた気がするんですが、
前書きでネタコーナーでもやろうかと思う今日。
本編で出番のない松風とか使おうかな～と
そこら辺まで考えました、そこまでです（笑

35話　「水上体育祭」

クリスを存分にからかって、登校した後のこと。
教室ではＨＲが開かれていた。

「そういえば、２－Ｓに転校生が来たらしい」

「たぶんマルさんのことだな」

クリスがそんなことを言う。

“マル”さん？
なんか、クリス関係でそんな名前の奴をつい最近、具体的には昨日あたりに
聞いた気がするんだが…
マルギッテ・バッフェルベルカノンみたいな名前だったっけか。
あれ？なんか名曲っぽくなってしまった。
いや、これでも前半は結構自信があるんだが。

「それはそれとして、今年の体育祭は水上体育祭に決まったぞ」

教師がそんなことを言う。

水上？何、水の上でも走っちゃうの
伊賀なの？甲賀なの？

そんな超人同士の競技はお断りなんだが。

「「「いいいやっっっほおおおおおおおおう！！！」」」

突如、教室に大爆音が響き渡った。
主に発生源は男子どもの口からなのだが…

「女子の水着だぁぁぁぁぁぁ」

「学園長のじーさん、グッジョブ」

はー、なんとなく理解したぞ。
水上体育祭とは水辺で行われる体育祭というだけらしい。
まあ、おそらくはプールや海ってところか。
それにより、女子の水着が見れると思った男子のテンションが急上昇と。
なんという単純思考回路…

んで、女子どもの反応はというと…

「まあ、暑いしちょうどいいんじゃない」

「そうだねー」

こちらも好評らしい。
まあ、男子の不純な動機と一緒にするのもどうかと思うが。

そして、何気なく一子のほうを見てみると…

んなっ！
なんか物凄く負のオーラを放っている。
誰に聞いても、今の一子を見て、気分が浮かれているなんて言わないだろう。
むしろ、逆も逆、落ちるところまで落ちているようだ。
うーむ、こういう運動系の行事は好きだと思ったんだがな。

Ｓｉｄｅ　一子

運動会、体育祭、他にも色々言い方があるのかもしれない。
ともあれ、アタシはそんな運動のイベントが大好きだ。
その競技の種類による区別なんてない。
陸上競技、球技、水泳、どんな種目も等しく好きだ。

いや、今となっては好き“だった”。
決して嫌いになったわけではないんだけど。
今年から、気が乗らない種目が増えてしまった。
いや正確には、“海斗に恋をしてから”。

それまでは体を動かせれば、満足だった。
だけど、前にも思った。
恋をすると、見える世界が変わる。
それは当然、自分の意識が変わってるってことで。

今まで人に見られる姿なんて、気にしていなかった。
水着だって、泳ぐためのユニフォームであり、それ以上でもそれ以下でもなかった。

でも、今は違う。
自分が見られると意識してしまう人がいる。
見て欲しい人がいる。

運動しやすくて、不自由に思ったことなんてなかったけど、今はこの身体が恨めしい。
学校指定の水着なんて絶対に身体のラインがでちゃうわよね。
京とかは胸大きいし、うらやましい。
はぁ～、憂鬱だわ。

…今日から豆乳でも飲もうかしら。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「場所は勿論、海で行うぞ」

それにしても、スポーツ大会ねぇ。
海でやる競技って言ったら、やっぱ水泳とかか。
あとは、ビーチバレーにビーチフラッグ、…スイカ割りとか？
いや、とりあえず水につかろうか、海に入ろうか。
ったく、海なんて行ったことない奴の想像なんてこんなもんだぜ。

一応、聞いとくか。
何も知らないで行くより、遥かに良いだろう。
かといって、クリスも転校してきたばかりだしな。
やっぱり、あのいかにも精神不安定な一子に聞くしかないか。

「おーい、大丈夫か。一子」

「胸……」

むね？
よく分からんが、なんか旅に出ちゃってるようだ。
帰って来てもらわんと。

「一子、もどってこーい」

そう言って、ノーガードの頬を人差し指でつつく。
む、なかなかの柔らかさである。

「わっ！」

どうやら気づいてくれたらしい。
だが、この柔らかさはなんというか、癖になる。
やめられない、止まらない。

「海斗、海斗！も、もう気づいてるから。ねぇ」

「うむ、分かってる」

ふにふにといじくってみる。
その度にいちいち“ひぁっ”とか反応するので、ますます面白い。
表情も随時更新される、なんか可愛いな。

「わ、分かってるなら、そのほっぺの指を…」

（あ、でも、これって海斗に触れてもらってるんだよね。それなら、このまま
の方が幸せかも…。）

あれ、なんか顔が赤くなりだした。

あ、そういや、俺、体育祭のこと聞きに来たんだった。
夢中になって、すっかり忘れてたぜ。
本来の目的に戻るため、指を離す。

「あ……」

「あ？」

「い、いや、何でもない。何でもないの」

「ならいいが、ちょっと一子に体育祭の種目を聞きたくてな」

「えーっと、それはちょっと分かんないわ」

「ん？どうしてだ」

「それがこの学園って何やるかなんて、ほとんどその年によって、違うから
参考になるようなものがないのよ」

「まあ、確かにあの学園長はそんな感じだよな」

「一応、水中玉いれとか、そんなのがあったみたいだけど、今年もあるかは
分からないわ」

「結局は、あいつの気分次第ってことだな。はぁ」

まあ、いいか。
ぶっつけ本番でも、自由にやらせてもらうことにすっか。

「か、海斗！」

「ん、どうした？」

「あ、あのね…、海斗は大きいのと小さいのどっちが好き？」

いきなり意味不明な質問をされた。
大きい？小さい？
え、動物の話か？
俺は基本チワワから、セントバーナードまで何でも愛せるが…
どっちって言われてもなぁ。

「俺は特に大きさとかは気にしないな。サイズとかよりも、もっとそいつ自
身の魅力とかの方が重要だと思うぞ」

「そっか…、そうなんだ」

そう言った一子の表情は下を向いていて見ることが出来なかった。
ただ、何故かその言葉からは嬉しさが表れていた。
なんか、俺、そんな喜ばすようなこと言ったっけか。

見事に噛み合っていないのに会話が成立している二人だった。
よもや、自分の胸のことをチワワとされているなんて、一子は思ってもいな
いことだろう。
ともあれ、これで一子が元気になったことは言うまでもない。

―水上体育祭
２―Ｆだけじゃなく、全校にその開催を伝えられた。
海でのこのイベントがまた何を引き起こすのだろうか。
まさに“波乱”の予感である。

35話　「水上体育祭」（後書き）

ありがとうございました
結構悩んだんですが、体育祭は水上にしました。
ルート的には京でしたっけね。
別に水着最高とか、そんなんじゃないですからね！

36話　「海斗ＦＣ」（前書き）

松風「よぉ、みんな、特に前書きに書くこともないらしいから、
オラ参上したぜー。なんかコーナーをオラ一人で担当するんだー
え？一人じゃないって？いや、何言ってるんだＹＯ！
オラの意志で喋ってんだぞ、後ろには誰もいないぜぇ」

海斗「由紀江、そろそろ本編始まるぞ」

松風「・・・・・」

36話　「海斗ＦＣ」

ここは一年教室。
一年の教師陣はなにか大切な会議とかで席を外している。
所謂、自習という状態だ。

今ここで一大イベントが開かれていた。
それは…

「皆さん良いですね。反対はないですか？」

その場にいる女子生徒が頷く。

「では、ここに“流川海斗先輩ファンクラブ”を設立します！」

わーわー
パチパチパチパチ

その一帯は拍手や歓声で異様な盛り上がりを見せていた。
所詮、自習などこんなものだ。
真面目に勉強をしている方が少数派である。

そして、ここにもその話に興味津々な少女が二人。
黛由紀江と大和田伊予である。

「まゆっちは行かなくていいの？」

「い、いえ、私はその…」

「おいおい～。それは愚問だぜぇ、まゆっちは海斗公認の友だちなんだから
なー、焦る必要はないのさ」

「あー、そっか。いいなぁ、まゆっち」

「いや、違うんです！こら、松風何を言っているんですか。私はですね、そ
のあんな楽しそうなグループに私なんかが参加してもいいのかなと…」

本当に変なところで遠慮がちな少女である。
とらえ方によっては謙虚という日本人の美徳でもあるが…
この少女はそのせいで友だちが出来ないのに気づいていない。

「なら、私と一緒に行こうよ。まゆっち」

「え？」

「別にまゆっちに気を遣ってるわけじゃないよ。私も流川先輩に助けてもら
って感謝してるっていうか、入りたいなーって思ったから、まゆっちも入ら

ない？って誘ってるだけ」

「伊予ちゃん…」

そう、かつて伊予も海斗に不良から助けられた。

自分のピンチに颯爽と現れて、助けてくれた男の人に好意を抱いてしまうのは、これはもう女の子としては仕方がないことだろう。

勿論、伊予も例外ではなかった。

だが、それを感謝の気持ちだと友だちの前でごまかしてしまうのも、やはり女の子ゆえだろうか。

「いや、やっぱり興味あったら、形から入らないとね。野球だって、まずは試合を見に行かないと始まらないし！」

「そうですね、行ってみましょうか」

そうして二人の恋する少女もまた、その集まりに加わったのだった。

「えー、流川海斗先輩ファンクラブとは、ご存知川神学園２－Ｆに在籍している流川海斗先輩に対して、憧れ、好意、思慕、どんな感情からでも構いま

せん、先輩に興味がある、先輩を見ていたい、先輩のことを応援したい、ひいては先輩に恋をしている人でも歓迎の、自由度が高い団体です。」

「お互いにそういう個人の目的に突っ込んだり、咎めたりなどということはせずに流川先輩のことを思うという共通の目的を持った仲間として、情報などを共有していこうといったり、先輩のことを話し合える人との交流の場というのが、このファンクラブの主な存在意義となるでしょう。」

「ちなみに、さっき自由度が高いと言いましたが、普通のファンクラブとは異なり、会員番号などといった序列は全くありません。新しく入った人と作られた当初からいる人の間にも、差はないです。」

「勿論、本人に迷惑をかけたりする行為は禁止となります。盗撮やストーカーなどに準ずる行為は言語道断です。イベントごとでもないときは写真を撮るときは許可をとるのが望ましいです。」

「今言った、最低限の決まりを守っていれば、流川先輩を食事に誘ったり、手紙を送るのは自由です。抜け駆け禁止なんていうことは一切ないので。」

委員長のような人がすらすらと読み上げていく。
昨日今日で計画されたことではないことが明らかである。

「なんか、思ったよりもすっごいしっかりした感じだね」

「はい…、それにも関わらず、とても柔軟で不満も出にくいと思います」

由紀江の言うとおり、周りの女子たちも黙って、頷いており、反対意見などは1つとして、出ることはなかった。

「では、皆さんよろしくお願いします」

そう言って、説明は締めくくられた。

すると、集まっていた女子生徒が早速話し始めていた。

「あ～、流川先輩ってほんとにかっこいいなぁ」

「ていうか、なんか年上オーラが出てるって感じ。頼りがいありそうだし」

「それにタッグマッチとか川神戦役でも見たけど、あの強さでしょ」

「前に不良から女生徒を守ったなんてのも流れてたもんね」

「私も守ってもらいたいなぁ」

「あと、あの川神戦役のときの料理！」

「あんな感じなのに、家庭的な一面もあるとか、ギャップで反則だよね～」

「料理部の人の話だと本当に美味しかったらしいよ」

「一回でいいから、食べてみたいよね」

「それにもうすぐ体育祭だし」

「また流川先輩の活躍する姿が見られるのかな？」

「先輩泳ぎも得意なんだろうなー、もうスポーツ万能って感じ」

「それに水着姿ってことだよね」

「これは新聞部とかに期待しないと、しっかり良い写真を撮って欲しいね」

というように次々と海斗についての会話が行われていたのだが…

二人の少女はなかなか輪の中に入っていけなかった。

守ってもらった少女と料理を教えた少女の二人は。

こんな感じで一年生での海斗の人気は凄まじかった。
だが、それも全員というわけではない。
良く思っていない者も当然いたのだ。
そんな少女の代表がここに一人…

Ｓｉｄｅ　小杉

今、１年生の話題は一人の男に持っていかれていた。
どこを歩いていても、“流川海斗”“流川海斗”と、同じ単語ばかりが耳に
入ってくる。
聞けば、エリートクラスでもないというあの男。
そいつがプレミアムな私よりも目立つなんて我慢ならない。
せっかく、一年生を制圧したっていうのに、話題にもあがらないなんて、こ
れほどまでに腹立たしいことはない。

確かに川神戦役を見ていて、ある程度出来るのは認めよう。
弓矢も一発で命中させてしまうし、正直あれは見事だった。
だけど、所詮は凡人が集まるクラスの中で頭ひとつ出ているというだけの話。
プレミアムな私が劣る存在ではない。

しかし、この人気。
人を惹きつける能力があることも認めざるをえないだろう。
だけど、それはもう逆に好都合だ。

プラスに考えれば、それだけの人気者より上だということが証明できれば、
これほど大々的な宣伝方法はない。
相手の地位を落とすだけでなく、自分に人気が流れ込む可能性だってあるし。
まさにプレミアムな作戦ね。

だけど、正面から当たるには少し危険だわ。
作戦を立てないと…

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

色々な意味で一年の話題を独占の海斗だった。

36話　「海斗FC」（後書き）

ありがとうございました
これ書こうとは思ってたんですが、
ほんの小話程度に入れようだったのが、なんと1話の長さに。
いやはや、1年生に大人気の海斗でした

PS
前書きたまにああなります、気が向いたらです。
意外といつもより時間がかかるという（笑

37話　「金欠とはこれいかに」（前書き）

なんかすごく眠いです。
週末の疲れってあなどれんです。
皆さんはしっかりと身体を休めてください。

37話　「金欠とはこれいかに」

「はぁ〜、金がない。とにかく、金がない」

もう思ってるだけにとどまらず、とうとう口に出てしまった。
そうなのだ、この俺、流川海斗は絶賛金欠中である。
誰に絶賛されてんねん。

“お金がなくても、僕の君を思う気持ちは誰にも負けないよ”

“お金よりも大切なものってあるだろ?もっと幸せに生きようぜ”

とか言っている奴らに一言物申したい。
金って結構大切だぞ。
そりゃ綺麗ごとを言ってしまえば、“お金じゃ買えないものがある”とか、
言ってるよ、言ってるけども、その後に“買えるものはマ◯ターカードで”
って言っちゃってるからね、あれ。
否定の後の肯定だよ、後半の文を強調するという対比表現だよ。
意見を述べるときに説得力が出ちゃうやつじゃん。

結局のところ、世の中、マスターカ…じゃなかった。
世の中、金だよ
いや、悪人みたいなこと言ってるけど、マジマジ、真剣な話。
素敵なレストランでのデートでも、幸せな家庭を築くための新築マンション
だってな、有料なんだよ。

愛なんかじゃ、いくらあっても、買えないわけ、お分かり？

その他、自分の将来の夢を叶えるための勉強、大切な命を救うための治療、
エトセトラエトセトラ。
要するに金がなくては、物事まわらんのだよ。
夢がない話だなーって思うけども、その夢もお金で買ってるわけだからね。
もうわけわからんね。

いや、そんな大切な金が足りなくなっているのは大問題なわけだよ。
それもこれも全てはこいつのせいなんだがな…

“勤労にゃんこ”

噂の勤労〇〇シリーズの２ｎｄエディションだ。
第一弾の“勤労わんこ”の大好評につき、さらに新コスチュームも追加で、
種類を増やして帰って来た今回のこれ。

第一弾は存在すら知らなかったのだが、試しにひとつと買ってしまったのだ
が、それが失敗だった。悲劇の始まりだったのだ。

～

食品玩具、いわゆる食玩の一種なのだが、もはや立場が逆転して、

メインで
ある小さいラムネの方が付属品と化している典型的な現代のお菓子。
なんか、グッズだけ取って、お菓子を捨てる子どもまでいるらしい、
勿論、
俺はそんなことはしないがな。
まあ、そんなことは言いつつも、俺も中に入っているマスコット目
当てで買
っているのだが…

そして、箱を開けると、中から敬礼をしているにゃんこが出てきた
よく見たことある制服をまとって、これは“警察官”か？

ていうか、待て。
落ち着け、冷静になれ、皆の衆、殿中でござる（↑お前が落ち着け）
このつぶらな瞳。
ちょうどよいデフォルメ具合。
チャーミングなひげ。
帽子におさまりきらず、はみだした耳。
なんだ、この可愛さは。犯罪か、警察官が罪を犯していいのか。
まあ、俺がもう捕まえてしまったがな！はっはっは！（↑誰か止めろ）

あまりの愛嬌に悶えてしまって、周りから冷ややかな視線をあびせられたの
は、言うまでもない。

〜

いや、まあその1個を買ったがために、ものの見事にはまってしまい、金の
浪費につながったというわけだ。
というか、ボリュームアップだかなんだか知らないが、種類が多すぎるんっ
だっつーの。
集めても集めてもきりがないっての。

「はぁ～」

そりゃ溜息も出るさ。
まあ、過ぎたことを気にしたところでどうにもならん。
現在の問題は俺のこの寂しい財布だ。
だけど、短期のバイトなんて、そんな簡単に見つからんしなー。
さて、どうしたもんかね。

「おい、今日も行くか？」

「また、儲けようってか？いいね」

あん？儲けるだと？
二人の男子生徒が前を歩いていく。
どうやら、金が手に入るところに向かうらしい。
一応、見るだけ見てみるか。
そう思い、俺はその二人の後をつけていった。

…………………………………
…

トンネルを抜けるとそこは雪国だった。
間違った。
後をついていくとそこは１つの教室だった。
全然違うじゃんとか、言うな。自覚あるから。俺も思ったから。

その教室では数人が集まって、何やらやっているようだった。
その固まりの１つに雀卓を囲んでいる集まりがあった。
ああ、理解したぞ。
さっきの儲けられるという話、そして今のこの教室の様子を照合するに、こ
こはいわゆる賭場、もしくはギャンブル場ってことか。
納得、納得。

よし、そうと分かれば、俺もここで一発大儲けするか。
特に得意とかではないが、最初に目に入ったし、麻雀でもやることにしよう。

「おい、俺も参加するぞ」

「げ、流川…！」

「む、こやつは…」

雀卓には着物を着た少女“不死川心”と、２－Ｆの軍師“直江大和”が既に
座っていた。
今から、大和は心を負かしてやろうと思っていたのだが、そんなことを海斗
が知るはずもなく…というか、知っていても、気にしないだろうが。
何の遠慮もなしに海斗も位置についた。

「注目をあびて、調子に乗っておる２－Ｆの山猿か。よい、ならば、こなた
が二匹まとめて、潰してやろう」

「いや、俺はやめておく」

唐突にそう言って、大和は席を立つ。
試合自体を放棄するようだ。

「なんじゃ、戦う前から逃げるのか。んほほほ、高貴な此方に恐れをなした
か。山猿は猿らしく尻尾を巻いて、逃げるのがお似合いなのじゃ」

「どうとでも言っておけ。お前こそ偉そうにしていて、そのやってきた山猿
に負けたりするなよ？」

「此方に限って、ありえない話じゃ」

（正直、流川とだけは戦うのは避けたい。こいつの思考だけは読めないから
な。京がこいつの目には注意しろって言ってたし、いかさまを見抜かれる可
能性がないってわけでもないからな。不死川に色々と言わせておくのは、多
少むかつくが、ここは様子見に徹しよう。）

「まぁ、俺は結果を見させてもらうさ」

（こいつなら、勝ちそうな気がするしな）

「ふーん、ほほぉ」

俺は麻雀牌を手にとって、眺める。
なんか、今時のって良く出来てんだなー。
昔は紙とかで出来てたっていうし、今のは凄いよな。
よし、特に問題なしっと。

「おい、流川。お前は麻雀上手いんだよな？」

「まあ、役くらいは一通り知ってるつもりだが、やるのは初めてだな。ドキ
ドキワクワクだぜ。」

「は！？待て待て、お前やったことないのか？」

「いや、だからルールは知ってるって」

「お前、なんでよりにもよって、麻雀やろうと思ったんだよ…」

「目に入ったからとしか、言いようがない」

「はあ～～」

なんか凄い溜息つかれた。
俺そんな悪いことしたか？

（流川海斗、こいつは本当に意味が分からん）

大和のそんな気持ちなど全く気づきもしない海斗であった。

37話　「金欠とはこれいかに」（後書き）

ありがとうございました。
まあ、大切ですよね、お金。
果たして海斗は稼げるのか。
次回はそんな感じです。

38話　「駆け引き？」（前書き）

松風「ついにオラもアニメになるんだなー。これじゃあ、
　オラのファンがまた増えちゃうぜー。楽しみだぁ」

海斗「てか、どっちにしろ静止画じゃね？」

松風「・・・・・」

38話　「駆け引き？」

「にょほほほ、まさか初心者が此方に挑んでくるとは。流石に猿の考えることは理解できんわ。大人しく今から負けを認めて、謝罪しておくことをお薦めするがの。どうじゃ？此方は別に構わんぞ」

「んぁー、いいからいいから。早くやろうぜ。ま、それだけ言っておいて、初心者の俺に負けたら、面目丸つぶれだな。頑張れよ」

「く、なんじゃその態度は！ならよい、徹底的に敗北を味あわせてやるのじゃ。今から後悔したところでもう遅いわ」

「おっけ。じゃ、早速やりたいんだけど、1人抜けちゃったから、人数が足りてないんだよな。どうするか」

そうなのだ、あのストラップくれた奴が急遽、戦線離脱をしやがったために雀卓を囲んでいるのは3人となっている。これでは勝負できないことくらいはルールブックで予習済みだ。

「心配するな。俺が入る」

そう言って出てきたのは丸坊主のハゲ。
いや、意味が重複してるな。
ともかく、そのハゲ坊主がどうも代わりにするらしい。

「久しぶりだな、流川」

「え、俺？」

やばい、なんだ、相手は俺のこと知ってんのか？
いや、言われてみれば、初対面ではない気がする。
だが、こんな特徴的な頭だったら、はっきりと覚えているような気がするんだけどな。

「おい、なんだその反応は。まさか、俺のこと覚えてないとかいうんじゃないよな、流石にそれはないよね。一応、知り合いの範囲には入ってると言っていいレベルだと思ってたんだけど！？」

「いや、覚えてるって。あれだろ、あのほら、この前コンビニに夜食買いに行ったとき弁当コーナーの前にいた…」

「それもはや、他人だよね。知り合いというカテゴリには間違ってもはいら

ないよね、それは。」

「いや、落ち着け。冗談だって。あれか、この前、テレビ番組かなんかで、
“Ｒｕｎｎｅｒ”歌ってたよな、うん」

「もう、それ頭だけで判断してるだろ。だって、上を向いてるもの。視線が
全てを物語っているからね。もう少しだけ、視野を下に広げてみようか。新
しい世界が見えるから。サングラスなんてかけてないってことを確認できる
から！」

「はあぁぁ」

「何その大きな溜息。え？もしかして、そういうスタンスなの、俺が悪いこ
としてる感じになってるの？“溜息つきたいのは、こっちだよー”的な発言
すら許されないのか？」

「……チッ。
あー、もうあれだろ、教科書で見たことあるわ、お前」

「おいぃぃぃぃ。舌打ちとか、しっかり聞こえてるからね。何もう、考えた
くないなら、無理に言わなくていいから！もう真面目に考える気ないんだろ、
なんだ、教科書で見たことあるって。遂に断定されたよ。ツッコミ

の余地す
らなくされたよ。ちなみに言っとくと、教科書載ってないからね。
たぶん、
お前が見たのは鑑真とか、正岡子規だから。俺、関係ない！」

いや、俺だって、頑張ったんだ。
だけど、それでも思い出せなかった。
そのうえ、ひねり出した案を否定されるんだぜ。
な？ムカつくだろ？

「ハゲー、かっこわるー♪」
「あ？」

そうして、坊主の後ろに現れた少女。
この白髪少女は確か…

「あー、タッグマッチのとき、戦った女か」
「いえーい、だいせいかーい」
「おい、そこまで思い出したら、分かるだろ。頼むから！」
「あー、そういや隣にこんなハゲいたな」

「やっとか。ったく、なんで俺のときは時間かかったのに、ユキを見たら、
一発で思い出すんだよ」

「え？言っていいの、それ」

「お願いします。言わないでください」

だよな。
良かった、早まらないで。
結構、厳しい言葉を連ねる自信があったからな。
印象が薄いとか、影が薄いとか、髪が薄いとか、記憶に残らないとか…

流石に俺でもそんなことを真正面から言うのには罪悪感がある。
少し楽しそうだなんて、全然これっぽっちも微塵も考えてないから、そこ、
誤解のないように。

「此方を放って、何を馬鹿な見世物をしているのじゃ。ハゲもさっさと席に
着け。」

「だそうだ、ハゲ。さっさと着席しろ」

「ハゲ～♪」

「俺、立ち位置的には絶対被害者だと思うんだが…」

こうしてメンバーは揃った。
あとの1人は最初からいた名前も知らない3年生だ。

「じゃ、始めますか」

ジャラジャラジャラジャラ
麻雀の牌を音を立てて、混ぜる

「いやー、俺これ一回やってみたかったんだよな」

「本当にやったことないのか…」

今はなんか全自動で混ぜて、並べてくれる自動卓なんてのもあるらしいが、
やはり、麻雀といえば、これだろう。
こっちの方がなんか良いよな。
皆で勝負してるって、感じだしな。
これは勝負へのモチベーションも変わってくるってなもんだ。
ていうか、自動卓だったら、勝負なんてやらんぞ、俺は。

「こんなもんでいいだろ。ほら、お前も並べてけ。」

「ふーん、山にして並べてくのか」

「ああ、初めてだったか。ま、そーゆーことだから。ちゃちゃっと、やってくれや」

「誰が並べるとかは決まってないのか？」

「あ？こんなもん、誰が並べたって一緒だろ。別に面倒くさいとも思わんが、好んで並べたがる奴なんかいねぇよ。公式は当然違うだろうが、学校の賭場なんてこんなもんだぞ。」

「…ふーん」

やはり、実際にやってみないと分からないことは多い。勉強になるなぁ。

「ほれ、何をしておる。さっさと始めるのじゃ」

「いや、その前に賭け金の設定しないと」

「お前、初心者なのに、いきなり金賭けんのか」

「だって、賭場だろ、ここ。儲けのない勝負やって何の意味があんだよ」

「ふん、泣いて後悔するのが容易に想像できるがのぅ」

「どーするよ、初心者もいるし、レートはテンピンくらいにしとくか？」

「いや、ウーピンでいこう」

瞬間、場の空気が凍った。

「おま…！馬鹿か、それはいくら何でもないだろ」

「ここまでの阿呆だと、言葉もでんわ」

「別にいいだろ、こんなのちまちまやるのは性に合わねぇんだよ。損をするときも、得をするときも、どうせなら大きく派手にしようぜ」

「まさに蛮勇と断ずるにふさわしい愚かさじゃ」

「まあ、お前がいいんなら、いいけどよ…」

そうそう、大人しく聞いといてくれよ。

俺は手早く、金増やしたいんだからな。

Ｓｉｄｅ　大和

流川海斗。
こいつは天才か、馬鹿かの二択だな。
ルール知っているとはいえ、やったことない奴がウーピンなんて、冒険にも
ほどがある。
賭けのことを少しなめてるんじゃないだろうか。
まあ、負ける恐ろしさを知らないからこそ、出来るとも言えるだろう。
こいつもそうなのだろうか。それとも…

だが、この勝負どちらに転がろうと見る価値はありそうだ。
全く根拠はないが、これだけのマイナス要素が目の前に並んでいるのに、こ
いつからは勝ってしまうのではないかと感じさせられる。
それはタッグマッチであんな奇抜な作戦で優勝したからだろうか。
キャップとの勝負でありえないセンスを発揮して、無敵だと思われた俺たち
のリーダーを倒してしまったからだろうか。
分からない、本当に分からない奴だよ。

まあ、お手並み拝見だ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「じゃ、ゲームスタートといこうか」

38話　「駆け引き？」（後書き）

ありがとうございました
なんというか、準は使いやすいですね、重宝してます。
そして、実は麻雀にはそこまで詳しくないので、
今回と次回、おかしいとこがあったらごめんなさい。
役くらいは知ってるんですが、点数計算とかわけわからん（笑
次回の海斗はどんなことをしてくれるのか

39話　「いや、賭け引きだ」（前書き）

若干、自分の私生活の方が忙しく、毎日更新が相当危ないです。
なんとか、毎日更新のまま、完走したいんですが、
微妙になってきてしまいましたね。いやはや

39話　「いや、賭け引きだ」

教室に牌を切る音だけが響く
むー、なかなか揃わんもんだな

「リーチじゃ」

「おいおい、マジかよ」

ん？もうリーチか、早いな
まあいい、安全牌でやり過ごそうと決めてたしな。
そんな感じで進み、流れるかと思ったのだが…

「ツモじゃ。リーチツモタンヤオドラ2」

運のよろしいことで。
ツモは流石に防げないからな。

だが、あがってもらうのは好都合だ。
俺は着物女の手牌の配置を観察し、記憶しておく。
これは参考資料1だな。

「んじゃ、また混ぜるか」

そして、牌を混ぜる作業に移る。
やはり、この作業は基本どうでもいいみたいだ。
皆、参加こそしているものの、牌の混ざる様子をじっと見ている奴なんて、
1人もいない。いや、俺を除いてな。

ちょっと試してみるか。
そう思い、俺はちょろっと明らかに自分のテリトリーから外れた相手に近い
牌の入れ替えを行ったりしてみた。
自分的にはわざとあからさまにやったし、何か言われるだろうと思ったのだ
が、ほんとに誰も興味がないようだ。
この分なら、慎重にやれば、気づかれないかもな…。

そして、山を積む作業。
これも本来、一人一人が自分の目の前に山を積んでいくのだが、これまた、
全くやる気が見られない。
試しに他の奴の山を作るのを少し手伝ってみた。
案の定、普通に受け入れて、お咎めはなかった。

というものの、これは若干怪しいな。
ハゲも最初“？”みたいな顔したし。
それに比べて、この着物女は全く警戒していない。
まるでやってもらうのが当然のようにしている、さすが金持ち。
完全にこいつをターゲットにしたほうがいいな。
幸いなことに位置は俺の左。

最後にサイコロだ。
これは流石に介入できるものではないのだが…
まあ、練習でもしとくか

「へぇ、そのサイコロちょっと貸してくんね？」

「あ？なんでだ。まだお前の親じゃないだろ」

「いや、サイコロって振ったことねえから、どんな感じか興味あんだよ」

「お前、サイコロも振ったことないって、どういう人生歩んできたんだ…。
まあいいけどよ、振りたいんならやってみろ」

「さんきゅ」

俺はサイコロを受け取る。
重量、硬度、材質、全てを考慮したうえで軽く振ってみる。
机とプラスチックがぶつかる音がする。
今ので“２”か。そして、こっちのは“５”と。
なら、これで。
先の結果を踏まえて、再び振ってみる。
よし、狙い通り。
サイコロの問題もクリアだな。

「へぇ、サイコロって結構軽いんだな」

「そんな感想言う奴、お前だけだよ」

そして、二局目。
またもや…

「リーチじゃ」

着物女がリーチをかける。
そして、当然のように、

「ツモ。リーチツモイッツードラ1」

2回連続あがりか。
あいつとしては、当然思い通りになって、嬉しいことだろう。
だが、これは俺にとっても良かった。
今の手牌、参考資料1と合わせて、こいつの癖は分かった。
こいつは、ピンズ、ソーズ、マンズ、字牌の順で置いてるな。
それが分かっただけで、収穫だ。

―三局目
テンプレのように着物女がリーチしてくるもんだと思ったのだが、

「リーチだ」

リーチしたのは、ハゲだった。

いや、だが少しおかしい。
この着物女、口角が少し上がっているし、目もなんかそわそわした感じがする。いや、本当にかすかなもんだが。
だが、リーチは行わない。
これはそれほど良い役ってことか、下手すりゃ役満。
俺が当てられるなんてことはないが、役満なんて出されて、得点を持っていかれるのは非常に面倒くさい。
ならば…

「あ、ロンだ。リーチ一発ピンフだ」

比較的弱いであろう、ハゲのロンをわざとくらう方がいい。
ハゲの手役なんて、牌の動きを見ていれば、大体分かる。

そして、局は進んでいき…

「高貴なるツモ！」

「んー、それロンだ。トイトイ役牌だな」

「ロン。タンヤオドラ1だ」

遂にオーラスを迎えた。
俺は結局ハゲのあのロン以外、打撃を受けることはなく、しょぼい役でせこ
せこ稼いだ結果、初期点数より少し下くらいの点数に落ち着いていた。
順位的には三位か。

「ほほほ、やはり此方の圧倒的な勝利は決まっておったのじゃ。やはり、猿
は猿じゃな、劣等種に変わりないわ、にょほほほ」

さて、やっと親が来たよ。
準備は万端だ、俺は集中力を高める。
結構な量がある麻雀牌。
だが、決して覚えられないほど多いわけではない。
要は難易度ＶＥＲＹＨＡＲＤの神経衰弱だとでも思えばいい。

そして、適当に混ぜている奴らの目を盗み、着々と進めていく。
いじるのは、着物女のと俺のだけでいい。

そして、サイコロ。
机からの高さはこれで、このくらいの強さで振れば…

「自５だな」

全ては上手くいった。
表面上は今までやってきた局となんら変わらない配牌。
だが…

ニヤリ

自分の手牌を見て、思わずそうなってしまった。
これぱかりは笑みが堪えられない。
あまりに上手くいきすぎだ。
これも散々相手を見下して、勝負をおざなりにしてくれたおかげだよ。
はあ、本当に油断って最高だな。

「何を笑っておるのじゃ、遂に頭でも狂ったか」

「天和　国士無双　ダブル役満だ」

「な、なにぃぃぃぃぃぃ！？」

教室中が騒然となった。
周りで観戦していた生徒たちは拍手や驚きの声を上げ、雀卓を囲む当事者たちは凍りついたような顔をしている。

「いやー、運が良かったな。俺って実は強運の持ち主なんじゃね」

まあ、当然のごとく、嘘なわけだが。
俺が狙って配置しただけのこと、サイコロで出す目も狙えば、問題などなかった。

「じゃ、金はきちんともらうぜ。次があれば、よろしくな」

「くー、悔しいのじゃ！」

「くそ、魍魎の宴のための重要な資金が…」

よし、搾取完了したところで、おさらばすっか。

「お待ちください」

教室を出て行こうとすると、呼び止められた。
そこには眼鏡をかけた優男が立っていた。

「先程の戦い、見させていただきましたが、お見事でした」

「そりゃどうも、運だけどな。で、誰だお前？」

「ああ、すみません。私は葵冬馬と申します、そこにいる準やユキ

の友達で
すよ。学園内では結構有名だと自負していたのですがね」

そう言って、ふふっと笑う。
すると、周りの二年女子からきゃーと歓声が漏れる。

こんなのが女子にはもてるのか、分からんな。
まあ、そんなことをもてない奴が言ったところで負け惜しみにしか聞こえん
のだがな、はいはいお疲れさま。
確かに顔は美形?なのか、まあハーフっぽいけどな。
人気があるんだと言われれば、へぇーとなりそうだが…

「それで?その有名めがねが俺に何か用か?」

「おやおや、冷たい反応ですね。」

「暖かく迎える理由はどこにもないと思うが。」

「ふふ、その通りですね。どうです、私と勝負してみませんか、流川君」

長い休み時間はまだ続く。

39話　「いや、賭け引きだ」（後書き）

ありがとうございました。
もはや予想できた方も大半のこの展開。
やっぱり覚えちゃうという力技できましたね。
そして、登場してきました。
次回も続きます

４０話　「天才と奇才」（前書き）

季節の変わり目というのでしょうか。
自分で上着を羽織るなどして、温度調節をしっかり行わないと、
簡単に風邪をひいてしまいます。
皆さんも気をつけてくださいね。

松風「馬や鹿だって、風邪はひくんだぜー。作者はその代表なのに、
　見事に体調崩したからなー」

40話　「天才と奇才」

「私と勝負してみませんか、流川君」

あー、もうさっきの麻雀で十分儲けたしな。
今更、はした金が入ったところで、あまり嬉しくないな。
適当に流すか。

「俺もう結構儲けたから、1万円くらいじゃないとやる気になんねぇんだ。
悪いが、他をあたってくれ」

「いいですよ。賭け金1万円で勝負しましょう」

そうそう、素直に諦めてくれ……ん？

「今、なんつった」

「ですから、勝負しましょうと。1万円を賭けて。」

「え？お前もしかして、出せんの。そんな大金」

「一応、医者の息子ですので。お金には困りませんよ」

はぁー、今時の高校生はすげえな。
１万円を軽々出すのか、医者の息子は。
１万円って、お前あれだぞ、う○い棒１０００本買えるぞ。
１０００本も欲しいと思ったことはないが。

ていうか、今日はラッキーすぎんだろ。
割とさっきの収入でも満足してたのに、このうえ１万円追加か。
また、新しいにゃんこが増えるな…
いや、同じ過ちを繰り返してどうする。
ちょっと贅沢でもするか、ハー○ンダッツとか。

「何の勝負をするんだ？」

「そうですね、時間をかけても仕方ありませんし、これで決めませんか」

そう言って、めがねが取り出したのは、１つの箱。

「トランプか？」

「そうです。ギャンブルで使われるといえば、カジノでもおなじみのこれでしょう。何よりシンプルですし」

「まあ、構わないが。なんだ、ポーカーか、ブラックジャックか？」

「ふふ、それもとても面白そうですが、生憎と時間もありません。

どうです、
ここは単純なお遊びで決めませんか？例えば、この一番上のカードを当てる
なんて、どうでしょう」

確かに単純だとは思うが…

「それって、完全な運じゃねぇのか」

「たまには、そういうのも面白いと思いまして。それに運も実力のうちと言
うくらいですから。それとも、ただの運に１万円を賭けるのは流石に気がひ
けますか？」

「いや、逆にそれだけで１万円を手に入れられるんなら、こんなに得な話も
ないだろう」

「ふっ、とても前向きな考え方ですね。分かってるとは思いますが、これは
賭けなんですから、あなたも負けたら１万円を払っていただくんですよ。そ
れだけはくれぐれもお忘れにならないように。」

「心配すんな、大丈夫だ」

負けなければ、いいだけの話なんだからな。

Ｓｉｄｅ　大和

あーあー、受けちゃったよ。

麻雀で勝ったときは本当に驚いた。
しかも、オーラスでダブル役満なんて、狙ってたとしか思えない、どうにも
出来すぎたシナリオだ。

そう、そんな派手なゴールに辿り着くためには、険しく長い道を走っていか
なければならない。
当然、対戦相手も観客もその姿を見ているわけだ。
いや、対戦相手は少し適当な感じもしていたが、俺はしっかりと観察してい
た、あいつの様子を。
だが、あいつは苦労して走る素振りなんて見せずに、ゴールに到着しやがっ
た。
それは自転車を使ったとか、近道をしたとかそんな次元じゃない。
言うとすれば、瞬間移動。
自分でも馬鹿げた例えだとは思うが、これが一番適切だ。
コースを走ることもなく、歩いていると思ったら、気づいたら既にゴールに
いた、まさしくそんな感じ。

イカサマを使っていたわけでもない。
いや、違うな。
あんな手は小細工をしないと、絶対に来るわけがない。
つまり、俺が見抜けなかっただけのこと。
目を離さなかったにも関わらずだ。

つまり、こいつは狙って、完璧な勝利を収めやがった。
なーにが、“運が良かった”なんだか。
見抜けなかったこちらは文句を言うことすら出来ないな。

今更ながら、キャップが負けたというのも、頷ける。
流川海斗、キャップ以上に異常な男だ。
優れているとは少し違う、“奇才”ってとこか。

だが、そこに絡んできたのは“天才”。
テストで常に1位を取り続ける男、葵冬馬。
流石に一筋縄でいかないことは分かりきっている。

ていうか、普通相手が提案してきたゲームをためらいなくOKするか？
どう考えても、マジックカードとか使ってるだろ。
変なところでぬけてるんだよな。

まあ、始まるからには見させてもらうか。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「一応、カードが揃ってるか見せてくれ」
「どうぞ、確認してください」
カードを見る。
ちゃんとジョーカーを抜いた52枚が入っていた。
「問題ないな」
「はい、もしぴったり当てなくても、数字が近いほうの勝ちとしましょう。
AとKはつながっているということで」
「構わない」
「では、始めましょうか」
「ああ」
「うわ、本当に受けちゃったよ」
「ほんと、トーマ君に勝てるわけないのに」
周りからそんな声が聞こえてくる。

やれやれ、一発かましとくか。

「おい、めがね」

「はい？なんでしょう」

「先に言っておくが、俺はカードに触れることでカードと対話することができる。降参するなら今のうちだぜ」

「ふふっ、意外にロマンチックなことを言うのですね。」

「信じてないのか？全部当てちまうかもしれないぞ」

「どうぞ、触ってください。表を見なければ、私は何も言いませんよ。存分にカードと会話なさってください」

「は、後悔するなよ」

「あいつ何言ってんの」

「頭おかしいんじゃない？」

おい、ひどい言われようだな。

別にファンの対戦相手のアンチになる必要はないだろ。

大人しく好きな奴の応援だけしてろっての。
そうこうしてる間に相手がシャッフルを始めた。
そして、カードの束を俺に差し出し、

「どうぞ、シャッフルしてください」

俺も何回か適当に切り、机に置く

「では、私は…4あたりにでも」

「さてと、俺は」

そう言って、カードの上に手を置く。

「分かった。俺も4だな」

「流川君、それでは勝負になりませんよ」

「でも、対話の結果、4なわけだしな」

めがねがめくると、勿論4だった。

「次から同じものは駄目にしましょうか」

「それなら、俺から先にやらせてもらうが」

「それは不公平でしょう」

「じゃあ、じゃんけんで順番でも決めるか？」

「いえ、遠慮しておきます」

くそ、じゃんけんだったら、絶対勝てたのにな。
警戒心の強い奴だ。

「まあ、とりあえずやろうぜ」

「はあ、そうですね」

だが、言うまでもなく結果は同じ。
二人とも7を宣言し、勿論正解も7だった。

「これじゃあ、埒が明きませんね」

「なら、上から二枚目のカードを当てるって言うのはどうだ？」

「な…」

（この発言はやはり、マジックカードだということを見抜かれているのでしょうか。分かりにくいものを使ったつもりなんですが。そのうえで完全な運の勝負に持っていくというわけですか。ここで拒否するのも不自然ですし…）

「いいでしょう、それでやりましょう」

そして、シャッフルされたカードが机の上に置かれる。

（今、一番上にあるカードはK。ならば、一番遠い6あたりでいいでしょうかね）

「私は6にします」

「ふーん、なら俺は…」

そう言って、一番上のカードをどかす。

「何をしているんですか?カードを動かすのは…」

「あ?だって、上のをどかさないと、二枚目にさわれないだろ」

「だからと言って…」

「お前言ったよな。“表を見なければ、何も言わない”って。俺は触ってる
だけで表は見てないぜ」

「な！？」

「口出しされるのは、おかしいと思うが」

（…はめられました。ここで私が無理に不正だと押し通せば、それは裏を見
たら、何の数字か判別できること、つまりマジックカードだということを自
分で言うようなものです。それを見越した上での作戦ですか。確かに彼はた
だ触るだけ、カードと対話をするだけ、そういうことになっているのですか
ら。おかしいところは何もないですね。）

「じゃあ、俺はＪで」

冬馬はめくる前から、分かっている。
二枚目の裏に描かれた模様はしっかりとＪを表していた。

「Ｊだな。俺の勝ちだ」

キーンコーンカーンコーン

ちょうど試合終了のゴングのように休みの終わりを告げるチャイムが鳴る。

机の上の2万円を取って、海斗は教室を出て行った。

そんななかで冬馬は笑うしかなかった。

「ふふふ、海斗君、面白い人です」

４０話　「天才と奇才」（後書き）

ありがとうございました
前回は完全に記憶力と目の良さで戦っていましたが、
今回は言葉遊びって感じですかね。
頭がいいだけが勝利条件じゃないんですよね。

41話　「世のため、人のため、自分のため」（前書き）

いやぁ、今回は日常編、結構長いですね
いつ本編がすすむんでしょうか。
気長にお待ちください。

41話　「世のため、人のため、自分のため」

Ｓｉｄｅ　大和

「嘘、トーマ君が負けたの、あんな奴に」

「で、でも、ずるじゃないの？あれって」

教室内は騒然となっていた。

予鈴が鳴っているにも関わらず、誰もすぐに動こうとはしなかった。

それもそうだ。

学年一位、医者の息子、エレガンテクアットロの一角、そんな才色兼備であり、天才と呼ばれる男が負けるなんて誰が想像したろう。

葵冬馬が倒されるというのは、それだけのことだった。

俺はファンのように葵冬馬の勝利を信じちゃいなかったが、それでもやはり驚きを隠せない。

まるで子どもの屁理屈のようなもので、そのくせ一切の反論の隙などはなく

して、見事に丸めこんでしまった。

口が上手いにもほどがある。

流川海斗、本当にはかれない男だ。

Side out

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

時は放課後、とある空き教室にて。
数人の男女が集まっていた。

「さーて、今日の依頼はなんだろうかねぇ」

「今回も俺が競り落とさせてもらうぜ」

その中には井上準と風間翔一の姿もあった。

そこへ二人の教師が入ってくる。

「今日もよく集まっているようでおじゃるの」

「では、早速、今日の頼みごとを発表するヨ」

綾小路麻呂とルー・イーだ。

そう、ここは教師が有志の生徒に舞い込んだ依頼を消化させる、言うなれば、
依頼の競り場のようなものである。
当然、学校側の立場もあるので、報酬は現金ではなく、食券となっている。

「今日の依頼はストーカー退治だネ」

「頼み人が実際に来ているでおじゃる」

「なんでも事情を自分で説明したいってことだったからネ」

ルーがそう言うと、ドアから女生徒が1人入ってきた。

「こんにちは、1年C組の大和田伊予です。実は、私の元にこんな手紙がきてまして…」

「どれ、麻呂が読み上げるでおじゃる」

ゴホンと咳払いをする

「伊予、お前のことが好きで好きで好きでたまらない。遠くから思っている
だけでも幸せだったけど、もうこの溢れる気持ちを抑えられないん

だ。だから、毎日君のグッズを拝借して、なめたりして思いをぶつけているよ。これなら、たとえ話せなくても、僕らの気持ちは1つだよね。伊予も寂しくないだろう？僕の愛が伝わっていることを願ってます」

「もう、それは警察に届け出てもいいレベルの気持ち悪さだな」

準のツッコミも、もっともである。

「グッズというのは、私物のことだネ」

「お願いです、ストーカーを捕まえてやめさせてください！」

「頼み料は上食券５０枚でス」

「奮発するじゃねーか、やってやるぜ！　５０枚だ！」

「４９枚にて候」

「４８枚！」

競りが始まり、その枚数はだんだんと減っていく。

「３８枚！」

「なら、俺は27枚だ！」

「27枚。他にいないカ？なければ風間に落札！」

「やれやれ、またお前が持っていくのかよ」

準もいつものことと、半ばあきらめ気味の様子だ。
そう、百代が暴れたいために翔一は報酬が少なめでも、いつも仕事を持っていくのである。

「20枚だ」

誰もが決まったと思った瞬間、声が響いた。
それはドアの方向。
そこに流川海斗、その男が立っていた。

「流川先輩！？」

「なんだイ？」

「だから、その依頼、20枚で受けるって言ってんだ」

「な、流川！お前がなんで、こんなとこに」

翔一がいきなりの登場に驚きつつ、依頼を持ってかれそうなため、理由を問いただす。
そう、今までは一度も海斗がこの場に顔を見せることはなかったのだ。
疑問を持つのは当然であった。

「いや、なんかここ来たら、食券もらえるとか言われたから、来てみただけだ。どうせなら、今日一気に儲けようと思ってな」

「お前が自分から人のために働くってのか？」

「いや、俺も最初はただで食券がもらえると思ってきたんだがな」

「ならどうして、受ける？」

「別に人のためじゃねぇ。今の話を聞いて、ストーカーを俺が個人的に殴りたくなっただけだ。誰のためでもない自分のために動くってだけさ。それで食券まで手に入るんだから、こんな得なことはねえだろ」

「２０枚より下はいないカ！」

「そこまで言うんだったら、これはお前に託すぜ」

「おう、任せとけ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「流川先輩……」

「さて、早速この手紙を送りつけたストーカーを特定しなきゃなんないわけ
だが、最初に言っておくことがある」

「は、はい」

「俺じゃないからな」

「え？はい、それは分かってますけど」

「いや、一応な。ほら、推理小説とかでよくあるじゃんか。事件解決のため
に積極的に協力してくれていた優しい人が実は犯人だったとかな。
俺なんて
いきなり現れたから、疑われてないかなーと」

「大丈夫です、流川先輩はそんなことをするような人に見えません
し、別に
私、流川先輩だったら…」

「ん？」

「い、いえ、何でもないです。だいじょぶです」

「そうか？まあ、いいが」

そして、また作戦を考える。
犯人を手っ取り早く捕まえる方法を。

「あ、あの、流川先輩。」

「あ、なんだ？」

「ありがとうございます」

「いきなりどうした？まだ、何も解決してないぞ。それに俺は然るべき報酬
をもらうんだから、お礼は必要ないと思うが」

「いえ、そうじゃなくてですね…。流川先輩、前、私のこと不良の人たちか
ら助けてくれたの覚えてますか？」

「あー…」

そういえば、この子見覚えがあると思ったら、動物ビスケットのと

きの子だ
ったな。
そういえば、それで知らない子からファンレターもらったりしたな。

「私、あのときすっごく怖くて、でも流川先輩が助けてくれて、嬉しくって。
だけど、私あのとき、お礼も言えませんでした。先輩が来てくれなかったら、
どうなってたかも分かんないっていうのに、黙っちゃって、おまけに先輩か
らビスケットだけもらって、何も伝えられませんでした。私、あのときのこ
とずっと考えてました。先輩にはすごく感謝してるんです。だから、今更で
すけど、本当にありがとうございます」

なんか、めちゃくちゃ感謝されてしまった。
でも、怖かったんだから、あれはしょうがないと思うんだが。

「別に気にすんな。あれはただ、あいつらが俺の視界に入って、目障りだっ
たから、掃除したまでだ。結局、あれも今回と同じ、自分のために行動して
ただけっつーことよ。だから、そんな悪いことしたみたいな顔するな」

そう言って、軽くぽんと頭に手をやる。

海斗としては特に意味のない動物好き故の無意識の行動だったのだが、やら
れた方は意識せずにはいられないものだった。
伊予は突然の幸せに顔を赤くしながらも、

「で、でも、私が嬉しかったのは本当ですから。お礼は言わせてください。
助けてくれてありがとうございました。」

そう言った少女は、ずっと胸に引っかかっていたことが取れて、すっきりと
した表情をしていた。

41話　「世のため、人のため、自分のため」（後書き）

ありがとうございました
今まで海斗の並外れた実力にスポットをあててきましたが
今回は海斗の本来の優しさの部分を強調してみました。
人気があるのも頷けるといった感じですね

42話　「ひねくれた愛」（前書き）

松風「オラの担当する前書きコーナーの名前が決まったぜぇー
いえー、ドンドォン、パフパフー！
その名も“言おう！My心”だぜー！！
どうだぁー、勇往邁進⇒ゆおうまいしん、みたいなー
センスに溢れてんだろー、ていうか、名前紹介で
時間がないから、今回はこれでー、ばいばーいきーん」

42話　「ひねくれた愛」

「よし、早速犯人を捕まえるぞ」

「え、犯人分かったんですか？」

「いや、犯人が誰かはこの際問題じゃない。探偵じゃないんだから、証拠を揃えて、問い詰めるなんてことはしなくていいんだ。」

「といいますと？」

「手紙を読むに相手はグッズ、つまりは私物に手を出しているんだ。だが、盗られているものはないと。だから、私物をマークして、現行犯で捕まえち まえばいいのさ」

「あぁ、でもどうやって、マークするんですか？監視カメラとか？」

「まあ、とにかく全ての自分の私物の場所を教えてくれ」

「はい、分かりました！」

俺たちは実際に私物のある場所をまわることにした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

「まず、ここが1年C組、私の教室です。置いてあるのは、体操着とかリコーダーとか、実技教科で使うものですかね。」

「ふむ、席はどこだ」

「あ、あそこが私の席です」

「オーケーだ、次にいこう」

「ここは1年生の下駄箱です。当然、私の靴や上履きがあるんですが、いつも上履きは帰る時に持ち帰ってます。」

「出席番号からして、この靴箱で間違いないな？」

「あ、はい。私のはそこです」

「了解した、次の場所へ案内してくれ」

「ここは自転車置き場です。私は自転車通学なので、毎日利用させ

てもらっ
てます」

「どの自転車だ」

「そこまで詳しくですか？私のはこれですけど…」

「まあ、必要なことだからな。当然、鍵はかけているよな？」

「はい、勿論です」

「これで全部か」

「はい、私の主な私物の場所はもう回ったと思います」

「じゃあ、ついてこい」

俺たちは全ての場所を確認して、ある場所に向かった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あの…、流川先輩」

「ん？なんだ」

「どうして私は、流川先輩の教室にいるんでしょうか」

そう、ここは２－Ｆ。

俺たちしか、教室にはいず、適当な椅子に腰掛けているというのが、現状だ。

「待機するところがここくらいしか思いつかなかった」

「いや、私物の場所を見張ってなくていいんですか？」

「だって、俺らがいたら、犯人が現れないだろ」

「でも、監視カメラとか、仕掛けてる様子もなかったし…」

「まあ、心配するな。確実に捕まえてやるから」

その言葉を最後に俺は意識を集中する。

探るのは３ヶ所。

１－Ｃ教室、下駄箱、駐輪場。

だが、調べるのはそこ一帯ではなく、完全なポイント。

被害者の席、靴箱、自転車、そこだけに集中する。

それらの場所との距離が０になった奴。

つまりは物に触れた奴を探し当てる。

友達でも触れそうなものだが、こんな時間に本人の断りもなく、触

っていた
ら、怪しいことには変わりない。

人気が少ないこの時間は犯人にとっては、狙い目だろう。
実際、俺たちが回ったときも、数人とすれ違ったのみだった。
十中八九、来るだろう。

その時であった。

ん？自転車に近づいてきてる奴がいるな。
見回ったときに、少女の自転車は他から離して置いておいた。
だから、隣に他の奴の自転車があるなんてことはない。
それなのに、その気配は迷いなく、そちらに向かっている。

これはかかったか？
そう思考している間にも、その気配が止まることはない。
黒と見ていいだろうな。

「おい」

「は、はい！」

いきなり、話しかけたから驚いているのか。
だが、今はそんなことを確認している場合ではない。

「今から６０秒経ったら、駐輪場に下りてこい」

「犯人が分かったんですか！？」

「いいから、言われた通りにしろ。俺は先に行ってるから。６０秒経ったら来いよ」

そうして、俺は教室を飛び出した。

階段を使うのも面倒なので、廊下の窓から飛び降りる。

着地と同時に駐輪場の方向へ走った。

…………………………………

「フヒッ、フヒヒ、しめしめ、この時間だから誰もいないぞ！」

自転車置き場には明らかに挙動のおかしい男が徘徊していた。

それはもう、何もしていなくても、通報されそうな気持ち悪さであった。

「伊予ちゃんの自転車はっと。あぁ、ウヒヒ、これこれ！」

その男が一台の自転車の前で立ち止まる。

「このサドルに、あの可愛いお尻が！大事な部分が！ハァハァ。フヒ、たまらないなぁ、クンクンクン！」

カシャッ

「え！？誰だぁ」

「今時のケータイって便利なんだな。ほら、証拠写真がこんなにバッチリ」

「人！？見つかった、逃げねーと！」

「だから、証拠があるっつーに」

「な、速……ぅ」

俺は逃げようとするストーカーの進行方向に回り込み、足払いで地に倒す。
その倒れている途中の男の襟首を掴み、逆に引っ張ることで首をしめる。
当然、言葉は最後まで出なかった。
これで逃げる気力はなくなるだろ。

「お前が犯人で間違いないな」

「違うんです。愛が溢れて、どうしようもなかったんです。伊予ちゃんと幸
せになりたい一心で…」

「本人は迷惑だって言ってるから、俺がいるんだよ」

「そ、そんなはずはない！きっと伊予ちゃんだって、僕のことを！」

「これだから、ストーカーは…。まあいい、お前はどうあがこうが職員室で
みっちりしごかれるだろうからな」

「しょ、職員室だけは勘弁してください。僕もただ愛の被害者に過ぎないん
です。恋がエスカレートしただけなんです、しょうがないでしょう？」

「自分は恋をしただけだから、悪くないってか？」

「そ、そうですよ。恋愛は個人の自由でしょ」

「ふーん…」

そこで一旦、言葉を区切る。

「ハハハハ、面白いなー、お前。」

「わ、分かってくれましたか」

「人と真っ直ぐ向き合えない奴に自由に恋愛する資格なんかあるわけねぇだろ」

「ひぃ……！」

笑っていた表情を変え、冷たく言い放った。
相手も相当びびっているみたいだ。

そうだよな。

“人と真っ直ぐ向き合えない奴に恋愛する資格なんてない”よな…。

そこへ伊予がようやく降りてきた。

「流川先輩、その人が犯人ですか」

「おう、現行犯で捕まえた。おい、ストーカー、お前なんか言いたいことあるんじゃなかったのか」

「そうだよ、伊予ちゃん！こいつに僕らは相思相愛なんだって、邪

魔なんて
されたくないんだって、言ってやってよ！」

「ごめんなさい、私、好きな人いますし。こんな迷惑な行為、もう二度としないでください！」

「う、嘘だよね、伊予ちゃん…。僕らは結ばれる運命じゃないかっ！！今になって、僕を裏切るのかい。そんなことしたら、復讐して…」

ガッ

上から、ストーカーの首をおさえつけた。
ギリギリと程よく力を入れる。

「なーんか、お前変なこと言おうとしなかった？あんま、しょうもないこと
ばっか言ってると、喉潰すけど、どうする？」

「ひぃ、ずみません。前言撤回します。もう二度としません」

「よし、なら職員室行こうか。いいよな？」

「はい、あとは先生たちに任せます」

とりあえず、依頼達成だな。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

―職員室からの帰り道

「今回もありがとうございました」

「俺のほうこそ、こんなに食券もらったら、言うことないぜ」

「くすっ」

報酬をもらった俺と悩みが解決した少女、二人で歩いていた。
決して気まずいなんてことはないのだが…

「あー…、えっとな」

「はい？なんですか」

「あのことは誰にも言わねぇから」

「あのこと？」

「ほら、好きな人がいるとか、どうこうだよ。当然とはいえ、聞いちまった
しな。あ、それとも、ストーカーを諦めさせるための嘘だったか？」

「あ！あれですか。ふふっ。本当にいますよ、好きな人は…」

「そうか…、まあ忘れるのは流石に無理だが、口外はしないから安心しろ」

（…私の隣にですけどね。）

42話　「ひねくれた愛」（後書き）

ありがとうございました
見事、後輩を救うことに成功しましたね。
これで少しでも海斗の優しさを知ってくれると嬉しいです。
そして、相変わらずのモテ具合。
まあ、こんなに優しい先輩がいたら、仕方ないですね。

43話　「海斗の秘密」（前書き）

これから1週間とちょっとの間、
私生活の方がとても忙しくなるので、
申し訳ありませんが、感想などに返信が出来ないと思います。
ただ、毎日更新は出来るだけするのでよろしくお願いします。
だけど、一応感想は見ているので、返せないのに言うのもなんですが
書いていただけたら嬉しいです。（極稀に返すかもしれません）

43話　「海斗の秘密」

今日の目覚めはよろしい。
昨日、ストレスを発散できたおかげだろうな。

やはり、悪い奴相手というのは、一番やりやすい。
そりゃぁ、勿論、相手が悪の方が、罪悪感がないというのは、あるのかもしれないが、俺の言っている点はそこではない。

ああいう奴らは基本、世間から信用されてない。
自分の行いで、わざわざ周りからの評判を下げているからだ。
だから、そんな奴らが誰に何を言ったところで聞く耳はもたれない。
発言に効力がないとでも、言った方が分かり易いか？

故に“自分がこんなことをされた”、“あいつは容赦なく、あんなことをしてくる”と言ったところで、信じるものなどいないのだ。
所詮はふざけた野郎の戯言だと、無視されるだけ。
これも日頃の行いってやつなんだろーな。

そのおかげで、俺は特に気にすることなく、力を振るえる。
そんなわけですっきりした俺は、いつも以上に早く起きてしまった。
いつもより、時間に余裕があるので、川辺で休憩中だ。

なんか早朝の川って、独特な雰囲気を持ってるよな。
こうして、改めて見ると、心が安らぐぜ。

そう、俺はそのとき、あまりにも安らぎすぎていた。

だから、近づいてくる者に気づくのが遅れてしまった。

「あの…！」

Ｓｉｄｅ　一子

今日も今日とて、朝から修行だ。
ん～、やっぱり朝の風を受けながら、走るのは気持ちがいいわ。
しゅーぎょうって、すーてきー♪

そう、いつもと変わらない朝。
いつもと変わらないトレーニングメニューをこなして、汗をかく朝。

でも、その日はいつもとは違うことがあった。

川辺に座っている人影があった。
別に人がいることは珍しくない。
知らないおじいちゃんが犬を連れて散歩してたりするのは、よくあることだ。

だけど、違う。
グレーのパーカーを着ている、その姿。
アタシはその姿をよく知っていた。

アタシはほぼ毎日、この川沿いでひたすら、修行をしている。
そりゃ、ファミリーの仲間と一緒に登校したり、天気が悪いときは別だけどね、
それでも、ほとんど毎日。
そして、そのグレーのパーカーの人も毎朝見かけた。

アタシが修行をしていると、何回か、川沿いを通っているのを見かける。
たぶん、この辺をコースを決めて、走っているんだと思う。
アタシが来て、修行を始める前に通ることもあった。
もしかしたら、アタシより、もっと早くから始めてるのかもしれない。

アタシは同じ修行仲間として、興味を持った。
フードを深くかぶっていて、顔は見えないんだけど、男の人で間違いない気
がする。
それでタイミングを見て、何度か話しかけようとしたんだけど。
その人はアタシが近づこうとすると、離れていってしまい、その場所からい
なくなってしまう。
偶然とかではなく、近づくと決まってそうなのだ。

一回、アタシもムキになって、全力で追いかけたことがあった。
でも、その人の足はとっても速くて、追いつけるものじゃなかった。
そのうえ、持久力だってあるから、その差は離れる一方で。
結局、アタシがそのあと、何度挑んでも、結果が変わることはなかった。

アタシも相当修行して、足には自信があったんだけど、考えてみれ

ば、この
人もアタシと同じかそれ以上の修行をしてるのよね。
やっぱり、修行ぱわーって、恐ろしいわ。

そんなことを考えたら、もっと話してみたくなって、今度は何度も通ること
を利用して、待ち伏せ作戦をやってみた。
だけど、アタシが待ち伏せをしているときに限って、まるでアタシのいる位
置が分かっているかのように、上手く迂回していく。
気配はアタシなりに隠しているはずなのに…。
悔しいわ。

そんなんで、良い友達になれそうだと思いつつも、結局一度も話す機会なん
かは訪れなかった。

だけど、今、目の前に座っているのはまさにその人。
休んでいるところなんて、一度も見たことなかったけど、今は完全に川を見
て、ぼーっとしているようだ。
なんか、意外なイメージだ。

って、そんなこと考えてる場合じゃなかったわね。
これはまたとないチャンスだわ。
そう思ったら、話かけるのにためらいは無かった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「あの…！」

まずい、完全に逃げるタイミングを見失った。
油断しすぎだろ、俺。
よりによって、一子に絡まれてしまうなんて、一生の不覚。

いやいや、まずは落ち着け、俺。
焦っても、何も始まらないぜ。
落ち着いて偶数を数えるんだ。（↑既に落ち着けていない）
２、４、６、８、１０…あれ、なんか難易度低くね？
ていうか、俺、０って言ったっけ、なんか言ってない気がする。
あ、じゃあ最初から……じゃなくて！

とにかく、黙ってるのはもっと怪しい。
適当に言葉を返そう。
俺はフードをより深くかぶり、答えることにした。

「な、なんだ？」

「あの、いつもここら辺、走ってますよね！」

「あ、ああ、そうかもしれないな」

「私、何度か話しかけようとしたんですけど、すれ違っちゃって。」

そりゃそうだよ。
だって、俺全力で逃げたもの。

努力なんて、人に見られた時点で終わりなんだよ。
相手の油断を引き出せなくなるしな。

「そうだったのか、気づかなかったなー…」

「ていうか、凄く足速いですよね。アタシ、全然追いつけなくて。
いつも、
どんな練習をしてるんですか？」

そんなに瞳をキラキラさせるな。
直視できんだろーが。
いや、それじゃなくても、ばれないために直視なんかできないが。

「えーと、それは…」

「？　あの、アタシたちって、どっかで話したことありますか？な
んか、よ
く聞いたことのある声のような…」

「ああー、そうだ！俺の修行方法はね、まず空を見るんだ！」

「え？空」

バッと上を指差す。
それに従い、一子が空を見上げる。

「で、どうするんですか？」

返事が返ってくるのが遅いと思い、顔を戻すと…
そこには、もう一子1人しか立っていなかった。

「あれ、いなくなってる…」

周りには人影すら見えないどころか、今の今までそこに人がいたのかと疑う
ほど、気配まで綺麗さっぱり感じられなくなっていた。

一方、その頃…

「本格的に危なかった」

危機一髪で思わず、本気で逃げてしまった海斗がいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

朝こそ大変だったが、今日の海斗は平和だった。

と、そこへ…

「海斗〜、なんかルー師範代が呼んでる」

「あ？」

突然の来訪者があった。

43話　「海斗の秘密」（後書き）

ありがとうございました
この話を現段階で出そうか結構迷ったんですが、
いつまでも謎ばっかなんで、少しだけ秘密を書いてみました
一子の修行する姿を毎日見かけたとかいうあれも
毎朝海斗もいたからこそ、言えていたことだったんですね

４４話　「高級計画」（前書き）

遅くなりました。
変わらず感想を書いてくれている方はありがとうございます。
絶対に一週間ちょっとしたら、返信するのですみません。

４４話　「高級計画」

「おお、来たネ」

「俺に何か用か？」

「実はまた依頼が入ってきてネ。君に持ってきたというわけだヨ」

「ちょっと待て。確かに昨日は受けはしたが、なんで今日も俺のとこに持ってくる？他の奴にまわせばいいだろ」

そうだ、昨日は乗りに乗っていた流れで、仕事をこなしたが、別に食券も若干少ないとはいえ、少しの間はこれでやりくり出来るだろうし、これ以上、進んでやる必要はあまりない。それこそ、昨日競り落とせなかった奴にでもやらせてやればいいだろ。

「それがね、今回の依頼は名指しなんだヨ。流川海斗、君にネ」

そう言って、指を指される。

一瞬だけ、思考が遅れる。

えーと、つまりはどういうことだ。

「は?そんな依頼があんのか、俺限定ってことだよな」

「そうだネ。初めてのパターンではあるけれど、別に禁止もしていないし、
今まで前例がなかったってだけだヨ。さて、どうすル?」

本当なら、ここで依頼内容くらいは聞くもんなんだろうが…。
今更、ちまちま稼いでも、しゃーないしな。

「いや、別にいい。そいつには悪いがな」

「そうカ。非常に残念だネ。上食券１００枚という優良物件だったんだけど
ネ。仕方が無い、依頼人には断る旨を伝えておくヨ」

「おい、今なんつった、１００枚って言ったか?」

「言ったヨ。今回、依頼料は上食券１００枚の大奮発」

「１００って、百鬼夜行のあの１００か?」

「百物語のあの１００だヨ」

「百代の過客の、あの１００か!?」

「川神百代の、あの１００だネ」

いや、そいつは知らんが…。
ともかく、そんなビッグな報酬なら、話は別だ。
１００枚って、一体何日もつんだよ。
いや待て、それだけあったら、他の奴に売ってもいいな。
割安で売れれば、簡単にさばけるだろう。

「よし、とりあえず話を聞こうか」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

そして、昼休み。
俺は弓道場に来ていた。

「お前が頼み人ってことでいいのか？」
「はい、私が流川先輩に直接依頼させていただいた、１－Ｓ所属の武蔵小杉といいます。」
「Ｓ組か。エリートクラスは奮発するな」
「どうしても先輩に引き受けていただきたかったものですから」

「ふーん、それにしても、弓術を見せてほしいだなんてな。普通、弓道部員
が頼むもんなのかね。俺、現役でもなんでもないんだけど」

「風間先輩との決闘のときに流川先輩の腕は見ました。あんな状況の中で、
一発で的の真ん中を捉えるなんて、見事でした」

「いや、でも俺の前にやった女子も、一発で当ててたぞ」

「あー…、流川先輩は知らないかもしれないですが、椎名先輩は弓矢やって
ますから。しかも、その腕はかなりのものです」

「なら、尚更そいつに教えてもらった方がいい気もするがな」

「それじゃあ、意味が……ゲフンゲフン。じゃなくて、それは無理なんです
よ。確かに椎名先輩は弓道部に所属していますが、幽霊部員気味で、とても
教われるような状況じゃないんですよ」

「はあ。まぁ、１００枚もくれるっていうなら、文句無く、やるけどな」

「そうですか！ありがとうございます」

ざわざわ　ざわざわ

「それでさっきから思ってたんだが…」

「な、なんでしょうか。」

「なんかギャラリーが多すぎないか」

「いや～、流川先輩が見れるなんて噂でも流れたんでしょうかねー。検討もつきませんねー。」

「まあ、いいけどさ」

Ｓｉｄｅ　小杉

なんとか作戦の第一段階は成功したわ。
プレミアムに上食券１００枚も用意したんだから、釣れてくれないと困るんだけど。

ともあれ、順調にここまで運ぶことが出来たわ。
１年生全体に噂を流し、弓道場に集めるのも完璧。
そして、この男がこの大勢の前で弓矢を射るのだ。

そんなことをして、成功されたら、もっと人気を上げることになるだろう。
だけど、そんなことは起こりえない。
この男は自分を応援してる数多くのファンの前で失敗をするのだ。

そして、恥を晒した結果、1年生の話題から消えていく。

あの先日の戦いを見る限り、この男、弓道に関しては素人だ。
“小さい頃にやったことある”とかなんとか、言っていたが、あれはただの
ハッタリだろう。
どんなに弓道を極めている人でも、的も見ずに矢を放つなんて、邪道もいい
ところね。
それだけならまだしも、弓を構える前から、目をつぶっているなんていうの
は、どう考えてもおかしい。
つまり、あの時当たったのは偶然か勘でしかない。

もう一度やれ、と言われれば、成功は出来ないだろう。
それでも、成功する可能性がないわけではない。
あの時のことを感覚的に覚えているなんてことがあっては、たまらない。
チャンスは1度だけなのだから。

だから、念には念をと、矢に細工をしておいた。
あの時、使った矢とは、材質も重量も長さも、何もかもが違う。
そのうえ、削ったりして、重心をめちゃくちゃにしておいた。
自分で言うのもなんだが、矢と言えるのかすら怪しい、まさに形だけのもの
となっている。

この矢を使って、素人が的の真ん中に当てられるわけがない。
というか、弓道の上手い人でも無理な気がするわ。
こいつの失敗は確定したも同然。

そして、その後に私が普通の矢を使って、華麗に真ん中を打ち抜く。
それを見ていた1年生は当然、この男より私の方が凄いと理解する。
話題の中心は流川海斗から、そのまま私に。

完璧なシナリオね。
うーん、我ながらプレミアムな作戦だわ。

早くその時が来ないかしら。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「じゃ、とりあえずやりますか」

俺はそこら辺の弓矢を使おうとする。

「あ、先輩！この弓矢を使ってください！」

「ん、別にいいけど、どれ使っても同じだろ」

「それが貸し出し用の物なんです」

「へいへい」

ちゃっちゃと済ませようと弓矢を構えるが…

ん？なんかこの矢おかしくないか。
持った感覚が違うような気が…。
気のせいか？

「おい、この弓矢…」

「さあ！流川先輩、打ち抜いちゃってください！」

「いや、だか…」

「どうぞ、見せてください！その技を！」

なんか、勝手に盛り上がっていて、聞ける状態じゃないな。
しょうがない、これでやるしかなさそうだ。

的をしっかりと見据える。
あの時の感覚を思い出す。
そして、射抜く！

次の瞬間、

「きゃあああああぁぁぁぁ」

矢はしっかりと的の中心を捉えていた。

「な！？どうして」

少し矢の質が、川神戦役のときと異なったが、基本一度その経験があれば、
いくらでも応用は可能だ。
経験に基づき、重量など、異なった条件を方程式を解くように代入していけ
ばいいだけのことだ。
あの重さではこの高度だから、この重さではもう少し上ってな具合にな。

やっぱ、一度見たあの手本が相当レベルが高かったんだな。
基盤がしっかりしていれば、それだけ活用の幅は広がる。
プロ級の弓術さまさまってことだ。
実にいいものを盗めた。

「じゃ、約束通り、食券１００枚はもらっていくぞ」

「な、ちょっとま…」

「あーそうだ。その矢、重心がずれてるから、新しいのに交換することをお
薦めするぜ。ちゃんとしたのを使わねぇと、せっかくの実力も伸びないぞ」

そう言い残して、海斗はその場をあとにした。

「うわー、何今の。素敵すぎる、流川先輩」

「さらっとやっちゃうのが、またカッコイイんだよね」

「こんなことって…」

結局、武蔵小杉のプレミアムな作戦とやらは、海斗の人気に拍車をかけただけだった。

４４話　「高級計画」（後書き）

ありがとうございました。
まあ、タイトルは読んでもらった方は分かると思いますが、こうきゅうではなく、プレミアムです。
はい、どうでもいいですね。
次回もよろしくです

45話　「海」（前書き）

はい、今回からは水上体育祭編です。
なんだかんだで日常編が長かったですね。
やっと結構前から話が出ていた水上体育祭のスタートです。
まぁですが今まで通り、どうぞ、ごゆるりと見てください

45話　「海」

太陽がギラギラと照りつける。

「夏だ！」

「海だ！」

「スク水だあああああああああああ！！！」

真夏の砂浜に男たちの声がこだました。

「はぁ、これだから、男っていうのは…」

「まあ、こんな天気のいい日に1年に1度の水上体育祭なんですから、はしゃいでしまうのは仕方ないですよ。私はお姉さんとして、そんな皆さんをしっかりと見守ります」

そう、今日は水上体育祭当日。

海辺には川神学園の生徒たちが一様に水着姿で並んでいた。

勿論、学校行事なので1年から3年まで全ての生徒が揃っている。

「フフフ…、今回の体育祭は例年以上に楽しいことになりそうだ」

不敵に笑う三年生もいれば、

「ううん、初めての体育祭。なんとしても、ここで活躍して、友達を増やしたいです。目標まではまだまだですからね」

緊張している一年生もいた。

そして…

「へえー、ここが海か。やっぱ、写真とかで見るのとは迫力とスケールが桁違いだな。いい経験したわ、ほんと」

「海斗、本当に海来たことないのね。珍しいわ」

「自分も日本の海はこれが初めてだな。日本の海の波はあのフジヤマを飲み込むほどだという。流石は侍の国だ」

なんか確実に“富嶽三十六景”あたりと勘違いしてる雰囲気がそこはかとな

く感じられるのだが、面白いので放置しておくことにする。

それよりもこれが海か…
想像通りの感じだが、なんか複雑だな。
何もかもを全て飲み込むこの広大な“海”。
空から降り注ぐ雨も、流れてくる川の水もな…。

“お前、名前はなんていうんだ。”

はあ、馬鹿みてー。
何、今更思い返しちゃってんだか。
祭りの前にテンション下げて、どうするよ。

いやー、忘れた忘れた！
今日は楽しもう、なんてったって初海だし。
テンションが上がることには違いない。

それに最近、色々なことがあって、気づかされた。

最初はタッグマッチ、次いで川神戦役。

それでいちゃもんをつけられて、クリスと決闘なんてこともあったか。
そしたら、そのバカ親父の軍がやってきて、マルギッテとかいう強い軍人とも戦って、ちっとばかしハッスルしちまった。
最近では、ストーカー退治や弓道とかの依頼もこなした。

人と関わらないことに固執していた頃からは考えられないくらい、面倒に巻きこまれている毎日だ。
だが、驚くくらい充実している。
退屈からの脱却、求めていた非日常が実現している。

なにより、力を出せる奴らがいるということは良い。
やっぱり独りでの訓練も悪くないが、人との実戦とは別物だ。
なんだかんだで体を動かすのは好きなんだよな。
ずっと何もしないなんて、ストレスだって溜まる。
運動でもなんでもそうだが、たまにはやらないと、腕もなまるしな。

今までは不良とかで我慢してきたんだが、やはり物足りないという感じが否めない。
強い弱いとかの話ではなく、あいつら自分が最強だと思って、常に人を見下してるからな、そのくせ仲間任せだし。
そういう意味では、それこそ真剣の喧嘩でなくたって、よっぽどこいつらの方が楽しめる。
この学校に入ったのは、正解だったな。

…本当にあの頃とは何もかもが違う。

自分が知りたいと思ったから、入った。
だが、いざ来たら、俺は逃げていた。
変わったつもりが、何も変わっていなかった。
結局どこかで恐れていたんだ、繰り返しを。

それでも、あいつは、一子は話しかけてきた。
俺の対応なんて、冷たいものだったはずだ。
それこそ、二度と関わりたいなんて思わないように。
こいつと話そうと思ったのが馬鹿だったと、後悔するように。

だけど、一子は俺の思惑通りには動かなかった。
俺がそんな接し方をしたところで、他の奴のように嫌悪の目を向けるわけで
もなく、ただ笑っていた。

～

「流川君、ウメ先生にあんなこと言っちゃダメよ」

「あ？」

「一応、鞭の使い手で強いのよ。それに大和が年上の人に敬語を使うのは、
“しゃかいつーねん”？だって言ってたわ」

「で？」

「いや、それだけなんだけど…」

「あっそ」

「なんか流川君、疲れてて、今話すの嫌かな？ごめんね、無理矢理話しかけちゃって。また今度、話しましょ」

「いや…」

「疲れはしっかり休んでとらなきゃダメよ。あとは食事も気をつけてね」

「だから…」

「またね、バイバイ！」

～

本当におかしい奴だ。

客観的に見ても、悪いのはどう考えても、俺の方だろ。

なのに、謝られてちゃ、こっちの立場がない。

よくまあ、こんな奴に“またね”なんて、言葉が出てくるもんだ。

少なくとも俺なら、今後は近づかないようにするぞ。

でも、その後もたびたび話しかけてきて、俺も遂に相手の名前を覚

えるまで
に至ってしまった。
そして、タッグマッチのペアに進んでなってくれた。
そのおかげで、由紀江やクリスと知り合い、俺の日常はガラリと変わったわ
けだ。

一子がいなかったら、今頃俺はどんな生活を送っていたんだろうか。
独りで退屈な日々に飽き飽きしていたのだろうか。
そう考えると…

「おーい、海斗！」

「ん、なんだ？」

「なんだじゃないわよ。いきなり黙っちゃうし」

「ああ、悪い悪い」

ちょっと物思いにふけっちまったようだ、俺らしくもねぇ。

「ていうか、今日は暑いんだから、しっかり水分とらないと！はい、海斗、
これ配られてるドリンクだから、ちゃんと飲んでね」

「ああ、俺の分までわざわざ持ってきてくれたのか」

「そんなペットボトル1本持ってくるのも、2本持ってくるのも変わらないわよ」

そう言って、一子がいつもの笑顔で飲み物を手渡す。
こいつ、自分がどれだけのことをしてるとか、人に影響を与えてるとか、全然分かってないんだろーな。
それがいいとこなんだろうけどさ。

「一子。」

「ん？なーに？」

「ありがとうな」

「へ？」

瞬間、一子の顔は真っ赤になる。
その火照りを冷まそうというのか、手に持っている冷えたペットボトルを頬に当てて、目を見開いている。

「い、いきなり、何よ、もう。飲み物運んできたくらいで大げさよ」

「はっ、まあそうかもな」

「まったく…、おかしな海斗ね」

たとえ、何の感謝かは伝わらなくてもいい。
目の前の少女に対して、言葉にしておきたかった。

45話　「海」（後書き）

ありがとうございました
ちょっとは長くなりますかね？
ストーリーよりも日常の方が長いのが定着してますから
次回からは競技が始まる……はず

46話　「借りたら返せ」（前書き）

感想で多数？いただいたんですが、
一子がメインヒロインなのかという件について…
なんか無意識のうちに出番が一番多いんですよね。
あの素直な反応が書きやすいというのもあると思いますが、
やはり愛ゆえでしょうか（笑

46話　「借りたら返せ」

さて、そろそろ競技が始まる頃だろう。
最初の競技が何とか、どのくらいの競技を行うのかとか、プログラムみたい
なものがないので、皆目見当もつかない。
学校として、それは大丈夫なのか？

あの学園長はただ水着見たいだけなんじゃねーのか。
こんなこと思ってるのは、俺だけじゃないはずだ。
一子とかだって、そうだろう。
ていうか、隣にいるはずなのに、さっきから静かすぎないか？

一子のほうを見る。
すると、一子もこちらを見ていて、何か言いたそうにしていた。

「海斗、あのさ…」

「ん、どうした？」

「この前、大きさは気にしないって言ってたじゃない？」

大きさは気にしない？
なんだっけ、それ。
確かにそんなことを言った記憶はしっかりとある。

「ど、どうかな…、アタシの水着姿…」

「ん？水着姿？」

“どうかな”って、どうゆうことだ。
大きい小さいの話はもうどっかいったのか。
それにしても、一子の水着姿ね…

着ているのは勿論、学校から指定されているスクール水着だ。
小柄で明るいイメージの一子にはぴったりな気もするがな。
まさにスポーツ少女といった感じだ。

「似合ってんじゃねーか？」

「いや、そうじゃなくて、海斗がどう思ってるのかを聞きたいなーなんて…」

「健康的で可愛らしい格好だと思うが」

「かかか、可愛らしい…！？」

びっくりすんなよ、そっちが聞いたんだろ。

体は日々の修行で適度にしぼってあり、無駄な肉はない。
かといって、筋肉で角ばった感じなどは一切なく、締まりつつも丸みがあって、一子の小動物的な可愛さを損なっていない。

というか、普段はポニーテールに縛っている髪を下ろしているという日常とのギャップに魅力を感じてしまうのは、男としては仕方ないだろう。

「あ、ありがと。あの、海斗もさ…水着…その、かっこいいと思うわよ……、
ううぅぅ」

そういった一子からは蒸気でも噴出さん勢いだった。
顔も言うまでもなく真っ赤で、ただでさえ暑い陽射しの中、その周辺だけが
最高気温を記録していたほどだ。
もはや、恥ずかしさからのうめき声も、暑さのせいで瀕死の状態になっていて
るようにしか、伝わらなかった。

「だ、だいじょうぶか？一子。」

「だ、大丈夫よ！」

「まあでも、この水着、店員にすすめられたのを買っただけなんだけどな。
そんなに有名な会社のやつだったのか？」

「え…そうじゃなくて、アタシがかっこいいって言ってるのは、その…、水
着自体のことじゃなくて…」

「海斗！」

一子が何か言いかけたときだった。
その間にクリスが割って入ってきた。

「犬ばかりでなく、自分はどうだ」

「ちょ、ちょっとクリ！いきなり入ってこないでよ」

「ああ、似合ってる似合ってる」

「ふふ、そうだろう。海斗に認めさせてやったぞ」

まあ、クリスもいつもとは違った感じで髪を結んでいて、可愛らしいことに
違いない。
だが、みんな何故俺に聞くのだろう。
そんなにセンスがあるわけでもないのだが…。

「もう、クリ邪魔しないでよね！」

「なんだ犬、勝負するか」

「望むところよ！」

「いざ…！」

「はいはい、そのやる気は競技にぶつけとけ」

何故か急に機嫌が悪くなった一子と好戦的なクリスが決闘を始めよ
うとした
ので、俺は二人を適当に押さえておいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

「では、最初の競技を発表する」

はあ、やっとか。
しかし、海でやる競技って、どんなもんなんだろうな。
流石に泳ぐだけじゃ尺足りないだろうし。

「最初の競技は借り物競走じゃ！」

…………は？
いやいやいや、全然海関係ないんだけど。
なに、海にも入らせてくれないわけ？

せっかく、こんなにも水があるのに、活用しないのかよ。
“水上”でもなんでもないよね、それ。

「まあ、今海と全く関係ないとか思っている者もいるじゃろうが、落ち着きなさい。その辺りはしっかりと考えておる」

ほう。
その考えを是非聞かせてもらいたいもんだ。
今の状態では確実に俺と同じ考えのやつも落ち着けないだろう。

「借り物競走とは、その名の通り、物を借りる競技じゃ。そして、水上体育祭の要素を入れるのは、ずばりここ！借りるものは全て例にもれず、海や水にちなんだ物になっておる。貝殻だったり、水羊羹なんて変り種も入っておる。その難易度は高いものから低いものまで様々じゃ。何を引くのかも運次第じゃが、重要ということになるのぉ。ワシが色々考えたので、難しいものも生徒らの頑張りに期待する」

へぇ、色々考えられてんだな。
まだ、海にまで来なくてもできるんじゃないかという疑問はあるが、大体の

頑張りは認めよう。
海に直結するものだったら、手に入りそうなもんだが、名前だけが水に関係
しているとかいうものだと大変そうだな。
そこら辺は運に任せるしかねぇか。

「よーい、始め！」

一斉にスタートする。
まずは紙をとらないとな。
一番に紙が置いてあるところまで辿り着くと目の前にあった紙をとる。
こんなの悩んでも仕方ないから、さっさと決めた方がいい。
そして、その紙を見ると、

“１年生の水着（女子に限る）”

と書いてあった。

……おい。
確かにドストレートで水には関係があるが、難易度も高すぎないか。
絶対にこれ書いたの深夜とかだろ。
徹夜特有のテンションで書いただろ。
もはや、あのじじいの願望としか思えん。
主にかっこの中とかな。

ていうか、皆着てるものをどうやって借りてくんだよ。
ともかく向かうしかないか。
俺は1年女子の塊に走っていく。

「ねぇ！流川先輩、こっち来てない？」

「ほ、本当だ、なんか借りに来たのかな。私が貸したいな…」

「おい、ちょっといいか。こんなかで水着もう一着持ってるやついないか」

「え？どういうことですか？」

「いや、あの変態が…じゃなくて、指示が1年生の水着なんだよな。だが、
当たり前だが、皆着てるだろ？スペア持ってるやつでもいないかと思ったん
だが、普通いねぇよな…」

「そうですね…」

いや、まず指示がおかしいんだけどな。

「わ、私、先輩のためなら、別に…」

「おい！馬鹿、やめろ」

「きゃ…／／／」

いきなり水着に手をかけた少女の両手を押さえる。
こんなとこで脱がれたら、確実に俺が脅迫したようにしかならない。
第一、行動が思い切りすぎだろ。
もっと自分を大切にしようぜ。

ん？待てよ。

「おい、ちょっと一緒に来てくれるか」

「あ…は、はぃ」

手を掴んでいる少女の目を見て、頼んでみる。
何故か顔はそらされたが、了承してくれた。
うむ、優しい子だ。

そうだ、別に水着単体で持っていく必要はない。
水着を着ている子に来てもらえばいい話だったんだ。
危なかった、危うく一人の少女に心の傷を負わせてしまうかもしれなかった。

そのまま、手を引っ張ってゴールに向かった。
終始、その子は何も話さなかった。
やっぱり少し迷惑だったかね。

「よし、これでクリアだろ」

「うむ、ええのうええのう」

「何を触れようとしてんだ」

「失礼な、手も動かしておらんわ」

「いや、もう目が犯罪者だったから。確認できたんだったら、もう
この子は
元の場所に返してくるからな」

学園長は“もうちょっと”みたいな目を向けてきたが、その目を確
認したう
えで完全に無視してやった。
やっぱ、もろあいつの願望じゃねーか。

はじめっから、カオスな体育祭だった。

46話　「借りたら返せ」（後書き）

ありがとうございました
もはや海斗の人気がよく分かる回でしたね。
脱ぐ覚悟すらあるって凄いですよね。
クリスや一子も自分を見てもらいたいと。
羨ましいかぎりです。

47話　「願い事1つ」（前書き）

活動報告にも書きましたが、溜まってた感想ある程度返しました。
本当にまとめて返信という形になって申し訳ないですが、
皆様の感想は毎日読ませていただいております。
返信がすぐに出来ないにも関わらず、感想をくださっている方々は
本当にありがとうございます。
嬉しくて、非常に励ましとなっております。

47話　「願い事1つ」

次はなにやら一年生の競技らしい。
一年生全体が移動を開始しているのでたぶん間違いない。

あれ？
でも、なんか女子だけしかいないような…
男子は応援席で待機しているどういうことだ。

「続いての競技は1年女子による水上バトルロワイヤルじゃ！自由参加なので、今からでもどんどん参加できるぞ」

「おー、いいぞーー」

「この競技を待っていたんだーー！」

なんだなんだ、この男子陣の盛り上がりようは。
あちこちからこの競技への熱が感じられる。
一体どんな競技なんだ。

「ルールはいたって単純じゃ。海に浮いたビニールの小島の上で参加者全員でバトルロワイヤルを繰り広げてもらう。ルールは1つだけ。小島から落ち

たら、その時点で失格じゃ。最後まで残っていたものが優勝となり、その生
徒の所属するクラスにポイントが入る。ちなみに上位三名までにはポイント
が入ることになっておる。」

なんだ、結構まともな競技じゃないか？
だが、男子の歓声は鳴り止まない。
それに学園長の顔も緩んでるような気がするし…

「一体、どういうことなんだ」

「その質問には俺が答えてやる」

「うぉ…いきなり何だ」

後ろに立っていたのはいつも一子と一緒にいる頭のよさそうな奴。
そういえば、この前賭場にもいたよな。
一子の話に結構出てくるんだが、名前なんていったっけな。
なんかこう、有名な戦艦的な名前だった気がするんだよな。

「大和だ、直江大和」

「わぉ、テレパシー？」

「んなわけあるか。別に人の名前なんて覚えそうにないお前のこと

だし、こ
れからは俺の名前知っておいてくれなんて言わないが、そんな目の
前で必死
に考えてる顔されても困るんだよ」

「おー悪い悪い。で?その大和が俺に話しかけてくるなんて、珍し
いんじゃ
ねーの?」

「まぁな。競技について知りたかったっぽいしな。流石に今回のこ
とは俺も
不憫に思ってるし、気にすんな」

おー、競技について教えてくれんのか。
それはありがたい。
だけど、今回のこと?不憫?っつーのは何の話だ。

「大方、説明された競技の内容と会場の男子の盛り上がり具合が結
びつかな
いから、不思議に思ってるってとこだろ」

「やっぱ、テレパシーか」

「いや、そんくらいは考えりゃ分かる。一応、ファミリーの頭脳担
当だしな」

「そういうもんか」

「で、その肝心の競技だが、アレは去年も行われた競技なんだ。まあもっと
も、そのときの競技名は“ドキッ！女子生徒だらけの水上アイランドバトル・
ポロリもあるよ”なんて、ふざけた名前だったんだけどな」

「……」

「当然一部の男子たちは大喜び。だけど、そんな名前で参加者が集まるはず
もなく、結局一人として参加者は出ずに競技自体がなかったことになったん
だ。それが今回、また開かれることになって、男子の期待値も前年のおあず
けによって高まった結果、こんな状況となってるわけだ」

なるほど、さっきから絶えず叫び続けている男子たちにもだらしのない学園
長の顔にも合点がいった。
そりゃそんな露骨な企画だったら、大コケするに決まってんだろ。
あの学園長は学校行事を何だと思ってんだ。
私物化っていうレベルじゃねーぞ。

ん？でも待てよ…

「じゃあ、なんで今回は普通に開催されてんだ？見たところ、参加してんの
ほぼ一年の女子生徒全員くらいだろ」

「ああ、それなんだがな……。今回は学園長も対策を考えてきたらしくてな、
優勝者には一等の賞品が出るんだよ。」

「へー、……え、それだけ？」

「ああ、それだけだ」

「…どんだけ豪華な賞品なんだよ。こんだけの人数好みもあるだろうに、そ
んな万人受けするもんなのか。やっぱ金とかか」

「はあぁぁぁぁ」

そこで大和は大きな溜息をつく。

「いやまあ、それが不憫に思ったんだけどな。なんか優勝者はお前に願い事
を一つ聞いてもらえるらしいぞ」

「は？お前って誰だよ、シェンロ○か」

「いや、残念だが七つの球を集めるまでもなくお前だよ、流川」

「え！？なんで俺がそんな役になってんだよ」

「やっぱ知らされてないよな…。まあ、なんでって言われたって、

需要があるからなんじゃねーの」

（まゆっち含め、大人気だもんな。そりゃほとんどの1年女子が参加させんのにはこれほど効果的な手はないだろう）

あのジジイめ…！

自分の欲のために俺をなんの断りもなく使いやがって、老い先短いその人生強制終了させてやりたいくらいだ。

餌にされた海斗の意思など尊重されることもなく、水上の小島では物凄いやる気の少女たちが優勝を競いあっていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

「優勝は黛由紀江じゃ。さて、では優勝賞品である流川海斗にお願いの権利をプレゼントしよう。大事に使うのじ…」

「なーにが、“プレゼントしよう”だ。誰もお前に俺の権利を委託

した覚え
はないわ」

「あ、海斗さん…。その大丈夫ですよ、海斗さんがそんなことを許可してい
るわけないだろうなって思ってましたから。私は別に無理に海斗さんにお願
いを聞いてもらおうなんて考えませんし、迷惑なことは十分承知してておりま
すから。ですから、その、あの…」

「…はぁ。由紀江、ちょっとこっちに来い」

「え…はい」

そのまま由紀江の手をひいて、人だかりから離れる。

「ここまで来ればいいだろう」

「あの？海斗さん」

「確かに勝手にやられたのを俺が軽々承諾してたら、学園長もつけあがるだ
ろうし、気乗りしないがな…。由紀江が頑張ったのは事実だ。それでいきな
り優勝賞品なしなんて、それも十分な仕打ちだしな。いいぞ、願い事くらい
言ってみろ。叶えられる範囲ならきいてやる」

「え、え!?そんなでも…」

「言っとくけど、俺に悪いとかは考えるなよ。俺が決めたことだ。それにこの件に関しては悪いのは全面的にあのジジイだし、由紀江は被害者だからな」

「はい…、でもそんな急に言われてもですね…」

「なんでもいいから、言ってみ?」

「えーと…あ!じゃあ海斗さんにお弁当を作っていくとか…」

「いや、それ完全に俺が得してるから。自分のためのお願いをしなさい」

「じゃあ、えーと…えーと…」

「まぁ、急に言われても難しいか。いいぜ、保留にしといてやるから、願いが思いついたら言いな」

「あ…!え、はい」

「じゃあな」

こうして、少女は大変な権利をゲットしてしまったのだった。

47話　「願い事1つ」（後書き）

ありがとうございました
もう学園長の変態度が増しているのはスルーの方向で。
それにしても、海斗の釣り効果は高すぎますね。
まあ、それだけ嬉しい賞品なのでしょう。

48話　「ビーチバレー」（前書き）

なんか毎日更新しているはずなのに、
不定期更新ですよね（時間的な意味で）
これは許してください
では、どうぞ

48話　「ビーチバレー」

バトルロワイヤルが終わり、その他なんだか海が関係しているようでしてな
いような判断が難しい競技が続いた頃、

「次は男女ペアによるビーチバレートーナメントじゃ！」

へー、男女ペアね。
なんか、やっと学校のイベントらしくなってきたな。
つっても、この暑い中、バレーか。
大変そうだよなー、どうしようか…

「ちなみに優勝したペアには水にちなんだ賞品“水族館ペア招待券”がおくられることになっておる」

何!?水族館って、あれだよな。
シャチとか、イルカとか、マンタとか、海の生き物たちに逢えるっていう、
夢のような場所。
それは俄然やる気になるな、いい、実にいい。
そんな考えにひたっていたときだった。

「海斗！アタシとペアになりましょう！」
「海斗！　自分とペアにならないか！」

凄まじい勢いで一子とクリスが迫ってきた。

「何よ、クリ！また、アタシの邪魔をしようっての」
「犬こそ何だ。海斗には自分から先に声をかけたんだ」
「そんなことないわよ！ほぼ同時だったじゃない」
「いや、自分が先だ。それに優勝を目指すなら、海斗とより強い者が組むのは当然の処置だろう」

「一回決闘に負けたからって、別にクリより弱いなんて思ったことは一度もないわよ。そ、それにビーチバレーはチームワークも重要なのよ。アタシの方が海斗と一緒にいる時間長いし……その、アタシは海斗のぱ、パートナーだし…！」

「付き合いの長さなど関係ない。自分だって海斗の実力を信頼している。それだけで、犬との時間の差など事足りる。」

「アタシなんて、海斗と…」

「あーはいはい、そこまで」

「む…」

「ん…」

矢継ぎ早に言葉が生み出される二人の口を指で塞ぐ。

いちいち、そんなことで口論するなよ。

二人の試合への熱意は伝わったが、なんだかなぁ。

「えー、おほん。憧れのあの娘と一緒に参加したいなどと、男子諸君はペア
の誘いに繰り出しているかもしれんが、1つ言っておかなければならないこ
とがあるんじゃ。」

数人の男子たちがぽかんとした表情で学園長の方を振り返る。

お前ら、図星かい。

「今回のビーチバレー大会では、優勝クラスを2組出そうと思うのじゃ。」

ははぁ、つまりは…

「つまりは、別のクラスのもの同士でビーチバレーのペアを組んでもらう！」

「えー、なんだよそれー」

「横暴だー」

「自由にさせろー」

会場からブーイングが飛ぶ。
まあ、確かにそういう意見があっても、おかしくない。
いや、現に隣にも…

「アタシ、おんなじクラス。ってことは、海斗とのペアが…」

「むー、何故だ何故だ何故だー！納得がいかないぞ」

こんな感じだった。

「まあ、色々意見はあると思うが、クラス同士競いあうばかりでは、新しい
出会いは巡ってこないぞい。こういう学校行事だからこそ、敵クラスが協力

する競技があっても面白いじゃろう。きちんとそういう意図があって、作られた競技なんじゃから、文句ばかり言わず、しっかりと取り組むように。」

その言葉で完全にとは言わないが、場が静かになる。
別に学園長の言い分に納得したとかではないだろう。
学園長が怒ると怖いというのは、学園の生徒中に認識されているらしい。
ただ、それだけのことだった。

「じゃが、自由に選ばせると、内通などいくらでも出来てしまうからの。そこは公平にくじでペアを決定することにした。男がくじを引き、その手で自分のパートナーを決定するのじゃ。自分の運命には自分で責任を持ってもらうということじゃな」

いや、そんな大層な言い方せんでも。
別に誰がパートナーだろうが、優勝を目指すのみだ。

「では、まずこの箱から、クラスの書いてある紙をひき、そのクラスの箱から自分のペアを引いてもらう。勿論、自分の所属するクラスが出ても、引き

直しとなるのは理解しておくように。」

その言葉に従い、男子たちはくじ箱の前に並ぶ。

そして、俺の番が回ってくる。

正直、どうでもいいので、迷うこともなく、一番先に手に触れた紙を箱の中から引き出す。

その折りたたまれている紙を開く。

書かれている文字は“S”。

…え、これってS組ってことか？

待った、何故俺はこんなに数あるクラスの中でよりにもよって、S組なんてものを引き当ててしまったんだ。

確かに誰でもいいとは言ったが、まさかピンポイントで当たってしまうなんて思わなかった。

大誤算もいいとこだ。

そもそも、俺がこんなに嫌がっているわけというのは、水上体育祭が始まって、競技もいくつか終わったくらいのときまでさかのぼる。

〜

「次の競技はなんだろうな、海斗」

「どうせ、しょうもないものな気がするがな」

「じいちゃんもたまにおかしなこと考えてるのよね」

「たまにじゃないと思うが…」

俺は競技の合間にクリス、一子の二人と適当にぶらぶら歩いていた。

「なんか俺、結構競技に駆り出されてるのは気のせいか」

「しょうがないじゃない、海斗はあの川神戦役以降、キャップよりも足が速
いってこと、皆に知られちゃったし。それにスポーツだって出来るんだから、
頼りにされてんのよ」

「はあ、そうなんかね」

「いいことじゃないか。誇っていいぞ」

「へいへい」

「なんだその言い草は！自分の意見を聞いているのか！」

「ああ、聞いてるって。イモリは両生類なんだよな。」

「誰もそんなことは言っていないぁい！全然、聞いていないじゃないか」

「ああ、分かったから。そんな怒るなよ」

「まったく海斗は……ブツブツ」

うーむ、からかい甲斐のある奴だ。
いちいち面白い反応を返してくれる。
と、そんなとこへ…

「お嬢様」

「あ、マルさんじゃないか！」

ん、“マル”さん？
なんか嫌な感じがするのは気のせいだろうか。

「久しぶりだな、流川海斗」

そう言っているのは、あの髪も瞳も紅蓮の軍人。
マルギッテだった。

「な！海斗、久しぶりってどういうこと！？」

「海斗はマルさんとも知り合いなのか？」

「いやー、初対面だと思うんだけどなー…」

「ふん、とぼけても無駄だと知りなさい。流川海斗、たとえ貴様が私を覚えていなくとも、勝負をあのまま終わらせるのは私のプライドが許さない」

「や、まあ、そんなにカッカすんなって」

「なんなら、ここで勝負しても、構わないぞ」

「いや、落ち着けって」

トンファーを抜き取ろうとした腕を押さえる。
こいつ、考えが短絡的すぎだろ。

「おい、クリス、お前相手しとけ」

「え、おい海斗！」

あんなとこで戦ったりは出来ない。
俺はクリスに押し付け、その場から逃げた。

〜

まあ、そんなことがあったわけだ。
聞いたところによると、マルギッテは当然のようにエリートのSクラスらしい。
そして、たった今俺が、引いたのもSの文字。

あいつと一緒のペアになったら、試合中に味方コート内で別の戦いが行われてしまう可能性もなきにしもあらずだ。
いや、冗談でなくね。

「ここから引いてください」

ドキドキしつつ、俺が箱の中から引いたのは…

「“榊原小雪”？」

48話　「ビーチバレー」（後書き）

ありがとうございました
さて、引いたカードは小雪。
今までにはなかったパターンですね。
次回どうなっていくのか。

４９話　「最強コンビ」（前書き）

早いものでもう４９話目です。
次回で５０回。
ちょっとした節目ですね。

49話　「最強コンビ」

「榊原小雪か…、聞いたことないな」

とりあえず、その小雪って奴とペアってことだ。
俺はS組連中が溜まっているところに行く。

「こんなかに榊原小雪って奴はいるか？」

聞こえるように、ある程度の声量で呼びかける。
すると、

「ほっほーい、それはボクだよ～。」

「あん？」

そこには見たことのある白髪少女が。
そう、タッグマッチの準決勝で戦ったそいつである。
はー、そういえば、そんな感じのあだ名で呼ばれていたような気がする。

「お前が“榊原小雪”で間違いないな」

「おうともさ～」

「俺がお前のペアだ。名前は流川海斗、狙うは優勝だ」

「おー！よろしく～、カイト」

まあ、マルギッテじゃなかった時点でかなり安心したのだが、これは思わぬ
ラッキーかもしれない。
こいつはタッグマッチのときを見る限り、結構な実力は持っている。
少なくとも、足を引っ張るなんて心配はないだろう。

「おやおや、ユキのペアは海斗君ですか」

話しかけてきたのは葵冬馬だった。
そういや、友達だとか言ってたっけな。

「まあ、心配なのは分かるが、くじが決定したことだ。諦めてくれ」

「いえいえ、海斗君なら心配はしてませんよ。私も海斗君の実力は知ってい
ますし。それにしても、今から優勝を狙ってるだなんて流石ですね」

「いや、二位とか狙ってる方がおかしいだろ」

「言われてみればそうですね、ふふっ。では、ユキ頑張ってくださ

い」

「おぉ、めっさ頑張る」

「じゃ、連れてくからな。いくぞ、小雪」

「いえっさー♪」

俺は小雪と、ペアを見つけたことを報告するために、試合受付に向かった。
これ済まさないと、参加できないからな。
だったのだが…

「おい、小雪」

「ん～？」

「なんか、距離が近いっていうか、ひっつきすぎなんだが」

そう、歩いている途中から、薄々思っていたのだが、小雪はこちらにもたれ
かかり、確実に体重を預けてきていた。
今じゃ、ほぼ背中にぶら下がっている状況になっている。
つまり、全体重を預けてしまってるわけだ。

いや、別にこのくらい重くもなんともないし、このまま軽やかにスキップを

することだって、なんら問題ないのだが。
そうではなく、そんだけ俺にもたれかかっていれば、もう肌は密着状態って
いうレベルで。
しかも、こいつ可愛い顔して、結構凶悪な胸を持っている。
そんな迫力満点の物体Xが押し付けられているわけだから、シカトなんてこ
とは出来ないだろう。
そもそも、どうしてこんなことになっている？

「一応、俺らほとんど初対面に近いんだし、少なくともこんな距離の関係で
はないと思うんだが」

「ん～、なんだろぉ、カイトからはおんなじニオイがするー」

「同じニオイ？」

なんだ、ってことは俺からもあの女子特有のフローラルな香りが漂っている
ってことか？
あのシャンプーでも、ボディソープでも、勿論香水でもない、謎の香り。

おい、待ってくれ。
あれは女子限定で使えるスキルじゃなかったのか。
俺なんかが使えたら、価値が半減するんだが。

試しに自分と小雪の匂いを嗅ぎ比べてみる。

「そんなことしたって、無駄だよ～。もっと、ふいんきみたいなことだもんねー♪」

「フンイキな、雰囲気」

結局、小雪の言っていることはよく分からなかった。

…………………………………………………

海斗と小雪の一試合目。

「あ、流川先輩の出番だよ」

「え、嘘！見よう見よう」

「やっぱり、ビーチバレーも上手いのかなぁ」

そして、試合が始まる。

最初から実力差は分かってしまった。
海斗の読みが当たっていたというか、小雪はどんどん点数を入れていき、大活躍を見せていた。
当然、その試合は勝利を収め、その先も同じように勝ち上がっていった。

……………………………………………………

試合が進んでいく傍らで、大和と岳人の二人は試合を見ながら、雑談の時間を過ごしている。
自分のクラスに点数を入れたい軍師としては、海斗あたりに期待していた。
現在もそんな話の流れになっていた。

「おい、大和」

「ん？なんだ」

「なんか、流川ペアの試合、Ｓ組の榊原小雪ばっか、活躍してないか？これじゃ、たとえ優勝しても、Ｓ組の奴らが調子に乗って、自分たちのおかげだ

とか馬鹿にされんじゃねーのか」

「まあ、確かに表面上はあいつしか活躍してないな」

「表面上？」

「ああ。これは今までの試合のスコア表だ。それを見てみな」

そこに綺麗に並ぶ数字。
ぶれることなく並ぶそれは…

「な！？これは…」

「そうだ、あいつらのチーム、相手に１点もやってない。失点が０なんだ」

「それって、どんな球も全部落とさず、拾ってるってことだよな」

「まあ、同時にあのＳ組の女子もアウトやネットを出してないってことなんだけどな」

普通ならば、ありえない話だと笑うところだが、事実その紙にしっかりと記
録されているのだから、馬鹿にしようがない。

というか、そこまで完全に拾えるのだったら、たとえ味方があまり

点を入れ
られなくても、コート内に入れれば、確実に勝てる。
それなのに、榊原小雪も高い運動能力で強烈なスパイクを放つ。
まさに攻撃と防御が恐ろしいバランスで組まれたチームであった。

「うへー、最強チームじゃねぇか。くそ、うちのクラスにとっては確実に点
数に貢献してくれるいいことのはずなのに何故か腹立つ…。」

「また流川の株があがるんだろうな。今だって、相変わらず1年生からの声
援は凄まじいからな。1年生に限って言えば、キャップでも葵冬馬でもなく、
正直、姉さんも差し置いて、あいつが人気Ｎｏ．１って感じだからな」

「そう聞かされると、ますます腹が立つ。一発、俺様のパワフルラリアット
をお見舞いしてやりたいぜ」

そう言って、岳人が己の筋肉を見せ付けるようなポージングをする。

「ガクト、それはモテない男の逆恨みも甚だしいだろ」

「いや、確かにそれもあることは否定しないが、なんか気にいらねぇんだよ」

「ガクトはなんか流川といざこざあったっけ？」

「いや、なんていうか、もう名前の時点で何故か分からないが、どうしようもなくムカムカするんだ。前世で気に食わなかった相手だったのかも」

「なんじゃそりゃ」

…………………………………

「次で決勝か」

「頑張るぞぉ、おぉ～」

残すは決勝戦である。

49話　「最強コンビ」（後書き）

ありがとうございました。
ビーチバレーに関しても、そこまで知識が深くないので詳しく描写ができないという罠。
まあ、ぼんやりととらえていければ、はい。

５０話　「世にも奇妙な組み合わせ」（前書き）

前回のネタ、分からなかった方はすみません。
分かった方もやっぱりすみません。
なんか色々とごめんなさい。
衝動が抑えられなかったんです（笑

50話　「世にも奇妙な組み合わせ」

「決勝戦は西方：流川・榊原ペア、東方：九鬼・川神ペアで行う。
両チーム、
コート内へ！」

順調に勝ち上がってきたトーナメント。
だが、まさか決勝の相手が一子だとはな。
隣のやつはあの性悪メイドが仕えていたやつだな。
実力は未知数か、あのときはメイドが追い出したしな。

まあ、どんな相手だろうと勝つのは俺だがな。

Ｓｉｄｅ　大和

まさか決勝であの二人がぶつかることになるとは…
いたずらな運命もあったもんだ。

「おい、大和。この試合って意味あんのか？どっちのチームもＳ組とＦ組で組
まれたペアなんだから、点数の獲得は決定してるようなもんだろ」

ガクトがそんなことを言ってくる。
確かに、得点上はもう決定しているのだから、本来なら割愛していいはずだ。

「そのための優勝賞品なんだろ、“水族館ペアチケット”っていうさ」

「ああ、そうか」

そう、そんな結果の変わらない勝負では選手も当然手を抜き、見てる方としても面白くない。
ちゃんと役割がある賞品ということだ。

「でも、九鬼なんかはあんなの欲しくないだろ。水族館どころかどんなところでも、自由に行ける金を持ってんだろ。自分のクラスに点が入りさえすれば、勝負なんて真面目にやんないんじゃないか？」

「ああ、普通ならな。だけど、何の因果か、ペアがあのワン子だぜ。いくら九鬼でも、というか九鬼だからこそ、ワン子が真剣にやってくれとお願いすれば、本気で取り組まざるをえないだろ」

「それはそうだな。でも、ワン子はなんで、あんなやる気をむき出

しにして
るんだ？」

ガクトが指差す先には、さながら犬歯を剥き出しにして、低く唸り、まさに
誰の目にも臨戦態勢なことがうかがえるワン子の姿があった。

「分からないか？ワン子は大好きな流川が他の奴とペアチケットを使って、
水族館に行くことをどうしても阻止したいんだよ」

「はぁー、なんかワン子の行動理由が全部流川基準になっていってないか」

「まあ、今更止められるもんでもないだろ、本気の目だし」

俺たちは二人そろって、溜息をつくしかなかった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

コートに入った四人は試合前から火花を散らしていた。

「海斗、手加減はしないからね」

「フハハハ、そういうことだ。一子殿のため、我も全力で勝利を取りに行く
故、覚悟しておくことだ」

「一子、悪いが俺も負ける気はない。こっちには最強のアタッカーがいるこ
とだしな」

「ほっほーい♪勝っちゃうぞ～」

「むー、アタシだって絶対に勝ってやるんだから！」

一子は明らかに海斗のペアを頼りにするような発言で不機嫌になっていた。

「では、試合開始！」

サービス権は相手側から始まった。
あのデコバツが打つようだ。

「くらえ、我の最強のサーブを！」

そう言って、凄まじい勢いでボールが放たれる。

確かに並みの奴じゃ弾き飛ばされて取れないかもな。
無駄に破壊力がある球だ。
だが、俺は難なくボールをとらえる。

「よっと」

そして、ちょうどいいのかは分からないが、適当な空間にトスをあげた。

「小雪、頼んだぞ」

「おぉ、まっかせて～」

小雪はその圧倒的な跳躍力で跳びあがり、稲妻のようなスパイクを叩き込んだ。
その勢いでいて、しっかりとボールはコート内に入っていた。
ホイッスルが響き、順調に1点獲得だ。

「くぅ、悔しいわ」

「ふ、庶民のくせにやりおる」

悔しがる相手を尻目に小雪が俺に近づいてくる。

「いっえーい♪カイトー、ぱしーん」

「ハイタッチする前にＳＥをつけるな…」

そう言いつつも手を差し出してやる。
こんなにマイペースだが、その運動能力は凄まじい。
攻撃は心配なく任せられるので、俺に出来るのは点を入れさせないことだけである。

小雪がサーブを打つ。
当然、相手もスパイクを打ってくるのだが、入れさせるわけがない。
デコバツが跳びあがり、こちらのコートを狙っている。

どこを狙うかを予測すれば、止めることは困難ではない。
だが、相手の目線や、振りかぶる腕の角度なんて見たところでどうしようもない、そんなのは素人だ。
結局、そこはいくらでもフェイントがかけられる。

俺が見るのは、ボールにアタックするポイント。
当然、ボールの右側に力強くインパクトを与えれば、おのずとボールは左側に飛んでいく。

ここにはどう考えたって、フェイントが介入することはできない。
だから、容易にボールが来るとこは予想できんだよな。

「はいよ、っと」

「どっかーん♪」

またもや、強烈なスパイクが決まる。
これなら勝ちはもらったようなもんだ。

あとは同じ流れを繰り返すだけ。
俺が打ち上げたトスを、強力なスパイクで得点に変えていく。
そのままいくと思っていた。
だが…

「せやぁぁぁっ！」

その速く正確なスパイクを一子が拾い上げた。

これにはただ驚かされてしまう。
こんなこと言っちゃ悪いが、一子はどこにボールが飛んでくるなんてことを
予想できているはずはないだろう。
ということは、あの球に反射神経だけで対応したってことだ。

恐ろしい奴だな。

そのあとはどちらもボールを拾っていくので、ラリーが続いた。
これじゃあ、勝負がつかねぇな。
と思ったのも、束の間

「はあぁぁぁぁぁ！」

一子の強烈なスパイクが放たれた。
勿論、その弾道はあらかじめ読めたのだが、その球威は予想以上に強かった。

「やべ…！」

上手くあがらずに、あさっての方向に打ちあがってしまう。
集中をきらした俺のミスだな、そう反省していたのだが…
小雪はそのボールを追って、もう一度打ち上げた。

今までにはなかった展開だ。
初めての3回をフルに使った返球。
俺は宙に浮くボールをしっかりと捉えて、腕を振るった。

ホイッスルが鳴る。

「え、今の見た？」

「なんか、流川先輩のアタック速すぎて見えなかった」

「やっぱり、かっこよすぎる～」

会場は驚きの声と1年生の歓声でドッと沸いた。

「おぉ～、カイトやっる～」

「く…！この我が庶民ごときに遅れをとるなど！」

「あわわ…、このままじゃ…」

その後の試合展開は一方的だった。
小雪が自分で打たずに俺に回してくるようになったので、すぐに決着がついてしまった。

「優勝は流川・榊原ペアじゃ。ほれ、賞品の水族館ペアチケットじゃ」

「小雪、これいるか？」

「ボクはいらないよ～、いっつも三人だもーん」

「ふーん、おっけ。じゃな」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「おーい、一子！」

「あ…、海斗」

「お前これ欲しかったんだろ？すげぇ、やる気だったもんな。俺、別に行く相手もいないし、やるよ。ファミリーの仲間とでも行ってこい」

そう言って、水族館のペアチケットを渡す。

「え！？あ、ありがとう。でも、アタシがやる気になってたのは…」

相変わらず鈍い海斗に困らせられる一子であった。

―ここは会場から少し離れた浜辺

「おうおう川神学園は面白ぇーこととしてんなぁ」

影が暗躍する。

50話　「世にも奇妙な組み合わせ」（後書き）

ありがとうございました
また海斗の活躍が増えましたね。
そして、次回…。
出来れば忙しくないときに入りたかったんですが、
言っててもしょうがないので普通にグダグダ入ります。

51話　「怪物退治」（前書き）

今回から新しい流れですね。
ビーチバレーも終わり、次なる競技へと。
変わらずグダグダですが、どうぞ

51話　「怪物退治」

「海斗さん！」

「お、由紀江じゃないか。どうした？」

「あ、あの、ビーチバレーでの試合お見事でした」

「おお、さんきゅ」

「それでですね、えっと…」

なんだか、口をもごもごさせているが、何かあるんだろうか？

「おーい、まゆっちー」

とそこへ、伊予がやってきた。
そういや、友達だとか結構前に言ってたな。

「え！る、流川先輩！」

「よっす」

「はい、こんにちは」

「で、由紀江に何か用だったんじゃないのか」

「あ、そうでした。まゆっち、なんか先生に呼ばれてたよ」

「そうなんですか、ありがとうございます、伊予ちゃん。では、すみません、
海斗さん失礼しますね」

「おう、またな」

由紀江が去っていく。
結局、俺と伊予が残された。

「……海斗さんか」

「あ？何か言ったか？」

「え！あ、はい。あ、あの、るか…じゃなくて、海斗先輩！」

「ん、どうした？」

「え、あの、はい。これからは海斗先輩って呼んでもいいですか？」

「別に全然構わないぞ。むしろ、名前の方が俺はしっくりくる。それに俺だ
って伊予って呼ぶしな」

「そ、そうですか…。じゃあ、海斗先輩、私も行きますね」

「ああ、また」

「はい、失礼します」

なんか、最後のほうは逃げられたような気がするんだが、俺はなんか悪いことでもしたのか。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

「今日の最終競技はずばり“怪物退治”じゃ」

ん？なんだそれは。
夜は墓場で運動会みたいなものか？
いや、あれは怪物じゃなくて、妖怪か…

「簡単に言えば、それぞれのクラスごとで1匹ずつ、怪物の着ぐるみを討伐してもらうという競技じゃな。その怪物に“まいった”と言わせれば、そのクラスの勝利となる。ただし、中には川神院の修行僧たちが入って

いるので
個人の力だけでの打倒は難しいようになっておる。じゃが、クラスの力を団
結させて立ち向かえば、きっと打倒できるであろう。そういうシステムじゃ。
なお、川神百代のクラスには公平を期して、ワシが着ぐるみに入るので、そ
こらへんの心配はいらん」

怪物退治なんて、小学生向けのアトラクションみたいなネーミングだと思っ
たんだが。
なるほど、最後はチームでの実際の戦闘か。
他の学校じゃまずない、川神学園らしい競技だな。

学園長の話し振りだと、実力で勝らなくても、クラス内での連携が上手くい
っていれば、“まいった”と降参してくれるってことなんだろうな。
うちのクラスには実力のある女子が結構いるし、こりゃ俺が出る幕はないか。

「久しぶりの戦闘形式の訓練になるわね、腕が鳴るわ」

「自分も実力を試せるいい機会だ」

一子とクリスの二人も今からやる気まんまんって感じだった。
まあでも、実戦に勝る経験はないっていうしな。

少しでも数を積んでおきたいというのは、強くなりたい身としては当然の思考だろうな。

「海斗、一緒に頑張りましょうね」

「ああ、共に協力して戦おうではないか、海斗」

「はいはい、分かったよ」

ったく、まあ絶対こうなるとは思ったが、やはり巻き込まれたか。やる気がありあまって、自分だけでは消化しきれないんだろう。だが、確かに俺も川神院の修行僧というもののレベルがどの程度のものなのかを確かめておきたいというのもあるし、適当に参加するか。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ちょうど学園長が競技の説明をしている頃、裏では修行僧たちが準備を着々と行っていた。

「さて、私が受け持つのは一子殿のいる２－Ｆか。これは一層気合いを入れ
なくてはいけないな、頑張らないと」

そう言って、着ぐるみを装着しようとする。
そこへ…

「よォ」

「な！？釈迦堂師範代ぐはっ…！」

「元がつくけどな。すまねぇがちぃっとばかし、眠っててもらうぜ」

現れたのは釈迦堂刑部。
川神院をその問題がある性格で破門となった元師範代であった。

釈迦堂は一瞬で川神院の実力ある修行僧を気絶させ、着ぐるみを強奪した。

「これで伸びてる奴と合わせて、着ぐるみは2体になったな。よし、これで
人数分そろったか。さーて、弟子ども」

そう呼ばれて現れたのは、オレンジ色の髪をツインテールに縛った少女とそ

のつりあがった目と唇がいかにもサディスティックな雰囲気を漂わせている
女の二人。
板垣天使と板垣亜巳であった。
二人は元師範代である釈迦堂の武道の弟子という立場だ。

「おい師匠ー、ホントにこんなとこで訓練なんかできんのかよー」

「ていうか、なんで、竜までここにいるんだい？」

「いやー、俺はいい男の水着姿が見れると風の噂で聞きつけてな。
そうして
来てみれば結構な上玉が揃ってんじゃねぇか」

「男に上玉なんて使うのは初めて聞いたよ…、本当相変わらずだねぇ」

「リュウは基本おかしいんだよな」

もう一人いる男の名は板垣竜兵。
苗字からも分かるように、天使や亜巳とは兄弟にあたる。
根っからの男好きであり、女には興味がない。

「まあ聞け、弟子ども。今日はお前らの大好きな実戦訓練を行おうと思うわ
けだ。だから、この着ぐるみを着て、川神院の僧っていう競技上での敵にな

りすまして、存分に川神学園の生徒相手に腕試しをしてこい」

「へー、なんか面白そうじゃん。これ着りゃいいわけ？」

「ああ、そうだ。さっさと着ろ着ろ」

「私はあんな奴らが相手になるのか心配だけどね」

そうは言いつつも二人は着ぐるみを着る。

「ウチはクマの着ぐるみか。うわー、このクマ超ダッセェなぁ。タツ姉とか
なら喜ぶかもしんないけどさー」

「私のはアリクイか、まあ何でもいいさね」

「よーし、んじゃ、適当に遊んでこいや」

「よっしゃ、いくぜぇ！ウチは２－Ｆでいいんだな」

「私は２－Ｓか、ふん」

「撤収命令を出したら、すぐ戻れるように防御は重視しておけよ」

「分かってるってー」

「了解だ」

そうして、クマの着ぐるみをまとった天使は２－Ｆへ、アリクイの着ぐるみをまとった亜巳は２－Ｓへそれぞれ向かっていった。

「俺はここで水着の男たちをもうちょっと観察させてもらうぜ」

「分からんねぇ、ピチピチギャルに興味がないなんて」

残った二人は様子を見守っていた。

…………………………………

…

「あ？」

なんか今、変な感じがしたが…

まあ、いいか。

とにかく次で最後だ。

51話　「怪物退治」（後書き）

ありがとうございました
現れた新たな者たち。
どうなっていくのでしょうか。
次回もよろしくお願いします

52話　「邪気」（前書き）

今週の週末くらいには予定が片付くので、元に戻れそうです。
感想くださっている方にもすぐ返信できますね。
ただ今回のでストック0なんで心配です。
では、本編どうぞ

52話　「邪気」

「見て見て、怪物が来たわよ。うちのクラスはでかいクマね」

誰かがそんなことを言ったとおり、こちらにクマの着ぐるみが近づいてくる。
サングラスなんかかけていて、いかにも人相が…

「あ？」
「ん？」
「え？」

俺も含めて、気配を察知できる女子たちは、すぐに違和感に気づいただろう。

「へっへ、ウチの相手はこいつらかよ」

色々おかしいとこを挙げていけば、きりがないんだが、

「おい、一子。お前んとこの院の修行僧って、結構なんつーかアクティブすぎやしないか」

「まさか、アタシの知ってる川神院の人にこんなのは絶対にいないわ」

「ああ、そうだよな。少なくともこんな奴に生徒の相手をさせるっていうのは正気じゃねぇな。明らかにこっちを採点なんてしてくれそうにないぜ」

「だな。自分もそれには賛成だ。このクマからはとても禍々しい気を感じる。嫌な汗が出てくるほどにな」

なるほど、禍々しい気ね。
確かに何も間違っちゃいない表現だ。
だが、正確にはそんな抽象的なものではない。
クリスはただ単に本物を味わったことがないから、そう表現するしか他にないだけだ。

こいつから感じるピリピリとした懐かしい感覚。
これは紛れもない純粋な殺気だ。
威嚇でも牽制でもない剥き出しの獣のような殺気。
それは鞘に収まることのない刃のような、危なっかしさや緊張感を俺たちに伝えてくる。

「さーて、アクションゲームのスタートだぜ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

―同じ頃、２―Ｓ

「フハハハ、あれが怪物とやらか！オオアリクイであるな」
「ふふ、少しは腕のある奴らがいるんだろうね」
こちらにも明らかに異質なオオアリクイが来ていた。
その気配にいち早く反応する忍足あずみと不死川心。
「…ん？あれが修行僧の気なのでしょうか」
「確かになんとも怪異な気を放っているのじゃ」
「ふむ、言われてみれば、禍々しさを感じられるな」
「そぉ？ボクは何にも感じないけどねー」
「あら、意外ですね。こういうのは敏感だと思っていたんですが。
まあ、と
もかく油断は出来ませんね」
「ああ、此方が全力で潰してやるのじゃ」

「せいぜい楽しませておくれよ！」

こちらでも力がぶつかり合おうとしていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

「ファイナルステージ開・幕！！」

戦いの火蓋がきって落とされた。

開始直後にクマがクラスメイトめがけて、襲いかかってきた。

「じゃ、早速いかせてもらうぜぇ！」

「あぶねぇ！」

筋肉男がそいつを引っ張って、対処していた。
今は守られたが、もしあの威力が当たっていたら、ただではすまなかっただろうな。

それだけ遠慮なしの相手だってことだ。

これだけの相手だ。
まずは見極めることが重要だろう。
何も考えずに突っ込んでいったところで得られるものがあるかどうか。
そうと分かれば…

「おい、一子、クリス、あれだけの強さを持ってる相手だ。ここは迂闊に手
を出さずに最初は様子見に徹しよう……って」

「ちょっとアンタ！いきなり生徒相手に本気で殴りかかるなんて、完璧に川
神院の人間じゃないわね！」

「一体何者だ！大人しく正義の前に正体を現すがいい！」

全然、俺の話なんて聞かずに突っかかっちゃってるし…。
まあ、この真っ直ぐコンビの性格を考えれば、予想できなかったことではな
いんだが、少しは作戦というのも考えてくれ。

「だから、ウチはクマだっての。見りゃ分かんじゃん。怪物退治なんだから、
さっさとやってみろよー。もっともウチに敵うはずないけどなー」

「言ってくれるわね、やってやるわ！」

「ああ、きっちりと正義の名の下に悪を退治してくれよう」

「だから…」

「でやぁーーーー！」

「はぁーーーーー！」

クリスと一子はクマの挑発に乗って、二人で突っ込んでいった。

ちょっとは俺の話も聞いてくれよ…。

「二人が先陣をきった！男衆も後に続こうぜ！見てるだけじゃ、うずうずするしな」

「そうだな、何もしなくても戦況は変化しない。せめて、フォローにだけでもまわってサポートしよう」

翔一がそう切り出し、大和も賛成の意見を述べる。

「頼むから、お前らまで勝手な行動をしないでくれ」

だが、海斗はそれを制す。
ただでさえ、作戦が狂ってるのにこれ以上、別の要因でかき乱されたら、た
まったもんではない。
翔一は納得していなかったようだったが、海斗の意図を汲んだ大和がなだめ
たことにより、なんとか更なる混乱にはならなかった。

「先手必勝だ、はぁっ！」

クリスが素早い動きから拳を繰り出す。
一連の流れに乗った綺麗な攻撃だった。
だが…

「あはっ、そんなんでウチに当たるとでも思ってるワケ？笑わせるぜぇ！」

あっさりと攻撃をかわされ、そこからカウンターを打ち込まれる。
クリスもガードはしたもののその場からは弾き飛ばされてしまった。

「威勢だけいいくせに弱すぎだぜぇ、あはは」

「油断大敵よ、せやぁーーっ！」

一子が相手が笑っている隙をつき、薙刀を振るうような蹴りを放つ。

パシッ

「そんなヘナチョコな攻撃でウチを仕留められるとでも思ったのかよ。甘いぜ、甘すぎるんだよ！」

「な！？」

キレもあって、見事な攻撃だったにも関わらず、それは簡単に受け止められてしまった。

そして、そのまま足を掴まれ、投げ飛ばされる。

「かはっ…！」

「おい、犬、大丈夫か」

「ほらほら、今度はウチから行くぜぇ」

クマから拳の乱撃が繰り出される。

一子とクリスはそれを必死にガードしていたが、一子の動きが少し

鈍かった。
結果、クリスがフォローにまわり、劣勢の状況だった。

「へへ、攻めることも守ることも中途半端かよ、笑わせてくれるぜー」

「おい、どうした犬！いつもより動きが鈍いぞ」

「おかしいわ。あんな奴川神院には絶対にいないのに、時々川神院の技を使ってきてるのよ！」

「なんだと？川神院の技は門外不出ではなかったのか？」

「だから、分からないのよ。これだけの実力を持ってるなら、アタシが知らないはずがないわ」

一子は動揺しているのか、それが表面に出てしまっていたようだ。

「はぁー、ちょっとは骨があると思ったけど、こんなもんか。もうこれ以上やっても何も出てきそうにないし…」

「あまり甘く見るな。せぁっ！」

「お前は後回しだ、メンドイし」

「なんだと!?」

そう言って、クマはクリスの攻撃を回避するとともに足払いをして、そのまま速度を上げて、万全ではない一子に狙いを定めた。
まずは簡単に潰せる方をやって、頭数を減らそうという考えだろう。

「ほい、まずは一人目ー!」

クマが踏み込んで拳を繰り出す。

「はい、そこまで。」

その拳を受け止める。

「こいつウチの攻撃を…!なんだよ、テメェは」

「海斗…」

「まあ、俺も手伝ってやるよ」

しょうがない。

作戦は戦いながら立てるしかなさそうだな。

「じゃ、始めようか。怪物退治を」

52話　「邪気」（後書き）

ありがとうございました。
一子のピンチに動いた海斗。
次回、激突するのか。

53話　「海のクマさん」（前書き）

感想について思ったんですが、疑問質問にはすぐに返信した方がいいのかなと思ったりしてます。
自分にとってはどんな感想も等しく嬉しいものなのですが、質問などは時間をおくと、なんか変な感じになる気がするので、もしかしたら先にそういったものに返信してしまうかもしれません。ですが、誤解のないように。
順番が変わっても、忙しい期間が終われば、全部のコメントに返信させていただくので。はい。

53話　「海のクマさん」

水上体育祭、最後の競技である怪物退治。
俺はクマと対峙していた。

「へー、弱そうだったからノーマークだったけど、マジじゃないとはいえ、
ウチの攻撃を受け止めるなんて結構やるじゃん。あはっ、面白ぇー、もしか
して、あの女どもより強かったりすんのか？」

「さぁ、どうだか。お前の予想通り、別段俺は強くもなんともねぇけど」

やはり、初見の相手には確実に弱く見られる。
弱いことがアドバンテージになってんだから、不思議なもんだぜ。

「でも、気も使ってない素手でその実力はちょっとは期待してもいいってこ
とだよなー、楽しくなりそうだぜぇ！」

随分と上機嫌のご様子で。
こいつもあれなんだろうな。
前に戦ったマルギッテのような戦闘に飢えているタイプ。
しかも、軍という拘束力がない分、こちらの方がよっぽど危険物だ。

「おい、クリス、一子。ちょっとこい」
「なに？」
「なんだ？」

二人を手招きして、側に来させる。

「いいか、これから言う作戦に従え」
「分かったわ」
「了解した」

「まず、俺があいつと1人で戦って、どうにかして大きな隙を作る。そこに
二人で出来る限りの攻撃を叩き込んでくれ」
「待て、何故海斗だけが奴と戦うんだ。自分が隙を作る」
「お前はバカか」
「な！バカとはなんだ！バカとは！」

「そうやって、さっきもカウンターくらってただろうが。相手はそんなに生
易しい強さじゃねぇ。だから、カウンターが来ても、打たれ強い俺なら、対

処できるし、一番適役なんだよ。それに重要なのは、とどめとなる二人の攻
撃の方だし、そこに頼りになる人材を持ってくるのは当たり前だろ」

「そ、そうか。まあ、そういうことなら仕方がないな、うん。」

なんて、単純なんだ。
流石にここまで扱いやすいと将来が心配になってくるな。

「分かったわ、その役目はアタシたちに任せて、海斗」

「海斗も油断するなよ。あのクマ、相当なやり手だからな」

「言われなくとも。じゃ、合図出すまで下がっててくれ」

そして、俺はクマに向き直る。

「よぉ、秘密の作戦会議は終わったかー？わざわざ待っててやったんだから、
せいぜいウチを楽しませてくれよー」

「そりゃどうも」

俺の後ろに二人が後退する。

「あっれ、てっきり3人がかりでかかってくると思ったら、テメェ1人でいいのかよ。ちゃんと相手になってくれるんだろうなぁ？」

「ま、出来る限り頑張るわ」

相手の風を切るようなパンチが繰り出された。
その手数も多く、一撃一撃が唸りを上げ、威力を伴っているのが分かる。
んー、やっぱこいつ相当強いな。

俺は慎重に当たらないことを心がけながら、攻撃をかわし続ける。
着ぐるみの手がでかいせいで、少しでも目測を誤ったら、即アウトだ。
あんまり分析に集中しすぎないようにもしないとな。

「うっは、なかなか避けんの上手いじゃん！いいね、お前全然さっきの奴らより面白いわ。けど、反撃でもしないと、ウチを退治することはいつまでたっても出来ないぜー」

「いやぁ、避けるので精一杯だから」

「とか言って、喋ってる余裕があんじゃん」

「そっちも喋ってるからだって」

「ウチは口動かしても、手を抜いてるつもりはないんだけどなぁ！」

いや、ほんと、よく喋りながらペースが落ちないな。
才能だけに頼っているんじゃなく、修行もしているんだろう。
いいねぇ、楽しい相手だ。

まあ、それにしても確かにこのまま避けてても、隙を作るのは時間がかかるかな。
防御のデータも取っておきたいし、少し仕掛けてみるか。

「オラオラ、これもかわしてみろよ！」

そう言って、さらに追加される拳の雨。
間隔を詰めるように、隙を埋めるように。
だが、そんなことをしたって、隙がなくなるなんてことはない。
0に近づけることは出来ても、無にするということが比べ物にならないほど、
無理難題だというのは、人の欠点とかと同じことだ。

初撃はあまり大振りなのは避けた方が良いな。
今の少ない情報じゃ、唐突なカウンターに対応できない可能性がある。

「まさに手も足も出ないってかー？」

―今だ

「よっと」

タイミングよく、わずかな隙が出来たので、少し強めのジャブを打ち込む。
それは見事に着ぐるみの意表をつき、腹部にヒットした。
だが…

ん？なんだ、この違和感は。
その正体を思考する前に体が動いていた。
バックステップで勢いよく相手から距離をとる。

思ったとおりに、相手はすぐにカウンターで腕ごと振るう、パワーのある一
撃をかましてきていた。
ほんと、咄嗟に行動してなかったらどうなってたことか。

「うっは、今のを避けちゃうなんて、さっすがに予想外だったなー。
攻撃決
まったあとって、大体の野郎は安心して、警戒が薄くなんだけど、
お前いい
反応すんじゃん、なに直感ってやつ？」

「いや、常に逃げることは考えておかないとな」

さて、どうするか。
攻撃をくらわせても、全くひるませることが出来なかった。
それにさっきの感じはもしかすると…。

ともかく、これじゃあ、クリスと一子にバトンタッチする程の大きな隙が作
れねぇ。
このままダラダラ続けたところで、二の舞になるのは見えている。
小さな隙をいくら捻り出したところで無意味だ。
ならば…

「ちょっとぼーっとしすぎだぜ！」

作戦を考えている途中でクマが襲い掛かってくる。
その鋭い拳が俺の体にヒットした。

「へへっ、戦ってる最中に考え事しすぎなんだよ、バーカ！」

くそ、やっぱり凄まじい威力だな。
ある程度は体捌きで軽減させたとはいえ、十分なダメージだ。
だからこそ、痛みの分は元をとらなきゃな。

自分の体に突き刺さったその拳をがっちりと掴んだ。

そのまましっかりと拘束し、逃がさないようにする。

「な！？」

「本当だな、攻撃が決まったあとって、安心しきって、警戒が薄くなってる
からカウンターが通り易いんだな」

「ウチの攻撃をくらって、平然と立ってやがるなんて…！くそ！その手を放
しやがれ！！」

俺のホールドから逃れようと、必死に振りほどこうとする。
我武者羅に自由になることだけを考えて、引っ張っているようだ。

このアクションを待っていた。
自分の自由を奪われれば、こういうタイプは真っ先に外そうとする。
だからこそ、攻撃を受けてでも、これはする価値があった。

相手が自分側に力を入れて、引っ張った瞬間、俺もその流れに沿うように力
を加え、上乗せする。
そして、そのまま一気に投げ技をかける。
自分と相手をかけて、増大された力はいかにも嵩張りそうなでかい図体のク
マの着ぐるみの天地を反転させ、宙へと浮かせた。

「うわっ！」

「今だ、一子！クリス！」

「とりゃぁーーーーーー！！！！」

「せやぁーーーーーーー！！！！」

空中で逆さまになって、満足にガードも取れない相手の腹部に、一子とクリスの助走をつけた強烈なとび蹴りをお見舞いする。

その勢いを表すかのように、クマの着ぐるみは吹っ飛んで、海へと着水した。

まさに水を打ったような静けさのあと、

「よっしゃあああああ！」

クラスが大歓声で包まれた。

53話　「海のクマさん」（後書き）

ありがとうございました。
今回、見事に作戦が決まりましたね。
上手く一子・クリスの二人にパスをつなげました。
では、次回もよろしくです。

５４話　「防御の壁」（前書き）

いやぁ、忙しいと前書きの内容にも困ってきますね。
色々書きたいことはあっても、考え始めたら時間がかかりますし、
正直な話、何書けばいいのか分かりません。
以上、前書きに書くことがないので、前書きについて書いてみました

54話　「防御の壁」

浜辺に立つ二人の少女。
その先にはクマの着ぐるみが海に突っ込んでいた。

「よくやったなー、すごかったぜ」

「これで賞品はF組のものだー！」

クラスメートたちは勝利に喜び、声をあげていた。
他のクラスも終わっている様子はなかったので、1番ということもその嬉しさの理由の1つとなっているのだろう。
最終競技なので、これで1位をとるということは、すなわち今の得点なら、
F組が総合優勝ということになる。
これだけ浮かれるのも納得だ。

だが、そんななか、声を上げず、黙ったままの者がいた。
それはたった今、敵にとどめをさしたクリスと一子の二人だった。

「どうしたんだ？勝てたのは二人のおかげだぜ」

「ああ、よくやってくれた」

風間翔一と直江大和がファミリーの仲間の健闘をたたえる。
だが、褒められている二人は何も応えずに、クマが飛んでいった方向を見て
いるだけだった。
皆も何事かとつられて、そちらを見る。

「ったく、ハデにぶっとばしてくれたぜー」

「「「なに!?」」」

クラスの連中が驚きの声を発する。
そう、倒したと思った敵がまた立ち上がってきたのだ。

「くそ、やはりか」

「そんな気はしたわ」

一子とクリスは心配してたことが的中したようで、驚いているというのでは
なく、むしろ当然といった様子でさえいた。
おそらく、攻撃した瞬間、俺と同じような違和感を感じたのだろう。

「その着ぐるみの下、プロテクターでも入っているんでしょ」

その通りだ。
あの着ぐるみの下には、確実に身を守るプロテクターが入っている。
本来、修行僧たちがどんなことをされても、怪我をしないようにと安全面を
考慮されたものなのだろう。
いくら、修行僧とはいえ、生徒相手に本気を出すわけにはいかないだろうし、
全ての攻撃をかわすわけにもいかないだろう。
学校行事という形式の中で、手を抜くという前提だからこその装備である。

そんなものをこちらを倒す気まんまんの正体不明の奴が乗っ取ってしまった
わけだ。
もうそれは、相手の防御力を上げるハンデにしかならない。
ものの見事にダメージを軽減しちゃってくれてるわけだ。

だが、それだけではない。
いくら、プロテクターとはいっても、所詮は大怪我に至らないようにする程
度のもので、衝撃を完全に消すわけではない。
ましてや、あの二人の助走をつけたとび蹴りをくらって、何ともないなんて
ことはありえない。

さっき、俺がジャブを打ったときに感じたもう1つの違和感。
あいつは常に自分の気で身体を覆い、防御にまわしている。
おそらく、クリスや一子も感じただろうが、明確に見えてないから、

口に出
してはいないのだろう。
それもまるで、もう1枚の盾のような役割を担っている。

問題はどちらかというとこれだ。
こいつがプロテクターを越えて伝わる衝撃のほとんどを持っていってしまう。
それほどの上質な気を使っている。

だが、気になるのはこいつのような荒っぽい性格の奴が何故こんなことをしているのかだ。
勿論、気は攻撃にも使えるのだから、その方がこいつらしい。
それでも防御にまわすということは、何か狙いがあるのだろう。
まあ、今はそれを考えても、仕方がないか。

「正直、投げられたときはビビッたけど、みすみすそのチャンスを逃がしちまうなんてなー、オイ」

「なら、もう一度やるまでよ」

「ああ、次はさっきよりも強い一撃を叩き込んでやる」

「ざーんねーん、もうそんなチャンスは訪れないね」

「ふっ、訪れないなら作り出せばいいだけのこと」

「おい、一子、クリス、お前らはもう何もするな」

戦闘態勢をととのえる二人を制止する。
こいつは色々と面倒すぎる。

「何故だ、海斗！」

「いいから。…俺は相手の弱点を見つけた。だから、任せてくれ」

「あははっ、弱点ねー。そんなものあるっていうなら、見してほしいぜ」

「なら、それを自分に教えろ。自分がその弱点をつく」

「いや、口で説明すると長い。俺を信じてくれ」

「しかし…！」

「わかった、アタシは言うとおりにするわ」

「な、おい犬！」

「アタシは海斗を信じてるから」

「……自分も信じて、我慢しよう」

「さんきゅー、二人とも。絶対に勝ってくる」

二人は俺を信じて、手を出さないでくれると約束した。
じゃあ、いっちょ頑張りますか。

「お話は済んだかよ」

「おかげさまでな」

「またお前一人か。なんだかんだでウチとまともに戦えてんのはお前だけだし、楽しいなら一向に構わないけどなー」

「一つお願いがあるんだが、“まいった”する気はないか？」

「なんで、ウチにダメージも与えられない奴ら相手に降参しないといけねぇんだよ、アハハハ！」

「だよなー」

まあ、期待なんてしてないし、一応の確認だったがやっぱ駄目か。
そりゃそうだよなー、攻撃もくらわないのに負ける要素がないもんな。

「悪いな」

「あ？いきなりなんだ？」

「いや、先に謝っとくわ」

たぶん、中身女の子だろうしな。
だけど、二人に絶対勝つって言っちゃたし、仕方ない。

「なに、いきなり意味のわかんねーこと言ってん…」

相手が言い終わる前にこちらは動く。
離れた相手に近づいていく。

勿論拳が飛んでくるが、今度は様子見などせず、ただかわす。
そして、すぐさま相手の身体にパンチを放った。

「…がはっ！」

それは相手にクリーンヒットして、肺の空気を吐き出させた。
クマの着ぐるみはその場でひざをつく。

「う、ウチに攻撃を当て…やがった…だと」

「気絶してねーのか、色々凄い奴だな」

「テ…メェ、弱点とかわけのわかんねーこと…、言いやがって」

まあ、弱点を見つけたなんてのは当然嘘である。
着ぐるみにそんなのがあるんだったら、すぐ教えて欲しい。

今のは単純に気の防御を破る強さで攻撃しただけだ。
別に防御力がそれだけ高いなら、それを上回る攻撃力で臨めばいい。
ただそれだけの話。

相手がどのくらいの強さか分からなければ、力の加減が分からず、
大怪我さ
せてしまうかもしれなかったので、心配だったが、どうやら意識も
あるし、
大丈夫だったようだ。

「テメェ、なんつー馬鹿力してんだ…、ウチの気を貫通するなんて
…うっ！」

ダメージはしっかりとあるらしく、膝だけで支えていた上体も地に
ついた。
倒れながらも意識はあるようだがな。
なんともタフな奴だ。

「別に男なんだから、力があるのは当たり前だっつーの。お前こそ、
避けと
けばいいものを、防御を過信しすぎだ」

「うるせぇ！てめぇはウチがぜってー殺してやる、武器があれば、

一瞬なんだよ、テメーなんてな！」

非常に口は元気だが、あれをくらったら、当分は立ち上がれないだろう。

「今回は俺の勝ちだ」

今度こそ、怪物退治、成功だ。

５４話　「防御の壁」（後書き）

ありがとうございました。
決めるときは一発でしたね。
まぁグダグダ時間をかければ、クリスや一子が介入してくる可能性も捨てきれないので、早く決めたんでしょうね。
では、また次回よろしくお願いします。

55話　「想定外」（前書き）

忙しいのもあと少し。
待ち遠しいです、はい。
今の自分にとってアニメまじこいだけが
心のオアシスです。

55話　「想定外」

―S組にて

「ふふっ、エリートという割にはどいつもこいつも口先ばかりの弱い奴ばかりさねぇ」

突如として、乱入したオオアリクイは圧倒的な強さを見せつけていた。

S組の生徒は一部を除き、そのほとんどが運動もそれなりにこなすエリート集団なのである。

少なくとも、群れている不良の下っ端なんかには楽に勝てるくらいで、決して弱いなんてことはない。

だが、そんな奴らをオオアリクイの着ぐるみは、次々と倒していく。

そのスピードといったら、速いなんていうものではなかった。

応戦する者がかかっていったら、次の一撃で沈められるという光景の繰り返し、まさにそんな感じであった。

「危ないですね、ユキ、私たちはさがっていましょう」

「うんうん～、そうしよーう」

葵冬馬や榊原小雪はその強大な力を振るう敵を見て、戦線から離脱した。
実際、クラスメートが軽々とあしらわれている、この現状ではあながち、間違いではない選択だった。

「馬鹿にしてくれるわ、おい、あずみ、S組の実力を思い知らせてやるのだ」

「了解しました、英雄様！」

逆に九鬼英雄や忍足あずみのようになめられていることに対して、迎え撃ってやろうと考える者もいた。
クラスメートが次々に傷つけられているこの現状では、ある意味、これも当然の選択なのかもしれない。

（ちっ、かといって、英雄様を危険なあわせるわけにもいかない。ここは戦士としての誇りよりも、英雄様の安全の方が優先だ）

この忍足あずみは昔は傭兵だったこともあり、かなりの実力者である。

なので、これだけ強い相手ならば、血がうずくだろう。
だが、今の彼女は九鬼という主人に仕える従者であり、メイドであり、護衛
である。
主人の無事と自分のプライドを天秤にかけるならば、前者を選ぶのに何もた
めらいはないのだった。

「はっ！」

「ふぅ、何かと思えば、ただの目眩ましかい」

あずみは煙幕弾を投げて、一帯に煙を展開した。
そして、その煙に紛れて、相手の後ろにまわりこむ。

「背中がガラ空きだぜ」

そして、後ろから当て身を見舞う。
拳は確実に相手に命中した。
だが…

「ふん、効かないねぇ」

「なに、こいつ…！」

オオアリクイが背後のあずみに向かって、横薙ぎに腕を払う。
ガードは行ったが、かなりの距離を吹き飛ばされた。

このオオアリクイもクマと同様に、プロテクターの下に気の防御を張っていたので、あずみの攻撃を通さなかった。
だから、硬直もなく、すぐさま反撃に移ってきたというわけだ。

「あずみ！よくも貴様、我の部下に手を出したな！！」

英雄は自分の配下の者が傷つけられたことに激昂した。

「勝負だろう？何を熱くなっているんだい」

「黙れ！あずみを攻撃した罪を償ってもらう」

そう言って、オオアリクイに突進していく。

「そんな直線的な攻撃で、私に届くわけないだろう」

向かってくる英雄に突きを放つ。
だが、守られる存在である奴だという、ほんの少しの油断があった。

英雄はそれにつけこみ、無理矢理な動きで回避する。

「なんだと!?」

「ほあったぁあああああ!!!」

英雄が使うのは、中国武術が混じった護身術。
お金持ちという温室育ちのイメージがあると、所詮己の身を守る最終手段で
しかないと、軽く思われるかもしれない。
だが、これは武道四天王でもある姉の九鬼揚羽から教わったものであり、そ
の実力も当然のごとく、相応のものとなっている。

「くっ、私に一撃入れるとはね。ボンボンのくせにやるじゃないか。まあ、
それでも気にするほどのダメージじゃないがね」

「ならば、もう一撃入れてくれるまで」

「面白いねぇ、そうこなくっちゃ……ん?」

勝負もこれからというその時、無線でサインが出される。
撤退命令だった。

「…仕方ないね、今日はこんなところか。まいったまいった」

そう言って、オオアリクイはさっさと逃げていった。

「大事無いか、あずみよ」

「はい、お見事でした。英雄様」

「うむ。だが、何故退いたのだ」

「おおかた、やりすぎだと叱られでもしたのじゃろう」

「確かにそう考えるのが妥当ですね」

倒されたものは山ほどいたが、ひどい怪我人は出ずに済んだようだ。
こうして、S組の戦いは終わった。

………………………………

…

「はぁ、なんとも中途半端に終わっちまったねぇ」

オオアリクイもとい板垣亜巳は物足りなさを感じながらも、撤退命令に従い
釈迦堂や竜兵が待機する場所に戻っていた。
そう、後はそこで合流し、誰にも見つかることなく、ここから去るだけ。
自分のやるべきことはもう先程の場所に向かうことだけだった。

だから、それは本当にたまたまだった。
別に心配だったわけでも、気になったわけでもない。
なんとなく、ただなんとなく、亜巳は天使が向かった２－Ｆの陣地を見た。

「……は？」

自分が今見ているものが分からなかった。

本来、その目に映るべきは、亜巳自身と同様に同じ目的地を目指して、こち
らに向かってきている姿。
もしくは、自分よりも一足先に行動していて、そこに姿はなく、２－Ｆの連
中だけが馬鹿面を並べているさま。
そんなところであろうと思っていたのだ。

だが、現実にそこにあるのは、砂浜に転がったクマの着ぐるみ。
その前に悠然と立つ一人の男。

信じられない。
ただ、その一言だった。
亜巳はスピードをあげて、二人のところに戻った。

「どうなってんだい！？あれは」

「いや…、どうもこうもな…、見ての通りだよ」

「天がやられたっていうのかい、なんでだい、気で守りを優先していたはずだろう」

「それすら破られたっつーことだなぁ、おい。あの坊主、見てたが、気もないのに相当強いぞ。出来ることなら俺が相手したいくらいな」

「気がないって。そんな無茶苦茶な話があるっていうのかい」

「ともかく、回収しないことにはちっとヤベェだろうな」

「どうすんだい、私がまた行ったら、不自然だよ」

「ああ、そりゃ分かってるが、俺が行くとそれよりもマズいからな。なにせ、
川神院の人間が結構な数うろついてやがるからな」

「だったら、俺が行ってやるよ」

そう名乗りを上げたのは竜兵だった。

「竜、アンタが行ってどうするんだい」

「別に俺なら顔がばれても困らねぇし、何より天の借りを返さなきゃいけないしな」

「んじゃ、頼むわ。早めに回収してきてくれ」

「おう、一瞬で倒してきてやる」

また一匹、怪物が2－Fにはなたれた。

55話　「想定外」（後書き）

ありがとうございました。
予想外に乱れた作戦。
新たな勢力が動き出します。
次回もよろしくです

56話　「三匹目」（前書き）

松風「オラのコーナー、作者が忙しいせいで全くはじまらないんだよなー…オラの華の時代を待っててくれよー、頼んだぜ」

56話　「三匹目」

Ｓｉｄｅ　クリス

海斗に弱点を見つけたから下がっていろと言われた。
自分もまだまだ戦えるし、海斗にばかり頼るのは気が乗らない。
だから、自分は拒否した。
自分がその役割を果たして、少しでも海斗の役に立ちたかったから。

だけど、そんな自分に海斗は言った。

“俺を信じてくれ”と。

勿論、海斗のことは信じている。
それでも、ここで海斗の言うとおり下がってしまえば、また海斗ひとりに押
しつけてしまうことになる。
だからこそ、迷った。
海斗の希望にすぐには答えられなかった。

だが、犬は違った。
海斗がその言葉を言った瞬間、すぐに承諾した。

正直、意外だった。
犬だって、ついさっきまで自分と同じで戦う気まんまんだったはずだ。

犬は修行を毎日しているため、いつも実戦で実力を試したいと言っていた。

それはより強くなることを目指している身としては非常に共感できる。
日々の鍛錬は基礎を固める上でも大切なのに変わりはないが、やはり実際の
戦闘で得られる経験値に勝るものはないのだ。

だが、そういう機会はなかなか訪れるものではない。
犬だって、姉であるモモ先輩には沢山の挑戦者が集まってくるが、それは武
道四天王であり、最強と呼ばれるモモ先輩だからこその例外だ。
自身が対戦相手を組んでもらえるのも、ほんのたまにだと言っていた。

それなのに犬はただ一言、

“アタシは海斗を信じてるから”

それだけ言って、引き下がってしまった。

そう言った犬には何の迷いもないようで、なんだか嫌がっている自分は海斗
のことを信じていられなかったのかと悔しかった。
海斗は自分のことを認めてくれたのに…。

なんだかんだ言って、自分は海斗に褒められたかっただけなのかもしれない。
自分の強さも認めて欲しいと思ってしまったのかもしれない。
まだまだだな…。

その点、犬はいつもダメダメなくせに、たまにはっきり決断をする。
なんか、そういうときはいつも海斗が関わっている気がするが…。
なんにせよ、今回だけは犬に一本とられたという感じだ。

そして、海斗は約束通り、クマの着ぐるみを一撃で倒した。
結局、弱点がどこかは分からなかったが、一撃で潰せたということはしっかりと弱点を叩くことが出来たのだろう。
流石というべきか、やはり海斗は強い。
信じるには十分すぎる人間なのだ。

これで水上体育祭も終わり。
さて、海斗の労をねぎらってやろう。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「…くそ！足に力さえ入れば、てめぇなんて今すぐぶっ倒してやるのによ！」

「あんま動くな。ちょっと強めにやったんだから、大人しくしとけ」

「なに偉そうにしてんだ！ちっ、なんで動かねぇんだ」

まあ、それは当然だろう。
気とは、自分の中にある精神力を原動力としている。
完全にそれだけで使えるというわけでもないが、主となっているのは確かだ。
まあ、引き金くらいに考えとけばいいだろう。

そして、身体を守る気のオーラを破られるということ。
それはつまり、相手の精神にも干渉する攻撃になる。
普通に肉体的に傷つけられるより、体力が大きく削られるということだ。

今回はしっかりと防御を固めていたところを無理矢理に破壊してしまったため、立てなくなるくらいは起こってもごく自然だろう。
むしろ、それくらいで済んでいるのが、こいつの強さを表している。

「まぁ、そんなに焦るなって。少しすれば、お前ならすぐに動けるだろ」

「うっせえ、黙れ！」

「はぁ……」

（くそ、もう撤退命令が出たっていうのに、このままじゃ戻ることができねぇ。あんだけ守りには気を遣っておいて、ウチがヘマするわけにはいかねーんだよ。さっさとこの状況をなんとかしねぇと…）

どうしようか。
少し経てば、動けるようになるとは言ったものの…。
今のこいつは明らかに学校側で用意された対戦相手じゃない。
はっきり言って、勝手に紛れ込んだ異分子である。
このまま放っておいて、治りました、はいさようならとはいかないだろう。
今のままにしておけば、学園の者が中に入ってる奴を引っ張り出したり、その後そいつが色々聞きだされ、何らかの罰を受けることくらいは、俺だって容易に想像できる。
んー。
さて、こっからどうするかだ。
「おい」
うつ伏せに転がったクマの着ぐるみの側でかがむ。
そして、小さめの声で話しかけた。
「あ、なんだよ。顔近づけんな、ボケ！」
「いや、お前これからどうすんだ。このままだと、うちの教師どもに回収さ

れんぞ」

「はぁ!?テメェには関係ねぇ話だろーが」

「いや、俺だってお前が独りきりでこんな場に出てきたんじゃないってこと
くらいは分かってんだぞ。大方、仲間がどっかにいるんじゃないのか?」

「く…!もし、そうだとして何だってんだよ」

「あー…、よかったらそこまで運んでやるけど、どうする?」

「は!?何言ってんだ、テメェは!敵のお前がなんでウチを連れてく理由が
あんだよ、ほんと意味わかんねぇ!」

「いや、なんつーか攻撃したことに関してはお前も襲ってきたんだし、悪い
ことをしたなんて思ってないが、かといって、それでお前が学園に捕まるっ
つーのも寝覚めが悪いっていうかな」

「……くそ。馬鹿にしてんのかよ、どんだけウチを侮辱しやがんだ!本当に
ムカつく奴だな…今すぐにでもその余裕かました面をブン殴ってやりたいぜ」

なんか今は何を言っても、相手の感情を逆撫でするだけのようだ。

プライド高そうな感じはあるよな。
けど、なんか幼いっつーか、言動こそ刺々しいが、態度は駄々をこねる子ど
ものような理不尽さがある。
もしかして、俺は年下の女の子を殴ってしまったんじゃないか。
はぁ～、後悔はしないが、何してんだかなー。

つか、少々強引だが、どっかに運んどいた方がいいよな。
クラスメートには処分してくるなどと後でなんとでも言い訳すれば、問題な
いだろう。
そう思い、クマを担ごうとしたときだった。

「ちょっと待った」

いきなり、知らない男の声がした。
見れば、そこには左肩に刺青をした目つきの悪い男がいた。

「さて、狩人交代の時間だ」

男は不敵に笑う。

56話　「三匹目」（後書き）

ありがとうございました。
ついに竜兵と海斗が対面。
激突はあるのか。

57話　「怪物退治・延長戦」（前書き）

今までご迷惑をおかけしました。
私情も片付き、今日からまた感想にも逐一返信ができそうです。
時間が空いたときに、今までのものにも全返信するので、
感想を書き続けてくださった方、本当にありがとうございます。
これからもよろしければ、くださると嬉しいです。

57話　「怪物退治・延長戦」

「狩人交代の時間だ、さっさと回収させてもらうぜ」

「な!?リュウ、なんでテメーが出てきてんだよ」

これまた、ごっつい奴が出てきたな。
回収と言っているし、十中八九このクマの着ぐるみの仲間なんだろう。

しかし、この男はどうやら正体を隠そうとかそういう気はないらしく、ロー
ブやマスクすらなしにその素顔を晒している。
唯一、隠せそうなサングラスも額にひっかけてるくらいだしな。

その風貌はガタイのいい体格に動き易そうな黒いタンクトップ。
左肩には自己主張が激しい大きな刺青があり、指にはこれでもかというほど
指輪をはめていて、加えてさっきも言ったが、頭にはサングラス。
極め付けにこの悪そうな面構え。
いかにもな不良の代表って感じの奴だった。

だが、そこら辺の雑魚とは違うのが、こいつの気。
大抵不良なんてのは見た目だけ強そうに取り繕っている肩透かしの奴らが大
半だが、こいつはまさに外見ぴったりという感じの禍々しい気を放ってやが
る。

考えてみれば、このクマを助けに来る時点でそのくらいなのは当然か。

ていうか、地に伏しているクマと目の前の男…
非常に気の性質や雰囲気が酷似している。
同じ集団に所属しているからってのは関係ない。
ずっと一緒に同じような修行をしてきたのか、それとも…

まあ、いいか。
こいつらの関係性を探ったところで別に俺にとって、有利になるわけでもないしな。
しょうもないことは今は考えないにことにしよう。
それより、一刻も早く目の前の事象に対処しようか。

「おー、近くで見るとお前結構いい男だな」

「は？」

「どうだ、この場で一発俺と…」

「いや、待て待て待て！」

え？なに、どういうことなの？
こいつはこのクマの子を回収しにきたんじゃなかったのか？
俺が勝手に早とちりしてただけ？
いや、そんなことないよね。
だって、流れ的には完全にそういう方向に向かってたもんな。

一直線だったよな？
よし、俺は何も間違っていないぞ。

で、次なる問題はこいつは今何を言おうとしたわけ。
なんか、俺が遮らなかったらゴールデンには進出できなくなるような言葉が
続いていたような気がしたんだが…。

これはもしかしなくても、あれか。
巷で噂の同性愛者っていう奴じゃないの。
マジで意味が分からん。
禍々しい気なんかより、よっぽどアブノーマルだわ。

「俺にそういう気はないんだよ」

「ちっ、ノリが悪い奴だ」

「別にお前の趣味趣向をどうこう言うつもりはないが、それを他人にまで強
要すんのはよしてくれ」

「じゃ、いつも通り無理矢理やるか」

「おいおい、落ち着けよ。俺はお前と戦うつもりはない。どうせ、お前の目
的はそこに転がってるクマのお仲間さんだろ。邪魔したり、教師を呼んでこ
ようなんて気はさらさらねぇから、安心して持ってってくれや」

「ハハハハハ、何馬鹿なことを言ってやがんだ」

「あ？」

「確かに本来の目的はそこに転がってるよわっちい奴の回収だ」

「指さしてんじゃねーよ、ボケ！」

「だが、そんなことはお前を倒そうが出来ることなんだよ。だから、お前には俺の性欲と戦闘欲を満たしてもらわなきゃな。まあ、喧嘩相手に実力が足りてるかどうかはこの際、抜きにしてだ。さっきも言っただろ。“狩人交代”ってよ。お前が戦わないとか手を出さないでやるとか言える立場じゃねぇんだ。既にお前の立ち位置は狩られる側なんだよ」

あー、これはあれか。
もうどうあっても、戦闘は避けられないとかそういう系か。
これまた、しち面倒くさいことになってきやがったなぁ。

と思っていたら、いきなり寝転がっているクマから荒々しい語気で助けにき
た男に向かって、なにやら言い始めた。

「おい、リュウ！テメェ、勝手なことしてないで、さっさとウチを連れて帰

れ！アレはウチの獲物なんだよ、手出すんじゃねーよ」

「そんなこと知るか、さっきまではどうだったか知らねぇが、今は俺の獲物
なんだよ。余計な口出しはすんな。敗者はちっと待っとけ」

「誰が敗者だっつーんだよ！！今、少し立てねーくらいで負けたことにして
んじゃねぇよ」

「立てないほどやられてんなら、立派な敗者だろーが。そんな倒れられなが
ら、言い訳されても馬鹿にしか見えないんだよ」

「んだと、リュウ！治ったら覚えてろよ、今言った事を後悔させてやんぜ」

「ま、俺が借りは返してやるから、指くわえて見てな」

「……おい、リュウ」

「あ、なんだ？」

「さっさとウチ連れて帰れ」

「だから、俺はこれから…」

「そいつ、マジで強ぇんだよ。テメーくらいじゃ、すぐには倒せねぇくらい

にな。変な自信語ってねぇで撤収命令に従え」

「お前、自分が負けたからって、相手のことを高く評価しすぎだろ。第一、
こいつ明らかに欠陥品じゃねぇか。気が全く感じられないっつーな。いくら
いい動きをするって言ったって、気があるのとないのとじゃ、埋めようのな
い差が生まれちまうんだよ。俺はお前みたいに油断してやられるようなこと
はしないしな」

「…もうウチはシラネェ」

なんだよ、喧嘩か？
だが、それにしては仲の良さを感じた。

ていうか、今のやりとりを見聞きしていて、さっきのなんとなーくの予想が
ほぼ確実なものとなってしまった。
別に詮索しようと思ってのことではないしな。
まあ、気が似てることの説明もつくし、いいか。

「おっと、すまねぇ。待たせたな」

「いや、こっちとしては永遠にクマと漫才してくれてても良かったんだが」

「ふっ、あいつに勝てたからって調子に乗っているところ悪いが、お前のその自信が単なる思い過ごしだってことを今から直々に俺が教えてやるよ」

「そんな授業は仮病でも使って、欠席したいんだが」

「残念なことにこれは強制参加の特別授業だ。青空教室で海までついてくるんだから、環境はバッチリだぜ」

「それはそれは。随分と理不尽な聖職者だな。教育委員会に知らせて、処置を待つのもかったるいし、生徒自ら抗議でもしようかね」

「それでこそ張り合いが出るってもんだ」

そして、また戦いが始まる。

さながら、怪物退治の延長戦といったところだろうか。

じゃ、さっさと終わらせて、早退でもしようかね。

57話　「怪物退治・延長戦」（後書き）

ありがとうございました。
戦闘フラグが立ってしまいました。
やはり竜兵は竜兵だったと。

58話　「正しい獣の扱い方」（前書き）

やばいですねー。
忙しさから解放されたのはいいんですが、
書き溜めを使い切ってしまったので、
毎日更新頑張らなくては…

58話　「正しい獣の扱い方」

浜辺で対峙する二人の男。
辺りには寄せては返す波の音だけが響く。

突然現れた男の禍々しい気はそれほどの静寂を生んでいた。
周りのクラスメイトたちもそうすることが当然かのように黙っている。
気が読めるほどの強者でなくても、男の放つ威圧感には素人にさえ有無をいわせない力があった。
故に黙って、事の顛末を見守ることしか出来なかった。

「じゃあ、お前とのお楽しみの時間も考慮して、さっさと勝負は決めさせてもらおうか」

「生憎、俺がお前に捧げてやれるのはせいぜい手向けの言葉くらいでな。信用性なら十分だぜ。そこにあるクマの剥製なんかがいいモデルだろ」

「別に捧げてくれなんて頼みやしねぇから安心しな。俺は欲しいと思ったら相手の意思なんて関係なく、力づくで奪うのが性に合ってるんだ」

「無理しちゃって、まぁ。“力づくでやるからいい”だなんて、モテない奴

の負け惜しみかっての。言ってて恥ずかしくないのか?」

「…まずはその生意気な口をすぐに利けなくしてやるぜ!」

突如、相手は踏み込んで強烈な殴打を放ってきた。
それはわきの辺りにヒットし、その衝撃で強制的に後退させられる。

「どうだ、さっきの相手の攻撃を止められたからって油断してたんじゃない
か?俺は防御なんかまどろっこしいことしないで、気はほとんど全てを攻撃
にまわしてるんだよ。重みが違うだろう」

「・・・・・・」

「あぁ?黙りやがって。さっきまでの威勢はどうしたんだ?それとも、あま
りの予想外の強さに立ったまま気絶なんてガッカリなことにでもなってんの
かぁ?」

「おいおいおい、勘弁してくれよ。なんかグチャって感じがしたんだけど…
うわ!やっぱりこれかよ!すっかり忘れてた」

「は?」

ふところから袋を取り出す。
その透明の袋の中には無残にも潰れたマシュマロたちがあった。

くっそ、さっき小雪にもらったのを今の今まで忘れてた。
後で食べようとして、それっきりにしていた。
その結果、殴られてこんな感じに。

いや、マシュマロが変形したところで別に…とか思ってるだろ。
俺も見た目がどうあれ、味に変化はなければ問題ないし、ましてやマシュマ
ロなんてそんな潰れたくらいでショックじゃねぇよ。

だけど何の偶然なのか、このマシュマロは中身にチョコソースとかが詰まっ
ている従来の物とは少し違うタイプだったらしい。
いや、そのことは俺もたった今、この袋の内面に飛散した茶色のものを見て
知ったのだが…

いや、相当えぐいだろ。
まず手が汚れることは確実だしな。

「しょうがねぇ、後でどうにかして食うか」

「おい、お前勝負中に菓子の心配なんて馬鹿にしてんのか？それとも、俺の
攻撃なんてちっとも効いてないっていう挑発と受け取ればいいのか」

「誤解すんなよ、しっかり痛いっつーの」

「それにしては、涼しい顔してやがるけどな」

「顔に出ないタイプなだけだ。お前の攻撃の威力は半端なかったしな」

そう、正直やばかった。
データをちゃっちゃと取りたくて、避けるのはやめといたというのもあるが、
確かに相手の男の言うとおり、さっきのクマの感覚で戦っていた。
そうしたら、しっかりと気のこもった攻撃をやられた。

咄嗟にこちらの拳で威力を相殺してなかったら、あばらの1、2本は持っていかれたかもしれねぇな。
ちゃらちゃら指輪なんてつけてやがるから、手がいてぇよ。
ああいうので人殴ったりしたら、洒落にならんからな。

まあ、相殺といっても殺しきったわけではない。
相手の攻撃力を少し下回るくらいの打撃を放って、ある程度弱めただけだ。

大事なのは相手に相殺を認識させないこと。
拳に違和感を感じさせないように力を抑えて。
目でとらえられないように迅速に。

そういう意味ではマシュマロも相手の気を反らすいい材料になった。
まあ、これは素で忘れていたが…

「まあ、少しタフな奴だと前向きに考えるか。すぐばてられたら、こっちと
してもつまらんしな。精々あがいて、俺の欲を満たしてくれよ」

「いやー、俺もやられっぱなしってわけにはいかないしね」

さて、これからどうしようか。

こいつも戦闘欲で動いているタイプの人間だ。
だが、マルギッテのような奴とは少し違う。
戦士を知能とともに戦う者と本能で戦う者に二分するとすれば、こいつは明
らかに後者の存在。
獣と呼ぶにふさわしいだろう。

なんだかんだ言っても、マルギッテは十分に後者寄りではあるが、基本的に
は軍の任務を果たすという使命のもとに動いている。
眼帯外したときのあの戦闘欲剥き出しの姿は獣に他ならないが、それは別と
してある程度の考えを持って動いている。

対して、目の前のこの男は別だ。
おそらく、マルギッテでいうところの“こいつに与えられた任務”は仲間で
あるクマの回収ということになるだろう。
命令した者がいるかどうかは別として、こいつの目的はそれだ。
だが、今はそんなことを放棄して、俺との戦いにしか目を向けていない。

利害の計算ではなく、戦闘本能に従って行動している。

こういうのには言葉の駆け引きとかはあまり通用しないんだよな。
なんかで誘導して、作戦に引っ掛けることも難しい。

なので、馬鹿みたいに力を振るいまくるこいつへの対処法は変わってくる。
やっぱ、目一杯挑発して怒らせるのが妥当か。
性格的にもキレやすそうな感じだし、適当だろう。

他者からの干渉でハメることが出来ないなら、自分で勝手に空回りしてもら
おうということだ。

「まあ一発目が効いてないからって、そう何発も耐えられるわけはねぇから
な。立てなくなるまでブチ込んでやるよ」

「いやいや、だからもうお前の攻撃を甘んじて受け入れる気はさらさらない
から」

「あ？それだと避けれるみたいに言ってるように聞こえるが」

「だってそうだろ。お前の攻撃は確かにパワーはそこらの奴とは段違いに強
いけどよ、一撃の前のモーションがでかすぎんだよ。そんな大振りじゃぁ、
はっきり言って当たる気がしないな」

「一発しのいだからって、随分な自信じゃねぇか」

「まあ、事実を述べたまでだ」

「どうやら力の差を見せ付けてやんねぇと分からんようだな」

「じゃあ、来てみな」

そう言って、わざとらしく挑発的に指でかかってこいと示す。
相手は最早、あからさまな煽りに怒りを隠そうとはしなかった。

さて、簡単に挑発に乗ってくれたようだし、終結といこうか。

58話　「正しい獣の扱い方」（後書き）

ありがとうございました。
相手のタイプに合わせて、怒らせるという作戦にシフトした海斗。
果たして、その結果は…

59話　「怒れる獣」（前書き）

なんか更新がギリギリのラインです。
急に短くなったりしたらすみません

59話　「怒れる獣」

「さっさとかかってきな」

明らかな挑発。
それに獣は迷いなく、食いついてきた。

「カスの分際であまり調子に乗るなよ！！」

酷く荒い連撃がくる。
同じ連撃であっても、さっきのクマのようなしなやかさはない。
“荒い”が“粗い”といったところか。
当たったらただじゃ済まなそうだが、くらわないことにはどれも等しい。

「ちょこまかと逃げやがって」

「こっちだって逃げてるばっかじゃないぜ」

「なっ…！？」

相手が咄嗟に攻撃を中断して、身を引く。

だが、俺のした事はただ少量のトロピカルジュースをペットボトル

の口から
飛散させただけ。
反撃といえるのかすら謎である。

ちなみにこのトロピカルジュースは知らない一年生の女の子にもらった。
この競技前に“頑張ってください”と押し付けられ、理由を聞く前に去ってしまったのだが…。
礼は言ったのだが、果たして聞こえてるかどうか。
少量とはいえ、こぼしてしまって悪いことをしたな。

「お前、おちょくってやがんのか」

「至って真剣だが」

いや、まあその反応だろうな。

あんだけ俺が反撃が来るようなことを臭わせておいたにも関わらず、いざ避けてみれば回避したのはトロピカルジュースだもんな。
これは恥ずかしい。
馬鹿にしてるとしか取れない行動だ。

「どうやら本気で俺をおちょくってるってことらしいな」

…ちょっと効果覿面すぎる気もするがな。
その言葉からは怒りの感情がひしひしと伝わってくる。
ちょっと挑発をやりすぎた感はあるが、大丈夫だろう。

「うぉらぁぁっ！！！」

急にさっきよりも激しい拳の連打。
うん、確実に怒らせすぎたな。
逆効果かもしれん。

どれもスレスレのところで回避していく。
ちょっと位置がずれるだけで顔面にこのパンチが来るわけだからな。
ヒヤヒヤなんてもんじゃねぇよな。

「いい加減、諦めやがれ！」

男がそう言って、放ったのは蹴りだった。
今まで行われなかった方向からの、いきなりの攻撃。
俺はそれを地面に転がることで回避した。
そのまま少しオーバーに転がり、距離を空けた。

「ふぅ、危なかった。蹴りがヒットするかと思ったぜ」

「おい、流石にそう何度も小細工は通用しないぞ」

「ん？」

「その右手に持っている砂は目潰しにでも使うつもりか？」

「・・・・・・」

「大方、着ぐるみでもなく相手が生身だから、不意をつけば成功するとでも
思ったんだろうが。さっきも言ったが、小細工はさっきのでもう懲り懲りだ。
お前が転がってるときにその砂を拾ってんのも、しっかりと見てんだよ。そ
う何度も馬鹿にされるのを許容するほど、俺の心は広くないからな。警戒し
とけば、そのくらいの動きは気づくんだよ」

「……よっく見てんじゃん」

流石にそこまでは馬鹿じゃないよな。
さっきのトロピカルジュースの後だし、警戒が上がってたっつーことか。

俺はバレたならばしょうがないと、すくった砂を右手からさらさらと零して
いく。
さーてと…

「分かったらもうそんなしょうもないことはしないことだな」

相手も作戦を見抜いたつもりで得意になっているんだろうが…

俺は手から落ちていく砂を思い切り蹴り上げた。

零れ出た大量の砂が飛び散る。

相手も俺の突然の行動に若干驚くが…

「…！そんなの届くわけが…」

確かにこんなに細かく軽い砂を正確に相手の目を狙って、飛ばすことなんて

到底不可能だ。

届くかも分からないだろう。

しかし、次の瞬間。

相手のサングラスが大破する。

「なっ…！？」

頭にひっかけられていたサングラス。

そのレンズを貫いたのは、白い色の小さな巻き貝だった。

何が起こったのか分からないだろう。

そう俺が蹴り飛ばしたのは目潰しのための砂などではなく、先のとがった巻
き貝だったのだ。
当然狙いは直接攻撃。
鏃のように武器として、海で手早く調達できるものだ。

砂はその武器を隠すためのカモフラージュ。
最初からこれで目潰しなんて、そんな甘い考えは持っていない。
しかも役割はそれだけにとどまらない。

貝殻を普通に投擲しただけでは当たる可能性も低くなる。
だからこそ不意をついたこの攻撃にするには、相手に砂を拾っているという
ことに気づかせる必要があった。
勿論、貝殻はばれないようにだ。

ばれないように何かをするというのは何度も使ってきたことだし、特にこれ
といって難しいということはない。
逆に相手にわざと気取らせるというのは勝手が違う。
そりゃあ、ただおおっぴらにやれば気づくのは当然だが、相手に違和感を与
えてはいけないのだ。

ばれないようにするのは自分だけの問題だが、その逆は相手の実力も考慮し
ないと駄目なことは言うまでもない。
この前の男は正直頭がそこまで回りそうにないので、より大変だ。
しかし、戦闘経験は積んでいるだろうから、一度やられたことは学習し、同

じ轍を踏まないようにするというのはある。
だから、トロピカルジュースで軽いジャブを入れとく必要があった。
それで警戒心を底上げした上で、若干ばれるように砂を拾う。
結果、作戦を読んだと思った後のこの不意打ちが出来たというわけだ。

「てめぇ…！」

「そのサングラスかけないんなら外せよ。うっとうしいから」

そして、やはり最大の理由はこの相手の心を逆なでするような侮辱がこもった作戦内容。
どうやら、しっかり怒り心頭の様子で。

「ぶっ殺す！！」

きたきた。
今までで一番力がこもった一直線の拳。
極度の怒りから生み出されるダムの決壊のような攻撃。

「おい、馬鹿やめろ！！」

倒れているクマが叫ぶ。
そう何をするかあいつには分かっているんだろう。

俺はその手首を掴み、全ての力を殺さずそのまま俺の力へと変換する。
流れに沿って、その体を引いて投げの体勢にうつる。
そう、さっきのクマのときと同じように。

だが、クマのときとは決定的に違うことがある。
それは力の大きさだ。
クマのときは俺の拘束から逃れようとするもがく程度の力でしかなかったが、
今俺が乗せたのは相手の最大出力に近いもの。

「ぐはっ」

当然、その勢いも凄まじく地面に叩きつけた。
非常に作戦としては上手くいったのだが…

そこには転がったクマと人間が。
…どうするか、これ。

59話　「怒れる獣」（後書き）

ありがとうございました
ついに撃破しましたね。
道具使いまくりですが、結果が全てです。

60話　「獣の躾け方」（前書き）

ちょっと本気でおまけか何かをはさまないと、
毎日更新があやぶまれてきました。
短い閑話みたいなものを使っていても、
怒らないで下さい。

60話　「獣の躾け方」

海辺に転がった二体の怪物。
そこに立っているのは一人の少年。

あーあ、せっかく回収しに来た奴も倒しちゃったよ。
でも、俺だって襲われるのは勘弁だしな…
とそのとき、

「海斗！大丈夫だった！？」

「うぉわ！」

一子が凄い勢いで突っ込んできた。
いや、本当に洒落にならないくらい。
言うなれば、道路わきからイノシシが飛び出た並みの突進ぶりだった。
誇張表現なしに。

「怪我とかしてない？痛いところは？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

「そうなの？良かったぁ」

そう言いながらも、俺の体が大丈夫かどうか触れてくるのをやめない。
相当心配をかけてしまったようだ。
律儀に俺との約束を守っていてくれたのだろうが、心の中でははすぐにでも
動きたくて仕方なかったんだろう。
本当に仲間思いの優しい奴だからな、悪いことをした。

「本当になんともないのね？」

「ああ、大丈夫だ。心配かけて悪かったな。」

「本当よ！！海斗が強いのは知ってるけど、すっごく心配したんだから！」

「ああ、だから悪かったって。でも、信じてくれてありがとな」

「え……あ、うん。アタシだって、海斗のパートナーなわけだし、信じるの
は当然っていうか…」

素直で優しいなぁ、一子は。
この俺を信じてるって言ってくれる奴が現れるなんてな。
色々いるんだな、いやはや。

「それより海斗、この二人どうするの？一方は完全に危険人物だし、

クマの
着ぐるみの中の人だって川神院の人じゃないし、絶対におかしいわよね。やっぱり先生たちに言った方がいいんじゃない？」

「あー…それはな…」

確かにそういう考えに行き着くのは順当だな。
想定外のイレギュラーだし、どんな危険が及ぶか分かったもんじゃないし、
クラスメイトも大切に思ってる一子じゃなくても、教師に知らせようと思うだろう。

俺だって、この野蛮なアブノーマル男はどうでもいいとしても、クマの子を
引き渡すのは少し気が引けるところはあるにしても、頑なに拒むほど優しさ
なんて持ち合わせていない。

だが、おいそれと教師には引き渡すのを了承するわけにはいかない。
俺が懸念しているのは全く別な事情だ。

教師に回収されてしまえば、軽い尋問や身体を調べられる可能性も十分ある。
それによって、俺の与えたダメージなどを分析されるのは結構まずい。
そこまで決定的じゃないにしても、見るものが見ればっていうヤツだ。

何がどうなるかなんて分からんし、用心に越したことはない。
だから、どうにかして回避したいところだが…

「どうしたの？アタシが呼んでこようか？」

「一子、ちょっと教師を呼んでくんのは待ってくれ」

「え、なんで？このままじゃ危なくない？」

「いや、それはだな…」

「まぁ、海斗が待てっていうなら待つけどね」

うーん。
そう言ってくれるのは非常に嬉しいのだが、先程までのこともあるし、もう
無駄な心配をかけたくはない。
なんだかんだ言って、結構な我慢をしてくれていただろうしな。

なんか適当な理由はないものか。
頭をフル回転させて考える。
明らかに異分子である二人を庇う理由か…。

「海斗、海斗！」

「あ？どうした……って」

思考の深淵に落ちている最中に、一子が必死に呼びかけてきた。
そのあまりにも遮二無二な様子に何事かと思い、一子の目線を追うように背
後を振り返るとそこには予想だにしない光景があった。

そこに佇む男。
ついさっき、投げ飛ばして倒したはずの男がそこに立っていた。

おいおい、頑丈すぎんだろ。
確かに地面は比較的やわらかい砂浜であるし、思い切り叩きつけたところで
本来ならばそこまでのダメージは見込めないが、あれだけの全力の攻撃をそ
のまま投げの威力に転用したのだから、相当なものだったはずだ。

やはり、喧嘩慣れしていることでそういう身体になっているのだろうか。
まあ、こいつなんかは相手の拳を避けることもせずそのまま受けて、その2
倍くらいの威力の拳で応えることで優越感にひたってそうなキャラだもんな。
これだけ実力を持っていても、殴られなれてないなんてことはなさそうだ。
この耐久性も当然か…

「すっかり倒した気分でお仲間と仲良くお話か、あぁ?随分となめた真似ば

っかしてくれるじゃねぇか」

「一子、また下がっててくれるか」

「けど、海斗…」

「ああ、大丈夫だ。無茶はしねぇから。ここまでやっちまったし、これに関
しては俺に全部任せてくれ」

「…うん、頑張って」

笑顔で頷いてくれる一子。
もう心配はかけられない。

「お気楽なもんだな。そんなに巻き込みたくないか」

「関係ない。これは俺の戦いだしな。それにしても、まさか立ち上がってく
るなんて思ってなかったぜ。だけど、あれで十分懲りただろ」

「あんなんで倒されるほど柔じゃねぇ。次は確実にお前を殺す」

「いや、もう戦わなくていいだろ。さっさと教師が来る前に帰ったらどうな
んだ」

出来れば、穏便にことを済ませたい。
それが一番心配をかけない方法でもあるしな。

「いや、俺はお前を狩らないと腹の虫がおさまらねぇ。さっさとボコボ…」

「リュウ！もう止めとけ」

天使が制止に入る。

「黙ってろ。こいつはぶっ殺す」

「はぁ……無線つけてないだろ、スイッチ入れてみな」

天使は思わず溜息をつく。
そう言われた竜兵は無線のスイッチを入れた。
すると…

『竜、アンタいつまで遊んでる気だい。さっさと目的果たして帰って来な！』

「あ、アミ姉」

無線機から聞こえてきたのは、大分お怒りの様子の姉の声。

流石の竜兵も姉の言うことにだけは逆らえなかった。

竜兵は通信を終えると、すぐさま天使をクマの着ぐるみごと担ぎ、海斗たちの方を向いた。

「この借りは必ず返す。今日のところは時間切れだ。幸運に感謝するんだな」

それだけを言い残し、最速で遠くに消えた。

よほど姉の怒りを無線機越しに感じ取ったのであろう。

「終わったの？」

「なんか、そうみたいだな」

一子の問いかけに俺はそう答えるしかなかった。

あの男が無線で一言二言話したかと思うと、急に態度を変えて撤退していき

やがった。

上司からお怒りでも受けたのか？

何はともあれ、波乱だらけの怪物退治閉幕である。

60話　「獣の躾け方」（後書き）

感想ありがとうございました
やはり姉には逆らえない。
そういうことですね。

61話　「体育祭閉幕」（前書き）

今のうちに言っておきますが、
完結は絶対にさせますので。
たとえ、毎日更新が崩れたとしても、
失踪なんてことにはしないのでよろしくお願いします

61話　「体育祭閉幕」

―あの無線の後、遠く離れた浜辺にて。

「竜、アンタ目的忘れて何やってるんだい！」

「すまねぇ、アミ姉」

「全くウチはずっと言っておいてやってたのによー」

「うるせぇ！担がれてる奴が偉そうにすんな」

「んだと！」

天使と竜兵の口論が始まる。
どちらも負けたことで苛立っているのだろう。

「あんたたち二人とも黙ってな」

「くそぉ、アイツは俺が今度ぶっ殺す」

「もう竜は今日負けたんだから、諦めな。アイツは最初ウチの獲物だったわ
けだしな」

「関係ねぇだろ。アイツにはかなり馬鹿にされたからな…必ず仕留

める」

「おー、お前ら張り切ってるじゃねぇか。いいねぇ」

二人の怒りを露にした様子に釈迦堂がそんなことを言う。

「予想以上の人材だったなぁ、ホント。気が使えないのであのレベルか。底
こそ知れてるが、あれが全力って感じではねぇし面白そうな奴だ。
全くあそ
こまでだと惜しいくらいだな」

「確かに只者じゃなかったねぇ。私も武器がなかったらどうなるかってのが
正直なところさね」

「次会ったときにでも、やってやればいいさ」

四人はそれぞれの考えを抱きながら、その場を離れていった。

Ｓｉｄｅ　天使

くそ、今日は散々だったぜ。
あの男、思い出すだけで憎たらしい。

戦っているとき、常にあいつは何か隠しつつ手を抜かれていた。
あの余裕と見下された感じが何よりも癇に障った。

確かに普通の奴よりも強いことは認めざるをえない。
そのくせ、妙に相手のことを気遣ったような態度が気に食わない。
それに何の意図があるかなんて分からないが、自分の惨めさを思い知らされている行為にしか感じられない。

とにかくムカつく。
絶対に復讐してやる。
次は武器ありの全力で、あの余裕をぶっ壊してやる。

Side out

…………………………………………………………

―同じ頃、さっきまで戦闘があった砂浜にて。

「結局どうなったのかしら？」

「まあ、いいじゃねぇか」

目をパチパチと瞬かせる一子。
何が起こったのか正確には分からないが、言い訳を考える必要もなくなって、
ラッキーだったと感謝しておこう。

「逃がしちゃったけど、海斗が無事ならアタシはいいわ」

「ああ、さんきゅ」

健気な反応で返してくれる一子の髪をくしゃくしゃと撫でる。
一子は人懐っこい犬のように目を細めていた。

「えへへ……うん！」

なんだ、このどうしようもなく保護欲を掻き立てる生き物は。
いや、俺なんかを心配してくれるなんて嬉しいに決まってるんだが、同時に
こんだけ人当たりがいいと無防備すぎて、先が思いやられるな。

「おい、大丈夫だったか」

クリスも後からやってきた。

その様子もやはり心配してくれていたらしい。

「ああ、特に怪我はしてないからな。クリスも心配かけて悪かった」

「本当に海斗は無茶をしすぎだ。いくら強いからといっても、何があるかな
んて分からないんだからな」

「全くだ。だけど、待っててくれたんだな」

「と、当然だろう。約束もしたし、海斗は自分の認めた男だからな。立派な
一人の戦士を信じないなんて、自分の義に反する」

なんか偉い仰々しい言い方をしているが、クリスの目が心配そうに俺の身体
を彷徨っているのを見れば、強がりだってことが分かる。
女の子二人に心配かけちまうなんて、ほんと情けねぇな。

「ま、誰も怪我はないし、良かったんじゃねぇか」

「そうね」

「ああ、同意だ」

そんな感じで場も収まったところで、大体のクラスももう終わった

らしい。
やっと、この行事も終了か。

「おぬしら、大丈夫か」

「あ、じいちゃん」

「怪我はないか、妹よ」

「お姉さままで」

そこへやってきたのは、エロジジイ…じゃなかった学園長。
……こんな奴に長という接尾語をつけるのもどうだかな。
そうなると、学園か…。
うむ、それはそれで嫌だからやめておこう。

そして、それに続いてきたのはいつかの超危険人物。
いきなり廊下で襲われたことがある女だった。
もう接触したくはなかったんだけどなー…。

「なんだか不審者がいたという話だったのでな」

「大丈夫よ。誰も怪我とかはないわ」

ていうか、それもっと早い段階で気づくべきことだろ。
いや、俺にとっては好都合なんだけどさ。

…ん？
なんか妙にこのジジイ汗だくじゃないか？
加齢臭のうえに汗臭さなんか重なったら、いよいよ終わりだぞ。

あ、そういや…
この競技が始まる前にこの学園長もクマの着ぐるみの中に入るとか言ってたな。
なんでも、この隣の凶暴少女は強すぎるので、公平を期すために自分が戦うとかなんとか…。

それで白熱してしまったわけか。
いや、それで気づかなかったとか、学園責任者としてどうなんだ。

「でも、なんかその相手、川神院の技を時々使ってきて…」

「ふむ、川神院の技とな？」

「川神の技は門外不出だぞ。それで強さの純度を保ってきたというのに…」

「それが本当だとすれば結構な問題じゃな」

「やっぱりそうよね…」

「だがワン子、そんな強敵相手にどうやって太刀打ちしたんだ？クリスや京

と協力でもしたか？」

「え、それはかい…」

「あああーー！」

一子の言葉を大声で遮る。
絶対にこの女には言っちゃ駄目だろ！一子！

「勝手に帰ったんだよな、そうだよな？一子！」

「え？まぁ、最終的にはそうだったわね」

「…ほーう」

（最終的には、か。フフフ、後で根掘り葉掘り聞きだしてやろう）

「とにかく、怪我人がないのならよしとしようかのう。あとの詳しい話は帰
ってから聞かせてもらうとして、今は水上体育祭を終わらせるのが先じゃな」

そう学園長が締めくくり、その場は無事流れた。
はぁ、危なかった。
あの明らかに戦闘欲旺盛な女に目をつけられたら、俺に安息はなくなること
は目に見えている。

これで本当に長かった水上体育祭が終わった。

61話　「体育祭閉幕」（後書き）

ありがとうございました。
色々と海斗は大変ですね。
長く引っ張った体育祭も終了です。
次の話のネタが考えてないという…

62話　「特別集会」（前書き）

話の方向性に悩むこの頃。
やっぱ誰かと結ばれた方がいいんですかね。
ゴールがどこなんでしょうか状態です、はい。

62話　「特別集会」

水上体育祭から数日経ったある日。
いつもの廃ビル。
その秘密基地にいつもの9人が集まる。

小さい頃からの仲良し、風間ファミリーにとってなんら珍しいことではない。
暇があれば自然に皆が足を向けるし、昔から今まで変わらず週に一回の金曜
日には全員が集まっている。
だから、この秘密基地が埋まるのは週1ペースで起こることであり、なんに
も違和感なんてないのだ。

だが、いつもと違うことがある。
それは今日が金曜日ではないということ。
別に金曜以外にメンバーが欠けることなく揃うことだってある。

けれども、それが日常茶飯事というわけではない。
各々にそれぞれの用事があり、皆かんぺきにはなかなか集まれない。
だからこそ、ファミリーの習慣として週に一回集まる日を設けているのだし、
しょっちゅうそんな機会があれば、そもそも金曜集会に限定する必要はない
のだ。

それが今日は全員が揃っている。
その意味するところ、緊急の事態があるということだ。

「今日は急にだったけど、集まってくれてありがとう」

召集をかけたのはファミリーの頭脳担当、直江大和である。
ソファに座ったままで姿勢をただし、話をする態勢へと移行する。
ファミリーの皆にしても軍師の突然の招集だ。
どんな内容かと、大和に注目が集まる。

「話はこないだの水上体育祭の最後の競技であったハプニングについてだ」

「あー、あの不審者が来たやつね」

実際に戦った一子がいちはやく反応する。

「ああ、ちょっと気になったからな。あの強さと異常な感じ、ワン子とかクリスも違和感を感じたっていうしちょっと調べてみたんだ」

「調べたって、あいつらをか？」

クリスが問う。

「ですが、片方は着ぐるみから姿を見せてないんですよね」

「そうだよな、後から来た奴は俺様のように筋肉質の男だったが」

まゆっちもその話は後から聞いたようだった。
ガクトも自分の見たままを話す。

「ああ、だからピンポイントに探ったわけじゃない。このところ、同じように不審者が現れたとかがないかという大まかなもんだ。俺の人脈を使って、色々な人から話を聞いてみたり、モロにネットを使って最近の流れも調べてもらった」

「うん、掲示板とかは結構そういうのすぐに集まるしね」

「それで分かったことはあるのか？」

キャップこと風間翔一が確認をとる。
とはいっても、こんな確認は形式上のもの。
何かが分かったから、こうしてファミリーが集められたのだ。

「まあな。ちょっとゲンさんに話聞いてたときに気になる情報を手に入れたから、モロに詳しく調べてもらった」

「タッちゃんに？」

「まあ色々分かったんだが、まずはこれを見てくれ」

そう言って、大和が机の上に何かを置く。
それは袋に詰められた白い粉。
流石に誰もコーヒーに入れる砂糖などと安易なことは思えなかった。
狭い秘密基地の一室を支配する空気となによりもそのいかにもな外観がそれ
をさせなかったのだ。
まさにドラマなどで船で秘密裏に運ばれているような物を想起させる。

「それってもしかして…」

「今親不孝通りを中心に川神に出回っている“ユートピア”っていう薬物だ。」

「ユートピア…」

「その名の通り、理想郷つまりは気分を高揚させるタイプのありがちな薬物
だ。実際に若い学生とかの弱みや悩みにつけこんで、どんどん広まっている
らしい。被害者も何人か出てるって話だ」

「そんな！完全な悪ではないか、即刻取り締まるべきだろう！」

明らかに義に反する行為に怒りを抑えられなかったのだろう。
クリスがその場で思わず立ち上がる。

「まあ気持ちは分かるが、落ち着けクリス。こいつの厄介なことは薬自体は
違法でもなんでもない普通の治療に使われているものだってことだ。
当然、
売り買いは禁止されてるが、それ自体にはなんの犯罪性もないわけだ」

「く、だからといって…！」

「無駄だよ。相手だって合法を盾にして、それを扱っているんだろうし」

認めきれないクリスを京が諭す。

「まあ今のところ俺たちがすべきことは自衛だけだ」

「歯がゆいな」

「ですが、呼びかけなど私たちに出来ることはまだまだありますね」

「おう、いいこと言ったぜ。まゆっち」

「それで本題のあの二人についてなんだが、そのユートピアっていう薬の流
通に伴って、親不孝通りとかの不良たちの動きが活発化しているんだ。そう
いった勢力の1つだろうくらいにしか分からない状況だな。もっとも、それ
すら推測の域を出ないんだけどな」

「あの実力がゴロゴロいるとは考えたくないな」

「まぁでも、一度撃退出来たんだしな」

「ん～、あれはほとんど海斗一人の力だったし…」

「やっぱりアイツ1人で対応しきったんだな。つくづく面白い」

百代はあの日の夕方に一子から話を聞きだし、興味津々の様子だった。
今も目をぎらつかせ、髪の毛も気のせいか逆立っている。

「姉さん、あんまり暴れないでくれよ」

「あぁ、分かった分かった」

「まあ、ネットや人づての情報はこれからも集めていくし、常に万全の用意
はしておくがな…」

そこで大和は言葉を区切る。
そして、リセットするように息をしたあと、また話を続ける。

「最後にもう1つ大事なことだ。“常夜”っていうのは知ってるよな」

「それって親不孝通りの中にあるっていう犯罪者や脱獄者の吹き溜まりっていうアレか？」

「でも、それって都市伝説だろ？」

「そう、一時期ネットでも話題になったよくある噂ってやつだった。けど、また今になってあるっていう話が囁かれてる。それも今回のことで活発化してるっていうおまけつきでな」

「本当に掲示板でも今あちこちで騒がれてるんだよ。面白半分冗談半分っていうのがほとんどだけど、肯定的な変なグループまで形成されてて、正直危ない状況だよ」

「モロの言ったとおりだ。事態が見通せないだけにどう危険だとかは言えないが、注意は各々で払ってくれ。親不孝通りも出来れば、避けてほ

しいとこ
ろなんだが、ここだけは絶対に近づくな。場所も詳しいことは分か
らないん
だが、不用意に路地裏とか入っていかないように。噂では地下って
言う説も
あるんだが、何が真実かなんて分からないからな」

その言葉にファミリーのほとんどが頷く。

「姉さんもだ。姉さんが無敵なのは承知だけど、そもそも犯罪者っ
ていうの
はベクトルが違う。どんな手を使ってくるかも見当がつかないし、
勝手な行
動は控えてくれよ」

「ああ、分かっている。弟がそこまで言うんだから変な真似はしな
いさ」

百代も頷く。

「じゃ、それだけだ。皆気をつけてくれ」

その言葉で特別集会はしめられた。

62話　「特別集会」（後書き）

ありがとうございました。
リュウゼツランをこのまま入れようかどうしようか。
そんなとこですが。
まあ頑張ります。

63話　「一子の特別集会」（前書き）

ギリギリ間に合いました。
まだ続けたい、毎日更新。
今回の話はいつか書こうと思ってました

63話　「一子の特別集会」

―特別集会終了後

「まぁ、重い話はこれくらいにしようか」

空気を変えるように大和が言う。
警戒をしすぎても何事も上手くいかない。

「そうだな、せっかく全員集まってるんだし出前でも頼もうぜ！この前、バイトで割引券もらったからな」

「おぉー、いいなーキャップ」

「じゃ、ボクが電話で頼むよ」

皆さっきまでの感じを取り払うように動いていく。
すぐに部屋が盛り上がった明るい雰囲気に包まれる。
これが風間ファミリー。
様々な出来事を通じて築かれた固い絆あってこそである。

「今夜はぱーっと寿司パーティだな」

「モロロなんかはガリ担当だな」

「なんでさ！？」

百代の突飛な言動にモロのツッコミが炸裂する。

「いやー、なんか影が薄いとことか親近感湧くんじゃないか」

「そんなところでガリにシンパシー感じたくないよ！」

「モロにぴったりじゃねぇか」

からかう百代にガクトも笑いながら便乗してくる。

「じゃあ、ガクトはバラン担当でいいよな」

「もはや食べ物でもねぇ！？」

「ちなみにモモ先輩、理由は？」

「なんかガクトのツンツンした髪型と相性よさそうだろう」

「しかも超適当！」

なにやらコントまで始まっている。

だんだんといつもの騒がしさが戻ってきた。

Ｓｉｄｅ　大和

良かった。
ちょっと重い話だったんだが、やっぱりファミリーだな。
もう日常の風景に戻っている。

京なんかは読書をしているし、クリスとまゆっちは雑談でもしているのだろうか。
あそこの三人はコントを繰り広げてるし、まったく平和だ。

そんなことを考えていると、不意に自分のシャツが引っ張られているような感覚があった。
手首のあたりを見てみると、そこには隣に座っているワン子の手が伸びていて、くいくいと主張をしていた。

「ん、どうした？」

「しーっ！」

ワン子は自分の口に指を立て、静かにするように促してくる。

んー？
どうやら周りには気づかれたくないようだ。

「大和、ちょっと来て」

「うん、いいけど」

内緒の話でもあるのだろうか。
よく分からなかったが、とりあえず従うことにした。

そして行き着いた先は建物の屋上だった。
いやまあ、基地内からの移動先なんて限られてるから、容易に予想できたんだけどな。

「ここでいいわ。ちょっと話があるの」

「俺にか？なんだ？」

やっぱり秘密話か？
わざわざファミリーに聞かれないところまで移動しての話。
その内容ってなんだ？

「え、えっと……あのね。　……んぅ、いざ言うとなると…」

なんかブツブツと話し出した。
ていうか、どもりすぎだろ。

ワン子のほうをもう一度見直してみる。
その顔は一目瞭然なほど紅潮しており、瞳はよく見れば潤んでいる。
唇もきゅっと結んでいて、何よりその顔は真剣だ。

これはまるであれじゃないか。
好きな人に告白をする前の女の子。
何も知らない奴ならば、この姿を見るだけで淡い期待を抱いてしまうだろう。
そんな様子だった。

だが、俺は知っている。
目の前の少女は恋はしているが、その対象は俺ではない。
流川海斗、その男に一直線である。

えーと、てことはこの様子が意味するところは…

「あのね、大和！アタシ好きな人ができたの」

「・・・・・・」

「それでその相手っていうのがね。海斗なの…」

「いや、知ってるけど」

「えぇ！？」

いやいや、“えぇ!?”ではなくね。
こちらからしてみれば、今更って感じなんだが。
あんだけ俺たちに海斗との出来事を楽しそうに話していたうえ、態度にも露
骨に表れていたのに、逆に今まで隠しているつもりでいたのだろうか。

「アタシって大和に話したことあったっけ!?」

「ワン子の日頃の接し方を見てれば、バレバレだって」

「バレバレ!?そんなにアタシって分かりやすかったの?」

「そりゃもう」

「うわぁぁぁ、どうしよう。じゃあ、海斗にもばれちゃってるのかな」

「いや、その心配はないかと。あいつ相当鈍感だし」

「…言われてみれば、そうかも」

二人の間に沈黙が流れる。
今この場にいなくとも干渉してくる。
それほどの鈍感さだということだろう。
ワン子も苦労しそうだ。

「それよりなんで今更言おうと思ったんだ？」

「だって、このままじゃ全然進展しなさそうっていうか。アタシ的に結構冒険してるつもりなのに素でスルーされちゃうし…」

「あ～…」

前言撤回。
まさに苦労真っ最中でした。
ｍａｙではなく、現在進行形なのな。

「だから、大和なら頭良くてそういうの頼りになりそうだしと思って…」

「大体分かった」

「うん、それでどうかな？」

俺に相談するほど悩んでんだな。
にしても、相手は結構な強敵だぞ。
そうだなぁ…

「そういや、ワン子。水族館のペアチケットもらったんだろ」

「うん、ファミリーの仲間と楽しんでこいって」

「それでデートにでも誘ったらどうだ」

「で、デート！？」

「水族館だったら断られることもないだろうしな。ファミリーの皆は都合がつかなかったとか何とでも言って、デートに誘え。それでデート中とか良い雰囲気になったら告白しちまえ」

「こ、告白！？」

いや、同じリアクションで鸚鵡返しされても…

「確かにいきなりハードルが高いのは分かる。けど、正直ストレートに気持ちを伝える以外にあの鈍感男に好意に気づいてもらう術はないと思うぞ」

「さすが大和。無駄な説得力があるわ」

「無駄は余計だ。ともかく、真正面からぶつかることだな。そのやり方のほうがワン子に合ってるような気もするしさ」

「うぅ…でも、やっぱり…」

「まあ、それは最終的な話だ。すぐに告白しなきゃ駄目なんてことはない。
とりあえず、今回はそれでデートに誘うってことを頑張ってみな」

「わ、分かったわ。何事も勇往邁進よね」

「おう、応援してるからな」

「うん！ありがと、大和」

その後、ワン子は話したことで安心したのか、ファミリーの誰よりも寿司を
食べていた。
幸せに満ちた表情で。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

63話　「一子の特別集会」（後書き）

ありがとうございました。
なんか一子がメインヒロイン的な感じになってますね。
いや、自分としては構わないんですが、
ゴールが見通せてないので、はい。

６４話　「由紀江の特別集会」（前書き）

前回まゆっち空気とか言われてしまったので、
こうしましたよ！
これで空気なんていわせない。

６４話　「由紀江の特別集会」

Ｓｉｄｅ　大和

皆で寿司も食べ終わった頃。
すぐに帰ることもせず、食休みがてらダラダラしている。
さっきまで元気にバクバクと寿司を口に放り込んでいたワン子も、今はソファにその身を横たわらせてスヤスヤと夢の世界へおやすみ中だ。
俺も携帯チェックでもしながら、ゆっくりしてるか…。
そんなことを考えていたときだった。

「大和さん、ちょっとよろしいですか？」

「んー？」

携帯を片手で操作しながら、その声の方に顔を向ける。
そこにいたのはまゆっちだった。
敬語使っている時点でまあ特定できたんだが…

「俺になんか用なのか？」

「あの、少しお時間をいただきたく…あうあう」

「いいよ。なに？」

「えっと、ここではちょっと…。少し移動してもよろしいですか？」

「構わないけど、話があるってことでいいのか？」

「は、はい！」

わざわざファミリーに聞かれないところまで移動しての話。
あれ？
なんかついさっきもこんなことがあったような…

デジャヴにも程があるだろ。
ワン子のときと全く同じ流れじゃないか。
いや、まさかな…

「じゃあ、こちらに付いてきていただけますか」

「わかった」

頭に浮かんだアニメのような展開を否定しつつ、俺はまゆっちの後についてった。

辿り着いたのは屋上。
いや、もう歩いてる途中で分かってたけどね。

これじゃあ本当にまるっきりワン子と同じじゃないか。
行くところが限られているのは承知のうえだが、恋する乙女は屋上に向かう
性質でもあるのだろうか。
思わずそんなことを疑ってしまうようなシンクロぶりだった。

「あのですね…大和さん」

「うん」

目的地まで連れてきて口ごもるまゆっち。
その顔は紅潮して……って、もうええっての。
大体、続く言葉は予想できる。

「その…大和さんは願い事がひとつだけ叶うとしたら、何をお願いしますか？」

「は？」

だが、まゆっちの口を次いで出てきた台詞はそれを外れたものだった。
願い事？
若干話の流れが見えないんだが…

「願い事か？」

「はい、そうです」

「んー、急だからあんま考えられないけど…、何でも良いならパッと思いつくのはやっぱお金かな。ヤドカリのえさ代とかもそうだけど、あっても困らないものだしなぁ」

「お金ですか…」

ん？

なんだか欲しかった回答が得られなかったような顔だ。

なんか間違ったか、俺。

「あ！じゃあ、私にお願いするとしたらどうですか」

「まゆっちに？」

まゆっちにお願いを叶えてもらう？

確かにそれならお金なんてもらえないけど…

待て待て。

その前にこの質問には何の意図があるんだ。

俺が予想してたものとは…

あ…
そうだよ。
俺が予想してたのも、そもそもまゆっちの挙動がワン子とかぶっていたから
だ。
だが、いざ聞いてみれば見当違いな質問。
そういう方面の要素がどこかへ行ってしまった。

だけど、これなら全部つながる。

「もしかして、まゆっち…。お願いってバトルロワイヤルの優勝賞品の奴？」

「ぎく！」

「流川に対して何をお願いしたらいいのか分からなかったから、参考に聞きたかったってこと？」

「ぎくぎく！」

あー、全部合点がいった。
結局、まゆっちは水上体育祭のときからずっと迷ってたんだな。
ていうか、やっぱり恋の話か。
屋上おそるべし。

「はぁ…」

「あのあの、私は何をお願いすればいいんでしょうか?どこまでが許される
範囲なのかも分かりませんし…」

俺はまゆっちの気持ちも知っている。
理由はワン子に同じ。
バレバレです。

ワン子にも頑張ってもらいたいが、別にどちらかを贔屓しようなんて思って
ない。
まゆっちにも仲間として、頑張って欲しいしな。
だから、俺がかけてやるべき言葉は…

「彼女にしてください、とかは?」

「は!?な…!?」

瞬間、まゆっちの顔は沸騰した。

「かかかかか彼女だななななんて、そんな私ごときが、そんな…」

「何でもいいんだったら、チャンスじゃないか」

「私が海斗さんの彼女…」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

「由紀江…」

「か、海斗さん。駄目です、そんな私なんかが海斗さんに抱きしめてもらう
なんて、ふさわしくないです」

「自分の彼女を抱きしめるくらい普通だろ」

「海斗さん…」

「それに由紀江はもっと自信を持っていいぞ。十分可愛い」

「そ、そんな恥ずかしいです」

「分かったらこのまま俺の腕の中にいてくれ、由紀江」

「…はい。あったかいです、海斗さん」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

「ほわぁぁぁぁぁ」

なんか、まゆっちがどこかへ旅立ってしまっている。
恋人関係の想像だけで帰ってこれなくなっているのだろうか。
相当免疫がないな。

「おーい、まゆっち！」

「は、はい！！あ…、すみませんでした。大和さん」

「いや、元はといえば俺のせいもあるから良いんだけどさ」

突如、幸せいっぱいだった顔を引き締める。

「でも、やっぱりそういうのは自分の力でどうにかすることだと思います」

「そうだな。そうすると…ふりだしか」

「あう、すみません」

「まぁでも…」

俺もあいつのことを最初のような印象でとらえているわけではない。
なんとなく関わっていくなかで分かっていった。
ワン子やまゆっち、クリスなどを惹きつける人間性みたいなものが。

「ゆっくり考えればいいんじゃないか？約束を時間切れにするような奴でもないだろ」

「あ…。はい、そうですね」

そう言って笑う。
良かった、役に立てたみたいだ。

誰を応援するとかではない。
俺はファミリーの仲間が困っていたら手を差し伸べる。
それが俺に出来ることであり、したいことだ。

今日は一子に続き、まゆっちと個人面談みたいになってしまったな。
でも、なんていうかあれだ。

―恋する乙女は強い。

そんなことを思わされた一日だった。

「あれ？え！というより、なんで大和さんが私の…その気持ちを知ってるんですか！？」

「・・・・・・」

恋する乙女は面倒くさい。

６４話　「由紀江の特別集会」（後書き）

ありがとうございました。
大和の立場を考えると大変ですね。
だけど皆に協力してあげるのは流石です。

65話　「厄介者」（前書き）

最近ねたがなくグダグダです。
それでも感想をくださっている方ありがとうございます。
√について色々考えたんですが、物語の1つの終わりの形として誰かと結ばれたエンドを書き、その後でIFルートっぽい分岐でそれとは別のヒロインについても書こうかと思ってます。
今の説明でよく分かんなかった人もいると思いますので、正式に考えがまとまったら活動報告で書くと思います。

65話　「厄介者」

時刻は3時過ぎたころ。
教壇に立つ教師が話をしめくくる。

「では、ホームルームを終わる。気をつけて帰るように」

はぁー、やっと放課後である。
さてと、今日はどうするか。

「海斗～」

一子が近づいてきた。
なんか用でもあんのかな。

「あのね、海斗。この前の水上体育祭のことを大和が調べてたんだって」

「あの最後の競技か」

「うん。でね、大和が皆に呼びかけておけって言ってたんだけど、えーと…
“ゆーとぴあ”？みたいな悪いお薬が広まってるんだって」

「聞いたことないな」

「それに気をつけてだって」

「まぁ、クスリなんて興味ないし大丈夫だ」

わざわざ俺にも言ってくれるなんて、優しい奴だ。

「それとね、なんか親不孝通りの中にある“とこよ”ってとこには近づくなって言ってたわ」

「・・・・・・」

「海斗？」

「…あ、悪い。ボーッとしてた」

俺は笑う。
笑えているはずだ。

「もぉ、しっかりしてよね。危ないから近づいちゃだめなんだからね。いくら強いからって、そこには悪い人がいっぱいいるって大和も言ってたし」

「ああ、分かったって」

思わず顔を背けてしまう。
心から心配してくれてるのが分かる…

「あとね、全然関係ないんだけどもうひとつ話があって……。あのね、今度
ね、私と一緒に…デ、デ、デー…」

一子が何かを言いかけたところで…

「流川くーん、なんか廊下で呼んでるけど」

クラスメイトが俺を呼んだ。

「あ、分かった。じゃあ、ちょっとごめんな一子。呼ばれてるみたいだから
俺行くわ」

「あ…」

呼ばれてるなんて、正直どうでも良かった。
だが、今の俺にとっては好都合な口実だ。

これ以上この場にいること、というか一子と顔を突き合わせているのが、非
常に居心地の悪さを感じさせた。

なんか話があったようだが、今度聞くことにしよう。
一旦、気持ちをリセットさせたほうがいい。

そして、俺は足早に教室のドアに向かった。
ほんとナイスタイミングな救世主だな。
今の俺にとってはまるで天使のような感じだ。

そして、廊下に出たところでそれらしき人物発見。

「悪いな、待たせて。俺を呼んだってのは…」

「そうだ、私だ」

…そこには悪魔が立っていた。

いや、少し状況を整理しようか。
微妙な空気のところにクラスメイトの助けの声。
呼んでいる奴がいるというので、廊下に出てみたらいたのはあの暴
力少女。
一子の姉なんだっけ？
それだったら、川神なんとかだね。

…おい！

いたたまれない状況からの脱出は望んだにしても、誰も状況を悪化させるこ
となんて頼んだ覚えはないぞ。
とにかく、こいつにだけは捕まるのはまずい。
流川海斗、離脱を試みる。

「なんか人違いっぽいから、失礼」

「ちょっと待て」

ガッシリと肩を掴まれた。
ていうか、もはや女子のパワーではない。
逃がす気は微塵もないようだ。

今、振り払って全速力で逃げることも可能だ。
だが、そんなことをすれば相手がますますやる気になってしまうのは、火を
見るより明らかだ。

よって結論。
なす術なし。

「流川海斗、私はお前に用があるんだ」

「はぁ…なに？」

「お前が水上体育祭で不審者二人を退治したんだってな。その相手は川神院
の技を使うほどの実力者だっていうのにたった一人で撃退したらしいじゃな
いか」

「そんな記憶は残ってないが」

「あとでワン子に聞いたら、嬉しそーに事細かに話してくれたぞ。禍々しい
気を持った強敵を圧倒してたってな」

「・・・・・・」

おい、一子！
何話しちゃってるんだよ。
あの怪物退治のあとのやりとりで察してくれてるもんだと思っていたのに。
これじゃ、いくら弁解したところで怪しくなるだけだ。

「いや、あれは運が良かったのもあるし。弱点とかが分かったしな」

「ほう、学園が用意した着ぐるみのどこに弱点があったのか、ぜひ教えてほ
しいんだが」

食いついてくるなよ。

でっちあげに決まってんだから。

「それを説明するのはフェルマーの最終定理を証明するくらい、面倒なこと
になるから一言では言えん」

「何故隠す？」

「あ？」

「お前がある程度強いことは誰もが思っているところだろうが、私には分か
る。お前はまだまだ何かを隠し持っている。そして、その強さを絶対に誇示
したりはしようとしない」

「買いかぶりすぎだっての」

「・・・・・・」

全く信用していない目で俺を見てくる。
やっぱ実力者はごまかせないもんかね。

「ところで用件はなんなんだ？」

どう言ったところでこいつには俺の言葉は嘘になり続けるだろう。

そこで俺は強引に話題を変えた。

「勿論、決闘…」

「却下だ」

「冗談ではないが、冗談だ。まあ、そういうと思ったからな。私もお前とは
本気でやり合いたいからな。今のところは無理強いはしない。それほど、強
いと見ているのだがな」

「で？本当の用件は…」

「ああ、今回は依頼をしにきたんだ。お前やっているだろう？」

「あー…」

確かにストーカー以来、依頼は俺の収入源の一つとなっている。
手軽であるうえに、儲けも結構なもんだしな。

実際、最近は大和に報酬の食券を換金してもらっている。
需要はそれなりにあるらしい。
いやはや、顔が広いってことは凄いな。
儲けの二割はやっているが、現金にしてもらうことを考えれば、特に不満は
ない。

「それで依頼の内容は？」

一応聞いてみるだけ聞いてみよう。

「それはズバリ…川神院僧の修行相手だ」

「は？」

放課後の廊下には驚く男と指差す女の姿があった。

65話　「厄介者」（後書き）

ありがとうございました。
遂に百代がアタックしてきました。
だけどやはりストレートに戦うのは無理ですよね。
ちなみに大和とは体育祭のあとに話すようになりました。

６６話　「川神院へ」（前書き）

毎日更新（時間バラバラ）でおなじみとなってきました。
だって、書けないんですもん。
すみません、ほんとに。

66話　「川神院へ」

「お前に川神院僧の修行相手を依頼したい」

「いや、断るから」

背を向けて、その場から去る。

ガッ

「ぐっ…」

案の定、引きとめられた。
しかも、襟首を引っ張りやがったぞ、こいつは。
服が伸びるだろうが。

「おい、こっちは頼んでるんだぞ」

「いや俺だって、仕事を選り好みくらいするから。大体、戦う相手が変わっ
ただけで決闘とベクトルが全く変わってないんだよ」

「く…我が儘なやつめ」

「どっちがだ」

「なら、奥の手だ」

「奥の手？」

「これを見ろ」

そうして何かを取りだす。
その見慣れたフォルムは…

「フフフ、これが何か分かるか」

「それは…！」

「そうだ。これは“勤労にゃんこ”のシークレット、“黒子にゃんこ”だ。
聞くところによるとお前、このシリーズを集めてるそうじゃないか」

全身黒い布で覆われつつも、愛くるしい瞳がのぞいている。
黒子というチョイス自体もレアだしな。
ていうか、可愛すぎだろ。
流石シークレット、恐ろしい破壊力だ。

「お前どうやって…。それ超レア物で俺なんていくら買っても出なかったんだぞ」

「ウチのファミリーのキャップはありえないほど強運の持ち主でな。一発で引き当てたぞ」

「まじかよ…」

「ほら、依頼を受けてくれるなら、これをやろう」

「分かった。行くだけ行こう」

それだけの見返りがあるなら、やぶさかではない。
もう人前でも何回も戦っているし、今更それ自体を隠すってのも無意味だ。
それにこれでこの女の気が晴れるなら、直接やりあうよりはよっぽど良い条件で済ませられるしな。
とりあえずは様子見だ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

川神院の前までやってきた。
ていうか、そんな気にしたことなかったがデカイ建物だな。
何かの本に観光地にもなってるって書いてあったしな。

川神の1つの象徴みたいなもんなんだろうな。

「おかえりなさい、百代殿」

「ああ」

「後ろの方は？」

「今日の組み手の相手をしてくれる奴だ」

「はぁ……、その方がですか」

俺のことを一瞥した修行僧の顔は明らかに曇っていた。
あいつの心の声を表すとしたならば…
“こんな弱そうな奴が修行相手になるのか”ってとこだろう。

「まあ、詳しい話は後ですることにして、とりあえず武道場に集まっていてくれ」

「はい、分かりました」

修行僧は下がるときに一度振り返り、再び俺の顔を見た。
その顔はどこかやはり釈然としない感じだった。

………………………………………………………………

で、武道場。

「本当に俺が相手しなきゃいけないのか…」

もう逃げられない戦いになってしまった。
ついさっき、武道場に来る前に“前払いだ”とか言いながら、にこやかに黒子にゃんこを渡してきやがった。
まるで“ここまで来たら、戦えよ”と言わんばかりに。
まあ、体動かすのは嫌いじゃないけどな。

「流川。お前本当に武道着に着替えなくてよかったのか」
「ああ、制服のままで構わん」

着替えてたら、すぐに帰れなくなるしな。
終わったらすぐさま帰るぞ、報酬ももらったことだしな。
すると、さっきの修行僧が入ってきた。

いよいよか…

ん？

門の前にいた修行僧に続いて、ぞろぞろと同じような奴が入ってくる。

その数はニ、三なんてものじゃない。

点呼をとるのも面倒くさそうな人数だぞ、おい。

「おい、このギャラリーはなんだ」

「何を言ってる、それがお前の対戦相手だ」

「いや、だからその対戦相手以外は誰だっ…」

え？

待てよ、対戦相手がこれ？

落ち着け、早計だ。

まずは確認をとろう、そうだ、自己解決はよくない。

「えっと…俺の対戦相手って何人だ？」

「だから、ここにいる百人だ」

「百人！？」

多いとは思ったが、そうか百人いるのか。

いや、そうかじゃねぇよ。
これが冷静でいられるかっての。

「なんで百人なんだよ」

「よく言うだろ。百人組み手って」

「日常生活で使うような感じで言うんじゃねぇ。そんなの特殊な状況じゃな
いと口から発せられないだろ」

こいつがやる前に報酬を渡してきた理由はこれか。
まあ、やる前に知ったら帰ってもおかしくないレベルだよ。
流石に俺もこれは予想外だったしな。

そのとき、今まで黙っていた修行僧たちの一人が口を開く。

「百代殿、本当にこの一般の方と我々が戦うのですか」

いや、お前は良い質問をしてるぞ。
一般人相手にすることじゃないからね、これ。
こういうのはあそこで笑ってる戦闘狂少女みたいな者専用のトレーニングメ
ニューだろうよ。

「ああ、確かにこいつは武道をやってはいないが、腕っ節は私が保証しよう。
それこそお前らなんて届かないほどだと思っている」

「おい、お前…」

川神百代がその言葉を放った瞬間、修行僧たちの雰囲気が変わった。
さっきまで不服な様子だったのに、今はやる気にたぎっている。
というか、怒り…？

いや、そりゃそうだろ。
真面目に修行積んでる奴らが一般の奴に負けてるって言われてんだからな。
しかも、実力者の言葉だけに無視できるものでもない。
というか、相当なダメージだろうな、ここにいる全員認めているだろうし。

「分かりました。そこまで言われるならば、我ら１００人全身全霊をかけて
お相手いたしましょう」

「フッフッフ、面白くなりそうだ」

「…まじで帰りたい」

６６話　「川神院へ」（後書き）

ありがとうございました。
勤労にゃんこに関しては３７話参照です。
というかキャップの運は一種のチートだと思います。

67話　「百人組み手」（前書き）

意外にもまだもっている毎日更新。
なかなかしぶとい…
いや、いいことなんですがね（笑

67話　「百人組み手」

「これから川神院僧の修行として、模擬戦闘を行ってもらう。武器の使用は
銃、機械類、刃物、その他危険物は禁止だが、基本それ以外のルールは川神
院の方式にのっとり、なんでもありとする。敗北条件はギブアップもしくは
決められたリングから出ること、あとは戦闘不能つまりは気絶だ。ただし、
流川はギブアップ禁止とする」

「おい！」

「ん？なんか問題あるか」

「大有りだ。俺の安全は何が守ってくれるんだよ」

「だって、そうでもしないとお前わざとピンチとかになりそうだからな」

もうなんていうか、今までの行いの報いだろうな。
警戒心が半端ない。
徹底的に俺が逃げる選択肢を潰そうとしている。

「安心しろ。審判は私が務めるのだが、私から見て明らかに命や大怪我のお

それがあると判断すれば、その時点で止めてやる。わざと負けるようなこと
だけはするなよということだ」

「はぁ、それはそれは」

つまり、多少の怪我だったりしたら止めないってことね。
ほんと、自分基準で考えないで欲しい。

「では、始めようか。両者準備はいいか」

まあ、しゃあないわな。

「俺はいつでもいいぞ」

「こちらも準備できました」

相手は１００人。
さっきフィールドアウトが負けだと言っていたが、１０１人のファイターが
試合をするだけに、リングは川神院の特別大きい闘技場いっぱいに設定され
ており、これで場外なんて有り得るのかというくらいだった。
ほとんどの僧は木製の武器やレプリカの武器を持っていて、気合い

が入りま
くっている。
対して、俺の手が掴んでいるのは空気くらいなもん。
いわゆる手ぶらという奴だね、うん。

…死ぬんじゃねぇか、俺。

「…はじめ！」

ヒュッ

「おっと…！」

息をつく間もなかった。
開始の合図がされた途端に、棍を持った二人の修行僧が同時におそいかかっ
てきたのだ。
しかも、様子見などではなく、連携の取れたしっかりとした攻撃。

相手はいうなればプロ、でもって俺はそういう見方でいうなら素人。
それでなくても、俺は初見の奴らには弱そうに思われる傾向にあるので、こ
んなに開始早々とばしてくるとは考えていなかった。

最初からツーマンセルなんて、リアルな作戦が垣間見える人数だな。
本気の本気じゃねぇかよ。

それだけあの女の言葉が重かったってことだろうな。
ほんと迷惑な挑発してくれたもんだね。

そうこうしてる間にも、相手のコンビネーション攻撃が続く。
本当に何度も修行をしているのだろう。
まさに阿吽の呼吸で二本の棍とは思えない。

「せい！」

「…っ！」

反射的にガードを行うしかなかった。
その流れのままにバックステップで距離をとる。

危ない危ない。
避けたところを的確に狙う追撃は全てかわすのは至難の業だった。
加えて一撃一撃が洗練されているときた。
こりゃ前途多難な戦いだわ。

ちらりと審判でもある女の方を見る。
俺をこんな状況に陥れた張本人はにやにや笑っていやがった。
目を細めるな、口角をあげるな。
すると、その口がおもむろに開き…

「言っておくが、時間切れはないからな」

…悪魔が。
腹たつなー、今すぐスリッパかなんかでひっぱたきたい。

でも、流石に見抜かれてるな。
時間切れないなら、かわしてやりすごそうの作戦はボツか。
じゃあ、こっちも頑張ろうかね。
なんせ９８人待ちだから。

「やはり、喧嘩が強いといっても、所詮は一般人。あなたも巻き込まれた側
なんでしょう。怪我をする前にやめたらどうですか」

「あんたのとこの嬢ちゃんがそれを禁止してんだよ」

「百代殿には私たちからもお話しして差し上げましょう。一対一も本来成立
しないでしょうにましてや百人組み手など、素人の方に課すようなものでは
ありません」

「あぁ、できればそうしたいんだが、あの女が意見を曲げるとも思えないし
何より前払いされちゃってるからね。それにさ、確かにお前らは来る日も来
る日も鍛錬して、相当実力がついてんのも分かってんだろうな」

「は、はぁ…」

いきなり何をという感じなんだろう。
そんな相手は無視して、“けどさ…”と言葉を続ける。

「自信と慢心は違うぜ」

俺もモチベーションあげないとやってられないからね。
ちょっとは真面目にやろう。

言い終わると同時にさっき開いた距離を一気に詰める。
こちらが殴るモーションをとると、左右の二人が棍を俺に向かって伸ばしてくる。
その二本を掴み、勢いそのままにクロスさせて、互いの僧の顎を打ち抜いた。
二人の修行僧は短く声を上げたのみで、その場に崩れ落ちた。

…これで二人気絶だ。

「フフフ、瞬殺とは。やはりこうでなくてはな」

あの女はとても満足な展開なのだろうが、こちらとしては迷惑でしかない。
そんな過度な期待はしないでほしいんだけど…。

僧たちも唖然として固まっている。

それはそうだろうな。
やる気を出していたといっても、それは別に俺に対する評価が変わったこと
を意味してたわけではない。
どのみち俺はなめられていた。

相手側もこの転がっている二人で仕留めようと思ってたことだろう。
素人相手にひけをとるなんて考えないよな。
だが、結果はこうだ。

さてと、こっからの戦いが本番だな。

67話　「百人組み手」（後書き）

ありがとうございました
遂に激突、早速2人を撃破です。
いやなんか風船とかつけてそれ割れたらアウトとかも
考えたんですが、海斗なら気絶いけるっしょということで
これになりました（笑

68話　「奥の手」（前書き）

いきなり始まります。
先に謝っておきます、すみません（笑
しかし、これが全力です。

68話　「奥の手」

驚きを隠せない修行僧たち。
こっからが辛いとこだ。

あの二人の撃破は威圧にもなったが、同時に起爆剤だ。
川神院の者として、負けるわけにはいかないだろう。

「くっ、五人部隊前へ」

撃破に驚いてはいたが、すぐに次の動きへシフトする。
次は五人組か。
内訳としては、木槌二人に、ヌンチャク二人、それと拳が一人だ。

ちょっとキツイな。
もう相手も本気だろうし。
五人の連携は流石に避けられる気がしない。

「覚悟！」

俺は初手の攻撃をかわし、躊躇なく木槌を持った相手に回し蹴りをきめる。
そして木槌を奪い、分解したヘッドの部分をもう一人の木槌使いに当てる。

続けざまにヌンチャクで襲い掛かってきた二人を残った棒を使って、確実に
意識を刈り取る攻撃を行う。
途中で近づいてきたもう一人にも、腹部に一撃お見舞いすると倒れてくれた。

「休息を与えるな！」

続けざまに新たな１２人が来るが、数を増やせば有利になるとは限らない。
肩身が狭くなれば、クリティカルは逆にやりやすい。
ダメージはなくとも、顎にかすりでもすれば衝撃を与えて気絶させられる。
棒のリーチはありがたい。

この間、わずか数秒。
俺の周りには計１９人が倒れ伏していた。

「ふぅ」

改めて前を見る。
ん？なんか人数減ってないか。
俺が倒した数より明らかに…というか

「…！」

…やられた。
五人との戦いの短い間に仕込まれた。
俺の注意が逸れた瞬間を狙って…。

結界にはめられた。
内側にいるのは俺ともう一人の僧だけ。
嫌な予感しかしない。

「私は“力の譲渡”によって、今６５人分の強さを誇っています。
長くはも
たない奥義ですので、逃げる場所も結界で塞がせていただきました」

なるほど、結界を形成しているのが１６人、俺が倒したのが１９人。
残り全員の強さじゃねぇか。
というか、結界とか真剣すぎだろ。
それにしても逃がさないようにってことなのか、この結界は。

「手加減は出来ません故、ピンチになる前のギブアップをお勧めします」

「な！？」

答える間もなかった。
恐ろしい速さで俺は頬を殴り飛ばされていた。

そのまま結界の壁面に背中から突っ込む。

これは本格的にやべぇ…。

６５人が１人に減ったと人数的にはかなり手間は減ったが、それが１人に結
集しているのはまずいだろ。
まあ厳密にはそこまでシンクロはしないだろうが、強大であることに変わり
ない。

「今ので気絶しないとはタフなお方だ」

また動く。
あの一撃がもう一度来る…。
せめて、死なないことを願おう。

だが、相手が殴ろうとしてきたのは俺の胸部。
それはまずい！

ドンッ

空気が震えるような重い一撃が響いた。

Ｓｉｄｅ　百代

目の前で起こっている衝撃の光景。
さっきまでピンチだった流川海斗の拳が修行僧の腹の中央をとらえて、突き
刺さっている。
今まさに殴られようとしていたときの反撃。
正直、私から見ても驚異的なスピードであった。
急遽カウンターをすることを決めたような…。

というか、修行僧がここまで本気にさせられるとは…。
結界にとどまらず、川神僧の奥義まで出させるくらいだからなぁ。
術者への負担、精神の調和、様々な難題をクリアしての奥義、“力の譲渡”。

本当の意味で６５対１を繰り広げる、自称一般人。
どこまでも楽しませてくれる強さだ、ゾクゾクする。

…だが、そんな興奮も一瞬吹き飛ぶような驚きだった。
あまりにもその驚きが度を越えていて、寒気すらしたもんだ。
そう、私が衝撃の光景と言っているのはそんな素早い逆転のカウンター程度
のことではない。

―川神流・蠍撃ち
紛れもなく、今放たれたのはそれだった。
相手の内臓を正拳でとらえて、衝撃を打ち込む川神院門外不出の奥義の１つ。
それを土壇場のカウンターの一瞬でこなした。

何故あいつが使えるのか。
そんなのは恐らく可能性としては大体見当がつく。

仮にも武道の最高峰である川神院の人間の攻撃を軽々かわす回避力。
そして、キャップとの川神戦役で見せた京の弓術の完全コピー。
他にも色々な場面でその片鱗を見せていた。
あいつは圧倒的に“眼”がいい。

そして、あの技はタッグマッチでワン子が使っていた。
そのときの一回きりで覚えたのだろう。
しかも、それはワン子のものよりも鋭くキレがあり、完全に自分のものとして扱っていた。

本当にどこから来る強さなんだ。
気もない、特に武道を極めているわけでもない、運動部なんかに所属しているわけでもないときた。
私が言うのもなんだが、異常だなあいつは。

８５人の結集した強さは一つのアブノーマルによってかき消された。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「はぁ、危なかった」

目の前にはさっきまで猛然と襲い掛かってきた強敵が横たわっている。
まさか、ああいう攻撃をしてくるとは…
一発目は脳を揺さぶるためにも顔を攻撃してきたのは分かる。
だから、二発目も気絶狙いの腹とかが妥当だと思ったんだが、まさか左胸部
に拳を向けてくるとはな。
何を隠そう、俺のそこの胸ポケットにはさっきもらったばかりの黒子にゃん
こが入っているのだ。
人間1人が吹っ飛ばされるほどの威力の打撃。
それをこんな小さく愛らしいグッズがくらったら、バラバラは回避できない
だろう。
俺が傷つくのはいずれ治るもんだが、物に関しては一度壊れたら再起は難題
になること間違いなしだ。
ましてや、シークレットなんて買いなおせばいいで済む話ではない。
というか、これなかったらなんで俺はこんなことしてるんだってことになる
しな…。
ともかく、残るは16人だ。
どうやって出ようか。
そのとき、急に結界が解けた。

見ると結界担当であろう１６人が力尽きていた。

あれだけ高度な結界だ。
術者は相当な気を練り上げる必要があるのだろう。
そして、限界がくれば疲れ果て、戦闘続行は不可能だと。
なるほど、時間制限があるのは力の譲渡だけでなく、結界もだったってこと
か。

「勝者、流川海斗」

悔しがる者はいない。
対戦相手の１００人は全員気絶していた。

「ふっふっふ、やっぱり強いなーお前。どうだ、エキシビションマッチとい
うことで私と一戦…」

「俺、用事あるからじゃあ」

試合も終わったし、もう用はない。
俺は捕まる前にとさっさとその場をあとにした。

68話　「奥の手」（後書き）

ありがとうございました。
手抜きとか言わないでください。
だってあのペースで進んでたら、１００人倒すだけで何話使うことになるか分からないですから。
いや、ほんとごめんなさい

69話　「はじめてのおつかい？」（前書き）

あと2時間で毎日更新が終わってました。
ほんと笑えない。
ギリギリです。

69話　「はじめてのおつかい？」

Ｓｉｄｅ　百代

「逃げられたか…。」

今まさにあいつが出て行った武道場の扉を見つめる。
ついさっきまで、うちの選りすぐりのエリート層１００人を相手にしてたっていうのに元気なもんだ。
そこまで嫌がんなくてもいいじゃないか、ったく…。

だが、今日のので再確認した。
あの柔軟さ、冷静さ、センス、どれをとってもあいつは強い。
もしかすると、私が今まで出会った中で一番かもな。
ここまで心から戦ってみたいと思ったのはあいつが初めてだ。

だが、今の状態であいつと戦ったところで本気を出してはくれないだろう。
今の戦いだって、そうじゃないか。
百人組み手を勝ち抜いた、それがましてや一流の相手となれば、それだけで
既に強者の域に達しているのは言うまでもない。
にも関わらず、あいつからは余裕すら感じられた。

…いや、少し違うな。
あいつもギリギリではあった。

何かを隠し抑制したステータスのもと、ギリギリで戦っていた。
それで渡り合える、勝ってしまう奴なんだ。

そう、それだけの実力がある。
川神学園の廊下でも聞いたこと、“何故隠す？”
あれだけの強さ、恥じることも謙遜することもない。
私には分からない。

ただ、戦うのが嫌だとかではない気がする。
あそこまで頑なに決闘を良しとしないくせに、戦っているあいつの顔は嫌がるどころか、むしろいきいきしているようにも見える。

だから、何かしら引っかかる理由でもあるんだろう。
本気の戦いを避ける理由が。
それがあいつを抑制し、本心も実力も縛っているに違いない。
それを解決してからだ、あいつと全力で死合うのは。
まあ、こういうときこそ賢い弟にでも手伝ってもらうとしよう。

……流川海斗。海斗か。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「はぁ…」

なんかもう、溜息しか出ないわ。
あの戦闘狂こと川神百代、案の定決闘しようとか言い出した。
追ってこなかったから、なんとか逃げれたよ。

それでなくても修行って言ってたのに、相手が俺の予想より遥かに強くて、
こっちは大変だったっての。
まあ、ストレス発散になったうえに、レアにゃんこのプレゼントまでもらえ
たし良しとするか。

「そういや、腹減ったな。弁当でも買ってくか」

運動で疲れたことだし、飯でも調達しようとスーパーに向かった。
だが、その店内には…

「こんなところで会うとは奇遇だな、流川海斗」

聞き覚えのある威圧感のこもったハッキリとした声。
俺の頭の中には1人の女の子が思いつく。

いや、待て。
決め付けてしまうのはまだ早い。
そう自分に言い聞かせ、一握りの期待を持って顔をあげる。

しかし、そこにいたのは紅い髪に紅い瞳。

周りにはなじまない軍服に、何より左目の眼帯が特別目立つ。
俺が浮かべた予想と全く違わぬ少女、マルギッテだった。

「戦う気にでもなったか、いつでも私は相手になろう」

「いや、そんなこと一言も言ってないだろ」

今、俺は戦ってきたばっかなんだよ。
重労働後でヘトヘトなんだ。
これ以上はオーバーワークに突入するぞ。

「そんなことより、なんでマルギッテがこんなとこにいんだよ?」

「っ!気安く名前を呼ぶのはやめなさい!」

「なんでだよ…。俺、基本こういう感じなんだけど…」

今更、ずっとお前とか言うのはあんまりな…。
これから名前くらいは呼ぶことあるだろ。

「そんなの私の知ったところではない。馴れ馴れしいのは禁止する」

「なんだそりゃ。じゃあ、クリスみたいに“マルさん”って呼べばいい…」

「私のことはマルギッテと呼びなさい」

“いいのか？”と聞こうとしたら、速攻で答えが返ってきた。

「いやでも、さっきは…」

「私のことはマルギッテと呼びなさい！」

「それでいいなら、別に文句ないけどよ」

そんなにマルさんって呼ばれんの嫌なのか。

ふーん……

腹が立ったら、これ使ってやろう。（↑悪い奴）

「それで？」

「それでとは？」

「ここにいる理由は？」

「ああ。お嬢様が“ちんすこう”なるものが欲しいというので、買出しに出ているところだ」

「……へぇ」

ちんすこうね。
やっぱり色々興味があるんだろうな、クリスは。
大和あたりから聞きでもしたか。
けどさ…。

「なんで、ちんすこうを探してるお前が歯ブラシコーナーにいるんだよ…」

「今探している途中でな、なかなかないのだ」

「ちなみに知ってる？ちんすこう」

「知らないが、探していけばいつかは見つかるだろう。お嬢様の頼みはただ
遂行するのみ」

「そんなことしてたら、日が暮れるだろ。人に聞くとかしないわけ？」

「こんなこと人に頼るまでもない」

「ああもう…！」

「はっ！？お前、何を…！」

我慢できなくなったので、強引に手を引いて歩き出す。
多少の抵抗は覚悟したのだが、さっきから口ばかりで暴力が来ない。

なんか拍子抜けだが、僥倖か。

「この手を離せ！流川海斗」

「ほら着いたぞ」

結局、近くのお菓子屋まで引きずってきた。
沖縄じゃなくても揃ってんのは、今の時代の便利さだな。

「ん？ここは」

「ここ、お菓子屋。これ、ちんすこう」

「あ、ああ…」

強引にちんすこうの袋を手渡す。

「それでいくらだ？」

「いいから、それ持って早く戻れ。しらみ潰しに探して、待たせてんだろ」

「しかし…」

「細かいこと気にしてんな。任務最優先だろ」

なんだかんだでこれが一番効果あるだろ。
軍人の模範のようなもんだからな。
…戦闘欲は除いて。

「…分かった。ここまで連れてきたもらったことに礼は言っておく」

「ああ、それだけで十分だ」

「・・・・・」

マルギッテは一度だけこちらを目で見たあと、去っていった。

「…弁当でも買いに戻るか」

対して俺はさっき出てきたスーパーの方へと引き返すのだった。
今日は完全にオーバーワークだ。

69話　「はじめてのおつかい？」（後書き）

ありがとうございました。
マルさんもやっぱり難しいですね。
Sで新しい一面とかに期待します。
そしたら、もっと書きやすくなると思いますし。

70話　「前触れ」（前書き）

今日は早めに頑張りました。
ですが、推敲をする時間がないんですよね。
なので、漢字ミスとか一人称ミスとかあったらすみません。

70話　「前触れ」

様々な電子音が混ざり合い、雑音となっている。
周りには学生の姿があり、学校帰りなのか制服姿も少なくない。

ジーー

そう、ここはとあるゲームセンター。
俺の場合、特にゲームが好きなわけでもないので、あまり縁のない場所では
ある。
実際、来た回数も片手で数えられるほどだろう。

ジーー

そんな俺が後輩の1年生の女の子二人を連れ添ってゲームセンターに来てい
るという奇特な状況にあるというのには勿論理由がある。
言うまでもなく、デートなんかではない。

ジーー

だから、そんな目で見ないでくれ…。
さっきから知らない男とすれ違う度に羨望と憎悪のこもった目で見つめられ
る。
手をつないでいるのが誤解を生むのだろうが、これだって1年の子が“はぐ
れたら困るので、手借りていいですか…？”とか言ってきて、特に

断る理由
もなかったからつないだだけである。
確かに人は多いし、そこに深い意味なんてないんだよ。

「おい、そこの兄ちゃん、贅沢なご身分じゃねぇか」

うわー、ベタベタな不良来たよ。
その数は3人ほど、いつも夜に相手しているのに比べればかなり少ない。
まあゲーセンだし、昼間っから群れてはいないか。
無論、相手にするはずもないので女の子の手を引き、素通りしようとするが
そこは流石ベタベタの不良、

「何シカトきめてくれてんだよ、アァ？」

こんな反応が返ってくるわけで。
案の定、前に立ち塞がってきた。
ほんと、こういう人種って暇だよなぁ。

「邪魔なんだけど」

「あ？お前今の状況分かってんのか？」

なんだろう、前にも同じような台詞を聞いた気がする。
異常なまでに現状を見せたがる奴らだ。
こいつらは基本自分たちが優位に立ってると勘違いしてるからな。

「あのさ、怪我する前にどいたら？」

いちいち答えるのも面倒くさいので、さっさと最後のチャンスをやる。
いや、それを受け取る奴には今まで会ったことないんだけどさ。
さりげなく、自分が前に出ることで1年生の子たちを後ろに下げておく。
こいつらも例にもれないだろうからな。

「てめぇ、女の前だからって調子に乗りやがって…。手出さないと思ったら
大間違いだぞ」

先頭に立っていた一番きれやすそうな大柄な男が殴りかかってくる。
最近こんなのばっかだな……慣れたけどさ。

力任せの直線的な攻撃。
昨日の百人組み手のせいか、いつにも増して単調すぎるように感じる。
首だけを動かして、つまらないそれを避ける。

そして、空ぶって距離がつまった相手の頭に頭突きを決める。
見かけだおしのでくのぼうは、ガクリと白目を剥いて崩れ落ちた。
あっけねぇ…。

「て、てめぇ！！」

仲間が倒れて焦ったのか、1人が思い切り突っ込んでくる。
だが、そんな動揺しながらの突撃なんてな…

俺はそんなフラフラの小心者を足払いして、バランスを崩す。
転ばせはしない。
あくまでバランスを崩すだけ。
だが、予想よりも相手は足元がおぼつかなかった。

「うぁっ…」

その不安定な体に駄目押しするように背中を蹴り飛ばす。
勿論、残りの1人に向かってな。
小心者は面白いほど倒れこみ、きっちり巻き込んで転んでくれた。
まあ、頭突きとは違って気絶するほどのもんではないが…

「まだやるか？それとも、これ使って欲しい？」

そう言って、華奢な手を握る両の手を見せる。
こいつら相手にわざわざ解く必要もないと思ったので、手はつないだままで
使わずに戦った。
それでも、このザマなんだからいくら馬鹿でも意味は分かるだろう。

「いや、帰るよ。帰るからさ」

声がうわずっている。
どうやら察してくれたようだ。
意識がある2人の男はもう1人を担いで、足早にゲームセンターから出ていった。

ふぅ、後輩も無事に守れたし、良かった。
と、その二人は…

「ありがとうございます、先輩。やっぱ、カッコイイです」

「頼りになります♪」

そう言って、先程よりも密着してきた。
いや、だからそんなことすると…

ジーー

…もう諦めよう。

っと、話がだいぶ逸れたな。
俺がこんなところに来ているのは理由がある。
昨日の今日で依頼の真っ最中なのだ。
ちなみに分かったと思うが、依頼主は俺の両サイドにいるこの二人。
依頼内容は…

「あ、これですこれです。先輩」

「あのウサギのなんです」

クレーンゲームの景品を取ってほしいというものだった。

「ウサギって…。結構でかいな」

「はい、というかこれ自体が在庫処分の特別な台で…」

彼女が言うには、これはお店で売れ残った商品がごちゃまぜになっている少
し他とは変わったものなんだという。
確かにジャンル問わずに色々な商品が入っている。

そして、その目的のウサギのぬいぐるみは外見も非常に丁寧に作り込まれて

いて、とても売れ残るような物には見えない。
だが、どうやら販売されていたときは高価すぎて買い手に恵まれなかったの
だと言う。

それがクレーンの景品となれば、かなりの得だ。
まあ、でかすぎて飾りのような扱いだが。
大方取らせる気なんてないのだろう。
客引きというやつだ。

まあ、かかりやすいとこを探して、計算でもすればいいんだろうが、何しろ
クレーンゲームなんて生まれて初めてだ。
しかも、初陣がこんな大物ときた。
果たして、取れるのか……日が暮れるんじゃないか？

ガコン

「凄いです！先輩、まさか一発でだなんて」

「しかも、なんか他にも落としてましたよ！ダブルゲットっていうのじゃな
いですか、これって！」

「・・・・・・・」

ビギナーズラックとはよく言ったものだ。
お望みのぬいぐるみと共に、これは…狐の面だろうか。
慎重に計算はしたが、まさか一回目で取れてしまうとは。

「先輩、ありがとうございました。その狐の面は先輩の物で結構ですんで」

「本当に今日は感謝でいっぱいです」

「では、失礼します」

呆気なく、依頼達成。
どうしよう、時間も大幅に余ったし、たまには遊んでくか。

そこで右手に持った狐の面に目がいく。
…せっかくだしな。

俺は狐の面をつけて、ゲームセンターで暇を潰すことにした。

…………………
…

不良もいれば、様々な人が集まる施設。

「くっそ、ムズイんだよ！どれもこれも！」

ゲームセンターは騒がしい。

70話　「前触れ」（後書き）

ありがとうございました。
さて、なんか変な感じで終わりましたが、
分かった方もいますかね。
ともかく次をよろしくです。

71話　「狐がゆく」（前書き）

それぞれの話によって、色々なキャラが出てくるのですが、
そのキャラを書いてるときには無性に可愛く
見えてくるんですよね。
まじこい恐ろしや

71話　「狐がゆく」

「ねぇねぇ、行ってきていいでしょ。ママ～」

「はいはい。ママここで待ってるから、頼んできなさい」

「うん、いってくるー！！」

タッタッタッタ

「狐さん、私と握手してください」

「ああ、いいよ」

「狐さん、僕ともー」

「するからするから。順番ねー」

俺はゲーセンを歩き回っていたはずだ。
だが、知らぬ間に沢山の子どもたちに囲まれていた。

理由は簡単。
さっきゲットした狐の面をつけていることだ。
どうやら仮面とかは子どもたちには人気らしい。
ヒーローかなんかと勘違いしているのだろうか。

このゲーセンも大きな店の中にあるものである。
そのため、さっきから買い物に来た家族連れに会うたびに子どもが近寄ってくるのだ。

なんとなく付けただけなのだが、外せない状況になりつつある。
別に外そうとも思わないからいいんだが。
騒ぎはさらに子どもを呼び、途切れることがなかった。

「ばいばーい、狐さん」

「ああ、バイバイ」

なんとか解放された。
子どもってのはどこまでも元気だな。

離れたところでもまだ手を振って、その親はペコペコと頭を下げていた。
こちらも手を振り返しておいた。

「あ、狐さんだ！」

「・・・・・・・」

まだしばらく続きそうだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

よくあるゾンビ退治ガンアクションゲームの前。

「ああぁぁ！またやられた！最近のゲーム難易度高すぎなんだよ！なんだ、このゾンビ何匹いんだよ！！！」

ガン、と筐体を殴った鈍い音が響く。

「金ばっかとりやがって…。これはウチに対する挑戦かよ。いいぜー、受けて立ってやろうじゃん。ぶっ殺してやるよ、ゾンビども！」

見事に店側の策略にはまっているのにも気づかない。

そして、少女はコインを入れ、また銃を取る。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

やっと一段落着いた。
なんかヒーローショーの中の人の大変さが分かった感じだ。
さて、ゲームセンターに来たのはいいものの何をやろうか。
特にやりたいとか得意なものはないしな。
そもそも、今ってどんなものがあるんだ。
まあ、とりあえず一周してみるか。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

—ゾンビゲーム前

体力が赤く点滅している。
最初こそ順調に進んでいたが、後半になるとすぐこうなっていた。
そして、画面に映し出されるのは見慣れたアルファベットの並び。
血文字ででかでかと“ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ”と。

「あーあ、またゲームオーバーかよ！これクリアできない設定になってるん
じゃねーのか！くっそ、何時間かかってると思ってんだ。」

クリアできないゲームにストレスが募る。
イライラするなら、やらなければいいというもっともな意見もあるだろうが、
素直にそう出来ないのがゲームの魅力であり、人間の駄目なところでもある。
まさにそれらの産物がこの少女であった。

「…はぁ、ちょっとトイレでも行って、気分転換してくっか」

そう呟き、少女はゲームの前を離れお手洗いへと向かっていった。

…………………………………………………………

「ふーん、こんなのあるのか」

定番というわけでもないが、どのゲーセンにもありそうな音ゲー。
昔のゲーセンは横スクロールとか格闘とかばっかであり、ありもしなかったそうだ
が、今の普及率は相当なものだ。
俺の前にあるゲームもその類らしい。

“ドラムの鉄人”

そこには、結構本格的なドラムが置かれている。
まあ本格的といっても形の面だけであって、そんなプロみたいにごちゃごちゃ付いているわけではない。
だが、よく出来たもんだな。

そういや、こういうのって実際に軽い練習に使う奴もいるらしい。
ドラムなんかはその大きな音のせいで練習場所なんて限られてしまうという
理由もあるだろうが、とにかくそれだけのクオリティーが伴っているのも確
かなことだ。

よし…。
迷っていても仕方ないし、試しにやってみるか。
コインを投入して、席に着いた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

「ったく、混んでやがったなー」

ぴっぴと手を振り、水を払う。

女の子としてはがさつな行動だが、少女自身に気にした様子はない。

「ん？なんか人だかりが出来てやがる。おもしれぇモンでもやってのかー？」

少女は人ごみを掻き分けて、覗いてみた。

「あの兄ちゃん、すげぇぞ」

「プロかなんかか？」

そこにいたのは、ドラムを華麗に叩く男の姿。
まさにプロ並みの滑らかかつ鮮やかな動きでスコアを跳ね上げていく。
演奏が終わると、“パーフェクト”とゲームから音声が流れる。
それと同時に周りの見物人からは拍手が巻き起こった。

「うぉーー、またパーフェクトだ！もう何連続だよ」

「ていうか、あの最高難度をよく軽々とノーミスで叩けるよな。俺なんか端
から見てても譜面追うだけでお手上げだね」

（へぇ…スゲェヤツもいるもんだな）

ゲームは好きだが、あまり得意なほうではない少女は素直に感心していた。

それほどまでに圧倒的な上手さだったのだ。

それ以上は興味も持たなかったので、早々にゾンビゲームの方へと戻っていった。

だが、戻る途中、少女は1つだけ気にかかった。

それは…

（なんで、お面なんかしてるんだ？）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

演奏が終わる。

途端に後ろから拍手が聞こえてきた。

いつの間にか多くの人が集まってきていたらしい。

「通してもらうぞ」

その人混みを抜ける。

人が集まってきたのは予想外だったが、ゲーム自体はとても面白かった。
やっぱりストレス発散とかになるんだろうな。
思い切り出来るのは気持ちが良い。

次は何をしようかなー。

バン、バン

どっからか、迫力のある音が聞こえてきた。
景気良く、誰かがプレイしているようだ。
見れば、ガンアクションらしい。

じゃあ、やってみるか。
プレイ中で塞がっている隣の台にコインを入れる。
ゲームスタートだ。

71話　「狐がゆく」（後書き）

ありがとうございました。
もう流石に誰か分かりましたね。
次回もよろしくです

72話　「おとなりさん」（前書き）

今回のタイトルなんですが、平仮名なのはわざとです。
なんか気づいた方は自分と波長が合いますね。
まあ、しょーもないことなんで気にする必要皆無ですが。

72話　「おとなりさん」

セットされている銃を構える。
開始早々、極端に苦手な人もいるなと容易に想像できる、気持ちの悪いフォルムのゾンビが出てくる。
妙にリアルでこれも完成度が高いな。
これは無数のゾンビを倒していくというホラー要素のありのガンアクションといったところだ。

ゾンビを敵キャラに採用するのは恐怖という面だけではないらしい。
聞くところによると、そういったゲームには現実で人間や動物に危害を与えないように仮想の悪を設定するという思惑もあるのだとか。
嘘か本当か分からないがな。

でも、今の世の中、エアガンなんて簡単に手に入るし、それを動物に向かって撃つというニュースもあるくらいだ。
ありえない話ではない。
そんな奴、殺してやろうと思うがな……。

次々と沸いてくるゾンビたちを正確に撃ち抜いていく。
出てきた瞬間を狙えば、こちらの被害も少ない。
ちなみに弱点は頭らしい。

「んー……」

ちょっと簡単すぎやしないか、このゲーム。
思えば、最初に難易度選択もなかったしな。
なんだかんだでボスらしき奴まで辿り着いてしまった。
そして、呆気なく撃破。

いや、これはあまりにも…
よくよく見てみると筐体の横に“Ｂｅｇｉｎｎｅｒ”と書いてあった。

ああ、これ初心者用だったのか。
道理であっさりクリアできたはずだ。
初心者用と普通の二機種があったのだが、片方はプレイ中だったので空いていた隣のを選んだ結果ということか。

じゃあ、あっちが普通のやつか。
そう思って、そちらを見ると…

ジーー

見る前に見られていた。
隣でプレイしていたはずのその少女は完全にこちらを見ている。
なんだ、俺がなんかしたのか。

（この狐は…さっきドラムがめっちゃ上手かったヤツだ。初心者用とはいえ
見た感じこれも得意そうだったし…）

さっきから無言でこちらを見続けられる。
いや、なんか威圧感が凄いんだが…

「おい、テメェ」

声をかけられた。
この場にいるメンバーを考えるに、テメェ＝俺の式が完成。
待て待て、声かけてきたってことは知り合いなのか。
改めて相手を見直してみる。

見た目は快活そうな小柄な少女。
白と黒を基調とした見慣れない変わった服装で、透き通るような肌とコント
ラストになっている。
何よりも目立つのがツインテールにまとめあげられたそのオレンジ色の長い
髪だった。

うん、見たことないな。
会ってたら忘れなさそうだし。

「見た感じ、ゲーム得意そうじゃん。ウチと協力プレイしねーか？」

やっぱ、知り合いじゃなかったか。

どうやら、ゲームのお誘いのようだ。
物足りなかったし、そっちの機体で出来るなら好ましい。

だけど、なんかこの声聞いたことある気がする。
気のせいだとは思うんだが…
まあ、今はどうでもいいか。

「そっちがいいなら、いいぜ」

「よっしゃ！じゃ、キマリだな。さっさとやろうぜー」

「おう」

それぞれコインを投入して、ゲームスタートだ。

「難易度どうするよ？」

「勿論ＶＥＲＹＨＡＲＤで」

「それって一番むずいヤツなんだけど…。正直、ウチはこの一個下のレベル
も最後まで行けてないんだぜ？」

「２人でやればいけるって」

「んー、じゃあ頼んだ」

短い会議を繰り広げ、最高難易度に決定。
ビギナーレベルは簡単すぎたからな。
せいぜい、こっちには期待させてもらうぜ。

ステージ1が始まる。
さっきのビギナーではチュートリアルもそこそこに小手調べもいいとこであ
ったが、初っ端から比較にならないゾンビの大群が襲ってくる。

「うおおおおおい！気持ち悪いほどいるじゃねーか。こえぇよ」

「やっぱ、こんくらいじゃないとな」

ゲームのルール自体は同じなので、こちらでも変わらずゾンビの弱点である
ヘッドショットを狙っていく。
ただ、さっきは撃っては待ち、撃っては待ちの単純作業ゲームだったのが、
絶え間なくゾンビたちが出てくるので、右へ左へと振られ相当やりごたえの
あるものとなっていた。

「うじゃうじゃいるぜー、着いていけねぇよ。どうすんだ、これ？」

「倒せないのが積もって固まってきたら、ケチってないで手榴弾を使っちま

え。一掃出来て、スカッとするぞ」

助言された少女は素直に従い、ゾンビの群れの中に爆発物を投げ込む。
次の瞬間、強烈な光、振動、サウンドが爆発を表した。
溜まっていたゾンビは根こそぎ消し飛んだ。

「うっはーーー！これはタマンねーぜ！！一気に蹴散らすのは気分爽快だな」

「だろ？」

「最高じゃん。1人じゃこの感覚は味わえなかったぜ」

会話は自然につながれていった。
協力プレイというのはこんなにも両者の間に連帯感を生み出すものなのか。
さっき会ったばかりの少女とはゲームの中ですっかり意気投合していた。

「この回復アイテム取っていいぞ」

「オメェが出したんだから、自分で使えばいいだろ」

「残念だが、俺のライフは微塵も傷ついてねぇ」

「うへー、やっぱテメェ最強に上手いな。じゃ、ありがたく頂戴しちゃうぜ」

「おう、持ってけ」

そんなやりとりもしながら、十分に残機を残した状態でラスボスに挑む。
ここまでの戦闘で連携も完璧になっていた俺たちは冷静に対処し、見事撃破
まで持っていった。

「いよっしゃあぁぁ！ウチ、このゲーム、クリアしたの初めてだぜ。ありがとな」

「何言ってんだ。2人の力だろ」

「へへ、まあでも楽しかったから、礼は言いたいんだよ」

「俺だって楽しかったぜ」

ゲームによって、絆が生まれていた。
たかがゲームといっても、達成感はある。
ただ、あまりにも喜びを分かち合っていて、終わったあとの画面など全く気
にもしていなかったせいか。

スコアランキングの1位は“ＡＡＡ”という名前になったという。

72話　「おとなりさん」（後書き）

ありがとうございました。
遂に接触した海斗と天使。
だが、お互いが誰だかは分からない。
どうなることでしょう

73話「What's your name?」（前書き）

今回ふりがな機能を初めて使ったのですが、
上手く出来てるんでしょうか…
怖いから今まで使わなかったんですがね

73話「What's your name?」

ゾンビゲームを見事にクリアした俺たち。
いきなり別れるなんてことにはならず、

「あのさ、他のゲームも一緒にやってくんね？」

「暇だし構わないぞ」

「よっしゃ！ボコボコにしたいゲームがまだまだあんだ！」

自然とこういう流れになった。
その後、2人で色々とまわり、次々にゲームを制覇していった。

「色々あるんだな、ゲームも」

本当にクレーン1つ取っても、何種類あるのか分からない。
娯楽のものばかりでなく、カイロなんかの生活用品も入ってたりして、興味
深い。
へぇ、こんなのまであんのか。

「色々あるんだなって…、やったことなかったのか？」

「ああ、めったに来ないし、今やったのも初めてのばっかだぜ」

「マジかよ！？　めちゃくちゃ上手かったから、てっきり常連だと思ってたけど、ゲームでも天才っているんだな…」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

あっという間に時間は過ぎた。

「そろそろ帰るか。結構遅くなっちまったし、送るわ」

「いや、それはいいや」

「けど、女の子が夜に１人歩きってのもな…。物騒な世の中だしな」

「心配すんなよ、ウチはつぇーから大丈夫だ」

そう言って、ヒュッと拳を突き出す。

見た目は無邪気な子にしか見えないが、武道の心得でもあるのだろうか。

とはいっても、やはり女の子。

危険なのには変わりない。

だが、同時に知らない男が家までついてくるのも嫌だろうからな。
強引に送るというわけにもいかない。
どうしたもんかと頭を働かせる。

あ、そうだ。

「ちょっと待ってろ」

「は？オイ…」

頭に浮かんだそれを目指す。
さっきクレーンをまわっていたときに見つけた。
ワンコインで焦ることなく、それをゲットする。

「ほら、これやるから」

「ん？なんだこれ？」

見た目はただのストラップ。
しかし、上のボタンを押せば高く響く音が鳴るという防犯グッズらしい。
こんなのまでクレーンで取れるんだからな。

「簡単に言えば防犯ブザーだ。付いていけないなら、これくらいし

ないとな。
あと万一、助けが必要だったらそれにワンギリでもかけな」

俺の携帯の電話番号のメモも渡しておく。
とりあえず、俺に出来る最善だ。

「別にこんなの…」

「無事家に着けば、捨ててていいから。せめて、こんくらいさせてくれ」

「あ、ああ…」

「じゃーな、気ぃつけて帰れよ」

これで安心と背を向けたとき、

「…ちょっと待てよ」

「ん？」

少女に呼び止められた。

「名前。お前、名前なんていうんだ？」

いきなり何を言いだすかと思えば…。
そういやお互いに名前を聞いてなかったな。

「人に名前を聞くときはまず自分からだろ？」

「うっ……」

比較的普通の返しだと思ったのだが、何故そんな渋い顔をする。
若干の沈黙のあと、

「……天使（えんじぇる）。」

「あ？」

「だから、板垣天使だっつってんだろ！分かってんだよ、自分の名前がおかしいってことくらい。だから、言いたくなかったんだ。笑いたけりゃ、勝手に笑えばいいだろ」

「…お前、自分の名前嫌いなのか？」

「たりめーだろ。誰でもこの名前を聞いたら、馬鹿にしやがる」

「でも、それは馬鹿にするやつらが気に食わないだけで、お前自身

がその名
前を嫌悪してるかどうかは別の話だろ」

「な、そりゃ…」

「俺はいいと思うぜ」

「え…。」

相手の気持ちなんて分かってやれない。
だから、自分の気持ちを述べる。

「確かにあまりない名前だし、天使って名前で結構ハードル上げてるとは思
うぜ。けど、お前は可愛い顔してんだから、問題ねーだろ」

「かっ、かわ…！？」

「まあ顔が悪かったら、十中八九イジめられそうな名前であることは否定し
ないけどな。その点、お前は大丈夫だ。むしろ、似合ってるんじゃねーか？
小動物みてーだし、肌も白いしな。俺だって流石にブサイクが天使とか名乗
ってやがったら、殺意も湧くかもだが」

どんどん天使の顔が赤くなるのに海斗は全く気づかずに続ける。

「それに名前って、一生持っていられるもらい物だっていうしな。別に親に感謝する必要なんてねぇが、もしお前自身がさ、心から嫌っているんじゃなかったら、大切にしてやったらどうだ？他人なんて気にせずよ」

「な……なにウチに説教垂れてんだよ！何様だっつーの！別にお前なんかにわざわざ言われなくたって、ウチは最初から他のやつのことなんて…」

「俺は結構似合ってると思うんだけどな」

「…ぅぅっ！だから何でそんなことテメーに判断されなきゃなんねーんだよ！さっきから言ってんだろ。他人の言うことなんて、ハナから気にしてねーって！！」

「ふーん。ま、いいけどさ。俺は流川海斗だ。もう今日は帰るから。じゃあな、“天使”」

「なっ……！？」

天使が硬直する。

おそらく、今まで名前で呼ばれたことなんてないんだろうな。

ていうか、頑なに呼ばせなかったに違いない。
俺には関係ないがな。

動かない天使に手を振って、背を向けた。
そのとき、後ろから

「…おい！また明日来いよ、“海斗”！」

「はっ、暇だったらな」

「ぜってー来い。約束しろ」

「はいはい、明日も来るさ。ならその代わり、俺より先に来とけよ、天使。
いなかったら、待たねぇからな」

「しょうがねぇな。海斗トロそうだし、ウチが待っててやるよ。その分、ま
たガンシューに付き合ってもらうけどな」

言葉だけ見れば、まるで仲の悪い者同士の会話。
だが、今の二人を見て、誰もそんな風には感じないだろう。
天使は嬉しそうにしていて、海斗もそれに満更ではなさそうだった。

「じゃ…、また明日。海斗」

「ああ、明日な。天使」

73話「What's your name?」（後書き）

ありがとうございました。
うーん、いわゆるこれがフラグですね。
天使好き（えんじぇる）だなー。
ほんとに天使みたいです。

７４話　「恋の病」（前書き）

こんなに余裕を持って投稿できたのは久々ですね。
というか、こういう感じだから、時間がまちまちとか
言われてしまうんですよ。

74話　「恋の病」

そこら中に工場が立ち並び、煙で少し先も見えない。
ひとたび嗅覚を働かせれば、そこで感じられるのはガソリンの匂い。
一般人から見れば、害あって利なしの特殊な場所。

川神最東部の重工業地帯。
その中にある町、“川神新町”。

治安は悪く、親不孝通りと同じように軽い無法地帯となっている。
多少の暴力沙汰は日常茶飯事。
通報する者もいなければ、巡回する警官もいない。
死者なんかが出ないかぎり、警察の介入は皆無だ。

そんな危険な場所の中に板垣家はあった。
亜巳、辰子、竜兵、天使の４人だけで住む家。

「…はぁーーー」

その家の中に溜息が響いていた。
それは机の上に突っ伏した天使から発せられたもの。

「天ちゃん、どうかしたのー？」

姉である辰子が問いかける。

というのも、帰ってからずーっとこの調子なのだ。
いっつも元気に騒いでいて、溜息なんかとは無縁だった天使。
それを考えれば、違和感を覚えるのは当然だった。

現在は家にはこの2人しかいない。
だから、辰子は姉として聞いてあげようと思ったのだが…

「…うへへ／／／」

本格的に辰子の心配は増した。
少女から発せられたとは思えないが、おそらくそれは笑い。
さっきまで溜息ばかり吐いていたので、悩みがあるものだと思っていたのだ
が、それは覆った。

今、天使は携帯についたストラップを見て、ニヤニヤと笑っている。
辰子から見れば、昨日は付いていなかったストラップ。
そこから原因を考えるということも出来ただろうが、それどころではなかっ
た。

憂い顔をしたかと思えば、ストラップを見て笑顔になる。
客観的に見れば、これほど面白い画はないのだが、あくまでそれは何の関係
もない他人が見た場合。
家族としては何事かと心配になるほどの異常であった。

「天ちゃーーん？」

「ん？どしたの、タツ姉」

「あの、天ちゃん。今日何かあったのー？」

「え！？きょ、今日！？」

「うん、なんか帰ってからおかしいから…」

「いや、ウチいつもこんな感じだしさ…あはは」

そう言っている天使の顔は真っ赤になっていて、何かあることは明白。

だが、その理由を辰子に見抜くことは不可能だった。

そうこうしている間にまた天使は一喜一憂ループに突入していった。

と、そこへドアが開く音がした。

「今帰ったよ」

「俺もだ」

竜兵と亜巳が帰って来た。

そして、天使を見た途端その変な様子に気づく。

「辰、これはどうしたんだい？」

「なんか帰ってきてから、天ちゃんずっとこんな感じで…」

「ふーん、まあ飯食べたら調子が戻るだろうさ。今日は寿司の貢ぎ物があっ
たからね」

「おぉ！最高だぜ！！」

返ってきたのは竜兵の喜ぶ声だけ。
いつもなら天使も歓喜しているのだが、天使の口は動かない。

「ほら、天も食っちまいな。今日はデザートも１つだけあるんだ」

「おい、亜巳姉。俺も食いたいぞ」

「だから、それはあんたたちで決めな」

「ほら、天。恨みっこなしだ、ジャンケンで決めようぜ」

「いいよ、竜にやる」

「「な……！？」」

亜巳と竜兵は思わず驚愕の声を漏らした。
食べ物に関しては物凄い執着があり、それで何度も天使と竜兵の間

で乱闘が
起きているくらいだ。
その天使が食べ物を譲るなんてことは天地がひっくり返るようなもの。
そんな衝撃があった。

「おい、天。お前頭でも打ったんじゃねぇのか」

冗談でもなんでもない竜兵の言葉。
竜兵自身も食べ物をゲットできたという喜びも忘れ、天使を心配した。
板垣家最大のミステリー。
もはやその言葉も過言ではなかった。

だが、そこで亜巳が天使の携帯に付いたストラップに気づく。
昨日までは無かったそれ。
今日になって変わった天使の様子。
頭のまわる亜巳にはそれがつながった。

「天、もしかして恋でもしたのかい？」

「へっ！？」

亜巳の唐突な言葉に今まで上の空だった天使が意識を戻す。
そして顔にはみるみる血液がのぼってゆく。

「その反応を見ると、図星のようだね」

「あんなやつのことなんか好きなわけないだろ！！」

沈黙が流れる。

言ってしまって、ハッとなる天使。

墓穴を掘ったと気づいても、もう遅い。

「やっぱり誰かいるんだね」

「う……」

「別に馬鹿にしようってんじゃないよ。初めて天がそんなことになってんだ。

何があったか話してみな」

「アミ姉…」

天使は自分の気持ちは抜きにして、その日あったことだけを伝えた。

「へぇ…天の名前をね」

（それで落とされたのかね）

「とってもいい子だと思うよー、私は」

辰子は今の話を聞いて、天使のことを大切にするいい人の印象となったようだった。

「天のタイプってそういう奴だったのかい」

「もう話したからいいだろ！」

天使は顔を真っ赤にして、そこから逃げてしまった。

Ｓｉｄｅ　天使

海斗…

携帯にあるアドレス帳。

そこには新しく登録された名前。

それは“何かあったら、かけてこい”と非常用に渡されたもの。

「やっぱ、今かけたりしたらマズイよな」

携帯を閉じる。

そして、またストラップを見て今日を思い出す。

―“天使”
そう言って馬鹿にするやつは1人残らず、潰してきた。
そんなことしてるうちに自分でもこの名前が嫌いになった。

だけど、あいつに呼ばれたとき、正直怒りは無かった。
“似合ってる”とか言われたことなんてない。
てか、あのとき“可愛い”って…

思い出したら、また顔が熱くなってきた。
初めての気持ち。
アミ姉が言って、嫌でも理解した。

今日で終わるはずだった。
楽しい時間は過ぎて、帰らなきゃならない。
そこでウチは呼び止めていた。
ゲーセンなんてそんなに来ないって言ってたし、ここでこのまま別れたら、
もう会えない気がしたから。

うぅぅ…
本当に頭ん中がぐちゃぐちゃだ。
とにかく明日。
明日また会えるんだから、頑張ろう。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

７４話　「恋の病」（後書き）

ありがとうございました。
天使、完全にかかってますね。
というか板垣三姉妹の口調が難しい。

75話　「危険漂う夜のこと」（前書き）

ほんとに時間まちまちですみません。
というか、このペースで大丈夫なのか。
いや、考える前に書けって話ですよね

75話　「危険漂う夜のこと」

ゲームセンターですっかり時間も過ぎて、外は暗くなっていた。
結構テンション上がって疲れたので、ゆっくり帰ろうと思ったのだが…

「おいこら、有り金全部置いていけや」

「分かってるよなー、断ったらどうなるかってことくらい」

穏やかにはいかないもんだ。
不良に取り囲まれていた。
いや、まあ俺が特に逃げようともしなかったからなんだが。

数はざっと10人ほど。
一般道にしては多い方か。
なんとか団ってつけてもいい人数だ。

てか、毎日不良を相手にしてる気がするな。
といっても、いつもは俺から潰しにいくのだが…。
こう疲れてるときに限って、向こうから来る。
まあ疲れてるから狙ってんのだろうが。

「兄ちゃん、聞いてんのかぁ!?」

「耳元で騒ぐな」

食いかかってきた男を投げ飛ばす。
それがスタートの合図となったように後続どもが次々に襲い掛かる。
だが、所詮は烏合の衆。
相手の拳をかわせば、それが味方にヒットしなんとも憐れだった。
そして、一分と経たないうちに勝負は決した。

「迷惑料だ。自分たちがやろうとしてたことを反省しな」

そうして俺は全員の財布から1人１００円を徴収する。
わざわざ時間とられたんだから、このくらいの見返りは当然だ。
…いや、外道とか思った奴よく考えろ。
俺被害者、こいつら加害者、これ慰謝料、オーケー？

…それにしても。
今日のゲーセンといい、今の奴らといい、なんだか最近不良の動きが活発になっている。
こうして辺りを見回すだけでも、前よりたむろっている連中が多く目に付く。

こうした状況は何も今日に始まったことではない。
最近、夜出歩いてるときも異常に不良が突っかかってくる。
また、誰かに絡んでいるのをぶっ飛ばすということが多くなっている。

単純に数が増えただけでなく、治安が悪くなってきているのだ。

天使大丈夫だったかな。

やはり、改めて現状を見ると送っていった方が良かった気もする。

女の子ひとりには今の川神は少々危ない。

だが、電話番号も渡したし、防犯ブザーも持ってるし、危険は最小限に減らしているはずだ。

何もないことを願うしかないか…。

あれ？

前に見えたのは後ろ姿。

黒髪をまとめあげ、割と背が低いその女子には見覚えがあった。

こんな時間だが、俺の記憶が間違っていなければ…

「こんな時間に何やってる？」

「ひぁっ！」

おい！待った。

確かに後ろからいきなりではあったが、そんな声を出すな。

周りから不審者だと思われても困る。

すぐにその口を塞ぐ。

「俺だ、俺だから騒がないでくれ」

「はいほへんはい？」

どうやら俺だと認識してくれたようで落ち着きを取り戻してくれた。
なので、こちらも口を塞いだ手をはなす。
振り返った少女はやはり知った顔。

大和田伊予。
由紀江以外に俺のことを名前で呼んでくれるもう一人の後輩。
まあ縁あって、先輩として慕ってくれているだけなのだが…。
ここだけの話、好きな男子いるらしいしね。

「海斗先輩、いきなりどうしたんですか？びっくりしましたよ」

「いや、肩を叩いただけであんな声を出されるとは思ってなかったからな…」

「そ、それもですけど……口に先輩の手が…」

「ん？」

「いや、なんでもないんです！！はい！」

そう言って、勢いよく顔をそらした。
気のせいか、耳が真っ赤になっているように見える。

あれ、怒らせたか？

さっきの撤回。
慕ってくれてるどころか、嫌われてるかも。
てか、今はそんなことじゃなかった。

「なんでこんな夜遅くに1人でいるんだ?」

「さっきまでナイター見に行ってまして…」

「お?なにデートとか?」

「違います!!!」

「うぉ…」

「あ、すみません」

「いや、悪かった。てっきり好きなやつと見に行ったのかと思ってな」

「……そんなの恥ずかしくて誘えませんよ（ボソッ」

「なんか言ったか?」

「いえ。私野球好きなんで、よく見に行くんです」

「1人で?」

「はい。最初は家族の影響からだったんですけど、今じゃ私が一番はまっち

ゃってて…」

「まぁ別にいいけど、この時間に1人はなー…」

「あははは……」

さっきも言ったが、最近は特に危険だ。
しかも徒歩だしな。
野球場に自転車ってわけにも行かないんだろう。

「んじゃ、行こうか」

「へ？」

「女の子1人じゃ危ないだろ。家まで送ってやるよ」

「えぇ！？でも、そんな…」

「言っておくが、断っても無駄だぞ。本当に危ないからな」

「じゃ、じゃあお願いします」

なんとか承諾を得て、俺たちは歩き出した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

「・・・・・・・・・」

（海斗先輩が隣に……ああ、ドキドキする）

「・・・・・・・・・」

さっきから無言が続いている。
特に話題もないし、こうなるのは必然か。
まあ気まずいからって、１人にさせるわけにはいかないが。

こうして歩いているだけでも、柄の悪い奴が目に付く。
俺がいなかったら、襲い掛かる可能性も十分にあるんだ。

「そうだ、海斗先輩お菓子食べます？」

「お菓子？」

「はい、私つい猫食いしちゃうんで持ち歩いてるんですけど。はい、これで
す」

そうして取り出したのは動物カステラだった。

「おぉ！」

「先輩から動物ビスケットもらいましたよね。こんなのも好きかなと思って、
お店で買っちゃいました」

なんと健気な…
こういう気遣いの出来る子は貴重だな。

「じゃあ、遠慮なくもらうな」

「はい。一緒に食べましょう」

「……！」

瞬間、空気が変わる。
グイッとその華奢な身体を引き寄せる。

「きゃっ、せせせ、先輩？」

「いいから、ちょっと大人しくな」

脇に収まった伊予を落ち着かせるように撫でる。
どうやら周りを囲まれている。

すぐに手を出すというわけではなさそうだが…。

「海斗先輩？」

「安心しろ、大丈夫だからな」

少し待つと気配は消えていった。
どうやら狙いをつけられたわけではないらしい。
本当に最近殺気立ってやがる。

「もう平気だ。急に悪かったな」

片腕での拘束を解くが、伊予は動かない。

「い、いえ……その、海斗先輩」

「どうした？」

「もう少しこのままでもいいですか？」

（うわ！言っちゃった）

「別にいいぞ、落ち着くまでそこにいな。守ってやるから」

それから家に着くまで彼女は側にいた。
その顔が幸せそうだったのに海斗が気づくことはなかった。

75話　「危険漂う夜のこと」（後書き）

ありがとうございました。
伊予回です、一言ならば。
正直伊予は√あっても良かったと思います。
まあ、ないなら作れと（笑

76話　「2つの顔」（前書き）

板垣家だったり、伊予と一緒の夜の町だったり、色々飛び回って話が展開中ですが、今回もです（笑
そして、おそらく全編三人称という初の試み。
まったり見てください

76話　「2つの顔」

島津寮二階にある一室。
そこはクリスティアーネ・フリードリヒの部屋である。

どう見ても西洋テイストのクマのぬいぐるみ。
それが数えるのも億劫になるほど並んでいる。
これだけならファンシー趣味の女の子の部屋にはありがちな光景。

だが、そのぬいぐるみたちの間を埋めるように置かれているのは、日本刀で
あったり、時代劇のドラマで出てきそうな十手。
極めつけは富士の絵が描かれた掛け軸が壁にあったりと、対象的な日本テイ
ストの物品の数々が見受けられる。

和洋折衷と言えなくもないのだが、どう見てもカオスという言葉のほうがふ
さわしい。
そういった意味では、日本が大好きな可愛いもの好きの女の子“クリス”の
個性がよく表れた部屋ではあった。

そんな詳しく説明していけば、軽く原稿用紙2枚は埋められるような特徴的
な部屋には所有者であるクリスと、彼女の父の部下であるとともに、姉のよ
うな存在であるマルギッテがいた。

マルギッテは寮に身を置いているわけではないのだが、クリスの監視兼世話
係としてたまにやってくる。
それもこれも全ては父親の過保護が元凶なのだが…。

だが、今日マルギッテがここにいる理由は少し違う。
クリスに呼び出されたのだった。
別に呼び出されること自体は買い物やその他でもよくあることだった。

だが、現在部屋を包んでいる空気はそんな平生のものとは異なっていた。
そこは感覚に優れた軍人。
マルギッテはその様子を肌で感じ、察していた。

呼び出されてから数分。
未だ二人の間には沈黙が続いている。
マルギッテから話すようなことはしなかった。

何故なら用があると呼び出された以上、相手の言葉を待つというのもあった
が、ただの沈黙ではなく、クリスが何度も口を開いては閉じ、何かを言おう
と準備していることは明白だった。
故にマルギッテは待つ。
お嬢様の心の準備が出来るまで。

「……あのな、マルさん。相談があるんだ」

「聞きましょう、お嬢様」

待った素振りなどは見せない。
ようやく話しはじめたクリスを優しくうながす。

「あのだな…マルさんも海斗のこと、知ってるだろ？」

「…！　…はい、存じております」

ゆっくりと発せられた言葉だったが、マルギッテはその名前に驚いた。
流川海斗。
マルギッテ自身が一度敗北した謎の男。
今までもクリスの口から幾度となくその単語は飛び出してきていた。

「マルさんには言ったと思うが、自分は海斗と決闘をし敗北した。
だが、海
斗は自分の生き方を認めてくれた。だから、あいつの悪いところは
自分が注
意して正義の道を進ませてやろうと思ったんだ」

「はい、お聞きしました」

「だけど、最近おかしいんだ。海斗を近くで見ていて、本当はすごく人に対
して、動物に対して優しいことが分かった。たまにムカつくことも

あるが、
正義に背いて行動するような奴じゃなかった」

マルギッテは黙って、クリスの言葉に耳を傾ける。

「でも、最近イライラしてしまうんだ。海斗が他の女子と楽しそうに話しているのを見ると。海斗の態度は相手を馬鹿にしてもいないし、後輩とかにも優しく接している。なにも悪ではないはずなのに、私はそんな海斗に怒りを覚えてしまう。自分が分からないんだ」

クリスの独白。
もはや、その問いの答えは用意されている。

周りから見れば、勿論マルギッテを含め、大和や他のファミリーにも気づかれるほど明らかだったこと。
誰でも分かったのに、当人は今まで気づけなかった。
思えば、出会いが出会いだったせいもある。

“クリスは海斗に恋をしている”

その事実が見えなくなっていた。
そもそも、これのせいでマルギッテは海斗と一戦を交えることになった。

答えは用意されているのだ。

だが、マルギッテは押し黙る。
それを言うのは簡単だ。
しかし、それはクリスを恋に進ませる、つまり任務と正反対の方向。
気づかぬふりをするのが得策。

そのはずだった。
けれど、マルギッテは自身が海斗と触れ合うことによって、悪い奴というイ
メージが消えつつあった。
この前の買い物のときも思い出される。
お嬢様の好きになった者、その理由は十分に見当たった。

だが、任務は任務。
ここで馬鹿正直に答えてしまえば、どうなるのかは分かりきっている。
二つの間で揺れる心。

そして、次に発した言葉は、

「…お嬢様は流川海斗のことが好きですか？」

「へっ！？も、勿論好きではあるぞ。自分のことを認めてくれた、いわば正
義の同志だしな」

「それは仲間としてですか？それとも異性としてですか？」

「あ……」

「今お嬢様の中に浮かんだもの、それが答えです」

マルギッテは優しく微笑んだ。
それは軍人としての顔ではない。
妹の恋を応援する姉のような顔であった。

その選択が正しいかどうかは分からない。
事実、軍人としては失格の行為だ。
だが……

「マルさん、ありがとう！！」

クリスのその満面の笑みを見ることができて、後悔の念は生まれてこなかった。

「では、お嬢様。頑張ってください」

そして、マルギッテは部屋を出た。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・・・

独りでいるマルギッテに通信が入る。
いつものこと、手馴れた様子で応答する。

「こちらフランク。我が愛しい娘についての定時報告を聞こう」

「こちらマルギッテ。…異常はありません」

76話　「2つの顔」（後書き）

ありがとうございました。
遂にクリスも自覚するってことで、
またライバルが増えていくわけですね。
あと今回はマルさんの優しさです。
というか、マルさん自身のフラグどうしましょう

77話　「昨日とは違う」（前書き）

さて戻ってまいりました。
今回はゲームセンターの翌日のお話。
どうぞ。

77話　「昨日とは違う」

学校からの帰り道。
俺はあるところに向かっていた。
勿論昨日の約束通り、ゲームセンターである。

だが、さっきからゲームセンターへ向かっていると地に突っ伏した不良をよく見かけるのはどういうことだろう。
綺麗にそのラインはゲームセンターへ通じていて、まるで小規模なハリケーンでも通ったような惨状だ。
ほんと世の中不思議だらけだな。

ということで一応、店の前までは来たのだが…。
そういや昨日はずっと狐の面をつけてたんだよな。
考えてみれば、一回も俺の顔を見られてない気がする。
このまま会いに行っても、誰？ってことになるのは目に見えてる。

こんなこともあろうかと、かばんの中に面を忍ばせといて良かった。
一応つけていかないと、認識されないだろうからな。
面倒だが仕方ない。
俺は店に入る前にかばんから取り出したそれを装着した。

…子どもを回避しなければならなくなったのは言うまでもない。

……………………………

・・・

「うーー、おせぇなー海斗の奴…」

天使は昨日のゾンビゲームの前で海斗が来るのを待っていた。
勢いで“明日も来い”とは言ったものの、厳密に待ち合わせ場所を決めては
いなかった。
だから、無難に昨日で会った場所で待っている天使だったのだが…

（ここで待っていていいのか?ウチは。くっそぉ、心配になってきやがった）

内心、不安でいっぱいだった。
というのも、天使はついさっき到着したわけではない。
ドキドキしすぎて、開店して間もない時間から待っているのだ。

海斗は学校があるため、どんなに早くとも午後にならないと来ない。
そんなことすら今のオーバーヒート中の頭では考えられなかった。

感じたことのない熱量を持て余している。
そのせいで天使がゲームセンターに来る途中に絡んできた不良たちは、気の
毒にもその溢れる激情の捌け口となった。
その感情に流されるまま、不良たちをなぎ倒す姿はまさに天災。

小さな台風によって、ゲームセンターへと続く道には不良が転がっていた。

「海斗……」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

「海斗……」

「ん？呼んだか？」

「うぉわあああああ！！」

「うぉ！」

耳元でつんざくような声で叫ばれた。

天使を見つけたので近づいていったのだが、結構な距離まで行ってもこちらに気づかないため、声でもかけようと思ったときに名前を呼ばれた。

それに応答しただけなのに、何故驚かれる？

「うわ！え？海斗？　……おせーよ、バーカ！！なにチンタラして

んだよ、
ったく…」

赤くなった顔でキッと睨まれる。
怒るまでになんか変な間があったんだが、まあいいか。

「これでも一直線で来たんだぞ。天使と約束したからな」
「うぁ……　たりめーだろ、ウチとの約束なんだからよ…」
「ああ。で、どうする？今日は何するんだ？」
「昨日の続きでやりまくるぜー。全部のゲームはまだ制覇してねーしな。今日でこのゲームセンターを完全攻略してやろーぜ！」

「分かった分かった」
本当に楽しそうな笑顔ではしゃぐ天使に俺は頷いた。
また昨日のような時間が始まる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

だったのだが…

ムスーーーー

「おい、天使。いい加減機嫌直せって」

「ツーン」

ゲームセンターの一角にあるベンチに座った天使の顔は不機嫌だった。

大体、どうしてこんな事態になっているかというと…

～

「次はこの格闘ゲームやろーぜ！」

音ゲーやシューティングを協力してハイスコアを叩きだしていっている途中、

不意に天使がそんなことを言った。

そういえば、今までやってなかったな。

「でも、これ対戦しか出来ないぞ？」

「確かに海斗はゲーム上手いけど、ウチもこれは結構やり込んでるから自信
あるんだ。海斗はやったことあんのか？」

「いや勿論ないけど…」

「じゃ、ウチがぼっこぼこにしてやるよ。言っとくけど、手抜いたりして言
い訳なんかすんなよ」

「ああ…」

―対戦結果

「うわーーーん、お前ほんとなんなんだぁぁぁ！！」

俺のストレート勝ちだった。
しかも、天使いわく俺が選んだのはこのゲームで最弱といわれているキャラ
クターらしく、対戦が始まる前に“海斗そのキャラでいくのか？あっは、こ
りゃ３０秒かからないかもな”とか自信満々だったのが…
ほんとに３０秒かからなかった、俺が勝つのに。

俺はシュールな見た目で決めただけなのだが、最弱キャラを使う初心者にや
られるということは天使のプライドをこれ以上なく傷つけることと

なった。
始まる前の態度も落差となり、ダメージ大だ。

「もう、こんなゲームやめだーー！」

〜

はい、それで現在に至る。
どうしたもんか。
何か機嫌を直すようなものは…

「あ、そうだ。天使ジュース飲むか？」

「別に喉なんてかわいて…」

「来る途中に買ったんだけどな、まだ冷えてると思うぞ」

「あのさ…それってなんで減ってるんだ？」

「さっき飲んじまったからな。あ、なんだったら新しいの買っ…」

「それでいい！！それ飲むから貸せ！」

「あ、ああ…」

俺の手から強引にペットボトルをひったくる。
そして、キャップを緩めたところで動きが硬直する。
じーっと口のところを見ているようだが…？

「やっぱ他のジュースがいいなら、買ってくるけど？」

「いや、これでいいって言ってんだろ！」

天使はゴクゴクと中身を飲んでいく。
その頬は何故か赤かった。

「そんな一気に飲むと…」

「ゴホッ、ゲホッ」

「ほら、言わんこっちゃない」

濡れた口を拭ってやった。
その後、飲み物のおかげか天使の機嫌は直った。
良かった良かった。

そう、問題も解決して万事治まったのだ。
だから、今日も昨日みたいに時間いっぱい過ごすのだと、このときの俺は漠
然とそんなことを考えていたのだった。

77話　「昨日とは違う」（後書き）

ありがとうございました。
いやもうね、終わりかたがね…
次回、起こります。

78話　「相反す」（前書き）

今回、若干難しかったですね。
資料がないというか、口調とか特に…
何を言ってるかわからないと思うので、本編どうぞ。

78話　「相反す」

「ほら、次あっちいこーぜ！」

「分かったっての」

機嫌を取り戻した天使はすっかり元に戻っていた。
いや、より勢いを増しているかもしれない。
ベンチに座っていたロスタイムを取り戻すように積極的に動いている。

うむ、やっぱり元気な方がしっくりくるな。
基本的に元気な奴なのだろう。
さっきみたいなことがあっても、ちょっとしたきっかけで元気になる。
いい性格だ。

「あのよぉ……海斗。今度あれしないか？」

「え、どれどれ？」

天使が指差した先。
今度はどんなゲームだと思うのと同時に、やる前にはしっかりと機嫌を損ね
ないように慎重に判断しようと決めた。
そして、その先にあったものは画面も何もない箱のようなものだっ

た。

「なんだありゃ？」

「…ぷ、プリクラ」

「プリクラ？」

なんかの略語だろうな。
プリンセスクライシス？
お姫様に何があったんだろうな、ゲームとしてはありがちだが。
プリズンクラッシュ？
あれ、なんか海外のサスペンスドラマで似たようなの無かったか。

「写真を撮って、それを加工して楽しむ機械だよ！その完成品がシールにな
って出てくるっていうやつ」

「へー、そんなんもあんのか。でも俺なんかと写真撮るだけで楽しいか？」

「い、いやそれは…、ほら！全部のゲーム制覇するっつっただろ！あれのた
めなんだから仕方ねーじゃんか」

「あーそうか。んじゃ、撮るか」

どうやらあの箱の中にカメラや画面やら色々設置されているらしい。
俺はその中に入ろうとしたのだが…

「あのさぁ、写真撮るときまでそのお面つけてんのか？」

「え？　……あーー」

そうだ、俺は狐の面を装着中だった。
あまりにも馴染みすぎて、完全につけてることなんて忘れていたぞ。
別に会ったときにすぐ分かるようにつけてたもんだし、写真を撮るとなれば、
外すのになんの抵抗もない。

「んじゃぁ、入る前に取っとくか」

そう、何の予兆もなかった。
その面を外した瞬間、音が消えた。
さっきまで止め処なく言葉が紡がれていた口も何も語ることはない。
ただ俺を見る天使の信じられないような表情が印象的だった。

「お前…え？海斗？　……どういうことだよ！！」

沈黙はいきなりの怒声によって、打ち壊された。

だが、俺には何が起こっているのかすら飲み込めない。
そう思う間にも天使の様子はどんどんと変化していく。
今、天使は何を考えているんだ？

「これって……お前が流川海斗？」

「え、ああそうだけど…」

「……はっ、ははは。もうわけがわっかんねーよ！！お前が海斗って……、
だってお前は…」

天使は目の前の現象がありえないとでもいうように、頭を抱えた。
もはや言葉も支離滅裂。
俺には何も伝わらないのだが、その表情を見るに天使の中ではどんどんと理
解が進んでいってるらしい。

「くっそぉ！！！！」

その叫びとともに頭を勢いよく左右に振ったかと思うと、その直後
天使は走
り出していた。
勿論、プリクラを撮ろうと中に入ったのでも、やっぱり違うゲームをする気
になって他のゲームコーナーに向かったのではない。

出口を目指して、その場から走り去ってしまった。
何も分からない。
理由はおろか、今のこの状況もよく分かっていない俺に、たった今去っていった少女の後を追うことはできなかった。

…………………………………………………

Ｓｉｄｅ　天使

「くそくそくそ、くそぉぉぉ！！！」

帰りの道を全速力で疾走する。
まわりの景色が目まぐるしく変わっていく。
家の方向には向かっているのだが、いちいち道は確認していない。
ただ漠然とある方向に走っているだけ。

「……っ！」

思わず口唇を噛みしめる。

さっきまであんなに楽しかった。
誰が今のようになるなんて予想したんだろう。

アミ姉に言われて自分の気持ちに気づいたのが昨日。
初めて名前を呼ばれて不快感を感じなかった。
生意気にウチにあれこれ語ってきてウザいはずなのに、あいつの言葉は嬉しかった。
可愛いなんて言われたことがなかった。
名前が似合ってるなんて言われたことがなかった。

ウチでも認めざるを得なかった、好きだということを。
だから、今日は楽しみにしてきたんだ。
ガラにもなく、相当浮かれちまってた。
今日は間接キスもしてしまったし、もう少しでプリクラも撮れたんだ。

だけど、結果的に撮れなかった。
あいつが仮面をとったから…。

思えば、最初っから付けていたあの面。
でも、ウチが好きになったのはその優しさやあいつの人柄だったから、正直
仮面の下はどんな顔でも良かった。
特別かっこよくなくても、良かった…。

どんな顔でも良かったのに、そいつの顔は見覚えがあった。
ウチが殺してやると誓った人物。
なめた態度でウチを倒した憎い敵。
見間違えるはずもない、海で見たその顔だった。

なんで、なんで!!
頭がごちゃごちゃで分からない。
自分の大好きな奴と大嫌いな奴が同じだった。
全く逆、相反する思いが1人の人物に向けられている。

「はぁ、はぁ…」

知らぬ間に家の前に着いていた。
ドアを蹴破る勢いで開け放つ。
今のウチには周りの物を気にかける心の余裕はない。

「どどど、どうしたの?天ちゃん」

「天、あんたどうしたんだい?」

家にはタツ姉、アミ姉がいた。
ウチの様子は相当おかしく見えるらしい。
こんなにも露骨に心配されるのは久しぶりだった。

「ウチ……どうすりゃいいかわかんねぇ!!」

弱気な震えた声は叫びでごまかすしかなかった。
タツ姉たちに無駄な心配はかけたくない。

だけど、今の自分は誰かに頼らないと立っていられなかった。

「落ち着いて、天ちゃん。お姉ちゃんがいるから」

いっそ昨日今日のことをなかったことにしようか。
あいつは仮面で騙していただけ、最初の印象は殺したい奴だったんだ。
だったら、この恋心も騙されて作られた偽りになる。
それで戻ればいい、海斗は敵だという状況に。

携帯についたストラップを見る。
これも、登録した海斗の携帯番号も全部いらない偽物なんだ。
引きちぎってやろうとストラップに手を伸ばす。

何もかも嘘だったんだ!
一緒に協力して出した1位のスコアも、あいつが差し出してくれたジュース
も、二日間の思い出全部!!
だから、そんなもの捨てちゃえばいいんだ!!!

ギュッとストラップを持つ手に力がこもる。
そう、なにもかも…

“天使(えんじぇる)”

あの言葉も……

「……うっ…」

「天ちゃん、このハンカチ使って」

ストラップを持った手はそれ以上動かなかった。

ギュッと握った手はいつしか濡れていた。

78話　「相反す」（後書き）

ありがとうございました。
結局ちぎれなかったストラップ。
海斗との絆は今後どうなるのか…。

（天使は大声で泣くとも思ったんですが、
今回はこんな感じで書いてみました）

79話　「陰謀」（前書き）

今マルさんのフラグをどうにか
立てようと思索中です。
こんなことなら早めにやっておくんだった…

79話　「陰謀」

「天、調子はどうだい？」

「ん、まあ普通だけど」

「時間も経ったことさね。男なんていくらでもいる。嫌なことは忘れちまいな」

「心配しなくても、もうダイジョブだって」

泣くほどのダメージを受けていた天使も日がたち、ある程度落ち着いていた。
だが、全てが消えたわけでもない。

（とにかく今は会わないようにするしかねー。自分でどうするか決めないと
また混乱しちまうだけだ。殺してやると誓ったのも事実だけど、あいつに…
海斗に持った思いも中途半端じゃないんだ）

天使は決意を固めるようにストラップを手で包み込んだ。
それは強く、しかし優しく…

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あれから３日。
天使は一度たりとも姿を現さなかった。

未だにその原因は分からない。
用事があるだけかもしれない、怒っているのかさえ微妙だ。
あのときの様子は１つの感情では形容しがたかった。
分かっているのは俺が面を外したときに何か天使にだけ発動したキーがあったということくらいか。

「そーーっ……」

仮面を外したときということは素顔が関係あんのかなぁ、やっぱ。
でも、俺もこの年で痴呆なんてことはない。
あんな見た目の子だったら、流石に忘れることはないと思うんだがな…。
どこかで会ったかなー…。

まあ、でも用事があるとかは楽観的すぎるか。
それなら急に帰ったあれが説明できない。
あの唐突すぎる変化は結構な事態だよな。

「……せやっ！」

「むっ」

突如、口の中に異物が入ってきた。
む…味がある、というか甘い。
舌触りはふんわりとしていて、とろけるような食感が口いっぱいに広がる。

「いきなり何だ？」

「いえ、今のは私ではなくですね…！！そうです、松風が」

「ああ、オラはまゆっちのためなら人身御供として、役を買って出るぜー」

「いや、松風じゃそんなリーチないから。自動的に由紀江が犯人ね」

「あうあう…」

状況を説明しよう。
ここは川神学園の屋上で、今は昼休み。
由紀江が弁当を作ってきてくれたので来たのだが。
今さっき考え事の最中に、箸で卵焼きを食べさせられたようだ。

「てか、いきなりどうしたよ？」

「いえ、なんか海斗さんがボーッとされていたのでこれはチャンｓ…じゃあ
りませんでした、早く食べてもらおうと思って」

「あー悪かったな。ちょっと考え事してた」

「・・・・・・・・・」

ん？
由紀江が黙って、こちらをじーっと見つめてくる。
こういう下から見上げるような視線っていうのは意識的に行われてるのか？
そうだとしたら、駄目だぞ。
小動物的で破壊力が半端ないから。

あー、じゃなかった。
この視線の意味は流石にもう分かるようになった。

「卵焼き美味いぞ、由紀江」

「あ…、はい！ありがとうございます！」

ホント可愛い奴だね。
だって、真剣（まじ）で美味いんだぞ、この卵焼き。
美味いものを美味いといって、喜んでもらえる。

なんという美味しい話なんだ。

「でも由紀江が食べさせてくるなんてな」

「いえ、それはすみません。私なんかが勝手なことして」

「いやいや、嬉しかったって。俺なんかのために弁当作ってきてくれて、こんな可愛い後輩に食わしてもらってんだから」

「うひゃぁぁぁぁぁぁ！！」

「なんてことしてくれんだよ、海斗ー。まゆっちのライフはもう０だぜ。かよわい女の子にその言葉はラスボス級の一撃なんだぞーー」

「松風もいて楽しいぞ。由紀江の大切な友達じゃなかったら、家に持って帰りたいくらいだ」

「グハッ、そんなオラにまでダメージを！さすが、かい…と…だぜ」

なにをオーバーリアクションをしているんだ。

由紀江といるとにぎやかで飽きないな。

弁当も美味いし、言うことなしだな。

「ほーら由紀江、意識あるかー」

「……ううう」

「残りの弁当食ってもいいか？」

「いえ、それは私が！！」

「復活はやいね」

何故かコントみたいになっていた。
たわいもない雑談をしながら、昼食のときは過ぎていく。

「そういえば、私総理とお友達になったんですよ」

「タコとかイカとかにあるアミノ酸？」

「それはタウリンだぜ、海斗ー」

「総理です、総理大臣の人とお友達に」

かるーい現実逃避だったんだがな。
総理大臣ってあれだよな。
あのーあれだ、日本の偉い人。

「え？そんなのが日常的にありえるの？それを普通のトーンで聞いた俺はど

う返せばいいんだ」

「なんかたまたま川辺にいらっしゃって、それで…。これも全部海斗さんのおかげなんです。あのときは自分にこんなにお友達が出来るなんて思ってませんでしたから」

「だから、それは由紀江の魅力だって。自信も持とうな。料理も美味いし、面白いし、かなりスペック高いぞ」

「いえいえ私などまだまだ未熟者で…」

ポンッ

ブンブンと音が鳴りそうな勢いで首を振る由紀江の頭に手を置いて、優しくその黒髪を撫でた。

「料理の味だけはこの俺が一人前を保証するがな」

「…ありがとうございます」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

「最近ユートピアの横行がいまいちですね。何者かが片っ端から根源を潰しているというところでしょうか」

「それにしても活発すぎだろ、そいつは」

「このままでは困りますね。行ってくれますか？」

「ボクにまっかせなさ～い」

79話　「陰謀」（後書き）

ありがとうございました。
原作を知っている人は予想できる展開でしょうが
まあ次回また動きます

80話　「刺客」（前書き）

なかなか物語が進んでいきますね。
そして戦闘シーンは三人称の方が書きやすいような気がしてきた今日この頃。

80話　「刺客」

すっかり時間帯は夜だ。
人目が少ない裏通り。

昼に美味い弁当で取り入れたエネルギーを夜に発散。
なんと健康的な生活か。
生活習慣病の人とか見習ってもいいぞ。

「ガハッ」

「ゴフッ」

まあ健康的といっても、不良を倒してるだけなんだが。
簡単に見習わせるもんでもねーな。

それにしても、こいつらで何人目だ？
最近ほんとにうじゃうじゃいるので、狩りやすいのは非常に助かる。
けど、こうなると心配にもなるよな。
狩っても狩ってもきりがないというか。

「では徴収ターイム」

恒例のかつあげ…もとい正義の鉄槌の時間だ。
倒れた体から財布を探す。

「おっ」

相手の懐に突っ込んだ手に感触がある。
しかし、引っ張り出したそれは目当ての財布ではなかった。

「…袋？」

正確には白い粉が入った袋。
断じてクリープとかではないので、あしからず。
というか、この人相の悪い野郎が持っている時点で危険な香りＭＡＸだ。

袋を破いて、中身を少量指ですくう。
それを口に持っていき、なめとった。

うん、なんかのクスリだな、こりゃ。
だが有名なやばい物ではないっぽい。
最近流行ってる新しいやつかな？
そういや、ワン子がこの前…

“ユートピア？みたいな悪いお薬が広まってるんだって”

なるほど、これがそのユートピアだな。

大層な名前だ。
依存性もそこまでは強くないが、皆無というわけじゃないな。
具体的な副作用は知らんが、錯乱・幻覚ってとこが妥当か。

こんなもんが広まってるってのはやばいぞ。
麻薬のような知名度はない軽く手を出せるクスリ。
心の弱い学生なんかは格好の的だ。
んー、こいつどうしようか…

「……！」

ヒュッ

耳元に風を切る音が響く。
そこには誰のものか分からない拳。
避けるのがあと数秒、あと数センチでも狂っていたらかなりのダメージだ。

一旦、その場からは距離をとる。
その動作中に思考を働かせた。

人気のない通りだったせいか襲ってきたのは１７人。
俺はそいつらをついさっき１人残らず倒したはずだ。
いくら暗かったとはいえ、見逃すことはありえない。
同様に意識をかり損ねていたというのも考えにくい。

ならば、考えられるのは新手。
だが、いくらクスリに気をとられてたとはいえ近づかれすぎた。

別に俺が自分の未熟さを反省しているのではない。
それだけ相手が強いということ。
そこらの雑魚とはランクが違う。

距離は十分にとった。
相手の姿を改めて確認する。
一体どんな奴か、この目で見てやろうという思いで。

だが、そこには予想外の解答。
そこに立っていた者は大きなローブで頭から体まで、全てを隠していた。
明らかに正体を知られないようにした準備。

「お前は何者だ」

「・・・・・・・・」

「こいつらの仲間か？」

「・・・・・・・・」

「何故俺を狙った？」

「・・・・・・・・」

どうあっても、隠し通す気らしい。
声すら発さないとは随分な念の入れようだ。

これではその表情は勿論、性別すらも判別できな…
判別でき……？
あー……。

どうやらこいつは女だな。
なんで分かったかって？
その口は何も語らないが、そのでかい胸がここぞとばかりに主張をしている
からだ。
ローブでも隠しきれないことはあるんだよ、膨らみとかな。

まあいらんことは置いといて、本当に何故狙われたんだ。
ここに転がっている奴らの仲間という線は自分で言っておいてなんだが、可
能性として低い気がする。
それならば正体を隠すというのがおかしな話だ。
仲間であるというつながりから辿られる恐れがあるうえに、もう倒されてい
るのだから俺が去った後にでも回収すればいい。

となると、このクスリ関係だよな。
この状況でクスリを取り締まる正義の味方なんてことはないだろう。

考えられるのは大まかには2つの立場。
1つは需要。
こいつ自身が欲していて、手に入れたかったから。
1つは供給。
売りさばくのを邪魔されたと思い、腹を立てた。
その他考え出したら、きりがないので割愛。

結局大事なのはそんなことじゃなく、これからどうするかだ。

「黙秘権を行使するのはいいけどよ、理不尽に俺だけ殴られんのは勘弁なんだよね…！」

距離を詰めて、拳を振り抜く。
だが、あろうことかそれは相殺された。
振り上げられた足の蹴り上げによって。

「…なっ！」

そのまま回し蹴りが来る。
咄嗟に腕で受けたが、女とは思えない重い一撃だった。
さっきからのこのアクロバティックで多彩な足技。
おそらくテコンドーか何かだろうな。

決して生半可なものではない。
こいつの場合、とことん磨き上げていて、技のキレも威力も凄まじい。
普通に考えて、拳を蹴りで相殺されるなんてありえない。
幼い頃からやっているのか、相当なセンスの持ち主なのか。
どちらにせよ、甘い敵ではなさそうだ。

は、面白いじゃねぇか。
不良だけじゃ満足できてなかったとこだ。

「お前なかなか強いな。だったら、こっちも手加減抜きでいくぞ」

「・・・・・・・・・」

相変わらずだんまりか。
女の子には悪いが、俺もやられるがままはお断りだからな。

瞬間、こちらが近づこうという前に相手が動く。
それはまさに俊足。
あの脚力をバネに使っているんだ。
普通では見切れない。
空いていた距離は一瞬で詰まった。
その勢いを殺さずに鋭い蹴りが放たれる。

「……っ！」

思わず息を呑んだのは、沈黙を守ってきたローブの相手。
今、俺たちの状況を第三者が見たならば、互いの足が空中でクロスしている
だろう。
俺は相手の助走で威力を増した蹴りを、己の脚で相殺した。

いや、相殺ではない。
名のある武道家でも気づくかどうかの小さな揺らぎ。
その少しバランスを崩した隙を見逃さなかった。

（投げ技で終わりだ）

殴るよりは幾らかましだろう。
そう考え、相手を掴んだが…

スッ

俺が掴んだのはローブのみ。
くそ、上手いかわし方しやがって…
…待て、身を隠していたこれが俺の手にあるってことは？
慌てて前を見る、そこには俺の知った顔。

「小雪…？」

80話　「刺客」（後書き）

ありがとうございました。
遂に小雪登場。
結構ファンも多いキャラなのではないですかね。
かくいう、自分も大好きです。

８１話　「白い悪魔」（前書き）

今回なんというかアレです。
基本自分の小説は文才０％妄想８０％ノリ２０％で成り立っているのですが、今回その妄想が特に爆発しています。
見てくれる方は覚悟してどうぞ。

81話　「白い悪魔」

目の前の少女は榊原小雪だ。
タッグマッチでは準決勝で対戦し、ビーチバレーではペアにもなった。
なんだかんだで関わっているし、見間違うはずもない。

「小雪か？」

それでも確認せずにはいられなかった。

「こんなとこで会うなんてねー、カイト。」

間違いない、この抜けるようなふわふわした喋り方。
榊原小雪のものだった。

「1つ聞いてもいいか？」

「もうバレちゃったし、べっつにいいよ～♪」

「なんで俺を攻撃してきたんだ？」

「そんなの、倒そうとした相手がカイトだったってだけだよーん。
カイトを

狙ったわけじゃないもん、アハハハ」

なんか俺の考えてたことと違うぞ。
何故こんなに軽く語っているんだ。
てっきり、もっとシリアスな感じかと思っていたのだが、本人からはそんな
様子は感じ取れない。

「前、ビーチバレーでペアになって、お前気が合うとか言ってなかったか？
俺も結構仲良くなったと思ったんだがな…」

「ボクもおんなじだよー♪カイトからはおんなじニオイがするしー。」

「だったら、どうしてこんなことすんだ？」

「ボクは言われたとおりにするだけだよん、相手が誰でもカンケイなーい。」

言われたとおり？
誰かの命令で動いてるってことか？
ローブで姿を隠したのも、俺に攻撃を仕掛けてきたのも。

小雪に命令できて、こんな念を入れるような奴。
つまりは小雪と仲が良くて、頭が働く奴。
そんな奴、俺の知ってる限りでは1人しか思いつかん。

「葵冬馬か…」

「やっぱカイトも頭いいんだねー。そうだよ～♪」

確かあいつ医者の息子で金持ちだったな。
はぁ、そして今回のユートピア。
このクスリが元は医療用のものならば、手に入れることも容易なはずだ。
なるほど、つながったな。

「このクスリを回収しろとでも言われてきたか。」

「すっごーい、もうクスリって分かっちゃったんだー。でも、回収じゃなっ
いよーだ。」

「なに?」

「ボクが頼まれたのはクスリが広まるのを止めてる誰かの排除、えへっ」

「お前そんなこと頼まれて、何の抵抗もなく聞き入れんのか?」

「トーマはボクが困ってるときに助けてくれたんだよー。だから、トーマの
お願いならボクはどんなものでも役に立つ。」

「けど、友達なら悪いことしてんのは止めるべきだろ。」

「ボクはトーマが望むとーりにするだけだよー♪」

なんてことを平然と言いやがるんだ。

やっぱり、何か違和感を感じる。

「……けど、隠すべきその作戦をベラベラ話していいのかよ。」

「ダイジョーブだよ、だって…」

「なっ!?」

咄嗟に下がった俺の目の前で砕ける地面。

なんのことはない。

小雪が打撃を放ったのだ。

冗談や嘘ではない本当の殺気がこもった殺しの一撃。

「証拠は何も残らないからねっ♪」

今、確信した。

彼女の言葉を聞いて、彼女の目を見て、彼女の気を感じて。

これは絶対に止めなきゃいけない。

真剣(まじ)でな。

「ごめんね～♪カイト……壊れちゃえ」

今までで一番の速さ、強さ、キレ。
全てを兼ね備えた最強の攻撃。
“お願い”を果たすための必殺。

「……え？」

榊原小雪は何が起こったのか分からなかった。
音は遅れた、姿は消えた。
認識できたのは全て終わった後。
小雪は放とうとした拳は後ろ手に拘束されていた。

「悪いけど、お前の約束は果たさせない。」

言葉は小雪の意識を呼び戻す。
やっと、状況がつかめる。
そう、現状は理解できた。
だが、それから得られるのは海斗に自分では及ばないということだけだった。

俺は手を振り上げた。
それは相手を殴るためのモーション。
そのとき小雪はギュッと目を瞑り、微かにその身を震わせた。

「やっぱりか…」

「……ぇ？」

振り上げた手は何もせずに下ろす。
この反応、間違いない。
予想は確信へと変わった。

「小雪、お前虐待されてただろ」

「・・・・・」

あえて、探るようなことはしない。
遠まわしに言うようなこともしない。

こいつの異常なまでの明るさ。
それはポジティブな性格なんかじゃない。
ずっと感じていた違和感の正体。

「だから、そんな無理して笑ってんのか」

「それは違うよ、カイト。確かに虐待はされてたけどねー。ボクが笑ってた
ら殴るのやめてくれるんだよ。そんなお母さんも首絞めたら死んじゃったけ
ど～、きゃははは」

「いや、違う」

「違わないよー。ボクはね、もう壊れちゃったんだ。涙なんて出ないし、笑
ってるのがフツーなんだよーだ」

「……お前あんまフザけたこと言ってると容赦しねぇぞ」

「ひっ……！」

小雪の意思とは関係なしに喉がなる。
それは避けられない生き物としての危機感知。
酷く冷たい殺気にあてられたからだ。

「お前友達が悪い道に走ってるのをなんとも思わないのか。」

「ボクはトーマが望んでるなら…」

「ちげぇよ、そういうことを言い訳にすんじゃねぇ。おまえ自身はどう思っ
てるんだよ。」

「ボクは……心が壊れてるから」

「壊れてなんかねぇ！ただお前は自分で置いてきただけだ。自分で辛いから手放したんだ。」

「・・・・」

「確かに昔は辛くて下ろしたくなったのかもしれない。でも今のお前はそれを背負えるはずだ。今お前が背負って歩いていくのを邪魔する奴がいるのか？今お前の荷物を重くしてくる奴がいるのか？」

「……っ」

「もしそれでも重いなら、俺が一緒に持ってやる。自分の大切な友達に荷物を持たせて負担をかけたくないのなら、他人の俺をいくらでも巻き込めばいい。」

「……ぅ」

「言っておくが、ただじゃないぞ。俺は依頼は受けるからな。荷物を持ってやる代わりに俺の前で感情を隠すようなことはするな。それがお前の払う依頼料金だ。頼れるか心配なら、もう一回分からせてやろうか？」

そう言って手を振り上げる。
やはり、体には刻み込まれているようで身をちぢこませる。
けれど、拳を握りこむことはない。
その手を俺は頭に置いた。

「これからは手を振り上げたら撫でてやる。だから痛いことなんかじゃない。
そんな嫌な思い出はこれから上書きしてやる。すぐに変われなんて言ったり
しないからよ、無理しないで素直になれ。」

努めて優しい口調。
俺はその瞳をしっかりと見据え、安心させるために笑いかけた。
勿論、手はそのままに。

「……ひぐっ」

小雪は次の瞬間、全体重を預けて抱きついてきた。
まるでその姿は何かを許された子どものよう。
俺の上着に顔を押し付けて、そこからは鼻をすするような音が聞こえる。

「…っ……ボク、素直になる。…カイトのこと信じたい。でも、涙は出ない

んだよ。辛いことは、もう海斗がなくしてくれたから……ひぐっ…
…」

「…ああ、そうだな」

その震える背中を撫でてやる。
さっきまでは人間として危なかった。
小雪のようないい奴は環境に恵まれるべきだ。

「俺と勝負したんだからな、汗くらいかいて当然だ。風邪ひかねぇ
ようにし
っかり俺の服でふいとけ」

「…うん」

その言葉とともに、ギュッと背中に回された手に力がこめられた。

81話　「白い悪魔」（後書き）

ありがとうございました。
基本原作でも感情表現は乏しかった小雪なんですが、
どうしてもここには涙が欲しかった。
やはり、それを素直に表せるという存在を
作ってあげたかったんです。

82話　「再会」（前書き）

最近タイトルがかぶってないかと心配になります。
何話も重ねると、ありきたりなものはやはり
出したように感じてしまいますね。

82話　「再会」

「どうだ？落ち着いたか？」

「うん！もう元気バリバリだよーん。」

目の前には小雪の笑顔。
しかし、それは今までのものとは決定的に違う。
ひきつったような笑いではなく、吹っ切れた素直な笑い。
やっぱ、こっちの方が女の子には似合ってる。
見ていてこちらも幸せになる笑顔だ。

…まぁ、その代償として俺のシャツはびしょびしょなんだが。
ったく、凄い量のなみd…じゃなかった、汗だな。

「んじゃ、元気ついでに復習だ。これから俺の前では？」

「素直になるー♪」

「よろしい。じゃあ、小雪は自分の友達が悪い道に進むのをどう思っている
んだ？勿論、葵冬馬の望みとかは考えずにだ。」

「…ボクはトーマが決めたことなら悪いとは思わないけど……やっぱり悪い
ことはしてほしくない。笑っててほしい！」

「ああ、よく言ってくれた。それなら俺もようやく協力できる。」

「え？」

「言っただろ、お前の荷物は俺が持ってやるって。小雪が助けたいと思ってないんだったら、第三者が介入することじゃないが、小雪がそれを望んでいるなら俺はいくらでも手伝ってやる。」

「うんうん！ありがとー、カーイトっ♪」

「うお！」

その跳ねるような言葉と同時に小雪はまたこちらへ跳びかかってきた。
反射的にその体を抱きとめる。
俺の反応に満足したかのように小雪はすりすりと頬を寄せてくる。
…って、そうじゃなくて、

「もう落ち着いたんだろ？」

「～♪」

俺の問いなど聞こえていないかのように、いや明らかに聞こうとしていない
態度ですっかり楽しんでいる。

せっかく一段落ついて、離れたと思ったのにどうしたんだ？
頭に疑問を浮かべていると、小雪はいつの間にか俺の目の前から背中の方に
移動していた。
そして、その背中に全体重をかけてくる。

「今度はどうしたんだよ…」

「えっへへー、だって背負ってくれるんでしょ、カイト。」

「ったく、しょうがねぇな。じゃあ、そこでちょっと俺の言うことを聞け。」

「うぇーい」

小雪から肯定（？）の意見を受け取った俺は女の子1人を担いだ態勢のまま、
話し始める。

「まず、葵冬馬を助けてやるのも今すぐに出来るわけじゃない。こちらも情
報が少ないし、ただ乗り込んで警察に突き出せば解決する話でもないしな。
だから、小雪には今まで通り友達の側にいてもらうからな。小雪もその方が
いいだろ？」

「うんー♪」

「そして俺はこれからクスリが出回るのを最小限に抑えておく。これなら、
直接的干渉をしなくてもあいつの罪を軽く出来るだろう。それで今回のこと
については取り逃がしたことにしろ。相手の顔は分からなかった。
仕留めよ
うとしたが逃げ足が異常に速かった。理由はいくらでもあるし、お前らの仲
なら疑われることもない。」

「ふんふん」

「別の刺客をあいつが派遣してきても、俺が捕まらないってのは小雪はもう
よく分かってるな？」

「おうとも～。カイトのことは信じてるよん♪」

「じゃあ当分は俺がいつも通り不良を倒して、広げないようにしとくってこ
とでいいか。」

自分の中の結論を口にしたときだった。

「そうはいかないねぇ。」

「あ？」

「帰りが遅いからって見てくるように言われてみれば、まさか本当にこんなことになってるとはねぇ。しかも負けるどころか、相手に情けをかけられているなんてねぇ、やれやれ…。」

喋っていたのは目つきの悪い女。
髪が紫なのもあるのか、何か毒々しい雰囲気が漂う奴だ。
その後ろにも2人を引き連れているようだった。
…って、あれ？

「天使？」

「え！？へ…かかか、海斗！？」

お互いに暗くて視認もままならず、すぐに気づくことができなかった。
だが、間違いない。
その後ろにいた2人のうちの1人は最近会っていなかったが、俺のよく知った人物、天使だった。
ゲーセンでいきなり帰ってから3日ぶりくらいの再会か。

「こんなとこで会うなんてな…、大丈夫だったか、天使？」

「大丈夫って何がだよ！ウチは別になんともねーっての！変な勘違いすんなよな。」

「なんか元気そうだな、良かったわ。」

「っ～～～、だからウチは…！」

天使と海斗が会って早々言い合いを繰り広げている。

まあ、言い合いというよりは海斗の素の発言に対し、天使が食いかかっているというだけなのだが…。

天使の心境としては、自分から会うのを控えていたのに、完全に予想の範疇を越えたところで遭遇してしまったことで、驚きや恥ずかしさなど様々な感情に戸惑っていた。

その焦りを悟られないように乱暴な言葉を発していたつもりだったのだが…

それは客観的に見れば、明らかに動揺していた。

姉妹ともなれば、尚更その異常な天使の様子に気づかないはずもない。

その言い合いも天使の攻撃的な口調とは裏腹に敵意は感じられず、むしろ周りなど忘れて世界に入りきってしまっているくらい。

完全に今までに見たことのない天使の姿だった。

「まあまあ落ち着けって、天使。」

「ぅ…もう海斗のバカヤローーー！！」

静かなはずの裏路地は今夜は騒がしかった。

82話　「再会」（後書き）

ありがとうございました。
さて、天使も登場。
どちらに傾くのか。

83話　「小悪魔小雪」（前書き）

小雪の小は小悪魔の小。
そんな気がしている自分がいます。

83話　「小悪魔小雪」

すっかり辺りは暗くなり、街灯すらもない裏路地。
いつもは猫の鳴き声１つさえ聞こえないような静寂に包まれた場所なのだが、
今現在は違った。

「そんなに騒ぐなよ、天使」

「うわぁぁ！もうしゃべんなよ！！」

叫ぶ天使の顔は発熱しているんではないかというほど赤かった。
だが、天使はオーバーヒートし過ぎて、気にしている余裕がなかったのだ。
他に人がいるということを。

勘のいい亜巳はその様子に気づかないわけがない。
顔が赤いこともそうだが、何よりもお互いの“呼び方”。
正直なところ、天使が相手をどう呼んでいるかはそこまで問題ではなかった。
問題なのは天使が名前を呼ばれている、なおかつそこに怒りを示すような仕
草を微塵も見せないことだった。
先日の家での会話を思い出す亜巳。
頭の中でそれらの事象は完全に合致する。

「天、まさかこいつがアンタの言ってた…」

「えー、なになにー。この人がそうなのー？」

「うわぁぁぁ、何言ってんだよ、アミ姉！タツ姉！違うから、全然違うから！！
頼むから変なこと言わないでくれ！」

「何も違わないだろう？だって、名前呼ばれて嬉しがって…」

「あああぁぁ！違うんだって！そうだけど…合ってるけどちげーんだよ！！」

「ああ、分かった分かった。へぇ、天はこういう男がねぇ。」

「天ちゃん、がんばれー。お姉ちゃん応援してるから。」

「あぁぁー、もう！」

天使は亜巳のサディスティックな攻撃ならぬ口撃に、顔をますます紅潮させ
て頭を抱え込んでしまった。
辰子の場合、完全に素なのだが。
そんな天使は気にせず、亜巳は海斗に向き直る。

「つーか、アンタの顔どっかで見たような気がするねぇ…」

「あん？俺はお前のことは知らんし、初対面だと思うが？」

「ふぅん、まぁいいさ。とにかく、逃がすわけにはいかないねぇ。そいつの
失敗は私ら“板垣三姉妹”が取りかえさせてもらうよ。」

そう言って、その女は俺の顔の少し横を指してきた。
一瞬どこを指しているのかと思ったが、すぐに納得がいった。
少し顔を横にやれば、俺の左肩に白髪が眩しい女の子が顎をのっけていた。
ていうか、いつからその顔乗っけてたんだ。

そうして見てると、小雪がこちらを向いてきた。
当然そちらを向いていた俺と目が合う。
なんか、振り返ったときに良い匂いがするのは女の子だからだろうか。

「にゃっははー、カーイトっ♪」

「ちょっ…」

目が合った途端にニコーッと笑い、ぎゅうぎゅうと抱きついてくる。
非常になついてくれているペットみたいで可愛い、可愛いのだが…。
いや、もう本当に君は自分のスタイルを認識しようか。

「な、なんで、海斗はそいつとそんなにくっついてんだよ！」

いきなり天使から声が上がる。
さっきまでそこらでノックダウンしてたはずなんだが、いつの間に復活してたんだ。

というか、なんでと言われてもな…
俺の意思ではないし、たぶんこんだけ首に腕を巻きつけられていると、振り払っても効果ない気がするし、何より俺に実害が及ぶ。
普通の女の子ならともかく小雪の力だったら、やりかねない。
俺も死因が同年齢の女の子に絞殺されたからなんて御免だぞ。

「いや別に故意でくっついてるわけじゃなくてだな…」

「大体、背中のお前はなに海斗にベタベタしてんだよ！どーいうつもりなんだよ、コラ！！」

「へへーん、そんなの君には関係ないよーだ。ボクはカイトと一緒にいたいんだもーん♪」

小雪はそうして、頬をすり寄せてくる。
こいつ本当に遠慮がないというか、無防備すぎる。
そっけない猫ほど一度なつくとなかなか離れないようになるというが、まさに今の状態がそれである。

「な!?テメェ、海斗から離れやがれ!!」

「なんでなんで~?海斗にくっつくのはボクの勝手じゃん、ね~海斗?」

「いや、そこで俺にふられても困るんだが…」

そこへヒュッと空を切る音が耳に届いた。
咄嗟に動いた俺のいた場所の地面は割れていて、そこに叩きつけられている
鈍器のようなもの……これはゴルフクラブか?
それを振るっているのは勿論目の前にいる天使。
というか地面を割るほどの破壊力って凄まじいな。
あのか細い腕のどこにそんな力がつまっているっていうんだ。
そういや…

“ウチはつぇーから大丈夫だ”

あれは誇張でも強がりでも何でもなかったようだな。
そりゃ日常生活の中だったら、十分な威力を持った凶器になりうるが、武器
というカテゴリの中では扱いづらいし、それほど強いわけではない。
だが、天使はその特異な武器を完全に使いこなしていた。
ゴルフクラブは手になじみ、まるで強靭な腕となり、少女の力の無さという
不利をカバーしているかのようだった。

「いや、なんで俺を攻撃するんだよ！」
「海斗がその女と一緒にいるからだろ！」

ヒュンヒュン

天使は攻撃の手を緩めることはない。
むしろ、その攻撃は勢いを増していた。
ゴルフクラブの軌道が縦横無尽に襲い掛かってくる。
俺は小雪を背負ったまま、ひたすらに避ける。

「なんで俺が小雪と一緒だと駄目なんだって……おわっ」
「そ、それは……うっせー！！とにかくムカつくんだよ！！」
「いや意味わからんし……うぉっと」
「うっはー、揺れる揺れる～」

そんな攻防が繰り返される中、

「天、目的を忘れてないかい…」

亜巳は呆れて、そう呟くしかなかった。
そして、派遣されてきた板垣三姉妹のもう1人である辰子はというと…

「Ｚｚｚ……」

立ったまま寝ていたのだった。

83話　「小悪魔小雪」（後書き）

ありがとうございました。
なんというか小雪は…
一度心を許せば、極端なイメージがあります。
いや、あくまで妄想ですけど。

８４話　「天使ＶＳ小悪魔」（前書き）

毎度のことながら、三人称と一人称が
混ざったごちゃごちゃ文で読みにくいですが、
よろしくです。

８４話　「天使ＶＳ小悪魔」

「オラオラ！」

「だから、なんで避けてんのが俺なんだ…っての！」

天使いわく攻撃をしているのは俺の背にいる小雪ということなのだが、おぶ
っているので当然避けるのは俺ということになる。
そして、ただ避けるのとはまた勝手が違う。
通常ならば首を最小限に動かすなどして、いくらでも楽に回避できるのだが、
あくまでそれは自分１人でこそなのだ。

しかし今現在、俺はもう１人の身も預かっている。
背中の存在にも気を遣わなければならない。
つまり小雪に当たらないようにいつもより大きな動きで保険をかけなければ、
万が一ということもある。
その当然の結果として…

「はぁ、はぁ……」

「オラァ、当たりやがれ！！」

「っ！」

ゴルフクラブの先が服をかすめる。

ちっ、まずい…。

小雪を気遣うあまり、慣れない不自然な動きと無駄に大きいモーションにな

って、柄にもなく疲労がたまってきている。

これがただの不良相手なら、いくらやっても疲れはしないのだが、

天使はそ

こらの実力者には劣らずとも勝る強さだ。

全員を知っているわけではないが、正直川神院の僧よりも強い気がする。

って、冷静に思考してる場合じゃなかった。

天使のゴルフクラブさばきは見事の一言であり…

ヒュッ

（ちっ…！みすった…）

女の子の攻撃とはいえ、ゴルフクラブでの一撃。

出来るだけ避けておきたかったが、まあ耐えられないことはないだろう。

そう思って、これから襲うであろう痛みを覚悟したのだが…

ガシッ

当たる寸前でその鉄の凶器が止まる。

そこに伸びていたのは自分のものではない、白く透き通るような手。

「カイトに手ぇ出しちゃだめー」

「なっ、元はと言えばお前が…、っていうか、馬鹿力で掴みやがって。その
手を離せ！」

「小雪、何して…」

直後、俺の背中から飛び降りた小雪はその優れた脚力で蹴りを放つ。
その威力は俺も体験済み、凄まじいものだった。
いや、不意打ちにゴルフクラブでしっかりと防御をとっている天使を褒めるべきか。

「ボクもカイトのために戦うぞ～♪」

「いや、小雪ここで戦っても仕方ない。ここは逃走したほうが…」

「そうはいかないねぇ。」

「おっと！」

「ふふ、なかなかいい反応だね。」

目つきの悪い方が邪魔をしてくる。
その得物は棒。
棒と単に言ってしまうと、それほど脅威には聞こえないが、これほど応用性
のある武器もあまりない。

「流石にただ見逃がしてはくれないか…」

「当たり前だよ、私らも狩りに来てるんだから。」

「これは倒さないと進めないってなノリかな?」

「お前が私を倒すか…面白い冗談だねぇ。天!そっちの女は頼んだよ、処分
はあとで決めればいいさ。」

「ああ、この女はマジムカつく。ウチがブッ殺す!　…けどアミ姉、あんま
り海斗に油断…」

「じゃあ任せたよ。私はこの男を狩る。」

（くっ、あまり離れすぎるのも良くないが、1対1のほうが都合が良いか）

そうして、俺は目つきの悪い女と少し移動し、互いにさしの勝負になるよう

距離をとる。
2つの戦闘が始まった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

Side　天使

「ほっほーい♪」
「このヤロー！！」
またゴルフクラブと相手の脚が激突する。
相手は終始軽い調子だったのに、かなり本気だった。
その証拠にウチのゴルフ護身術と真っ向から勝負してやがる。

「うらっ！」
「ひょいっと」

気にくわねぇ…
攻撃を避けられることがじゃない。
馬鹿にしたみたいにふざけた口調がじゃない。
この女は何か知らねーけど気にくわねぇ！

「なんでテメェは海斗にあんなひっついてんだ！」

ガキン！
フルスイングも脚で受け止められる。

「関係ないじゃーん♪」

「アイツはお前の敵だろうが！」

ガキン！
攻防は収まらない。

「別にトーマを裏切るわけじゃないもん。ボクはただカイトが好きだから、
信じられる大好きな人だから一緒にいたいだけ！」

「ぇ…」

ドガッ
ぶつかり合うような金属音は響かない。
天使からの攻撃は放たれず、蹴りがヒットした。
飛ばされた体は地面に倒れこむ。

今あいつは好きだからといった、海斗のことを。
敵だけど、そんなのは関係ないと。

ウチはそんな風に軽くは割り切れない。
殺すと一番最初に誓ったからそれに従うべきだと思った。
けど、予想よりも自分は海斗のことを気にしていて、時間をかけて忘れれば
いいと思った。

けど、今気づいた。
海斗のことを好きだと堂々と言ったこの女。
ためらうことなく、海斗の背中に抱きついていたこの女。
それがウチは何よりも気に食わなかった。
そして……とてつもなく羨ましかったんだ。

横たわった体に力を入れて、立ち上がる。
すぐに女のほうに走り出す。
ゴルフクラブを振るう。
それに反応するように相手の脚が出るが、こちらは振り切るつもりなんては
なからない。
フェイントを入れた武器を引き戻し、相手の体に一撃を見舞った。

「うぁっ！」

小雪の体が吹き飛ぶ。
それを見据える天使の瞳は明らかに違っていた。
吹っ切れたような輝く瞳。

迷うことなんて何もなかったんだ。
他の女が寄り添ってるだけでこんなにもムカつく。
目を合わせるだけで心臓がどきどきするし、緊張で上手く話せない。
そして、こんなにも一緒にいたいと思ってしまっているんだから。
第一印象なんて塗りつぶされるほど、海斗の好きなところを見つけてしまっ
ていた。

「いてて…やったな～」

立ち上がる小雪に天使は叫ぶ。

「ウチだって海斗が好きだ！テメェよりもずっとな！だから、テメェなんか
に思いでも実力でも絶対に負けねー！」

「ボクのほうがすごい好きだもん！誰にも負けないよーだ！」

原動力は恋。
二人の乙女が激突する。

Side out

８４話　「天使ＶＳ小悪魔」（後書き）

ありがとうございました。
今回はなんといっても自分の気持ちを
固めた天使です。
そしてまたライバルが増えるんですね…

85話　「逃走」（前書き）

んー毎日更新が順調にいっていたと思ったのですが、また少し忙しくなりそうです……大丈夫か

85話　「逃走」

―一方、亜巳と海斗の方は…

「さーて、どういたぶってあげようか。」

「こっちも余裕はないからな。さっさと終わらせて、逃げさせてもらうぜ。」

「出来るもんならやってみてほしいねぇ。」

相手が構えるのは棒。
棒とはいっても、ちゃちな物ではなく、武器にカテゴライズされるきっちり
とした造りのものだ。
サイズもそれなりで、両手で構えるような長さ。
勿論それだけリーチも伸びている。
西遊記の如意棒なんかを想像するのが一番近いだろう。
流石に伸び縮みはしないと思うが…。

「小雪も回収しなきゃいけないし、やっぱ倒すしかないか。」

「ふふっ、せいぜい楽しませておくれよ。」

相手の棒術が襲い掛かってくる。

それを1つ1つ慎重に避けていく。
棒術はかなり応用性がきくものだ。
払いの動作の途中で突きにシフトすることも可能。
故に避けたからといって、そのあとも一瞬も気を抜けない。

「ふぅん、避けるのは上手いと褒めてやるが、回避だけじゃあいつまで経っ
ても決着はつかないよ。」

確かにそうだ。
これではいつまで経っても勝負は終わらない、
だが、そんなのは承知のうえだ。

一見、微塵も隙がないような流れるような棒術。
本来なら、カウンターの入る暇もない。
ま、ないなら無理矢理すればいいだけだ。
他の攻撃よりも少しだけ、ほんのわずかに大振りな攻撃。
それを見逃すはずもなかった。

「なにっ!?」

瞬時に相手の攻撃をかいくぐり、その間合いを一息に詰めた。
そして放ったのは拳、狙ったのは相手の肘。
しかし、決して強くはない。
速く、正確に。

「くっ、お前何を…！腕に力が入らない。」

そう、今のは腕を痺れさせる一撃。
威力よりも衝撃を優先させた拳だ。
両手が使えなければ棒も自由自在には扱えず、技の幅も激減する。
相手がスキルが高ければ、なおさらでかい影響だ。
現に今は片手で棒を持っている始末。

「何故、たかが素人に…」

「まぁ、ただの運かな。」

（はっ！今やっと思い出した。こいつは海にいた奴じゃないか…。
天と竜が
負けたあの正体不明の男。そこまで顔は近くで見ていなかったが、
この強さ…
説明はつく。）

「それじゃ続行は不可能だろ。さっさと帰らせてもらうぜ。」

バン

そんな音が響いた。
見れば、俺の隣の地面から煙が出ている。

「正直、これはあまり使いたくなかったんだけどねぇ。片手になったんじゃ
仕方ないさね。」

手にしているのはいわゆるリボルバーという奴だ。
銃の中では威力低めとはいっても、あくまで銃の中の話、十分に人は殺せる。
ってか、それはずるくないか。

「今のは威嚇射撃。命が惜しいならさっさと…」

俺は話も聞かずに駆け出した。
あんなのと勝負する気はさらさらない。
小雪と合流して、さっさと逃げるほかにない。

バン　バン

続けざまに二発が襲ってくる。
今度は威嚇ではない、俺が避けてるから当たっていないだけだ。
とはいっても、どうも狙ってるのは脚のようだが。
命をとろうってことでもないが、怪我は気にしないらしい。
どうあっても逃がす気はないってことか。

そうこうしてるうちに少し離れたところに天使と小雪を見つけた。

「てぃりゃあああああ！！！」

ガキン、ガキン

「うぉらぁあああああ！！！」

なんだか相当激しい戦いを繰り広げているんだが…。
それに構っている場合ではない。

「おい、小雪逃げるぞ。相手が銃出してきやがった。」

「…カイトが言うならおっけーい。」

「おい、まだ勝負は…」

「じゃあ、さっさと背中に乗れ。」

相手が銃を持ってるとなると、バラバラに動くのは危険だ。
狙いは俺に絞られてると思うのだが、万が一ってこともある。
それならば、より安全なほうを。
おぶって一緒に行動した方が俺も守りやすい。

バン

くっそ、近づいてきやがった。
牽制のつもりだろうが、次も外してくれる保証はない。

「ほら、行くぞ。」

「うぇーい」

背中に重みを感じた瞬間、俺はスタートをきった。
どこへ向かうかは考えていられない、とにかく相手の射程の外へ。

「ちっ、逃がすか。天、追うよ！」

「タツ姉はどうすんのさ、寝てるけど。」

「起こしてる間に見失っちまうね…。しかたないね、タツは置いていくよ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

「はやい、はやーい」

くっ、流石にそう簡単には振り切れないか。
だが、相手がなにやらスタートでもたついていたおかげで距離は結構空いて
いる。
相手も迂闊に発砲はしてこれないといったところか。

このまま走り続ければ、いつかは逃げられるだろう。
そう順調に思えた矢先、前に人影が見えた。

「なっ…」

まずい、こんな時間に人がいるとは考慮していなかった。
銃撃に巻き込むわけにはいかねーってのに。
だが、近づいて見えたその顔はさらに予想外だった。
そこにはよく知った軍人の姿があった。

85話　「逃走」（後書き）

ありがとうございました。
やはり逃げる海斗。
いつになったら正面から戦うのか

86話　「二人乗り」（前書き）

まあ軍人で分からない人はいないですよね。
今回登場のあの人。
まさにねじ込みキャスティングですね。

86話　「二人乗り」

現在、銃を持った女に追われ、小雪と共に逃走中だったのだが、まさかのエンカウントをしてしまった。

「マルギッテ!?お前こんなところで何してんだ。」

「む、流川海斗…。その言葉に答える義務はない。」

「いや、でもこんな遅い時間に1人でって…」

「……っ…別にどうでもいいだろう。それより流川海斗、貴様こそこんな時間に何をやっている。」

「あ…!」

やばい、そうだった。

あまりにも予想外の登場だったので、今の状況をすっかり忘れていた。

開いていた距離は今のやりとりの間に詰められ…

まずい、射程圏内か!?

「マルギッテ、ちょっと悪い!」

「え!?は!?貴様何をして…」

「今説明してる暇はないから、我慢してくれ!」

「な、本当に何をして……きゃ!おろせ!!貴様こんなことをして、ただで
すむと…」

マルギッテが騒ぐのも無理ないが、それどころではない。
女の子を守れないことより、後で文句言われるほうが圧倒的にましだ。
俺はすぐさま飛び上がった。

バン

今までいたところに銃弾が撃ち込まれる。
ほんとギリギリだった。
マルギッテの抵抗に少しでもためらっていたら、危なかっただろう。
俺だけに被害が留まるかも分からなかったしな。

「銃声だと?貴様今どんなことになって……じゃない!本当に降ろせ、大体
なんでよりにもよってこんな恥ずかしいヤツなんだ!!」

「いや、そこについてはごめん。けど、背中は塞がってるし、女の子にはこ
れが適当かと…」

「っ！貴様またそういうことを…、それに背中が塞がっているというのは…」

「やっほー♪」

「確かお前は榊原小雪か…」

「ま、そういうことだ。我慢してくれ。」

「くっ…だが、これはその……いわゆる…」

「お姫様抱っこっていうヤツだな。」

「言うな。殺すぞ。」

トーンの低い声が至近距離で発せられる。
いや一方的に俺が悪いんだが、こんなに近くで殺気をあてられるのはきつい。
まじで顔とかは怖くて、見れん。

「あっはは、顔まっかか～♪」

「なっ！榊原小雪、変な言いがかりはやめなさい！」

「え？」

そう言われて、気まずいやら怖いやらで見れなかった顔を見てみる。

眼帯をしてない目と、目が合いその顔はすぐに逸らされた。
だが、その耳は確かに真っ赤に染まっていた。

やっぱり、お姫様抱っこってのは恥ずかしいもんだよな。
大体やってもらう奴も好きな人にやってもらうから、嬉しさと相殺で恥ずか
しさを我慢してるようなもんだろう。
少なくとも好きでもない奴にやられて、気持ちの良いものではない。
まあ、だからといって降ろすことも出来んが。

「悪いな、安全なとこに行ったら降ろすから。」

「私なら自分でも避けられる。だから降ろしなさい。」

「生憎と止まってる暇はないから。それに俺の勝手で巻き込みたくねぇ。い
やもう巻き込んでるな…。だからこそ、責任を持ってお前を守る。絶対に傷
つけたりさせねぇから信じててくれ。」

「〜〜〜！本当に貴様はなんなんだ！なんでそんなことを私がされなければ
ならない！」

「そりゃ女の子だからだろ？」

「ばっ…！この……くそ……！」

「カイトかっくいいー。」

「勿論、小雪も守るからな。」

「わーい♪」

「俺は約束は守るタイプだ、だから安心しろ」

「なっ…おま……っ」

もはや呂律が回ってないマルギッテ。
こいつ、ここまで女の子らしい反応がするんだな。
なんというか普段のきびきびした軍人のイメージとは全く違う。
こんな状況で不謹慎だが、思わず笑みがこぼれてしまう。

「な、何を笑っているんだ、貴様は！」

「いや、マルギッテも素だと可愛いんだな。」

「だぁっ！！もう降りる！！離しなさい、流川海斗！」

「いや、マジで暴れるなって！ほら、スピード上げるから、しっかりと首に
手回してつかまっとけ。」

「え？……ひゃっ！」

一気にスピードを上げる。

その急速な加速と、忠告どおりの不安定さにマルギッテは素直に両手を首に
まわしてきた。
もはや完全に素直な乙女となっている。
…首の後ろをつねっている痛みさえなければ。
まあ、そんな些細な抵抗で済んでるだけましか。

二人担いでいるので、そこまで差を開くことは出来ないが、射程圏内からは
出ることが出来ただろう。
むしろ、自分がある程度安全な状況におかれると、今現在のアブノーマルな
シチュエーションに思考がいってしまう。

非常に危険だ。
お姫様だっこにおんぶ。
その密着度は言わずもがな。
そして二人ともあれだ……でかい…。
これは違う意味で命が危ないんじゃないだろうか。
けど、今の俺に出来ることはただ走ることだった。

……………………………
…

―こちら追跡側。

「また、海斗は他の女と…！」

「天、あんた随分と本気なんだね…」

天使の問題は戦力どうこうではなく、そこらしい。
どうも目的も行方不明となっている。

「どうすんのさ、アミ姉。このままじゃ、いつか振り切られるぜ。」

「そこについては心配ないさ。この先は…」

86話　「二人乗り」（後書き）

ありがとうございました。
無理矢理感は気にしないでください。
これがご都合主義です！

８７話　「揺れる軍人」（前書き）

今回の話は前回のマルギッテＳｉｄｅというところでしょうか。
正直、前回のだけでフラグ立てたっていうのは流石に簡単すぎるのでこれで勘弁してください。

87話　「揺れる軍人」

Ｓｉｄｅ　マルギッテ

なんだか晴れない心。
そんな原因不明のもやもやを解消するために私は夜風に当たっていた。
別に仕事が上手くいっていないわけでもない。
ただこうして、ぼーっとしていると思い浮かぶのは1人の男の顔。

“流川海斗”

先日、クリスお嬢様から相談を受けた。
そして、私はその背中を押した。
それも私にとって初めての任務に背いての行動だった。

それは勿論、お嬢様に嘘はつきたくなかったことやお嬢様の意思を尊重したいと思ったのもある。
けれど、お嬢様が幸せになれないと判断したら、やはりどういう事情でも私が後押しすることはなかっただろう。

そうなると、私自身もあの男のことを悪い奴ではないと認識していたのだろう。
むしろ買い物のときといい、無駄に優しいところがある。
お嬢様をはじめ、色々な者があいつを好いているのも魅力があるこ

との裏づけということか。
そして、何よりあいつは未知の強さを持っている。
私も一敗を未だに取り返せていない。
そんな奴だからお嬢様を任せるという面では何の心配もないのだが。
正直、顔も知らない超エリートのＳＰをつけるよりも安心は出来る。

「はぁ……」

思わず溜息も出る。

今まではこんなことはなかった。
活躍できる環境は提供され、それに伴う実力もあったと自負している。
そして、今はその戦果によって見合った地位も与えられた。
何事も順調、後ろを振り返ったり、立ち止まることなんてなかった。

だが、現在の自分を見てどうだろう。
たった１人の男に思い悩まさせられている。
ここまで私の調子が狂わされたことはない。
それはお嬢様のことが心配だからなのか。
それとも……

「マルギッテ!?お前こんなところで何してんだ。」

そのときに男の声が聞こえてきた。

いや、男というか…
声だけで判断できてしまった自分が腹立たしい。
そこには悩みの種の張本人がいた。

「む、流川海斗…。その言葉に答える義務はない。」

冷静をよそおっても、内心は相当焦っていた。
今まで考えていた奴がいきなり現実で目の前に現れたのだ。
つくづくタイミングが悪い。

「いや、でもこんな遅い時間に1人でって…」

「……っ…別にどうでもいいだろう。それより流川海斗、貴様こそこんな時
間に何をやっている。」

会話としては本当に自然な流れ。
だが、お前のことを考えていたなどそれこそ言えるはずもない。
少し心の乱れが言葉にも表れそうになったが、上手くごまかせた…
…と思う。

しかし、私は甘かった。
その程度で動揺しているのが浅はかだったのを思い知らされる。

ヒョイ

ほんの一瞬、単純な動作で私の体は重力に逆らった。
片手では肩を支えられ、もう一方では膝の裏を支えられる。
その手つきは、精鋭の軍人部隊と互角に渡り合い、私のトンファーを破壊したあの人間離れした強さを見せた腕と同じとは思えぬほど、優しく、まるで
壊れ物でも扱うかのようだった。
じゃない！何、冷静に感想なんか述べているんだ！
これは…これは…お姫様抱っこという奴じゃないのか！？

それを認識した瞬間、もう殺そうと思った。
いや恥ずかしすぎて、死にたかったのか。
しかし、追い打ちは来る。
“お姫様抱っこっていうヤツだな。”
やられているのを自分で理解するのの比ではなかった。
直接言われたことにより、私は顔の発熱を止めることは不可能となった。

そもそもお姫様抱っこなんて、恋人同士でもやらないんじゃないのか。
結婚式とかで一生に一度とか…（↑勝手なイメージ）

大体、こんな辱めを受け入れるなんて考えられない。
どんな理由を並べられても、無理矢理脱出していただろう。
けれど、この男には許してしまっていた。

それは私よりも強かったという事実。
自分より弱いものにこの身を預ける格好なんて考えられない。
そして、こいつの腕の中では安心してしまっている自分がいる。
もう最悪だ。

こんなにも自分は軍人として情けなかったのだろうか。
降ろせといっても、こいつはひらりとかわしていく。
何を言っても無駄だろうが、これ以上無抵抗を続けているのは自分のプライドが許せない。
「私なら自分でも避けられる。だから降ろしなさい。」
だからこその精一杯の強がり。
だが、それはとどめの引き金をひいただけだった。
「生憎と止まってる暇はないから。それに俺の勝手で巻き込みたくねぇ。いやもう巻き込んでるな…。だからこそ、責任を持ってお前を守る。絶対に傷つけたりさせねぇから信じててくれ。」
なんだ、こいつは!?
馬鹿なのか、これを天然でやっているのか。
そして、上手く回らない口で必死に理由を問いただせば…
「そりゃ女の子だからだろ?」
っ!またこれだ。
初めて会った橋の上でもこいつは私のことを女の子扱いしてきた。

私は軍人、戦いに赴く者だ。
年齢が若いとか、性別が女だとかで甘くされるような世界ではない。
まさに実力だけがものを言う。
だから、女の子扱いは勿論自覚も薄れていった。
それが当然だから。

まあ、変に言い寄ってくる馬鹿な男もいた。
だが、そんな奴の言葉はただ腹立たしいだけだった。
女として扱うといっても、あいつらから感じるのは女だからなめているという
う印象だけだ。
それはやはり、中身が伴っていないから。
自分より弱い奴に下に見られているだけだ。

だが、海斗はそうではない。
実力もあるのにそれを驕らず、そのうえであの性格だ。
女の子扱いされても不思議と腹が立たない。
それどころか……

くすくすと笑い声が聞こえる。
それはほんの微かな音だったが、この距離で聞き逃すはずもない。
流川海斗が笑っている。
私はこんなにも切羽詰っているというのに…！

「な、何を笑っているんだ、貴様は！」

「いや、マルギッテも素だと可愛いんだな。」

駄目だ、こいつには本当に色々な意味で敵わないかもしれない。
けれど、それが嫌じゃない自分が一番嫌だ。
何故ここまで惹かれているのか。
お嬢様の好きになった者だからだろうか。

…違う、はじめてなのだ。
背中を預けられる存在が。
ここまで軍人の自分を異性として扱ってくれる存在が。

はぁ、大丈夫なのか、私は…。
お嬢様が好きな相手を……。

ちっ、くそ、何もかもこの男のせいだ。
かといって、降りる抵抗は出来ない自分が悔しい。
私は優しく抱かれる腕の中で首の後ろをつねるくらいしか出来なかった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

87話　「揺れる軍人」（後書き）

ありがとうございました。
恋に揺れる軍人。
腕の中で揺れる軍人。
そんな掛詞…

88話　「行き止まり」（前書き）

実質、86話の続きです。
前回は進みませんでしたからね。
前々回をなんとなく思い出してご覧ください。

88話　「行き止まり」

―逃げる者

「カイト～、どこへ向かってんのぉ？」

「いや、あいつらを振り切れればそれでいいんだ。とにかく距離をあけるぞ。」

―追いかける者

「どうすんのさ、アミ姉。このままじゃ、いつか振り切られるぜ。」

「そこについては心配ないさ。この先は……行き止まりだよ。」

両者の距離が縮まる。
前者は止まり、後者が近づいてくる。

「なんつーこった…」

「おい、どう見ても続く道がないようだが…」

「あははは～、大ピーンチ♪」

「いや、まじでそうなんだけどな。」

当然立ち往生してれば、お互い高速で移動してたわけなので、すぐさま追い
つかれる。

「ふっ、追い詰めたよ。考えもなしに走ってるからこういうことになるのさ」

「とりあえず、そこの白髪と赤髪！今すぐ海斗から離れやがれ！！体使って
誘惑なんて古い手使ってんじゃねぇぞ、オラ！」

「いや、天…。とりあえず、落ち着きな…」

追いついて早々、天使の第一声はそれだった。
こうなってくると、天使も気持ちに遠慮がなくなったようである。
これほど素直すぎるストレートな感情のぶつけ方もないと思うのだが、当の
本人、海斗は気づくはずもない。
そんなやり取りを見たマルギッテは…

「流川海斗…、本当に色々と人気があるんだな。」

「へ？どういうことだ、それ？」

「まあ、そういう反応もお前らしいのか……はぁ」

「どんかん、どんか～ん♪」

なんだか小雪にそこはかとなく、馬鹿にされているような気がする。
マルギッテはマルギッテで、“なんで私はこんな奴を…”とかなんとか、さ
っきからブツブツ言っているし。
なんとなく2人に呆れられているというのは感じた。

「まぁ、これで逃げ場はないってことさ。」

女が銃を構える。
くそ、万事休すか。
ここで二人だけを逃がすという手もあるのだが、俺もこの二人相手は少し心
配だしな。
何より“板垣三姉妹”と名乗っていた相手。
正直、あの青い髪の奴は色々面倒くさそうな気がする。
あくまで予感なのだが…。
寝ていてくれているなら、出来ればその間に逃げてしまいたい。

改めて、周りを見渡してみる。
本当に高い壁に囲まれた行き止まりだ。
しかも、この壁もコンクリートの中に鉄の棒とかが入ってるヤツだろ。
よりにもよって、こんなとこに使うなよ…。

地面の方も見てみるが、当然都合よく抜け穴なんてない。

……ん？これは…

あー……なんとかなるかもな。

しょうがない、あんまりやりたくはない作戦だが…。

四の五の言っている場合ではなさそうだ。

「ま、どうあっても逃げさせてもらうけどな。」

「そうはいかねぇぞ、海斗！ゼッテー逃がさねぇ！」

天使がゴルフクラブを振り上げて、こちらに攻撃を仕掛けようとする。

よし、来た。

俺はそれを待っていたとばかりにさっき見つけた足元の小石を蹴り上げる。

たかが石、されど石。

思い切り力を加えて、高速で押し出してやれば十分武器になる。

そして、その威力は…

ガキン

「なっ！？」

天使は一瞬の出来事に驚くしかなかった。

自分の武器が折れている。

（今の小石でやったっていうのか！？馬鹿みてーな力もやべーけど、この細
いゴルフクラブの柄に一発であの小さいのを当てたっつーことか！？）

「…まだまだ」

俺はもう1つあった小石を次弾装填とばかりに今度は姉の方へ。
よく狙いを定め、射出した。

「ちっ…！」

先程の威力を見ているため、危機感は感じるだろう。
そして、強ければ強いほど対応は迅速だ。

バン

小さい的にも関わらず、銃で正確に小石を撃ち落とした。
その見事な銃の腕に俺は……笑うしかなかった。

（…何かおかしい。何故私は今の小石を撃ち落とせた？何故さっきは見えな
かった小石の軌道が見えたんだ…！？）

「じゃあな、天使。またゲーセンで会おうぜ。」

「あ…！？え！？う…うん」

「誰が逃がすか！」

咄嗟に銃を構えるが…

カチン

響いたのはマガジンのまわる音のみ。
弾は発射されない。

「な…しまった！」

そう二度目の石は全く一度目のようなスピードもパワーも備えていない。
せいぜいキャッチボール程度の速度だろう。
普通なら判断できるはず。
しかし、一度目のあれを見ているから体が反応してしまう。
それは実力があるからこその罠。

そして、俺がそんなわざと視認できるような攻撃にしたのも全ては対応させ
るため、その引き金を引かせるため。
リボルバーの基本弾数は5、6発。

最初の威嚇射撃で1発。
小雪と合流するための移動中で2発。
逃げようとしたときの牽制で1発。
マルギッテとの遭遇で1発。
そして、今のが最後の1発だ。

当然、弾倉は空。
そこから遠距離攻撃の銃弾は発射されない。
そりゃリロードすれば、すぐに解決だが少しの時間があればいい。

「小雪、マルギッテ！目ぇつぶれ！！」

次の瞬間、爆発が起こった。
否、天使や亜巳たちが感じただけ。
実際は海斗が地面を思い切り踏みつけたことにより、粉塵が舞っているだけ
だ。

「くそ…視界が」

ただ、時間が経てば煙も晴れる。
しかし、そこには…

「おいおい、こりゃやられたねぇ…」

広がっているのは、言うなれば惨状。
地面のアスファルトには抉り取られたようなクレーター。
そして、海斗の背にあった、つまりは天使たちの真正面の壁。
さっきまで壁だったそれには無理矢理貫通された大きな穴が開いていた。
コンクリートは粉々に砕け散り、中から補強している鉄の格子状のものも、
飴細工のようにひしゃげていた。

当然のごとく、三人の姿はなかった。

88話　「行き止まり」（後書き）

ありがとうございました。
また海斗の力が…
まあ終盤ですし、出してきましょう。

89話　「安息」（前書き）

特に書くこともないので、久々にお礼でも。
感想をくださっている方、本当にありがとうございます。
1話投稿して、1つでも感想があると次を書くやる気になります。
もう一度、ありがとうございます。

89話　「安息」

「ったく、ひどい有様だねぇ。」

目の前の荒れ具合は言葉で説明するには足りないほどだったが、それでもあ
まりの衝撃に発せずにはいられなかった。
まるで戦争の爪あとのようだ。
ここまでだと、五体満足な自分たちがこの場に不釣合いのようにさえ感じる。

「はぁ、まったくどうすんのさ…。相手の力は相当なもんみたいだけど……
…ん？天？」

そういえば、さっきから天使は一言も喋っていなかった。
こんな現実離れの光景、逃げられたという事実。
驚きや怒りの声くらいあってもいいものだ。
不審に思った亜巳は天使の立つそちらへと目を向ける。

「…ぇ……ぁ」

そこには顔を赤くして、餌を欲しがる熱帯魚のように口をぱくぱくさせる妹

の姿があった。
容易に考えることなど想像できる。

（海斗がまた会おうって。ウチ、あんな態度とったのにまだ嫌わないでくれてんだ！よーし、そうと分かりゃぁ……うへへ）

「・・・・・」

いきなり悶えだす天使を、亜巳はただ見ていることしか出来なかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「はぁはぁ、ここまで逃げれば追って来ないだろ。」

あれからまた、結構な距離を離しておいた。
行き止まりの時点で振り切れたとは思うのだが、念には念をだ。

「お、おい…」

「ん？」

「そろそろ、その…おろしてくれ…」

「ああー！すまん。」

俺は二人をゆっくりとおろす。

「えー、ボクもなの。ヤダヤダ～」

何故か、小雪には文句を言われたが…
なんとかなだめて、渋々ながらもおりてもらった。

「今日はほんと悪かったな、巻き込んじまって。」

「いや、別に構わん。その……なんだ、私は怪我も何もしていないしな。お
前が……海斗が守って…（ごにょごにょ」

「お、おう。」

最後の方はマルギッテには珍しくはっきりとしていない口調だったので、よ
く聞こえなかったが、どうやら怒りの鉄拳が飛んでくるなんてことはひとま
ずないらしい。
それより何か、今の言葉に違和感があった。

…あ、そうか。

「俺のこと、名前で呼んでくれるようになったんだな。」

「な、なんだ！悪いのか！」

「いやいや、今までフルネームだったからな。素直に嬉しいぜ。」

「そ、そうか……なら、仕方ないからこれからも名前で呼んでやる。
」

「おう、よろしく。」

「ねぇねぇ、カイト〜。ボクはボクはー？」

「ああ、小雪も名前で呼んでくれて嬉しいぞ。」

「やったー♪」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

「作戦としては大失敗だねぇ。」

「でも、相手海斗だしなー。正直な話、師匠クラスじゃないと勝つことはできないんじゃねーの？」

「まぁ確かに規格外の強さではあるさね。」

あれから数分。
やっと調子を取り戻した天使と亜巳が言葉を交わす。

「とりあえずはマロードに報告ってところかい。」

「はぁ、めんどくせーけど行くかー。」

「じゃあ、早速行くよ。」

「あぁー…アミ姉」

「なんだい？天。」

「…タツ姉忘れてる。」

「・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「というか、あの壁を破壊するなんてお前やはり強かったんだな。」

(トンファーを破壊されたのも偶然などではなかったということか。

）

「は？あの壁のことか？あれはこれのおかげだけど。」

そう言って、俺は足を持ち上げる。
正確にはその足が履いている靴を見せるために。

「これは…」

マルギッテが見たもの、それは靴底に仕込まれていた鉄板だった。
実際に触れれば、その硬度が分かる。
なるほど、ある程度のものなら確かに砕けそうではある。

「流石にあんなもん破壊すんのは無理だって。」

海斗は軽い調子でそう言うが、対してマルギッテの表情は一層険しくなった。
まるでそれは自分の想像の範疇を越えていると、言外に表現しているかのように。

それはマルギッテが手にとって気づいたこと。
確かにその鉄板は厚さこそそこまでないものの十分な硬さを誇っていた。
しかし、それがある種証明しているようなものだ。

あのパワーを生み出していたのは圧倒的な重量。
触れて分かるその重さだった。

これを足の先に付けて、ハンマーの要領で振り回した。
威力はおそらく想像する通りだろう。
あんな人工物の単なる壁などいくらでも壊せる。
そこには納得した。

しかし、海斗は何を行っていたか。
これを付けたまま、今まで走っていたというのか。
それも人間2人を担いで…。
決して弱くない追っ手から逃げるための高速移動。
あれが全てハンデのもとで行われたこと。

それら全てを統合して、マルギッテは思う。
自分にとって初めての感情を。

（こいつには…敵わない…）

当の本人はそんなことを鼻にかける様子もなく、淡々としていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

—チャイルドパレス

「そうですか…まさか海斗くんとは…」

「もうあの女の心は完全に持ってかれてるな。」

（ついでに家のとこの妹もな…）

そこにはマロードこと葵冬馬。
傍らには井上準。
そして、報告に来た板垣三姉妹がいた。

「別にユキが誰に恋をしようと私は構いませんよ。それはユキの自由であり、
幸せにつながることですからね。」

「へー、悪人も仲間には優しいってか？」

「ですが…、あの頭脳に加えてそんな武力まで持っている海斗くん。
少々、
敵に回すのは厄介ですね。何か手を打ったほうがよさそうです。」

そして、葵冬馬は笑った。

89話　「安息」（後書き）

ありがとうございました。
今回でやっと長かった夜の話が終わりです。
小雪に襲われてから、なんと１０話。
……遅っ！

90話　「待ち人」（前書き）

なんか久しぶりにこういう文章を書いたような…
ずっとバトルばっかでしたから。
ゆったりと見てください。

90話　「待ち人」

空はまだ白みがかるような早朝。
そんな時間から橋の前に佇む少女がいた。
その名はクリスティアーネ・フリードリヒ。
今でこそ小鳥たちも鳴き出すような時間になってきたが、少女はもう数時間
も前からそこに立っていた。
いや、あるいは少女の心が流れる時を長く感じさせているのか。

しかし、少女はどんなに時間が経ってもそこから動くことはない。
ただ1人の男がここを通りかかるまでは。
恋を自覚した少女は待ち続ける。
今までとは違う一歩を踏み出すために。
それは今まで自分自身の心に気づくことが出来なかった遅れを取り戻すため
の一歩。
気づくことが出来たから、求める結果に進もうという一歩。

しかし、来る人を思えば思うほど、体感時間は長くなる。
もとより朝があまり得意ではないこの少女。
人に起こしてもらわなければ、起きれないほどだ。
そんな彼女にとって、長時間の退屈は意識を奪うすれすれだった。
顔を俯かせつつも、重くなってきたまぶたに必死に抗っていたときだった。

「クリス、こんなとこで突っ立って何してんだ?」

クリスの耳に届いたのは待ちわびていた声。
それは聞きなれているはずなのに、いつもとどこか違う。
好きだという自覚が変えたのだろうか。

「海斗！」

少女は叫ぶ。
待ち続けていた男の名を。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

昨日色々あって、流石に疲れた俺は若干いつもより遅いかという時
間で通学
路を歩いていた。
といっても、遅刻するかと問われれば、まだまだ余裕なのだが…。
そんな調子で焦ることもなく、いつもの道をいつもの歩調で歩いて
いると…。

橋のところに誰かいるのが見えた。

別に他にも登校する生徒など、歩行者がいるのは珍しくないのだが、
そこに
いた者は明らかに立ち止まって、誰かを待っているような様子だっ
た。
こんな橋の始まりで人を待っているのを見るのは初めてだ。

というか、よくよく近づいて見てみると、朝のそよ風にたなびくブロンド、
一本芯が通ったようにシャキッとした背筋。
それらには見覚えがあった。

「クリス、こんなとこで突っ立って何してんだ?」

近づいていって声をかける。
俯いてはいるが、間違えるはずもない。

「海斗!」

「おう、風間ファミリーの連中でも待ってんのか?」

「いや、自分は海斗が来るのを待っていたんだ。」

「へ?俺のことを?」

なんだ、俺またクリスに怒られるような事したか?
何か正義の道、踏み外したっけ…
クリスの前で特に目立ったことはしてないはずだが。

「そうだ、一緒に学校に行こうではないか。」

「え、俺と二人でってこと?」

「あ、ああ、そうなんだが……ダメだろうか？」

「いや、それは全然いいぜ。」

「そうか！では、行こう！」

（良かった。まずは上手く誘うことが出来たぞ！）

そうして、俺はクリスと並んで歩き出した。
なんだかんだで誰かと登校するのって初めてだな。

「けど、いきなりどうしたんだ？」

「は？何がだ？」

「ほら、俺を待ってくれてる約束なんてしなかっただろ。話でもあるのか？」

「え、えと…それは…」

（まだ告白はダメだ！心の準備が…。それにムードというものもある。）

「海斗と一緒に学校に行きたかっただけだ！」

（待て！今、相当恥ずかしいことを言ってしまったんじゃないか！？）

「そうか、俺も誰かと学校に行くのなんてしたことなかったから、クリスと
一緒に行けて良かった。」

「ぅ…そうか…」

「ま、遅刻するような時間でもないし、ゆっくり行こうぜ。」

「ああ、そうだな…」

（こ、これはとても良い感じなんじゃないのか…！この調子でもっと海斗と
仲良くなれれば…）

だが、世の中はそう甘くはなかった。

「カッイト～～♪」

「のわっ」

横から物凄い速さで物体が飛び出してきた。
それは柔らかく……って。
今の声は確実に…。

「小雪…。」

「おっはよー、カイト！」

案の定、それは榊原小雪。
というか、昨日ずっと一緒にいて背負っていたせいだろうか。
聴覚よりも触覚で分かってした自分を罰したい。

ん？
隣を見ると、クリスが肩をわなわなと震わせている。

「なんなのだ、お前は！海斗とどういう関係なんだ！」

「おい、クリス。いきなりどうした？」

「海斗は黙っていろ！」

…何故だか分からないが、相当ご立腹のようだ。
さっきまでは結構機嫌が良いように、俺の目には映っていたんだが…
気のせいだったのか。

「海斗はボクの大切な人だよ～♪」

「そ、そうなのか、海斗！？」

「そうも何も普通に友達だが…」

「なんだ友達なのか……てっきり…」

「カイトー」

小雪がグイグイと遠慮もなく、俺の左腕に寄り添ってくる。
多分、対象がいなかっただけでスキンシップが激しいタイプなのだろう。

「なっ、ちょっと友達にしてはくっつきすぎじゃないか!?」

「ボクはこれが普通だも～ん。」

「な、なら…」

言葉と同時に俺の右腕がとられる。
見ればクリスも同じように、それを抱きかかえていた。

「あのさ…」

「なんだ、そいつは良くて自分はダメだというのか!」

「別に構わんけど…」

「ならいいな。」

クリスが嫌がらないなら、特に俺としては反論はない。
結局、その日の登校は女子2人に挟まれているというなんとも奇妙な光景が
学校に着くまで続けられることとなった。

９０話　「待ち人」（後書き）

ありがとうございました。
次回からどんどん物語が進んでいくと
思います。もう少しお付き合いください。

91話　「逆転の一手」（前書き）

また私生活が忙しくなるんです、はい。
毎日更新は怠らないよう頑張りますが、
感想の返信がおくれたらごめんなさい。
とても感謝しているので、早く返したいのですが…。
ご了承ください。

91話　「逆転の一手」

Ｓｉｄｅ　大和

「なぁ、大和…」

「なんだ、ガクト…」

「世の中って不平等じゃねぇか…？」

「そうかもなー…」

「結局、俺様が言いたいのはさ…」

「あぁ…」

「あの野郎の楽園（ハーレム）、強化されてね？」

「Ｔｈａｔ’ｓ　ｒｉｇｈｔ」

現在、２－Ｆ教室。

俺とガクトから見えている光景は、２－Ｓからわざわざ流川に会うためにやってきた榊原小雪。

そして、クリスに用があると言ってやってきたマルギッテ・エーベルバッハ。

あとはその会いに来られたという本人のクリス。

一番最初のは説明する必要もなさそうだが、わざわざ２－Ｆにまで来る榊原
小雪は確実に流川に好意を抱いていた。
俺の持っている情報では、榊原小雪はその見た目から人気も高いが、彼女の
友達である葵冬馬、井上準にしか興味がないため、多くの男が断念したとい
うある意味幻の物件だ。
その攻略難易度激ムズのヒロインが完全に流川の虜になっているのはどうい
うことでしょう。
それも今日になって突然。
昨日まではちょっとした前触れさえなかった。
一夜で落としたとかそういうことだろうか…。

次にマルギッテ・エーベルバッハ、
クリスの言葉を借りるとすれば、マルさん。
あの人は隠すのは完璧と言っていいほど上手い。
だが、ときにそれは仇となる。
今まではその完璧な演技で通しきっていた。
しかし、なんらかの出来事があり、感情の変化というか、気持ちが膨らんで
しまったのだろう。
この教室に入ってから２度くらい流川のほうを見た。
たった２度。
だが、今までが完璧だったためにその２度はかなり大きなものになる。
もはや、意味するところは明白だろう。

最後にクリスなのだが…。
クリスはもとより流川を好いているのは分かっていた。
しかし、本人の態度が今までとは明らかに違う。
これまでは本能で動いていたのが、考えて行動するようになったとか、表現
するとしたらそんな感じ。
予想としては恋する自分を自覚した、あるいは第三者によって気づかされた
とかそんなところかな。
流川を自分の好きな人として接しているんだろう。
そりゃ印象も変わる。

まあ、色々分析した結果…
あいつ、恋愛の本でも出したらいいんじゃないか？とか、思っていた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

海斗の人気は大和に限らず、ほとんどの者の目に明らかだった。
そして当然、困る者も出てくるわけで…

「大和！大和！」

「どうした、ワンｋ…！」

「ちょっと来て！！」

ドタドタと足音が鳴ったが、それも一瞬の出来事だった。
すぐにその場には静寂が戻る。
取り残されたモロとガクト。

「今のは何だったのさ？」

「ワン子が大和の手を引っ張って、強引にどこかへ連れてったな。」
「それは見てたよ！」

いまいち状況についていけていない二人であった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

一子が大和を引っ張ってきたのは、屋上だった。
恋する乙女のテンプレートとなりつつあるこの屋上だが、今は単に人が少ないということを考慮した故だろう。

「で、どうした？ワン子。」

（まあ、聞くまでもないが…）

「大和！“えまーじぇんしぃ”よ、“えまーじぇんしぃ”！！」

「無理にこの前ゲームで覚えた言葉を使おうとするな。」

「海斗が…海斗が…“えまーじぇんしぃ”よ！！」

「一回落ち着け。ワン子、深呼吸しなさい。」

「すぅーーー、はぁーーー。」

「で？もう一回ゆっくり話してみな。」

「うん、あのね…なんか海斗のことを好きな人が増えてるような気がするの
よ、気のせいだったら全然いいんだけど…」

「まあ、確実に増えてはいるね。」

「やっぱり！？みんな、海斗の魅力に気づき始めちゃったんだわー！」

「でも安心しな、ワン子。本人はそのことについて、微塵も気づいてないか
ら。お得意の鈍感スキルで。」

「それは同じ海斗に恋する身として素直に喜べないわ……」

「まあ、だからこそ全員にチャンスがあるんだ。あの鈍感野郎にはもっと直
接的な表現でいかないと効果ないと思うぞー。」

「直接的って？」

「だから、例えばストレートに“好き”って告白とかな。」

「ここここ、告白！？」

「いや、例えばの話だから。いきなりそんな高いハードルは無理だろ。そして、それは他の奴らも同じだから、現在の状況が動かない。逆に言えば、誰かがそんなことすりゃ、そいつが確実に大きくリードすることになる。」

「ダメじゃない、そんなの！」

「いや、だから言っただろ。皆、そんな度胸はまだない。」

「あ、そっか。なら…」

「けど、あの榊原小雪はしてもおかしくないな。」

「ちょっと！！」

「落ち着け、だから先に行動すればいいだろ。」

「先に行動って、やっぱり告白…」

「そんな度胸がないのは俺も知ってるから…。そうじゃなくて、ワン子は切

り札を持ってるだろ。」

「切り札？」

「そう、水族館のチケットっつーな。」

「え、これ？」

そう言って、取り出される一枚のチケット。
かつてビーチバレーの賞品であったそれが一子の手に握られていた。

「ちょうど明日は休みだ。」

「そうだけど？」

「それで流川をデートに誘え。」

91話　「逆転の一手」（後書き）

ありがとうございました。
遂にこういう流れになりました。
ええもう、チケット手に入れてから
何話経っているんだと。

92話　「乙女の試練」（前書き）

活動報告で意見もらっているのでよかったら見てください。
～エンドみたいな感じでやるのは決めているんですが、
どこら辺まで書こうか迷ってます。例えば、告白までなのか
結ばれたあとまでかみたいな…
何かあれば、活動報告にコメントくださると嬉しいです。

92話　「乙女の試練」

Ｓｉｄｅ　一子

うぅ、緊張するわ…。

今日、アタシはいつもの通り登校して、海斗とちょっとでも多く話せたらいいな～なんて、お気楽に考えていた。
でも、海斗の周りは急激に変化してた。
知らない２－Ｓの生徒はいるし、クリの行動もなんか変わってるし。
あいさつはいつものようにしてくれたけど、絶対に海斗と話すチャンスを半分くらい持っていかれてるわ。
このままじゃ海斗の彼女どころか、友達としての立ち位置も危ないわ！

そう、分かってはいるんだけど…
やっぱり、恥ずかしいものは恥ずかしいのよ！
遊びに誘うのだって大変だっていうのに…
でも、せっかく大和が協力してくれたんだわ。
うぅー、でもこれは…

～

「それで流川をデートに誘え。」

「え!?どゆこと、デート!?」

「お前は初めて聞いたようなリアクションで誤魔化すな。」

「だってぇ…」

「この前の特別集会のときも助言しただろ?それをお前はぐずぐずぐずぐず…
いつまでやってる気だ。」

「いや、アタシだって誘おうと…」

「誘えていないのが事実だ。」

「…返す言葉もないわ。」

「俺が思うに、日時をどんどんと先延ばしにするから、目の前のことから逃
げてしまうという結果に行き着く。ならば、即行動。明日デートに行ってく
るんだ!」

「でも、そんないきなりは無理よ!」

「何度も言うようだが、いきなりであることに意味がある。どうせワン子の
ことだから、デートに行く準備は出来てるのに誘うのをためらって、無駄に
なってるってとこだろ。」

「うっ…！アタシは単純だからみたいに全部知ってるような言い方が悔しいけど、しっかり見抜かれてるから反論できないわ…」

「とにかく行動だ。今日のうちに誘うんだぞ。」

「わ、分かったわ。」

「あ、言っておくけど、遊びみたいな体(てい)で誘ったらダメだからな。ちゃんとデートをしようって言って誘うんだぞ。」

「え!?ちょっと待って、そんなの聞いてないわよ!!」

「いや、今初めて言ったしな。だから、何度も言うようだけどさ、ワン子は流川に少しでも意識してもらいたいんだろ?他の子たちに負けたくないんだろ?今日一日を見て危機を感じたから、俺に相談したんじゃないの?」

「そ、そうだけどさー」

「それなら一発勝負に出てみなって。別にそこで絶対告白しろとか言ってるわけじゃないんだからさ。」

「…うん、大和もアタシのために考えてくれてるのよね。…でも、断られたりしないかしら?」

「それは大丈夫だ。」

「どうして？」

「ワン子が誘うんだから、一緒に行ってくれるさ。」

「うぅ…そんな根拠のない応援じゃ自信ないわよぉ。」

「…正直に言うとだな、ワン子どうこうではないんだが絶対大丈夫だ。行く
場所どこだか言ってみ。」

「…水族館？」

「そう水族館だ。動物大好きなあいつなら、本当に大事な用事でもない限り
断ることはありえないだろ。」

「……説得力があるわ。」

～

なんだかんだで大和も協力してくれてるのよね。
迷ってる場合じゃないかも…
早くしないと、約束できないし。
そうよ、勇往邁進！
アタシだってやるときゃやるわ！

Side　out

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

はぁ、ゲーセンで結構遊んでしまった。
何か食って帰ろうか…
ん？携帯にメールか。
そんなに来るほうではないのだが…誰だ？
携帯を開いて見てみる。

「なんだこれ？」

書いてあったのはたった一文。
“校門前に来て”
これはどういう意図なんだ？
行くことは構わないけど、用なら電話でもすればいいのにな。
この文面にしても一子なら口頭で伝えそうなものだ。
疑問に思いつつも、俺は待たせせないように急ぎ足で向かった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

校門前に立つ1人の姿。
もうほとんどの生徒は下校していて、その光景は目立ったものだ。

「よう、一子。待たせたか？」

「あ、海斗！いや全然待ってなんかないわ。」

「それで？なんで呼び出したんだ？」

（ここで迷ったら、言いにくくなるわ！）

「海斗！アタシと明日デートして！！」

……は？
今なんて言ったんだ、デート？

「え…俺とか？」

「そう海斗と一緒に水族館に行きたいの！」

そう言って、差し出されるチケット。
それはビーチバレーのときの物。

「それは本当にファミリーとってことであげたんだぞ？俺に遠慮してんなら…」

「アタシは海斗がいいの！！」

一子が叫ぶ。
なんか今日はいつもより押しが強いというか…。
俺としては水族館いけるのは嬉しいし、一子が相手なら尚更だ。

「じゃあ行くか、明日。」

「えっ！？ほんと！？」

「なんで誘ったそっちが驚いてんだよ…」

「そ、そっか。そうよね。」

（勢いで言っちゃったけど、オッケーされちゃった！どうしよ、どうしよ！）

「じゃあ、待ち合わせはどうするんだ？」

「え、待ち合わせ？そっか、そういうのも決めなきゃよね…」

「一応確認だけど、一子が誘ってきたんだよな。」

「えーっと、９時……じゃなくて、１１時！」

「分かった。それじゃ明日、その時間に駅でいいか？」

「う、うん。」

二人の間に沈黙が流れる。

気まずいとかではないんだが、一子との間のこの雰囲気は新鮮というか…。

不思議な感じだ。

「じゃあ、また明日な。」

「あの、海斗！明日楽しみにしてるから！」

「……俺もだ。」

92話　「乙女の試練」（後書き）

ありがとうございました。
まさかのデート。
なんだかんだで初めての展開です。

93話　「赤くなるデート」（前書き）

ここまで辿り着くのに長かったです。
やっとのことで漕ぎ着けた、
嬉し恥ずかしデート開幕？

９３話　「赤くなるデート」

―デート
日時や場所を定めて異性と会うこと。
広辞苑より抜粋。

昨日、一子からいきなりデートに誘われた。
あまりに突然だったので、驚かなかったといえば嘘になる。
まあ、一子としてはそんなに深い意味はなかったのだろうが、通常これは恋
人同士の間でとりおこなわれるものらしい。
そりゃ予想外にも程がある。
まあ、仲良くしてくれるってことだろうな。

ということで、男は女を待つもんだ。
待ち合わせ場所の駅には１５分前に着いている。
まだ姿はないので安心だ。

さて、大人しく待ってるか。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

Ｓｉｄｅ　一子

今日は待ちに待ったデート。

そんなことも言いたかったんだけど、なんというか自分の意気地のなさのせ
いで、昨日約束からの即デート。
とても待っている余裕なんてなかった。
昨日必死に悩んで、時間ないなりにちゃんとしたつもり。
そして、何が起こってもいいように1時間前には待ち合わせ場所に到着。
…のはずだったんだけど、

「もう！」

準備してたら、あっという間に時間は過ぎて、遅れちゃったわ！
まだ走れば、間に合うかもしれないけど…

「でも、ちょっと走りづらいし…」

うーん……そうだ！
こういうときこそショートカットよ。
日頃の修行の知識で近道を通ればおっけーね！

人生初デート。
絶対に悔いの残らないよう、成功させてみせるわ！！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

―路地裏

「なんかつまんないっすねー。」

「ウダウダ言ってんじゃねぇよ、皆そうだ。暇なら一発やるか？」

「いや…それは遠慮しときます…」

ダッ

「ん？今のツラはどっかで……あぁ、確かあいつの…」

「どうかしたんすか？」

「おい、なんだか面白い休日になりそうだぞ。」

・・・

現在の時刻、11時30分。
待ち合わせ時間から30分も経った。
俺も多少待つのは覚悟していた。
30分だって実際には大したことないのかもしれないが、あの一子がここま

で人を待たせるってのも違和感だ。
うーん、どうせなら川神院まで迎えに行ってみるか。
このまま待つよりか賢明だろう。
そういうわけで俺はすぐさま川神院に向かった。

・・・

（よっし、このまま行けばなんとか間に合うわ！）

「ちょっと待ってもらおうか、お嬢さん。」

ぞろぞろ

「何なの、アンタたち…」

「まあまあ、そんな構えんなって。」

「悪いけどアタシ急いでるから、通して欲しいんだけど。」

「そっけねぇなあ、ちょっと遊ぼうぜ。」

「邪魔するなら、容赦しないわ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

数分後、到着した俺は門の前を掃除していた修行僧をつかまえる。

「おい、ちょっといいか。」

「これはこれは海斗殿、どうされましたか？」

この海斗殿という意味わからん呼び方。
どうやら、この前の百人組み手で勝ったことが起因しているらしい。
やめてくれと一応は言ったのだが、無駄なようだったので俺も気にしないこ
とにしている。

「一子をちょっと呼んできてくれないか？」

「一子殿ですか？一子殿はいませんね、出かけてしまわれました。」

「ああ、そっか。入れ違いになっちまったか…」

まあ、それならそれで今から全速力で戻ればいい話だ。

「あの誤解されてるようですが、一子殿が出たのは１１時前ですが

…」

「なんだって？」

１１時前に出たというのはおかしい。
この川神院から駅までは２０分かからない。
そして、俺は１１時３０分過ぎまであそこにいた。
にもかかわらず、一子の姿は確認できていない。

いきなり嫌な予感がして、一子の携帯にコールする。
大丈夫だ、あの短い距離の道を迷ってるとか、困っていたおばあさんを助けていたとか、そんなオチだろう。
そのような答えを期待して、相手が出るのを待つ。
だが…

“ただいま電話に出ることが出来ませ…”

「くそっ！」

何があった。
なんで電話にも出れない、姿が見えない！
頭では大丈夫だと思っているのに、なんでこんな胸騒ぎがするんだ。

「おい！一子がどっち行ったかとか分かるか？」

「どっち行ったかというか、一子殿はとても急いでいるようでしたので、おそらく近道とか使われたのではないかと…」

「分かった、恩に着る。」

俺は付き纏う予感を振り払い、一子のもとを目指す。
とにかく早く…！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

駅までの近道で通るっていったら、この路地裏くらいだろう。
俺は総当りで捜していた。
一刻も早く一子に会うために。

そこで俺はあることを感じた。
それは数人の気配。
こんなときはどんな手がかりでも頼りにするしかない。
あっちの方向からだ。
俺は全力で駆ける。

「…………………は？」

向かった先には確かにいた。

俺のさがしていたポニーテールの少女がいた。
そこにいた。
寝転がっていた。

―血まみれの姿で。

93話　「赤くなるデート」（後書き）

ありがとうございました。
タイトルだけ見て不吉な予感がした方は
ミステリーの読みすぎだとつっこみたいですが、
お見事正解です。

９４話　「臨界点」（前書き）

なんか初めてＲ－１５の要素が出てきましたよね。
今までは血すらそんなに描写した覚えが
ありません。

94話　「臨界点」

俺がずっとさがしていた少女。
今日一緒にデートをしようと言ってきた少女。
川神一子は俺の目の前で血の海に横たわっていた。

目に見えた現実だけが、脳内に箇条書きのように集められてゆく。
だが、俺自身は全くそれらについていけてなかった。
この状況はなんだ？

「一子？」

なんで、ぴくりとも動いてくれないんだ。
なんで、俺の問いかけに反応してくれないんだ。

その着ている服さえも血にまみれている。
それは普段の一子にはあまり見られない白いワンピース。
一子はスカートは履かないイメージがあったのだが、オシャレをしてきてくれたのだろうか。
これじゃあ、あまり走ったりは出来ないだろうな…。
しかし、その清楚な感じが漂う純白も溢れ出る赤に染められていた。

そこで俺は初めて周りの状況に気づく。
今まで一子しか見ていなかったが、周りには数人の男たち。
しかも、その中の1人には見覚えがあった。
水上体育祭で乱入してきた男。

「お前らがこれやったのか…」

「お前なんてつれねぇな、海で仲良くした仲じゃねえかよ。お前じゃなくて、
板垣竜兵って名前だっつっただろ。いや、あのときは言っちゃダメだったん
だっけか?まあ、どうでもいいか。」

「質問に答えろ。これをやったのはお前か?」

「はぁ、そうだぜ、ナイフでぐさっとやったら一発だったぜ?そいつはなん
か動きにくい服なんて庇いながら戦いやがって、可笑しいったらなかったぜ。」

「・・・・・」

「ちゃんとショック受けてるようで良かったぜ。お前への復讐なんだから、
そうやってダメージ受けてくれないとやった甲斐がないしな。それにしても、
すぐ駆けつけやがって、こんなに上手くいくとは思わなかったぜ、
ハーハッ
ハハハ」

正直、自分が怒りでキレないのが不思議だった。
俺のせいで一子はこんなことになったっていうのか。

その言葉は耳に届くが、俺には何の感情もない。
というか、何も考えることが出来なかったのか。

ただ、一子が倒れている。
そのことを見て笑っている者がいる。
それを認識した瞬間、俺の中で何かが崩れる音がした。
ひとたびの崩壊は全てを巻き込み、瓦解させる。
そこで俺の意識は暗闇に包まれた…

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ハーハッハッハ、意気消沈ってやつか？やっぱり自分のせいで仲間を傷つけちまうなんて最低だもんなあ。」

「…………はは。」

「あん？頭でもおかしくなったか？」

「・・・・・・・・」

（なんだ？さっきまでとは様子が…）

海斗はそれ以上は何も語らずに竜兵へと歩を進めてゆく。
歩調は糸の切れた人形のようにゆっくりとしたものであったが、一歩一歩に

は目に見えぬ威圧感があった。
数は３０対１ほどの圧倒的な差があるにも関わらず、まるで力関係のうえで
の有利などないように。
その場にいる者に緊張が走る。
明らかなイレギュラー。
それに竜兵は飲み込まれず、素早く対応しようとする。

「何ぼさっとしてる！あいつも同じ目にあわせるぞ！」

指示が飛び、５人ほどが海斗に向かおうとする。
しかし、それはかなわなかった。

「……どけ。」

ただ一言、言い放つ。
だが、それは引き金に過ぎない。
直後に襲う強烈な殺気。

襲い掛かった者は勿論、周りで様子を見ていた者までが次々に気絶していく。
よく鋭い殺気のことを首筋に刃物をあてられたようなどと表現することがあ
るが、これはそれ以上。
まるで刃物で直接傷を作られているかのような殺気だった。

「な、なんだこの殺気は…」

竜兵ほどの実力者で意識を保つのがやっとだった。
その腕には鳥肌が立っている。

本来、気というのは攻撃にも転用できる優れものだ。
離れた敵を攻撃するなども、熟練者になれば造作もない。

しかし、殺気は違う。
殺気は本当に漠然とした形なき物である。
そこに物理的な攻撃性は備わっていない。
殺気を飛ばしたところで基本は脅かしになればいいほうである。

だからこそ、竜兵はその正体が分からない。
相手には気がないというのは確実。
そして、今感じたのも紛れもなく殺気。
ならば、何故自分以外の者が気絶している?

「くそ…調子に乗るなよ!!」

放たれる真っ直ぐな拳。
それは恐れや迷いはなく、スピードもパワーも十分の攻撃だった。
だが、それはいとも簡単に手首を掴まれて、阻止される。
しかし、今の海斗はそれで終わりではなかった。

ゴキッ

「ぐあぁぁぁぁ！！」

どこか前戦ったような感覚でいる竜兵を激痛が襲う。
掴まれた手首をそのまま折られていたのだ。
握っていた手に力を込められただけで竜兵の手首は粉々に砕けた。
その行動に躊躇はなく、情けはなかった。

（こ、こいつ…）

竜兵に一息つく間はなかった。
続けざまに海斗は竜兵の顔面を正面からわしづかみにして、思い切り地面に
たたきつけた。
硬いコンクリートが竜兵の後頭部に激しい痛みを与える。

「お前…男が好きなんだったよな…」

仰向けで倒れる竜兵に海斗は語りかける。

「踏んでもらって興奮でもすんだろ？俺がやってやるよ。」

その足は空中でストップされる。
そう、竜兵の急所の真上で。

「お、おい、やめろ！やめてく…」

「サービスだ。」

その足は一切の躊躇いなく、トップスピードで振り下ろされた。
当然狙いが外れるはずもない。

「がああああああああああああああああああああああああ
！！！！！」

まさに絶叫。
竜兵をこの世の物とは思えぬ痛みが襲う。

「どうだ？自分の大事なもので償いを受けた気分は？」

“滑稽だ”と海斗は笑う。
その姿はもはや人間としての情けの欠片もない。
まるで冷酷無慈悲の悪魔のようだった。

９４話　「臨界点」（後書き）

ありがとうございました。
俗に言う覚醒というやつです。
ベタ中のベタですね。

95話　「救い」（前書き）

グダグダのときと差が激しいくらい、
急ピッチで物語が進みますね。
怒りの海斗、どうなるか…

95話　「救い」

休日の裏路地。
本来、そこは人気などなく用がなければ入らないし、そもそもそこで済ませられる用なんてものも端からない。

だが、近道に使った者がいた。
たむろっていた者たちがいた。
後から駆けつけた者がいた。

そして、今対峙しているのは2人。
海斗と竜兵。
だが、その形勢は一目瞭然であり、対峙とは言い難かった。
倒れ伏す竜兵の前に海斗が悠然と立つ。

海斗を知る者が見れば、その身にまとう異様さに驚いただろう。
まさにそこに立つのは誰も見たことがない別人。
完全に恐怖を与える存在と化していた。

「さてと…」

海斗は近くに落ちていた血に染まるナイフを拾い上げる。

「こんなもので人を傷つけたんだ。当然、死ぬ覚悟はあるんだよな？」

「待て！実際に刺したのは俺じゃねぇ！」
「それでもリーダーはお前だろ。頭はきちんと責任とらなきゃな。」

海斗が力を込める。
その手に握るのはナイフの柄ではなく刃。
しかし、それはまるで薄い氷のようにたやすく形を失った。

そうして、海斗の手が伸びる。
もはや次にどんな攻撃がくるのか分からない。
しかし、この手で何をされようが無事ではすまない。
竜兵はそう思い、死を覚悟した。

そこへ…

「か…いと……」

その音は海斗の意識を急速に引き戻した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

聞こえた微かな呟き。
かすれているのに俺の耳にはとても鮮明に聞こえた。

紛れもなくそれは一子の声だった。
俺は今まで相手にしていた者も怒りも全て忘れ、すぐに一子の側に戻った。

「おい、一子！大丈夫か！？」

必死の問いかけに返事はなかった。
どうやら意識が戻ったのはさっきの一瞬だけだったようだ。

だが、一子は確実に生きている。
一子に近づき、耳をそばだてれば確かにその鼓動は続いていた。
先程は怒りに支配されて、確認する暇などなかったが、一子は一生懸命に自
分の命をつなぎとめようとしているのだ。
まだ、助けられる…！

傷はナイフでの刺し傷一ヶ所。
傷自体はそこまで深くはないが、出血量がこのままではまずい。
病院に連れて行けば、この程度の傷は簡単に治療してくれるだろうが、それ
までに一子の血がもつ保証はない。
また、無理に体を動かしたことで傷口が広がるということもありえる。
一子の命がかかっているんだ。
一か八かに委ねている場合ではない。

病院に運んでいる暇はない。

ならば、ここで治すしかない。
この少女は…
“あの、海斗！明日楽しみにしてるから！”
―俺が絶対に死なせない。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

Side　百代

あーー、暇だ。
挑戦者は相変わらずだし、あの流川海斗とかいう奴も勝負する気ないようだ
しなー、本当につまらん。
おまけにワン子はその“海斗”とデートときた。

昨日の夜からどこかそわそわしている妹が気になって、みんなの軍師・大和
なら知ってると思い、聞いてみればその事情を説明してくれた。
あそこまで露骨なので、ワン子の気持ちはなんとなく知っていたが、まさか
そこまで大好きになっていたとは…
確かに武人としては興味がそそられる奴だがなぁ。
ったく、なんでこんな美少女が休日をもて余さなければならないんだ。

仕方ないから女の子でもつかまえるか。
そう思ったときだった。

ゴウッ

「っ！？」

衝撃を感じた。

「今のはなんだ？」

ほんの一瞬だったが、確かに膨大な質量。
そう、あまりに濃く桁外れで即座に判断できなかったが、今のは“気”だ。

川神のどこかで戦闘でも起こっているかなどとは考えない。
今の気はそんな思考レベルをぶち破るものだった。
あんな気はそうごろごろいるものではない。
だから、自然と人は絞れるのだが、今のは揚羽さんでもなければ、ジジィのものでもない。
今まで感じたことのない気だった。

一瞬で消えてしまって辿ることは出来ないが…。
少なくともあれだけの力を持った奴がこの街にはいるのか。
まだまだ面白いことがあるかもな、フフフ。

Side　out

…………………………

…

「…んっん……」

(なんだろ、アタシ揺れてる？)

「やっと目、覚めたか。」

「へ？海斗……あれ！？なんでアタシおぶられてるの？」

自分がのしかかっている背中、歩くたびに起こる振動、前から聞こえてくる俺の声、全てを統合してなんとか今の状況を理解したらしい。

「確か…アタシ…刺されて…。あれ？傷がない…」

「あー、あの後俺がすぐに来てな、待ち合わせに来ないから心配してさ。それで倒れてる一子を見つけたから、病院に運んでその帰りだ。」

「そっか、海斗が助けてくれたんだ…。ありがとね。それと、ごめ

んね。ア
タシから約束したのに…」

もう影は伸び、街はオレンジ色に照らされている。
一子が言いたいのは“行けなくなってごめん”とか、そんなことだろう。
だから、俺は先に言う。

「ごめんな、一子。」

「え？なんで海斗が謝るの？悪いのはアタ…」

「本当にごめん。」

“お前への復讐なんだから”

狙われたのは俺でなく、海でのあのとき俺の近くにいた存在。
たまたま顔を知られていただけの無関係の少女。
だから一子がこんなことになったのは他の誰でもなく、俺のせいで…。

「ごめん、一子。」

「海斗……」

俺はただ謝ることしか出来なかった。

95話　「救い」（後書き）

ありがとうございました。
出来ることなら普通の水族館デートも書きたかったんですが、話の都合上…
ごめん、一子。

96話　「メッセージ」（前書き）

自分で書いてて辛い展開です…。
ほんとにデートさせてあげたい。
しかし、話を進めるために今は我慢です。

96話　「メッセージ」

Ｓｉｄｅ　一子

～

アタシが裏路地を通っている途中、いきなり沢山の男が出てきた。

「ちょっと待ってもらおうか、お嬢さん。」

「何なの、アンタたち…」

「まあまあ、そんな構えんなって。」

「悪いけどアタシ急いでるから、通して欲しいんだけど。」

「そっけねぇなあ、ちょっと遊ぼうぜ。」

「邪魔するなら、容赦しないわ！」

こんな不良たちなら薙刀なしでも十分に戦える。
そう軽く考えすぎていた。

「おらおら！」

「はっは、逃げんなよ！嬢ちゃん。」

「くっ…！」

思った以上にこの服動きにくい。
いつもはスパッツだから動きやすかったけど、初めてのワンピースだから…。
もう！海斗に可愛く見てもらいたくて、着てきたのにこんなことになるなんて…！

それにただの不良だと思ってたのに、意外に強い。
そのうえ、なんて数なの！
このままやっても、完全に不利だわ。

「とりゃっ！」

「ぐっ、てめ…」

アタシは作戦を変えて、砂で目潰しをする作戦に出た。
相手に向かって、蹴り上げる。

「この、調子に乗るな！！」

「おい、そこまでは…！」

「……え……？」

私に刺さる一本のナイフ。
最初は驚き、痛みはあとからやってきた。
てっきり数に任せて襲ってくると思ってたから、武器の存在に気づけなかった。

じんわりと痛みは広がっていく。
傷口は痛いというより熱かった。
視界は急にぼんやりとしてくる。
傾く世界に自分の体が倒れていくのが分かった。
そこで遠ざかっていく意識。

どうなったのか、分からない。
目も開けられない。
今こうやって考えているのは本当に自分なのか。
意識があるのかないのかも分からないなか、心の中の人を呼んだ。

「か…いと……」

～

「ほら、着いたぞ。」

「あ……」

海斗にいわれて前を見ると、いつの間にか川神院の前まで来ていた。
ここまであんまり話せなかった。
海斗の背中で緊張したとかいうのは抜きにして。
ちょっと、海斗の様子がおかしい。

「じゃ、俺はもう帰るから。」

「あ、うん。海斗、また今度絶対行こうね！」

海斗は答えない。
ていうか、聞こえてないみたい。
さっきからこんな風に、何か考え込むように上の空になってるのが多い。
話を聞いているような聞いていないような軽い感じはいつものことだけど、
何かそれとは違って海斗らしくない。

「海斗！」

「あっ…なんだ？悪い、聞いてなかった。」

やっぱりだ。

「だから、今度また行こ？水族館。」

「……ああ、また今度な。」

「うん…。」

そのまま海斗は背を向けて、歩いていってしまった。
アタシの勘違いかもしれない。
だけど、海斗の返事になんか心がないような気がした。

「はぁ…」

でも、今アタシが海斗に言ったって、意味ない気がする。
色々海斗は不思議だけど、あんな海斗は初めてだ。
また明日、海斗と話せばいい。
そう決意をして、家に入った。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　百代

「おー、妹帰ったか。」

「あ…お姉さま。」

廊下を歩いていたら、前から来たワン子に会った。

「どうだ?デートは楽しかったか?」

「あははは……ダメだったかな。ていうか、行けなかった。」

「どういうことだ、それは?」

「なんか病院いってたら、時間なくなっちゃって…」

「怪我でもしたのか!?」

「ちょっとナイフで刺されちゃって…、でももう大丈夫だから。海斗にもう
病院に連れてってもらって傷はふさがったし…」

「ナイフでだと…?ちょっと見せてみろ!」

「う、うん…」

ワン子にその怪我をしたところを見せてもらうが…

「傷口はどこにあるんだ?」

「だから、それはもう治って…」

「いや、そうじゃなくてだな。」

縫いあとどころか、傷があった場所も分からない…。
ほんとに病院で手術をうけたのか？

「どこの病院で見てもらったんだ？」

「それがアタシずっと眠ってて、気づいたら海斗の背中で運ばれてて…」

「……そうか。」

それじゃますます病院に行った可能性は低くなる。
こんなに綺麗さっぱりなくなるなんて普通ありえない。
これじゃまるで………。

私の“瞬間回復”だ。

Side out

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

もう日は落ちていた。
俺は家に帰ろうと暗い通りを歩く。

「ふっ、さがしたよ。」

その道を塞ぐ者。
それは忘れもしないあの夜の女。
確か名前は…

「亜巳とかいったか？」

「よく覚えてるねぇ、海斗。」

「そっちもな。」

「私は天に嫌というほど聞かされたからさ。」

「で？また俺を倒そうってか？」

「今日はそんなんじゃないよ。話し合いに来たのさ。とはいっても、もしも
のときに用心棒はつけてるけどね。」

そして現れたもう一人。

「やっほー。海斗くーん。」

「次女の辰子だ。ちなみに天はうるさいから連れて来てないよ。」

「はぁ…で？何の話し合いだ？」

そこで亜巳がパソコンのようなものを取り出す。

「これを見な。マロード、うちらの雇い主からメッセージを預かってる。」

96話　「メッセージ」（後書き）

ありがとうございました。
まぁ最初からナイフで刺す予定ではなかったんですよね。
砂の反撃にキレた部下がやったことです。
とかいって、竜兵もかばってみますが、
結果的にはやはり自業自得です。

97話　「From　マロード」（前書き）

ここまで急ピッチで進んできましたが…
まだまだ進みます（笑
二人の接触どうなるか。

97話　「From　マロード」

「これを見な。マロード、うちらの雇い主からメッセージを預かってる。」

「マロード…」

あいつらの雇い主ってことは、小雪の言っていたこの事件の元凶。
葵冬馬のことだろう。
そいつが直接、俺にメッセージっつーことか。

「じゃ、再生させてもらうよ。」

そして、亜巳がボタンを押した。

「こんにちは、海斗くん。」

意外にも聞こえてきたのは葵冬馬本人の声だった。
あそこまで隠してたっていうのにな…。

「ボイスチェンジャーなどは今回は使っていませんよ。どうせ海斗くんのこ
とですから、私の正体なんて遅かれ早かれ見抜くとは思っていたの

ですが、
まさか刺客をおくって交戦させた初日に見破ったとは…いやはや恐ろしいで
すね。まあ、このほうがお互いに腹を割って話せますし、ちょうど良かった
んですけどね。」

「なるほど、マイナス点も引きずることなくさっぱり諦め、逆に前向きな方
向へと利用することにすぐ方針を変えるか。流石、学年主席らしい賢い選択
だな。」

「そんな大層なものではないですよ。臨機応変は人と接していれば、自然と
誰でも身につきます。特に私は女性と色々交流がありますから。」

「さりげなく自慢を話してんじゃねぇ。謙虚なのか横柄なのか、どっちか一
方にしやがれ。」

「私はいわゆるバイですから。色んな意味で両刀使いなんですよ。」

「なんの理由にもなってないだろ……ん?」

さっきから妙に会話が成立している。
というか、これは完全に…

「おい、これ生で通話してるだけだろ。」

「そうですが、何か？別に録画の映像だとは一言も言っていませんよ。」

「お前の部下が“再生”とか言ってたぞ。」

「それは私が頼みましたから。」

「やっぱお前の仕業かよ！」

こいつ、おちゃらけているというか。
まるで悪事の中心人物とは想像がつかない。
真面目に話そうという気はないのだろうか。

「俺はお前の敵なんだろ？排除しようとしてきた張本人なんだしな。それなのにそんなふざけた態度で話してていいのかよ。」

「別に私からしてみれば、計画の邪魔になっていたのがたまたま海斗くんだったというだけですからね。立場的にはそうかもしれませんが、敵というよりも…私は海斗くんのこと大好きですからね。」

「うわ……」

マジの寒気が走った。
なんか、最近男を好きになる男って流行ってでもいるのか。
もしそうだとしても、そんな流行、さっさと断絶しろとしか思わんが。

「そんなイカれた性癖はないからやめてくれ。」

「まぁまぁ、最初は誰でもそうですよ。私といることでゆっくりそれは改善されていきますから、安心してください。」

「完全に改悪だろーが。こんなしょーもない話はどうでもいいんだよ。本題があるなら、さっさと話してくんねぇか?」

「…そうですね、これ以上はぐらかしても仕方ありませんし。」

そこで声色も少し変わる。
一旦、呼吸をととのえ話し始めた。

「“常夜(とこよ)”という場所は知っていますか?」

「……っ……」

「というか、知っていますよね。海斗くん、あなたはそこの出身じゃないんですか?」

「……それに俺が答える必要があるのか？」

「否定はしないんですね。沈黙や質問返しは肯定と受け取らせてもらいますが…？」

「お前ほど頭のきれる奴がそういう情報を引き合いに出して、駆け引きに使うってことはある程度裏は取ってんじゃねーのか？それにここで俺がぐちぐち否定の言葉を並べたって、お前にさらなる情報を与えるだけだろ。」

「流石、海斗君ですね。短い間で随分と賢い返しです。やはり、一筋縄では騙せませんか。」

「で、どうなんだ？誰から仕入れた。」

「ふふ、海斗君には敵いませんね。では、話しましょうか。近々、この街で“カーニバル”という催し物が開かれるんですよ。」

「“カーニバル”？」

「沢山の不良、悪人が集まる大規模のパーティですよ。その参加者にたまたま常夜出身の人がいましてね。多少のお金とカーニバルでの行動の自由を認

めただけで情報を提供してくれましたよ。」

「常夜の奴がこっちの世界に出てきたっていうのも驚きだが、よくそいつと
交渉になんて持ち込めたな。今、お前の命があるのが信じらんねーな。」

「私にはそれはそれは頼りになるボディガードたちがいますから。」

「そいつから良くピンポイントに情報を聞きだしたお前もお前だが。」

「えぇ、私もまさか一発でヒットするとは。本当に有名で助かりましたよ、
ねぇ“死に神”さん？」

「！　へぇ、本当に嘘なんかじゃないらしいな。で、そんなことだけ言うた
めに俺に接触したのか？」

「まさか。私は海斗君にカーニバルで味方になってほしいんですよ。」

「なんだと？」

「勿論、ただじゃありませんよ。海斗君が味方になってくれれば、平和な学
校生活は保証しますが。どうです、私たちについてくれませんか？」

「それは他の奴にバラすっていう脅しか？」

「別に私はなんとも言っていませんよ。ただ味方についてほしいと、だって
海斗君は常夜の出身なんですよね？」

「ああ、確かに俺が常夜から来たのは間違いない。」

「でしたら…」

「だが、俺はお前らの味方にはならない。ばらしたいならばらせばいい。あ
と俺が敵に回るのを警戒してるんだったら、心配ない。俺はもうあっちに戻
ろうと思ってるしな。」

「そうですか…」

「ああ、俺はお前らの敵にはならない。」

「どう説得したって、動きそうにないですね。」

「用はそれだけか？じゃあ、もういいな。」

「はい。では…」

通信が途切れる。

「話は終わったようだねぇ。」

「ああ。」

「えー、私たちの仲間になろうよー、海斗くーん。」

「悪いけど、人の下にはつかねぇ主義だ。戦う相手は自分で決める。それこそ天使とかだって誰だって、俺が決めて戦うならいいが、人に指図された行動で傷つけたくはない。」

「海斗くん、優しいんだねー。」

俺が優しいか…
笑える話だ。

―“常夜”
それは絶対に拭うことの出来ない俺の過去。

97話　「From　マロード」（後書き）

ありがとうございました。
まあ気づいていた方も大半でしょうが、
黙っていてくださったことに感謝します。
そして、遂に次回から海斗の謎が…

98話　「常夜」（前書き）

今回から過去編です。
今まで隠してきたこと、煩わしく思われていたものを明らかにします。

98話　「常夜」

無法のアンダーグラウンド“常夜”。
そんな呼び方をする者もいた。
他にも色々あったが、呼び方なんてどれも正しいものではない。
そもそも、正式な場所ではないのだから。

だが、普通“常夜”と呼ばれるこの場所。
地下にあり常に夜であることと、どこまで進んでも人間の闇に包まれている
ことから、この名がつけられた。
名前は随分と小奇麗だが、実際はそんなことない。
まさに“社会の吹き溜まり”なんて言葉が打ってつけの場所。

犯罪者が逃げ込むこともあれば、心に闇を抱えたものが自ら来ることもある。
そんな社会不適合者が何故ここを求めるか。
それはこの場所が完全な法の外に位置するから。
警察もここに逃げ込まれては、どんな重罪人でも一切関与できなくなる。
あまりに危険で、あまりに深すぎる闇だから。

生まれながら海斗はその身に宿す気の量が膨大だった。
神の子だと、凄い才能だと崇められるかといえば、そんなことはない。
赤ん坊にして、その有り余る力は人間を超越していた。
そして、周りが感じるのはただ“不気味”。

結果、恐れられた海斗は両親に捨てられた。
最悪の場所、常夜に。

だが、両親の命はそこで終わった。
一般人が入って出られるほど甘いところではないのだ。
結局、残されたのは幼い海斗と親の遺品だけだった。

ある者は恐怖で発狂して、ある者は自分の戦力にしようと画策して、またあ
る者はまだ幼いうちに危険な芽を摘んでおこうと、様々な住人が海斗を襲った。
幼い海斗にはそれが何故か分からなかった。
目の前の人が悪い人だという認識さえ持てなかったのだ。
それだけに相手の攻撃に抵抗すらも示さず、ただその純真な瞳で見つめるだ
けだった。

だが、ひとたび、自分の身に危険が迫ると一瞬で周りは血の海になっていた。
そこに立っていられたのは、まだ幼い少年ただ1人。
圧倒的に体の大きさも異なれば、力も比べ物にならない。
なら、少年はどうして生き残れたのか。
少年が持っていたのは別に戦闘センスでも何でもない。

“生への執着”

受ける傷など気にもせず、相手の命を迅速に刈り取る。
傷もまた数日経てば、自分で治してしまう。
恐ろしいほどの執着心。

襲ってくる輩は次々にその命を落としていった。
そして、本来なら三輪車にでも乗って、元気に走り回ってるであろう年齢の
少年は人々から恐れられ、こう呼ばれた。

―“死に神”と。

死神ではなく、死に神。
それは人々に恐怖を与える存在としてだけでなく、それ自身も幼くして、感
情も死んだ残虐なパペットだと、皮肉を込められた名。

そんな彼には仲間なんていなかった。
会話相手すらいない、闇の中での孤独。
日が昇ってくれたら、風が吹いてくれたら、彼は願った。
何も変化しない時間は独りで過ごすのにはあまりに辛すぎた。
しかし、それも地下では叶わない幻想にすぎない。

誰でもいいから、話したい。
何でもいいから、動いてほしい。
嫌いでもいいから、襲ってほしい。
退屈は辛すぎた。

そんな彼の願いが叶ったのか。
1人の男性がそこを通りかかる。
動いてるものが見れた、少年がそれに満足していると男性に声をかけられた。

少年は思う。
ここには他に誰もいない、自分に話しかけられたのだ。

嬉しかった、嬉しかった、嬉しかった。
ただ幸せを感じた。

おじさんは家に招待してくれた。
美味しいごはんをご馳走してくれるんだって。
久しぶりに美味しいごはんが食べられた。
こんな優しい人もいるんだ。
良かった、諦めなくて良かった。
食後におじさんがお薬を持ってきた。
何でも、お腹をこわさないために飲まなきゃいけないっていう。
僕はうなずき、コップの水でお薬を飲み干した。

そんな生活が1週間くらい続いた。
おじさんは毎日美味しいご飯をくれた。
そのたんびにお薬もくれた。
苦いけど、優しいおじさんが自分のためにくれたお薬だ。
味は気にしないようにして、欠かさず飲みきった。

ある日の夜、いつものようにお薬を飲んだら、気持ち悪くなった。
目の前がかすんで、立っていてもふらふらする。
どうしちゃったんだろう、僕。

おじさんは笑って言った。
“その薬はね、気を奪い去るものなんだよ”って。
“だけど、君はすごいから、一週間もかかっちゃった”って。
おじさんが何を言ってるか分からなかった。
よく分からなくて、座り込んだら、おじさんがこっちに向かってきた。
おじさんは手にキラキラしたものを持っていて、それを僕に振り下ろした。

次の瞬間、また海ができていた。
真っ赤な海が…。
そこでようやく分かった。
このおじさんも自分を襲ってきたんだと。
自分の手にはお皿の破片が握られていた。
さっきまで美味しそうな料理がのっていたのに、今は真っ赤なスープがこびりついているだけだった。

気をなくしても、少年は生への執着で生き残った。
そこにあった威力の期待できない道具で相手の急所を的確に狙い、またも、
その命を刈り取った。

襲われるうちに少年は相手の攻撃が見えるようになっていた。
それは考えられない回数による慣れ。
発達した目は気など頼らずとも、数々の危機を回避させた。

そうして少年流川海斗は幼くして、腐った世界を己1人の力で生き抜いていったのだった。

98話　「常夜」（後書き）

ありがとうございました。
まあ壮絶すぎる過去ですね。
親から酷い扱いを受けた海斗、
小雪のシンパシーはこれですね。

99話　「新たなる一歩」（前書き）

こういう風に過去を淡々と書いていると、
矛盾が生じそうで怖いんですよね。
時間なくて推敲もできませんし…。
まあ時間かけても同じでしょうが（笑

99話　「新たなる一歩」

あの裏切りの事件から俺の生活は少しずつ変わっていった。
少し時が経ち、物事が理解できるようになると、俺は人と関わるのをやめていた。
人間なんてあんなもんだという見解に行き着くのは、そう時間のかかることではなかった。
別に絶望したわけではない。
俺が邪魔者だというだけ、殺そうとするのは当然。

だから、俺はもっと違うものを信じるようになっていた。
たまに紛れ込んでくる野良の動物たちを相手にしては、一緒に遊んだり、会話をしていた。
会話といっても、勿論動物たちが話せるわけでもないので、俺が一方的に声をかけているだけなのだが…。
それでもずっと一緒の時間を過ごすうち、俺の話が終わるまではそこを動かず寝転がって聞いてくれていたり、相槌を打ったりと、心が通じているかのように感じていた。
まぁ、俺の勝手な解釈でしかないけどな。
俺の周りで戯れているその姿を見ているだけでも、心は和み幸せだった。

また、寄ってくる野蛮な住人からはそいつらを保護していた。

自分たちを守るためにその手を血に染める姿を見ても、動物たちは逃げ出さ
ず、むしろ日増しにその数は増えていった。
逃げられても仕方ないと覚悟はしていたのだが、やはり残ってくれていたと
いうのは素直に嬉しかった。

動物たちは海斗の根底にある優しさの部分を感じ取っていった。
動物とはそれくらい本能に長けたものである。
動物好きに悪い人はいないなどと言うが、それこそ動物に好かれる人に悪い
人はいないという方が余程適切である。

あのときのクスリは俺の気を奪ったらしい。
今思えば、予定外の1週間という長い時間がかかったのも、俺の気が膨大だ
った故なのかもしれない。
どんなクスリだったのかも分からないし、果たして副作用が気を奪うという
ことだけだったのかも定かではない。
気づいてないだけで体に不具合がある可能性は十分考えられた。
まあでも、一番はやはり気の消失。

だが、動物たちと戯れる以外にすることもないので、毎日そのほとんどの時
間を鍛錬に費やしていると変化が表れた。

驚くことに自分の体にまた気が戻ってきていたのだ。
クスリが弱かったのか、俺の気が規格外だったのかは分からない。
けれど、一度空になった気を戻すという荒業を成し遂げたせいなのか。
俺は自由に気を扱えるようになっていた。
詳しく言えば、オンオフを使えるという普通不可能とされていること。
また繊細なことから力任せのことまで、気で様々な用途にも応用できるよう
になった。

だが、別にこんなものに頼っている必要はない。
いざというときに頼りになるのは己の体だけだ。
結局、この世界で生きるということはそういうことだから。
俺は気をゼロの状態に操り、鍛錬を続けた。

俺がピンチになったら、周りを皆殺しにしてしまう。
俺の意思には関わらず、生への執着がそうさせるのだ。
ならば、ピンチにならないような圧倒的な強さを。
いつも冷静でいられるような絶対的な強さを。
無闇に人を傷つけない強さを手に入れるための鍛錬。

そんな毎日の繰り返し。
日に日に増える動物たちと過ごす楽しい時間もあったのだが、変動しない作
業のループの中にいることに変わりない。
俺はうんざりしていた。

動物たちもこんなところにいては、すぐに弱ってしまうだろう。
環境もそうだが、なにしろ空気がもう腐っているようなものだ。
こいつらが外の世界にいたのだとしたら、引き止めているのは完全に俺だ。
可哀相な俺に優しいこいつらは付き合ってくれているのだろう。

だから、俺は外の世界に出る決意をした。
たまに流れ込んでくる外の世界の本。
それは知識や情報の塊だった。
興味がわいていたのも事実だ。

決意をすれば、すぐだった。
持って出るものなんて、一つとしてなかったから。
俺が歩き始めると、大勢の動物たちも後に続いた。

出入りは本来簡単に出来るのだが、出入り口が使われることはそうない。
理由は簡単、入った者が出ないからだ。
法の網を抜けて、腐った安息を求めた者は自分から規則の世界には出ようとしない。
また誤って紛れ込んでしまった者はその身ぐるみを剥がされ、ほとんどの確率で命までもを取られる。
ある意味、そんな一方通行なのだ。

外に出ると、右側から風が吹きぬけた。
少し歩くと、人影があった。
外に出たからといって、ここもまだ治安が悪い。

得体の知れないそいつから、動物たちのことを守ろうと思った。

だが、目の前の女はニコッと笑う。
どうやら、目の前にある店の従業員のようだ。
女は店の中に入ると、箱を持ってきた。
わけもわからず、警戒しつつも様子を見ていると…。
箱からペットフードを出して、動物たちに与え始めた。

なるほど、俺の事情が分かっているらしい。
確かにこんなに多くの動物たちを連れて、街は歩けない。
ここに置いていくことが得策だろう、面倒も見てくれるようだしな。
だが、初対面の俺になぜこんなことをしてくれるのだろう。

その女は何を感じ、見ず知らずの海斗に手を差し伸べたのだろう。
それはやはり、海斗に全幅の信頼を寄せる周りの動物たち。
動物に好かれる人に…

俺の知っている人間は一部でしかないことが分かった。
俺の世界は狭すぎた。
悪人がはびこる退屈の闇。

この広い世界にはどんな人間がいるのだろう。
それが知りたくなった。
本の世界ではなく、リアルで。

だから、俺は学校に行こうと考えた。

沢山の人間が集まるという学校に。
そこなら退屈を感じずにすみそうだ。

99話　「新たなる一歩」（後書き）

ありがとうございました。
あんなことがあっても人間を完全に
嫌わないというのは、やはり海斗の
根底の優しさが影響しているんでしょう。

１００話　「川神学園」（前書き）

１００話です。
３ヶ月くらい毎日更新ですね（笑
ラストスパートということで活動報告で
アンケートもしているのでお願いします。

１００話　「川神学園」

「ここが学校ってヤツか。」

初めての外の世界は色々と衝撃的だった。
本で知識としては知っていても、やはり生で見るのはこの上なく興味をそそ
られるものだ。
おかげでだいぶ寄り道が多くなってしまった。
この学校に着くまでの所要時間を大幅にオーバーしている。
それでもやっと目的地だ。

「えっと…名前はっと……川神学園か。」

変わり映えのしない名前だが、ここらでいいか。
この学園からは強そうな奴らの気が感じられる。
どうせなら見ていて面白い奴が多い方が退屈しない。
これで拠点も決まった。

さて、問題はここからだ。
どうやってここに入学しようか。

そもそも俺は戸籍も住民票も何もない。
かといって、ありのままの出生を語るわけもないので作ることもでき
ない。
まあ、それが入学に必要なのかは知らないけどな。

だが、仮にも未来を担う施設にそんな正体不明な奴を学校側が受け入れるわけにもいかないだろう。

なら、どうするか…。

まあ正攻法なんて最初からないんだから、前読んだ小説に習うか。

俺らしく行こう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

—学園長室

「はぁ、学園長も楽じゃないのぉ。」

トントンと書類を机で揃える。

「生徒が決闘でもしてくれれば、気も紛れるのじゃがなぁ。」

「よぉ、じいさん。」

「ム…」

川神鉄心1人しかいなかった部屋に別人の声が響く。

「おぬし、気が感じられんの。だが、それ故弱いというわけではないらしい。
気配も完璧に消しておった。ワシの背後をとるとは、見事じゃな。」

「そらどーも。けど、その背後を取られた奴にしては、余裕すぎると思うが？」

「あいにくと背後を取られたくらいでは負けはせんよ。」

ヒュッと、その攻撃は刹那。
コンマ1秒で繰り出された拳。

パシッ

だが、その攻撃は同じ速さで止められる。
鉄心は予想外の結果に驚く。

「今の攻撃を止めるか…、気配の時点で気づくべきじゃったが、おぬし只者
ではないな。気もないのに今のスピードとパワーに対応するとは…」

「何言ってんだ。手加減なんてしてるから、止められるんだよ。お前こそ
じぃのくせに元気な攻撃してくるじゃねーか。どんな老後ライフをおくって
たら、こんな馬鹿みたいな力がつくんだよ。」

「……ふむ？おぬしはワシのことを知らんのか。」

「俺がなんで年配のことを熟知してなきゃならんのだ。」

「おぬし、街の外から来た者か？」

（なんでばれたんだ？こいつ、もしかして有名人か？）

「ああ、そうだけど…」

「ふむ、それならばワシを知らないのにも納得がいくのぉ。外にこんな逸材
がおったとは、ほっほっほ。」

「おい、じぃさん。ほのぼの喋ってんのはいいけどよ、さっさとこの拳の力
を緩めてくんねぇか？押さえんの面倒くせぇんだけど。」

「こっちもやられると困るからの、油断はできんわい。」

「それにしては、さっきからベラベラと喋って緊張感なんて全くねぇけどな。」

「まぁ、それもそうじゃの。」

鉄心が入れていた力を抜く。
それに呼応するように海斗も掴んだ拳をはなした。

「“そうじゃの”って…随分あっさり折れるんだな。」

「おぬしからは戦闘に入った途端、相手を倒そうという上質で鋭い殺気は感
じられたが、不思議とそこに邪気は感じられなかったんじゃよ。あれだけの
殺気に邪気がないとは相当なものだと思っての。」

「何言ってんだか。年寄りの平和的な妄想にも程があるだろ。」

「馬鹿にするでないわ。ワシくらいになれば、それくらいの判断はつく。」

「ただの耄碌じじぃが何言ってやがる。」

（本当にワシのことを知らんのじゃな…）

「それでおぬしが無断で学園長室に入っていたのは何故じゃ？」

「ああ、俺をここの学園に入れろ。」

「……は？」

「この前読んだ小説には、手っ取り早くことを済ませるためには頭を落とす
のがいいって書いてあったからな。誰にも気づかれず、ここに潜入すんのは
少々骨が折れたけどな。」

「じゃが…」

ガラガラ

そこに突然の来訪者。
ルー・イーだった。

「失礼しまス、少し用が……ン！敵！？」

「ちっ…！」

「おい待て、ルー。こやつは…」

「音もなく進入するとは、容赦はしないヨ！」

「そっちが来るなら、自己防衛はさせてもらうぜ。」

ダン！

次の瞬間、ルーは床に組み伏せられていた。
海斗の投げ技によって。

「クッ！ただものじゃないネ…」

ルーも全力で臨んだわけではない。

しかし、その動きから強さは認めざるをえなかった。

「頼むから疲れることさせないでくれ。」

(なんと…こやつは…。今の一瞬でルーの連撃を止めるだけに留まらず、反
撃の一撃で相手の自由まで奪いおった…。この学園は強く信念を持った者は
歓迎しておる。なんらかの事情はありそうじゃが、こやつの立ち姿は…)

「だけど、まだまだだヨ!!」

「ルー、落ち着け!敵ではない。」

「あっ、そうでしたカ…分かりましタ。」

「おぬし、名前は?」

「名前?流川だが…」

「下の名前もじゃ。」

「・・・・・・」

俺の親はあっちの世界に行って、すぐに死んだらしい。
唯一俺が親から受け取ったものは親の身分証明書のようなもの。
そこには“流川”という苗字があった。

だから、俺は“流川”。
親がつけていなかったのか、つけていたが残されなかったのかは分からない。
だが、どちらにしろ俺に名前はない。

「…海斗。」

「む？」

「流川海斗だ。」

捨てた親は確かに最悪だが、恨んではいない。
人の心なんてそいつ自身しか分からない。
俺が同じ立場だったらどうするかなんて分からないんだ。
まあ、だからって捨てた親を大好きだなんて嘘はつけないが。

だから、俺はそんな不甲斐ない親も受け入れる。
“流れる川”を受け止める“海”のように。
それが俺の背負う名前、“海斗”だ。

「では、流川海斗。おぬしにこの学園の受験資格を与える。テストの点数が
規定を超えれば、はれてこの学園の生徒じゃ。」

「ああ、分かった。」

そして、海斗は学園に入学し、新たな世界に入った。

「……全く無茶苦茶な奴じゃ。」

…テストの点数は全て満点だったという。

１００話　「川神学園」（後書き）

ありがとうございました。
川神学園に入ったのは、その武力と
知力を認められてってことですね。
学園長の懐の広さもあるでしょうが。

１０１話　「全ては過去」（前書き）

皆さん、１００話おめでとうなどの沢山のコメントや感想ありがとうございます。最後まで一層頑張っていきたいと思います。
アンケートは活動報告にてまだまだ継続中です。

１０１話　「全ては過去」

学校が決まったら、次なる試練は住むところだったのだが、それにはほとん
ど苦労しなかった。
親不孝通りのとあるアパート、そこの酒癖悪い大家（女）が受け持つそこは
一風変わっていた。
身元も分からない俺を力仕事を手伝う条件で、すんなり受け入れてくれた。
家賃も治安が悪いせいか安いし、俺にとっては好条件。
迷うことなく、俺はこちらの世界での住処を確保できた。

今思えば、川神学園に入学してから俺の新しい生活が始まったのか。
色々新鮮だったな。
まあ、最初の頃は誰とも関わらないようにしていたから、退屈は捨てきれな
かったがな。
そもそも、あんな目立たないように変装してたのもな…

～

「この街も色々あるんだな。」

知らない街を散策する。

こんなに人がうろうろしているという光景も新鮮だ。
俺も明日からは川神学園の生徒だ。
正直、テストはそんなに難しくなかったのでほぼ確実といえる。
さてと何をしようか。
行く宛もなくぶらぶらとしていると…

「…遅いねー…」

「…ていうか、それってどうなの？…」

前でなにやら会話をしている大人っぽい女の子2人組みを発見。
あれが噂のおしゃれっていうやつか。
オフィスレディとかそういう奴なのか？
スーツじゃないから、雰囲気だけなんだが。
明らかに俺よりも年上の二人はこれまた新鮮だ。

（あっちの世界は女なんてそう見ないからな。）

そのとき不穏な気配を感じた。
見れば若者がこちらに自転車で突っ走ってくる。
何を盛り上がっているのか、そいつは後ろの自転車の奴とふざけあっていて、
前なんか見ていない。
そして、それは迷わずさっきの女の子たちの方へ向かう。

それも結構なスピードだ。
対して、女の子たちも会話に夢中で気づく様子はない。

（ちっ、なにやってんだ。）

幸い、女の子と自転車の距離はまだ少しある。
俺は迷わず暴走する自転車の前に出る。
そして、真正面から遠慮なく突っ込んできたそれを片手で止めた。

ガンッ

当然、乗り手は何が起こったのかと瞬きを繰り返す。
そんな阿呆に状況を理解させるように言ってやる。

「ちゃんと前見て、走れや。周りに迷惑かけんな。」

少し低めの声に努めて笑顔。
こういうのが一番心にくるらしいからな。

「は、はい！！」

自分の危機を感じたのか、震える声で大きな返事をする。
俺の言ったことは理解してくれたようで、ライダー２人組みは縦一列の安全

第一で走り去っていった。
はあ、どっちの世界にも常識なってない奴はいるんだな。
あちらと比べれば、断然可愛いもんだが…。

「ねぇねぇ、ちょっと君！」

「あ？」

振り返ると、女の子２人組みが俺の後ろに立っていた。
結構離れたとこにいたはずなんだけどな。

「今、あの自転車の子たちから守ってくれたんだよね。」

「いや、俺は別に…」

「良かったら、お礼に私たちと一緒にお茶でもしない？勿論おごったげるよ。
ね、どう？」

「別にお礼もらえるほど大したことはしてねーけど。」

「もー、察し悪いなー。実は今、この前コンパで知り合った人たちと待ち合
わせしてるんだけど、時間に遅れてるのよね。誘っといて、こっちは仕方な
く来てるのに遅れるなって感じじゃない？もう１０分くらい待たされてるし、

このまま待つくらいだったら、君と遊びたいのよ。」

あー、それは確かに男のほうが悪いだろ。
なんかの本にも男は女を待つもんだって書いてあったし。
そのうえ誘ったんだったら、愛想つかされても文句言えねぇな。

「ね？ね？キミ紳士的で優しいし、それに自転車を止めて注意するなんて男
らしいじゃない。何より近づいて見てみれば、顔もかっこいいなんてねー。
もうあんな男を待ってる必要なくなっちゃった。お姉さんたちの暇つぶしに
付き合って、お願い。」

こっちの世界の会話ってのも体験しとくっていうのもある。
それに普通に可愛いし、断る理由はないか。

「ま、いいけど。」

「やった、じゃあ決まり。あっちにカフェあるから、行きましょ。」

―店内

「何飲む？なんでも好きなもの頼んでいいからね。」

「暇つぶしには付き合うけど、自分の分は自分で払う。」

「いいのよ?別に遠慮しなくても。独り身なんだから、これでもお金には困
ってないわよ。」

「関係ねぇよ。女の子にはおごっても、おごらせたりしたら駄目だろ。」

「うっわぁ、かっこいいこと言うねぇ。ほんとキミのそういうとこいいなー。」

「そんだけかっこよかったらモテるでしょ?彼女いる?」

「いや、そういうのは特に…」

「うわー、じゃあお姉さんが狙っちゃおっかな。年上とかどう?」

「いや、あんたは普通に可愛いけど。」

「わー!なんか君に言われると本気で嬉しいな。」

「なんか、運動も出来そうだし、頭も良さそうだし。学校とかで注目の的な
んじゃないの?」

「へっ?運動出来たり、頭良かったら目立つのか?」

「そりゃそうよ。しかも、そんなにかっこいいんだから、絶対君に

憧れてる
子とかいっぱいいるわよ。」

「いや、それはねーけど……そうか、目立つのか。」

「そうよー。あーあ、私が君と同じ年で同じクラスとかだったら、絶対に告
白するわね。」

「はぁ……」

〜

あの前情報はなんだかんだで役に立ったな。
クラスも一番良いとこはやめたし、テストの点数も自分で調整して、目立た
ないような工作ができた。
同時に俺に退屈を与えたが…。
ま、結局やめたし、どうでもいいか。

ほんとこっちの世界は発見の連続で飽きることがなかった。
楽しい事だって沢山あったし、良い奴らにも沢山会えた。
けど…

“お前への復讐なんだから”

俺には結局場違いだったってことか。
どこかで俺も普通に生活していいと思ってた。

なのに、俺のせいで迷惑をかけて、傷つけた。
俺は必要とされていない。
この世界に。こっちの住人に。

だから、戻るだけだ。

１０１話　「全ては過去」（後書き）

ありがとうございました。
今回最初の方に感想で聞かれたので、
前にボツにした話から情報だけ引っ張ってきました。
特に重要でないと思ったからなんですが、
気になる方もいるということなのでさらっと流してください。

１０２話　「海斗のいない日」（前書き）

さて、過去編も前回で終了です。
色々隠してた設定を放出しました。
今回からさらにラストへ向かうので、よろしくです。
アンケート２つもまだまだ実施中。
お暇でしたら、覗いてやってください。

１０２話　「海斗のいない日」

遠ざかっていく海斗の背中。
それを見て、亜巳は口を開いた。

「いいのかい、マロード。行っちまうよ？仲間にならないなら、ここで潰しておくのが安全だと思うけどねぇ。」

「確かにそうですが、今は手を出さないほうがいいでしょう。それとも、海斗君相手に絶対勝てる自信がありますか？」

「うちの辰なら大丈夫さ。」

「否定はしませんが、切り札というのはそう簡単に見せないものですよ。海斗君はカーニバルには参加しないと言っていましたが、もしもの事態にも対応できるようにはしときますよ。彼1人いるかいないかで戦場がガラリと変わる、そんな駒ですから。そのための材料は十分に用意できました。」

「ふぅん。まぁ私らはカーニバルで暴れられれば、それでいいさね。」

「海斗くん、いい子だったなー。また会えるかなー。」

「いや、だからあいつの言うとおりならもう会えないって。」

「そうなのー？じゃあ天ちゃんは、どうなっちゃうのー。あんなに海斗くんのこと好きなのにー。」

「天を連れて来なかったのはそう考えるとある意味正解だったね。とにかく、私らはカーニバルで思う存分暴れまわるだけさ。」

「ふふっ、期待してますよ。」

・・・

―翌日

いつものように登校する生徒たち。

そのなかには昨日大変だった一子もいた。

今日はファミリー揃っての登校。

変わらぬ平和、穏やかな日常がそこにはあった。

「へぇ、昨日はそんなことになってたのか。でも、本当に無事でよかった。」

「てか、その刺した奴を放ってはおけねぇだろ。」

「そうだな、私の可愛い妹に手を出したんだ。八つ裂きにしてくれる。」

…会話の内容こそ物騒だが。
間違いなく平和な時が流れていた。

学校に着いたメンバーはそれぞれの学年へと分かれていく。
一子を含め、ほとんどの者が向かうのが２－Ｆである。

「あれ、海斗はまだ来てないのか。」

クリスがそんなことを呟く。
一番に反応したのは一子。
その後、他のメンバーも教室の海斗の席に目を向ける。
確かにそこは誰も座っていなかった。

「どうしたんだろう…」

「ただの遅刻だろ、動物でも追っかけてんじゃねーの？」

「んぅ、だといいんだけど…」

一子が無駄に心配するのにも訳がある。
海斗はいつもこの時間にはとっくにいるのだ。
基本登校は早いし、遅刻もめったにない。

あったといえば、あのラブレター事件のときくらいだろうか。
そして、一子が最も気にかけているのは…

（昨日の海斗の様子はなんかおかしかった…。もしかして、それが…。）

「ワン子、そんな顔すんな。大丈夫だって。」

力なく頷く一子。
だが、無情にも最初の授業のチャイムが鳴り響いた。
遅刻だと考えようとするが、結局その日の授業は全て終わってしまった。
海斗の来ないまま…

ずーん、そんな音が一子から聞こえてくるようだった。
昨日、何もしてあげられなかった自分に責任を少なからず感じているのだろう。
クリスも一子には及ばないが、心配で元気がない。

「あいつも人間なんだから休むこともあるって。そんな気落ちするな。」

「ああ、そうだぜ。明日会って、元気に声かけてやりゃあいいだろ。」

「分かったわ…。」

「ああ…。」

だが、次の日になっても海斗は学校に現れなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

「さて、このままでは約３名が生きる気力をなくしてしまいそうなので、対策を考えることにする。」

急遽、開かれた集会。
金曜でもないのに、ファミリー数名の異常な落ち込み具合に全メンバーが集結していた。

「やはり、流石にこれはおかしいだろう。」

クリスが話に入ってゆく。
すかさず、由紀江が賛同した。
「私もそう思います。失礼かもしれませんが、海斗さんが病気で休むなんて

考えられないです。今までもそうでしたし…」

「でも、彼だって1年に1度くらいそうなることはあるんじゃない？」

「アタシはそのやっぱり一昨日のことがあるから、普通じゃないと思うわ。」

「一昨日っていうと、この前言ってた様子がおかしいっていう奴か？」

「うん。なんていうか、深く考え事をしてる感じで…。」

「つまり、病気や事故っていうよりかはあいつの用事ってことで休んでるかもしれないってことだな。」

「だけど、用事ってなんだよ？」

「「「・・・・・・」」」

ガクトの一言にみんな口を閉じてしまう。
そう、そもそもそこなのだ。
病気だろうと用事だろうと、問題ではない。
来ていないという事実の解決にはつながらない。
部屋が沈黙に包まれようとしていたとき…

「みんなー、大変大変だよーーー」

「どうしたんだ、クッキー？」

沈黙を破ったのは突如部屋に入ってきたロボット、クッキーだった。

「こんなのが落ちてて…」

「これは…？ノートパソコンか…」

机の上に置いたそれにはディスプレイはあるが、電源のようなものはない。
市販にしては欠陥品もいいところ。
まさに用途不明。

だが、突然画面は映った。
といっても、映像は砂嵐のようなもの。
しかし雑音はなく、代わりに明らかにいじった声が聞こえてきた。

「俺はマロード。風間ファミリーのみんな、少し話をしよう。」

１０２話　「海斗のいない日」（後書き）

ありがとうございました。
一応原作知らない方への注釈を。
マロードというのは葵冬馬の裏の名。
ボイスチェンジャーで声色を変えて、
話し方も変えています。

１０３話　「ファミリー」（前書き）

主人公不在で今回もお送りします。
アンケートに沢山のご意見ありがとうございます。
もし見てくださっている方がいれば、
遠慮なくお寄せください。

１０３話　「ファミリー」

「俺はマロード。お話をしようか。」

「マロード？誰それ？っていうか、いきなりなんなのよ。」

一子はいきなりの事態についていけず、疑問を口に出す。
だが、それはここにいる誰もが同じだった。
ただ言葉として発していないだけ。
そんななか大和は…

（マロード…どっかで聞いた名前だな。）

「あれー？俺、知名度低い感じかな？んじゃあ、これ見てもらえれば少しは
分かってくれるかな。」

すると、画面が砂嵐から１枚の写真に切り替わる。
そこにはよく見た白い粉の入った袋。

「これは…！」

「これって…ユートピア！？」

「そうそう、大正解。いいでしょ、これ。」

「あ！そういや、ゲンさんが言ってた。不確定な情報だけど、ユートピア事
件を裏で取り締まってる奴にマロードっていうのがいるって。実在したって
いうことか！？」

「おぉー、思い出してくれた？それ俺だよー、俺俺。やっぱ知れ渡ってたかー、
俺ってば有名人だから。」

「なんで、その正体不明を守りたいマロードが俺らに直接コンタクトなんて
取ってくるんだ？」

「いやー、俺もこんなつもりじゃなかったんだけどさー。ちょっと計画が変
わってね…（彼のせいで。」

「変わった？」

「ああー、こっちの話こっちの話。それよりさー、ユートピア今すごい流行
ってんだよねー。他にも泡吹いてる愚かな女生徒の画像とかもあるけど…」

バン！

机を叩く音が響く。

「くだらない話をダラダラするな。こんなことを話すために通信を入れてきたんだったら、さっさと切れ。本題がない話を聞くほど、私は気が長くない。」

痺れを切らして、声を荒らげたのは百代だった。
終始ふざけた態度で悪事を語るマロードに憤りを感じているのは、誰もが同じ気持ちであった。
なので、クリスもそれに続く。

「確かにそういう話を続けられるなら、こちらが不愉快だ。大体、お前がこちらに用はあるのか？」

「そんな怒んないでよー。俺だって用件もなく、こんなことするわけないでしょー。」

「だから、それを早く言えと言っているんだ！」

「もうせっかちだなぁ。じゃあ、お望みの本題をしようか。」

一旦、マロードは言葉を切る。
そして、機械的な声で続けた。

「例えば、そうだなー……流川海斗のこととか…」

「海斗はどこにいるの！」

「海斗はどこにいるんだ！」

「海斗さんはどこにいるんですか！」

一子、クリス、由紀江の声がぴったりと重なる。

恐るべき瞬発力でマロードの言葉に反応した。

彼女たちにとって、まさに今一番求める情報だ。

全員が一様に身を乗り出していた。

「いきなり元気になったねー、ちょっと現金すぎやしないかい？」

「海斗に会ったのか？」

「海斗さんは無事なんですか？」

「海斗について何か知ってるなら、なんでもいいから教えて！！」

「焦らない、焦らない。そんなに食い気味で来られたら、逆に教えたくなく
なっちゃうじゃん。」

「ふざけるな！」

「冗談冗談。流川海斗の情報が欲しいなら、今日の夜この場所に来

なよ。」

そこでまた切り替わる映像。
映されたのは一枚のビルの外観の写真とその住所だった。
ビルといっても、治安の悪いところにある廃屋といったほうが正しい。

「そしたら教えてあげるよ、彼のこと。」

「そんなことをして何になる？お前にメリットはないはずだ。」

冷静に大和が指摘する。

「あー、やっぱり気づいちゃうか。そう、勿論ただじゃない。このユートピア一連の事件を警察に言ったりしないでほしいんだよね。」

「流石のマロードも警察にはお手上げか？」

「いや、まあ捕まるなんてありえないんだけど、いない方が楽なのは事実だしね。」

あくまで軽い口調で言う。

「来る来ないは君たちの勝手だよ。夜までじっくり考えてよ。じゃーね。」

「ちょ、ちょっと！」

一子の叫びも空しく、通信は途絶えた。

「…クッキー、盗聴器とかはついてないか？」

「今現在、電波の受信反応はないよ。こっちの情報が漏れることはないから、
大丈夫。」

大和の考えを汲み取り、答えるクッキー。
大和は頷き、話しはじめた。

「今の話は明らかに都合が良すぎる。警察を恐れてるなら、そもそも俺たち
に接触してこない。そして、時間と場所を指定してきた。十中八九、待ち伏
せされてると考えて間違いない。そのうえで意見を聞きたい。それでも、こ
の場所に行くか？」

「・・・・・・」

軍師の説得力ある言葉に黙る一同。
意外にも最初に口を開いたのは、控えめな由紀江であった。

「私は大事な仲間の皆さんを危険と分かっているのに、行くことは賛成できません。ですが、海斗さんは私の初めての友達…私に勇気をくれた大切な人です。だから、私は行きます！」

「それなら、自分も同じだ。自分も海斗のことを知りたい。」

「アタシも同じよ。」

クリスと一子もすぐに続く。

「だってよ、大和。俺たちファミリーはいつも一緒、集まりゃ無敵だ。仲間が助けたいっていうなら、全員協力で決まりだぜ！」

リーダーである翔一が宣言する。
それを見て、当然のように大和は言った。

「ああ。じゃあ早速作戦を説明する。」

１０３話　「ファミリー」（後書き）

ありがとうございました。
さてさて、改変もたっぷりのラストスパート。
ファミリーとマロードの接触か？

１０４話　「互いの作戦」（前書き）

海斗がいなくなると台詞が
多くなるという不思議。
活動報告にコメントくださっている方、ありがとうございます。
何の返信も出来ずすみません、しっかり読んでるので！
早く忙しさから解放されたい。

１０４話　「互いの作戦」

―チャイルドパレス

「それじゃあ、作戦通り頼みますよ。板垣三姉妹、釈迦堂さん。」

「へへ、任せな。」

「ところで竜兵はどうしました？」

「それが調子が悪いみたいでね。何があったか聞いても答えないのさ。まあ
外にも出てないみたいだから、不調は本当なんだろうが…」

「手数は減りますが、仕方ないですね。あとはこれを持っていってください。」

「これは……！」

「作戦に必要なんですよ。別に常に持っていなくとも、前のビルの屋上にで
も置いておいてください。あとはこのストラップも。」

「随分と用意周到だねぇ。」

「打てる手は打ちませんと。では、手はず通りに。」

…………………………………

―廃ビル前

「どう？姉さん。」

「ビルの中から複数の気を感じるな。やはり大和の言うとおり、待ち伏せで間違いないだろう。」

「へぇ、さっすが軍師。けどなー。」

「でもねー。」

翔一とモロが余裕の笑みを見せる。

「ああ、こっちには姉さんがいる。俺たちの勝利には間違いない。」

どんなに人数がいても、最強の武神の前では問題ないのだ。
まさに勝利は約束されているようなもの。

「相手はこっちを罠にかけてるつもりだろうが、逆にこっちで待ち伏せして

る奴らを潰せばユートピアの防止にも貢献できる。さらには、捕虜でも1人
囲って情報を吐かせることもできる。俺たちが利用してやろう。」

「おぉー！」

「じゃあ、最後の作戦確認だ。あの敵が沢山集まっているなかに姉さんが突
入する……終了です！！」

「ああ、軽くひねってきてやろう。久々に暴れられる、フフフ。」

「お姉さまもやる気だし、心配ないわねー。」

「言っとくけど、万が一何事もなく情報をくれそうだったら、暴れちゃだめ
だからな姉さん。」

「分かってるよ、あくまで相手が仕掛けてきたらだろ？」

「まあ心配しなくても確実にくるから。」

「でも逃げられたらまずいんじゃない？」

モロが疑問を口にするが…

「そこで仕事なしの俺たちの役目だ。」

「姉さん以外のメンバーはこの出入り口を塞いで、出てきた奴を叩く。都合良く、このビルは裏口もないしな。出入り口はここ1つだ。」
「もしものときには私たちが戦います。」
「大和は私が守るから、安心してね。」
「正義のもとに一人も逃がしはしない。」
「アタシたちに任せて！」
頼もしい女性陣だった。
「じゃ、ぶち壊してこよう。」
川神百代はビルに入っていった。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
中には想像よりもずっと多い人間。
男女問わず、柄の悪い者ばかりが揃っていた。
中にはクスリで正気を失っている目をしている者も。

「やはり暴れられそうだな。」

侵入者を確認した輩は一斉に襲い掛かってきた。

「さあ、楽しいゲームの始まりだ！！！」

・・・

ギャー　　ウワー

「あーあー、中から悲鳴が聞こえてくるぜ。」

「姉さんが派手に暴れてんだろ。やっぱり罠だったか。」

「でも、流石モモ先輩。今のところ1人も逃げてきてないぜ。」

「僕たちの出番はなさそうだね。」

もはや勝利ムードの男性陣。
川神百代が味方だということはそれだけで1つの勝利条件なのだ。
しかし…

「よぉ。」

「っ！いつの間に！」

いきなり前に現れた全身フード。
由紀江が咄嗟に前に出る。

「バンダナの男…風間翔一ってのはアンタでいいのか？」

「ああ、俺だ。」

「へっ、お前さんを潰しに来たぜ。」

次の瞬間、辺りは殺気に包まれた。
そして、風間翔一に向かって突き出された拳は由紀江によって受け止められていた。

「ほぉ、なかなかやるねぇ。お嬢さん。」

「やらせません。」

「まゆっち、アタシたちも加勢するわ！みんなでかかれば…！」

「一対一で戦う余裕があればいいがな。」

「おい！こっちにすげぇ数の不良が向かってきてるぞ！！」

「そういうことだ、さーてどうする。」

「ちっ、さっさとその強い奴を撃破して、不良に対応するぞ。」

「分かったわ。」

由紀江と全身フードが交戦する隙をついて、一子が仕掛ける。
最高のタイミングで非の打ちどころはなかった。
しかし、それは阻まれる。

「残念だねぇ。」

「新手！？」

攻撃をいなされた一子は棒ではじかれる。

「犬、大丈夫か！」

「よそ見してるヒマはねーぜ。」

「なっ…！」

ガツンとクリスの頭に衝撃が走る。
その凶器はゴルフクラブ。

「これ以上好き勝手させない。」

ヒュッと京が弓を射る。
それはまるで軌道を決められているかのように相手の元へ飛んだが…

パシッ

「うぁーあー、危ないー。」

最速で飛ぶ弓は人の手によって掴まれ、折られてしまった。

「援軍が三人も…しかも全員が強い…」

「私らは板垣三姉妹。反撃開始だよ。」

１０４話　「互いの作戦」（後書き）

ありがとうございました。
さてさて、やはり一筋縄ではいかない。
板垣三姉妹も登場しどうなるのか。

１０５話　「不安」（前書き）

やっと明日で忙しいのから解放されそうです。
まあ山場という意味ですが…
それでも全くの退屈よりかは幸せなんでしょうね。

１０５話　「不安」

―廃ビル内

「なんだ？」

（表にいきなり新たな気が現れた…、何かあったのか？）

「くそ、ここをさっさと終わらせるか。」

「も、もう降参だ、許してくれ！」

「そっちから仕掛けてきておいて、降参はないだろう。もっともっと私の相
手になってもらうぞ。」

百代は戦いに飢えていた。
久々の力を発揮できる舞台に狂喜していたのだ。
そんな百代を前に逃げようとする敵。
もとより実力差は圧倒的だった。
逃がすまいと百代は剛拳を突き出すが、それは二人の手によって止めら
れた。

「そこまでじゃ、モモ。」

「ジジイ、ルー師範代！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

「ちっ、不良たちが…」

「大和危ない！」

大和を狙う不良に京の正確な援護射撃がヒットする。
だが、

「そんなことをしてる余裕があるのかい？」

「かはっ…」

ノーガードのわき腹を棒で横殴りにされる。
勢いそのままに京は吹き飛ばされた。

「京！くそ…手数が追いつかねぇ…」

「こんなとこで負けるわけには行かないわ！アタシたちは海斗を助けるんだから！」

「……海斗？」

（なんで、海斗の名前が出てくんだ？　そもそも作戦もあまり聞かされなかったし…ウチが知らないことがあるってことか？）

天使は考える。
特に意識してなくとも、それだけ余裕があるということ。
由紀江は完全に全身フードの対応に精一杯であり、クリスや一子も板垣三姉妹に悪戦苦闘している。
そのうえ、不良たちにも対応しようとすると、板垣三姉妹がその隙を見逃さず一気に攻めてくる。
風間ファミリーは圧倒的不利な状況にいた。
由紀江の想像以上の力によって、幾分かはましになっている。1人では抑えきれないほどの実力者、本来由紀江の相手はそういうものだった。
それを他に行かせることなく、攻防を繰り広げていた。
それでも、やはり状況は変わらない。

（姉さんなら一発でこれを覆せる…姉さん、早く来てくれ…！）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

「通報があったから来てみれば…。百代、おぬしは何をやっておるんじゃ。」

「なんだ、ジジイ。ガキの喧嘩にいちいち口を出すな。」

「あー、確かにこれはガキのケンカだヨ。私たちが口出しすることではないネ。だが、百代。ただの喧嘩というならば、どうしてここまでやる必要があっタ？好き放題に壊すことはケンカではないヨ。」

「なんだと？私はしっかり手加減はしているぞ。」

「ならば、アレはなんじゃ！」

鉄心が指を差した先、それは今まで百代が目も向けなかったほどに目立たない部屋の隅だった。
ろくな明かりもなく、夜の暗がりに包まれたその部屋だったが、そこにうっ
すらと物体があるのが確認できた。

目を凝らして見ると、そこにあったのは人。
いや、もはや人とは程遠いかもしれない。
その骨格は複雑に捻じ曲げられており、人としての形を保ってはいなかった。

生き物ではなく、単なる骨肉の塊と成り果てていたのだ。

「あれはあらゆる骨を外す川神流　人水母。あんな荒技を使うのも使えるのも今や百代くらいしかいないヨ！」

「しかも、玄人との戦いならともかく、力も持たぬ一端の不良たちにそれを極めていくとは何事じゃ！」

「あ、ああ…確かにあれは人水母を受けたとみて間違いないが、やったのは私ではないぞ！気づいたのもたった今だし、いくら私でも素人にそんな技を使ったりはしない。そこら辺はわきまえているぞ！あの物体は勝手に転がっていたんだ！」

「今や川神流で人水母が使えるのは総代と百代だケ。」

「どう考えても、モモ。この場にいたお前の仕業しかありえないじゃろうが。」

「違う、違うぞ！多少暴れはしたが、あれをやったのは私ではない！」

「何言ってんだ！お前が全部やったんだろ。」

「そーだ、そーだ！」

生き残っているわずかな者から野次が飛ばされる。

「ふざけるな！」

「ひっ……」

「完全に怯えているネ。」

「素人に奥義を理不尽に使ったのは罪じゃ。」

「川神院の掟に従い、百代！お前を粛清すル！」

「私を粛清だと？笑わせる！」

「正直、ここまではしたくなかったんじゃが仕方ない。モモ！お前の拳を封
印する！」

「なんだと！？」

次の瞬間、鉄心は百代の背後に移動していた。

「っ！いつの間に…」

「川神流極技！竜封穴！！！！」

「ぐぅ！？」

具体的に何が破壊されるわけでもないその技。
しかし、百代自身は力が抜けていく感覚を味わっていた。

「ジジイ…な、なにをした…力が…」

「この技は己の力と引き替えに敵の力を封じる奥義……よく反省するんじゃ。」

「冗談じゃないぞ！ジジイ！」

「これにて粛清を完了する。」

……………………………………

「おら、どうしたどうした。まだまだいくぜ？」

「くぅ…」

由紀江と全身フードの男は交戦していた。
由紀江も仲間が気になるのか、やや押され気味であった。
それでも、翔一を守るためそこに立つ。

いつまでもつか分からない、そう考えたときだった。

「あー、撤退命令だ。どうやら、あっちが無事終わっちまったらしい。」

「もう撤退かい。遊び足りないねぇ。」

板垣三姉妹とフードの男は前にあったビルの屋上に飛び乗る。

「逃げていくのか…？」

「おい、なんか人数1人多くないか？」

そこにあったシルエットは5つ。
板垣三姉妹、ローブの男に加えて、もう1人黒いローブを纏った者がいた。
勿論、顔まで全身覆われていて正体は確認できない。
しかし、感じられる異質。

「…！あの黒い人、気が一切感じられません…！」

由紀江が驚いたように叫ぶ。

「え…それって…」

硬直するファミリーにとどめを刺すかのように、ビルの屋上から放られたの
は、銀色のトカゲのストラップ。
一子が一番よく知る物だった。
そして、クリスや由紀江も少なからず目にしていた。
海斗の携帯についていたのと同じものだった。

「ま、待って!!」

叫びも届くことはなく、ビルの屋上から姿が消えた。

１０５話　「不安」（後書き）

ありがとうございました。
さて、波乱な感じになってまいりました。
とりあえず、それはおいておき、ほぼ原作どおりですが、
大きく違うのはやはり大和の誘拐なしですね。

１０６話　「最悪の答え」（前書き）

今日か明日くらいにアンケートの
まとめなんかを活動報告に書きます。
しかし、あくまで現時点での発表。
ご意見あれば、まだまだ大歓迎です。

１０６話　「最悪の答え」

いつも金曜集会が行われる秘密基地。
来る日も来る日も集まっては、居心地よく手を加えられていった場所。
そんな笑いが絶えない空間は今までになく重い空気が漂っていた。
そんな皆の様子を見て、最初に口を開いたのは風間翔一である。

「実質的な損害としては、モモ先輩の力を封じられたことだけか。多少の怪
我はあっても何日も続くような傷を負った奴はいないな。」

「…確かに肉体面の被害は少ないけどな…精神面で…」

大和が部屋を見渡して、呟く。
一子、クリス、由紀江の三人は顔を俯かせていた。

「ふむ…私が大変な誤解にあっている間にそっちも随分なことになっていた
んだな。つまり、去り際に姿を見せた敵の中に1人気がない黒ローブの奴が
いたんだな。それで流川海斗ではないか、ということか…。」

「でも、気がないだけであいつって決まるわけじゃないだろ。極端に弱いだ
けの奴っていう可能性は？」

「それは考えにくい。そもそも、どんなに弱い奴でも気は存在しているんだ。
一般人だと、懐に入られても気配を探知できないことはあるが、まゆまゆが
相手の気を探ってそれで感じられない奴なんて普通いない。正真正銘、気を
持っていないってことだからな。確かに前までは私も流川のような奴を知ら
なかったから絶対とはいえないが…。でも、もう1つあるんだろ。」

「…ああ。その机の上のストラップ、流川の携帯に付いてたものだ。それを
投げてきた。」

「アタシと携帯買いに行ったときにもらってたやつなの…」

「そんなものを投げてきたってことは流川海斗は…」

そして、また会話が途切れる。
違うと思えば思うほど不安は大きくなっていく。

「風間ファミリーの皆、元気かい？」

「！」

そこへあの画面がついて、忌々しい機械音が聞こえてきた。

「マロード…！」

「あれ？なんか怒ってんの？声が怖いよ。」

「ふざけんな！今更、何の用でかけてきやがった！」

「何って、流川海斗のこと知りたいんだろ？」

ガタッと一子が立ち上がる。

「どういうこと！？」

「俺は嘘はつかないよ。しっかり来てくれたから、流川海斗のことについて
教えてあげるよ。ま、気づいてるとは思うけど。」

「このやろ…」

「いいねー、その反応。やっぱ、分かるよねー。流川海斗がこっちの仲間だ
ってことは。」

決定的な言葉を吐いた。
それは誰もが口に出さなかったが、誰もが懸念していたこと。
さっきの不可解な事柄が全て説明できてしまう。

だが、一番認めたくはない答え。

「ふざけるな!!!海斗はそんな正義の道から完全に離れたようなことには
協力しない!!」

「そうです!海斗さんは誰よりも優しい方です!」

「でも、君らだって想像しなかったわけじゃないだろ?」

「…っ…海斗はそんなことしないわよ!!」

マロードの言葉に一瞬言葉が詰まってしまう。
それがマロードの意見を肯定しているかのようだった。

「大体、そんなに庇ってるけど、君たちは彼の何を知ってるわけ?」

「何って…」

「彼と出会って半年も経ってないだろう?しかも、最近までは会話すらなか
った。そんなんで信頼してるなんて、笑えちゃうな。」

「私はそれでも海斗さんが優しさに足る人物だと思います!!」

「はぁ…、じゃあ教えてあげるよ。彼の汚れた過去を。」

「何だと？」

「君たち“常夜”って、知ってるよね。」

全員知っている。
この前の特別集会で話題に出たばかりだ。

「彼はあそこの出身なんだよ。生まれつきの極悪人。」

「は？」

「どういうこと？」

事態が上手く飲み込めていない。
脳の処理が追いつかない。
マロードは構わず続ける。

「彼はあの腐った世界で生きてきたんだよ。勿論、他の人間も沢山殺してね。
彼がなんて呼ばれてたか知ってる？“死に神”だよ、怖いねー。」

「そんなの嘘よ！大体、なんでアンタなんかに分かるのよ！！」

「俺たちを惑わそうとしてるだけだ。気にすんな。」

「証拠もあるよ、これ録音なんだけどね…」

そう言って、再生されたのは…

“「ああ、確かに俺が常夜から来たのは間違いない。」”

「っ！海斗の声…」

「ふふ、こんなのもあるよ。仲間になってくれって説得したときなんだけどね…」

“「俺はお前らの敵にはならない。」”

「……おいおい、嘘だろ。」

「ワン子……」

（そういえば、海斗に常夜の話をしたとき、少し様子がおかしかった…）

「流川海斗は俺たちの仲間だ。そして、カーニバルにも協力してくれる。」

「カーニバルだと？」

「簡単に言えば、川神が崩れる日だよ。開催は一週間後。大勢の不

良の一斉
大暴挙さ。それに彼も一役かってくれるのさ。ま、自由行動にしてあるから、
当日はどこにいるか分かんないけど…、街を徘徊してるんじゃないかな？」

「なんだ、そりゃ…」

「楽しみにしててよ、じゃあ約束も果たしたし、バイバイ。風間ファミリー。」

絶望という土産を残して、通信は途絶えた。

１０６話　「最悪の答え」（後書き）

ありがとうございました。
色々読んで疑問に思うことがあると思いますが、おそらく大抵は次の話で解決すると思います。

１０７話　「結束と決意」（前書き）

会話おおめですが、まあ海斗がいないんで仕方ないといえば仕方ないですね。

１０７話　「結束と決意」

通話を切断する葵冬馬。
その顔は満足の結果に納得がいっているようだった。
今の通信を後ろで聞いていた亜巳がその背中に声をかける。

「大層な嘘をついたもんだね。」

「そんな…、名演技と言ってほしいですね。」

「どうすんだい？せっかく秘密裏に動いてきて、隠しとおせていたカーニバルのことまで話しちまって。それに壊滅させる予定の風間ファミリーに教えるなんてさ。直江大和の誘拐も急遽とりやめるとか言い出すし…」

「ふふっ、いいんですよこれで。少々計画が変わったんです。海斗くんという厄介なジョーカーが現れましたからね。」

「ジョーカーねぇ…」

「流石に私でも風間ファミリーと海斗くん両方を相手にするのは無理ですし。
ならば、互いに潰しあってもらおうというだけですよ。そして、海斗くんという強敵に立ち向かうには大和くんのような頭脳派がいないと始まりません

から。」

「えげつないねぇ…、でも流川海斗が来るのかい？」

「来ないとは言っていましたが、相手の言うことを鵜呑みにしていては作戦は立てられないんですよ。それにもし来なくても、風間ファミリーの戦力を分散させられますよ。街を徘徊するっていう…見えざる敵を探し回ってね。」

「はぁ…それにしても、敵の情報をそう易々と信じて、流川海斗と戦おうってな具合に都合よくなってくれるもんかねぇ。」

「大丈夫ですよ。あくまで海斗くんが敵側についているんではないかという認識は相手の心の内に芽生えたもの。私が植えつけたのではなく、あのビルの屋上でのやりとりで育っていたんですよ。私はそれを指摘し、より明確なものにするのを手伝ったに過ぎません。」

「でも、まさか気のない存在として、死体を持って行けなんて流石の私でも驚かされたよ。」

「まあ、あれは単純ですが効果的な作戦なんですよ。常識で考えて、気がないのは生き物じゃないなんて当たり前に行き着く答えですが、海斗

くんとい
う存在を知っているがために気づけない。そして、学校に姿を見せていない
という不安の心をくすぐる。結局、人間は誰しも悪い方へ悪い方へと考える
生き物です。それは社会が偽りや嘘にまみれているから。疑心暗鬼に生きる
ことが平生となっているんですよ。」

「腐ってんのは常夜もこっちも変わんないってことかね。ストラップもわざ
わざ手に入れてきて…とどめはあの切り取った音声だろう？」

「あれだって同じですよ。普通あんな部分的なものには違和感を感じるでしょ
う？ですが、その前にもう心を不安定にしてあるから、余裕はないんですよ。
ぐらつく塔はわずかな風でも倒れてしまうように…私は風を吹かせただけ。
そして、その精神状態は狭い空間の中で緊張として、人から人に伝染します。
1人でも不安になれば、それは全体の不安でもあると…」

「よくそんな計画を短時間で考えたねぇ。本気の作戦じゃないか。」

「海斗くんは敵になれば、それだけの脅威ということですよ。少なくとも、
ユキを妨げるほどの武力と私をゲームで打ち負かすほどの知力は備えている
のですから。」

「まあ確かに正直なところ、あいつと戦うのは辰や師匠にパスしたいね。それじゃないと、無駄に長引きそうだ。」

「来週が楽しみですよ、ふふ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

通信が途絶えてから一言もない秘密基地の狭い一室。

口を開かない理由はそれぞれだ。

聞いた情報を整理している者。

自分の中で1つの結論を導こうとする者。

信じられない出来事を前に何も考えられない者。

また、その人を気遣って黙っている者。

そんな様々な気持ちを分かったうえで率いる男は口を開く。

「俺たち風間ファミリーはマロードとかいう奴を倒して、川神に平和を取り戻さなくちゃならねえ。けど、それは同時に海斗と戦うってことになる。それでも立ち向かうか？」

「私は…海斗さんがとても優しい方というのを知っています。過去

がどうで
あろうと、それだけは確実です。そして、私の初めての友達になってくださ
いました。その友達がもし道を逸れそうになっているのだとしたら、戦って
でも止めるのが本当の友達だと思います！」

「ああ！自分も海斗に認めてもらって本当に嬉しかった。そのとき、誓った。
正義に背くことがあれば、自分が傍で道を正してやると。」

「アタシも…あの優しい海斗が好き好んでこんなことしてるはずないわ！絶
対になんかある…。だから、アタシたちは止めるべきよ。この計画ごと成功
させるわけにはいかないわ！カーニバル…立ち向かいましょう！！」

恋する乙女3人は好き故に戦う道を選ぶ。
倒して、無理矢理にでも連れ戻そうと決意を新たにした。

「そうと決まれば、早速準備するぜ！モモ先輩の空いた穴も吹き飛ばすぞ！
俺たちは全員揃えば無敵なんだからな！！」

翔一が魂をこめた一喝をする。
取り巻く不安を吹き飛ばそうと。
理由も理屈も通用しない。

その叫びだけで皆は1つに団結し、立ち上がる。

「軍師大和！作戦は頼んだぜ。」

「ああ、期限は1週間。思いっきりぶつかってやろうぜ！」

１０７話　「結束と決意」（後書き）

ありがとうございました。
恐ろしい策をはるマロード。
カーニバルに向かう風間ファミリー。
ついに最終戦争が始まります。

１０８話　「カーニバル当日」（前書き）

遂に本当の最終章。
最後の戦いが始まります。

活動報告にアンケート結果みたいなの書いたので、
お暇だったらどうぞ。

１０８話　「カーニバル当日」

全員の心が１つに団結した日。
そこからの時間は凄まじかった。

「まずは姉さんの穴を埋める戦力差の確保だ。流石に最強が欠員だと厳しい
ものがあるけど、別に俺たちは姉さんがいるから無敵なんじゃない。皆で力
を合わせるから無敵なんだ。それを見せてやろうぜ。」

「ああ、いっつもモモ先輩が活躍しちまうからな。たまには俺様の一人舞台
も悪かないぜ。」

「ちょっと、ガクト聞いてた!?皆で力を合わせようって言ってるのになん
でワンマンショーになってるのさ!」

「ずるいぞー、俺も前線で活躍するんだー!」

「お前ら…すまないな。あの頑固ジジイ…私はやってないと言っているのに、
誤解は解けそうにない。無理矢理封印を破壊することも出来るんだが、そん
なことをしたらジジイの命がないとか脅してきやがった。」

「大丈夫だ。姉さんがそこまで言うんだ。俺たちはやってないって

信じてる
ぜ。まあ、学園長も総代としての立場があるんだろ。」

「アタシからも説得してみるけど、難しいかもしれないわ。人水母を使える
のは、お姉さまとじいちゃん、あとは釈迦堂元師範代くらいだもの。」

「釈迦堂さんか…」

「そういえば、あの全身フードの声は釈迦堂さんっぽかったかも。」

「確かにそれなら全ての辻褄が合うな。何より人水母を使って私に罪を着せ
ることで、じじいたちに粛清を促す。なるほど、私の強さと川神院の性質を
よく知った釈迦堂さんらしい作戦だ。」

「どちらにしろ、モモ先輩の回復は見込めないってことですね。」

「それでも、そこら辺の格闘家よりかは全然強い。流石モモ先輩…」

京が呟くがまさにその通り。
百代は拳を封印されたにも関わらず、その力は武器を所持しないクリスと互
角ぐらいにまで及んでいた。
充分に強いのだが、そこはやはり元が武道四天王でもトップクラス。
被害が痛手であることは明白だ。

「さて、話を戻そう。戦力差を埋めるっていうことについてだが、質より量
の作戦でいこうと思う。そもそも、姉さんの代わりになるような人はそうい
ない。だったら、数で埋めてしまうのが一番手っ取り早い。」

「でも、警察ってわけじゃないよな。」

「ああ。流川海斗の情報料が警察に伝えないこととか言ってたが、あのビル
に罠を張ってた時点でその約束は反故になったも同然。だけど、俺たちは流
川があっちに付いてると聞かされて、通報できない状況になってる。全部、
相手の狙い通りなんだろう。」

「だよなー、国家権力が頼れないとなると…」

「人脈をフル活用しようと思う。勿論、日頃広げている俺の人脈もだけど、
他の皆も協力してくれるような人が知り合いにいたら、力を貸して欲しい。
あとは街の人たちにも呼びかけて、そういうことがあるのをあらかじめ知っ
ておいてもらおう。」

「ごめん、大和。」

「いや、人脈に関しては最初から京には期待してないから…」

「私、ちょっとこの前お友達になった総理に相談してみます。」

「自分もマルさんや軍に協力してもらおう。」

各々が自分の人脈で貢献しようとする。

「そして、マロードの正体か…」

「実はそれについては大体目星がついてる。」

「何!?本当か?」

「流石、軍師ねー。」

「まず、全員が分かってると思うが、巧妙な作戦の数々。頭が良くないとこ
んなことは出来ない。」

「ふむふむ。」

「次に全身フードの男が襲ってきたときのことを覚えているか?あいつが現
れたときに言ってたことを。」

「確か、“バンダナの男”とか言って、キャップを狙ってきたな。」

「そう。あいつは標的を知らない全身フードの男に“バンダナの男

”と特徴
を教えて狙うように指示したんだ。こっから分かるのは、相手はキャップの
容姿を知っていて、なおかつ真っ先に狙わせるようなファミリーの要だって
ことも分かってるってことだ。」

「つまり、川神学園の関係者ってことでしょ？」

「え？え？どういうこと？」

「ワン子考えるな、知恵熱でオーバーヒートするぞ！」

「そして、流川が学校に来てたときのことを思い出してみろ。２－Ｓの榊原
小雪がいきなり懐いてただろ？あんな謎に包まれた女と仲良くなるなんて、
そう簡単なことじゃない。」

「それがどうしたの？」

「よく考えてくれ。ヒントは出揃ってる。頭が良い、川神学園、榊原小雪、
これらのキーワードから連想されるのは１人しかいないんじゃないの？」

全員が顔を見合わせる。

「「「「葵冬馬！！」」」」

「まあ、あくまで予想にすぎないんだけどさ。でも、これだとユートピアを
手に入れてるのも説明がついてしまう不思議。医者の息子だったら入手ルー
トには苦労しないだろ。」

「見事に上手くいくな。」

「まあ、この一週間で裏は取るさ。それで最後に当日の役割分担だ。」

真剣に大和の話に聞き入る。

「京は暴動の鎮圧に参加してくれ。遠距離攻撃はフォローになりやすい。ガ
クトなんかをしっかり守ってやってくれ。俺とクリスとワン子は敵の本拠地
に乗り込む。どんなことにも対応できるように軍師の俺と柔軟性のある二人
が行動を共にする。板垣三姉妹とかも出来れば、俺たちで対処するのがベス
トだ。その他、ファミリー以外の協力者も含めて、役割は考えていくが…」

そこで一旦区切り、由紀江のほうを向く。

「正直、流川に対応できるのは今のメンバーじゃまゆっちだけだ。街をまわって見つけ次第流川を倒す重要な役…やってくれるか？」

「はい！！」

由紀江は間髪いれずに気合いの入った声で答えた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そして、カーニバル当日。

—風間ファミリー

「よし、準備は万全だ。崩してやろうぜ、カーニバルを！！」

「「「おーーー！！！」」」

—チャイルドパレス

「いよいよですね、地獄をみせてあげますよ…ふふふふ、はっはっ

はは。」

「トーマ……」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ん？メールか…」

メールを開く。
そこには…

“トーマを助けて。”

ただ一文。

「…背負うって約束したからな。」

俺は立ち上がり歩き出す、外へと。

１０８話　「カーニバル当日」（後書き）

ありがとうございました。
色々役割がありましたが、
遂に動き出す最後のあいつ。
カーニバルはどうなるんでしょうか。

１０９話　「騒がしい夜」（前書き）

なんか誤字脱字とかあったらすみません。
基本あまり見直さないでノリで書くかわりにその書いてるときに気をつけるのですが、間違えてたらごめんなさい。

１０９話　「騒がしい夜」

―秘密基地内

「モロ、そっちはどうだ？」

大和から通信が入る。

「異常なし。通信も良好だよ。」

師岡卓也は秘密基地で情報の整理を行っていた。
ここで全員と連絡も取れるようになっている。
何かあれば、すぐに対応できる用にだ。
戦闘員でない者も活躍する。

「何かあったら、自分の身優先で逃げていいからな。」

「大丈夫だよ。だって…」

秘密基地のビルの入り口。
そこには武神川神百代が立っていた。
とはいっても、力は未だ封印されているが…。

「で、この面子はなんだ…」

「ふ、貴様が弱体化したから来てやったのだ。感謝しなさい。」

「くっそ、腹立つな。」

もう1人立つのはマルギッテ・エーベルバッハ。
2人で秘密基地を守っていた。

「大体なんでお前が協力するんだ?軍が忙しくないのか?」

「そ、それはクリスお嬢様のお願いだというのもあるし……その、海斗を助
ける戦いでもあるんだろう?一応、借りがあるからな、あいつには。
」

「ほぅ……お前まさか…」

「変な誤解はするな!あいつとはもう一度戦いたいと思っているだけだ!」

「…はぁ。」

―再び秘密基地内

「まあ、確かにあの二人なら大丈夫か。」

「そうそう安心してよ。」

「でも、すぐ言い合いになりそうだけどな。」

「それは否定しないけどね…。」

「他の部隊は？」

「京・岳人・キャップのチームも次々に暴動を鎮圧してるよ。やっぱり、京の弓での援護が功を奏してるみたい。」

「流石、京だな。」

「ただ探索班やまゆっちはまだ見つけられないみたいだね。」

「そうか…」

「また何かあったら、通信入れるよ。」

「ああ、任せた。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

夜の町を移動する影３つ。

クリス、一子、大和のチームだ。

「モロ、なんだって？」

「順調だってよ。京のチームも活躍してるらしい。」

「それならこちらにも集中できるな。」

「…海斗は？」

「未だ影なしだ。」

「探しているのはまゆっちと総理直属の部隊だったか？」

「ああ。まさか総理が動くとはな。まゆっちの人脈は色々と超越してるな。」

「それだけの人数が捜してるんだから、見つかるわよね。」

「絶対やってくれるさ。俺たちは今出来ることをやろう。」

「敵の本拠地はそのチャイルドパレスとかいう建物で間違いないのか？」

「一週間で調べはついてる。そこで敵の親玉を討ち取ってしまえば、ゲーム
セット。暴動は治まるし、流川のことにも全力を注げる。」

「じゃあ、さっさと行きましょう！」

「ああ、同感だ。」

「道中、何事もなければいいがな。そう簡単じゃない。いつでも戦闘態勢は整えておいてくれよ。」

「「もちろん!!」」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

Side 天使

「くそ……!海斗、どこだよ…。」

全然気づけなかった。
ゲームセンターにも顔を見せないから、心配ではあったけど…
まさか、こんなことになってんなんて!

〜

「アミ姉、ちょっと聞きたいんだけど…」

「…なんだい？」

「さっきの女が確かに“海斗を助ける”って言ってたんだ。かと思ったら、
なんか意味わかんねー死体とかストラップで色々やってるし…一体、なんな
んだよ！海斗になんかあったのか？」

「うーん、話さないほうがいいかと思って黙ってたんだけど、そこまで辿り
着いてんなら言った方がいいか。結論から言えば、流川海斗はもうこっちの
世界にはいないんだよ。」

「は？どういうことだよ？」

「あいつは常夜で生まれ、そして帰った。私らはあたかもあいつが連中を裏
切ったかのように芝居をうってるってことさ。」

「なんだよ…それ…、いつの話だよ。」

「ちょうど私と辰だけで行った任務があっただろ。あのときさ。」

「なんで、ウチに教えてくんなかったんだよ！！」

「こうなると思ったからさ。」

「海斗はもう二度と帰って来ないのかよ…っ！」

「それはあいつの意思だから知らないけど、マロードはあいつが現れるって
いうのも想定してるみたいだよ。そのうえでの風間ファミリーと流川海斗を
ぶつける作戦だからね。」

「海斗が来るのか！？」

「さあね。念のためみたいなことを言ってたし、可能性は低いんじゃないか
ねぇ。そもそも、理由がないしね。」

「なら、ウチは海斗を捜す。」

「天！？」

「どうせ当日は自由行動なんだし、心配しなくても邪魔しようとするヤツは
皆殺しにしてやんよ。少しでもいる可能性があるなら、ウチは海斗を諦めた
くない…！」

「はぁ、勝手にしなよ。」

～

このまま別れるなんて、絶対にありえねー。
せっかく自分の気持ちに気づけたのに。

これからもっと好きになっていくはずだったのに。
全部なかったことになんて、ぜってームリだ。
…ウチを惚れさせたくせに。

「逃げられると思うなよ……」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

川神の夜。
それぞれの思いを抱え、疾走する。

１０９話　「騒がしい夜」（後書き）

ありがとうございました。
マルさん百代とか異色のコンビですね。
さらに天使も独断行動へ。
カーニバル一体どうなるのか。

１１０話　「新たな戦力」（前書き）

なんかオリジナル展開だらけで、
原作がちょこちょこ感じられる程度ですが、
頑張ってついてきてください（笑

１１０話　「新たな戦力」

今、川神ではいたるところで戦いが繰り広げられていた。
大和たちが通う川神学園。
通学のときに渡っていく橋。
また、その下に流れる川のわきでも。
さらには普段はにぎわっている商店街まで。

「おう、おめぇら！てめぇの街は自分で守れ！わけぇガキどもに大人の怖さ
を教えてやるぞ。」

こうして沢山の不良に対抗する勢力が出ているのも風間ファミリーの一週間
の呼びかけがもたらした結果だった。
戦闘面ではあまり役に立てないモロもはりきって、街をまわっていた。
そして、今街全てが襲いくる脅威と戦っている。

そしてここ、多くの建物が立ち並ぶ川神の市街地でも戦闘は行われていた。

「ちっ、こんな女、俺が一発で…」

「甘いわ！」

「なっ…！？」

男の体はひるがえり、硬い地面に背中から叩きつけられ、“ぐはっ”と息がこぼれる。

「その程度で此方に挑むなど浅はかじゃ。高貴な此方の投げ技で庶民はひれ伏すがよいわ、にょほほほ。」

自分よりも大きい図体の男を投げたのは着物を着た少女。
川神学園２－Ｓの生徒、不死川心であった。

「まったく…身の程知らずの愚か者ばかりじゃのう。」

周りに転がるのは、標的を発見した途端、何も考えず突っ込んでくる馬鹿な不良ばかり。
柔術をたしなむ不死川心にそんな者が敵うはずもなく、随分な数が溜まっていた。

「弱者が此方に一対一で勝負を挑むのがそもそもの間違いなのじゃ。」

余裕を持って呟く心。
そのとき、背後から足音が響いた。
「また愚か者でもきおったのか？」
しかし、振り返った先にいたのはこれまでの不良などではなかった。
「……排除する。」
「なんじゃ、おぬしは…」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・
「大和！」
「どうした、モロ？」
いきなりの通信。
何かあったということだ。

「京たちの地点に色違いのクッキーが…！」

「なんだって！？もしかして、葵冬馬の奴…学校を守らせていた九鬼のところのマガツクッキーにハッキングをかけたのか！それで、そっちはなんとかなりそうなのか？」

「一応、京たちのところにクッキーが向かったよ。やっぱり苦戦してはいるけど、一応抑えられてはいるよ。」

「すまない、頑張ってくれ。」

（相手もそこまで戦力を投入してきたか…。早いとこ黒幕をどうにかして、この戦いを終わらせなきゃな。）

そうして、大和たちはチャイルドパレスを目指す。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「私たちが切り刻んでくれる！」

「どういうことなのじゃ、こやつら。」

不死川心はマガツクッキー三体に囲まれていた。
その三人ともが光る剣を携え、切迫してくる。
本来ならば、機械なので柔術などは効かないという考えによって、焦るとこ
ろなのだろうが、そうではない。
不死川心ほどの実力を持っていれば、部分的に機械の関節を破壊すること
も
可能であるし、そのことは心自身分かっている。
問題はそこではなく、

（くっ、多対一では此方の技は圧倒的に不利じゃ。しかも、さっきのような
雑魚ではなく、技を極めにくいような相手…）

そう、可能とはいってもやはり機械の破壊は柔術では困難。
それを三対一の状況で行えというのは無理な話である。

「私の剣の錆となるがいい！」

後ろに下がっても、他の機体が待ち構えている。
かといって、正面から戦えばその隙をつかれることも確実。
どうにか助かる方法を模索するが、その間にも剣の切っ先は迫ってくる。
本能的に向かってくる攻撃に目をつむってしまう。
そんなことをしても、剣は真っ直ぐ向かってくる。

そして、少女の命など一太刀で刈り取ってしまう…

…はずだった。

「…あぶねぇ。」

不死川心は生きていた。
しかし、その体は宙に浮いていて、わきにかかえられている。
プライドの高い心からすれば、恥ずかしいことだろうが、本人は事態を把握
するのに必死である。

「な、なんなのじゃ、これは!?」

足をじたばたさせるが、何も状況は変わらない。
ただ、着物の丈が長いことは幸いだった。
これがミニスカートならば、大惨事である。

心は自分のことばかり気にしていたが、ふと気づく。
そして、そのかかえている者の顔を見上げた。

「お、おぬしは流川海斗!!」

（ん、知り合いだったか…まあいい。）

「気をつけろよ。」

「なんじゃ、此方にその程度で恩など売ったつもりか。おぬしの手など借り
ずとも、こんなロボ倒すのは容易じゃ。」

「……腕に自信があるのか知らねーけど、多数に囲まれたら逃げていいんだ
ぞ。どんなに強くともお前は女の子なんだからな。」

「な、な、な…」

途端に硬直する心に首を傾げる海斗。
そこにさっき斬りかかったマガツクッキーが言葉を放つ。

「私の攻撃を回避するなど、なかなか面白い。だが、所詮は私たちの完璧な
戦闘技術には追いつけまい。それでも我々に刃向かうか?」

「・・・・・」

「言葉も出ないか。」

「…いや“我々”って、お前1体だけだけど。」

「なに…?」

その言葉に後ろを振り返ると、そこには頭を砕かれて煙を噴き出している、
さっきまで仲間の形を保っていった“ガラクタ”があった。

「これは…！」

「お前で最後だ。」

瞬時に相手の前に移動する海斗。
マガツクッキーも咄嗟に頭を守ろうと腕を交差させて、ガードを試みるが…

「な…んだ…と…」

その腕ごと頭は海斗の拳に貫かれた。

わずか数秒。
その間に高性能ロボットはただのガラクタとなって、転がっていた。

１１０話　「新たな戦力」（後書き）

ありがとうございました。
遂に海斗がやってきました。
久しぶりのちゃんとした登場。
やっとカーニバルも役者が揃いました。

１１１話　「最強の援軍」（前書き）

なんか心がとってつけたように感じるかもですが、
原作知ってる人なら分かりますよね（笑
心は最初からここで落とすと決めてました。

１１１話　「最強の援軍」

「清掃完了っと。」

（こやつ、ロボットをたった一撃で…）

「おろすぞー。」

「は？……そ、そうじゃ！さっさとおろすのじゃ！」

「言われなくてもするっての……ほらよ。」

「う、うむ。」

「汚れたりしてないか？」

「そうじゃの、大丈夫だと思うが、それはそうとおぬし…」

「じゃ、俺は行くから。」

「なっ、ちょっと待つのじゃ！聞きたいことが…」

「怪我とかしないよーにな。」

その言葉を残して、海斗はその場を去っていった。
取り残された心は中途半端に宙に伸ばしてしまった手を、恥ずかしく思いつつ下げた。

Ｓｉｄｅ　心

なんなのじゃ、あやつは。
山猿のくせに此方を命がけで守りおって…
口には死んでも出さぬが、実際少し危なかったしの。
もし、あの男が助けに来なければ、此方は今頃…

しかし、何故此方を助けたのじゃ？
麻雀では敵対しておったというのに…（↑そもそも覚えていない）
そういえば、あの言葉。

“逃げていいんだぞ。どんなに強くともお前は女の子なんだからな。”

も、もしや、女の子とはそういう意味か？
此方を異性として意識しておるという…そういうことか！？（↑違います）

くっ、此方が一般庶民に翻弄されるなど、しかもよりによって２－Ｆの山猿
ごときに屈辱なのじゃ！
しかし、流川海斗か。

…執事くらいなら雇ってやってもよいかもしれんの。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

海斗は街灯に照らされた道を走っていた。
かかってくる不良などはお構いなしに倒していき、どんどん歩を進めていった。

「止まりな、そこの兄ちゃん。」

不意にかけられた声に足を止める。
周りを見渡せば、銃を持ったスーツの男に囲まれている。
数は十と少し程度。
そして、前にはさっきの声の正体であろう初老の男。

「間違いねぇ、写真と同じ顔だ。兄ちゃんが流川海斗っつー奴だな。」

「だったら何だ。」

「ビンゴ、まさか俺の部隊が最初に見つけちまうとはな。まあ、これで友達の役に立てたってところか。」

「言ってる意味が分かんないぜ。」

「君を捕まえるっていうのに協力してんだよ。俺の友達のお願いでな。しかし、命まではとらない……と言いたいところだが、本気でやっていいみたいなんでな、多少の怪我は覚悟してもらうぜ。」

そういって、自身も他の黒服と同じように銃を構える。

「俺に覚悟しろってんなら、自分も覚悟できてんだろうな。」

「おーっと言っておくが、俺のＳＰたちは強ぇよ。少数精鋭だからな。」

「ＳＰって…どっかのお偉いさん気取りか。」

「偉かねぇよ。しかし、最近のがきはニュースっつーのを見ないのか？俺ぁこれでも総理ってのをやってんだ。」

「はぁ……お前の友達ってのが大体分かった。けど、そんな奴がこんなことしてていいのかよ。」

「俺は別に総理としてここにいるんじゃねぇ。由紀江ちゃんの友達として、協力してるだけだ。」

「…まぁいいけどよ。」

そう言って、海斗が一歩踏み出す。

「待ちな、それ以上動いたらぶっ放す。出来れば、戦闘を行わずに無傷で捕
まえられるのが一番だからな。」

周りのＳＰたちも海斗に銃口を向けて構える。
下手な動きを見せれば、その全てが火を吹くだろう。
だが、海斗は臆することなく、もう一歩を進めた。

「おい、本当に撃…」

「引き金は引かないことをお勧めするぜ。」

「なっ…!?おい、撃つのをやめろ!」

海斗の意味深な言葉に総理はいち早く気づく。
いつの間にか起こった異常に。

（なんていうことだ…）

自分の持っている銃、ＳＰの持っている銃も一つ残らず、銃口を無理矢理ね
じ曲げられていた。
今、撃てば火薬は内部で爆発し、被害を受けるのはこちら側だろう。
この頑丈な銃を素手で曲げたとかそういうことはどうでもいい。
確認できた移動はたったの二歩、最初の場所から１メートルも動いていない。
しかし、周りを取り囲む全ての銃は曲げられていて、その二歩を認識する間
にやり遂げてしまったということ。
いや、一歩目で既に行われていたのかもしれない。
もしくはそれ以前に完全な認識の外でやられていたのか、それすらも分から
ない。

「一手封じられただけで詰みか？」

「くっ…」

咄嗟に部下に指示をとばそうとするが、それはかなわない。

「何かに頼って安心してるから、こうなる。」

銃の腕は勿論、体術もエキスパートの精鋭十数名。
その屈強な男たちは腹、首、様々な場所を狙われて、誰もが一撃で意識を失

わさせられていた。
さっきの形勢が都合のよい夢のように感じられる。
まさに圧倒的だった。

総理は頼まれたときの言葉を思い出す。

“怪我をさせないようにと普通頼むのでしょうが、海斗さんに会ったら全力
で倒していいです。お願いします。”

それはある種敵にまわったことに対する決意みたいなものかと思ったが、違う。
本気を出さなければ、傷一つつかないと分かっていたのだ。
気遣われていたのは弱いこちらの方だったということ。

「こりゃ、作戦変えたほうがいいな。」

ごそごそと総理は内ポケットをあさる。
また銃かと海斗はすぐさま近づく。

「下手なことはやらせねぇ。」

「もう遅いぜ、兄ちゃん。」

ガッと気絶させようと一撃を入れるが、

「ぐはっ。」

「ちっ、少し逸らしやがったか。いいセンスしてやがんな。」

「やっぱり俺みたいなおっさんがでしゃばるんじゃなかったな。」

「お前それは…」

服の中から転がり出たのは銃などではなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「大和、まだチャイルドパレスにつかないの？」

「急いで向かってんだから、そのうち着くだろ。」

「しかし…」

クリスが言いかけたとき、前に人が現れた。
それは一度見たツインテールの少女。

「あ！アンタは！」

「んぁ！？テメーらは！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

銃などではない。
これはトランシーバー、無線機ってやつだ。
攻撃ではなく、援軍を呼ぶとなると…

「………海斗さん。」

あまりにも早い到着、それだけの実力者。
出会いたくはなかった援軍。
顔を上げればそこにはよく知る後輩の姿。

「……由紀江。」

１１１話　「最強の援軍」（後書き）

ありがとうございました。
まさかのはちあわせ。
海斗と会った由紀江は…

１１２話　「愛ゆえに」（前書き）

最近、寒いです。
少し体調を崩してしまいました。
皆さんは気をつけてお過ごしください。

112話　「愛ゆえに」

「総理さん、連絡ありがとうございます。」

「いいってことよ、由紀江ちゃん。俺は情けないが、ちょっとリタイアさせてもらうぜ。」

「はい！」

地面に膝をつく総理を安全な道の端へとよける。
そして、凛とした姿で海斗のほうへと向き直る。

「やっと会うことができました、海斗さん。」

「由紀江…。」

「私はずっと海斗さんを探してました。見つけた今、どんなことをしてでも海斗さんを捕まえてみせます。」

「俺を捕まえるか…。ってことはそういう流れになってると。」

「最後に1つ確認させてください。敵のボスが言っていたことは全て真実なんですか、海斗さん。」

海斗は考える。
由紀江の言うそれはおそらく葵冬馬の言っていたことだろう。
だとすると、やはりあいつは常夜出身だってことを風間ファミリーに話したのか。
まあ、脅してたし、何より黙ってるメリットがないしな。

「ああ、本当だ。それだけなら通してくれ。」

「……っ、それならば尚更海斗さんを通すわけにはいきません。私の全力をもって止めさせていただきます。」

（信じたくはありませんが、海斗さんが肯定したということはやはり敵側に…）

出来れば、否定してほしかった。
自分は敵じゃないとそう言ってほしかった。
だが、こういう答えも覚悟してきた。

（これ以上海斗さんを悪者にするわけにはいきません。）

「邪魔するっていうことか？」

「はい。」

「どけと言ったら?」

「嫌です。絶対にここで海斗さんを捕まえます。もう逃がしません。」

流石に常夜出身なんてことを知ったら、こういう反応だよな。
どんなに仲が良い友達だろうと、それだけで嫌われて敵になる。
別に何も不思議なことではなく、当然の反応だ。
そんな恐ろしい存在なんて避けようと思うのが自然。
俺が責められることなんてないし、もうそんな反応にはとっくの昔に慣れているんだ。
ははっ、“死に神”が人に思われようなんて滑稽な話か。

特に由紀江は良い子なのに、今まで友達が作れず人と接してこなかったんだ。
出会ったあのとき…

“周りの人がどう思っていようと、私は流川さんとお友達になりたいんです!!”

真っ直ぐな意思。
それはちっとも嘘偽りない言葉だった。
しかし、周りがどう思っているかと常夜出身ではそもそも次元が違う。

由紀江いわく、俺は初めて出来た友達だという。
その最初の奴が人を殺したことがあるような悪人だと分かったんだ。
由紀江のような女の子は怖がってしまうだろう。

いや、もし信じてくれていたのだとしたら裏切ったと思われても仕方ないか。

…最低な男だよな。

こんなんじゃ必要とされないのは当たり前。

現に目の前には敵として立ち塞がる少女の姿がある。

「いくら由紀江でも邪魔するなら容赦しないぞ。俺だって少しは戦えるんだぜ？」

「そのくらいの脅しでは退きません。私も海斗さんの強さは十分に知っています。そのうえで止めにきたんです。」

決意のこもった眼差し。

揺らぐことを知らぬ強い意志。

由紀江は最初に会ったときから緊張していて、自分の意見はあまり強く主張できずに同調するタイプだと思っていた。

しかし、こういうときには絶対に己を曲げたりはしない。

誰よりも強く真っ直ぐと物事に相対する。

そう、こんなに良い子なんだ。

引っ込み思案で弱気でも、優しく強い少女。

…やめだな。

あの程度の脅しではすんなり退いてくれないよな。

「けど、俺はこんなとこで時間取られるわけにはいかねぇからな。
さっさと
行かしてもらうぜ。」

そうして、由紀江をかわして先へ走ろうとするが…

ザッ

「行かせません。」

それは瞬速。
まさに瞬きをするうちに由紀江は海斗の前に回りこんでいた。

「逃がしてはくれないか。」

「やはり敵になっても海斗さんは優しいです。海斗さんなら戦わずに通るこ
とを選びそうだと予想していたので反応できました。」

変わっていない海斗に喜ぶ由紀江。
優しいという場違いな言葉に真意が分からない海斗。
由紀江は一呼吸おいて、言葉を続けた。

「ですが、そんな優しさは不要です。私はここで海斗さんを連れて帰るため
に戦います！」

（それがお友達として、……好きな人としてやるべきこと。）

（ここまで粘ってくるとは、やっぱそれだけ恨まれてるってことか。まあ、
常夜出身を隠して普通に友達やってたことを考えれば、文句の言いようがない。）

「けど、それに俺が付き合ってやる理由はない。」

「海斗さん！」

由紀江が名前を叫ぶ。

「覚えていらっしゃいますか。ビーチバレーのお願いのこと。」

海斗の記憶にもしっかり残っている。
水上体育祭で由紀江が勝ち取った1つの権利。
それは保留となって、未だに使われていなかった。

「勝手ながら、それを今行使させていただきます。海斗さん、私から逃げな
いでください。本気で私と戦ってください！」

「由紀江、本気でって…」

「私は真剣(まじ)です！！」

「・・・・・・」

そこにあるのは今までで一番の魂のこもった瞳。
海斗は分からなかった。
何故こんなにも熱くなれるのだろうか。
自分に対する恨みでこんな真っ直ぐな目をできるのか。
本当に分からなかった。

「…分かった、約束は守る。願い事をきこう。ただ…やるからには安全の約束はできない可能性もある。」

「望むところです！私も全力で海斗さんを止めて、二度と離しません！！」

もはや由紀江の言っていることは告白のようで、明らかにおかしかったのだが、今の海斗に気にする余裕もない。

海斗を愛して、そのために戦う由紀江。
その愛に気づけず、違和感を覚える海斗。
すれ違う二人は今正面から向かい合う。

「黛由紀江、参ります！！」

112話　「愛ゆえに」（後書き）

ありがとうございました。
かなりやばい展開になってきました。
次回、激突です。

１１３話　「激闘！由紀江ＶＳ海斗」（前書き）

まさかのバトルですね。
いわゆる仲間同士でのバトル。
どんな戦いになっていくのか。

１１３話　「激闘！由紀江ＶＳ海斗」

かすかな明かりに照らされた夜の道。
由紀江と海斗は向かい合い、一歩も動いていない。
だが、戦いはもう始まっていた。
お互いに相手の出方を伺い、硬直状態が続いている。
その場にいる者しか分からないような極度の緊張。
強者同時の間に生まれる凄まじい重圧に一般人の総理などは意識を保っていられるだけでやっとだった。

（由紀江ちゃんが強いのは知っていたが、あの小僧も相当なもんだ。）

「黛由紀江、参ります！」

「おう。けど、剣なしでいいのか？あんまり甘く見てもらっちゃ困るぜ。」

「ご心配には及びません。」

「へぇ……なら！」

余裕の態度を見せる由紀江。
そのなめているようにも取れる姿勢に海斗が、軽く先制攻撃を仕掛けようと
仕掛ける。
軽くとはいっても、それは海斗の中でのこと。

傍らにいる総理の目には全く移動が見えなかった。
海斗はその超速で懐に潜り込み、一発入れようと思ったが…

（!?　…まずいっ！）

「せやぁっ！！」

ヒュンという澄んだ音が響いたように感じた。
海斗が危機を感知して、退いたそこには剣先がすぐそこまで迫っていた。
先程の音は幻聴でもなく、まさに空気を切り裂いた音。

―居合い。
余裕の佇みのようにギリギリまで引きつけてからの一瞬の斬撃。
凄まじい集中力から生み出される静から動への威力。
もし、少しでも海斗が気づくのが遅ければ、攻撃に踏み込もうとしていれば、
あの刀の餌食になっていただろう。

どうやら油断していたのは海斗のほうだった。
相手がなめていると思い込んだ安易な突撃。
しかし、由紀江はとてつもなく真剣（まじ）だった。

「居合いって…、洒落にならない攻撃してくるねー。」

「流石、海斗さんです。やはりかわされてしまいましたか。」

（あまり間合いに入るのはよした方がいいな。）

抜刀状態で構える由紀江にますます油断は出来ない。
そう考えた海斗は地面に対し、思い切り足でインパクトを行った。

「…っ……」

「これならどうだ！」

それによって跳ね上がった瓦礫を思い切り蹴って、前方へと射出する。
しかも、弾数は3発。
それは砲撃のような速度で連続で向かっていく。

が…

「はぁっ！！！」

振るったのは一太刀。
しかし、それだけで3本の剣閃が走り、全ての岩を両断した。
いとも簡単にこなすが、一般人には弾道すら見抜けぬ速度。
それを放つ海斗も、見切って打ち落とす由紀江も常人の域を超えていた。

「次は私からいきます！」

刹那、由紀江が一気に空いている間を詰める。
そして、一瞬で十二の斬撃を放った。
だが、それでも海斗は全てを見切りかわす。
初見で由紀江の刀をかわしきるのは至難の業だ。
しかも、十二斬全てを。

「あぶねっ。」

「まだまだ私の攻撃です！」

しかし、海斗がかわしきることなど予測済みだったとばかりに攻撃の手を緩
めない由紀江。
次々と斬撃を重ねていく。

（ちっ、隙がねぇ。）

普通どんな攻撃にも技を出した後の硬直がある。
それが明確に表れたものがいわゆる“隙”というやつだ。
再度言うようだが、どんな攻撃にも絶対にあるもの。

しかし、海斗が言うように由紀江の攻撃にはそれがない。
いや、ないのではなく最小限に留めているというのが正確だ。

流れるように次の攻撃へとつなげていき、動きに一切無駄がない。
それは戦闘というよりも一つの舞踊を見ているようだった。
ただ我武者羅に隙を潰すような連撃ではない。
しなやかに美しく、その刀は猛威をふるう。

（だが……）

再三のことだが、隙はないのではなく見つけられないだけだ。
しかし、海斗の目はそのごくわずかな隙を幾重にも重なっていく超速の戦闘
のなかで慣れていく。
そして、しだいに刀のギリギリを見極める。
全ては隙をつく布石。

由紀江の刀を意図的に紙一重のところで避ける。
そうすることで自分の動きを最小限に、相手のわずかな隙に付け入る可能性
を生み出す。
それが出来るのは戦闘センスのおかげだけではない。
圧倒的な自信と勇気がなければ出来ないすれすれの回避。
そして、それは反撃の余地をもたらす。

が、しかし…

ザッ

「なにっ！？」

海斗の肌から滲み出す鮮血。
確実に刀の軌道を見切り、寸分の狂いもなく移動したはず。
それなのに、海斗はその身に軽くはあるが、確かに切り傷を刻まれていた。
どう考えてもおかしいことだが…

（気か…）

海斗は即座に1つの考えに辿り着く。
海斗がギリギリでかわしているところに、刀に自身の気を流して剣閃を伸ばし、海斗の考えていた刀のリーチを強引に変えた。

（まさか、闘気を人を斬る武器として扱うとはな。）

剣に己の力を纏わせて、強化する。
武人ともなればよく使う手ではあるが、分からないほど本当にわずかな力加減や使いどころが上手すぎる。

しかも、今のは完全に狙われていた。
由紀江にとって武器のリーチが伸びるなら、最初からやっていた方が有利だ。
しかし、彼女はそれをせずに海斗がギリギリでかわし始めた瞬間を

待っていたかのように使ってきた。
それは海斗がこの技を見切り、反撃を狙うため完璧にかわしてくると読んでいたということ。
相手の強さをしっかりと理解し、逆にそれを利用した。
まさに非の打ち所がない作戦。

（少し見誤っていたな。）

海斗の目の前に立つ少女は確実に強い。
別に侮っていたわけではないが、それでも想像を遥かに越えるレベル。

本来なら海斗にとって戦いたくはない相手。
しかし、その強さは純粋に惹かれるものがあった。
退屈とはかけ離れた飛びぬけたセンス。

（面白いじゃねぇか。）

海斗は垂れる血を拭い、構えなおした。

激闘はまだ終わらない。

１１３話　「激闘！由紀江ＶＳ海斗」（後書き）

ありがとうございました。
勿論１話では完結しない激闘。
まだまだ始まったばかりです。

１１４話　「由紀江の刀」（前書き）

引き続き戦いです。
勝負の行方は…？

１１４話　「由紀江の刀」

「次はこっちから行くぜ！」

「させません！」

「いーや、強行突破だ。」

海斗は一気に由紀江に近づく。
さっきまでは間合いに入らないように気をつけていたが、今度はその全く逆。
刀を振るえないほど接近するそれは、意表をつく。
しかし、由紀江もその落差にまで反応し、咄嗟にバックステップで少しの距
離をかせぎ、得物の範囲に。
そして、容赦なく斬りつけた。

「せいっ！」

ガキン

その向かってくる刀を海斗はあろうことか蹴り上げた。
そして、刃を跳ね返してしまった。

（っ！斬れない！？）

ほんのわずかな隙。
それがこの高次元な戦闘においては命取りとなる。
由紀江に追撃とばかりに拳が振るわれる。
その身体は数メートル宙を飛んだ。
由紀江はそれでもしっかりと受身をとり、ダメージを軽減する。

（あの靴、何か仕込まれている…）

そう、海斗が由紀江の刀の刃を足裏で受け止められたのは、中に入っている
鉄板のおかげ。
まさかそんなものがあると思っていない由紀江は一瞬の硬直で弾かれた。
少しでも気を抜けば、押し負ける。
そんな戦いだった。

（ちょうどよく打撃も無線機がガードしてくれました。しかし、やはり油断
できない強さです…）

由紀江は小さく深呼吸をする。
ペースを取り戻し、集中するため。
真剣な勝負に臨むために。

「休んでる暇はないぜ。」

海斗の回し蹴りを姿勢を低くして回避する。
そして、それをばねにするように由紀江はまた斬りつける。
だが、海斗はその動きは予測済み。
下から振るわれる刀をまた足で踏みつけるように受けるが…

「っ！」

すぐに回避行動をとる。
明らかに危機を感じた今の攻撃。
鉄板に当たった打撃音もなければ、刀の速度が下がることもなかった。
見れば、確かに靴裏の鉄板には途中まで切れ目が入っていた。
要するに刀が鉄を両断して突っ切ってきたということ。
そのまま足に貫通してくれれば、大ダメージは必至だ。
海斗はその食い込んでくるような冷たい予感を察知した。

（ほんと、気が抜けねぇな。）

だが、海斗が息をつく暇はなかった。

「はぁっ！」

由紀江がその場で横薙ぎの一閃を振るう。
海斗は咄嗟に腰を落とす。
気で衝撃波でも撃ってくると警戒したからだ。

しかし、違う。
次に襲ってきたのは倒れてくる2本の街灯。
今の攻撃は由紀江の両脇にあった街灯を斬るためのもの。

そして、海斗の気がほんの一瞬街灯に逸れたとき。
辺りが爆散した。
正確には衝撃によって海斗の周りにコンクリートがまるで砂のように巻き上
げられたのだ。
そして、その人工煙幕が展開されたのとほぼ同時。
海斗に向かって武器が振るわれる。

はなから街灯で傷つけようとは思っていない。
それはただの意外性を狙った不意打ち。
本命はこの一瞬で作り上げた粉塵からの軌道の見えない斬撃。
普通、タイミングも分からなければ、刃の向きも認識できない。

けれども海斗はそれに反応する。
たとえ視界が塞がれようと、空気の流れ、相手の攻撃の気配。
わずかでも様々な事象が海斗にヒントを与える。
それは数々の戦闘で勝手に身についた経験。
海斗は見えない斬撃を足で止めた。

だが…

「っ！？」

ゾクリと。
嫌な感覚が体の中を這いずり回る。
頭からつま先まで広がるその悪寒。
他でもない死の感覚。

それを証明するように響いた音はカンという軽い音。
先程、刀を鉄板で受け止めたときのような高い金属音ではない。
さながら打楽器を鳴らすようなさっきよりも鈍い音。

海斗はためらうことなく、すぐに受け止めたその足を振り下ろした。
力はもはや制御しない。
現状から脱出しなければ、やばいと本能が告げていた。

振り下ろした足はかかと落としのように思い切り地面と接触する。
そこで巻き起こる衝撃。
それを海斗は自分自身に向けていた。
海斗の体はまるで車にでもはねられたかのように後方に飛んでいく。
受身もろくにとれないような強引な回避。
まさに捨て身だった。
体を半端ない衝撃が襲い、地面に強く打ち付けられるがそんなことを気にしてはいられない。

「はぁ…はぁ…」

ようやく止まった体を落ち着ける。
地面を転がってこすれたのか、海斗の服はぼろぼろになっていた。

海斗が由紀江のほうに目をやると、その両手はそれぞれ得物を持っていた。
舞い上がる塵の中で放った初撃。
それは斬撃ではなく、刀の鞘での一撃。
斬れ味もなければ、威力も伴わない一撃。
だが、海斗はそれを防御してしまった。
するように仕向けられた。

あの煙幕は刀の軌道を隠すためなんかではなく、鞘での無力の攻撃を有効に
するための伏線。
そして、考えの外にある2撃目の本当の斬撃を生み出す作戦。
街灯でついた不意の一撃目をコンマ1秒遅らせてまで展開した煙幕の本当の
意味。
すぐに後退しなければ、刀での斬撃をもろに受けていたことになる。

これは我が身を犠牲にしてでも避けなければまずかった。
…避けなければまずかった。

ザクッ

突如、海斗の足から赤い液体が噴き出す。

（なっ…刀での一撃は確実にかわしたはず…）

「私にとっては刀に例外などありません。ときには己自身も刀とせよ。」

そこで海斗は合点がいく。
回避のために振り下ろした足。
鞘を受け止めていた足を。
しかしそれは威力がない攻撃、守る必要はなかった。

だが、由紀江にとっては闘気を流せば、鞘も刀に変えられる。
勿論斬れ味は本物のそれには遠く及ばないだろうが、人を斬るのには十分すぎる。
いわば、刀一本で二刀流をこなしてしまっている。

そして、斬られたのだ。
威力こそ弱い鞘でしかし確実に。
幾重にも幾重にも緻密に計算された攻撃で足をやられた。

「すみません、海斗さん。でも、ここまでしなければ海斗さんは止められない。足が使えなければ、もうしばらくは動けません。その間に海斗さんを連れ帰ります。」

海斗は思う。

由紀江は命を奪わないように足を狙った。
相手が必要以上の怪我を負わないように。
裏切り者の俺に心をいためて…。

（完全に俺の“負け”だな。）

１１４話　「由紀江の刀」（後書き）

ありがとうございました。
壮絶な戦いが決着？
足を封じられた海斗。
由紀江は無事連れ帰ることが出来るのか。

１１５話　「負け」（前書き）

本当はこういう続いてる形の
何話かは続けて投稿した方がいいんですけどね。
そうすると、毎日が厳しくなってしまうので（笑

115話　「負け」

道の傍らで壁に背を預けている総理。
その目の前に広がる光景は凄まじかった。
ほとんどは目で捉えきれないほどの速さで行われていた攻防。
だが目で見えずとも、異常なまでの強さは人としての感覚に直接、伝わってきた。
それも収まり、今目に映っているのは凛とした立ち姿の由紀江と、足を負傷してその場に座り込んでいる海斗。

（あの坊主、正直相当な強さだが、それを由紀江ちゃんが上回った…。確かに由紀江ちゃんは強いが、まさかあそこまでだとはな。俺も目が鈍ったか。）

無論、由紀江は強い。
しかし、彼女が最初からここまで強いわけではない。

1人の少女を強くするのは相応の想い。
海斗を、自分の大切な大好きな人を助けたいという強い想い。
それが彼女の芯となり、潜在する自身の能力を最大限に引き出している。

そう、彼女の戦いの目的は正確に言えば、相手を倒すことでも止めることで

もない。
彼女が考えることは最初からただ1つ。

（海斗さんは私が救います！）

それが今の結果を作り出していた。
倒れる海斗と戦場に立つ由紀江。
勝敗は誰の目にも明らかだった。

「では海斗さん、私が責任もって基地まで運びます。」

足を怪我した海斗をおぶってでも行こうというのか。
由紀江は海斗のほうへと歩いていく。

「っ！？」

しかし、その歩みは強制的に止められた。
止めざるをえなかった。
目の前の信じられない光景によって。

「由紀江、俺の負けだよ。由紀江を“なめてた”俺のな。」

海斗はそう言って、血が滴る足で立ち上がった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「テメーらはあんときの！」

「あんたゴルフクラブ持ってた確か…」

「板垣三姉妹の１人だな。」

大和は思い出す。

相手の重要な戦力である板垣三姉妹。

情報によると、長女の亜巳・姉妹のまとめ役で棒術使い、次女の辰子・身長が一番高く体術使い、三女の天使・ゴルフクラブを扱う。

ということは…

「そうか、こいつが天使(えんじぇる)だ。」

「ウチのことを気安く呼び捨ててんじゃねー！ウチのことをそう呼んでいいのは……ちっ！」

天使は“海斗(あいつ)だけだ”という言葉を飲み込み、舌打ちする。

「大和！さがって！」

「ちっ、何故こんなときに…！」

一子とクリスは戦闘態勢に入り、大和の前に出る。
一刻も早く敵の親玉に向かいたいのだが、二人がかりでならそう時間のかかることでもないと踏んだのか。
しかし、そんな構えは崩れ去る。

「邪魔なんだよ！」

天使はそう言っただけで、無視して二人の脇を通り抜けようとした。
そこからは微塵も戦おうという意思が感じられなかった。

「待て、逃げるのか！」

「今テメーらに構ってる暇なんてねぇんだよ。ウチは海斗を捜さねーと…」

「え、海斗！？」

予想もしていなかった単語に一子がいち早く反応する。

「…そーいや、テメーら。あのとき海斗がどうこう言ってやがったな。なんか知ってんだったら、吐きな！」

「ちょっと待ってよ、あんた海斗とどういう関係なの！なんで、海斗のこと呼び捨てにしてんのよ！」

「そんなのテメーらには関係ねーだろ。海斗は誰にも渡さねぇ。」

「なっ…、違うぞ！海斗は自分と一緒にいるんだ！」

「ちょっとクリ、何言ってんのよ！？それなら、アタシだって…」

「海斗はウチが見つけた、たった1人なんだよ。テメーらとは本気の度合いが違うっての！」

「何よそれ！！」

突如始まった女同士の熾烈な争いに大和はただただ傍観者となるしかなかった。
好きな男を巡っての女の戦いほど怖いものはない。

（あいつって本当にもてるんだなー……じゃなくて。）

「おい、一子、クリス。色々言いたいことはあるだろうが、今はその本人を探すためにおいといてくれ。」

「あ、そ、そうね…。」

「それでお前に聞きたいことがあるんだが、流川を捜してるっていったよな?」

「あぁ、そーだよ。だから知ってることがあんなら教えな。」

「それはおかしくないか?流川が何処にいるかはそっちのほうが把握してるはずだろ?」

「あぁ…そーいや騙されてんだっけな。海斗はウチらの仲間になんかなってねぇよ。」

「へ!?え!?どういうこと!?」

一子がすぐに驚きの声を上げたため、クリスなどは声を発しなかったが、その目を丸くして驚きを表現していた。

「海斗は常夜に帰っちまったんだよ。」

「そ、そんな…」

一子やクリスの中には敵でなくて良かったという思いと海斗がいなくなって
しまうという不安が混在していた。

「じゃあ、あいつを捜すっていうのは？」

「マロードの話だと海斗はこの戦いに来るらしい。マロードの読みは結構あ
たるからな。」

「それなら、海斗はこの街のどこかにいるってことね。」

「待て！それなら今海斗を捜してるまゆっちは戦わなくていいってことだよ
な。早く連絡を……モロ、実は……」

大和が今分かった情報をモロに伝える。
由紀江に伝えてもらうために。
しかし、

「ダメだ、通信がつながらないよ！もしかしたら無線機が壊れてるのかも。」

「まずいな……」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

海斗は追い詰められていた。
それはもはや戦う前から決まっていた当然の結果かもしれない。
海斗は戦いに臨む姿勢で既に“負け”ていたのだ。
最悪の罪人にまで優しい少女に人間として“負け”ていた。

（裏切り者が情けかけられるなんて、笑えねぇよな。）

それでも、どんなに惨めに“負け”ていようが、敗北は許されない。

「海斗さん、その足で立つのは……っ！」

「結局俺はどっか逃げようとしてたのかもな。けど、真剣（まじ）には真剣（まじ）でこたえるのが礼儀ってもんだ。」

その瞬間、由紀江は寒気を感じ咄嗟に刀を構えなおした。
自分の圧倒的優位にはかわりないはずなのに…。

「こっからは俺も真剣（まじ）だ。」

１１５話　「負け」（後書き）

ありがとうございました。
“負け”と敗北は違うんですね。
次回は海斗がどう出るのか。
真剣勝負ですかね。

１１６話　「海斗の真剣」（前書き）

今更気づいたんですが、この前書きも１１６個ほど書いてきたんですよね。
なんだかんだで時間かかります、これ。

１１６話　「海斗の真剣」

海斗は立ち上がった。
怪我は由紀江が上手く調節しているとはいえ、決して楽に立てるようなものではない。
相手の動きを封じるための一手なのだから。
しかし、海斗は地に両足をついて立ち上がる。
これくらいの傷は何度も経験していた。
我慢できないものではなかった。

海斗は意識せずともどこかで力が入りきっていなかった。
そのうち疲れてくれるだろう、俺のことなんか諦めてくれるだろう、と。
そんな脈のない考えに期待していた。
だが、由紀江の覚悟は半端なものではなかった。
元々、武道四天王の資質を備えている彼女。
その本気となれば、生半可なものではない。

（由紀江はかなり強い。完全に油断していなくとも、これじゃなめてたと言われても仕方ない。このまま続ければ、確実に俺が追い詰められる。そうなれば…）

海斗の脳内にあるビジョンが映し出される。
それは“赤”。

自分の周りのほかの色を残さず、消し去ってしまう“赤”。
自分自身に命の危機が迫れば、意思など関係なく無差別にそこを一瞬で血の
海に変えてしまう。

そんな事態にならないために海斗は力を手に入れた。
それは毎日欠かすことのない鍛錬による体力、腕力、脚力。
危険な環境で育まれた目の良さ。

それだけの強さ。
どんなに集中しきれない状態であっても、まず負けることはない。
ただ単に力が強く威張っている者とはワケが違う。

しかし、由紀江は海斗の想像を超えていた。
由紀江も幼い頃より剣聖の娘として、日々を修行で過ごしてきた。
長い期間で培われた刀の腕に加えて、持って生まれた才能もある。
そして海斗と決定的に違うのはその戦いに臨む姿勢。
彼女は傷つけることに心を痛めながらも、覚悟を決めていた。
全ては海斗を救うために。また一緒に過ごすために。

その差が海斗に血を流させた。
傷つけたくなくて迷っていたのに、そのせいで逆に由紀江に危険が及ぼうと
している。
このままでは辿るのは同じ道、あの惨劇。
由紀江があの赤に…。

（そんなことだけは絶対にさせない！この力は無闇に傷つけないために、人

を守るために手に入れた力。…今、相手がどう思っていようが俺の初めてで
きた友達をそんな目に遭わせるわけにはいかない。）

もう迷いはしない。
それは結局、戦わないよりも酷い結果を引き起こす。
ただの一時的な逃避に過ぎない。
傷つけるのではなく、守るために戦う。
そう決意した海斗はひとつ息をつく。

「…手加減はなしだ。」

「はっ!?」

それはもう反射的な行動だった。
手負いなどは関係ない。
由紀江の武人としての本能が、これまでとは違う雰囲気を察知する。
そう感じたときには既に刀を抜いていた。
自分の身に近づかせないように刀で守る。

「そっちじゃねぇ。」

海斗が狙ったのは手前の地面。
そこを海斗は素手で瓦割りのように叩きつけた。
コンクリートの破片が爆散し、衝撃が巻き起こる。

（素手でこれほどの…！）

由紀江はそれに巻き込まれ、吹き飛ばされる。
が、着地時に後方にまわり、衝撃を上手くいなす。
そして少しの硬直もなく、すぐに反撃に切り替える。
これほど早く転じられるのも、尋常ならぬ強さ故だ。

「良い反応だな。」

「！」

しかし、誤算があった。
反撃のため、すぐに近づこうとした由紀江の前には既に海斗が移動していた。
そして、休む間もなく拳の連撃が繰り出される。

「くっ…」

急な展開に驚きはあった由紀江だったが、次々来る拳には冷静に対処していく。
勿論、それは普通から見れば、何が起こっているのかも分からないレベルの
ものだったが、見切れない速さではなかった。

なんとか避けられる。
ただ、反撃の隙などは見つからず、精一杯かわすことしか出来ない。
このまま続ければ疲労が溜まり、ボロが出る。
そう思ったときだった。
まさに刹那。
最強クラスの由紀江だからこそ分かる一瞬の隙が出来た。
これを逃がす手はない。

（海斗さんを傷つけるのは嫌ですが…！）

由紀江は怪我をしてないもう片方の足を狙う。
助けるためとはいえ、好きな人を傷つける。
優しい由紀江には辛い行為だったが、海斗にはそんな中途半端な決意では勝
てないことはよく考えた。
一瞬のチャンスでためらいなく斬りつける。

しかし、海斗は笑っていた。
それに由紀江が気づくことはなかったが、その意味はすぐに嫌でも認識する
こととなった。

海斗は向かってくる刀をまるで待っていたかのように動く。
そう、完全に由紀江は罠にかかった。
今のは意図的に作り出された自然すぎる隙。

あまりにも短く由紀江レベルでやっと反応できるギリギリ。
それを的確に狙って、反撃を誘導した。
そして、海斗はまんまと引っ掛かって動いた刀を素手で捕まえた。

（なっ！？これは…！）

別に手を抜いたわけではない。
それは切断まではする気はないにせよ、確実に斬るつもりで放った斬撃。
それを何の防具を使うこともなく素手で受け止められた。
いや、たとえ防御があっても突き破るはずだ。
こんな異常を説明できるもの。
それは由紀江が今まさに感じたもので、１つしかない。

―海斗が使えないはずの“気”だった。

だが、由紀江がそのことに驚きと混乱を覚える暇はなかった。
刀を防がれて、何も出来ない由紀江の横に海斗が一瞬で移動する。
二人がすれ違うそのとき。

「じゃあな…。」

それは首への衝撃とともに。

由紀江の意識が落ちる前、最後に聞いた悲しげな言葉だった。

１１６話　「海斗の真剣」（後書き）

ありがとうございました。
刀を受け止めるギリギリで
気を使った海斗。気全開で大暴れとは
いきませんでしたが、これも本気です。

117話　「チャイルドパレス」（前書き）

さて、由紀江との戦いも終わり、
遂にカーニバルも最終局面。
果たしてどうなるのか。

117話　「チャイルドパレス」

「ん！？」

「どうしたんだ、クリス。」

「いや、今ほんの一瞬だけ変な感じが…」

「変な感じ？」

「いや、言い表しづらいんだが、寒気というかなんというか……まあいい、
忘れてくれ。」

クリスはその感じたものが分からなかった。
ほんの一瞬だけというのもあるが、根本的に今の感覚に覚えがない。
初めて感じるものだった。

「とにかく無線がつながらないなら、仕方ない。俺たちは俺たちに出来るこ
とをさっさとやっちまおう。マロードを倒せば、まゆっちを捜しにいくこと
も出来る。」

「そうね、海斗が敵じゃないなら親玉を早く倒しちゃって、海斗も捜したい
し…。」

「通信がつながる皆には一応さっきの情報を流しときゃな。モロ、頼めるか？」

無線機に向かって話す。

「おっけー、任せといてよ。」

これが今出来る最大だった。

「お前はどうするんだ？」

「ウチはウチで海斗を捜す。本当ならウチの雇い主を潰そうとするお前らの
相手をするべきなんだろーが、生憎ウチの最優先は海斗だ。マロードの味方
だけど、ウチは海斗を見つけるまでは自由に行動させてもらうぜ。」

「ちょっと待ちなさいよ。」

「あぁ？」

一子が天使に話しかける。

「あんた、海斗をもし見つけたらどうすんの。」

「そんなの止めるに決まってんだろ。海斗をあっちの世界になんて絶対に行
かせねー、……ウチはぜってー二度と会えないなんてゴメンだ。」

「海斗はアタシたちが見つけて止めるわ。……けど、もしもあんたのほうが
会うことが出来たなら、……絶対止めなさいよ。」

「…言われなくても、ウチの勝手だ。」

いがみあっていても目的は同じ。
どちらも海斗と別れたくはない。
その気持ちには少しの違いもなかった。
対立する両者は言外に共同戦線を築く。
絶対に止める、と。

「よし、じゃあチャイルドパレスに向かうぞ！」

「うん！！」
「ああ！！」

二人の声は大きく強く。
さっきまでとは変わっていた。
どんな状況であろうと海斗はやっぱり敵などではなかった。
そのことが二人に活力を与える。

そして、三人はチャイルドパレスを目指す。
軽い足取り、大きい歩幅、速いペースで。
目的地はすぐそこだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

足の力を失い、倒れそうになる由紀江を海斗は抱きとめる。
そして、そのまま体を抱え、寄りかかれるような壁際に運んだ。
そんなにすぐには目覚めないだろう。
完全に勝負は決した。

それを見ていた総理は息を呑む。
あの最強の由紀江が気絶させられた。
立ち上がってからのあまりにも速すぎる攻防。
それなのに、由紀江は全くの無傷だった。
少しの出血も骨折もしていない。
怪我をしたのは勝利した海斗のほう。
何がどうなったかは分からずとも、結果はその目にしっかりと映っていた。

海斗は由紀江を運び終えるとその歩みを総理の方へと向ける。
今、この場で意識を保っているのはその２人だけだ。

「起こされたりしたら困るからな、少し眠っててもらう。」

総理は近づいてくる海斗に、抵抗する力も意思もなかった。
そしてわずかな衝撃の後、視界は黒に染まった。

・・・

一方、大和、クリス、一子の三人はやっと敵の本拠地を目の前にしていた。
工業地帯入り口に存在するそれはどこか無機質な外観。

「ここがチャイルドパレス…」

「クリス、ワン子、準備はいいか？」

「勿論だとも。」

「さっさと行きましょう。」

三人はその内部に足を踏み込む。
この馬鹿げた祭り、カーニバルを終わらせるために。
そして、大切な人を助けるために。
中に入って進んでいくと開けた空間に出た。
小さいコンサートホールのようで無数のライトに照らされた部屋。

そこの中央に目的だった敵の親玉が立っていた。

「やっぱり、お前か…。葵冬馬。」

「ふふ、来ましたね。大和くん。」

全ての元凶、葵冬馬。
川神学園の生徒を中心にユートピアを広げ、不良たちを集めてこのカーニバルを開催した。
そして、風間ファミリー全員に流川海斗が敵であると演じ、思い込ませた。

考えてみればおかしいところが今になれば幾らでも見えてくる。
焦りや混乱が1つの結論から逃げられないようにしていたのだろう。
真実が分かった今、とても安心している。

しかし…。
一子が、クリスが、由紀江が、皆とても悲しい思いをした。
一番好きな人を疑わなければならなかった。
戦わなければならなかった。
それはどれほど辛いことなのだろう。

（ファミリーの仲間を傷つける奴は誰だろうと容赦しない。）

大和は今一度、目の前の敵に目を向ける。

葵冬馬の横にはいつも一緒にいた二人。
榊原小雪と井上準が控えていた。
井上準はいつも通りなんら変わりない様子だったが、榊原小雪の方はなんだ
か少し元気がないようだった。

「ここまで来たのはいいですが、ここからの作戦はあるんですか？」

「一応、俺は軍師だからな。」

「覚悟しなさい。」

「正義の鉄槌をくだしてやる。」

この戦いで全てが決着する。

117話　「チャイルドパレス」（後書き）

ありがとうございました。
今度は大和たちのターンですね。
というか、由紀江は無傷。
あの激しい戦いをした後とは思えませんね。

１１８話　「悪の道」（前書き）

なかなか忙しいです。
ここまで来たら、終わりまで
毎日更新でいきたいですが…

118話　「悪の道」

―チャイルドパレス
そこには3対3の図が形成されていた。
入り口側には一子、クリス、大和。
二人の少女が一歩前に出て、各々の武器を構えている状態だ。
対して、中央に近い側には冬馬、準、小雪。
こちらも線対称のように冬馬を守って、準・小雪の二人が一歩前に出ている
陣形だ。
しかし、その手には武器はない。

「犬はあっちの男を頼む。自分はこっちの女をやる。」

「任せなさい、行くわよ！」

「仕方ない、若を守るためだ。少々、痛い目見てもらうぜ。行けるか？ユキ。」

「うん～。」

それはいつも通りの言葉だったが、準にはそれがどこか無理をしているよう
に感じた。
だが、今は気にしていられる余裕もない。
目の前の敵を倒すことに集中する。
そして、2つの戦いが始まった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

川神の街中。
ここでは京たちのグループがマガツクッキーとの戦いを繰り広げていた。
頑丈な機械を破壊していくが、倒したそばから増えていく。

「くっ、壊しても壊しても…キリがない。」

京は比較的防御が薄いと思われる部分に集中して、矢を放つ。
それは確実に成果を上げていたが、終わりの見えない現状に言葉をもらす。
翔一、ガクトの男性陣も援護するが、その勢いは止められない。

「はっ！」

それでも京がまた一体にとどめをさす。
あの機体はあとは自爆するだけだろう。

「くそ、俺様の男気で一気に終わらせてやる。」

「おい、ガクト！？」

ガクトは今京が仕留めた機体に走って近づいていく。

「うぉらあああ、ハンサムラリアーーーットォ！！」

その無駄に鍛え上げた筋肉のついた腕でその機体を巻き込むと、そのまま他
のマガツクッキーたちに突っ込んでいった。
そして、堰を切るように内部から爆散した。
近くにいた多くのマガツを一掃していくが…

「ガクト！！」

その爆発の矛先は当然、ガクト本人にも向かう。
いくらガクトが頑丈だといっても、他のマガツも巻き込むその威力に人間が
耐え切れるはずもない。

「ガクト、大丈夫か！？」

「へへ…どうだ、俺様最高にきまってただろ…」

「この大馬鹿！」

京は傷だらけのガクトを見て、叱咤する。

「クッキー、ガクトを川神院に運んで。手当てしてもらって、お願い。」

「了解した。」

「俺様がいないと心配だぜ…」

「別にいなくて大丈夫。」

クッキーに背負われたガクトに厳しい言葉を放つ。

「もう沢山倒してくれたから、あとは私たちでなんとかする。」

京はそう言って、ガクトを見送った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

部屋の両脇ではそれぞれの戦いが繰り広げられる。
クリス、一子のおかげで大和は葵冬馬と正面からぶつかれる。

「もうこんな無駄なことはやめたらどうだ?」

「唐突ですね。」

「根城は俺たちに攻め込まれ、街の不良たちやマガツクッキーだって皆の協
力で抑えられてる。これ以上やったところでカーニバルは成功しない。」

「何が言いたいんですか?」

「俺たちは約束通り警察には連絡しない。だから、警察に来てもらうんじゃ
なくて、お前から自首してもらう。」

「ふふ…おかしなことを言いますね。悪い事はやめて自主をしろ?警察に今
から謝りに行って許しを請え?そう言っているんですか?」

「そうだ、だから…」

「大和くん、君が私の何を知っているんですか?」

「それは…」

「…私の家が病院だということは知っていますよね。葵紋病院、いわずと知
れた優秀で人気の病院。世間の認識はそんなものでしょう。かくい

う、私も
そんな病院の院長を務める父を尊敬していました。いつか、父のようになり
たいとね。」

穏やかな調子で語る冬馬。
しかし、その口調とはかけ離れ、表情は心底馬鹿らしいと言っているようだ
った。

「そんな父に近づきたいと私は勉強しました。そして、父が褒めてくれれば
一層頑張って私は知識を増やしていきました。ですが、賢くなることは一方
で私に世の中が腐敗していることを教えたんですよ。それでも父だけは尊敬
できる唯一の人間だと信じて疑わなかった…」

冬馬は笑う。
それは昔の自分を愚かさ加減を自嘲しているのか。

「しかし、賢くなった私は見つけてしまいます。葵紋病院が、尊敬していた
父が行ってきた不正の証拠の数々を。結局、世の中なんて例外なく腐ってい
るんですよ。だから、真面目に生きても損をするだけ。もう悪に生

きると決
めたんですよ。後戻りの道なんて必要ありません。」

「それでも！今なら学生でやり直しもできる。もうこんなことはやめよう。」

「そんな安い説得にのるとでも？」

「……まあ思ってないさ、ただの前座だよ。」

そう大和が言った瞬間、入り口のドアが豪快に蹴破られた。
そんな滅茶苦茶な登場で姿を現したのは…

「ふはははは、九鬼英雄光臨である。」

118話　「悪の道」（後書き）

ありがとうございました。
今回は若干原作の大切なところを
織り込んだという形でしょうか。
冬馬のあれとかはもっと長いですが、割愛で。

１１９話　「混戦」（前書き）

もう英雄まで登場して、
ごちゃごちゃしてきましたが…

119話　「混戦」

怪我をしたガクトを乗せて飛行するクッキー。

「すまねぇ、クッキー。」

「心配はない。すぐに着く。」

その言葉通り、進む先に川神院が見えてきた。

―川神院
普段は修行僧たちが修行に励んだり、試合が繰り広げられているこ
こだが、
街がカーニバルで大変になっているなか、怪我をした者たちがここ
に運びこ
まれてきていた。
修行僧の医療班をはじめ、ボランティアも協力して、沢山出ている
怪我人の
対処にあたっていた。

「すまない。」

「怪我人ですか?」

入り口でクッキーたちを向かえたのは、大和田伊予だった。
彼女もここにボランティアとしてきた1人だ。

「結構な怪我を負ってしまっているのだが…」

「任せてください。それを手当てするのが私たちの仕事ですから。」

そう言って、伊予は早速準備にとりかかった。

Ｓｉｄｅ　伊予

川神院でのボランティア。
私がここに来たのにも理由がある。
一週間ほど前、まゆっちからカーニバルのことを聞いた。
なんでも最近学校に来ていない海斗さんを助ける戦いでもあるらしい。
そして、最後にまゆっちは私に言った。
危険だからその日は家を出ないで、と。

まゆっちはおそらくその強さで戦いに出るんだと思う。
私にそんな不良の人たちと戦える力はない。
だけど、何もせず安全な場所に隠れていることなんて出来ない。
友達が戦っているんだから。
そして、何より…

自分も好きな人を助けるために何かしたかった。
表舞台に立てないなら、裏方で。
海斗さんを助けるためでもあるこの戦い。
傷ついた人を少しでも助けるのが、今私が海斗さんのために出来る
精一杯の
ことだ。

Side out

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

─チャイルドパレス
突如乱入した者により、状況は大きく動いていた。

「ふははは、九鬼英雄光臨である。」

「っ！……英雄は激務で今電話も取れない多忙状態のはず。これは
どういう
ことでしょうね。」

「なーに、簡単なことさ。まずは一子から電話をさせて話を聞いて
もらう。
あとは親友であるお前の名前を出せば、こうして飛んできてくれた
ぜ。」

「冬馬！一子殿が言ったことではあったが、まさかそんなことは断じてない
と思い来てみれば……これはどういうことであろうか！」

「どういうことも何も、騙していたんですよ。そんなことも分からないんで
すか？」

「くっ…ならば、我が止めてやろう。」

「フフフ…」

同じ頃、クリスと小雪は。

「はぁっ！」

繰り出されるクリスのレイピアでの連続突き。
小雪はそれをかわす一方である。
やはり平静を装っていても本調子ではない様子だった。

そして、その逆側の一子と準は。

「オラ！」

「甘いわ、せぇいっ！」

激しいぶつかり合いが行われていた。
準が扱うのは主に武器を用いぬ拳術。
洗練された技術は薙刀とのリーチの差を埋めるほどであった。
だが…

（やはり、ユキの様子がおかしい…）

逆側にいる仲間のほんのわずかな違和感が気になる。
加えて、一子はいつも以上の力を発揮できていた。
この戦いを終わらせれば海斗を捜すことが出来る。
由紀江と同じように好きな人を想う気持ちが原動力となっていたのだ。

そんな2つの戦いの様子を見る冬馬。

（ユキも準も総じてこちらが押され気味といったところでしょうかね…。このまま続けても状況は不利になる一方…。）

「冬馬、我が目を覚まさせてやる。我の誠心誠意の拳を受けよ。」

そう言って、冬馬のほうへと歩き出す英雄。
だが、それよりも前に冬馬が命令をとばす。

「準、ユキ、一旦下がってください。」

そう言うと、各々は真っ最中の戦闘から離脱して、冬馬のほうまで後退する。

「ちょっと、いきなり何なのよ。」

「まだ勝負は終わっていないぞ。」

一子とクリスはいきなりの事態に文句を言うが、そんなことを冬馬は気にする様子はない。

「準は入り口の方を守っていてください。これ以上邪魔が入っても困ります。
ユキは少し休んでいてください。あまり調子が良くないときに無理に頑張る必要はありません。」

「トーマ、ボクは平気だよ！」

「いーや、若の言うとおりだ。俺に任せてユキは少し休んでな。」

渋々といった形で小雪は下がり、準も入り口に向かうためその場を離れる。

「護衛がいなくなっちまったけど、降参ってことでいいのかな?」

「ふふ、まさか…」

守りがいない今が絶好のチャンスだと英雄が向かおうとするが…
その道に立ち塞がるように2つの影が現れた。

「あぁー、やっと出番かね。」

「うぅーん、眠いなー。」

それはまさに異質。
一目見ただけで強いと分かる者と全く読めない者。
釈迦堂刑部と板垣辰子だった。

「大和くん、さっきは自分たちの方が優勢だと喜んでいたようですが…私のほうはまだゲームを始めてもいないんですよ。まだジョーカーが2枚も残っているんですから。」

その意味は大和でも分かった。
本当に戦況を一気に変えてしまいそうな雰囲気。
そんなものを感じた。

「くっ、迂闊に近づくことも出来ぬとは…」

英雄も二の足を踏む。

「対してそちらのジョーカー“川神百代”は力を封じられています。
さて、
大和くん。今どちらが優勢なんでしょうね。」

「ちっ…」

せっかく追い詰めたのにここまで来ての奥の手。
一子も釈迦堂の強さがよく分かっているため、今どれだけピンチな状況か分
かっている。
まさに万事休す。

そんなときだった。
新たに現れるもう1人。

誰もが目を疑った。

「…約束守りに来たぜ。」

最後のジョーカーがやってきた。

１１９話　「混戦」（後書き）

ありがとうございました。
最後の最後で登場。
まさに大混戦の予感…。

１２０話　「天才とは違う」（前書き）

活動報告にも書きましたが、
アニメが終わってしまいました。
アニメの話もいつか書けるといいです。

１２０話　「天才とは違う」

「…約束守りに来たぜ。」

全員がその声の元に注目した。
一番に声を上げたのはクリスと一子、そしてその言葉を待ち望んでいた小雪
だった。

「「「海斗！！！！」」」

（こいつが来たってことは……）

大和は一瞬由紀江のことを考えるが、今分かることではない。
それに戦っていたとしても、海斗が無闇やたらに傷つけるはずはないと思い、
現状に集中することにした。

「海斗くん、本当にここまで来るとはね…」

「お！なんか楽しめそうな奴が来たじゃねーか。」

「あはー、海斗くんだー。」

冬馬、釈迦堂、辰子の敵側も遅れて反応する。

「しかし、これ以上は入れないように入り口は準が守っていたはずですが…」

「あんなんで止められると思ったのか？仲間のことも分からないようじゃ、
采配を振るなんてことは出来ないぜ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

時間はわずかにさかのぼる。
準は冬馬に言われたとおり、入り口の門番をしていた。
確かにこれ以上九鬼英雄のような勢力が入ってくれば厄介だ。

準は葵紋病院副院長の息子。
院長の息子である葵冬馬とは生まれたときから、主従関係のようなサポート
する立場が決められていた。
そして、冬馬を守るため幼い頃より武道の腕も磨いてきた。
故に強い。
力を発揮すれば、これ以上の進入を許すことはないだろう。

「ようやく着いた。」

「お前は…流川！」

「通してもらうぜ。」

「させるか！」

準は門番として立ち塞がる。

「…葵冬馬が、お前の仲間が悪の道に走ってるのにそれを止めるのではなく、協力するのか？」

「俺は生まれたときから若についてんだ。悪いことだと分かっていても、若がすることに反論はない。」

「はぁ…お前よりどっかの女の子のほうがよっぽど友達のことを考えてるな。」

「とにかく、ここは通さねぇ。」

「俺は通るけどな。」

「なら力づくで大人しくしてもらう……こう見えても俺強いぜ？」

「無理すんな。お前も小雪みたいに素直になったらどうだ？」

「…今更引き下がれるかよ。今の俺の役目はお前を潰すこと、それ

だけだ。」

「そんな不安定な状態で勝てると思ってんのか?」

「とっくの昔に迷いは捨てた!」

言葉通りのためらいのない真っ直ぐな拳。
そこに少しの揺らぎもなかった。

「確かに迷いはねぇな。」

だが、それでも拳は容易く受け止められていた。

「けど、魂がこもってない拳は人を倒すには軽すぎるぜ?結局、お前は自分
の心に嘘ついて迷いをごまかしてるだけだ。嘘の拳じゃ俺は倒せない。」

直後、海斗のカウンターが準に刺さった。
準の体は数メートル宙を舞い、吹き飛ばされた。

「タッグマッチのときのほうが痛かったぜ、お前の攻撃。」

海斗は倒れる準を一瞥すると、中に入っていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

（準が倒されたのは不思議じゃないですが、海斗くんの言った“仲間のことが分からない”とは一体？）

「さてと…」

海斗は奥の方へ控えている小雪を見る。
小雪は見る見るうちに笑顔になっていった。

「海斗！」

「ああ、…葵冬馬。」

小雪にこたえて、敵の名を呼ぶ。

「お前の馬鹿げた暴走を止めに来たぜ。」

「フフフ、何を言うかと思えば海斗くんも大和くんと同じですか。何も知ら

ないくせに言うことだけは言うんですね。」

「俺がお前がこんなことをする理由なんて知るかよ。けど、それで悲しんでる奴がいるんだ。俺の動く理由はそれだけで十分だ。」

「ん……、やはり海斗くんと口論しても無駄ですね。何かを言われても、全然曲がりませんから。」

冬馬はやれやれといった様子で溜息をつく。

「それにしてもユキも準も撃退し、ここまで辿り着くなんてやはり侮れませんね。タッグマッチのときは自分は凡才だと謙遜してましたが、海斗くんも天才じゃないですか。」

「・・・・・」

「しかし、いくら海斗くんが天才でもこちらのジョーカー二人には太刀打ちできませんよ。」

「楽しそうな戦いになりそうだなぁ、オィ。」

「海斗くんと戦うのー？まあ、しょーがないけどさー。」

「さて、せめてどちらと戦うかは選ばせてあげましょうかね？」

冬馬が余裕を見せる。
しかし、海斗も笑みを見せていた。

「何かおかしいことでもありましたか？」

「いや勘違いしてると思ってな。」

「何がですか？」

「俺は天才なんかじゃない。」

「ですが…」

「言っただろ？“どんなに高い壁を目の前にしても、諦めずに努力し続けられる奴”が天才って。」

「覚えてますよ。海斗くんが常夜という環境で生きてきたこと、それを一般に言えば努力と言うのでは？」

「そっちじゃねぇよ。」

「はい？」

「確かに何もしてない奴と比べれば、多少の努力はした。そのなか

で俺は今
まで生きてきて強い奴と出会ったこともあるし、何度も死にそうにもなった。
けどな、一度も目の前の壁が越えられないと感じたことはない。」

ただの言葉。
しかし、それには寒気を感じさせるほどの自信と迫力がこもっていた。

「来いよ。二人まとめて相手してやる。」

１２０話　「天才とは違う」（後書き）

ありがとうございました。
海斗が凡才を自称する理由は戦いにおいて
どんなときでも最後は勝つという絶対の自信。
次回は遂にそんな海斗と敵が激突です。

121話　「力」（前書き）

遂に始まる最強の対決。
海斗はどう戦いを繰り広げるのか。

121話　「力」

「二人まとめてかかってきな。」

「ハーハッハ、こりゃ面白いガキだ。」

海斗の言葉に釈迦堂が笑い声を上げる。

「海斗！その人は川神院の元師範代で相当強いのよ！」

「ああ、それに2対1ではあまりにも分が悪すぎる。自分たちも海斗の援護
をするぞ。」

「手助けはいらねぇ。さがってな。」

クリスの申し出を断る海斗。

（由紀江が聞いたってことは当然、他のメンバーも俺の過去を知っちまった
ってことだ。）

そんなことを考え、1人で強敵2人に立ち向かおうとする。
海斗の言葉を聞いた釈迦堂はニヤニヤと笑みをこぼしていた。

「手助けはいらねぇ、ってか。勇ましいじゃねぇか。だがなぁ、勇気だけじゃ
力の差は埋められないぜぇ？」

「悪いが今回は手加減したりしねぇから心配は無用だ。」

「へへっ、口だけは達者だな。井戸の中から出たことのないカエルちゃんに
外の世界の怖さってのを教えてやろうか。」

「そりゃ是非とも教えてもらいたいもんだ。……九鬼英雄！」

「ぬ？何であるか。」

「俺がこいつら護衛をどかせば、お前葵冬馬を説得できるか？」

「無論である！」

「おっけー。なら役割分担だ。俺が邪魔者はなんとかするから、お前は葵冬
馬を救ってやれ。」

「言われずとも、分かっておるわ。」

海斗は頼もしい返事に笑みをこぼす。
葵冬馬の悪事を止めて、警察につきだすくらいなら自分でも出来る。
しかし、それでは助けたことにはならないだろう。

相手の意志で罪を償おうと思わなければ、結局何の解決にもならない。

「じゃ、俺のやることは決まったな。おっさん、かかってこいよ。井戸の中のレベルを教えてやる。」

「おい、マロードの旦那。こいつは殺しても構わねぇんだよな?」

「今となっては作戦もばれているようですしね。構いませんよ。」

「海斗!」

小雪が思わず声を上げる。
それは釈迦堂たちの実力を知っているから。
殺すといったら冗談でもなく実行することを知っているから。

「大丈夫だ、俺がやられるわけがない。」

それでも、海斗の言葉を聞くだけで安心する。
不思議と信じさせるような説得力があった。

「せめて大口に見合った実力くらいは持っててほしいけどな。じゃ、いくぜ?」

釈迦堂が不気味な笑みを浮かべた直後、

「おら、リング！」

その両手から凝縮された気の砲弾が飛んできた。
リングとは名前のとおり、リング状の気弾を飛ばす技である。
両手に気を集中させ凝縮することで、より高密度高威力の技を生み出す。

その威力は爆発を起こし、床を大破させていた。
しかし、海斗はその場にはいない。
攻撃を左にかわして、釈迦堂に接近していた。

「よく避けたなぁ！川神流　無双正拳突き！」

感心しながらも繰り出される強烈な正拳突き。
近づこうとしていた海斗はタイミングをずらし、バックステップでそれを回
避する。
だが、釈迦堂の技による風圧が海斗の体に負荷を与える。

釈迦堂刑部。
幼い頃より才能に恵まれていて、その類まれなる強さで川神院師範代の座に
つくも、危険な考え方や力至上主義といった純粋なる武道とは相容

れぬ素行
によって破門になった男。
かつての百代の師でもあった彼の強さは完全に異常の域だった。
回避のためと風圧によって後退した海斗と釈迦堂の距離がまた開く。
それを見て、釈迦堂は余裕の振る舞いだった。

「どんなもんかと見てみれば、所詮井戸の中は井戸の中だ。」

「どーでもいいが、油断は命取りだぜ?」

海斗がまた走って距離を詰める。
釈迦堂はまた拳を構えようとするが…。
海斗が近づく速さが先程とは段違いだった。
釈迦堂が用意をする前に海斗の一発が放たれる。

「おぉっと!」

そのまま連続攻撃につなげる。
一方の釈迦堂も速さには驚かされたものの拳の連打を冷静にかわしていった。

「確かに強いが…やっぱ底が見えてるなぁ。残念だ。」

「命取りだって言っただろ?」

「何をほざいて…」

「……リング」

釈迦堂は声も上げられなかった。
余裕でかわしている拳からリング状の気弾が放たれた。

（っ！何故気を使える？）

海で一度見かけたとき、いやついさっきまではどんなに探っても海斗の中に
存在する気は皆無、０だった。
にも関わらず、突然なかったものが膨れ上がり、使えないはずの気を使った。

しかも、それだけじゃない。
さっき使った釈迦堂の技“リング”を寸分違わずコピーしてきた。
あの短時間で威力も落とすことなくだ。

「くそ…面白いじゃねぇか！」

だが、釈迦堂はそれに喜びを覚えていた。
強いが故に満たされぬ戦闘欲。
強者との戦いは楽しい。

すぐに反撃を仕掛ける。

「川神流……」

「「無双正拳突き！」」

2つの拳が正面からぶつかり合い、互いの威力を相殺する。
だが、その余波は周囲に突風を巻き起こした。

「これはまずいですね…」

冬馬が辰子に向かって、携帯電話を投げる。
つながっている先は亜巳。
ストッパーを外す合図。

「うわあああああああぁぁ！」

3枚のジョーカーが揃った。

１２１話　「力」（後書き）

ありがとうございました。
まあ多分勘のいい人は予想できましたよね。
気を使えるようになれば、おのずと技も増える。
しかし、次回はもっと厳しい戦いに。

122話　「ジョーカー」（前書き）

何が難しかったって…
暴走辰子の口調がですね。
記憶にないんです。

122話　「ジョーカー」

海斗と釈迦堂が正面から激突する。
それはただ拳を交わらせているだけではない。
各々の気と気のぶつかり合いだった。
留まりきらずに溢れる衝撃は周りの一子たちにも及んだ。
気を緩めれば、そこに立っているのもかなわないほどだ。
しかし、それよりも本人たちは…

「どうして海斗が気を使えるの！？」

「今まで一度も感じたことは…」

タッグマッチ、翔一との川神戦役、海での騒動、様々な戦いを思い出しても、
今までの戦いで海斗が気を使っているのを見たことがない。
クリスにいたっては、直接戦ったことがあるにも関わらず、少しもそんな素
振りは見せなかった。

けれども、より驚愕していたのはクリスではなく一子のほうだった。
自然と自分の体のある部分に手を持っていく。
それはあのとき、ナイフで刺されたはずの場所。
今となってはそこにあったというのを証明するのは自分の記憶のみ。
跡形もなく綺麗に消え去っている。

一子は思い出す。

百代に傷を見せたとき…
一子は自分が怪我をしたという場所を見せても、ずっと何か考えているような
な百代にどうしたかを聞くと、“傷がここまでなくなるのはおかしい”と言
っていた。

次の日、大和に事情を説明したとき…
海斗に病院に連れて行ってもらったらしいと話すと、これまた大和が疑問を
感じたような顔をした。
そして、“病院での料金はどうしたんだ?保険証もないし、一学生に払える
額じゃないだろ”と言われた。

百代と大和の話を聞いて、改めて考えるとやはりおかしい。
気になって近くの病院で確認くらいはしてみようと思っても、やはり自分を
治療してくれたという場所は見つからなかった。

(もしかして…)

今、目の前で気を行使する海斗。
即座にリングをコピーできるのは、何も目が良いだけが理由ではない。
何よりも気の使い方が上手すぎるのだ。
だから、自分の見たばかりの技に応用できる。

その気の扱いなら、あるいは傷を治すことも出来るかもしれない。
普通ならすぐに否定するだろう。
なにせ、あの百代の瞬間回復でさえ対象は自分だ。
それを人に使うようなもの、一体どれほどの難易度なのだろう。
しかし、目の前で戦う海斗にはそれが可能に見えてしまった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

板垣辰子は普段はその戦闘力を抑えている。
三姉妹のなかでも家事くらいしかとりえがないと言われるほどだ。
だが、実は秘めたる力は軽く他の二人を凌駕している。
それを発揮するスイッチが長女である亜巳の一言だった。

「うわあああああああああぁああ！」

「お！遂に辰の奴も暴れるか。」

（なんだ、あれは？）

辰子が携帯を受け取った瞬間、その気が爆発的に膨れ上がる。
流石に海斗のように0から一気にというわけではないにしても、さ
っきまで
の量とは比べ物にならない。
純粋に気の量だけで考えれば、それは由紀江を上回るほどだ。

いや、ついつい戦いを経験していると、気に目を向けがちになってしまって
いるがそれだけじゃない。
最初に話しかけてきたような大人しい雰囲気は微塵もなく、凶暴で荒々しい
感覚だけが空間を支配していた。
垂れ流しの殺気は容赦なく肌を刺す。
何も分からない者でも、それは明らかだった。

「流石の海斗くんもこれはお手上げでしょう。」

二枚のジョーカー。
葵冬馬が余裕でいられる理由が分かった。
確かに圧倒的な力を持ったこの二人を残しているならば、頷ける。
この二人を同時に相手となると、どれだけの強さが求められるのか。

「あー、辰。俺ァ、もう少しこいつと差しでやり合いてぇんだけどな。」

「うぅああ、海斗くん！」

「って、聞いちゃいねえか。こうなっちまったら止めんのは面倒だし、まあ
今はカーニバルの成功優先でさっさと殺っちまうか。」

「どうです、海斗くん？今からこちらの仲間になれば、戦力として

活用して
あげますが？」

「笑わせんなよ。最初っから二人で来いって言っただろ？今更、引き下がる
選択肢なんてねぇよ。」

海斗は完全に不利な状況を前にしても怯むことはない。
拳を構えなおす。

「…海斗。」

小雪は小さな声をもらす。
それは海斗を信頼していても、現状を見て生まれる不安からであった。
海斗ならなんとかしてくれる、そう思って頼った存在だった。
それでも名前を呟いてしまうほど、不安も隠せない。
だが、逆に海斗以外なら完全に諦めるゲームだ。
それでも海斗には可能性を感じる。

かつて自分を暗闇から救ってくれたから。
壊れて戻らないはずの感情を取り戻させてくれたから。
そんな奇跡をくれた人だから。

「うぁああ、武器は…これでいい！」

辰子は近くにあったオブジェと思われる柱を強引に折り取り、自身の得物とした。
重量もあるはずのそれをバトンか何かのように軽々振り回す。

「うぁあああああああ！！！」

武器を手にした瞬間、一気に海斗に向かってくる。
パワーとスピードを併せ持った強烈なインパクトを放つ。
床を、大気を振動させるその一撃をギリギリでかわす海斗。

（…ここだ！）

威力が相当な分、由紀江のように隙を見せないというわけではないらしい。
柱を振り下ろして無防備な辰子を狙う。

「リングぅ！」

「なっ…」

絶妙なタイミングで横から飛んでくる気弾。
今まさに攻撃を避けて空中にいる海斗に向かって、放たれた。

（かわしきれねぇ…！）

気弾は標的（かいと）にぶつかり爆発する。
釈迦堂のリング、まともに受ければ大ダメージは必至。
それは一子がよく分かっていることだった。

「海斗っ！」

巻き上がる煙に向かい、一子が叫ぶ。

「へへっ、死んじまってねぇよなぁ。」

「はぁぁああ…」

これがジョーカー2枚。
間違いなく最強だった。

１２２話　「ジョーカー」（後書き）

ありがとうございました。
やはり厳しい二対一。
海斗は戦っていけるのか。

１２３話　「奥の手」（前書き）

三人称と一人称をどっちも使ったほうが
表現が広がるのですが、小説だと難しいですね。
ゲームならウィンドウの色とか変えれば、
簡単なんですけど…

１２３話　「奥の手」

煙が広がる空間。
海斗の姿は確認できない。
釈迦堂は満足したように見ていた。

（直撃くらえば、しばらくは動けねーだろ。）

だが、その刹那。
煙の比較的近くにいた辰子の後ろに海斗は移動していた。
その体は機能しているし、目立った傷も見当たらない。

「うあああぁぁぁああ！」

辰子は後ろにまわられたことなんてお構いなしに自分の周り全範囲を攻撃す
るように柱を振るう。
遠心力も加わった強固な柱の横薙ぎの一撃が海斗のわき腹目掛けて飛んでくる。
咄嗟に左腕で自分の体をかばうようにする。

直後に響くゴキンという音。
それは海斗の腕が壊れる音ではなく、柱が海斗の腕に触れた点から小枝のよ
うに折れた音だった。

（あのガキ、気で防御を…なるほど、さっきのリングも直撃を気で守ったか。）

今の攻防を見て確信する。
柱が折れたのも、さっきのリングでダメージを負っていないのも、気で防い
だからだろう。
どこに攻撃が来るかをその優れた目で見極める。
そうして、先にそこに気を伸ばしておけば、自分の体に触れる前に止められる。
リングにしても、気を使って少し前の空間で爆発させることにより、直撃を
避けたのだと思われる。

辰子は折れた柱を確認はしたが、それだけだった。
すぐに柱を捨て、拳での攻撃へと入る。

「零距離当て身！」

接近状態から繰り出されるそれを海斗は後ろにかわす。
ただのバックステップでも気で強化した一歩は大きい。

「後ろにもいるんだなぁ、これがよ！無双正拳突き！」

「くっ…」

さがった先には釈迦堂が移動しており、待ち伏せの拳をくらう。

（下手に新しい技は使えねぇな。コピーなんて厄介な技だ。）

そう考える釈迦堂も下手に動けない状況だった。
あまり強力な技を使うとリスクが高い。
全てコピーできるはずはないが、無駄撃ちはできない。

（やっぱ、二対一は面倒か…）

対して、飛ばされた海斗はそんなことを考えていた。
負けるとは思っていないが、このまま戦っていても決着までは長そうだ。
ならば、定石は片方を倒して一対一に持ち込むこと。

となれば、男の方は後回しだろう。
海斗は武器をなくして拳を構えている女のほうを見る。

（確か天使の姉だったよな……それじゃなくても女の子だしな…）

状況が状況ならば、男女問わず容赦はしない海斗だったが、出来る

ことなら
やはり傷つけることは避けたかった。
そんなことを言ってられるレベルの相手ではないのは分かっていても、天使
の家族でもある事情を考えると抵抗があるのは否めない。

相手の特徴は莫大な気と馬鹿力。
テクニックとか小細工を使ってくるタイプではなく、攻撃力特化の乱暴な気
の使い方をする。
拳での攻撃も武術というよりかは喧嘩のそれだ。

海斗は待ち構える辰子に正面から突っ込んでいく。
当然のように放たれる高威力の拳。
くらったら一発アウトであろうとてつもない攻撃力。
しかし、それだけに…

「よっ、」

…隙は大きい。
海斗はその拳を本当にギリギリまで引きつけ、間一髪でかわす。
そのまま懐に潜り込み、反撃を許さないとばかりに拘束した。

「なっ!?」
「えっ!?」
「へっ!?」

周りの者が思わず驚きの声をあげる。
それもそのはず、拘束とはいっても海斗が辰子を抱擁しているようにしか、
見えなかったからだ。

海斗としては相手の両手の自由を奪い、且つ逃げられないようにホールドする方法で一番相手が痛くないものをとっただけの行動だったのだが、恋する乙女たちには違う意味でのダメージを与えたのは言うまでもない。

「ふぁあああああぁぁ……ぁぁ…」

辰子も最初は抵抗の叫びを発していたが、その勢いはだんだんと弱くなっていった。
それを見た釈迦堂が初めてこの行動の意図に気づく。

（あいつ…！気を奪い取ってやがんのか！）

辰子から海斗へ膨大な気が流れていく。
気を吸い取る、それはただ気の扱いが上手いだけではどうにもならない。
確かに気を自在に操れれば、相手から気を奪うことは可能だ。
しかし、実際にそんなことを行う者はめったにいない。

本当の難点は気を吸い取ることではなく、吸い取った気を用いることにある
からだ。
気というのは個人個人で同じ物はない。
そして、外部からの気はまず自分の気と同調することはない。
つまり、取り入れればメリットよりも自分にかかる負担のほうが大きいのだ。
扱えないなら捨てればいいと考えるかもしれないが、それもやはり気が扱え
てのこと、他人の気では放出することもできない。

こういう理由で自分の気と他人の気を同居させるなんて不利なことしか生ま
ない、よって気を奪おうとする者などいないのだが…。
海斗は違った。
普通なら暴走するはずの気を自らの圧倒的な量の気で強引に抑えつけている。
気の性質が違うのは確かだが、気の量がその分増えているのも事実。
要はメリットと同時にもたらされる負担さえ耐えることが出来れば、相手の
気を減らし自分の気を増やす、こんなに良い手はない。

「あぁーー……ｚｚｚ」

いきなり体の中にみなぎっていた気を抜き取られた辰子は疲れの反動からか、
ふにゃふにゃと脱力して、眠りに落ちてしまった。

海斗はそんな辰子を優しく床に寝かせる。

「さて、これで一対一だな。」

１２３話　「奥の手」（後書き）

ありがとうございました。
なんかまた滅茶苦茶な技を使ってますが、
ともあれこれで一対一。
そろそろ決着か？

１２４話　「終結」（前書き）

もうこの小説も終わってしまいますね。
おそらく次回の前書きはややこしいルートの
説明などに使われてしまうので、ここで。
ここまで読んでくださった方、感想をくださる方
本当に感謝しております。もう少しお付き合いください。

１２４話　「終結」

Ｓｉｄｅ　大和

正直なことを言うと、目の前で何が起こっているのか分からない。
流川が強いというのは一子やクリスにも嫌というほど自分の自慢話のように
聞かされたし、この目でも何回か確認している。
それでも今回の相手は厳しい戦いになるというのは流石に感じた。
１人は元川神師範代だという姉さんクラスにも感じられるほどの男。
もう１人は突然覚醒したかのように力に目覚め、見た感じこっちもパワーで
考えると姉さんに負けていない気がする。
そんな相手との二対一。
腕の立つ不良１００人相手の方がまだ楽な気さえする。

だが、あいつはいつもこっちの考えなんか裏切ってくれる。
圧倒的不利な戦いを互角以上で進めて、遂に１人を撃破してしまった。

…まあでも、抱きつくとかいう突飛な行動は予告しておいてほしい。
こちらの女性陣がそれを見て、驚きとか羨ましいとか色々な感情を経た結果、
なんか殺気立っている。
怖いです、真剣（まじ）で。

それでも相手の女が倒れて、抱きつきが何らかの攻撃手段だったと分かると、

二人も安心したのか平和が戻ってきた。
残りは釈迦堂とかいう相当強い人物。
流川が真正面からにらみ合っている。
それを見て、俺は口を開く。

「九鬼、用意しといてくれ。」

それは直感だった。
次で勝負がつく。

Side out

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

（まずいな…）

釈迦堂は目の前の敵を見据える。
リスクが高いだけだと避けられてきた気の吸収。
特に釈迦堂のような強者なら自分の力でケリをつけたほうが早い。
何も相手の力に頼ってまでそんなことをする必要はないのだ。
しかし、こうして使える奴がいたというのは予想外だった。
自分では先述の理由で要らないと思っていても、敵に回すというの

は話が違
ってくる。

なにせ相手の気を吸い取った分、丸々気の量は増えているのだ。
本来、それが上手くいかないから使わない奴が大半なのだが、目の前の海斗
に特に苦しんでいる様子はない。
もし、表に出していないだけだとしても、それを隠しとおせているだけで他
人の気を使うのに何も問題はないだろう。

（次の一手は確実にかわさなきゃやべぇ一撃だ。）

今加算された気が全てこもった究極の一撃。
いくら釈迦堂が自分の強さに自信があっても、戦闘続行は不可能だと冷静に
予想できた。
それだけにこちらから仕掛けることも出来ない。
先制できればいい、なんて賭けは行えないのだ。
避けることのみに全神経を集中させなければならない。

（何の攻撃できやがるんだ…）

釈迦堂は今までの自分の行動を初めてラッキーだと思った。
というのも、相手は自分の攻撃をコピーしてくる。
出してくる技が多岐にわたれば、当然読みにくくなるが、今までに

釈迦堂は
警戒していたおかげで使った技は2つのみ。
リングと無双正拳突き。
選択肢が2つだけだというのに加えて、自分が比較的慣れた技。
どちらが来ても、避けられないことはない。

「いくぜ…」

海斗が一気に向かってくる。
速度には気をあまり使ってないことを見ると、釈迦堂が迂闊に攻撃できない
事情を知って、次の一撃に全てをこめるつもりだからだろう。

（どっちだ！リングか…無双正拳突きか…）

近づいてきたからといって、安易にリングの可能性は捨てきれない。
この攻撃さえかわせば、すぐに反撃が出来るのだ。
そして、釈迦堂は見極めた。

「ガッ……ハッ…」

そう確実に見極めた。
だが、海斗の拳が釈迦堂の腹に突き刺さる。
見極めたのに反応が出来なかったのだ。

それは待ち構えた技のどれとも異なったから。
放たれたのは予想外なのによく知った技だった。

―川神流　蠍撃ち

リングや無双正拳突きとはもはやレベルが違う。
まさに基礎の技。
それでも釈迦堂に避ける術はなかった。
使っていないはずの技。

同じ技でも使う者によって、フォームも癖みたいなものもある。
無論釈迦堂も使えるが、海斗と同じ動きではないだろう。
しかし、今の蠍撃ちには既視感があった。
懐かしい気さえするその面影。
意識が落ちていく最中、ちらりと一子の方を見る。

（本当にお前は昔から癖が直ってねぇなぁ…一子…）

釈迦堂はそこで倒れた。

「冬馬！」

九鬼英雄が叫ぶ。
これでカーニバルも終了だ。

―京たちの地点

「九鬼従者部隊参上！さっさと狂った製品を回収するよ！」

あずみ達のメイド部隊が京たちを援護し、マガツを倒していった。

―秘密基地前

「はぁ…瞬間回復ないと疲れるな…」

「ふん、情けない…封印されたらその程度か…」

「お前もへとへとだろう…」

百代とマルギッテの周りには賞金のかけられた風間ファミリーの本拠地を狙ってきた不良たちが堆く積みあがっていた。

―チャイルドパレス

「モロから通信で街全体でカーニバルが収束に向かってるってよ。」

「こちらも終わったしな。」

クリスの言うとおり、こちらも英雄の説得で一段落ついたところだ。
長かった戦いも終わりを告げる。
一子も喜んでいたが、ふと周りを見渡すと…

「あれ？海斗…？」

どこを見ても、海斗の姿はそこになかった。

１２４話　「終結」（後書き）

ありがとうございました。
さて、事件は解決かと思いきや…
そろそろ正真正銘のラストですね。
こんな小説需要がないとは思いますが、良ければ最後まで見てやってください。

１２５話　「運命の分かれ道」（前書き）

今回で共通ルートが終了。
“運命の分かれ道”なんてタイトルつけましたが、
まあルート分岐地点ですよね。
次回からがｉｆというか分岐します。

１２５話　「運命の分かれ道」

一子は辺りをもう一度見回す。
そんなはずはない、と思っても現実は変化しなかった。
そこに海斗の姿は無い。
どうしていいか分からない中、思い出される１つの言葉…

“海斗は常夜に帰っちまったんだよ”

天使が言っていた海斗の情報。
しかし、さっきまで海斗は確かにこちらにいた。
どうして常夜にいたはずの海斗がいたかは分からないが、もしも何かの理由
でこちらに来て、それが終わったのだとしたら…。

―海斗は常夜に帰ってしまう。
その結論に行き着いたとき、じっとしてはいられなかった。
祝勝ムードの周りを無視して、入り口へと走る。

（まだ遠くには行ってないはず…！）

常夜の場所なんて分からない。
でも、今立ち止まることなんて到底できそうになかった。
こういうときに勘を使わずにいつ使う。
そんなに複雑に道が分かれているわけではない。
明るい街の方へ続く道とその逆に進む道。
大きく分けてこの２つのようなものだ。

一子は迷うことなく暗いほうの道へと走り出した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

全てが終わった。
葵冬馬も救われて、小雪の願いも果たされただろう。
もう俺がここにいていい理由はなくなった。

静けさに包まれた街をゆっくり歩く。
走る気分もないし、特に急がなきゃならない理由も無い。
今日でさよならの景色をもう一度目に焼き付けておくのもいいだろう。

それに今日は色々疲れた。
最後だし隠す必要もないからといって、気を使いすぎたってのもある。
今までずっと封じてきたから、使ったのは本当に久しぶりだ。
それでも０にするという行為のおかげで、気の扱いは衰えていなかったらしい。
なんとか勝負に支障をきたすことはなかった。
とはいっても、やっぱ結構きつい戦いだったからか、疲れは隠せない。
まあ、でも寝ればどうせ明日には元気になってるだろ。
その前に常夜の硬く冷たい地面で眠れるかが心配だけどな。
…お別れなんだよな。
この世界と。

ここにいた奴らと。
もう二度と目にすることはなくなるってわけだ。

……はぁ。
別に未練なんて残すつもりはなかったんだけどな。
なんだかんだで俺は結構こっちでの生活を楽しんでたってことだよな。
あっちでは絶対に得られなかった刺激。
ただ単純に目新しいものがあるとかじゃなく、環境全部が違う。
そして、そこに住む者も…

なんだ、結局俺は人間っていう生き物に失望したわけじゃなかったんだな。
あっちでは常に命を狙われて、時には裏切られもした。
てっきり俺自身嫌いになっているのかと思ったが、そうじゃない。
こっちの奴らは皆良い奴ばっかだ。
見ていても面白いし、それぞれが色んなものを持ってる。
逆に俺はそんな奴らが好きなくらいだったんだ。

どこかで俺は友達というものが出来たみたいで喜んでいたのかもしれない。
あっちの世界ではどんなに切望しても叶わなかった願い。
まぁ、残念ながら今じゃこっちの世界でも一方通行の思いだけどな。
俺の最低な過去はバレて、印象なんて良かったわけでもないだろうが、崩れ
去ったのもいいとこ、ガタ落ちだ。
今の俺は必要とされないただの裏切り者、ってとこか？
今まで普通に接した奴が血と悪にまみれた恐怖の塊と分かったら、
そりゃ寒
気がするなんてもんじゃないだろう、誰だって身震いする。

本当に申し訳ないことをしたっていうか、恨まれて当然だよな。
何の贖罪も出来ないが、二度と顔なんて見たくないだろうから、そんな意思
に従う行動をとるくらいで精一杯だ。

でも、俺がどう思われていようが、俺はあいつらに感謝してる。
俺なんかに付き合ってくれた沢山の奴ら。

―大和田伊予
ある事件のおかげか俺のことを名前で呼んでくれる後輩。
動物カステラをくれたりと、気遣いも出来る子だ。
そういや、好きな子いるんだっけな。
出来ることなら協力してやりたかった。

―板垣天使
ゲーセンにいた快活な女の子。
名前にコンプレックスを持っていたらしい。
ちょっとしたいざこざもあったが、結局分からず終いで解決。
放課後の遊び相手になってくれた。

―マルギッテ・エーベルバッハ
赤髪に眼帯の強い軍人。
いきなり突っかかってきたが、なんとか対処。
そういや、久しぶりの戦いは面白かったな。
結局、１人の女の子を守りたい優しい奴だ。

―榊原小雪
天然で無防備な不思議女子。

仲間をとても大切にしている。
それゆえに1人で抱え込み、心を塞いでいた。
でも、心から笑顔の方が似合っている。

―クリスティアーネ・フリードリヒ
ドイツから来た金髪留学生。
芯の通った生き方をする真っ直ぐな少女。
融通がきかないのが、たまにキズ。
しかし、からかい甲斐があって楽しい奴だ。

―黛由紀江
控えめで恥ずかしがりやの後輩。
優しい奴だが、ものの見事に空回りをして友達づくりに悪戦苦闘。
俺なんかと友達になりたいと言ってくれた。
そして、さっきは俺を捕まえようと……大丈夫だったかな？

―川神一子
ポニーテールが似合う努力家の少女。
得体のしれない俺に手を差し伸べてくれた。
俺の退屈な日々を終わらせてくれた奴。
水族館…行けなくてごめんな。

俺の周りは恵まれていた。
常夜にこもっていたら、こんなことは経験できなかっただろうし、
楽しいと
思える日々も送れなかった。
出来ることなら、もう少しこの生活を……

って、何考えてんだかな。

もう終わった、他でもない俺のせいで。
俺には大きすぎる望みだったのかもな。
常夜にいた時点で普通の生活なんて送れるはずがない。
運命は決まってたんだ。

ありがとよ、俺の一時（いっとき）の夢に付き合ってくれて。
……じゃあな。

「待って！！海斗！！！」

響いたのは紛れもない現実で自分を呼ぶ声。
運命は今変えられる。

１２５話　「運命の分かれ道」（後書き）

ありがとうございました。
ヒロインを１人ずつ挙げる描写ですが
順番に特に意味はないのであしからず。
出会った順にしようかとも思ったのですが、
ファミリー勢がまとまらなくなるので、ランダムで。

じゃあ次回から分岐というかそれぞれの物語に入ります。
最初のヒロインで告白が出来るのは…？
まる分かりだとは思いますが、知らんふりしてください。

一子エンド　「告白　前編」（前書き）

投稿されてすぐに開いてくださった方。
このあとすぐに後編を投稿するので、
それを待って、一気に読んでいただけると助かります。
詳しくは活動報告に書いてあるので、それを読んで
少しの時間をお潰しください。

一子エンド　「告白　前編」

「待って！！海斗！！！」

この世界に別れを告げた俺を止めたのは一子の声だった。
もう会わないつもりだった、というか会わせる顔なんてない。
だが、無視できるはずもなくその場に立ち止まる。

「どこに行く気なの…」

おそらくもう全て知っているのだろう。
俺の過去も俺がこれからどうしようとしているのかも。
わざわざ来たのはやはり裏切り者に直接文句でもあるのだろうか。

「なんで行っちゃうのよ！行かないでよ！」

「へっ？」

今なんて言った？“行かないで”？
意味が分からない、どうして俺を止める必要がある。
どんな意図が隠れているにせよ、それは俺の決心を鈍らせる。

「なんでなのよ…！」

止めてくれている。
それは嬉しかったが、俺が戻れば…
俺は気持ちを悟られぬように努めて冷静な口調で返す。

「俺は元々あっちの世界の人間だ。それこそ物心ついたときからな。
だから、
別に何もおかしいことはない。俺がいることでお前らに迷惑かけちまうから
な。……違うか、結局俺が弱いからただ逃げてるだけだ。」

そうだ、人に迷惑をかけるなんて言い訳。
今、初めて分かった。
俺はこっちの世界でまた孤独の退屈を味わうのが怖かったんだ。

「そんなことない！！」

俺のそんな重い思考を知ってか知らずか、一子は吹き飛ばすように
叫ぶ。

「アタシを何回も守ってくれた。アタシのために努力を馬鹿にした
相手に怒
ってくれた。アタシと一緒にいてくれた…」

一子の剣幕に俺は口を挟めはしなかった。

「海斗は強い！海斗は頼もしい！海斗はかっこいい！それで何よりも海斗は
優しい…。面倒くさがったり、ちょっと鈍かったりするけど、誰よりも海斗
は優しさを持ってる。」

一子はそこで一呼吸おき、決意したように頷く。

「そんな海斗だから、アタシは海斗に恋をしたの！大好きになっちゃったの！」

「…一子が俺のことを好き？」

「そうよ！好きな人じゃなきゃ、作ったことも無いお弁当に挑戦して食べて
もらおうなんて思わない。好きな人じゃなきゃ、柄じゃないおしゃれなんか
して二人きりで水族館に行きたいなんて思わない。海斗のことが本当に好き
なの…。」

「・・・・・」

何も言葉が出なかった。
好きだと、恋をしていると目の前の彼女は言う。
俺に…？
正直、意味が分からなかった。

だが、そんなことは有り得ないと一言で片付けられない。
それほどに一子の瞳は真剣だった。
なら黙っているわけにはいかない。

「一子が本当に俺のことをそんな風に思っているなら、尚更一緒にいられない。俺といたら確実に不幸になる。大切な奴を幸せに出来ない俺じゃ優しいお前とはつり合わない。」

「え…」

「一子、お前と会えて最高に幸せだった。」

最後に本当の気持ちを、甘えを断ち切るために。
そう言って、背を向ける。
つくづく自分は最低な奴だと自覚する。

辛い。
今までにだって、別れはあったのだと思う。
だが、それを別れだと認識することはなかった。
自分にとって他者の存在など、それほどどうでもいいものだったから。

しかし、今はどうだろう。
どちらも身体は何ともなく、それこそどちらが死ぬわけでもない。
ただ、少し前の時間に戻るだけ、出会う前の時間に。
こんな平和的な別れがどうしてこんなに辛いのだろう。
どうして胸が締め付けられるようにきしんでいるのだろう。

相手の顔を見ることが出来ない。
笑顔で別れを言うことが出来ない。

ゆっくりと歩いていたはずの俺の足は、その場から逃げるように速く動いていた。
もしも俺が普通の生活を送って、普通の高校生として一子と出会っていたら、
同じような関係になって、真正面から気持ちに向き合えたのだろうか。
そんな叶いもしない非現実的妄想も虚しいだけだ。
馬鹿な考えを振り払うように、寝ぼけた頭を叩き起こすように、俺はさらに
早足になる。
忘れられるものなら忘れたい。
そんなことを考え、全てを閉じようとしたとき…

急に後ろから引っ張られた。
見れば、左手の袖が掴まれていた。
とはいっても、指でギュッと握っているだけ。
だが、それが強く強く押さえられていることは握られている服のしわから一
目瞭然だった。

とてもじゃないが顔なんて見る気にはなれなかった。

「海斗…」

一子がポツリと呟く。
俺はどれだけ責められるのも、胸に刺さる言葉も覚悟のうえだった。
それだけのことをしたのだから…。

「アタシね、海斗が好きなの。」

だが、続いた言葉は意外なものだった。
ついさっきも聞いた同じ言葉。
しかし、先程とは声の大きさも調子も違う。
ゆっくりとした口調だった。
激しくぶつけるような声ではなく、脆く消えてしまいそうな震えた声。

「海斗が初恋なんだ、アタシの。初めて人を好きになったの。ファミリーの
皆は小さい頃から一緒にいて、全員大好きなんだけど…その好きとは全然違
くて、いっぱい楽しくて、いっぱい苦しいの。一緒にいて海斗が笑ってくれ
るとアタシもすごく満たされた気持ちになって、でもその笑顔が他の子に向

けられてるとモヤモヤした気持ちになっちゃうの。」

何故だろう。
とても小さく不安定な声なのに、驚くほどその強い想いが伝わってくる。
指で掴んだだけの簡単に外れてしまう結合。
それでも俺に振り払うことは出来なかった。

どうして俺のことをここまで真っ直ぐに思えるんだ。
その声の端々には嗚咽すら漏れている気さえする。
ますますもって、顔は見られない状況になった。
故に背は向けたまま、動けない。

どんだけ良い奴なんだかな。
だからこそ、俺は…。

一子エンド　「告白　前編」（後書き）

本当に１つの完成した話のブツ切りなので、
すぐに次の話へをクリックして、そのままどうぞ。

一子エンド　「告白　後編」（前書き）

はい、後編です。
前編の勢いそのままに即どうぞ。

一子エンド　「告白　後編」

どんだけ良い奴なんだかな。
だからこそ、俺は…。

「一子、俺なんかをそんな風に見てくれてありがとな。お前は俺のかけがえ
のないパートナーだ。だから、大切なお前には普通の奴と恋をして、幸せに
なってほしい。俺といたら、不幸になるのは目に見えて…」

「違う！違うよ、海斗！！」

「は…？」

俺の言葉を遮って叫ぶ一子。
背中越しでも必死な様子がひしひしと伝わってくるようだった。

「海斗がほかの人とは違う大変な世界で生きてきたのは分かった。だけど、
アタシはそんなの実際に見たこともないし、海斗の辛さが全部分かるわけじゃ
ない。…それにアタシ、バカだから。一緒にいたらどれだけ大変なことが待っ
てるのかとか、どれだけ危険なのかとか、海斗の心配していることだって、

はっきり見えてないんだと思う…。」

言葉の1つ1つがしみこんでくる。
それだけ一子は本気で話している。
俺は後ろからの声に黙って耳を傾けるしかなかった。

「でも、そんなことは関係ないの！アタシの想像以上の辛さがあったとしても、そんなのは海斗がいないことに比べれば、全然なんともない…。海斗の笑顔が見られないほうがアタシには数百倍も辛いの…。逆に海斗が隣にいてくれれば、アタシはそれだけで世界一幸せ。どんなことだって乗り越えられる自信がある。アタシも人間なんだから生きてれば、不幸がないなんてありえないわ。だから、アタシは海斗がいない不幸だけの人生と、たとえ不幸があっても海斗がいる幸福もある人生だったら、絶対どっちもあるほうがいい！
ただアタシは海斗と歩きたいだけなの…。」

一子の一切包み隠すことがない感情の吐露。
それが途切れたかと思うと、いきなり強烈な力で顔を押さえつけられた。
突然だったからとかではなく、抗うことの出来ない力。
一子に悲しみを与えてしまっている現実から目を背けている俺。

そんな俺の顔を無理矢理動かし、自分と向き合わせる。

「アタシは海斗に真剣（まじ）に恋してるから！」

その瞳は涙で溢れていて必死に流すまいとこらえているようだったが、数滴
がこぼれてしまっていた。
発する言葉は完全にくぐもった涙声で、けど何度も聞いたはずの告白は今ま
でで一番心に深く入り込んできた。
本当にこいつは……っ…。

「…一子、お前は本当にバカだなぁ…」

そう言って、ぐりぐりと頭を撫でる。
声を発した俺はどんな表情をしていたのだろう。
色々な感情があったが、少し笑みがこぼれていたかもしれない。
一子の悲しみに染まった顔に驚きがあらわれる。

「な、なによぉ…、ひどいわ。アタシだって頭悪いなりに一生懸命話したの
にぃ…」

ぐずぐずと鼻をすすりながら、そんなことを言う。

お前の今の崩れた顔を見れば、必死なことくらい嫌でも伝わるってもの。
その真剣さも。

だから俺も真剣な気持ちで返す。

「俺にふりかかる危険はそんなに簡単なもんじゃねぇんだよ。それこそ、全部なくなるのには一生かかっちまうかもな。」

「えっ…？」

「だからよ、こっちで俺が平和に暮らせるようになるためには、それまでずっと一生俺のパートナーとして、嫌でも隣にいつづけなきゃいけないんだぜ。
呼び止めるっつーことはそういう責任を取る覚悟がだな……」

「海斗っ！」

「うわ！」

一子が俺の言葉の途中で待ちきれなかったとばかりに思い切り抱きついてくる…いや、正確には飛びついてきたか。
安心して、今までこらえていたものも決壊してしまったのか。
笑ってんのか泣いてんのか分からないようなぐちゃぐちゃの表情をしてやがる。

「絶対よ！行っちゃヤダからね。もう二度とアタシの前からいなくならない
って約束して！」

「ああ、一子が泣きわめくのが面倒でもうそんな気は起きねぇよ。」

「な、泣きわめいてなんていないでしょ！もぅ、またそんな適当な理由つけ
て……。ほんとのほんとに約束してくれるの？」

「大丈夫だって、約束するから信じろ。」

一子はその言葉にすぐに頷くことはなかった。
こちらをジロジロと見てくる。

「ん～、黙っていなくなろうとしちゃった海斗が言ってもいまいち説得力に
欠けるわよ。こんな口約束じゃ簡単に覚えてないこととかにしそうだし…。
信じられるかビミョーだわ。」

なんという疑心暗鬼状態。
俺、えらく信用がなくなってるなぁ。
まあ、全部自業自得なんだけどさ。
だけど…。

「俺は本気だぞ、一子。」

「へ？」

俺はふてくされて、そっぽを向いている顔を優しく且つ強引にこちらへ向けて、そのへの字になっている唇に自分のものを重ねた。
数秒触れ合ったあと、顔をゆっくりと離す。

対峙する一子の顔は今まで見たことがないくらい朱に染まっていて、まだ上手く状況が飲み込めないのか、絶えず口をパクパク動かしていた。
なんか餌を欲しがっているひな鳥みたいだな。

「今、キキキキキキ、キス……キス！？え、え！？」

信じられないといった顔で何度も自分の指で唇に触れて確認している。
いや、そんなので分かるわけないのだが…。

「あんだけ好き好き言っといて、今更文句なんか言うなよ？」

「いや、あの…キスが嫌なわけじゃなくて、そのいきなりだし…」

落ち着かない一子の手を上から包み込んでしっかりと握る。

「俺はもう離れねぇよ。俺だって好きな奴のそばで生きていきたいんだ。」

「か…海斗…。」

「こんな心のこもった接吻(くちやくそく)でも信用できないか？」

「…一回だけじゃダメよ。今まで心配させた分、もう一回…」

その後、もう一回と頼んだはずの一子は何度も何度も口付けをしてきた。

俺のことを好きと言ってくれた少女。
自分はずっと許されない存在だと思っていた。
友達もいなければ、親にまで嫌われた。
だけど、今俺がここに残ろうとするのは一子に許してもらったからじゃない。
俺がこいつと一緒にいたいと思ったから。
誰にも縛られずしたいことをする、それが俺だ。

数えてもいない何度目かのキスが終わったとき、一子は満面の笑みを浮かべ
て、こちらを見る。

「海斗、大好きよ。」

一生つきあってくれよな、パートナー。

一子エンド　「告白　後編」（後書き）

ありがとうございました。
やっぱり告白は最初のヒロイン一子で。
次回からは一人一人のアフターを書いていきます。
最初は勿論このまま一子です。

一子アフター「水族館」（前書き）

はい、アフターです。
勿論お話は皆さんからもご要望があったあれです。
というかこれ以外ないですよね。

一子アフター　「水族館」

―川神院

「一子、門の前にやって来ておるぞ。」

「え、もう来ちゃったの！？」

「ほとんど時間通りじゃろうが、準備に時間をかけすぎなんじゃ。ほれ、早くせんか。あまり待たせるでないぞ。」

「分かってるわよ！じゃあ、じいちゃん、いってきまーす！」

「これ、一子！カバンを忘れておるぞ！」

「あぁっ！…改めて、いってきまーす！」

ダッシュで部屋を出て行く一子。
あの様子だと門まで全力疾走だろう。

「全く…浮かれるにもほどがあるのぅ。」

呆れているような口ぶりとは裏腹に鉄心の顔は綻んでいた。
孫があんなに楽しそうに出て行ったのだから。

そう、今日は…

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

「ごめん、海斗待った！？」

「おう、今着いたばっかかだって。」

物凄い勢いで突っ込んできた一子に言う。
外は晴天、時間はまだ午前中だった。
何故二人がこうしているのかといえば、

「じゃあ、行くか。」

「うん！水族館へレッツゴーよ！」

今日は約束した水族館デートの日。
あの日の仕切りなおしだった。

「にしても、その服似合ってるぜ。」

「う…改めて言われると恥ずかしいわ。」

一子が着ているのは白いワンピース。
デートに行く予定のときに着てきたのと同じものだ。

「だって海斗がいきなりプレゼントだとか言うから、何かと思ったら…」

「はは、まあな。」

そう一子が着ているのはあの日と同じ服なのだが、新品である。
あの日の服は血まみれになってしまったので、もう着れない。
だから、俺が先日買ってきたのだ。
女物を買うのは初めてだったが、店員が勝手に盛り上がって“彼女さんへのプレゼントですか？お包みしますね♪”などと言ってラッピングしてくれたので、プレゼントとして一子に手渡した。
色々と経験しないことでこっぱずかしかったが、それでも…

「別に気を遣わなくても、服の1つくらい大した値段じゃ…」

「可愛かったから、俺が着て欲しかったんだよ。」

「な！？なな…」

「ホント一子免疫ないな。」

「そんなの大好きな人に可愛いって言われるのなんて、何回やっても慣れないわよぉ。」

やっぱり可愛い。
普段はスカートの類ははかない一子があのときはオシャレをしてくれた。
その気持ちが嬉しかったから、どうしても着て欲しかったのだ。
普段とのギャップで一層魅力的だ。

「ズボン感覚であんま足とか上げないようにな。」

「そんな無駄に派手な動きはしないわよ。」

「いやだって、さっき全力で走ってきてただろ。」

「ぅ……、そ、そんなに言うなら海斗が自由に動けなくしてよ。」

差し出される一子の手。
流石に意味が分からないなんてことはない。

「今日は思いっきりデートしような。この前のを取り返すくらい。」

「あ……うん…。」

俺たちは互いの手をしっかりと握って歩き出した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

「着いたわね。」

「ああ、ここでチケット忘れたとかいう古典的なボケはかまさないでくれよ。」

「そ、そんな間抜けじゃないわよ。ちゃんと持ってきたわ。」

「そりゃ良かった。」

(じいちゃんに注意されてただけど…)

一子がカバンからチケットを取り出そうとしたとき、

「あっ！」

「うわ」

一子がいきなり手をギュッと握りなおす。

「なんで離そうとしちゃうのよ。」

「いや、手つないだまんまじゃ出しにくいかと…」

「大丈夫だから！このままつないでて？」

「…ああ、悪かった。」

まさか少し離そうとしただけであんな反応とは…
なんだか嬉しくなり、俺もさっきよりも強く手を握った。
その後、どんな状況でも一子が手を離そうとはしなかったのは言うまでもない。

―水族館内

「うわぁああ、きれーい！」

「…すげぇな。」

入った瞬間一面ブルーの世界。
その青の中に様々な魚たちが躍っている。
今見ている巨大水槽の中では人間よりも大きなエイが、目の前を何度も通り
過ぎていく。
写真でしか見たことのないような生き物から、名前も知らないような生き物

まで、初めての水族館は楽しみが溢れていた。

「おい、一子。こっちクラゲコーナーだってよ！行こうぜ！」

「うん！」

「ほら見ろよ、こんな長い奴いるんだな。おい、こっちの奴なんて光ってないか？」

「ふふ…」

そこで一子がニコニコと笑っていることに気づく。
そんなに可笑しいクラゲでも見つけたのだろうか。

「どうしたんだ？」

「海斗、本当に動物好きなんだなーって。さっきからすっごく嬉しそうだから。海斗が楽しんでると私までなんか嬉しくなっちゃって…えへへ。」

…なんて可愛いことを言うんだ。
いつもと違う服をひらひらと揺らせて、微笑む一子を俺は思わず抱きしめた。
驚く表情も可愛くてたまらない。

「一子、こっち向いて。」

「え、海斗？ここじゃ見られちゃうって。」

「無理だって。」

「へ？」

「これから一生一緒にいるんだから、可愛いと思ったらキスしたくなるし、
それを全部我慢すんのは無理だよ。」

「一生…一緒に…。」

「一子は嫌か？」

「嫌なわけないわよ！」

「じゃあいいよな。俺は今可愛くて、我慢できないから。」

「んっ…」

青い光をバックに2人の影が重なる。
幸せになるキスだった。

「んはっ…海斗、もう一回…」

「絶対一子それ言うよな。」

「しょうがないじゃない、一回したらもっとしたくなっちゃうんだから…」

「分かってるって、俺もしたいよ。」

「…うん。」

俺たちはこれからも何度もデートを重ね、それ以上に数え切れないほどのキスをするのだろう。
なにせ期間は一生分だ。

“海斗が隣にいてくれれば、アタシはそれだけで世界一幸せ。”

そう言ってくれた少女。
俺の出来る範囲以上に幸せにしてやりたい。
不幸や困難なんて俺が守ればいいだけだ。
そのために俺は何が出来るか…

「海斗、今アタシすっごく幸せよ。」

「俺もだよ、一子。」

ただ、今はこれでいいのかもしれない。

俺も一子もこんなに笑顔なんだから。

一子アフター「水族館」（後書き）

ありがとうございました。
こんなハッピーエンドの後に言うのもなんですが、
次回からのｉｆにはどう分岐するのかというと、
一子が告白をしない、つまりは思いを伝えられないまま
仲間として引き止めるルートです。
一応詳しくは活動報告にでも書いておきます。

伊予アフター　「野球観戦」（前書き）

あけましておめでとうございます。
まあ新年に何してるんだろって感じです。
今回は伊予アフター。
由紀江でも良かったんですが、なんとなく
ファミリー連続を避けてみました。
本当に気分で。

伊予アフター　「野球観戦」

時刻は夕方。
駅前に俺は立っていた。
行き交う人はこんな時間だし、多くも少なくもないといった感じだ。
そんな人たちを見つつ、立っている時計の柱の側から動かないのはここで人を待っているからだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

数日前のことだ。
俺は様々な紆余曲折を経て、なんとかこっちに戻ってこれた。
だが、その過程で色んな奴らに迷惑かけてしまったのも事実。
感謝しねーといけないよな。

「おっ…」

「あっ、海斗先輩。」

そんなことが頭の中にあったときに偶然伊予と会った。
そういや後から聞いた話では、伊予もカーニバルのとき川神院で頑張っていたとか…。

こんな後輩にまで迷惑かけてちゃ世話ねぇよな。

「なんか、この前は悪かったな。」

「いえ、私も詳しくは聞いてないんですけど…、まゆっちが海斗さんのため
の戦いだって言ってて、それなら私も手伝いたいって思ったんです。海斗さ
んには助けてもらいましたから、今度は私が…。」

俺が助けたのだって、たまたま不良を退治したらそこに伊予が居合わせたと
いうだけだ。
そんなのを恩に感じて、自主的に動いてくれるなんて…。
なんか完全に俺のほうが感謝しなきゃいけない立場だっての。
どうにか役に立ってやりたいんだけど…
あ、そういや…。

「伊予って好きな子いたんだよな。」

「へっ!?」

周りに人がいないのを良いことに小声ではあるが、はっきりと口に出してし
まう。
伊予は予想外の攻撃に慌てる。

「俺に手伝えることがあるなら言いな。事故とはいえ、俺はもう知っちまってるんだし色々協力できるだろ？勿論、依頼料なんていらないからな。俺なりのお礼だ。」

「……ぅ。」

そう、俺が去ろうと決心したとき、考えていたことだった。
伊予の恋を手伝ってやれれば良かったと。
おそらく相談するとかは恥ずかしいことだろう。
その点、俺が知っている事実は変わらないんだから、どうせならそれを活用したほうがいい。
それだけじゃない。
なんとなくこの少女はかまってあげたくなる。
健気で小動物的な雰囲気だからだろうか。
とにかく力になってあげたいと思わせるのだった。

「あの…じゃあ、今度私と一緒に野球を観にいってくれませんか！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

というわけでその“今度”が今日というわけだ。
ちなみに待たされているわけではなく、俺が相当早めに来ているだけだ。
にしても、いきなり野球観戦に誘われるとは。
まあ予想するにデートの下見ってとこなんだろうが…。

そういや、この前1人で観にいったって言ってたよな。
あの時はたまたまはち合わせしたが、伊予の様子だと野球大好きっぽかった
し、何度も行ってることは想像できる。
でも最初は家族と行ってたと言うし、誰かと一緒に観たくもあるんだろう。
好きなものはやっぱ好きな奴と楽しみたいのかね。

「海斗先輩、お待たせしちゃいましたか？」

思考の途中でやってきた伊予。
本人はそんなことを聞いてくるが、今だって待ち合わせの１０分前だ。

「いや、さっき来たばっかだよ。」

そう答えて、改めて伊予を見る。
なんだか印象が違うというか…。
この前も私服を見たのだが、もっとこう…。

いや、前のが地味だとは言わないが、それでも今日の格好は完璧に気合いを
入れた女の子と呼ぶに相違ない。

最初は戸惑ったが、少し考えて納得がいった。
伊予にとっては下見でもあり、デモンストレーション的なことも兼ねている
のだろう。
デートを想定しているのだから、お洒落は当たり前か。

「可愛いな、その格好。」

「え、あ、そうですか？ありがとうございます…／／／」

だから俺も伊予が好きな奴を想定して言う。
完全に俺自身の正直な気持ちでもあるが、それこそ相手もこう言うことは確
実だ。
それほどに今の伊予の姿は可愛かった。

「じゃ、行くか。」

「あの、海斗先輩！」

「ん？」

「その……て、手をつないでくれませんか？」

「へ？これから電車だぞ？」

「ダメ…ですか？」

そう聞く伊予は下から狙ったように上目遣いで覗き込んできて…

(そうだ、これは本番でしたいことをするんだもんな。)

「ああ、つなごう。」

そう答えるしかなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

「いっけーーーーー」

「・・・・」

電車の座席でもずっと手をつなぎ、大人しかった伊予。
その伊予とは思えぬ別人が目の前にいた。
伊予だけじゃない野球場全体が試合が始まってから、熱気に包まれている。

応援の気合いの入りようはここまでなのか…。

「打てーーーー」

野球だけでなく、色々と凄さが分かった。

―試合後

「ごめんなさい、私ばっかり盛り上がっちゃって…」

「いいって、野球大好きなんだってのがよく分かったよ。」

「でも、海斗先輩…」

「それに俺も結構面白かったぜ。流石に初回であそこまでは叫べなかったけ
どさ、人の勝負を応援するのって初めてだったし。俺は勝つか負けるか分か
らないドキドキなんて経験できなかったからな。」

「海斗先輩…」

「だから誘ってくれて嬉しかったぜ。これで本番も大丈夫だろ。この調子で
いけばデートは完璧じゃないか？」

「ん……。海斗先輩、今日は私の恋の応援ってことで来てくれたんですよね。」

「え、ああそうだな。」

「あの…じゃあ最後に“頑張れ”って言ってくれませんか？」

今更そんな一言でいいのかとも思うが、頼まれたのなら言ってやる以外に選択肢はない。

「伊予、頑張れよ。」

「はい。じゃあ恥ずかしいですけど…」

チュッ

そんな可愛らしい音とともに左頬に柔らかい感触。
それが伊予の唇だと気づくのにそう時間はかからなかった。

「海斗先輩が好きです。」

は？
待て、状況が理解できない。
伊予には好きな人がいて、これはその予行で…

え、今のは告白の練習ってことか？
そんな俺の疑問を感じ取ったのか伊予はもう一度口を開く。

「私の好きな人は海斗先輩です。」

今度は誤解しようのない言い方で。
結局、お洒落も手をつないだのも、勿論今の告白も。
練習なんかじゃなかったってことか？

「へへっ、ちょっと勇気出しちゃいました。…今日はありがとうございます。
これからも私の恋、協力してくださいね。」

そう言って帰ろうとする伊予。
俺は咄嗟に引き止めて、頬じゃなく唇に口付けた。

「ばーか、もう依頼は完了だよ。その相手も伊予のことが大好きで恋人にしたいって思ってるからな。」

「海斗先輩…嬉しいです。」

とっても簡単な依頼。
俺はそれをめちゃくちゃ遠回りしてしまった。

だが、そんな回り道が今はとても幸せだったと思えた。

伊予アフター「野球観戦」（後書き）

ありがとうございました。
こんな感じで告白を書くこともあるかもですが、
一子のように何話も使うものは流石にしませんし、
キャラによっては全く書かないものもあります。
いきなり告白後とかでも頑張ってついてきてください（笑

マルギッテアフター　「戦場」（前書き）

感想にてご要望があったので、マルさんです。
基本アフターはヒロインとの幸せなテイストでいくので、なんか同じような感じになってしまうと思いますが、ヒロイン数分我慢してください。

マルギッテアフター「戦場」

日も暮れてしまった頃、俺は弁当を片手に歩いていた。
カーニバルから数日、あのときの一子の説得でこちらに残っておいて、良かったと思っている。
あっちじゃ食い物すら確保されてないし、幸せに感謝だ。
そんなことを考えて、歩いていると…

「ん？」

前に見慣れた目立つ後ろ姿がある。
人違いなんてことは十中八九ないだろう。
それほどに紅の髪は目立っていた。
なんとなく元気がなさそうな後ろ姿に声をかける。

「よ、どうした？」

肩に手を置いた瞬間、ビクッと体が跳ねる。
振り返った彼女はやはりマルギッテだった。
どうやら何かにそこまで集中していたらしい。
軍人ともあろうお方が気配も気づかないほどとは…

「っ、海斗か…。いきなり近づいてくるな。」

「そっちがボーッとしてたんだよ。どうした悩み事でもあんのか、マルギッテ？」

「なっ！そんなものなどあるはずがないだろう！」

いきなりマルギッテが興奮して否定する。
はて、なんかそんなに気に障ることを言っただろうか。
そう思わせるほどの形相だった。

「じゃあ、こんなとこで何してんだよ？」

「お前こそなんなんだ。」

「俺の右手にある弁当が見えんのか…。」

「くっ…」

どうやらさっき俺の言動に対する意趣返しのつもりだったようだが、見事に
空振りに終わったようだ。

「で、マルギッテはどうしたんだ？」

今度は質問返しは許されない状況でもう一度聞く。

「…ただ明日からの任務のことを考えていただけだ。特にどうということはない。」

「そうかい。」

それならさっさと素直に言えばいいものを。
何を躊躇う必要があるんだか。

「また俺を大勢の軍人で囲むのとかは勘弁してくれよ。」

「…いや、今回は普通の軍の任務だ。海外の戦争が行われている地に赴くというものだ。」

あれ？
いつもみたいに“私は今ここで勝負してやってもいいんだぞ。”とか言ってくるかと思ったんだが…。
本当に今日はなんか変だな。

「軍人らしい任務だけど、なんかこっちでしかマルギッテを見てないと想像できないな。」

「ああ、それが私の本来の仕事だ。……今回は特に激戦地に行って、戦争の
まさに中心が舞台となる。数々の戦場を経験してきた私でも、正直今までで
一番危険かもしれない…。」

「…大変なんだな。」

その程度の言葉しかかけられなかった。
今まで感じたことはなかったが、そういう世界なんだよな。
だから、なんとなくピリピリしているのだろうか。

「無事に帰ってこれる保証もない。別に今までが安全だったとか言うつもり
はないが、それだけレベルが違うのだ。…だから精神統一をしていたんだ。」

「…そっか、邪魔して悪かったな。」

そう言って、止めていた足を動かし始める。

危ないということが分かっているから行かないということには出来ない。
悲しいが、リスクなくして争いなど解決できないということはよく知っている。
無関係な奴が首を突っ込んでいいものでもないということも。

それでも…。
俺は少し歩いたところで立ち止まって振り向いた。

「絶対生きて帰ってこい。帰ってきたら勝負でもしてやるよ。」

「っ！」

声をかけることは出来る。
何の力にもなることはないただの自己満足だ。
俺はそれだけ言って、また歩き出した。

「待て！」

「え？」

マルギッテが叫ぶ。

「私は常に後悔しないように生きる。もうお前とは会えないかもしれない今、
言っておかなければならないことがある。」

数歩離れた位置でマルギッテは続ける。

「私はお前の…海斗のことが好きだ！軍人としてではなく、１人の女として。
それだけ伝えたかった、答えはいらない。以上だ！」

「は！？ちょっ…」

俺が何か言う前に物凄い速さで去っていってしまった。
…今の告白でいいのか？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

—翌日
マルギッテは戦地に降り立った。
話に聞いていた通りの激しい戦闘。
火薬の匂いがたちこめ、視認できるほどに爆発があちこちで起こっている。

（我ながら馬鹿げたことをした。）

マルギッテは移動中何度も考えていた昨日のことをまた思い出す。
もう会えないかもと思っただけで、勢いのままに気持ちを言ってしまった。
制御できないほどに好きだったということを昨日になって、気づか

された。
外に出ていたのも、それを伝えようか迷っていたから。
任務において精神統一などしたことがない。
恥ずかしいから言うのはよそうという結論に行き着いたにも関わらず…

“絶対生きて帰ってこい！”

あんな優しい言葉をかけられたら、私の迷った何時間かは全く意味を成さなくなってしまう。
胸の奥がかゆくなるような、色々な感情が入り混じって形容しがたい感じ。
想いが溢れて、口からこぼれてしまった。

はぁ…絶対生きて帰りたいが、それはそれで辱めの地獄が待っている。
何故対面してない相手にこんなに苦しめられなければならないのかと、しきりに苛立っていた。

そんなマルギッテの前へ敵兵が現れる。
どうやら集中しない様子のマルギッテを狙ってきたらしい。
だが、しかし…

「はぁっ！！」

マルギッテはすぐに十数人を叩き潰す。
その左目の眼帯は既に外されていた。
そもそも白兵戦でマルギッテに戦いを挑むのが間違い。
すぐさまトンファーの餌食となる。

―“猟犬”
それが彼女の戦場での名だった。
狩りを行う側の者。
ただ生き残るのみだ。

そして、どんどんと敵兵を倒してゆく。
彼女の活躍は誰の目にも明らかだった。

当然それは敵に目をつけられる。
ただでさえ、猟犬は戦場では有名な名だった。

「くっ…！」

爆走してきた戦車４台に取り囲まれる。
かなりのピンチだが、彼女が焦ることはない。
目の前の戦車を叩き潰し強引に突破口を開く。
迷うことなくそれを実行しようとしたが…

ガキン

「何！？」

明らかに今まで壊してきた戦車と硬度が違った。
そう、これはわざわざ相手側がマルギッテだけをターゲットに絞って、倒そ
うという作戦。
トップレベルの戦車が派遣されてきたのだ。

（まずい…っ）

焦っていなかったマルギッテも状況が変わる。
一瞬で抜けようとした場所には４つの砲口が向けられている。
そして今自分は抜けることが出来なかった。

ドーーン

戦場に爆発音が響いた。
マルギッテのいたところは業火に包まれている。
…４台の戦車の爆発によって。

「死ぬなって言っただろ？」

「なっ、海斗！？」

「この感じ、２回目だな。」

マルギッテは海斗の腕の中にすっぽりと収まっていた。

そう、お姫様抱っこだった。

「すぐ降ろしなさい！」

「とか何とか言う割には、首に手がしっかりと回ってるんだが。」

「ーーーっ！」

完全にあのときのを体が覚えていたのだろう。
無意識に海斗の首に回してしまっていた腕を認知して、急激に恥ずかしくなる。
その恥ずかしさからも逃げるようにパッと降りてしまう。

「どうして、海斗がここにいるんだ！？」

「そりゃ俺が頼んだからさ。クリスの父親に、お宅の優秀な人材を失くしたくなかったら俺を送ってけってな。」

「でもお前が戦う理由はないだろ！」

「確かに少し前までは関係なかったからな。でもよ、恋人を守るのなんて男として当然の義務だぜ。」

「は？」

「答えはいらねぇなんてふざけやがって。俺は昨日の本気にしたからな。戦
士だったら言ったことには責任持ちな。」

「いいのか、私なんかとで。こんな女っぽくもない…」

「どう思ってるか知らねぇけど、お前可愛いからな。誤解すんなよ。別に強
い奴が好きだとか、Mだとかじゃねぇから。」

「…そうか。」

マルギッテが嬉しそうにはにかむ。
場所はこんな戦場でもその顔はれっきとした女の子のものだった。

「初デートが戦場なんて、俺達ほどアブノーマルなカップルもいないだろ。」

「ふ、そうだな。さっさと味方のために勝利してしまおう。」

「おい、俺は軍人じゃねぇからよ。何のために戦えばいいんだ?」

俺は笑いながら問う。
答えはもうどちらも分かっていた。

「私の幸せな未来のために戦ってくれ。」

「了解。」

強さなど関係なく、今の俺たちは負ける気がしなかった。

マルギッテアフター　「戦場」（後書き）

ありがとうございました。
１話完結なのできりよく終わらせないといけないんですよね。
果たしてさっぱり終わっているのかは甚だ疑問ですが。
さて、次回はどうしましょうか。

小雪アフター　「好き」（前書き）

そういえば、アフターには極力他のヒロインを出さないようにしています。
というのも、あくまでｉｆの個人ルートなのでごちゃごちゃさせるとややこしくなるからです。
ただ話の上で必要ならば投入しますが、おそらく７人のメインヒロイン？が二人以上出ることはないです。

小雪アフター　「好き」

「カーイトっ♪」

「うぉっ！」

いきなり背中に飛びついてくる小雪。
今日も見つかってしまった。

「えっへへ～、どっか行こうよぉ。」

「いや、今日は…」

あの小雪を救った日以降…
正直、仲間と少しの間とはいえ離れなければならないのだから、落ち込んでいるのではないかと思ったのだが、そんな心配は杞憂に終わった。
かわりに俺にこんなベタベタするようになったのだ。

しかし、それだけではなかった。
頻度だけでなくスキンシップもより激しいものになっていた。
前だって遠慮なく胸を押し付けてくるという無防備ぶりを遺憾なく発揮してくれたが、今はといえば…

「カイト、カイト。こっち向いてよ、ちゅ～」

お分かりだろうか。
小雪は抱きつき攻撃よりも遥かにレベルの高いキス攻撃をするようになっていた。
小雪ほど可愛い女の子からなので、決して嫌ではないのだが。
これは無防備というより自分のことを軽く扱いすぎというか…
懐いてくれているのは嬉しいが、もっとキスは大切にするものだろう。

「小雪、こういうこと葵冬馬とかにもしてんのか？」

そうなると当然気になってしまう。
仲の良い奴にするんだったら、俺よりも付き合いが長いあいつらもやっぱり
そういうことをされてるってことだ。
だが、小雪の答えは、

「しないよー、するわけないよー。だって、トーマと準は友達だもん。」

「え？じゃあ俺は？」

「ボクはいっつも言ってるよーだ。カイトのことは好きだって。」

うん、確かに今までもそう言われて、くっつかれてきた。
あれ？キスされて、好きっていうのはもしかして…
いや、待て。

「葵冬馬のことは好きか？」

「うん、好きだよー」

「…だよな。」

「でも、カイトの好きとは全然ちがうよ。カイトとじゃないと、キスしたくないもん。」

なんというか、こんなに自然な告白もないだろう。
今まで好きだと言われ続けていて、でもそれは友達としてだと思っていた。
だからこそ、こう改められるとなんか変な感じだ。
ただ小雪の本当の気持ちは俺も嬉しいのは間違いなくて。

「やっぱ、どっか行くか。デートでも。」

「いくいくー。」

そう言ってしまうのだった。

「どっか行きたいとこあるか？」

「ボクはカイトと一緒ならどこでもいいよん♪」

「んー……あ！そういや、この前…」

どこに行こうかと迷っていたところであるものを思い出す。
他に候補もないし、その場所に向かうことにした。

「よし、ここに入ろうぜ。」

「うぇーい」

カランコロン

ドアを押して中へと入る。
小雪は素直についてきてくれるので本当に助かる。

「いらっしゃいませ、何名様ですか？」

「ああ、二人で。」

「では、お席へご案内いたします。」

俺達がやってきたのは普通のファミレス。
デートにしてはあまりにもチープだが、俺がここに小雪を連れてきたのはき
ちんとした理由がある。

「ご注文お決まりでしょうか。」

「この“マシュマロキングダム”っていうのを1つ。」

「かしこまりました。こちらは彼女さんとお召し上がりになるということで
スプーンお2つでよろしいですか?」

「あ、それで。」

―“マシュマロキングダム”
なんかこのファミレスではフェアをやっているらしく、期間限定で登場した
カップル向けのメニュー。
王国という名だけあって、そのボリュームも結構ある。
俺はこの宣伝を見かけたとき、ついつい小雪を思い出してしまっていたので
覚えていたというわけだ。

「小雪、マシュマロ好きだよな?」

「うんー！大好きだよ～。」

いや、これで嫌いとか言われても困るけどな。
なんかマシュマロのイメージが強いんだよな。

「お待たせしました。」

やってくるマシュマロキングダム。
…なんかメニューよりも大したことないってのはよくあるが、これは実物の
ほうが迫力が凄い。
どう手をつけようか迷っていたときだった。

「カイト、カイト、あーんして？」

「なっ…」

無邪気な笑顔でそんなことを言う。
ある意味やってることは小雪の得意技“マシュマロ食べるー？”と変わらな
いのだが、これは意味も異なれば破壊力も別次元だ。
そのまま俺たちはしばらく食べさせあって、量を減らしていった。
小雪の最強に可愛いあーんにも慣れてきたのだが…

「なんか小雪の肌も白くて柔らかくて、マシュマロみたいだよな。」

「えへへー、食べてみるー？」

「ごほっ…！」

不意打ちで放り込まれる爆弾は色んな意味で危なかった。
なんつーかその体躯と幼さの組み合わせは反則だろう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

日も暮れて、すっかり街に明かりがともった頃。
俺たちは川原の芝の上に座り込んでいた。
そこは街とは違い、ほとんど闇に包まれている。

「小雪、寂しくないか？」

すっかり楽しんで落ち着いた今だからこそ聞く。

「自分の友達が捕まって、離れ離れになってることがよ。」

「だいじょーぶだよ。確かにトーマや準とは少しの間会えなくなっ

ちゃった
けど、二人とも本当の辛さからは救われたんだもん。」

小雪はいつもの調子で喋っているが、本音を言ってくれる。
俺には隠さないという約束はきちんと守ってくれているのだ。

「…ボク、小さい頃ここでずっと見てたんだ。他の子が楽しそうに遊んでる
のを。ボクは入れてもらえなかったんだけどね。」

俺は何も言わずに小雪の肩を抱いた。

「今は俺がいるだろ?どうだ、彼氏と星空の下でデート。これでもまだ満足
じゃないか?」

「ううん、幸せだよ。ありがと、カイト。」

「ならもっと幸せになろうぜ。」

そう言って俺はキスをする。
小雪も背中に手を回して抱きついてくる。

「これからは幸せじゃないなんて言わせないからな。」

もうそんな辛いことは味わわなくていいんだ。
持てる全てで幸せにしてあげたい。
それが俺の幸せでもあるから。

小雪アフター　「好き」（後書き）

ありがとうございました。
今回の告白はあまりしっかりと確立はせず、
小雪ゆえのほんわか感にしてみました。
アフターの最後は基本幸せが要なので、
どれもおんなじ感じです。

天使アフター　「家族」（前書き）

残すところあと少し。
天使はいきなり恋人になった
状態から始めます。
書きたいシチュエーションを
詰め込みました。

天使アフター　「家族」

様々な音に包まれたゲームセンター。
そんなのが俺達のお決まりのデートコースだった。
ムードも何もあったもんじゃないが、一番俺達には合っている。

「ぬぁーーっ！また負けたー！」

「ははっ。」

いつものように対戦格闘ゲームから始める。
残念ながら、結果は毎回同じなのだが…。

「もー、なんで勝てねぇんだ！海斗が強すぎなんだよ、ウチがいっくら強力
な必殺技使っても、全部海斗ギリギリでかわしちまうんだもんなー。」

「天使が分かりやすいんだよ。」

基本プレイ中も天使は喋りっぱなしなのだが、必殺技や決め技の前など必ず
テンションが上がって“くらいやがれ！”などと叫ぶので、目で見るより先
に分かってしまう。

まあでも、手を抜くと怒るので俺は容赦なく倒すしかない。

「へへっ。」

だけど、負けた天使も笑顔だ。
結局こうやって二人で遊んでいることが楽しい。

「どうする？もう一回対戦するか？」

「いや、あのさ……海斗！」

「ん？もうやめとくか。」

「それもそうなんだけどさ、次はあれにしないか？」

天使が指差したのは見たことのある機械だった。
なんて言ったっけな…確か…

「プリクラか？」

「そ、そうだよ。恋人なんだから一緒にやんのは当然だろ？」

「そんな一気にまくし立てなくても、可愛い彼女のお願いなら聞いてやるって。」

「なっ、バカにすんじゃねーよ！」

「馬鹿になんかしてないって。天使がそういうこと言うのが新鮮で可愛いなと思っただけだよ。」

「…いいじゃんかよ。海斗とツーショットの写真が欲しかったんだよ…。そう思うのがわりぃかよ。」

「・・・・・」

天使と付き合って、初めて分かったこと。
こいつは乱暴な口調や沸点が低くすぐにキレたりすることから、荒っぽいようで見られるかもしれないが、そこら辺の普通の女子よりも何倍も女の子らしい印象を受ける。
ていうか、なんだろ元々小柄で可愛い顔してるからこういう仕草とられると凄まじい威力になるんだよな。

「じゃあ、撮るか。」

「お、おーよ。」

たぶん自分の顔はにやけてるんだろうなと思いながら、中に入った。

思ったとおり中はペンやら画面やらでごちゃごちゃしていて、俺はお手上げ
だったので天使に任せることにした。
天使は慣れた手つきで進めていく。

「そこがカメラだから、見といてくれ…」

そう言う天使は狭い空間に二人っきりなのが恥ずかしいのか、なんか少し大
人しい。
というか、全くこっちを見ようともしないし。

「もっとこっち寄りな。一緒に撮るんだろ。」

「うわ、うっわ！」

肩を抱き、顔を至近距離に寄せただけでこの反応だ。
いつもは無駄に明るいのにこんなときだけずるいよな。

パシャ　パシャ

どうやら一回の利用で何枚かの写真を撮ってくれるらしく、最初のシャッタ
ー音から数秒間隔を空けて、次が撮られていく。
そして、もう終わりの1枚が撮られようとしたとき、

「…よしっ！」

隣から意気込んだ声が聞こえてきた。
その直後、頬に何かが触れたと思うと最後のフラッシュが光った。
今の一瞬をしっかりとカメラはとらえただろう。
だが、写真で確認するまでもなく何が起こったのかは分かった。

隣で恥ずかしそうに縮こまる天使を見て。
今も確かに残っている頬の優しい温もりで。

「…今、こっち見んなよな。」

耳まで真っ赤にして反対側を向く天使。
いや、これはほっとけるわけないだろ。
その顔を覗き込むようにする俺。

「おい、見るなっつってんだろうが！」

「何したんだよ、天使？」

「なっ、なんもしてねーよ！！」

嘘をついても後の写真で明らかとなるのだが…
そんなことなどつゆほど考えず、今はこの状況を楽しんだ。

…………………………………

楽しむだけ楽しんでゲームセンターを後にした俺達。
今は適当に目的地も決めずに歩いている。
天使がずっとプリクラを貼った携帯を眺めていたため、すっかり時間は遅くなっていた。
まあ俺もそんな天使を見ていて、全然頭になかったから人のことは言えないんだがな。

「そろそろ帰るか、家まで送ってくぞ。」

「あ、え、ああそうだな。」

答えてはいるが、天使の集中力はほぼ無いに等しい。
恋人になってからは送り迎えも許してくれるようになった。
まあ許されずとも好きな奴の見送りは勝手にするけどな。

ドン

そんなときにぶつかる音。
隣を見ると、天使の前に柄の悪い男がいた。

「おい、お前どこ見て歩いてんだよぉ！」

「城之内さんに怪我あったらどうなんのか分かってんのかぁ？」

後ろにいる輩が騒ぎ立てる。

見れば、後から後から結構な人数が来て、１つの族のようだった。

天使の家の方面は治安が悪いとはいえ、こんな派手な馬鹿がいるのか。

「この女聞いてんのか、オラなんとか言えや！」

「るせーんだよ！」

ガンッ

天使が前にいた男の顎をゴルフクラブで打ちぬく。

容赦のない一撃に手下の１人が宙に浮いた。

「なっ…こいつをとっ捕まえろ！」

「人の彼女に手出すなよ。」

逆上して飛び込んできた４、５人をまとめて吹っ飛ばす。

「なんだ、こいつら…！？」

「デートの邪魔してんじゃねーよ。」

「全員潰してやる。」

俺たちはこんな風によく絡まれることが多かった。
ほとんどは天使が相手を馬鹿にするのが原因なのだが。
ただ俺と天使、二人で相手にすれば何も問題はなかった。
こんな大勢が相手でも…

「ぐはっ、あ…りえねぇ。」

5分もかからない。

…………………………
…

ハプニングがありつつも今日も天使の家に着いた。
さて、こっからが大変だ。

「おかえりー、天ちゃん。海斗くん、今日も来たんだねー」

「あっおい、タツ姉！」

むぎゅーと抱きしめられる俺。
抱きしめている張本人、天使の姉辰子はどういうわけか嬉しそう。
こんな状態が家に来るたびに起こっていた。

「海斗を離してくれよ、タツ姉！」

「いいじゃーん、天ちゃんの好きな人ってことは海斗くんは私の弟になるわけだよー、そりゃぎゅってしたくなるよねー。」

いや、辰子のぎゅっは危険すぎる。
なんたってボリュームが凄まじいからな。
そもそも、何故こんなに懐かれるようになってしまったのかというと…

「いやー、海斗くんに抱きしめられたあのときが忘れられないんだよねー。
海斗くんに触れてると胸がぽかぽかーってなってね、すっごく幸せになるんだよー。それに海斗くん優しいし、もう大好きだよー。」

さらに抱く力が強くなる。
そうなのだ、あのカーニバルでの気を吸い取った技がどうやら原因

らしい。

不意に背中からも柔らかい感触が当たった。

「タツ姉、海斗はウチのもんだからな。ゼッタイに渡さねーぞ！」

「えー、海斗くんは皆のものだよー。」

「ゼッタイダメだーー！」

前と後ろで言い合う二人。

ある意味、姉妹喧嘩なのだがこんなに微笑ましいものはない。

本当に仲が良いことが分かる。

思わず笑みがこぼれてしまう。

「あ、どうしたんだ？海斗。」

「いや、なんでもねーよ。」

俺は家族ってのを知らない。

だけど、こいつらといるだけでなんか幸せが伝わってくるようだ。

まるで家族みたいに接してくれる。

「海斗くん、今日はご飯食べていきなよー。」

「海斗はウチの隣だからな！」

こんな風に受け入れてくれる存在がいる。

当たり前のことなのかもしれない。

けれど、俺にとってはこの世で一番の幸せだった。

天使アフター　「家族」（後書き）

ありがとうございました。
なんだかんだで天使は書いてると
女の子らしくなっちゃいます。
そして、辰子のあの独特な感じは
文字では表現しきれません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1374w/

真剣で私たちに恋しなさい！

2012年1月4日08時45分発行